松山市文化財調査報告書 145

市道小野 160 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

平　井　遺　跡

－３～９次調査－

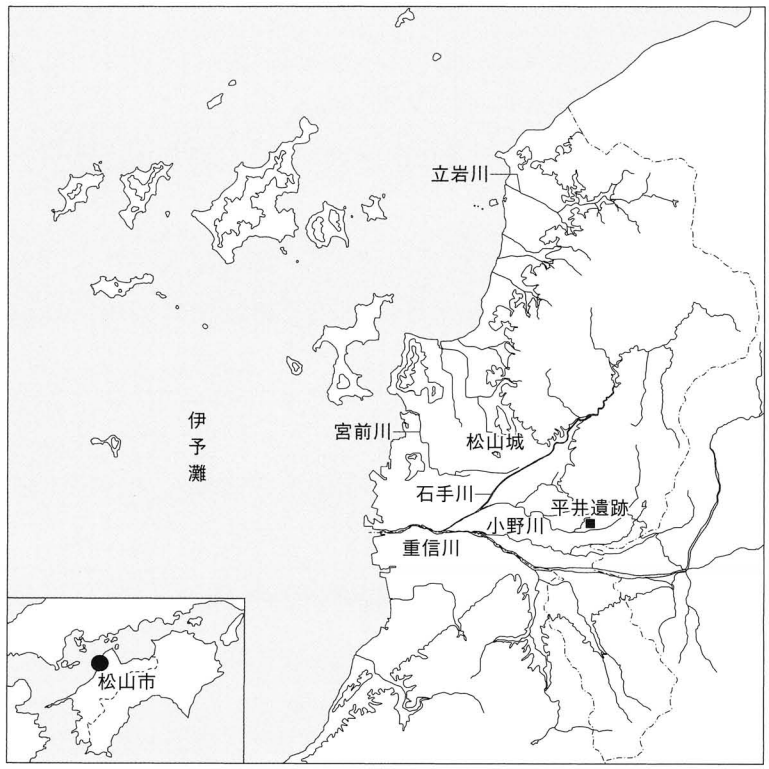
２０１０

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

平井（ひらい）遺跡

－３～９次調査－



2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地全景（南より）

序

松山平野東部に所在する平井地区では、縄文時代晩期から中世までの集落遺跡のほか、松山東部古窯跡群と称される古墳時代から古代の須恵器生産窯が数多く発見されています。

本書は松山市道小野１６０号線道路改良工事に伴い、平成１７年度から２０年度までの間に実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書です。この度の平井遺跡調査（３次～９次調査）では弥生時代前期の土坑が１８基も見つかり、この地域における土地利用の始まりを知る手がかりを得ることができました。また、今回の調査で古墳時代後期の竪穴住居５棟や２８棟もの掘立柱建物跡が確認されたことから、往時の当該地域には広範囲に亘り大規模な集落が営まれていたものと考えることができます。

さらには、飛鳥時代後半期の廃棄土坑から松山平野東部古窯跡群とのつながりを感じさせる生焼けや焼け歪みのある須恵器が数多く発見され、当時の生産地と消費地とをつなぐ集落のあり方を探る貴重な調査事例を上げることができました。

このような成果が得られましたのも、市民の方々や関係各位のご協力のたまものであり、厚く感謝申し上げます。今後、本書が埋蔵文化財研究の一助となり、さらには生涯学習の向上に寄与できますれば幸いです。

平成22年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長　　中　村　時　広

例　言

1．本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成18年３月から平成20年６月までに実施した市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書掲載の遺構は、呼称名を略号で記述した〔竪穴住居：ＳＢ、掘立柱建物：掘立、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸ〕。

3．本書で使用した標高は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

4．遺構の実測・製図、遺物の実測・製図は、河野史知、水本完児、宮内慎一の指示のもと、山邊進也、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、石丸由利子、猪野美喜子、金子育代、仙波千秋、仙波ミリ子、髙尾久子、中村紫、福岡志保美、本多智絵、渡邉佐代枝が行った。

5．写真図版は、屋外調査時の遺構撮影は担当者と大西朋子が行い、遺物の撮影は大西が担当した。図版作成は、担当者と協議のうえ大西が行った。

6．本書掲載の遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．発掘調査において、国土座標軸測量を株式会社ＧＩＳ四国に業務委託した。

8．本書の執筆は、第１・２・８・９・10章を水本、第３・４・５・７章を河野、第６章を宮内が担当した。編集は水本が担当し、猪野・山下・平岡の協力を得た。浄書は水本の指導のもと、猪野と平岡が行った。

9．本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに……〔水　本〕…… 1
　１．調査に至る経緯　２．刊行組織　３．地理的環境・歴史的環境

第２章　調査の概要……〔水　本〕…… 7
　１．調査の経緯　２．層　位

第３章　平井遺跡３次調査……〔河　野〕…… 15
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第４章　平井遺跡４次調査……〔河　野〕…… 47
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第５章　平井遺跡５次調査……〔河　野〕…… 71
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第６章　平井遺跡６次調査……〔宮　内〕……109
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．まとめ

第７章　平井遺跡７次調査……〔河　野〕……157
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第８章　平井遺跡８次調査……〔水　本〕……183
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．まとめ

第９章　平井遺跡９次調査……〔水　本〕……217
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．まとめ

第10章　成果と課題……〔水　本〕……253

挿　図　目　次

第１章　はじめに
第 1 図　周辺遺跡分布図（縮尺１/30,000）…… 3

第２章　調査の概要
第 2 図　調査地測量図・土層模式図（縮尺１/2,500・１/40）……11

第３章　平井遺跡３次調査
第 3 図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……16
第 4 図　遺構配置図（縮尺１/200）……17
第 5 図　土層図（縮尺１/50・１/100）……19
第 6 図　ＳＤ４測量図（縮尺１/20）……21
第 7 図　ＳＤ４出土遺物実測図（縮尺１/４）
第 8 図　ＳＫ３測量図（縮尺１/30）……22
第 9 図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）
第10図　ＳＫ６測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……23
第11図　ＳＫ７測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・1/４）
第12図　ＳＸ３測量図（縮尺１/100）……24
第13図　ＳＸ３出土遺物実測図（縮尺１/４・１/２）……25
第14図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・1/３）……26
第15図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……27
第16図　ＳＤ２・３・５測量図（縮尺１/50）……28
第17図　ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺１/３）
第18図　ＳＤ３出土遺物実測図（縮尺１/３）……29
第19図　ＳＤ７～９測量図（縮尺１/20）
第20図　ＳＤ８出土遺物実測図（縮尺１/３）……30
第21図　ＳＤ９出土遺物実測図（縮尺１/３・１/２）
第22図　ＳＤ10測量図（縮尺１/20）
第23図　ＳＤ11測量図（縮尺１/80）……31
第24図　ＳＤ14測量図（縮尺１/20）
第25図　ＳＤ14出土遺物実測図（縮尺１/３）……32
第26図　ＳＫ１測量図（縮尺１/30）
第27図　ＳＫ２測量図（縮尺１/30）
第28図　ＳＫ４測量図（縮尺１/30）……33
第29図　ＳＸ４測量図（縮尺１/60）
第30図　ＳＤ12測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/３）……34
第31図　ＳＤ13測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/３）
第32図　ＳＤ６測量図（縮尺１/20）……35

第33図　ＳＤ６出土遺物実測図（縮尺１／３・１／２）……35
第34図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20・１／３）……36
第35図　ＳＸ１測量図（縮尺１/60）
第36図　ＳＸ２測量図（縮尺１/60）……37
第37図　倒木１測量図（縮尺１/60）
第38図　倒木２測量図（縮尺１/60）……38

第４章　平井遺跡４次調査

第39図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……48
第40図　遺構配置図（縮尺１/200）……49
第41図　土層図（縮尺１/40・1/80）……51
第42図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・1/３）……53
第43図　掘立２測量図（縮尺１/60）
第44図　掘立２出土遺物実測図（縮尺１／３）……54
第45図　ＳＤ２測量図（縮尺１/40）
第46図　ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺１／３・１／２・１／１）……55
第47図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１／３・１／２）……56
第48図　ＳＤ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１／３・１／４）……57
第49図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１／３）……58
第50図　ＳＤ６測量図（縮尺１/20）
第51図　ＳＫ１測量図（縮尺１/30）……59
第52図　ＳＫ３測量図（縮尺１/30）
第53図　ＳＫ４測量図（縮尺１/30）
第54図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺１／３）……60
第55図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１／３）……61
第56図　ＳＸ２測量図（縮尺１/30）……62
第57図　ＳＤ１測量図（縮尺１/30）
第58図　ＳＤ７測量図（縮尺１/30）……63
第59図　ＳＫ２測量図（縮尺１/30）
第60図　ＳＸ１測量図（縮尺１/30）

第５章　平井遺跡５次調査

第61図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……72
第62図　遺構配置図（縮尺１/200）……73
第63図　土層図（縮尺１/40・1/80）……75
第64図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１／４）……77
第65図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１／４）……78
第66図　ＳＸ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１／４）……79

第 67 図　ＳＸ４測量図（縮尺１/30）……79
第 68 図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・1/３）……80
第 69 図　ＳＢ２測量図（縮尺１/60）……81
第 70 図　ＳＢ２出土遺物実測図（縮尺１/３）……82
第 71 図　ＳＢ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……83
第 72 図　ＳＢ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）
第 73 図　掘立１測量図（縮尺１/60）……84
第 74 図　掘立２測量図（縮尺１/60）
第 75 図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３・１/２）……85
第 76 図　掘立４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……86
第 77 図　掘立５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……87
第 78 図　掘立６測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……88
第 79 図　掘立７測量図（縮尺１/60）
第 80 図　掘立８測量図（縮尺１/60）……89
第 81 図　掘立８出土遺物実測図（縮尺１/３）……90
第 82 図　掘立９測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/２）
第 83 図　掘立 10 測量図（縮尺１/60）……91
第 84 図　掘立 11 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……92
第 85 図　ＳＤ７測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）……93
第 86 図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）
第 87 図　ＳＫ３測量図（縮尺１/30）……94
第 88 図　ＳＫ６測量図（縮尺１/30）
第 89 図　ＳＸ２測量図（縮尺１/30）……95
第 90 図　ＳＸ３測量図（縮尺１/30）
第 91 図　ＳＸ５測量図（縮尺１/30）
第 92 図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）……96
第 93 図　ＳＤ２測量図（縮尺１/30）
第 94 図　ＳＤ３測量図（縮尺１/30）……97
第 95 図　ＳＤ４測量図（縮尺１/30）
第 96 図　ＳＤ５・８測量図（縮尺１/30）
第 97 図　ＳＤ９・10 測量図（縮尺１/30）……98
第 98 図　ＳＤ 11 測量図（縮尺１/30）
第 99 図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）……99
第 100 図　ＳＤ６測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）
第 101 図　倒木１測量図（縮尺１/60）……100
第 102 図　倒木２測量図（縮尺１/60）

第６章　平井遺跡６次調査

第 103 図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……110
第 104 図　調査地測量図（縮尺１/500）……111
第 105 図　調査地西壁・北壁土層図（縮尺１/40）……113
第 106 図　調査地東壁土層図（縮尺１/40）……115
第 107 図　遺構配置図（縮尺１/250）……117
第 108 図　ＳＫ 14 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……118
第 109 図　ＳＫ 10 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……119
第 110 図　ＳＫ７測量図（縮尺１/30）
第 111 図　ＳＫ９・12 測量図（縮尺１/30）……120
第 112 図　ＳＫ 13・18 測量図（縮尺１/30）……121
第 113 図　ＳＫ 20 測量図（縮尺１/30）……122
第 114 図　ＳＫ 16 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）
第 115 図　ＳＫ 17 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……123
第 116 図　ＳＫ 21 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……124
第 117 図　ＳＫ 19 測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……125
第 118 図　掘立１測量図（縮尺１/80）……126
第 119 図　掘立１出土遺物実測図（縮尺１/４・１/３・１/２）……127
第 120 図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/80・１/４）……128
第 121 図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/80・１/４・１/３）……129
第 122 図　掘立４測量図（縮尺１/80）……130
第 123 図　掘立５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/80・１/４・１/２）……131
第 124 図　掘立６測量図（縮尺１/80）
第 125 図　掘立７・８測量図（縮尺１/80）……132
第 126 図　ＳＤ１測量図（縮尺１/60）……134
第 127 図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）（縮尺１/３）……135
第 128 図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）（縮尺１/３・１/４）……136
第 129 図　ＳＤ１出土遺物実測図（３）（縮尺１/４・１/６）……137
第 130 図　ＳＤ１出土遺物実測図（４）（縮尺１/４・１/３）……138
第 131 図　ＳＤ２・３測量図（縮尺１/40）……139
第 132 図　ＳＫ４・５測量図（縮尺１/30）……140
第 133 図　ＳＫ８・11 測量図（縮尺１/30）……141
第 134 図　ＳＫ６測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）……142
第 135 図　ＳＫ１・３測量図（縮尺１/30）……143
第 136 図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１/３・１/４）……144
第 137 図　包含層出土遺物実測図（１）（縮尺１/４）……145
第 138 図　包含層出土遺物実測図（２）（縮尺１/３・１/２）……146

第７章　平井遺跡７次調査

第 139 図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……158
第 140 図　遺構配置図（縮尺１/200）……159
第 141 図　土層図（縮尺１/40・１/80）……161
第 142 図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４）……163
第 143 図　ＳＫ３測量図（縮尺１/60）
第 144 図　ＳＫ３出土遺物実測図（縮尺１/４）……164
第 145 図　ＳＫ４測量図（縮尺１/30）
第 146 図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺１/４）
第 147 図　ＳＫ６測量図（縮尺１/30）……165
第 148 図　ＳＸ３測量図（縮尺１/30）
第 149 図　ＳＢ１測量図（縮尺１/60）……166
第 150 図　掘立１測量図（縮尺１/60）
第 151 図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３・１/２）……167
第 152 図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……168
第 153 図　掘立４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……169
第 154 図　ＳＤ１測量図（縮尺１/20）……170
第 155 図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/３）
第 156 図　ＳＤ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/３）……171
第 157 図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/３）
第 158 図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３）……172
第 159 図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/２）……173
第 160 図　ＳＫ５測量図（縮尺１/30）
第 161 図　ＳＸ１測量図（縮尺１/60）
第 162 図　ＳＸ１出土遺物実測図（縮尺１/３）……174
第 163 図　ＳＸ２測量図（縮尺１/30）
第 164 図　ＳＤ６測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/３）
第 165 図　ＳＫ７測量図（縮尺１/30）……175
第 166 図　鋤址出土遺物実測図（縮尺１/３）

第８章　平井遺跡８次調査

第 167 図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……185
第 168 図　調査地測量図（縮尺１/250）……186
第 169 図　調査地北壁・東壁土層図（縮尺１/30）……187
第 170 図　調査地南壁・西壁土層図（縮尺１/30）……189
第 171 図　遺構配置図（縮尺１/100）……191
第 172 図　掘立１測量図（縮尺１/30）……193
第 173 図　掘立１出土遺物実測図（縮尺１/３・１/４）……194

第174図　ＳＤ１断面図（縮尺１/30）……196
第175図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺１/３・１/４・１/２）……197
第176図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/50・１/３）……199
第177図　ＳＤ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/50・１/３・1/４）
第178図　ＳＤ３測量図（縮尺１/50）……200
第179図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/４・1/２）……201
第180図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/４）……202
第181図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/30・１/３・１/４）……203
第182図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１/４・１/３・１/２）……205
第183図　包含層出土遺物実測図（縮尺１/４・１/３）……206

第９章　平井遺跡９次調査

第184図　調査地位置図（縮尺１/2,500）……219
第185図　調査地測量図（縮尺１/500）……220
第186図　調査壁土層図（縮尺１/40）……221
第187図　遺構配置図（縮尺１/100）……223
第188図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……224
第189図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（１）（縮尺１/60・１/３）……227
第190図　ＳＫ１出土遺物実測図（２）（縮尺１/３・１/２）……228
第191図　ＳＫ２測量図（縮尺１/60）……229
第192図　ＳＫ２出土遺物実測図（１）（縮尺１/３・１/４）……230
第193図　ＳＫ２出土遺物実測図（２）（縮尺１/３・１/２）……231
第194図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/３）……232
第195図　ＳＫ４測量図（縮尺１/60）
第196図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１/４・１/３）……234
第197図　第Ⅱ①層出土遺物実測図（縮尺１/３）
第198図　第Ⅲ①層出土遺物実測図（１）（縮尺１/３）……235
第199図　第Ⅲ①層出土遺物実測図（２）（縮尺１/３）……236
第200図　第Ⅲ①層出土遺物実測図（３）（縮尺１/３・１/４）……237
第201図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（１）（縮尺１/３）……239
第202図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（２）（縮尺１/３）……240
第203図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（３）（縮尺１/３・１/４）……241
第204図　地点不明出土遺物実測図（１）（縮尺１/３）……242
第205図　地点不明出土遺物実測図（２）（縮尺１/３）……243

表　目　次

第２章　調査の概要

表 1　調査地一覧……8
表 2　検出遺構一覧 ……10

第３章　平井遺跡３次調査

表 3　検出遺構一覧 ……18
表 4　掘立柱建物一覧 ……40
表 5　溝一覧
表 6　土坑一覧 ……41
表 7　性格不明遺構一覧
表 8　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品
表 9　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品
表 10　ＳＫ６出土遺物観察表　土製品 ……42
表 11　ＳＫ７出土遺物観察表　土製品
表 12　ＳＸ３出土遺物観察表　土製品
表 13　ＳＸ３出土遺物観察表　石製品
表 14　ＳＸ３出土遺物観察表　鉄製品 ……43
表 15　掘立１出土遺物観察表　土製品
表 16　掘立２出土遺物観察表　土製品
表 17　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品
表 18　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品
表 19　ＳＤ８出土遺物観察表　土製品
表 20　ＳＤ９出土遺物観察表　土製品
表 21　ＳＤ９出土遺物観察表　石製品 ……44
表 22　ＳＤ 14 出土遺物観察表　土製品
表 23　ＳＤ 12 出土遺物観察表　土製品
表 24　ＳＤ 13 出土遺物観察表　土製品
表 25　ＳＤ６出土遺物観察表　土製品
表 26　ＳＤ６出土遺物観察表　石製品
表 27　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

第４章　平井遺跡４次調査

表 28　検出遺構一覧 ……50
表 29　掘立柱建物一覧 ……65
表 30　溝一覧
表 31　土坑一覧
表 32　性格不明遺構一覧

表33　掘立１出土遺物観察表　土製品 …… 66
表34　掘立２出土遺物観察表　土製品
表35　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品
表36　ＳＤ２出土遺物観察表　石製品
表37　ＳＤ２出土遺物観察表　鉄製品
表38　ＳＤ２出土遺物観察表　装身具
表39　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品 …… 67
表40　ＳＤ３出土遺物観察表　石製品
表41　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品
表42　ＳＤ４出土遺物観察表　石製品
表43　ＳＤ５出土遺物観察表　土製品
表44　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品
表45　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品 …… 68

第５章　平井遺跡５次調査

表46　検出遺構一覧 …… 74
表47　竪穴住居一覧 ……102
表48　竪穴住居の炉・カマド一覧
表49　掘立柱建物一覧
表50　溝一覧 ……103
表51　土坑一覧
表52　性格不明遺構一覧
表53　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品
表54　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品 ……104
表55　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品
表56　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品
表57　ＳＢ２出土遺物観察表　土製品
表58　ＳＢ３出土遺物観察表　土製品
表59　ＳＢ４出土遺物観察表　土製品
表60　掘立３出土遺物観察表　土製品 ……105
表61　掘立３出土遺物観察表　石製品
表62　掘立４出土遺物観察表　土製品
表63　掘立５出土遺物観察表　土製品
表64　掘立６出土遺物観察表　土製品
表65　掘立８出土遺物観察表　土製品
表66　掘立９出土遺物観察表　石製品
表67　掘立11出土遺物観察表　土製品 ……106
表68　ＳＤ７出土遺物観察表　土製品

表 69　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品 ……106
表 70　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品
表 71　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品
表 72　ＳＤ６出土遺物観察表　土製品

第６章　平井遺跡６次調査

表 73　掘立柱建物一覧 ……149
表 74　溝一覧
表 75　土坑一覧
表 76　ＳＫ出土遺物観察表　土製品 ……150
表 77　ＳＫ出土遺物観察表　石製品
表 78　掘立１出土遺物観察表　土製品
表 79　掘立１出土遺物観察表　石製品
表 80　掘立２出土遺物観察表　土製品
表 81　掘立３出土遺物観察表　土製品 ……151
表 82　掘立５出土遺物観察表　土製品
表 83　掘立５出土遺物観察表　玉類
表 84　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品
表 85　ＳＤ１出土遺物観察表　石製品 ……153
表 86　ＳＫ６出土遺物観察表　土製品
表 87　柱穴出土遺物観察表　土製品
表 88　包含層出土遺物観察表　土製品
表 89　包含層出土遺物観察表　石製品 ……154

第７章　平井遺跡７次調査

表 90　検出遺構一覧 ……160
表 91　竪穴住居一覧 ……177
表 92　掘立柱建物一覧
表 93　溝一覧
表 94　土坑一覧
表 95　性格不明遺構一覧 ……178
表 96　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品
表 97　ＳＫ３出土遺物観察表　土製品
表 98　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品
表 99　掘立２出土遺物観察表　土製品
表 100　掘立２出土遺物観察表　石製品
表 101　掘立３出土遺物観察表　土製品 ……179
表 102　掘立４出土遺物観察表　土製品

表103　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品……179
表104　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品
表105　ＳＤ５出土遺物観察表　土製品
表106　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品
表107　ＳＫ２出土遺物観察表　石製品
表108　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品
表109　ＳＤ６出土遺物観察表　土製品……180
表110　鋤址出土遺物観察表　土製品

第８章　平井遺跡８次調査

表111　掘立柱建物一覧 ……208
表112　溝一覧
表113　土坑一覧
表114　柱穴一覧
表115　掘立１出土遺物観察表　土製品……211
表116　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品
表117　ＳＤ１出土遺物観察表　石製品……212
表118　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品
表119　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品
表120　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品
表121　ＳＫ１出土遺物観察表　鉄製品
表122　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品
表123　ＳＫ３出土遺物観察表　土製品……213
表124　柱穴出土遺物観察表　土製品
表125　柱穴出土遺物観察表　鉄製品
表126　包含層出土遺物観察表　土製品……214

第９章　平井遺跡９次調査

表127　溝一覧……245
表128　土坑一覧
表129　柱穴一覧
表130　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品……246
表131　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品
表132　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品
表133　ＳＫ１出土遺物観察表　鉄製品
表134　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品
表135　ＳＫ２出土遺物観察表　鉄製品……247
表136　ＳＫ３出土遺物観察表　土製品……248

表137　柱穴出土遺物観察表　土製品 ……248
表138　第Ⅱ①層出土遺物観察表　土製品
表139　第Ⅲ①層出土遺物観察表　土製品
表140　第Ⅲ②層出土遺物観察表　土製品 ……250
表141　地点不明出土遺物観察表　土製品 ……251

写真図版目次

巻頭図版１　調査地全景（南より）

第３章　平井遺跡３次調査

図版１　１．調査前全景（南西より）
　　２．重機による表土掘削（東より）
図版２　１．調査風景（南西より）
　　２．西壁土層（東より）
図版３　１．第Ⅱ層上面遺構検出状況（南東より）
　　２．第Ⅱ層上面遺構完掘状況（北より）
図版４　１．ＳＸ３遺物出土状況（西より）
　　２．ＳＫ６遺物出土状況（東より）
図版５　１．遺構完掘状況（南東より）
　　２．掘立２完掘状況（東より）
図版６　１．ＳＤ４出土遺物
　　２．ＳＤ４出土遺物
　　３．ＳＫ６出土遺物
　　４．ＳＫ７出土遺物
　　５．ＳＸ３出土遺物
図版７　１．ＳＸ３出土遺物
図版８　１．ＳＤ２出土遺物
　　２．ＳＤ６出土遺物
　　３．ＳＤ６出土遺物
　　４．ＳＤ９出土遺物
　　５．ＳＤ１出土遺物

第４章　平井遺跡４次調査

図版９　１．調査前全景（北より）
　　２．重機による表土掘削（北より）
図版10　１．調査風景（北より）
　　２．東壁土層（西より）
図版11　１．遺構検出状況（南より）
　　２．ＳＤ２遺物・礫出土状況（南東より）
図版12　１．ＳＤ２遺物・礫出土状況（東より）
　　２．ＳＤ３遺物出土状況（西より）
図版13　１．ＳＫ２ベルト土層堆積状況（北より）
　　２．遺構完掘状況（南より）
図版14　１．遺構完掘状況（南より）
　　２．掘立１・２完掘状況（南西より）
図版15　１．ＳＤ２出土遺物
図版16　１．ＳＤ３出土遺物
　　２．ＳＫ４出土遺物
　　３．ＳＤ４出土遺物

第５章　平井遺跡５次調査

図版17　１．調査前全景（南西より）
　　２．重機による表土掘削（南西より）
図版18　１．調査風景（北より）
　　２．南壁土層（北より）
図版19　１．南側の遺構検出状況（北より）
　　２．ＳＢ２・カマド検出状況（北より）
図版20　１．ＳＫ２遺物出土状況（東より）
　　２．南側の遺構完掘状況（北より）
図版21　１．北側の遺構検出状況（南より）
　　２．西壁土層（北東より）
図版22　１．ＳＫ４・上層遺物出土状況（東より）
　　２．北側の遺構完掘状況（北より）

図版23　1．ＳＢ４完掘・暗渠検出状況（北東より）
　　2．調査現場説明会（南西より）
図版24　1．ＳＫ４出土遺物
　　2．ＳＫ４出土遺物
　　3．ＳＫ５出土遺物
　　4．ＳＢ２出土遺物
図版25　1．出土遺物（ＳＢ３、ＳＢ４、掘立３、掘立９）
　　2．ＳＫ２出土遺物
　　3．ＳＤ６出土遺物

第６章　平井遺跡６次調査

図版26　1．遺構検出状況（１）（北より）
　　2．遺構検出状況（２）（北より）
図版27　1．完掘状況（北より）
図版28　1．掘立１検出状況（東より）
　　2．掘立２検出状況（北東より）
図版29　1．ＳＤ１検出状況（北西より）
　　2．ＳＤ１完掘状況（南西より）
図版30　1．出土遺物（ＳＫ21、掘立1、掘立2、掘立５、ＳＤ１(1)）
図版31　1．ＳＤ１出土遺物(2)
図版32　1．包含層出土遺物

第７章　平井遺跡７次調査

図版33　1．調査前全景（南西より）
　　2．重機による表土掘削（南東より）
図版34　1．調査風景（南西より）
　　2．東壁土層（西より）
図版35　1．西壁深掘り土層（北東より）
　　2．遺構検出状況（北より）
図版36　1．鋤址完掘状況（北より）
　　2．ＳＤ３・磯出土状況（西より）
図版37　1．ＳＤ４・磯出土状況（南より）
　　2．ＳＫ３ベルト土層（北より）
図版38　1．ＳＫ４遺物出土状況（南より）
　　2．ＳＫ７礫出土状況（北より）
図版39　1．遺構完掘状況（北より）
　　2．遺構完掘状況（東より）
図版40　1．ＳＤ２出土遺物
　　2．ＳＫ４出土遺物
　　3．掘立２出土遺物
　　4．ＳＤ３出土遺物
図版41　1．ＳＤ４出土遺物
　　2．ＳＤ５出土遺物
　　3．ＳＫ２出土遺物
　　4．ＳＤ６出土遺物

第８章　平井遺跡８次調査

図版42　1．調査前全景（北より）
　　2．基本土層（南より）
図版43　1．遺構検出状況（１）（南より）
　　2．遺構検出状況（２）（南西より）
図版44　1．遺構完掘状況（１）（東より）
　　2．遺構完掘状況（２）（北より）
図版45　1．掘立１ＳＰ①～③完掘状況（南より）
　　2．掘立１ＳＰ③半截状況（南より）
図版46　1．ＳＤ１完掘状況（南西より）
　　2．ＳＤ１東西ベルト北側土層（北東より）

図版47　1．ＳＤ１北壁土層（南より）
　　2．ＳＤ１遺物出土状況（北東より）
図版48　1．ＳＫ１遺物出土状況（東より）
　　2．ＳＫ３半截状況（南より）
図版49　1．作業風景（北西より）
　　2．現地説明会（南東より）
図版50　1．掘立１出土遺物
　　2．ＳＤ１出土遺物
図版51　1．ＳＫ１出土遺物
　　2．ＳＫ３出土遺物
　　3．柱穴出土遺物
　　4．包含層出土遺物

第９章　平井遺跡９次調査

図版52　1．調査前全景（北西より）
　　2．掘削状況（北東より）
図版53　1．基本土層（西より）
　　2．遺構検出状況（南東より）
図版54　1．遺構完掘状況（１）（北西より）
　　2．遺構完掘状況（２）（南西より）
図版55　1．ＳＫ２遺物出土状況（西より）
　　2．作業風景（西より）
図版56　1．出土遺物（ＳＫ１、ＳＫ２(1)）
図版57　1．出土遺物（ＳＫ２(2)、第Ⅲ①層）
図版58　1．第Ⅲ②層出土遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

2006（平成18）年１月24日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願が提出された申請地周辺では近年、松山市による道路改良工事に伴い数多くの発掘調査が実施されている。申請地北東部では平成８年度と11･12年度に小野３号線関連調査として古市遺跡（２次調査）や五楽遺跡（１次・３次調査）が実施されたほか、平成８年度から10年度にかけて小野158号線関連遺跡として古市遺跡（１次調査）や下苅屋遺跡（２・３次調査）が実施されており、旧石器時代から近世までの集落関連遺構や遺物が数多く発見されている。申請地東方では平成15年度から17年度にかけて、松山市道南北梅本線関連遺跡として南梅本上方遺跡（１・２次調査）や南梅本長広遺跡（１・２次調査）が実施され、縄文時代から中近世までの建物跡や遺物が確認されている。申請地南方では松山市道水泥南高井線関連遺跡として、平井遺跡（２次調査）や水泥遺跡（１～３次調査）、高井遺跡（１・２次調査）、南高井遺跡（２・３次調査）などが実施され、主に古代から中世までの水田址や畑址が発見されている。

これらのことから、文化財課と道路建設課は申請地内における埋蔵文化財調査についての協議を重ね、年度毎に事前の試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認する事になった。試掘調査は道路建設課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが委託契約を結び、2006（平成18）年２月より開始した。試掘調査は平成18年２月から平成20年２月までの約２年間に、道路工事と併行して９度実施した。調査の結果、申請地の８割の地域に埋蔵文化財の存在を確認した。

この結果を受け、埋文センターと道路建設課は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して発掘調査を実施することになった。発掘調査は道路建設課と埋文センターとが委託契約を結び、平成18年３月１日から平成20年６月30日までの２年３ケ月間に７度行った。なお、発掘調査は現在の町名を踏襲して遺跡名を『平井遺跡』とし、３次調査から９次調査までを道路工事と平行して実施した。

２．刊行組織（平成22年３月31日現在）

松山市教育委員会		教育長	山内　泰
	事務局	局長	藤田　仁
		企画官	古鎌　靖
		企画官	青木　茂
		企画官	佐々木乾二
	文化財課	課長	家久　則夫
		主幹	森　正径
		副主幹	三好　博文

(財) 松山市生涯学習振興財団	理　事　長	中村　時広
	事務局長兼松山市考古館館長	松澤　文夫
埋蔵文化財センター	所長兼総務課長	白石　修一
	次　　長	折手　均
	次　　長	重松　佳久
	調　査　担　当	宮内　慎一
		河野　史知（現在：教育普及担当）
		水本　完児

3．地理的環境・歴史的環境（第1図）

（1）地理的環境

松山平野は高縄半島南西部にあり、半島中央部には東三方ケ森をはじめ伊之予山、北三方ケ森、高縄山からなる高縄山地が形成されている。同平野は、高縄山に源を発した大小の河川が伊予灘に流れ出て形成された沖積平野である。平井遺跡（3～9次調査）が所在する松山市平井地区は、小野谷に水源を発する小野川と平井谷に水源を発する堀越川とによって形成された扇状地である。調査地は小野川によって形成された小規模な扇状地の扇央部に立地している。

（2）歴史的環境

調査地が所在する松山平野東部地域には、小野川をはじめ悪社川や内川などの河川が存在する。近年、同地域内では松山市による道路建設工事に伴い数多くの発掘調査が実施され、旧石器時代から近世までの遺構や遺物が多数発見されている。ここでは、松山市平井地区を中心に、地区北方にある小野地区、東方の梅本地区、南方の水泥地区、西方の久米地区に所在する遺跡を時代別に説明する。

旧石器時代

松山平野では旧石器時代の遺構は確認されておらず、採集資料や単独出土資料ばかりである。平井地区では久米山田池で採集されたナイフ形石器があり〔重松 1992〕、調査地西方の鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査に伴い出土した角錐状石器などが古くから知られている。近年では平井地区にある上苅屋遺跡4次調査において、ナイフ形石器（赤色チャートを素材とする両縁調整形）1点が単独資料として報告されている〔栗田 2005〕。

縄文時代

早期では上苅屋遺跡3次調査において、包含層資料ではあるが押型文土器や無文土器が出土している〔栗田 2005〕。平井地区や周辺地域では確実な遺構と共に遺物が出土する事例は縄文時代後期以降である。該期の一括遺物としては、地区西方にある久米窪田森元遺跡検出の土坑出土品が挙げられる〔栗田 1989〕。また、久米窪田Ⅰ遺跡からも竪穴住居に伴うものとして同時期の遺物が報告されている〔吉本他 1981〕。晩期では近年の発掘調査により、遺構や遺物の検出事例が増加している。平井地区では古市遺跡1次調査検出の自然流路内から晩期前葉や後葉の土器が出土しているほか、同2次調査からは晩期後葉の土坑1基が確認されている〔山之内 1997〕。また、平井地区の北東端にある五楽遺跡1次調査では晩期前葉の土器が出土した土坑が検出されたほか〔山本 2005〕、地区東方にある南梅本長広遺跡2次調査からは晩期後葉の土坑1基が検出され、土坑内からは土器と共にサヌカイト製の剥片素材が出土している〔小笠原 2007〕。

第１図　周辺遺跡分布図（S＝1：30,000）

❶ 平井遺跡３～９次
❷ 平井遺跡２次
❸ 水泥遺跡１次
❹ 水泥遺跡２次
❺ 水泥遺跡３次
❻ 高井遺跡１次
❼ 南高井遺跡２次
❽ 南高井遺跡３次
❾ 下苅屋遺跡１次
❿ 下苅屋遺跡２次
⓫ 下苅屋遺跡３次
⓬ 上苅屋遺跡３次
⓭ 上苅屋遺跡４次
⓮ 古市遺跡１次
⓯ 古市遺跡２次
⓰ 五楽遺跡１次
⓱ 五楽遺跡２次
⓲ 五楽遺跡３次
⓳ 久米窪田Ⅰ遺跡
⓴ 久米窪田Ⅲ遺跡
㉑ 久米窪田森元遺跡１次
㉒ 久米窪田古屋敷C遺跡
㉓ 鷹子新畑遺跡２次
㉔ 鷹子新畑遺跡３次
㉕ 鷹子町遺跡１次
㉖ 開遺跡１次
㉗ 南梅本長広遺跡１次
㉘ 南梅本長広遺跡２次
㉙ 南梅本上方遺跡１次
㉚ 南梅本上方遺跡２次
㉛ 北梅本北池遺跡
㉜ 北梅本悪社谷遺跡２次
㉝ 五郎兵衛谷古墳
㉞ 檜山峠７号墳
㉟ 芝ヶ峠１号墳
㊱ かいなご３号墳
㊲ 播磨塚天神山古墳
㊳ 葉佐池古墳
㊴ 茨谷窯址
㊵ 駄場姥ヶ懐窯址
㊶ 悪社谷窯址
㊷ 枝朶下池窯址
㊸ 来住廃寺跡

弥生時代

弥生時代になると、検出事例が飛躍的に増大する。その中でも、前期末～中期初頭の遺構や遺物は最も注目される。平井地区内では前述の古市遺跡１次調査において自然流路が検出され、流路内からは前期末から中期初頭の土器がまとまって出土している。また、同２次調査では12基の土坑が確認され、このうちＳＫ10からは多量のサヌキトイド剥片が出土したことから、土坑は石器の作業場として使用されたと考えられている。またＳＫ１からは緑色片岩製の剣形石製品が基底面から出土しており、類例はないが墓的様相をもつ遺構の可能性がある。五楽遺跡１次調査では11基の土坑が検出され、このうち５基の土坑内からは焼土層が検出されており土器焼成遺構と考えられている。また、同２次調査では23基に及ぶ土坑が確認されている〔相原秀2001〕。竪穴住居は未検出ではあるが、これらの事象は平井地区や周辺地域には確実に弥生前期集落が存在していることを示す資料といえる。

中期では良好な資料が少なく、中期後半段階の遺構や遺物が数例報告されている。平井地区北東方にある北梅本北池遺跡からは性格不明遺構２基が検出され、凹線文期の土器が出土している〔山之内2001〕。下苅屋３次調査でも該期の遺構が報告されている〔河野2000〕。地区西方の久米窪田古屋敷Ｃ遺跡からは「Ｌ」字状に折れ曲がる幅5.7mの大溝が検出され、溝内からは該期の土器や石器が比較的まとまって出土している〔宮内1992〕。また、久米窪田Ⅲ遺跡からは凹線文期の方形竪穴住居が検出されている〔吉本1981〕。

後期では平井遺跡２次調査にて後期後葉の溝が検出され〔水本2008〕、南梅本長広遺跡１次調査からは同時期の土坑３基が発見されている。地区南方にある水泥遺跡１次調査では溝が検出され、溝内からは弥生時代末に時期比定される土器がまとまって出土している〔水本2008〕。

古墳時代

前期や中期の資料は少なく、集落様相は不明な点が多い。地区南方にある南高井遺跡２次調査からは、前期前半の壺形土器が土坑内から出土している〔水本2008〕。中期では地区西方の鷹子新畑遺跡２次調査にて竪穴住居が検出され、カマド中央部に土師器高坏が伏せた状態で置かれていた〔栗田1993〕。後期になると、遺構・遺物共に増加する。地区西方にある開遺跡では６世紀代の竪穴住居や掘立柱建物が検出され、住居形態の変遷や竪穴から掘立への移行が検討されている〔宮内1996〕。

地区内では、古市遺跡２次調査において一辺６ｍを測る６世紀後半の竪穴住居や５棟の掘立柱建物が検出され、五楽遺跡２次調査では、一辺4.5mを測る７世紀前半の方形竪穴住居が検出されている。このほか、下苅屋遺跡１次調査は６世紀後半を主体とする集落址で、検出された９棟の竪穴住居からは生焼けや焼け歪みのある須恵器が多数出土している〔重松1996〕。また、同３次調査からは６世紀後半から７世紀前半に時期比定される竪穴住居や掘立柱建物、溝、土坑が検出され、土坑内からは未製品を含む多量の須恵器が出土したことから土器廃棄遺構と考えられている。これらの調査成果から平井地区一帯は、小野谷に分布する窯址群からの須恵器運搬に伴う中継点または集積地としての性格をもつ集落であったと推測されている。

調査地北東部に広がる丘陵上には、檜山峠古墳群や芝ケ峠古墳群、かいなご古墳群などの後期古墳が数多く分布している。また、調査地東方の低位丘陵上には播磨塚天神山古墳群など小規模な円墳や方墳が密集している。近年の調査では、竪穴式石室を主体部にもつ檜山峠７号墳が発見され、くびれ部祭祀にかかわる貴重な資料となっている〔栗田1997〕。このほか、播磨塚天神山古墳の調査が実

施され、全長32.5mを測る6世紀前半の前方後円墳であることが判明した。主体部からは金銅製の辻金具や剣菱形杏葉、銀製空玉などの装飾品が数多く出土している〔吉岡2001〕。平地部では地区南方にある高井遺跡にて小型の竪穴石室1基が発見されており、須恵器や耳環が出土している〔水本2008〕。

古　代

五楽遺跡2次調査では、7世紀中葉から後葉の築造とされる掘立柱建物15棟を検出した。建物はいずれも1×1間規模で、倉庫的な性格をもつものと考えられている。古市遺跡2次調査でも、7～8世紀代とされる掘立柱建物が確認されている。上苅屋遺跡3次調査では8世紀代の溝や建物が検出され、北梅本悪社谷遺跡2次調査からは、8世紀代の自然流路や性格不明遺構が確認されている。なお、性格不明遺構内からは須恵器片や窯壁片が出土している〔山之内2001〕。古市遺跡1次調査からは10世紀代の遺物が出土した溝が検出されたほか、12世紀前半頃の掘立柱建物が確認されている。建物を構成する柱穴からは完形の瓦器椀や土師器が出土しており、建物廃絶に伴う祭祀儀礼が行われたものと考えられている。なお、地区南方にある水泥遺跡3次調査では、時期は特定できないが水田耕作に伴う鋤址が検出されている。地区西方にある鷹子町遺跡1次調査では10世紀とされる木棺墓が検出され、土坑内からは和鏡や土師器、釘が出土している〔宮内1992〕。平井地区内では、奈良時代や平安時代における集落の存在を示唆する資料が徐々に増加しており、集落の広がりや様相解明が急務となる。

調査地北側の丘陵上には松山東部古窯址群があり、6世紀後半から8世紀後半までの操業とされる須恵器窯が数多く分布している。これまでのところ、茨谷、駄馬姥ケ懐、悪社谷、枝朶下池など10数基の窯の存在が確認されている。

中　世

上苅屋遺跡3次調査では、13世紀後半から14世紀前半に時期比定される8棟の掘立柱建物や柵列、溝のほか、16世紀代の土坑墓3基や井戸が検出されている。土坑墓からは土師器や漆器椀などが出土している。また、井戸は直径2.1m、深さ1.6mを測る素掘り構造で、井戸内からは北宋銭や木製品などが出土し、井戸廃絶に伴う埋戻しが確認されている。南梅本上方遺跡1次調査では掘立柱建物が検出され、柱穴内からは土師器皿のほか柱材の一部とみられる木片が出土している。鷹子新畑遺跡3次調査からは14世紀代の掘立柱建物や井戸が確認されている〔相原浩1996〕。地区南方のある水泥遺跡2・3次調査や高井遺跡、南高井遺跡2・3次調査からは中世段階の鋤址や畝溝が多数確認されている〔水本2008〕。

近　世

下苅屋遺跡3次調査では礫が積まれた2基の墓が検出され、礫内から出土した2枚の寛永通宝は死者に持たせる六文銭と考えられている。南梅本長広遺跡1次調査では江戸時代の土坑3基が検出されたほか、水泥遺跡3次調査からは礫を敷き詰めた経塚1基が発見されている。

【参考文献】

重松　佳久　1992「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1996「下苅屋遺跡」『松山市文化財調査年報Ⅷ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏　2005　『上苅屋遺跡－第３次・４次調査－』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1989　「久米窪田森元遺跡」『松山市文化財調査年報Ⅱ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2000　『古市遺跡・下苅屋遺跡－２次・３次調査－』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1993　「鷹子新畑遺跡２次調査」『松山市文化財調査年報Ⅴ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1997　『檜山峠７号墳』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2003　『葉佐池古墳』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
加島なおみ　1996　「駄馬姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
吉本　拡　1981　「久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
阪本　安光　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
山之内志郎　2005　『古市遺跡－２次調査－・五楽遺跡－１次・３次調査－』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2001　「北梅本北池遺跡・北梅本悪社谷遺跡２次調査」『小野地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
山本　健一　2005　「五楽遺跡１次調査」『古市遺跡－２次調査－・五楽遺跡－１次・３次調査－』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
小笠原善治　2007　『南梅本上方遺跡１次・２次調査地、南梅本長広遺跡１次・２次調査地』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
相原　秀仁　2001　「五楽遺跡２次調査」『松山市文化財調査年報12』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
河野　史知　2000　「下苅屋遺跡３次調査」『古市遺跡・下苅屋遺跡－２次・３次調査－』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮内　慎一　1992　「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡・鷹子町遺跡１次調査」『来住・久米地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
1996　「開遺跡１次調査」『小野川流域の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
水本　完児　2008　『平井遺跡－２次調査－・水泥遺跡－１次・２次・３次調査－・高井遺跡－１次調査－・南高井遺跡－２次・３次調査－』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
吉岡　和哉　2001　『播磨塚天神山古墳』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
相原　浩二　1995　「鷹子新畑遺跡３次調査」『松山市文化財調査年報Ⅶ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
愛媛県教育委員会　1991　『愛媛県内古墳－分布調査報告－』

第２章　調査の概要

１．調査の経緯

調査地は松山市平井町甲 2349-1 から平井町甲 3131-1 までに位置し、道路幅 20m、道路全長約 360m、調査対象面積 7,274㎡である。調査地北端は県道 334 号松山川内線に、南端は国道 11 号線に接続する。なお、調査地北側の地域は試掘調査の結果、遺跡が存在しておらず、そのため発掘調査はこの地域を除く箇所を調査対象とした。

これまでに平井地区内では、平井遺跡として２度の発掘調査が行われている。調査地南東部、国道 11 号線下にある平井遺跡１次調査からは縄文時代から中世までの集落関連遺構が確認され、調査地南方にある同２次調査では、主に弥生時代後期の溝や流路が検出されている。

ここでは、発掘調査方法や調査・整理内容等について説明する。

調査方法

発掘調査は重機の使用により表土層を除去し、その後、作業員により調査地壁面の精査や遺構検出作業をし、遺構検出状況や完掘状況等の写真撮影を行った。調査時には測量業者に４級基準点設置業務を委託し、その後、遺構の掘り下げや測量作業を進めた。作業終了時には重機を使用して調査地を埋戻し、発掘調査を終了した。なお、調査中には一般市民対象の説明会や小学生を対象とした職場体験等を開催した。

調　査

調査は、平成 17 年度から 20 年度の３年間にわたり実施した。ここでは、年度ごとに調査の概要を報告する。

平成 17 年度：平井遺跡３次調査が実施され、主に弥生時代の土坑や古墳時代の掘立柱建物、溝のほか中近世の溝を検出した。

平成 18 年度：平井遺跡４次調査と５次調査を実施した。４次調査では古墳時代の掘立柱建物や溝、中世の溝を検出し、５次調査からは弥生時代の土坑や古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物、中世の溝や土坑を検出した。

平成 19 年度：平井遺跡６次調査と７次調査を実施した。６次調査では弥生時代の土坑や古墳時代の掘立柱建物、古代の土坑を検出し、７次調査からは弥生時代の溝や土坑、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、溝などを検出した。

平成 20 年度：平井遺跡８次調査と９次調査を実施した。８次調査では弥生時代から古墳時代の土坑、古代や中世の溝が検出され、９次調査からは古代の土坑や中世の溝などが検出された。

整　理

整理作業は発掘調査と並行して、松山市埋蔵文化財センター内にて出土遺物の洗浄や注記、接合作業のほか、記録写真の整理・収納、及び測量図の整理作業を行った。なお、平成 20 年度と 21 年度には出土遺物の実測や遺構図・遺物図のトレース、写真図版の作成や版下作成作業など報告書刊行に伴う整理作業を行った。

説明会

発掘調査中には、３度の遺跡説明会を開催した。第１回目は平成18年12月16日（土）に平井遺跡５次調査の説明会を行った。説明会では、現場写真や出土遺物等を展示し、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物を中心に、周辺遺跡の状況をまじえながら建物構造や集落様相について説明を行った。第２回目は平成20年５月17日（土）に平井遺跡８次調査の説明会を実施し、古代に時期比定される溝の堆積状況や性格の説明、出土遺物の紹介を行った。第３回目は平成20年６月29日（土）に平井遺跡９次調査の説明会を行い、雨天にもかかわらず多くの参加者を得た。なお、平井遺跡８次調査実施中には公民館活動の一環として、小学生50名による職場体験を開催した。各説明会では周辺住民や考古学ファンをはじめ、道路建設課や松山市教育委員会の関係者など、総勢150名に及ぶ参加者を得て埋蔵文化財に対する意識の高揚や普及がはかられた。

表１　調査地一覧

調査名	所在地	面積(㎡)	調査期間	担当
平井遺跡３次	平井町甲3065外	903.00	2006. 3. 1 ～ 2006. 7.31	河野
平井遺跡４次	平井町甲2349-1外	706.00	2006. 7. 3 ～ 2006.11.30	河野
平井遺跡５次	平井町甲3120、3122、3126の各一部	806.02	2006.10. 2 ～ 2007. 2.28	河野
平井遺跡６次	平井町甲3074-1	1,283.60	2007. 6. 1 ～ 2007. 8.31	宮内
平井遺跡７次	平井町甲3115、3117の一部	744.78	2007. 9.18 ～ 2008. 1.31	河野
平井遺跡８次	平井町甲2348番１の一部	244.53	2008. 4.16 ～ 2008. 5.30	水本
平井遺跡９次	平井町甲3131番１の一部	83.97	2008. 6. 2 ～ 2008. 6.30	水本

２．層　位

（１）基本層位（第２図）

本稿では平井遺跡３次調査から９次調査までの７次の調査内容や成果を、第３章から第９章までで報告するが、これら全調査地を「調査地」と呼称し、ここでは遺跡全体を概観する。

まず、調査地の基本層位は第Ⅰ層から第Ⅵ層までとし、第２図に掲載した。各土層は調査ごとで土色や土質の違いがあり、各章での報告では基本層位を細分し、第Ⅰ①層、第Ⅰ②層といった表記をした。なお、細分した土層は調査ごとで違いがあり、細分した土層は必ずしも全調査で一致していない。

第Ⅰ層は近現代の造成や水田耕作に伴う客土である。第Ⅱ層は中世段階の堆積層または水田耕作等に伴う耕土であり、第Ⅲ層は古代の堆積層である。第Ⅳ層は弥生時代から古墳時代の遺物を含む堆積層である。第Ⅴ層は無遺物層で、シルトまたは粘性の強い土壌である。第Ⅵ層は小野川の氾濫に起因する河川堆積物である。

第Ⅰ層：調査地は調査以前、水田や雑種地であり、現況の標高を測量すると調査地北端にある平井遺跡４次調査地が最も高く、標高58.8mを測る。調査地南側に向けて徐々に低くなり、調査地南端、平井遺跡９次調査地では標高54.5mを測る。第Ⅰ層は造成土や耕作土であり、最大では第Ⅰ①層から第Ⅰ⑤層の５種類に細分している。

第Ⅱ層：検出遺構や出土遺物から、中世段階の堆積層または水田耕作に伴う耕土である。全調査地にみられ、調査地南側にある平井遺跡５次・９次調査地が最も厚い堆積をなし、層厚18cmを測る。第Ⅱ層は灰黄色、灰色、黄褐色などを呈する粘質土で、６次・８次・９次調査からは本層中より土師器片や陶磁器片が出土している。

第Ⅲ層：調査地北側と中央部を除く地域にみられ、層厚 10 ～ 30cmを測る。本層は最大で６種類に分層され、褐灰色、暗オリーブ色、黒褐色を呈する砂質土やシルト層からなる。３次・７～９次調査では、本層中より７世紀から平安時代までの土師器や須恵器が出土している。

第Ⅳ層：主に弥生時代から古墳時代の遺物を含む包含層であり、調査地北側を除く地域にみられ、層厚10～25cmを測る。本層は黒褐色や褐色、灰オリーブ色などを呈する粘性の強い土壌で、最大で５種類に細分される。

第Ⅴ層：黄色、灰黄色、浅黄色などを呈するシルト層や粘土層で、調査地全域に堆積する。層厚25cm以上を測り、調査地中央部付近では厚い堆積をなし、７次調査地では層厚 140cm以上となる。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

第Ⅵ層：灰色や黄褐色などを呈する細砂を基調とし、砂層または径１～ 10cm大の礫を含む砂礫層である。調査地北側の４・８次調査地と南側の５次調査地で検出されており、本層上面の標高を測量すると、４次調査地では標高 58m、５次調査地では標高 54.5m を測る。

（２）検出遺構・遺物（表２）

調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を検出した。検出した遺構を時代別に記す。

１）弥生時代　① 前期：土坑 14 基
　　② 中期：溝２条、土坑３基、性格不明遺構１基
　　③ 後期：土坑４基、性格不明遺構３基

２）古墳時代：竪穴住居５棟、掘立柱建物 28 棟、溝 22 条、土坑 19 基、性格不明遺構７基

３）古　　代：溝５条、土坑６基

４）中　　世：溝 15 条、土坑４基、性格不明遺構１基

５）近　　世：溝２条、性格不明遺構２基、鋤址

６）そ の 他：柱穴 547 基

各調査で検出した遺構は、表２に記す。遺物は遺構や包含層出土品及び地点不明品であり、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳時代～中世）、須恵器（古墳時代～古代）、陶磁器（中世～近世）、瓦（中世～近世）、鉄器、石器などである。なお、遺物は遺物収納箱（44 × 60 × 14cm）に約 90 箱分が出土した。

表２　検出遺構一覧

遺 跡 名	弥生時代	古墳時代	古　代	中　世	近　世
平井遺跡３次	溝　：１条 土坑：４基 不明：１基	掘立：２棟 溝　：９条 土坑：３基 不明：１基	溝　：２条	溝　：１条	溝　：１条 不明：２基
平井遺跡４次		掘立：２棟 溝　：５条 土坑：４基 不明：１基		溝　：２条 土坑：１基 不明：１基	
平井遺跡５次	土坑：２基 不明：２基	竪穴：４棟 掘立：11 棟 溝　：１条 土坑：３基 不明：３基		溝　：９条 土坑：１基	溝　：１条
平井遺跡６次	土坑：12 基	掘立：８棟 溝　：３条 土坑：４基	土坑：３基		
平井遺跡７次	溝　：１条 土坑：３基 不明：１基	竪穴：１棟 掘立：４棟 溝　：４条 土坑：３基 不明：２基	溝　：１条 土坑：１基		鋤址
平井遺跡８次	土坑：１基	掘立：１棟 土坑：２基	溝　：１条	溝　：３条	
平井遺跡９次			溝　：１条 土坑：２基	土坑：２基	

第２図　調査地測量図・土層模式図

第３章

平井遺跡３次調査

第３章　平井遺跡３次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年１月、松山市平井町甲3065外において、松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。調査は松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが委託契約を結び、平成18年２月８日から２月９日までの間に実施した。調査では、竪穴住居・土坑・柱穴などの遺構のほか、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物を検出した。この結果を受け、道路建設課と埋文センターは協議を重ね、道路改良によって消失する遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、古墳時代の集落構造解明を主目的として、松山市教育委員会文化財課の指導のもと2006（平成18）年３月１日より開始した。

（２）調査の経緯

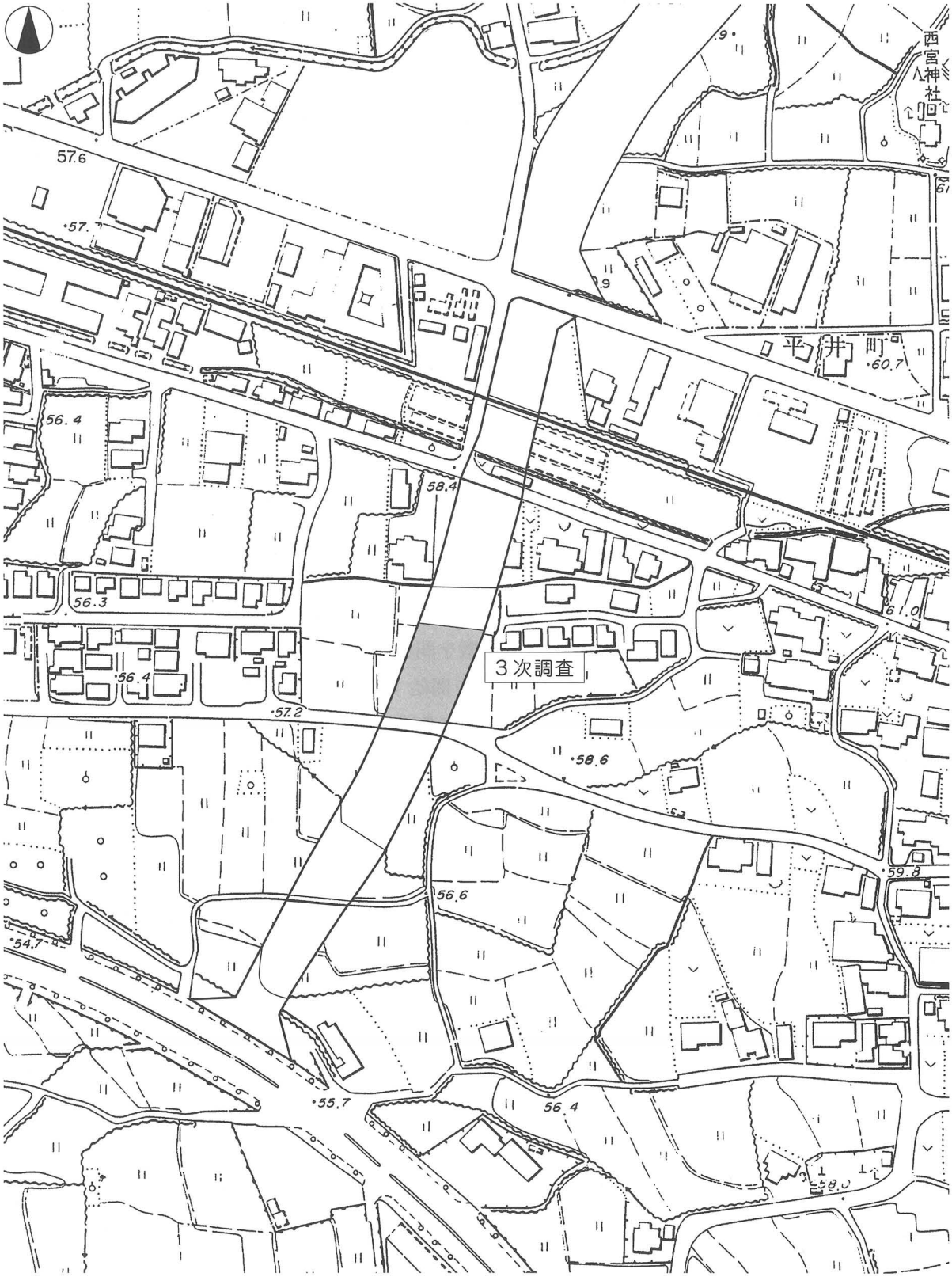
発掘調査は平成18年３月１日から同年５月31日まで屋外調査、６月１日から７月31日までは室内調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

屋外調査：平成18年３月１日、発掘機材の運搬を開始すると同時に、現場保全のため杭打ち・ロープ張り・下草刈り・土嚢作り・調査区の設定を開始する。３月14日、重機による表土掘削と同時に壁面・床面の精査を開始する。４月18日、第Ⅱ層上面での遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を行う。４月19日、第Ⅱ層上面の遺構を完掘し、遺構完掘写真撮影を行う。４月20日、重機にて第Ⅴ層上面までの堆積土の掘り下げを開始する。４月21日、水準点やグリット杭の設置を行う。４月24日、第Ⅴ層上面の床面精査を開始する。４月26日、第Ⅴ層上面での遺構検出写真撮影を行い、遺構掘り下げと測量を開始する。５月16日、調査区の東西端を重機にて拡張する。５月24日、遺構の掘り下げ・測量を終了する。５月25日、遺構の完掘状況の写真撮影を行う。５月29日、重機による埋め戻しを開始する。５月31日、重機による埋め戻し作業を終了し、本日にて屋外調査を完了する。

室内調査：６月１日から７月31日の間で記録写真の整理、遺物の洗浄・注記・復元・一部実測、現場で作成した原図の整理や、一部の２次原図作成･トレースを行い、調査概要報告書を作成する。

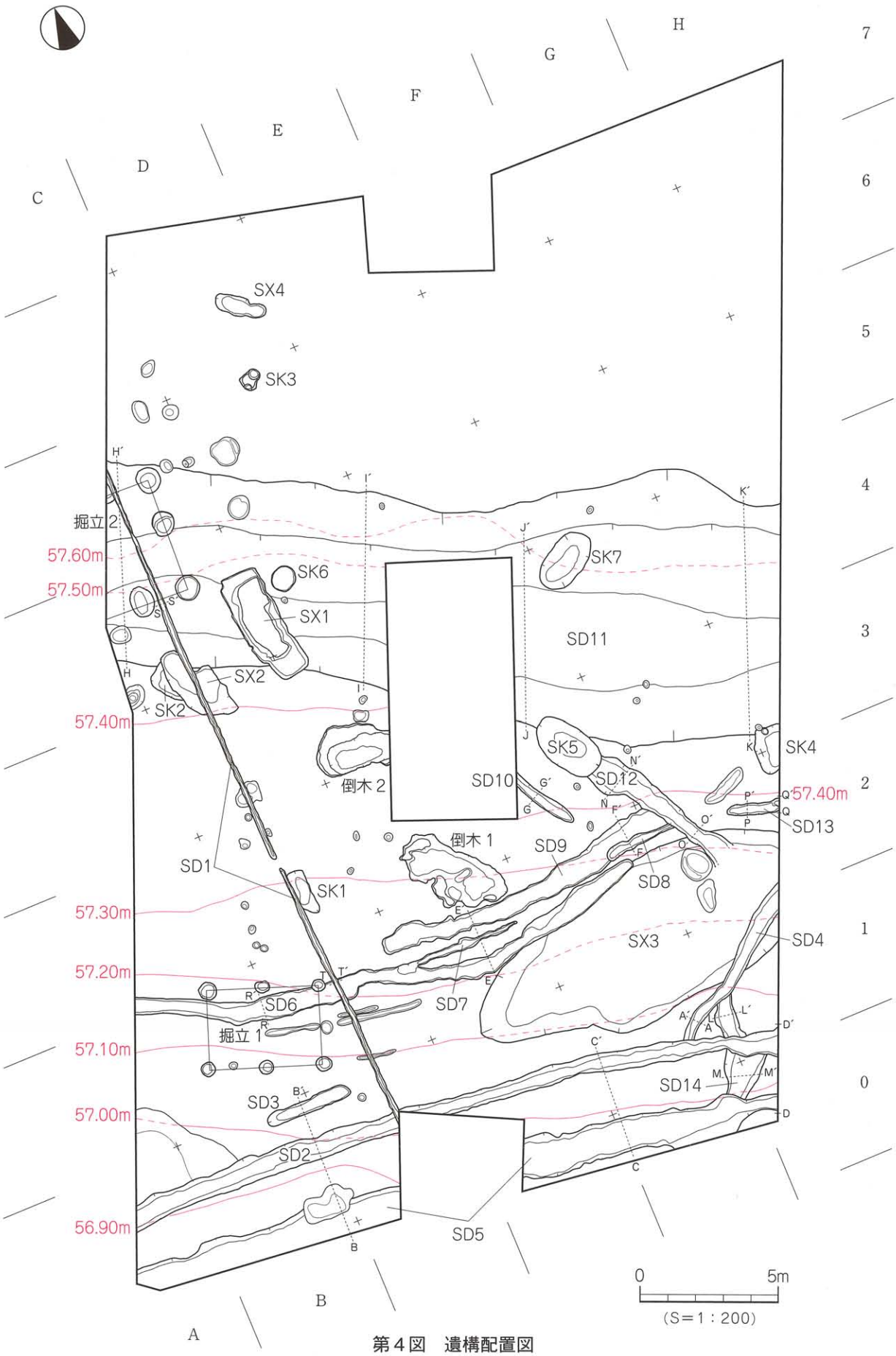
（３）調査組織

遺 跡 名：平井遺跡３次調査
調査場所：松山市平井町甲3065外
調査期間：2006（平成18）年３月１日～同年７月31日
調査面積：903㎡
調査委託：松山市都市整備部道路建設課
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：河野史知・小笠原善治



(S=1:2,500)

第３図　調査地位置図


SX4
SK3
掘立2
57.60m
57.50m
SK6
SX1
SK7
SD11
SX2
SK2
57.40m
SK5
SK4
倒木2
SD10
SD12
57.40m
SD13
倒木1
SD9
SD1
SK1
SD8
57.30m
SX3
SD4
57.20m
SD6
SD7
掘立1
57.10m
SD14
SD3
57.00m
SD2
56.90m
SD5
0
5m
(S=1:200)

第4図　遺構配置図

2．層　位

（1）基本層位（第５図）

調査地は、松山平野東部の小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地上の扇央付近、標高約58ｍを測る。調査以前は水田であった。

基本層位は、以下の５層である。

Ⅰ層　：暗緑灰色土（5G4/1）で、水田耕作土で調査区全域に層厚18～32㎝の堆積を測る。

Ⅱ層－①：浅黄橙色土（7.5YR8/6）に黒褐色土（7.5YR3/1）を含む整地土で、調査区南西部に層厚12～36㎝の堆積を測り、この上面にて溝１条と性格不明遺構２基を検出した。

－②：灰色土（5Y4/1）で、調査区南端の一部だけ層厚４～８㎝の堆積を測る。本層中からの遺物の出土はない。

Ⅲ層－①：暗オリーブ色土（5Y4/3）で、含有物の違いにより２層に分類でき、ｂ層はａ層に比べ鉄分を強く帯び、調査区南西部に厚さ３～20㎝の堆積を測り、古代の土師器片が出土する。

－②：褐灰色土（10YR4/1）で、土質の違いから３層に分類でき、ａ層はｂ層に比べ鉄分を多く含み、ｃ層は砂粒を多く含む。調査区南西部に厚さ４～56㎝の堆積を測る。

Ⅳ層　：黄灰色土（2.5Y6/1）で、粘質が強い。調査区南端の一部だけが層厚６～14㎝の堆積を測り、古墳時代の土師器片や須恵器片が出土する。

Ⅴ層　：淡黄色土（2.5Y8/4）で、地山土であり最終遺構検出面となる。調査区全域に堆積し、調査区中央部から南側にかけて緩やかに傾斜（比高差70㎝）をもち下がる。

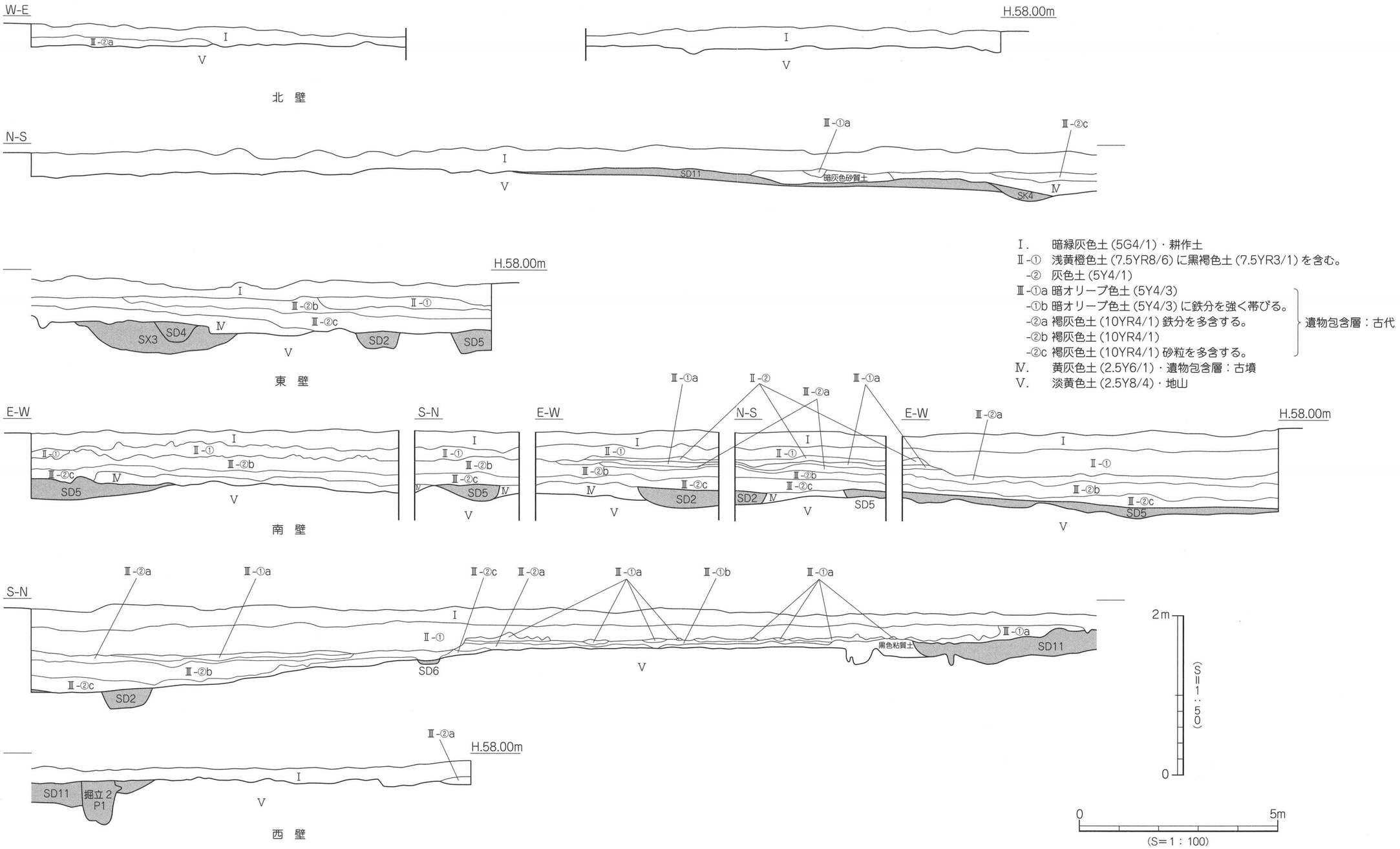
遺構の検出状況や出土遺物から、Ⅱ層は中世、Ⅲ層は古代、Ⅳ層は古墳時代までの堆積と考えられる。調査にあたり、調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは南から北に向けて１・２・３、西から東に向けてＡ・Ｂ・Ｃとし、Ａ１・Ａ２・・・としたグリット名を付けた。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

（2）検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、掘立柱建物２棟（古墳時代）、溝14条（弥生時代：１条、古墳時代：９条、古代：２条、中世：１条、近世以降：１条）、土坑７基（弥生時代：４基、古墳時代：３基）、性格不明遺構４基（弥生時代：１基、古墳時代：１基、近世以降：２基）、柱穴27基、倒木痕２基である。今回の調査では掘立柱建物や土坑等は、遺構ごとに通し番号（ＳＫ１・２・・・）を付けた。遺物は遺構から出土したもので、弥生土器（中期・後期）、土師器（古墳時代～中世）、須恵器（古墳時代）、陶器（中近世）、石器、鉄器が出土した。

表３　検出遺構一覧

時　代	検　出　遺　構
弥生時代	溝１条（SD4）、土坑４基（SK3・5・6・7）、性格不明遺構１基（SX3）
古墳時代	掘立２棟（掘立1・2）、溝９条（SD2・3・5・7～11・14）、土坑３基（SK1・2・4）、性格不明遺構１基（SX4）
古　代	溝２条（SD12・13）
中　世	溝１条（SD6）
近世以降	溝１条（SD1）、性格不明遺構２基（SX1・2）


W-E
H.58.00m
Ⅱ-②a
Ⅰ
Ⅴ
北　壁
N-S
Ⅲ-①a
Ⅲ-②c
SD11
暗灰色砂質土
SK4
Ⅳ
H.58.00m
Ⅱ-②b
Ⅱ-①
Ⅱ-②c
SX3
SD4
SD2
SD5
東　壁
Ⅰ.　暗緑灰色土（5G4/1）・耕作土
Ⅱ-①　浅黄橙色土（7.5YR8/6）に黒褐色土（7.5YR3/1）を含む。
-②　灰色土（5Y4/1）
Ⅲ-①a 暗オリーブ色土（5Y4/3）
-①b 暗オリーブ色土（5Y4/3）に鉄分を強く帯びる。
-②a 褐灰色土（10YR4/1）鉄分を多含する。
-②b 褐灰色土（10YR4/1）
-②c 褐灰色土（10YR4/1）砂粒を多含する。
遺物包含層：古代
Ⅳ.　黄灰色土（2.5Y6/1）・遺物包含層：古墳
Ⅴ.　淡黄色土（2.5Y8/4）・地山
E-W
S-N
Ⅲ-①a
Ⅱ-②
Ⅲ-②a
Ⅲ-①a
N-S
E-W
Ⅲ-②a
H.58.00m
SD2
SD5
南　壁
Ⅲ-②a
Ⅲ-①a
Ⅲ-②c
Ⅲ-②a
Ⅲ-①a
Ⅲ-①b
Ⅲ-①a
S-N
Ⅱ-①
Ⅲ-②b
Ⅲ-②c
SD2
SD6
黒色粘質土
SD11
2m
0
(S=1:50)
Ⅲ-②a
H.58.00m
SD11
掘立2
P1
西　壁
0
5m
(S=1：100)

第５図　土層図

3．遺構と遺物

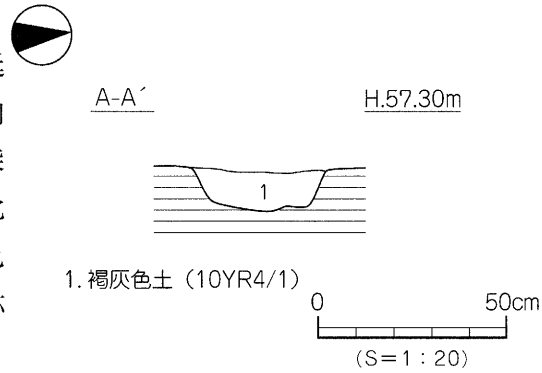
（1）弥生時代

弥生時代の遺構は、溝１条、土坑４基、性格不明遺構１基を検出した。

1）溝

ＳＤ４（第６図）

調査区南東部のＥ～Ｆ・１～２区に位置し、ＳＸ３を切り、ＳＤ２に切られる。北東端は調査区外に延びる。主軸はＮ-56°-Ｅの北東から南西方向を指向する。規模は検出長6.1 m、上場幅0.35～0.7 m、深さ８～12 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、北東から南西へ約５cmの比高差をもつ。埋土は褐灰色土の単一層となる。遺物は上位から溝床にかけて弥生土器片が出土する。

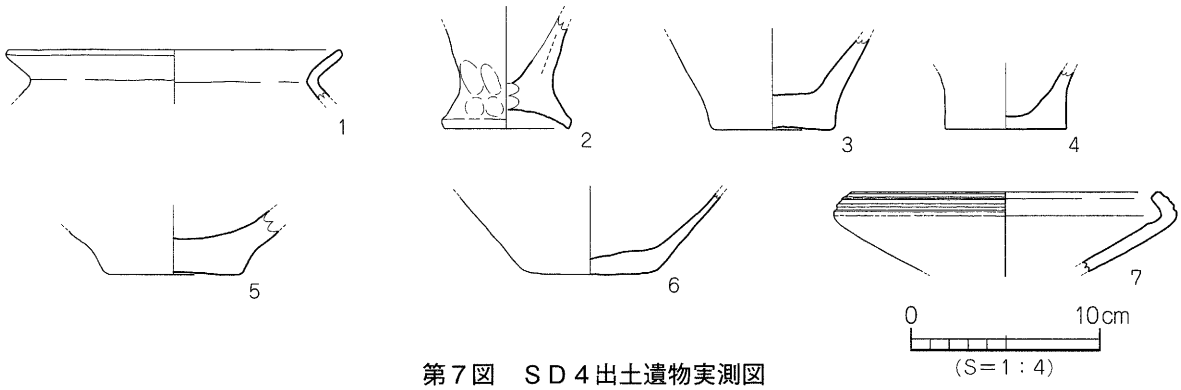


第６図　ＳＤ４測量図

出土遺物（第７図、図版６）

１～４は弥生土器の甕である。１は「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。２は上げ底で底部にくびれをもつ。３・４は平底の底部から内湾気味に立ち上がる。５・６は壺の底部であり、平底の底部から内湾気味に立ち上がる。７は高坏の坏部で「く」字状の口縁部に端部外面に３条の凹線文が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後半とする。



第７図　ＳＤ４出土遺物実測図

2）土坑

ＳＫ３（第４・８図）

調査区北西部のＤ・６区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなし、北西部に浅い円形状の凹みをもつ。規模は長軸0.78 m、短軸0.45 m、深さ14 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土や出土した土器片から弥生時代としか判らない。

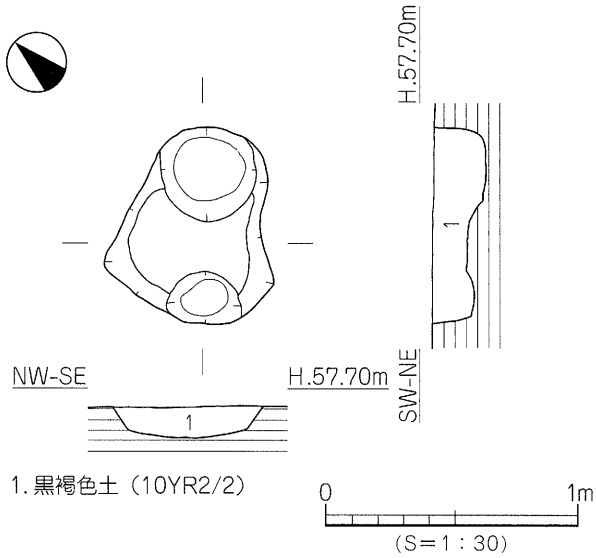
ＳＫ５（第４・９図）

調査区中央部東側のＥ・３区に位置し、ＳＤ 11・12 を切る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 2.62 m、短軸 1.48 m、深さ 116 cmを測る。埋土は黒色土の単一層で、遺物は上位から弥生土器片が僅かに出土する。

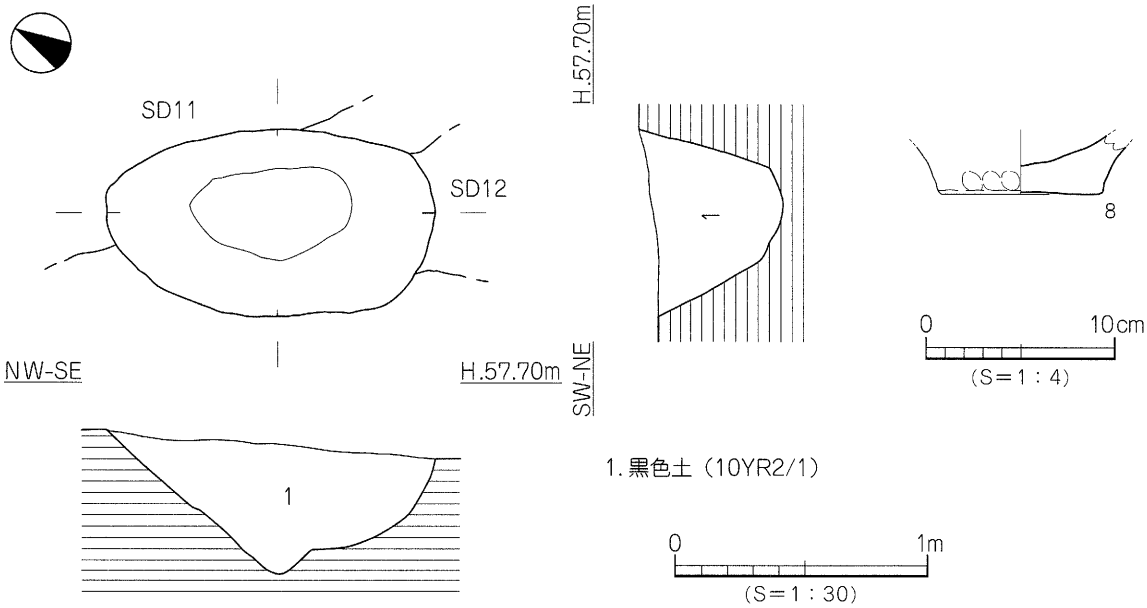
出土遺物（第９図）

８は弥生土器の壺の底部で、やや上げ底の底部付近に押え痕が残る。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期前半とする。



第８図　ＳＫ３測量図



第9図　ＳＫ５測量図･出土遺物実測図

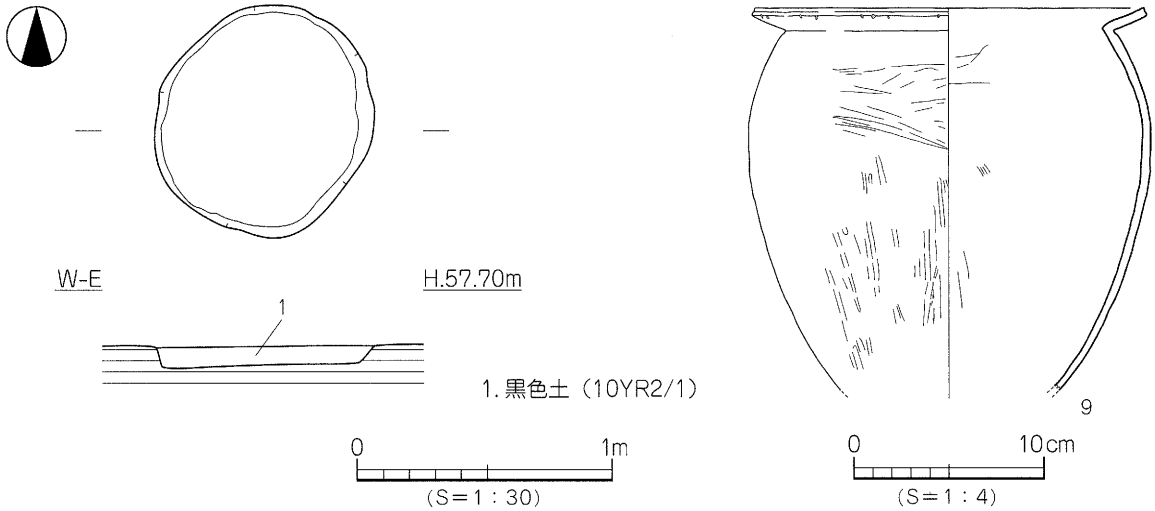
ＳＫ６（第４・10 図、図版４）

調査区北西部のＤ・５区に位置し、ＳＤ 11 の下層付近で検出した。平面形態は円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 0.98 m、短軸 0.87 m、深さ８cmを測る。埋土は黒色土の単一層で、遺物は基底面から弥生土器片が１点出土する。

出土遺物（第 10 図、図版６）

９は「く」字状の口縁部に端部はやや凹み、外面上胴部にナデ調整、下胴部にミガキ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後半とする。



第10図　ＳＫ６測量図・出土遺物実測図

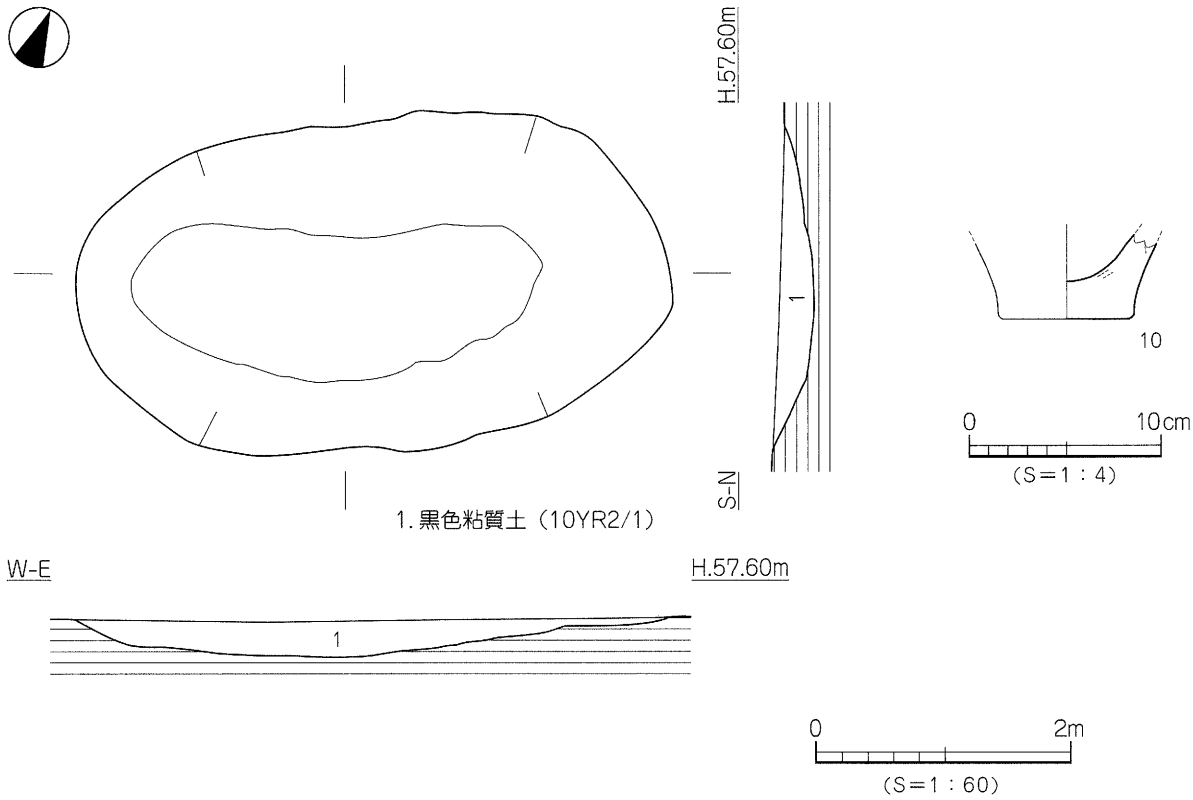
ＳＫ７（第４・11図）

調査区中央部東側のＦ・４区に位置し、ＳＤ11の床面から検出する。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸2.38ｍ、短軸1.26ｍ、深さ13㎝を測る。埋土は黒色粘質土で土質は柔らかい。遺物は基底面付近から弥生土器片が１点出土する。

出土遺物（第11図、図版６）

10は弥生土器の甕で、平底の底部付近外面にナデ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後半とする。



第11図　ＳＫ７測量図・出土遺物実測図

３）性格不明遺構

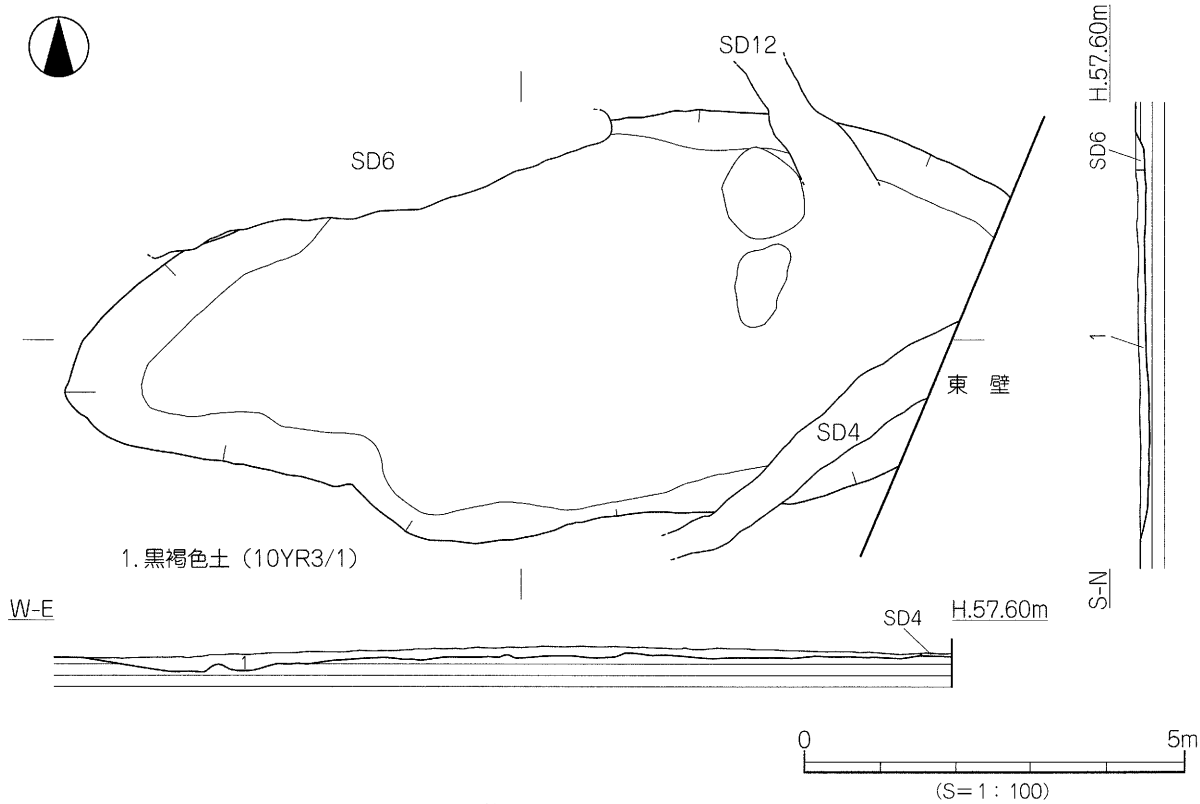
ＳＸ３（第４・12図、図版４）

調査区南東部のＤ～Ｆ・１～２区に位置し、長軸が緩傾斜面に沿い東側は調査区外に延びる。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸11.75ｍ以上、短軸5.25ｍ、深さ21㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は上位から中位にかけ弥生土器片が密集した状態で出土する。

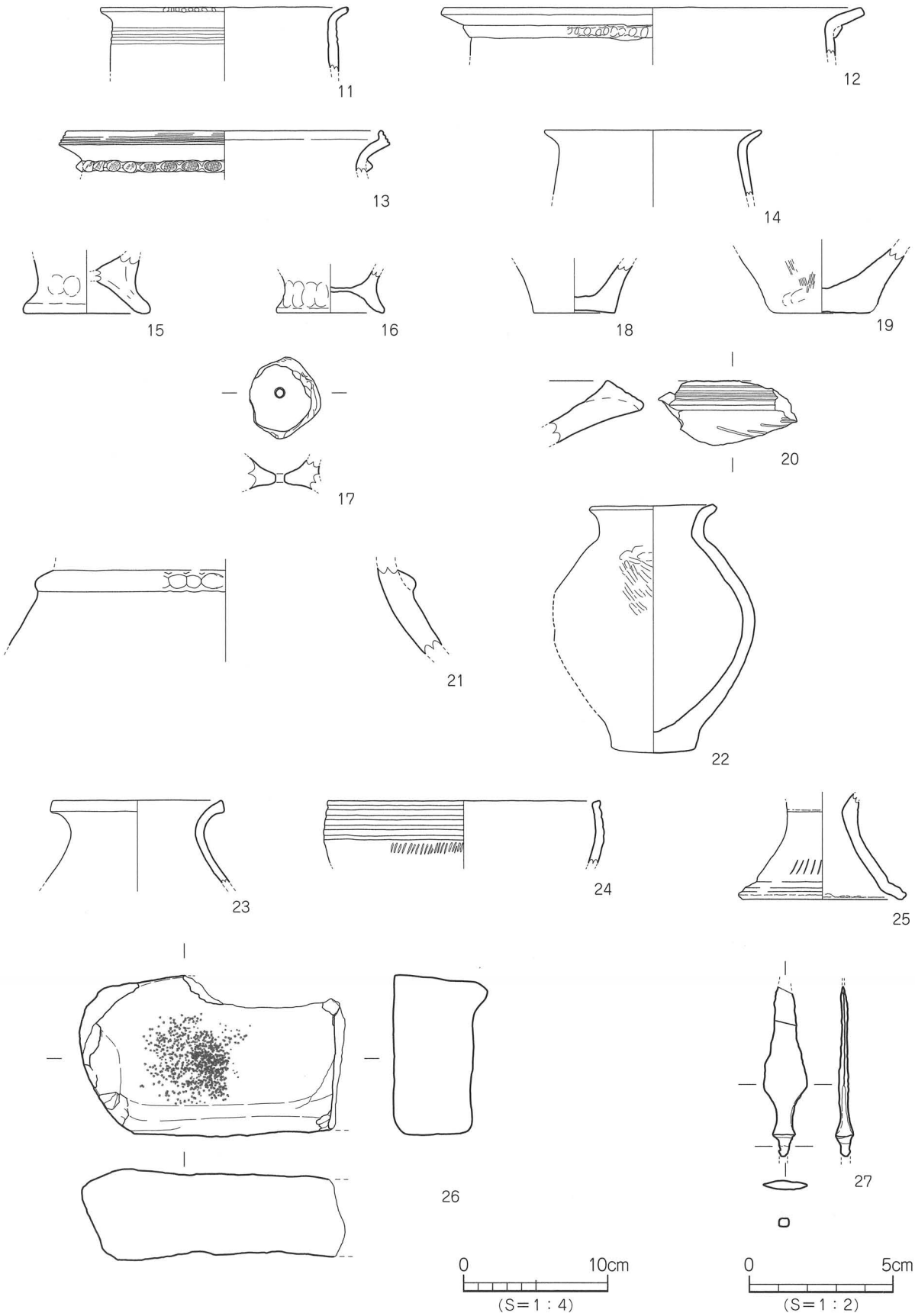
出土遺物（第13図、図版７）

11～18は甕である。11は口縁部付近に３条の沈線文、端部に刻目文、内外面にナデ調整が施される。12・13は頸部に貼り付け凸帯をもち、13は内上方に拡張された口縁部外面に３条の凹線文が施される。14は「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。15・16は上げ底でくびれをもつ底部で、17は上げ底の底部に焼成前の穿孔が施される。18・19は平底の底部で、18は内外面にナデ調整、19は内面にナデ調整、外面にハケ目調整が施される。20～23は壺である。20は口縁端部に４条の凹線文と外面にミガキ調整が施される。21は頸部に押圧文が施された貼付凸帯が巡る。22は平底の底部に口縁部は外反し端部は丸く納まる。口縁部内外面に横ナデ調整、上胴部にミガキ調整が施される。23は外反する口縁部に端部は平らな面をなす。24・25は高坏で、24は口縁部に４条の凹線文とその下に「ノ」字状文が施される。25は外反する脚部に端部は平らな面をなし、刻目文が施される。26は敲石で、上面に敲打痕が顕著に残り、砂岩製である。長さ18.2㎝、幅11.25㎝、厚み6.4㎝、重さ2,057.52ｇを測る。27は有柄式鉄鏃であり、先端部と茎部が欠損し、長さ5.9㎝、最大幅1.5㎝、厚み0.6㎝、重さ3.398ｇを測る。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後半とする。



第12図　ＳＸ３測量図



第13図　ＳＸ３出土遺物実測図

（２）古墳時代

古墳時代の遺構は、掘立柱建物２棟、溝９条、土坑３基、性格不明遺構１基を検出した。

１）掘立柱建物

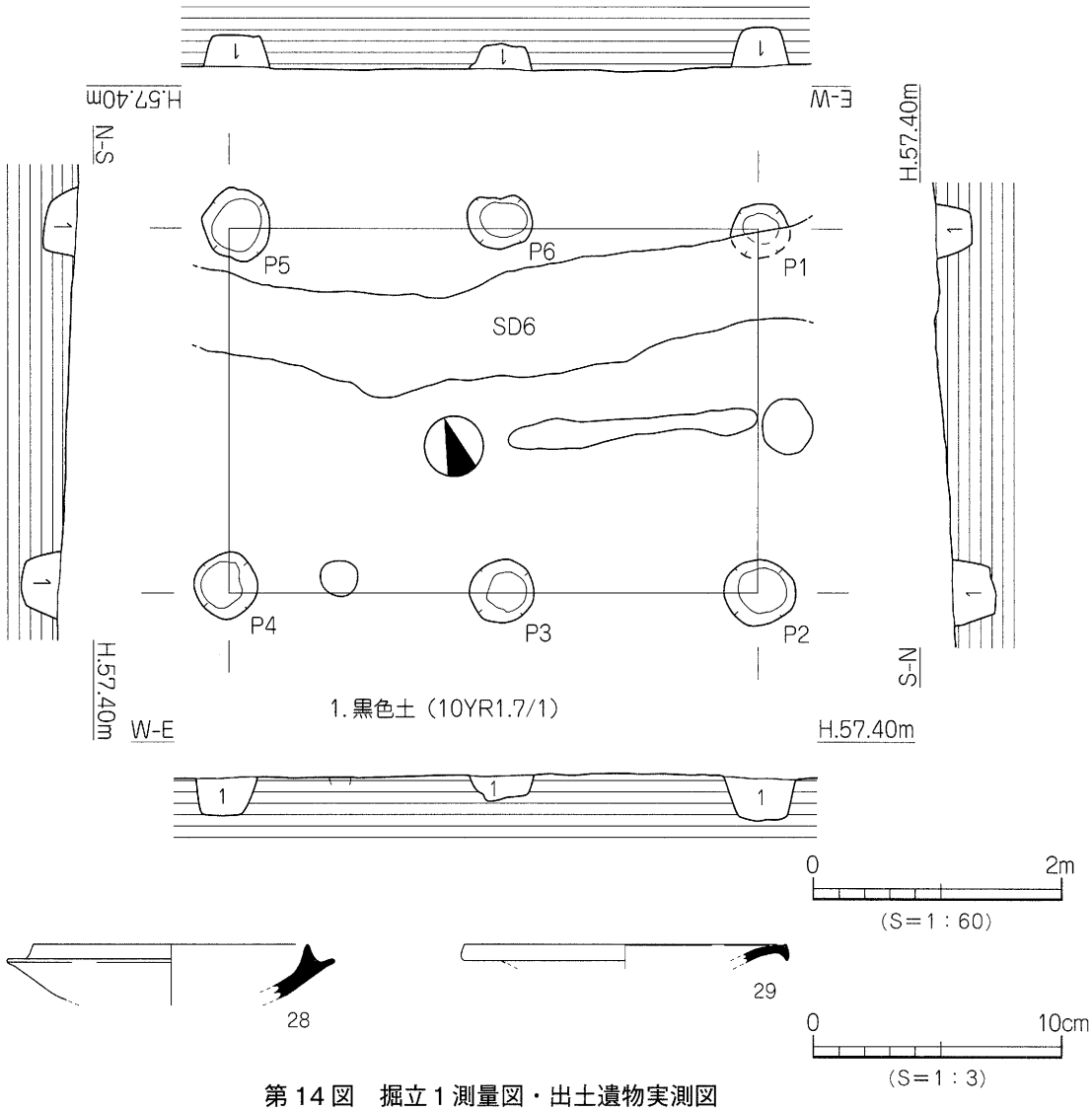
掘立１（第４・14図）

調査区南西部のＢ～Ｃ・２区に位置し、ＳＤ６に切られる。２間×１間の東西棟で、桁方向が緩傾斜面に沿い、主軸はＮ-67°-Ｗを指向する。規模は桁行4.2ｍ、柱間2.1ｍ、梁行2.8ｍ、柱間2.8ｍ、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径38～57㎝、深さ18～32㎝を測る。埋土は黒色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第14図）

28・29は須恵器である。28は坏身で、受部端が凹み立ち上がりは上方に延び丸く納まり、内外面に回転ナデ調整が施される。29は大きく外反する口縁部に端部は下方に拡張され端面は平らな面をなす。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第14図　掘立１測量図・出土遺物実測図

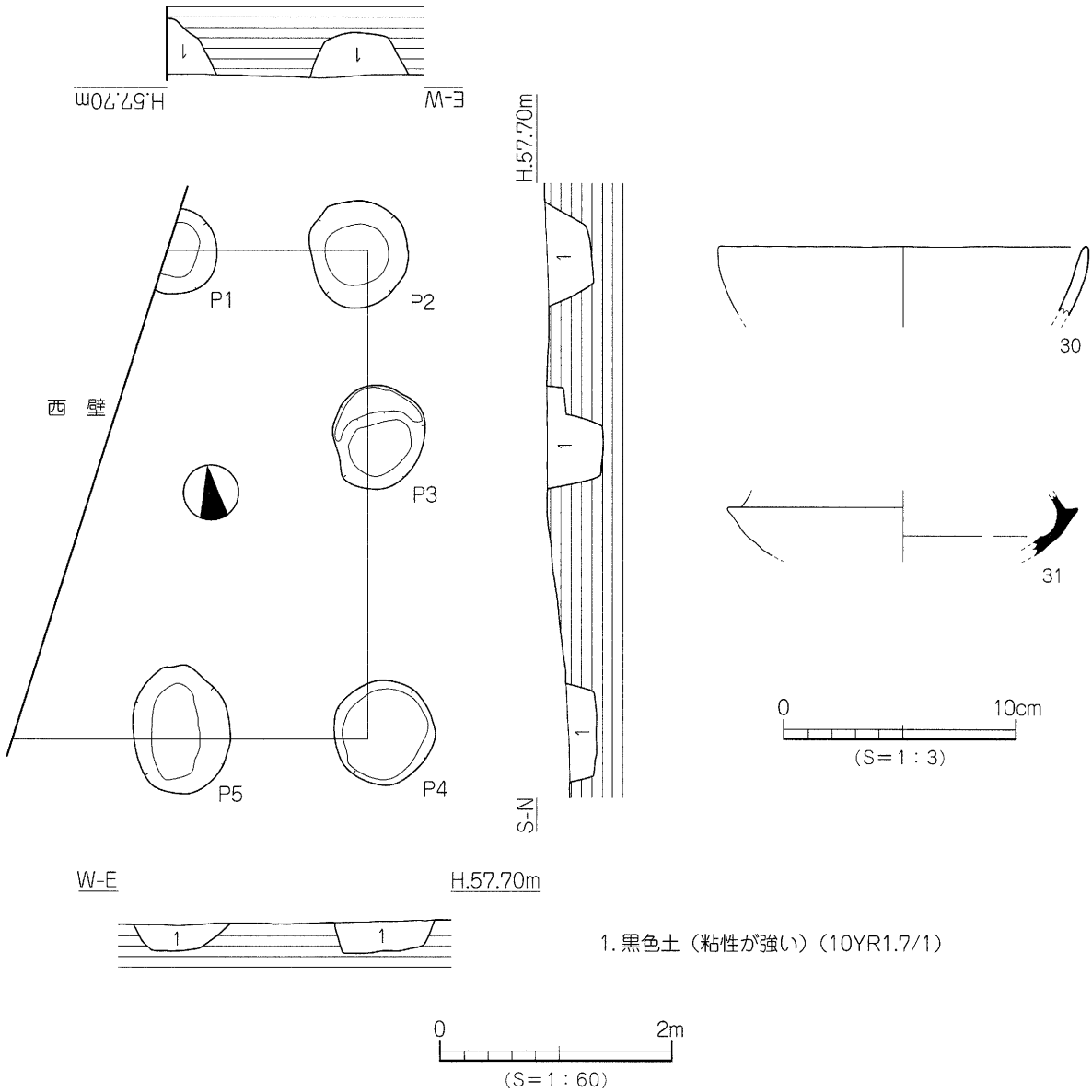
掘立２（第４・15図、図版５）

調査区北西部のＣ・５～６区に位置し、ＳＤ11を切り、西側は調査区外に延びる。２間×１間以上の東西棟で、主軸はＮ-82°-Ｗを指向する。規模は桁行3.1ｍ以上、柱間1.7ｍ、梁行4.15ｍ、柱間1.65～2.5ｍ、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径72～110㎝、深さ20～48㎝を測る。埋土は黒色土である。遺物は土師器・須恵器片が少量出土する。

出土遺物（第15図）

30は土師器の甕で、やや内湾気味の口縁部に端部は丸く納まる。31は須恵器の坏身で受部がやや外上方に延び、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第15図　掘立２測量図・出土遺物実測図

２）溝

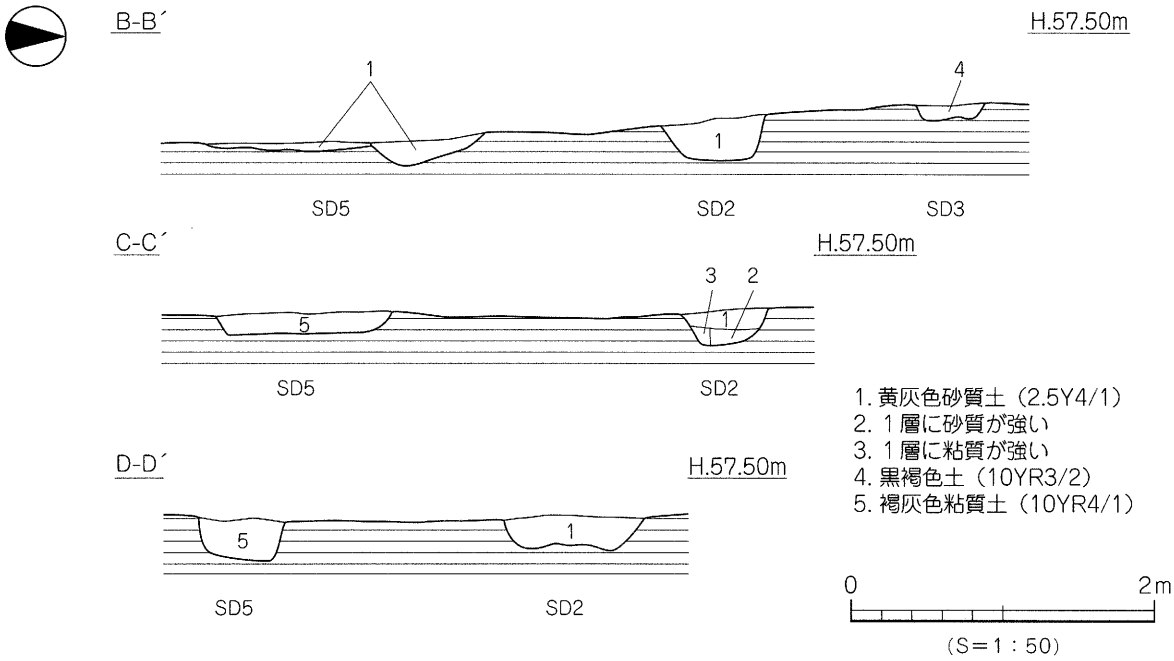
ＳＤ２（第16図）

調査区南端のＡ～Ｆ・０～１区に位置し、ＳＤ４を切り、東西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-82°-Ｗで軸が緩傾斜面に沿い東西方向を指向し、緩やかに湾曲する。規模は検出長24.2ｍ、上場幅0.45～0.93ｍ、深さ20～30㎝を測り、東から西へ３㎝の比高差をもつ。断面形態は皿状を呈する。埋土は黄灰色砂質土の単一層である。遺物は弥生土器に混じり土師器・須恵器の小片が出土する。

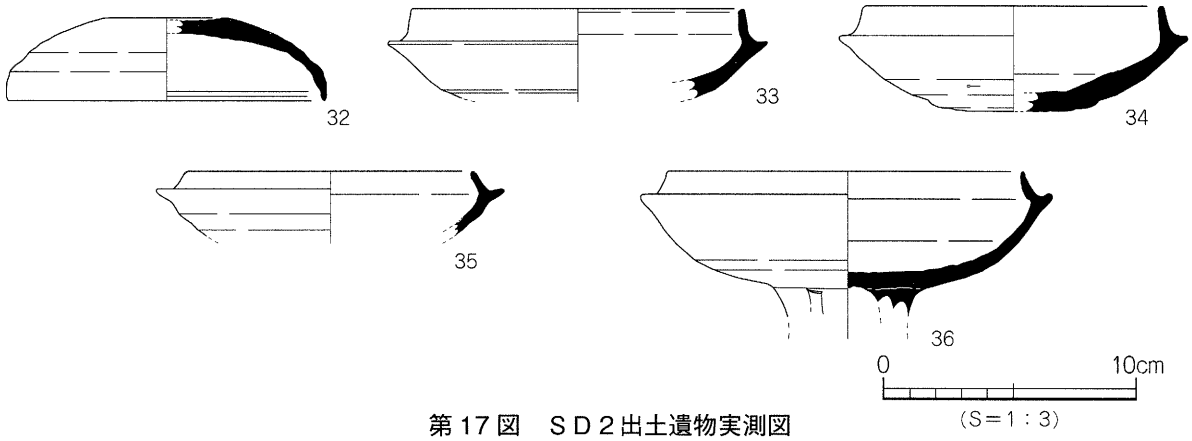
出土遺物（第17図、図版８）

32～36は須恵器である。32は坏蓋で、口縁端部に段を有し、天井部に回転ヘラケズり調整が施される。33～35は坏身で、33は立ち上がりはやや内傾し、端部は平らな面をなす。34は受部は外方に延び、立ち上がりは内傾し、端部は丸く納まる。35は受部は外上方に延び、立ち上がりは内傾し、端部は丸く納まる。36は高坏であり、受部端は凹み坏底部内面に同心円文がみられ、脚部に４方向の透かしが施される。焼成不良の軟質である。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第16図　ＳＤ２・３・５測量図



第17図　ＳＤ２出土遺物実測図

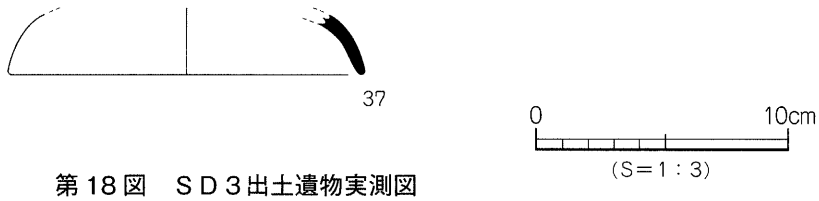
ＳＤ３（第16図）

調査区南西部のＢ～Ｃ・１区に位置する。主軸はＮ-90°-Ｗとほぼ真北と直角の東西方向を指向する。規模は検出長3.2ｍ、上場幅0.45～0.55ｍ、深さ10㎝を測り、東から西へ４㎝の比高差を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第18図）

37は坏蓋で、内湾する口縁部に端部は丸く納まる。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第18図　ＳＤ３出土遺物実測図

ＳＤ５（第16図）

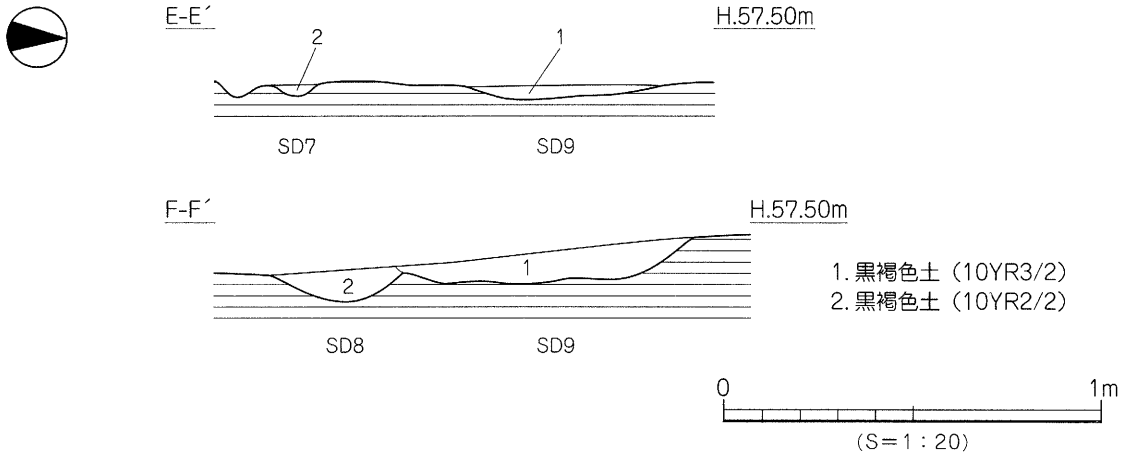
調査区南端のＡ～Ｆ・０～１区に位置し、東西端と南側の上場は調査区外に延びる。主軸はＮ-83°-Ｅで軸が緩傾斜面に沿うように東西方向を指向する。規模は検出長24.2ｍ、上場幅0.45～1.6ｍ、深さ15～25㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、東から西へ約13㎝の比高差をもつ。埋土は褐灰色粘質土の単一層となる。遺物は弥生土器片に混じり、土師器・須恵器片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから６世紀後半としか判らない。

ＳＤ７（第19図）

調査区南側のＤ・２区に位置し、ＳＤ６に切られる。主軸はＮ-90°-Ｗで東西方向を指向する。規模は検出長4.65ｍ、上場幅0.1～0.42ｍ、深さ４～５㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、東から西へ約６㎝の比高差をもつ。埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから６世紀後半としか判らない。



第19図　ＳＤ７～９測量図

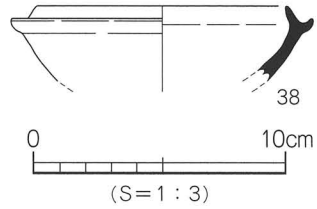
ＳＤ８（第19図）

調査区南東部のＥ～Ｆ・２区に位置し、ＳＤ９・12に切られる。主軸はＮ-86°-Ｅで東西方向を指向する。規模は検出長1.8ｍ、上場幅0.1～0.25ｍ、深さ２～10㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、東から西へ約７㎝の比高差をもつ。埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器片が僅かに出土する。

出土遺物（第20図）

38は須恵器の坏身で、受部が凹み口縁部は内傾し、端部は丸く納まる。

時期：出土した遺物の特徴から、６世紀後半とする。



第20図　ＳＤ８出土遺物実測図

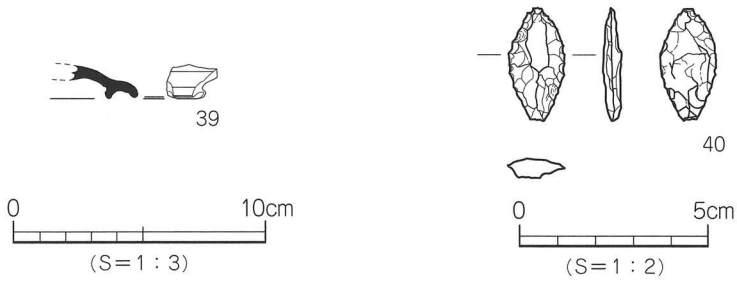
ＳＤ９（第19図）

調査区南側のＣ～Ｆ・２区に位置し、ＳＤ８を切り、ＳＤ12に切られる。主軸はＮ-2°-Ｅでやや湾曲しながら等高線に沿うように東西方向を指向する。規模は検出長10.48ｍ、上場幅0.54～0.92ｍ、深さ３～12㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、東から西へ約５㎝の比高差をもつ。埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器や須恵器片が少量と混入品の石鏃が出土する。

出土遺物（第21図、図版８）

39は須恵器の坏蓋で、かえり部が接地する。40は混入品の打製石鏃の完存品であり、サヌカイト製の柳葉型で、長さ2.98㎝、幅1.5㎝、厚み0.5㎝、重さ2.247ｇを測る。

時期：出土した須恵器の特徴から、７世紀中葉とする。

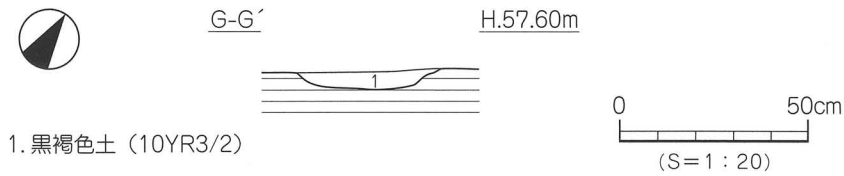


第21図　ＳＤ９出土遺物実測図

ＳＤ10（第22図）

調査区南側のＥ・３区に位置し、北端は調査区外に延びる。主軸はＮ-33°-Ｗで南東から北西方向を指向する。規模は検出長2.27ｍ、上場幅0.18～0.22ｍ、深さ４～９㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、比高差はない。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は須恵器片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから６世紀後半としか判らない。

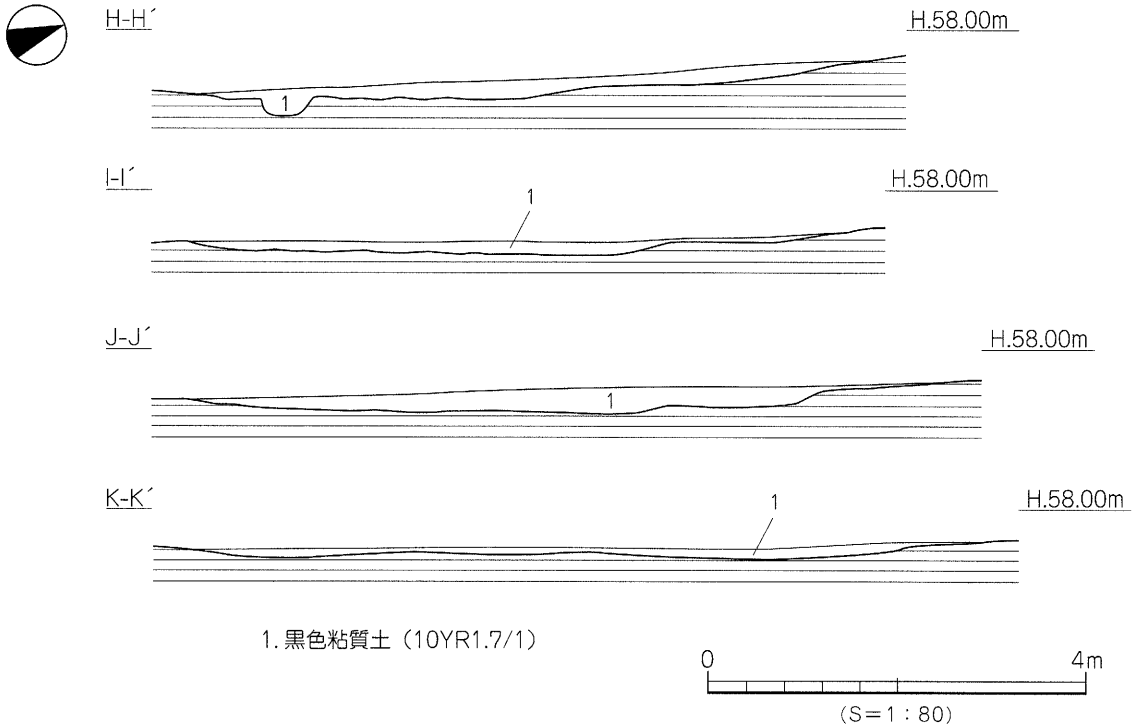


第22図　ＳＤ10測量図

ＳＤ１１（第23図）

調査区中央部のＢ～Ｇ・３～６区に位置し、掘立２、ＳＫ２・４・５に切られ、東西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-66°-Ｗを指向する。規模は検出長24.42ｍ、上場幅6.7～9.85ｍ、深さ８～18㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、東から西へ約43㎝の比高差をもち、緩やかな形状から溝状の凹地と考えられる。埋土は黒色粘質土で、土質が柔らかい。遺物は上面から上位付近で土師器・須恵器片が僅かに出土しただけで、これらの遺物は流入品が考えられる。

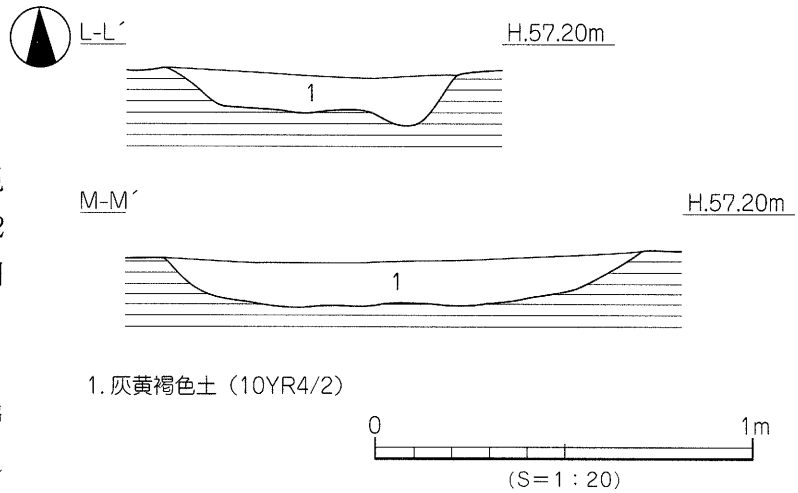
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、遺構の切り合いから６世紀後半以前としか判らない。



第23図　ＳＤ11測量図

ＳＤ１４（第24図）

調査区南東隅部のＥ～Ｆ・０～１区に位置し、ＳＤ２・４・５に切られる。主軸はＮ-16°-Ｅで南北方向を指向する。規模は検出長3.85ｍ、上場幅0.52～1.32ｍ、深さ９～14㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、西から東へ約10㎝の比高差をもつ。埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は弥生土器に混じり土師器・須恵器片が少量出土する。

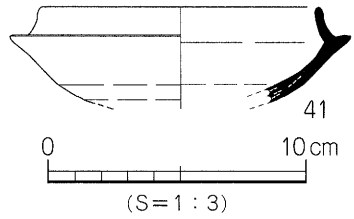


第24図　ＳＤ14測量図

出土遺物（第25図）

41は須恵器の坏身である。受部端がやや凹み口縁端部は丸く納まり、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した遺物の特徴から、６世紀後半とする。



第25図　ＳＤ14出土遺物実測図

３）土坑

ＳＫ１（第４・26図）

調査区南西部のＣ・３区に位置する。平面形態は不整長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなし、北西部に浅い円形状の凹みをもつ。規模は長軸1.75ｍ、短軸0.74ｍ、深さ14cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単一層で、遺物の出土はない。

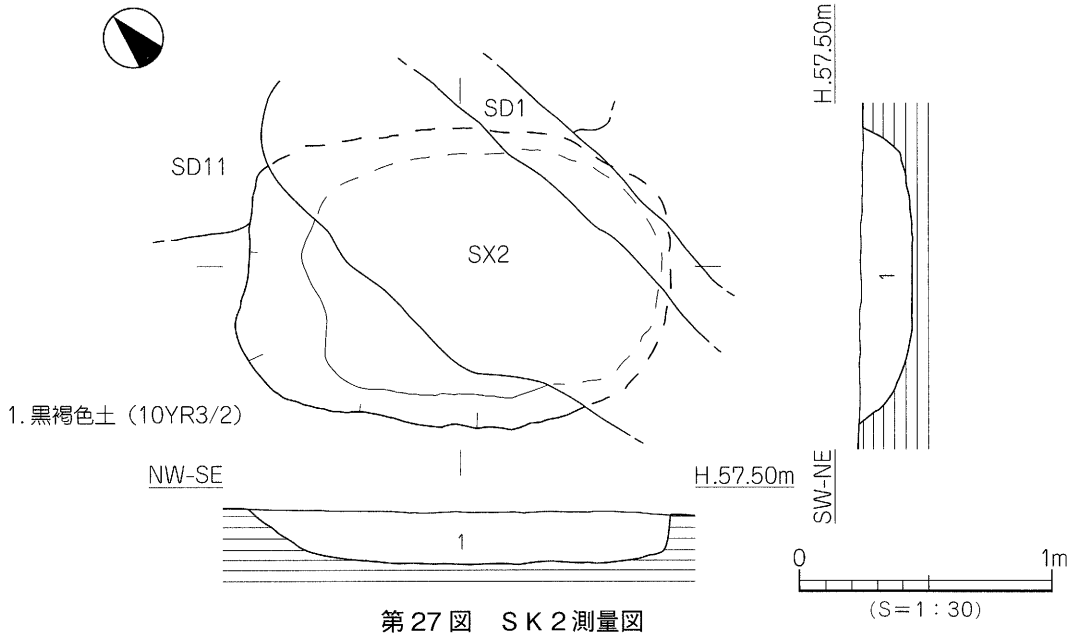
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ14と同一なことから６世紀後半としか判らない。

第26図　ＳＫ１測量図

ＳＫ２（第４・27図）

調査区中央部西端のＣ・４～５区に位置し、ＳＤ１・ＳＸ２に切られ、ＳＤ11を切る。平面形態は隅丸長方形、断面形態はレンズ状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.68ｍ以上、短軸1.18ｍ以上、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから６世紀後半としか判らない。

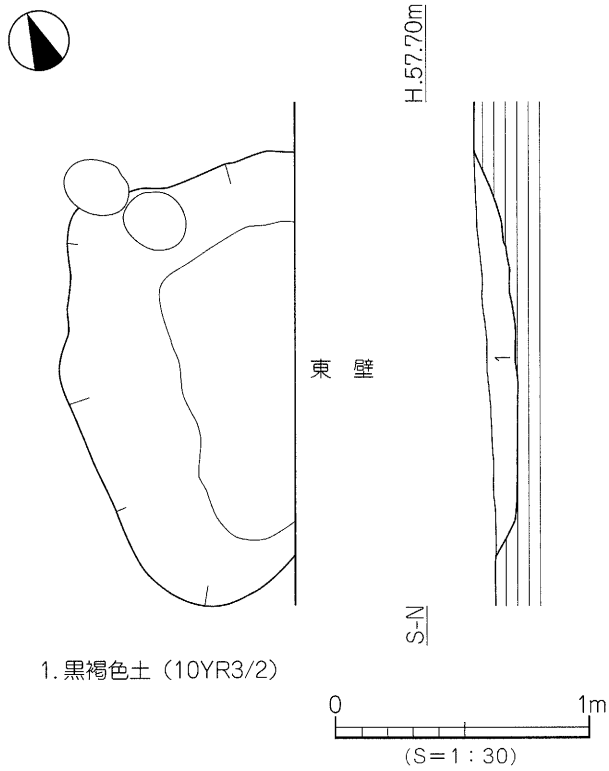


第27図　ＳＫ２測量図

ＳＫ４（第４・28図）

調査区南東部のＦ～Ｇ・２～３区に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸1.74ｍ、短軸0.92ｍ以上、深さ12㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、古墳時代としか判らない。



第28図　ＳＫ４測量図

４）性格不明遺構

ＳＸ４（第４・29図）

調査区北西部のＤ・７区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸1.86ｍ、短軸0.68ｍ、深さ24㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から古墳時代としか判らない。

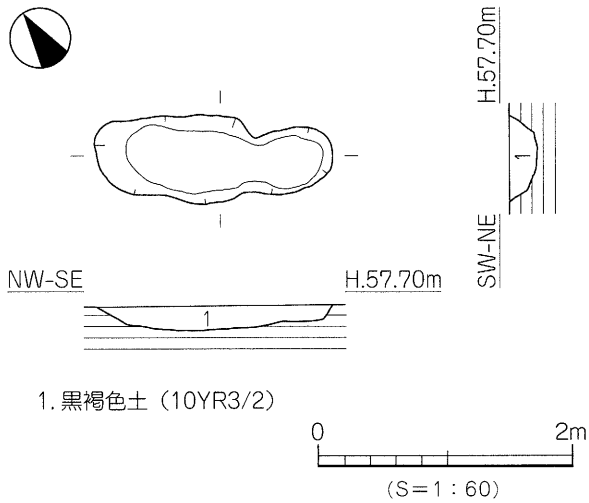
（３）古代

古代の遺構は、溝２条を検出した。

溝

ＳＤ12（第30図）

調査区中央部東側のＥ～Ｆ・２～３区に位置し、ＳＤ９を切り、ＳＫ５に切られる。主軸はＮ-34°-Ｗで南東から北西方向を指向する。規模は検出長5.44ｍ、上場幅0.51～1.28ｍ、深さ15～24㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、北西から南東へ約13㎝の比高差をもつ。埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は弥生土器片に混じり土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

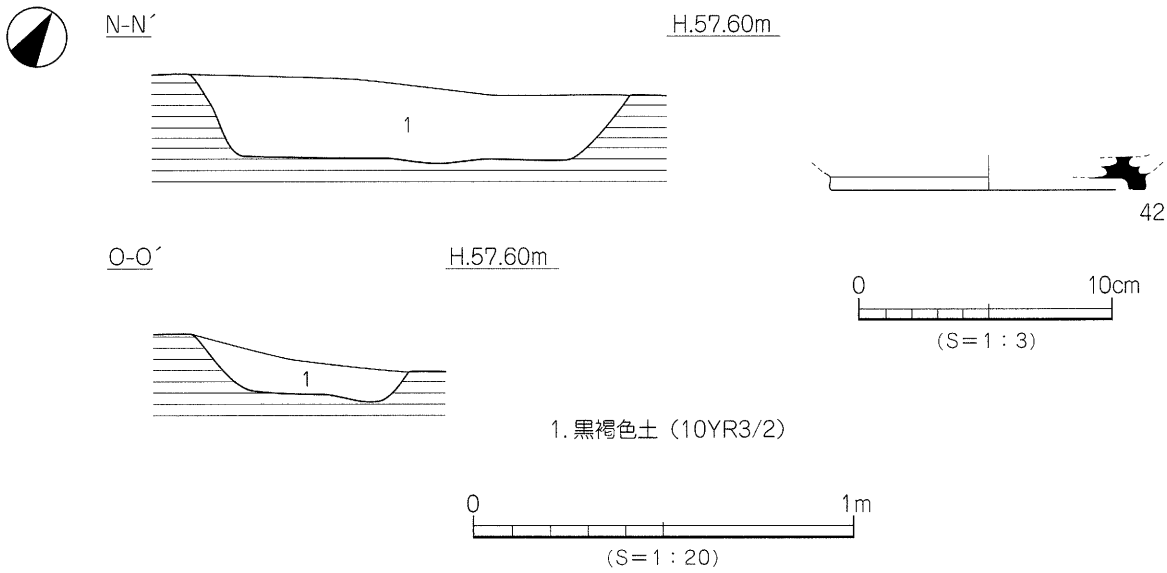


第29図　ＳＸ４測量図

出土遺物（第30図）

42は須恵器の坏底部であり、断面四角形の高台をもち、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、８世紀後半とする。



第 30 図　ＳＤ12 測量図・出土遺物実測図

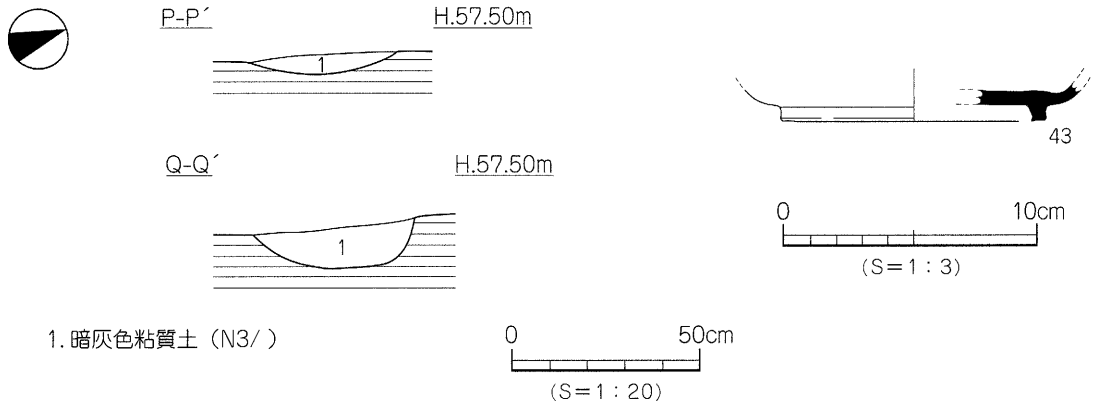
ＳＤ 13（第 31 図）

調査区南東部のＦ～Ｇ・２区に位置し、東端は調査区外に延びる。主軸はＮ -71°-Ｗとほぼ東西方向を指向する。規模は検出長 1.93 m、上場幅 0.38 ～ 0.42 m、深さ６～ 14 cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、西から東へ約 10 cmの比高差をもつ。埋土は暗灰色粘質土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器片が僅かに出土する。

出土遺物（第 31 図）

43 は須恵器の坏底部で、断面四角形の高台をもち、内外面に回転ナデ調整が施され、外面に施釉がみられる。

時期：出土した須恵器の特徴から、８世紀前半とする。



第 31 図　ＳＤ13 測量図・出土遺物実測図

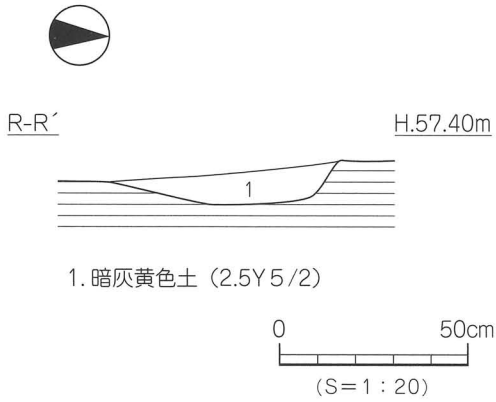
（4）中世

中世の遺構は、溝１条を検出した。

溝

ＳＤ６（第32図）

調査区南側のＢ～Ｅ・２～３区に位置し、掘立１・ＳＤ７を切り、西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-80°-Ｗで、やや湾曲しながら等高線に沿うように東西方向を指向する。規模は検出長19.3ｍ、上場幅0.4～0.92ｍ、深さ１～９cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、東から西へ約２cmの比高差をもつ。埋土は暗灰黄色土の単一層となる。遺物は弥生土器・須恵器片に混じり、土師器の椀・皿が少量出土する。

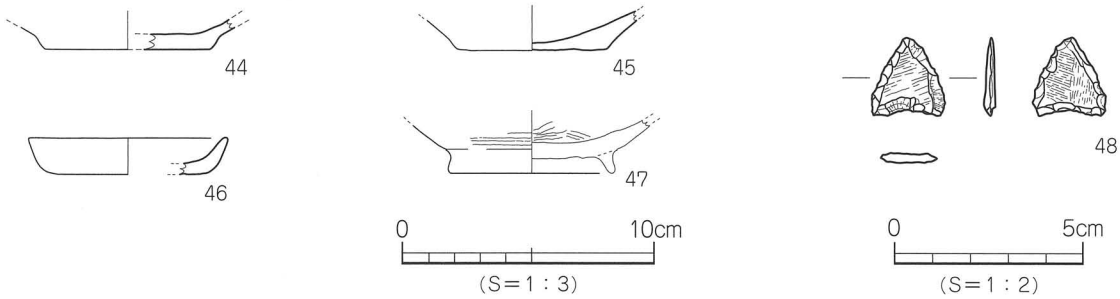


第32図　ＳＤ６測量図

出土遺物（第33図、図版８）

44・45は土師器の坏で、44は底部に回転糸切り痕が残る。46は土師器の皿で、口縁端部が丸く納まる。47は土師器の椀で、内外面にミガキ調整、底部外面にナデ調整が施される。48は混入品の打製石鏃である。凹基式の完存品でサヌカイト製で、長さ2.05cm、幅1.95cm、厚み0.3cm、重さ1.158gを測る。

時期：出土した土師器の特徴から、12世紀代とする。



第33図　ＳＤ６出土遺物実測図

（5）近世以降

近世以降の遺構は溝１条、性格不明遺構２基を検出した。

1）溝

ＳＤ１（第34図、図版８）

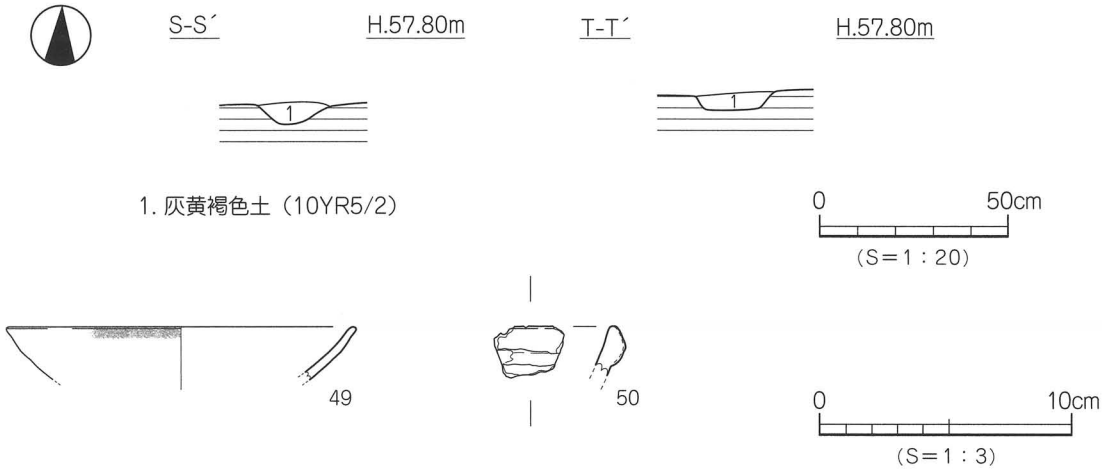
調査区西側のＣ・１～６区に位置し、掘立２・ＳＫ１・ＳＤ６・11・ＳＸ２を切り、南北端は調査区外に延びる。主軸はＮ-3°-Ｗとほぼ真北を指向し、直線的に延びる。規模は検出長25.5ｍ、上場幅0.26～0.33ｍ、深さ５～11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、南から北へ約７cmの比高差をもつ。埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片に混じり、陶器の小片が２点出土する。

出土遺物（第34図）

49・50は陶器の碗である。49は内湾気味の口縁部に端部がやや外反し、内外面が施釉される。

50は口縁端部が玉縁状となる。

時期：出土した陶器や土師器は小片であり、埋土から近世としか判らない。



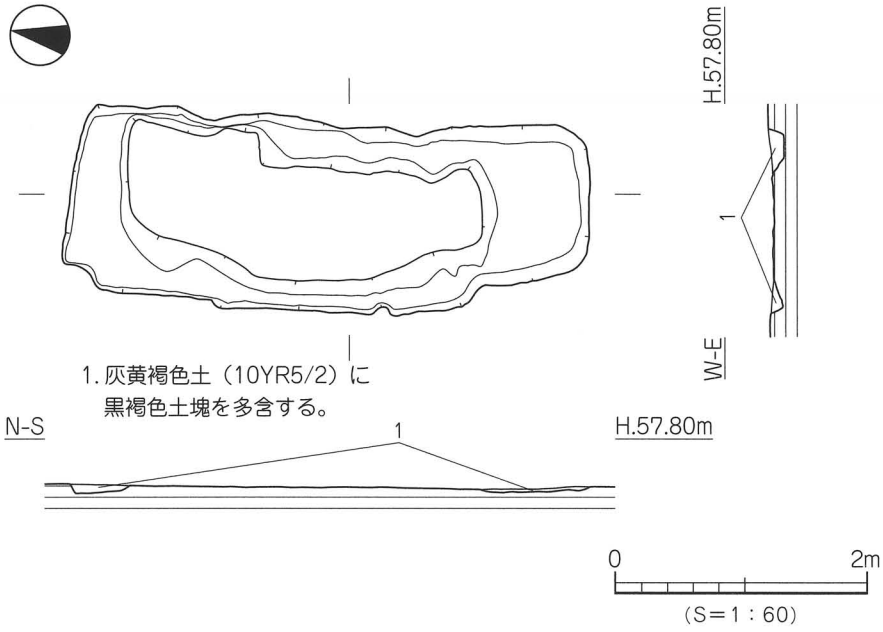
第34図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図

２）性格不明遺構

ＳＸ１（第４・35図）

調査区中央部西側のＣ～Ｄ・４～５区に位置し、ＳＤ11を切る。平面形態は長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面はほぼ平らな面をなす。規模は長軸4.11ｍ、短軸1.47ｍ、深さ10㎝を測る。埋土は灰黄褐色土に黒褐色土の塊を多含する。遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器や土師器・須恵器の小片に混じり平瓦が１点出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ１と同一であることから近世とする。



第35図　ＳＸ１測量図

ＳＸ２（第４・36図）

調査区中央部西側のＣ・４～５区に位置し、ＳＤ11を切り、ＳＤ１に切られる。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は西側が下がる。規模は長軸3.29ｍ、短軸1.57ｍ、深さ12㎝を測る。埋土は灰黄褐色土に黒褐色土の塊を多含し、基底面は西側に向けて緩傾斜をもつ。遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器や土師器・須恵器の小片が少量出土する。

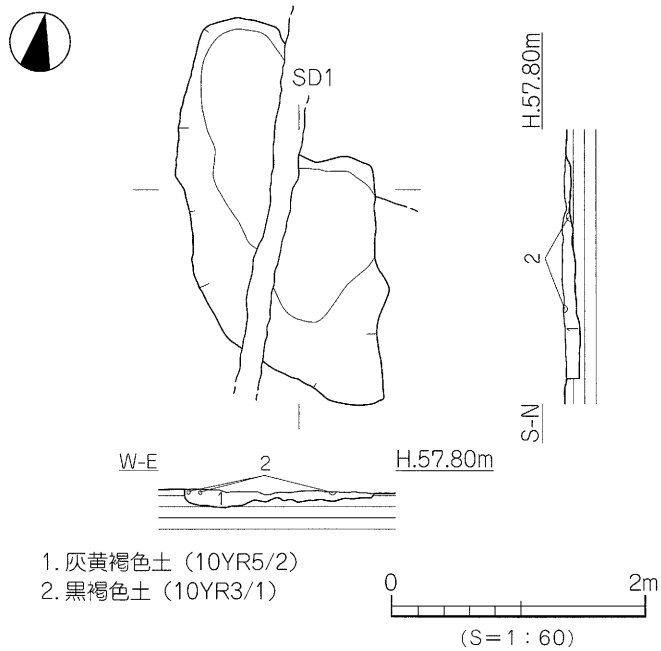
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ１と同一であることから近世頃とする。

（６）その他の遺構

１）柱穴

調査区北東部を除く全域から27基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径18～105㎝、深さ４～35㎝を測る。埋土は黒褐色土から暗灰褐色土である。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土する。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代から古代までの間とする。



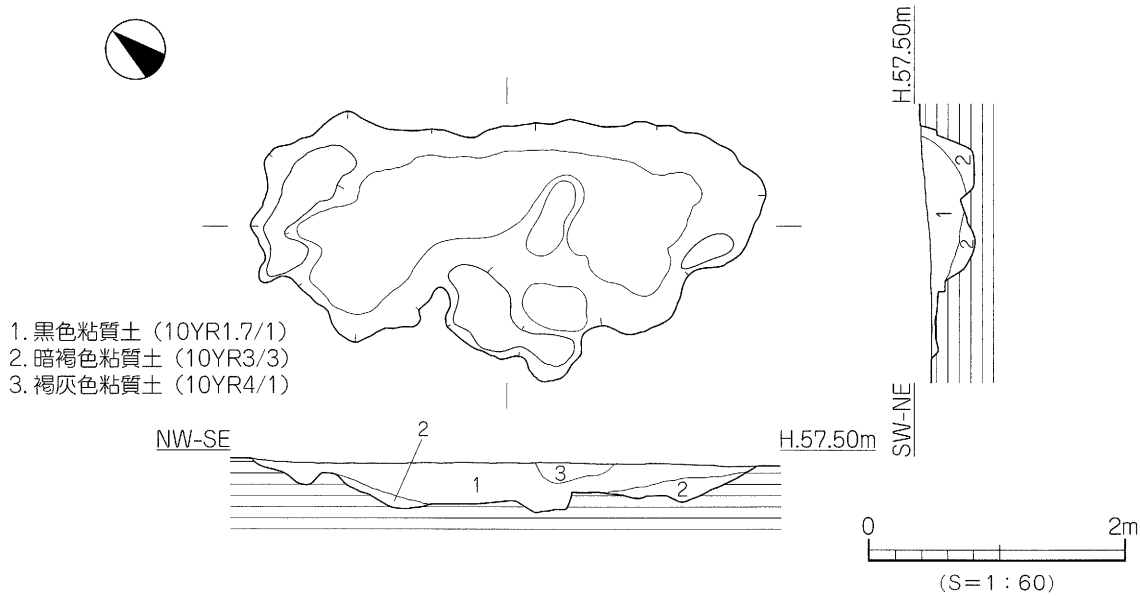
第36図　ＳＸ２測量図

２）倒木痕

倒木１（第４・37図）

調査区南側のＤ・２～３区に位置し、ＳＤ11に切られる。平面形態は不整長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面には凹凸をもつ。規模は長軸4.05ｍ、短軸1.23ｍ、深さ40㎝を測る。埋土は上層から周囲にかけて黒色粘質土・暗褐色粘質土・褐灰色粘質土となる。遺物は上面から混入品と考えられる弥生土器や土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ11に類似していることから６世紀後半以前としか判らない。

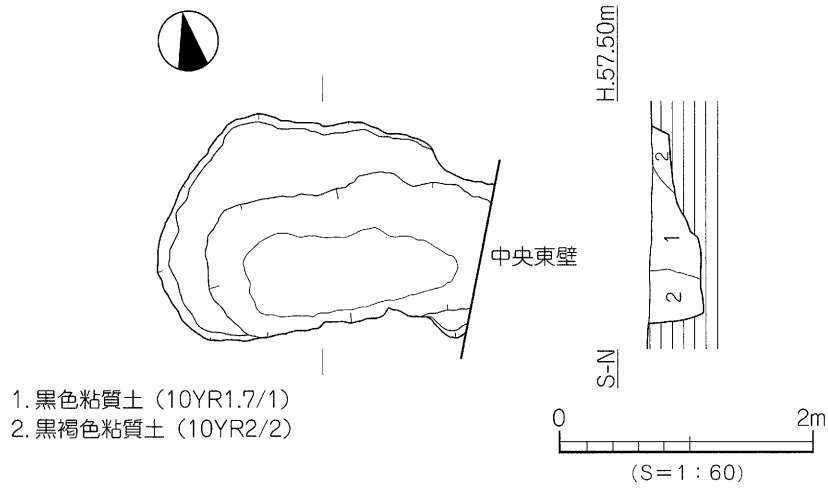


第37図　倒木１測量図

倒木２（第４・38図）

調査区中央部のＤ・３～４区に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形態は不整長方形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸2.6ｍ以上、短軸1.6ｍ、深さ43㎝を測る。埋土は上層が黒色粘質土で、周囲は黒褐色粘質土となる。遺物は上面から混入品と考えられる弥生土器や土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ11に類似していることから６世紀後半以前としか判らない。



第38図　倒木２測量図

４．小　結

今回の調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を検出した。遺構は主に弥生時代の土坑・性格不明遺構や古墳時代の掘立柱建物・溝・土坑、中近世の溝や性格不明遺構などである。

層　位

本調査地は、微高地が南側に下がる緩傾斜地上であり、最終的な遺構検出面である第Ⅴ層は近現代の農耕により地形の高い北側は削平を受けており遺構の密度は低い。第Ⅱ層は中世以降に第Ⅴ層の傾斜面を水平にするために整地したことが堆積状況から窺える。また、深掘トレンチにて第Ⅴ層以下は粘土層が約１ｍ堆積しており、その下には水分を多く含んだ砂層の堆積を確認した。

弥生時代

ＳＤ12・13は人為的に掘られた溝であり、ＳＸ３は形状から自然の凹みが考えられ、上位から弥生土器片が密集した状態で出土した。これらの土器は凹地に人為的に廃棄されたものと推測され、出土した土器は中期から後期にかけてのもので、その時期に継続して調査地周辺に集落が展開することを示す資料を得ることができた。

古墳時代

掘立建物や溝・土坑を検出した。ＳＤ２とＳＤ５は平行な位置で東西に延びており、その北側の微高地上に掘立１と掘立２を検出した。これらの溝は集落に伴う施設と考えられ、最も低い位置に設けられた排水施設としての用途が考えられる。地形から察すると調査地の北側に広がる微高地上に展開する集落の南端の可能性をもつ。ＳＤ11は遺構の形状や土層の堆積状況などから、人為的な溝というよりは自然地形の凹みが溝状に延びることが考えられる。

古　代

調査区南東部からＳＤ 12・13 を検出しており、調査地の東側に古代の集落の存在が窺える。

中　世

ＳＤ６は緩傾斜面の等高線に沿うように東西に延びる人為的な溝で、埋土中からあまりローリングを受けていない椀や皿などの土器が出土したことから、周辺に中世集落の存在することが窺える。

近世以降

ＳＤ１は南北方向に一直線に延びる小溝で、残存する形状から暗渠状施設の基底面付近と推測する。ＳＸ１やＳＸ２は、埋土がＳＤ１と同一ではあるが、ＳＤ 11 埋土の黒色粘質土の塊が混入しており、短期間に埋没したことが窺える。

今回の調査では、弥生時代中期から近世にかけての集落を形成する遺構や遺物の資料が得られた。調査地北側から平井遺跡８次調査にかけては、農耕や工場造成のため旧地形の削平や撹乱により遺構は未検出であったが、地形から判断すると集落の中心部であった可能性をもつことがわかった。

【参考文献】

豊田達雄編　1982　『一般国道 11 号線松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1996　「小野川流域の遺跡」松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松佳久　1996　「下苅谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知編　2000　『古市遺跡』『下苅谷遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

水本完児　2004　「平井遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本健一・山之内志郎　2005　『古市遺跡２次調査』『五楽遺跡１次・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物　－凡例－

（1）以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）　：復元推定値

形態・施文欄　：土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、底→底部

胎土・焼成欄　：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母、チャ→チャート、細→細粒（0.9 ㎜以下）

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：㎜）

焼成の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表４　掘立柱建物一覧

掘立	規模（間）	方向	桁行		梁行		方位	床面積（㎡）	時期	備考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）				
1	2×1	東西	4.2	2.1	2.8	2.8	N-67°-W	11.76	6C 後半	SD6 に切られる。
2	2×1 以上	東西	3.1 以上	1.7	4.15	1.65 ～ 2.5	N-82°-W	12.86 以上	6C 後半	SD11 を切る。

表５　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C・1～6	皿状	25.5 × 0.26 ～ 0.33 × 0.05 ～ 0.11	真北	灰黄褐色土	弥生・土師器 須恵器・陶器	中近世	SD2 を切り、南北端は調査区外に延びる。
2	A～F・0～1	皿状	24.2 × 0.45 ～ 0.93 × 0.2 ～ 0.3	東西	黄灰色砂質土	弥生・土師器 須恵器	6C 後半	SD4 を切り、東西端は調査区外に延びる。
3	B～C・1	レンズ状	3.2 × 0.45 ～ 0.55 × 0.10	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	6C 後半	
4	E～F・1～2	逆台形状	6.1 × 0.35 ～ 0.7 × 0.08 ～ 0.12	北東～南西	褐灰色土	弥生	弥生	SX3 を切り、SD2 に切られる。
5	A～F・0～1	皿状	24.2 × 0.45 ～ 1.6 × 0.15 ～ 0.25	東西	褐灰色粘質土	弥生・土師器 須恵器	古墳	東西端と南側の上場は調査区外に延びる。
6	B～E・2～3	レンズ状	19.3 × 0.4 ～ 0.92 × 0.01 ～ 0.09	東西	暗灰黄色土	弥生・土師器 須恵器	12C	SD7 を切り、西端は調査区外に延びる。
7	D・2	レンズ状	4.65 × 0.1 ～ 0.42 × 0.04 ～ 0.05	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SD6 に切られる。
8	E～F・2	レンズ状	1.8 × 0.1 ～ 0.25 × 0.02 ～ 0.1	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	6C 後半	
9	C～F・2	レンズ状	10.48 × 0.54 ～ 0.92 × 0.03 ～ 0.12	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	7C 中葉	SD12 に切られる。
10	E・3	レンズ状	2.27 × 0.18 ～ 0.22 × 0.04 ～ 0.09	南東～北西	黒褐色土	須恵器	古墳	北端は調査区外に延びる。
11	B～G・3～6	レンズ状	24.42 × 6.7 ～ 9.85 × 0.08 ～ 0.18	東西	黒色粘質土	弥生・土師器 須恵器	7C 中葉	掘立 2、SK2・4・5 に切られる。
12	E～F・2～3	レンズ状	5.44 × 0.51 ～ 1.28 × 0.15 ～ 0.24	南東～北西	黒褐色土	弥生・土師器 須恵器	8C 後半	SK5 に切られ、SD9 を切る。
13	F～G・2	レンズ状	1.93 × 0.38 ～ 0.42 × 0.06 ～ 0.14	東西	暗灰色粘質土	土師器 須恵器	8C 前半	東端は調査区外に延びる。
14	E～F・0～1	レンズ状	3.85 × 0.52 ～ 1.32 × 0.09 ～ 0.14	南北	灰黄褐色土	弥生・土師器 須恵器	6C 後半	SD2・4 に切られる。

表6　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時期	備　考
1	C・3	不整長方形	逆台形状	1.75 × 0.74 × 0.14	1.06	灰黄褐色土		古墳	
2	C・4～5	隅丸長方形	レンズ状	1.68 以上× 1.18 以上× 0.22	1.73 以上	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SD11 を切る。
3	D・6	不整楕円形	逆台形状	0.78 × 0.45 × 0.14	0.38	黒褐色土	弥生	弥生	
4	F～G・2～3	楕円形	レンズ状	1.74 × 0.92 以上× 0.12	1.34 以上	黒褐色土	土師器	古墳	東端は調査区外に延びる。
5	E・3	楕円形	逆台形状	2.62 × 1.48 × 1.16	3.14	黒色土	弥生	弥生	SD11・12 を切る。
6	D・5	円形	皿状	0.98 × 0.87 × 0.08	0.64	黒色土	土師器 須恵器	弥生	SD11 を切る。
7	F・4	楕円形	レンズ状	2.38 × 1.26 × 0.13	2.54	黒色粘質土	弥生	弥生	SD11 の床面から検出する。

表7　性格不明遺構一覧

(SX)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時期	備　考
1	C～D・4～5	長方形	皿状	4.11 × 1.47 × 0.1	5.74	灰黄褐色土 黒褐色土	弥生・土師器 須恵器	中近世	SD11 を切る。
2	C・4～5	不整楕円形	皿状	3.29 × 1.57 × 0.12	3.44	灰黄褐色土 黒褐色土	弥生・土師器 須恵器	中近世	SD1 に切られる。
3	D～F・1～2	不整楕円形	レンズ状	11.75 以上× 5.25 × 0.21	50.01 以上	黒褐色土	弥生	弥生	東端は調査区外に延びる。
4	D・7	楕円形	レンズ状	1.86 × 0.68 × 0.24	1.02	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	

表8　SD4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (17.4) 残高　2.65	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1)・長(1～2) 砂 ○		6
2	甕	底径　(6.6) 残高　6.0	上げ底で底部に括れをもつ。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	長(1～2) 砂 ○		
3	甕	底径　6.2 残高　4.8	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ナデ	マメツ	灰白色・橙色・黒褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金・チャ ○		6
4	甕	底径　6.4 残高　3.1	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	黒色 暗灰色	石・長(1～2) ○		
5	壺	底径　7.2 残高　3.4	厚みをもつ平底の底部。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰白色	石・長(細～3) 金 ○		6
6	壺	底径　(6.8) 残高　4.3	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	にぶい橙色・黒色 黒色	石・長(細～3) ○		
7	高坏	口径 (16.1) 残高　4.2	「く」字状の口縁部の端部外面に3条の凹線文が施される。	マメツ	ナデ マメツ	灰白色・黒渇色 橙色	石・長(1～2) ○		6

表9　SK5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	壺	底径　8.6 残高　3.1	平底の底部で、底部付近に押さえ痕が残る。	ナデ	マメツ	橙色 灰白色	長(1～3) 砂 ○		

表 10　SK6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
9	甕	口径 (20.4) 残高　20.3	「く」字状の口縁部に端部は凹む。	㊐ヨコナデ ㊀ナデ (工具) ヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊀マメツ ハケ	橙色・浅黄橙色 橙色	石 (1 ～ 2)・長 (1 ～ 4) ○		6

表 11　SK7 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
10	壺	底径　7.0 残高　4.5	平底の底部から外反気味に立ち上がる。	指ナデ マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	長 (1 ～ 3) 砂 ○		6

表 12　SX3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
11	甕	口径　(17.0) 残高　4.5	口縁部付近に３条の沈線文、端部に刻目文が施される。	ナデ	ナデ マメツ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石 (1 ～ 3)・長 (2 ～ 3) ○		
12	甕	口径　(28.8) 残高　3.3	頸部に貼付凸帯を持つ。	マメツ	マメツ	橙色 褐灰色	石・長 (細～ 1) ○		6
13	壺	口径　(21.8) 残高　2.9	内上方に拡張された口縁部外面に３条の凹線文が施され、頸部に貼付凸帯を持つ。	ナデ マメツ	ナデ マメツ	橙色 褐灰色	石・長 (1 ～ 3) 砂 ○		
14	甕	口径　(14.8) 残高　4.5	緩やかな「く」字状の口縁部。	マメツ ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長 (1 ～ 1.5) ○		
15	甕	底径　(8.8) 残高　4.0	上げ底でくびれ部におさえ痕が残る。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 暗灰黄色	石・長 (1 ～ 2) ○		6
16	甕	底径　7.4 残高　2.9	上げ底でくびれ部におさえ痕が残る。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 黒色	長 (1) 砂 ○		6
17	甕	残高　2.0	底部に焼成前の穿孔が施される。	ナデ 剥離	マメツ	にぶい褐色 黒褐色	石 (1 ～ 5)・長 (1 ～ 2) ○		7
18	甕	底径　5.6 残高　3.3	平底の底部。	ナデ	ナデ (工具)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) 金 ◎		
19	甕	底径　(6.9) 残高　4.5	平底の底部。	マメツ (ヨコナデ・ハケ)	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1 ～ 3) 多 ○	黒斑	
20	壺	残高　4.35	口縁端部に４条の凹線文が施される。	ナデ ミガキ	マメツ	にぶい黄橙色・灰色 オリーブ黒色	石 (1 ～ 5)・長 (1 ～ 3) チャ ○		
21	壺	残高　6.0	頸部に押圧文が施された貼付凸帯が巡る。	マメツ 剥離	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	長 (1 ～ 4) 砂 ○		
22	壺	口径　8.3 残高　17.2 底径　5.8	平底の底部に口縁部は外反し端部は丸く納まる。	㊐ ヨコナデ ㊀上ミガキ・ナデ ㊀下マメツ ㊁ ナデ	㊐ ヨコナデ ㊀上ナデ ㊀下マメツ ㊁ マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 3) ○		7
23	壺	口径　(11.6) 残高　5.7	外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 2) チャ △		
24	高坏	口径　(18.8) 残高　4.3	口縁部に４条の凹線文、その下に「ノ」字状文が施される。	ナデ	ナデ	にぶい褐色・黒色 橙色	長 (1 ～ 2) ○		7
25	高坏	底径　(11.0) 残高　7.35	外反する脚部に端部は平らな面をなし、刻目文が施される。	マメツ	マメツ 指頭痕	にぶい橙色・にぶい黄橙色 褐灰色・橙色	石 (1 ～ 2.5)・長 (1) 金・チャ ○		7

表 13　SX3 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ (cm)	法　量 幅 (cm)	法　量 厚さ (cm)	法　量 重さ (g)	備　　考	図版
26	敲　石	約 2/3	砂　岩	18.2	11.25	6.4	2057.52		7

表 14　SX3 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
27	鉄鏃	約 2/3 残存	5.9	0.28 ～ 1.5	0.1 ～ 0.6	3.398		7

表 15　掘立 1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
28	坏身	口径 (11.0) 残高 2.2	受部端は凹み立ち上がりは上方に延び丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 △		
29	壺	口径 (13.0) 残高 0.7	大きく外反する口縁部に端部は下方に拡張され端面は平らな面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表 16　掘立 2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	甕	口径 (15.9) 残高 2.95	内湾気味の口縁部に端部は丸く納まる。	マメツ	ナデ	にぶい橙色・暗赤褐色 にぶい橙色	長 (1) ○	煤？	
31	坏身	残高 2.7	受部がやや外上方に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 17　SD2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	坏蓋	口径 (12.6) 残高 3.3	口縁端部に段を有する。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 灰褐色	長 (1) ○		8
33	坏身	口径 (13.1) 残高 3.5	立ち上がりはやや内傾し、端部は平らな面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		8
34	坏身	口径 (11.7) 残高 4.2	受部は外方に延び、立ち上がりは内傾し、端部は平らな面をなす。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石 (4)・長 (2) 細 ◎		8
35	坏身	口径 (11.3) 残高 2.5	受部は外上方に延び、立ち上がりは内傾し、端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(細) ◎		
36	高坏	口径 (14.0) 残高 5.75	受部は凹み、坏底部内面に同心円文がみられ、胴部に透かしが施される。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1 ～ 3) △		8

表 18　SD3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
37	坏蓋	口径 (14.1) 残高 2.4	内湾する口縁部に端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		

表 19　SD8 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	坏身	口径 (10.0) 残高 3.0	受部は凹み口縁部は内傾し、端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表 20　SD9 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
39	坏蓋	残高 1.35	かえり部が端部より僅かに接地する。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		

表 21　SD9 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
40	石鏃	完形	サヌカイト	2.98	1.5	0.5	2.247		8

表 22　SD14 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
41	坏身	口径 (10.8) 残高 3.7	受部端がやや凹み、口縁端部は丸く納まる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) 砂 ○		

表 23　SD12 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
42	坏	底径 (12.4) 残高 1.3	断面四角形の高台をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(細) ◎		

表 24　SD13 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
43	坏	底径 (10.5) 残高 1.6	断面四角形の高台をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	石・長(1) ◎	自然釉	

表 25　SD6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
44	坏	底径 (6.4) 残高 1.2	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ (底)回転糸キリ	マメツ	褐灰色 灰黄褐色	砂 ○		8
45	坏	底径 (5.9) 残高 1.55	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石(2.5) 細 ○		8
46	皿	口径 (7.8) 器高 1.45 底径 (6.4)	口縁端部が丸く納まる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		
47	椀	底径 (6.4) 残高 2.1	断面三角形状の高台が付く。	ミガキ 回転ナデ ナデ	ミガキ	灰白色・浅黄橙色 灰白色・にぶい黄橙色	密 ○		8

表 26　SD6 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
48	石鏃	完形	サヌカイト	2.05	1.95	0.3	1.158		8

表 27　SD1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
49	碗	口径 (13.6) 残高 2.1	内湾気味の口縁部に端部がやや外反し、内外面に施釉。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色・灰白色 オリーブ灰色・暗緑灰色	密 ◎		8
50	碗	残高 1.95	口縁端部が玉縁状に肥厚される。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎		

第４章

平井遺跡４次調査

第４章　平井遺跡４次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年１月、松山市平井町甲2349－１外において、松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。調査は松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが委託契約を結び、平成18年６月１日から６月２日までの間に実施した。調査では、竪穴住居や溝・土坑・柱穴などの遺構や、土師器・須恵器などの遺物を検出した。この結果を受け、道路建設課と埋文センターは協議を重ね、道路改良によって消失する遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、古墳時代の集落構造解明を主目的として、松山市教育委員会文化財課の指導のもと2006（平成18）年７月３日より開始した。

（２）調査の経緯

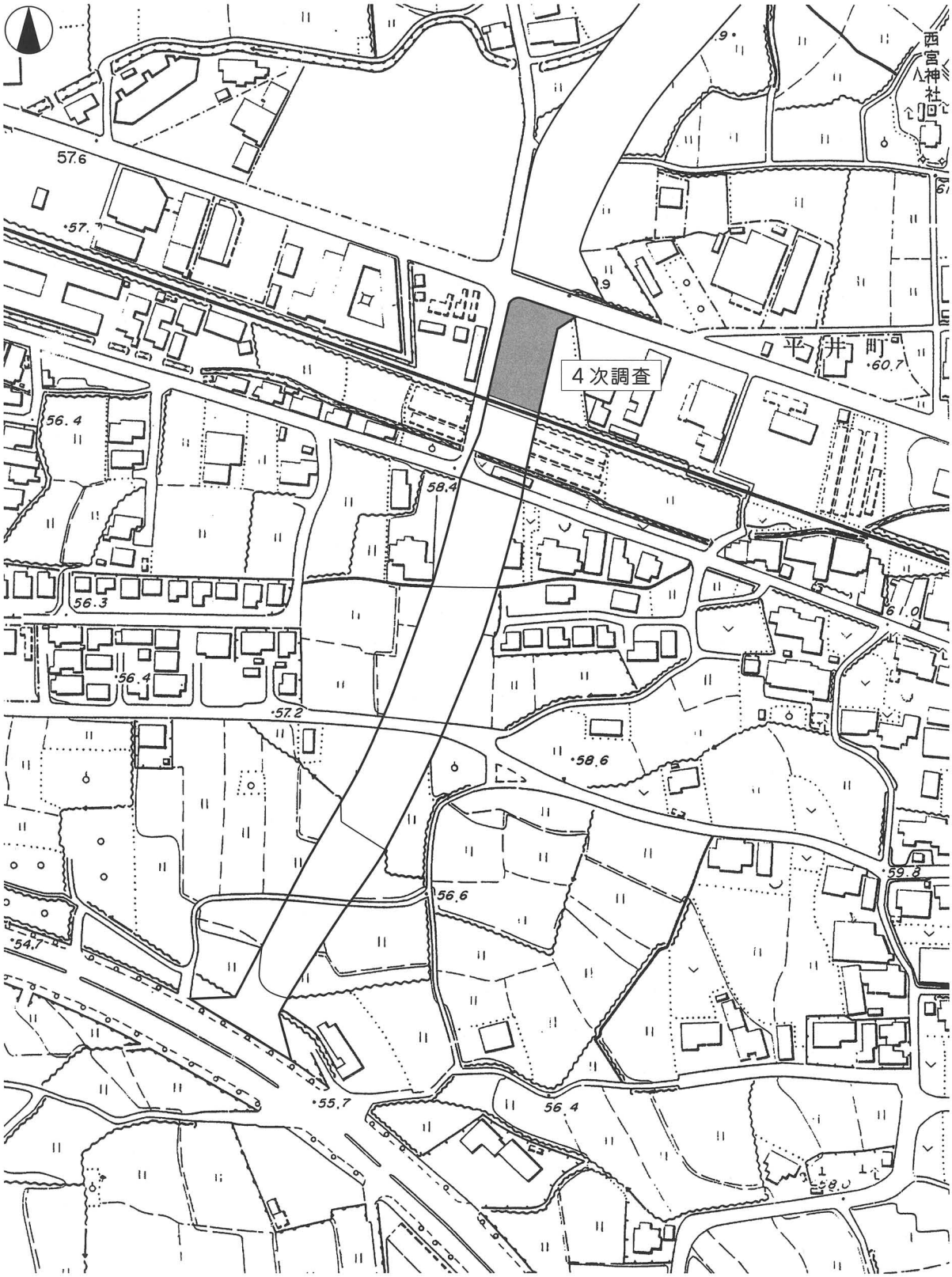
発掘調査は平成18年７月３日から同年９月29日まで屋外調査、９月30日から11月30日までは室内調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

屋外調査：平成18年７月３日、発掘機材の運搬を行う。７月４日、現場保全のため杭打ち・ロープ張り・下草刈り・土嚢作り・調査区の設定を開始すると同時に調査区周辺に重機により、畦と水路を設ける。７月６日、重機による表土掘削を開始すると同時に壁面・床面の精査を行う。７月11日、重機による表土掘削を終了する。７月13日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を開始する。７月14日、基準点を調査区内に設置する。７月25日、水準点やグリット杭の設置を行う。９月11日、遺構の掘り下げを終了し、全体清掃を行う。９月12日、遺構の完掘状況の写真撮影を行う。９月14日、人力にて北東部を拡張する。９月19日、重機にて西壁に深掘りトレンチ調査を行い、同日埋め戻す。また、本日にて測量を終了する。９月20日、重機による埋め戻しを開始する。９月21日、重機による埋め戻し作業を終了する。９月22日、出土した遺物の洗浄や遺構内の埋土の篩作業を開始する。９月29日、出土遺物の洗浄や篩作業が終了し、本日にて屋外調査を完了する。

室内調査：９月30日～11月30日の間で記録写真の整理、遺物の洗浄・注記・復元・一部実測、現場で作成した原図の整理や、一部の２次原図作成・トレースを行い、調査概要報告書を作成する。

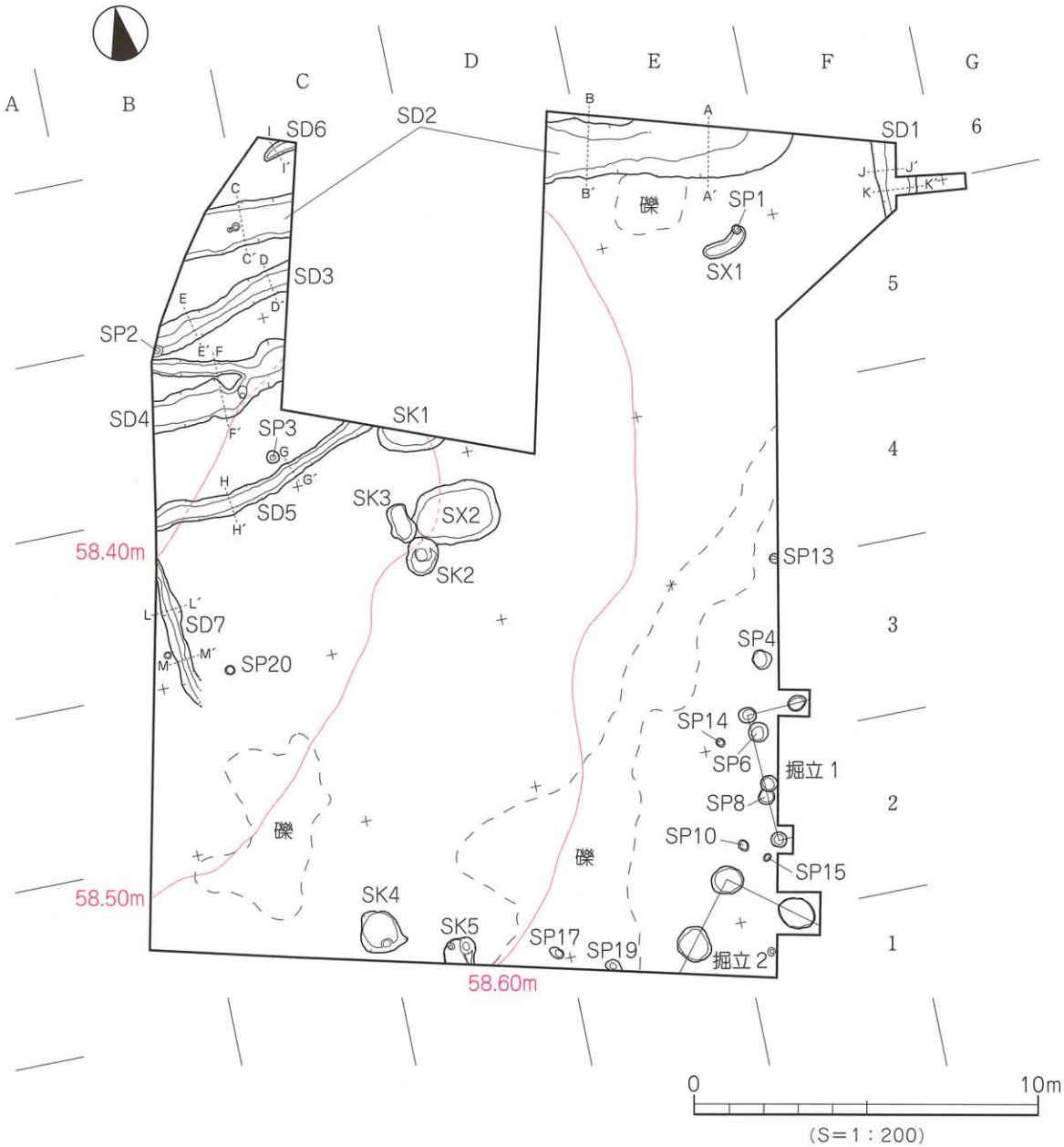
（３）調査組織

遺 跡 名：平井遺跡４次調査
調査場所：松山市平井町甲2349－１外
調査期間：2006（平成18）年７月３日～同年11月30日
調査面積：706㎡
調査委託：松山市都市整備部道路建設課
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：河野史知・橋本雄一



(S=1:2,500)

第39図　調査地位置図


A
B
C
D
E
F
G
6
5
4
3
2
1
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SP1
SP2
SP3
SP4
SP6
SP8
SP10
SP13
SP14
SP15
SP17
SP19
SP20
SX1
SX2
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
掘立 1
掘立 2
礫
58.40m
58.50m
58.60m
0
10m
(S=1：200)

第 40 図　遺構配置図

２．層　位

（１）基本層位（第41図）

調査地は、松山平野東部の小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地上の扇央付近、標高約59ｍを測る。調査以前は水田であった。

基本層位は、以下の４層である。

Ⅰ 層－①：暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）で、水田耕作土が調査区全域に層厚10～28㎝の堆積を測る。

－②：オリーブ灰色土（2.5GY5/1）・③：暗オリーブ色土（5Y4/3）・④：②層に砂質が強いで、旧耕作土が調査区のほぼ全域に層厚５～15㎝の堆積を測る。

－⑤：明黄褐色土（2.5Y6/6）・⑥：灰オリーブ色土（5Y5/2）で、水田耕作に伴う床土が南壁の一部を除いた全域に層厚４～17㎝の堆積を測る。

Ⅱ 層－①：黄灰色砂質土（2.5Y6/1）・②：灰黄褐色砂質土（10YR6/2）で、調査区北側の一部を除いた大部分に層厚５～20㎝の堆積を測る。

Ⅴ 層－①：灰黄褐色土（10YR5/2）に黒褐色斑文多含・②：灰黄褐色土（10YR5/2）で、上面において遺構を検出する地山土であり、調査区全域に堆積する。調査区東側から西側にかけて緩やかに傾斜（比高差25㎝）する。

Ⅵ 層－①：褐灰色砂礫（10YR6/1）で、旧河川の砂礫層が堆積し、第Ⅴ層が削平を受ける調査区南東部の一部に露出する。

－②：にぶい黄橙色（10YR7/3）・③：明緑灰色（7.5GY7/1）の細砂で、旧河川の砂層が堆積する。

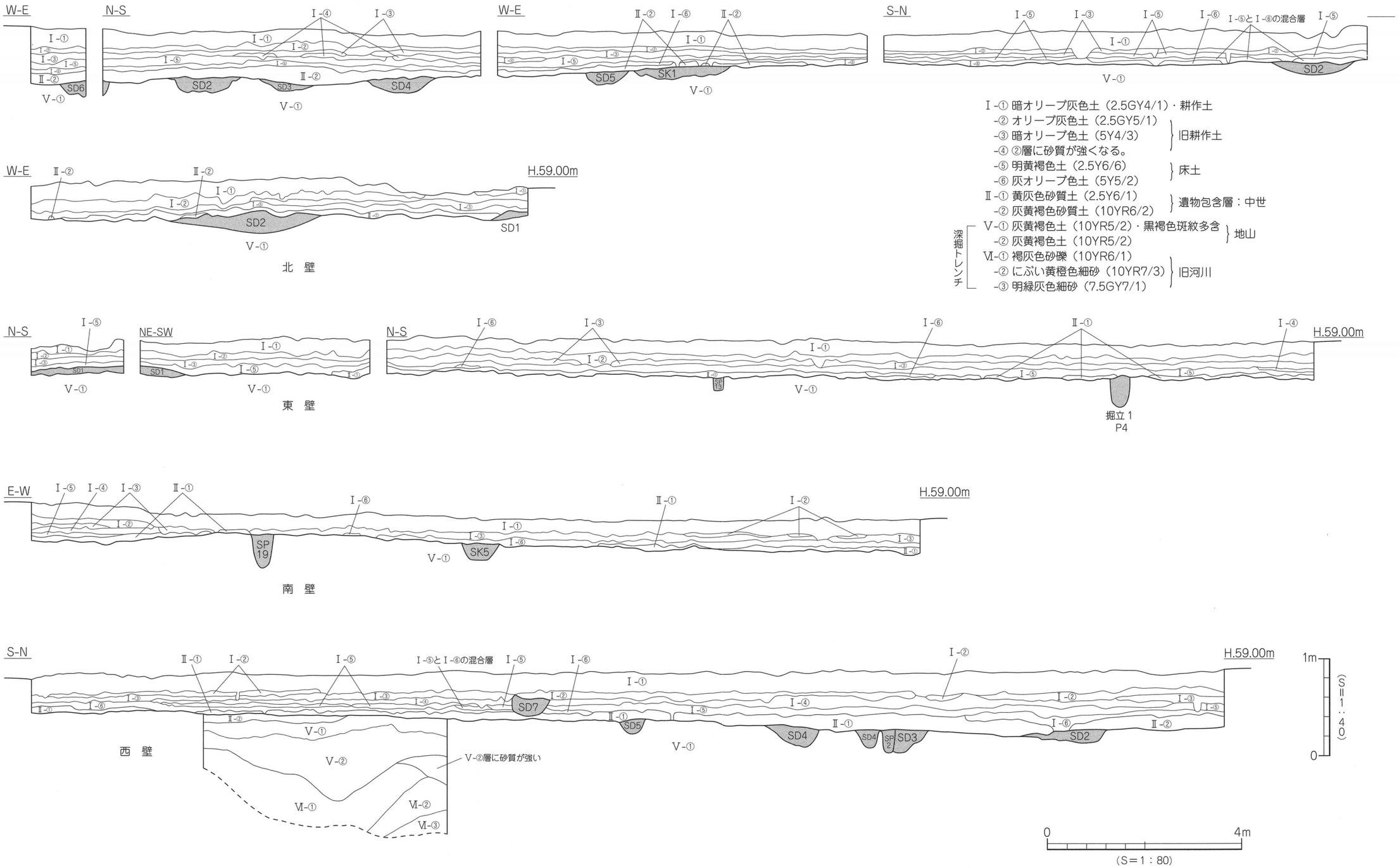
調査にあたり、調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは南から北に向けて１・２・３、西から東に向けてＡ・Ｂ・Ｃとし、Ａ１・Ａ２・・・としたグリット名を付けた。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

（２）検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、掘立柱建物２棟（古墳時代）、溝７条（古墳時代：５条、中世：２条）、土坑５基（古墳時代：４基、中世：１基）、性格不明遺構２基（古墳時代：１基、中世：１基）、柱穴14基である。今回の調査では掘立柱建物や土坑等は、遺構ごとに通し番号（ＳＫ１・２・・・）を付けた。遺物は遺構から出土したもので、土師器（古墳時代）、須恵器（古墳時代）、石器・鉄器・装飾品が出土した。

表28　検出遺構一覧

時　代	検　出　遺　構
古墳時代	掘立２棟（掘立1･2）、溝５条（SD2～6）、土坑４基（SK1･3･4･5）、性格不明遺構１基（SX2）
中　　世	溝２条（SD1・7）、土坑１基（SK2）、性格不明遺構１基（SX1）


W-E
N-S
W-E
S-N
Ⅰ-①
Ⅰ-②
Ⅰ-③
Ⅰ-④
Ⅰ-⑤
Ⅰ-⑥
Ⅱ-①
Ⅱ-②
Ⅰ-⑤とⅠ-⑥の混合層
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SK1
V-①
Ⅰ-① 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）・耕作土
-② オリーブ灰色土（2.5GY5/1）
-③ 暗オリーブ色土（5Y4/3）
旧耕作土
-④ ②層に砂質が強くなる。
-⑤ 明黄褐色土（2.5Y6/6）
-⑥ 灰オリーブ色土（5Y5/2）
床土
Ⅱ-① 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
-② 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）
遺物包含層：中世
深掘トレンチ
Ⅴ-① 灰黄褐色土（10YR5/2）・黒褐色斑紋多含
-② 灰黄褐色土（10YR5/2）
地山
Ⅵ-① 褐灰色砂礫（10YR6/1）
-② にぶい黄橙色細砂（10YR7/3）
-③ 明緑灰色細砂（7.5GY7/1）
旧河川
H.59.00m
SD1
北　壁
N-S
NE-SW
東　壁
SF 13
掘立1
P4
E-W
SP 19
SK5
南　壁
S-N
西　壁
SD7
SP 2
Ⅴ-②
Ⅵ-①
Ⅵ-②
Ⅵ-③
Ⅴ-②層に砂質が強い
1m
0
(S=1:40)
4m
(S=1:80)

第41図　土層図

3．遺構と遺物

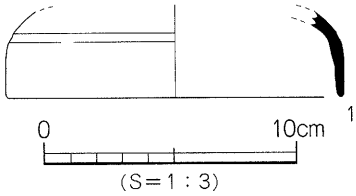
（1）古墳時代

古墳時代の遺構は、掘立柱建物２棟、溝５条、土坑４基、柱穴、性格不明遺構１基を検出した。

1）掘立柱建物

掘立１（第40・42図）

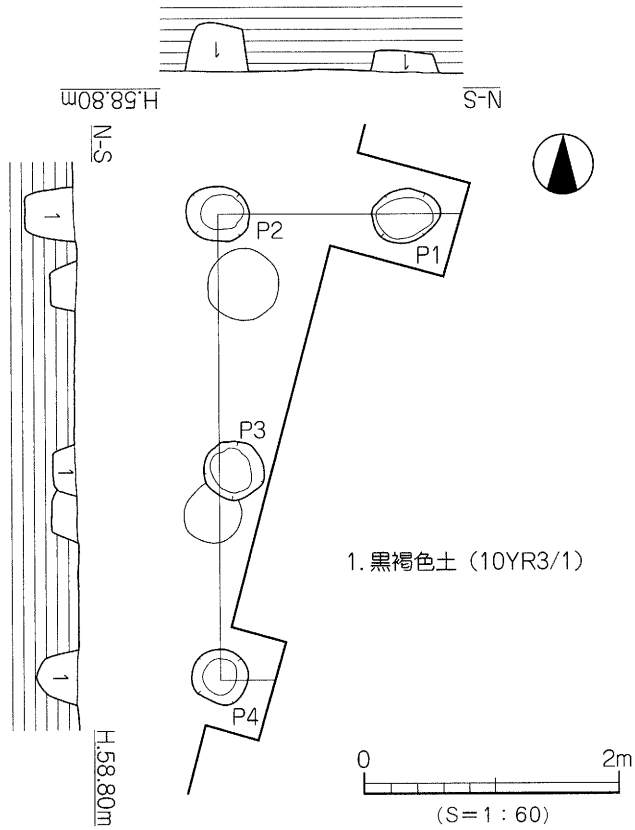
調査区南東部のＥ・２～３区に位置し、西端部だけの検出であり、東側は調査区外に延びる。南北２間×東西１間以上で、主軸はＮ-4°-Ｗを指向する。規模は桁行3.67ｍ、柱間1.64～2.03ｍ、梁行1.48ｍ以上、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径42～52㎝、深さ17～38㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が少量と鉄滓１点が出土する。



出土遺物（第42図）

１は坏蓋で、天井部境がやや凹み端部は丸く納まり、内外面は回転ナデ調整が施される。

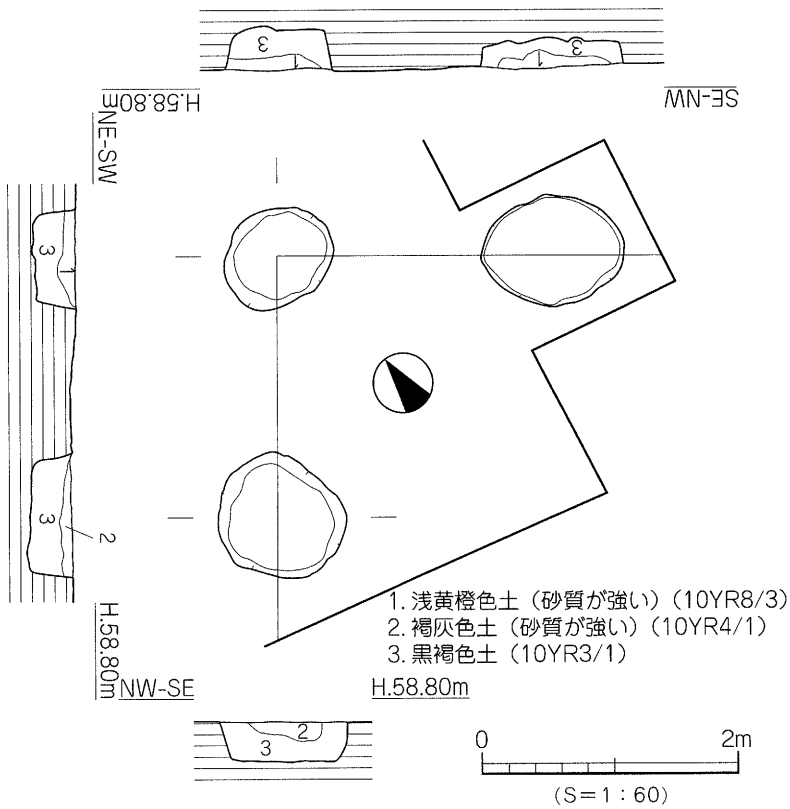
時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀中頃とする。



第42図　掘立１測量図・出土遺物実測図

掘立２（第40・43図）

調査区南東部のＤ～Ｅ・１～２区に位置し、北西部のみ検出し、南東側は調査区外に延びる。東西１間以上×南北１間以上で、主軸はＮ-36°-Ｅを指向する。規模は桁行2.15m以上、梁行2.05m以上、柱穴の平面形態は円形～



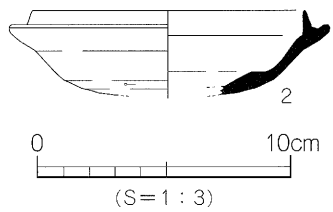
第43図　掘立２測量図

楕円形を呈し、直径 78 ～ 110 cm、深さ 20 ～ 36 cmを測る。埋土は黒褐色土で上部に浅黄橙色土・褐灰色土が堆積する。遺物は土師器や焼成不良の須恵器坏身片が少量と鉄滓１点が出土する。

出土遺物（第 44 図）

２は須恵器の坏身で、受部端が凹み、立ち上がりは丸く納まる。内外面に回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第 44 図　掘立２出土遺物実測図

２）溝

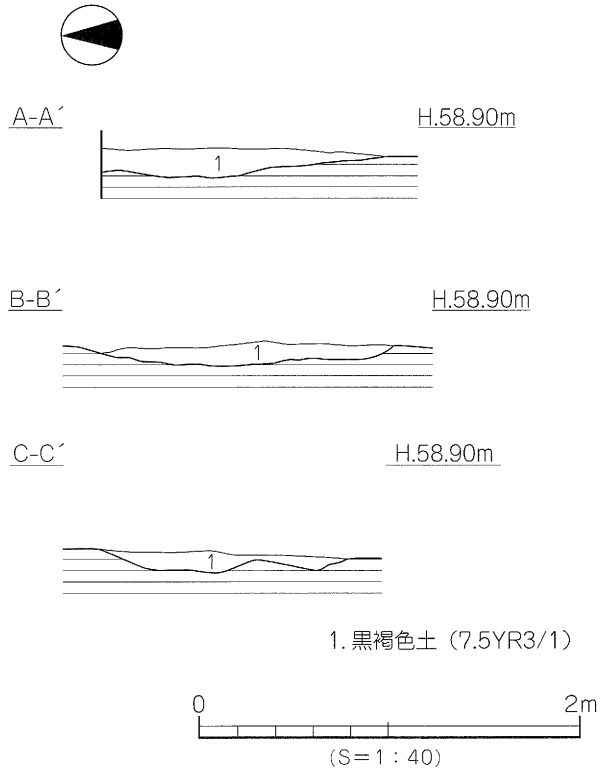
ＳＤ２（第 45 図、図版 12）

調査区北端のＢ～Ｆ・６区に位置し、東西端は調査区外に延びる。主軸はＮ -8°　- Ｅで東西方向を指向する。規模は検出長 17.7 m、上場幅 1.18 ～ 1.81 m、深さ５～ 21 cmを測り、東から西へ 38 cmの比高差をもつ。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層であり、基底面の殆どは第Ⅵ層の砂礫層となる。遺物は上位から基底面にかけて土師器の小片や須恵器の蓋坏・坏身・高坏・埦に混じり鉄鏃２点、ガラス小玉２点、砥石、緑色片岩の未成品が出土する。

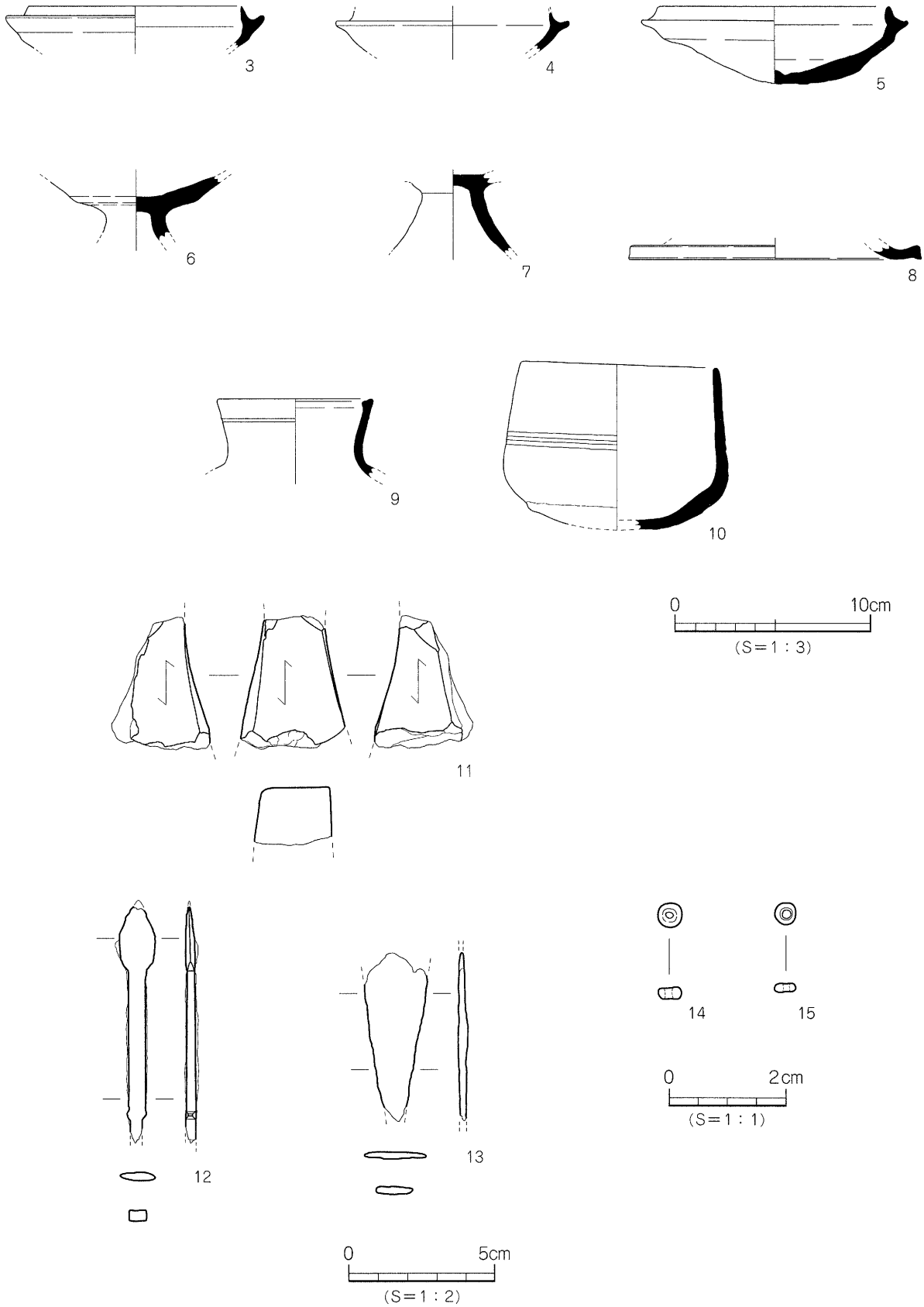
出土遺物（第 46 図、図版 15）

３～ 10 は須恵器である。３～５は坏身で、３・４は受部端が凹み、５は受部端は外方向に延び、内外面に回転ナデ調整が施され、受部下から底部にかけて歪みがみられる。６～８は高坏で、６・７は外反する脚部をもち、８は外反する脚裾部に端部は平らな面をなし、下方に肥厚される。いずれも内外面に回転ナデ調整が施される。９は壺の口縁部で口縁端部は内傾する面をなし、内外面に回転ナデ調整が施される。10 は埦で、やや内傾する胴部中位に２条の凹線文が施され、口縁端部は丸く納まる。内外面に回転ナデ調整が施される。11 は砥石で両端を除き３面が砥面として使用されており、滑らかな凹面をもつ。長さ 4.45 cm、幅 3.4 cm、最大厚 1.95 cm、重さ 50.85 ｇを測り、石英粗面岩製である。12・13 は有茎式の鉄鏃で、12 は長い茎部に棘関が見られる。茎部を欠損しており、残存長 8.1 cm、身幅 1.4 cm、茎幅 0.7 cm、厚み 0.4 cm、重さ 5.5 ｇを測る。13 は身部と茎部の両端を欠損しており、残存長 5.8 cm、最大幅 2.1 cm、厚み 0.28 cm、重さ 6.4 ｇを測る。14･15 はガラス製の小玉で、14 は外径 0.42 cm、孔径 0.15 cm、厚み 0.22 ｇ、重さ 0.05 ｇを測り、青緑色である。15 は外径 0.38 cm、孔径 0.15 cm、厚み 0.17 cm、重さ 0.03 ｇを測り、藍色である。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第 45 図　ＳＤ２測量図



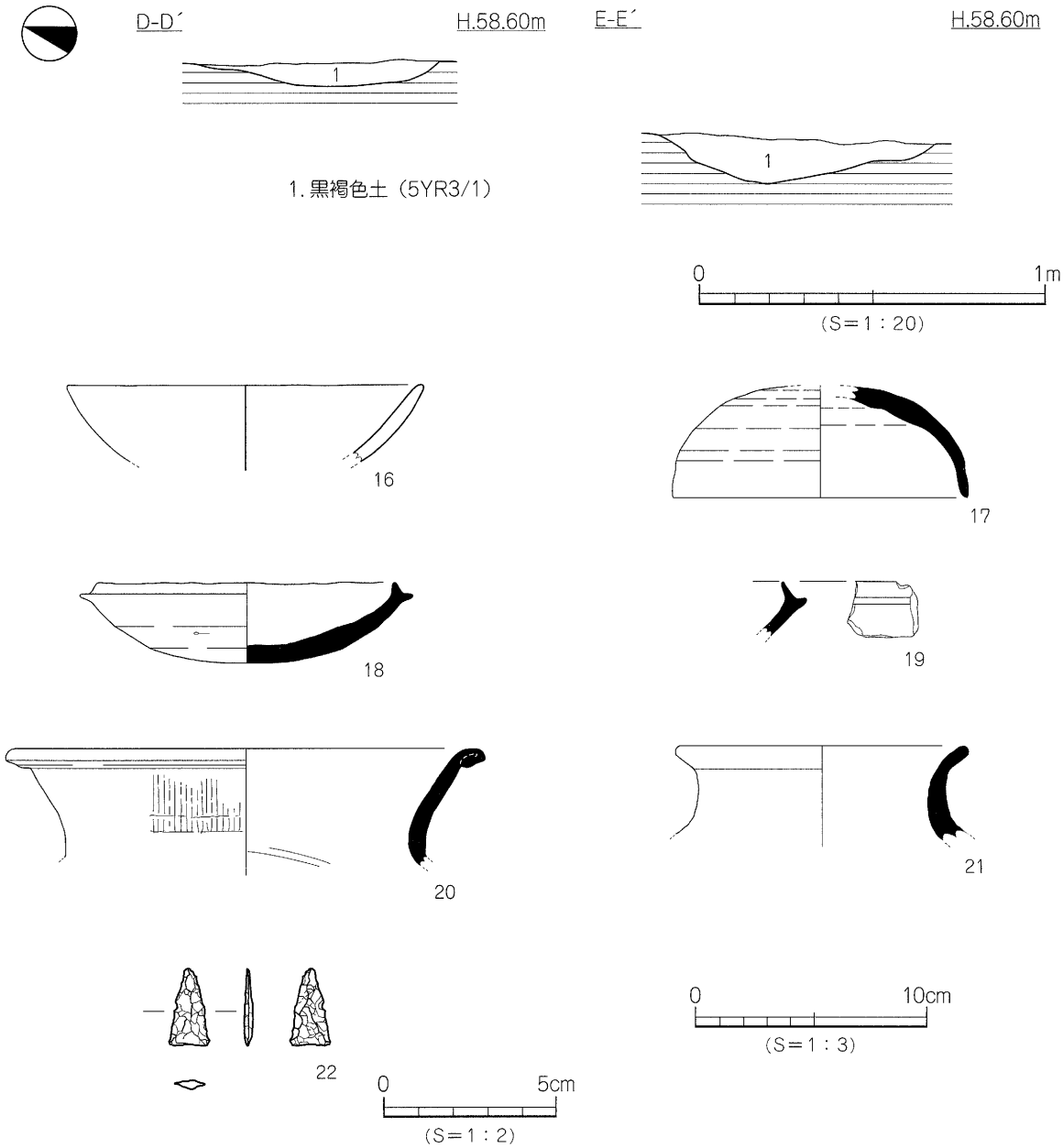
第46図　SD2出土遺物実測図

ＳＤ３（第 47 図、図版 12）

調査区北西部のＢ～Ｃ・５～６区に位置し、東西端は調査区外に延びる。主軸はＮ -76°-Ｅで東西方向を指向する。規模は検出長 4.53 m、上場幅 0.6 ～ 0.87 m、深さ５～ 19 cmを測り、東から西へ 14 cmの比高差を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物は上位から中位にかけて土師器の甕や須恵器の坏蓋・坏身・壺・埦の破片が出土する。

出土遺物（第 47 図、図版 16）

16 は土師器の高坏で、坏部は内湾して立ち上がり口縁端部は丸く納まる。17 ～ 21 は須恵器である。17 は坏蓋で、口縁部と天井部境の稜はなく、口縁端部は丸く納まり、内外面は回転ナデ調整、天井部は回転ヘラケズリ調整が施される。18･19 は坏身で、受部は外方向に延び、立ち上がりは内傾する。18 は焼成不良で軟質である。20 は甕の口縁部で、外反する口縁部の外面にカキ目調整が施され、端



第 47 図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図

部は肥厚される。21は壺の口縁部で、外反する口縁部は丸く納まる。焼成不良で軟質である。22は混入品で平基式の打製石鏃の完存品である。長さ1.22㎝、幅1.15㎝、厚さ0.26㎝、重さ0.54ｇを測り、サヌカイト製である。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。

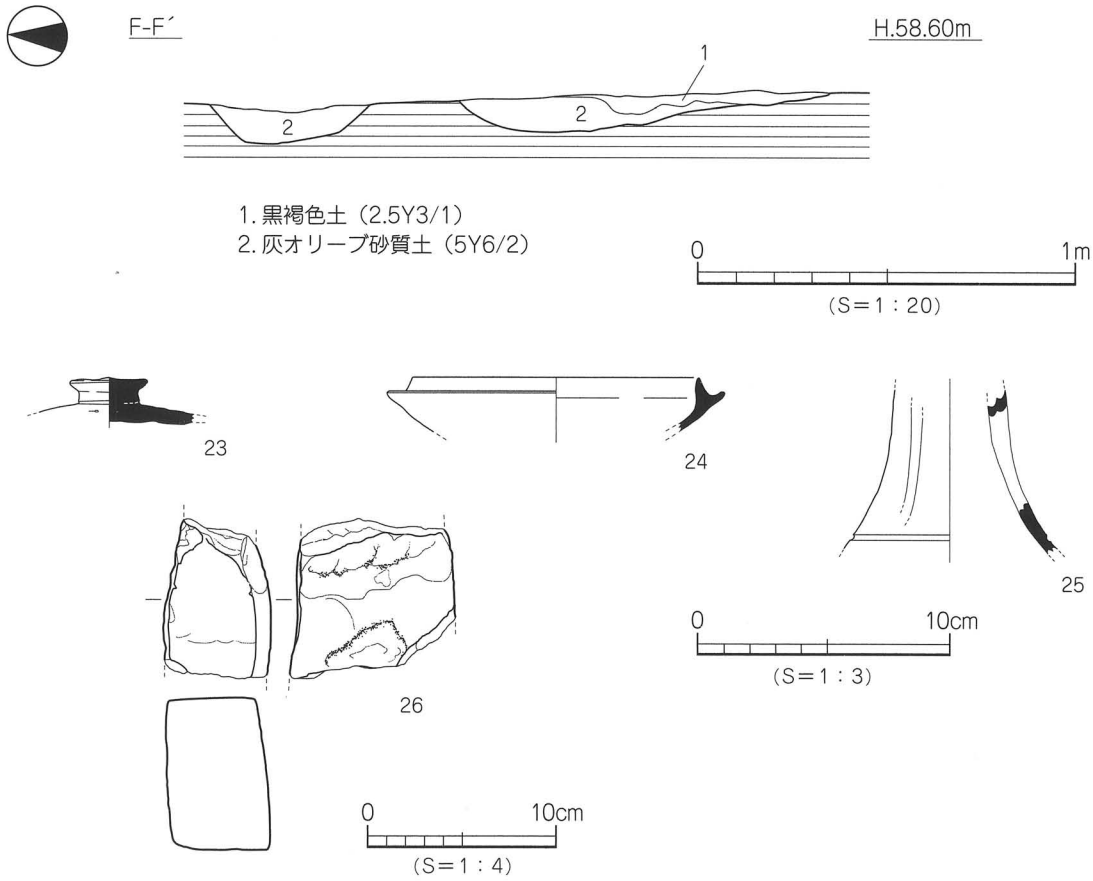
ＳＤ４（第48図）

調査区北西部のＢ～Ｃ・５区に位置し、東西端は調査区外に延び、中央部から西へ向けて２本に分岐する。主軸はＮ-80°-Ｅで東西方向を指向する。規模は検出長4.43ｍ、上場幅0.38～1.68ｍ、深さ６～19㎝を測り、北東から南西へ約10㎝の比高差をもつ。断面形態は皿状を呈し、埋土は上層が黒褐色土で下層が灰オリーブ砂質土となる。遺物は上位から中位にかけて土師器片、須恵器の蓋坏・坏身・高坏片に混じり、砥石や緑色片岩の未成品が出土する。

出土遺物（第48図、図版16）

23～25は須恵器である。23は坏蓋で、天井部に扁平なつまみがつく。24は坏身で、受部端が凹み内外面に回転ナデ調整が施される。25は高坏の脚部に２方向の透かしが施される。26は砥石で、２面が砥面として使用されそのうち１面は滑らかな凹面をもつ。長さ8.5㎝、幅5.68㎝、高さ8.8㎝、重さ509.14gを測り、石英粗面岩製である。

時期：出土した須恵器の特徴から、７世紀後半とする。



第48図　ＳＤ4測量図・出土遺物実測図

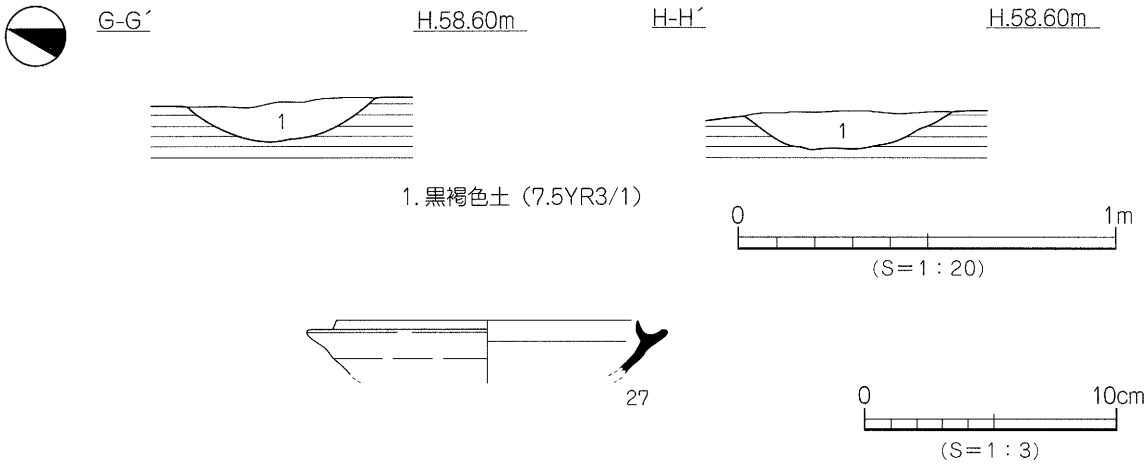
ＳＤ５（第49図）

調査区南端のＢ～Ｃ・４～５区に位置し、東西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-76°-Ｅで湾曲しながら東西方向を指向する。規模は検出長6.95m、上場幅0.35～0.65m、深さ６～17cmを測り、東から西へ約11cmの比高差をもつ。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は上位から中位にかけ土師器の小片や須恵器の坏身片が少量出土する。

出土遺物（第49図）

27は須恵器の坏身で、受部端が凹み、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。

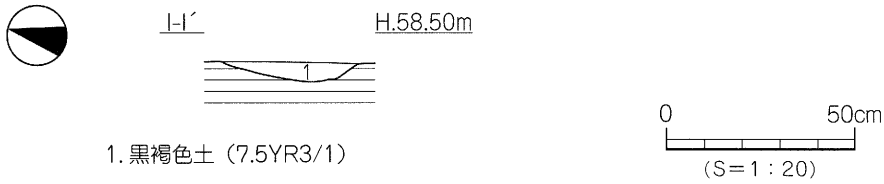


第49図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図

ＳＤ６（第50図）

調査区北西端のＣ・６区に位置し、東端は調査区外に延びる。主軸はＮ-73°-Ｅで、東西方向を指向する。規模は検出長1.05ｍ、上場幅0.25～0.38ｍ、深さ３～23cmを測り、東から西へ約３cmの比高差をもつ。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は上位から土師器や須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ５と同一なことから６世紀後半とする。



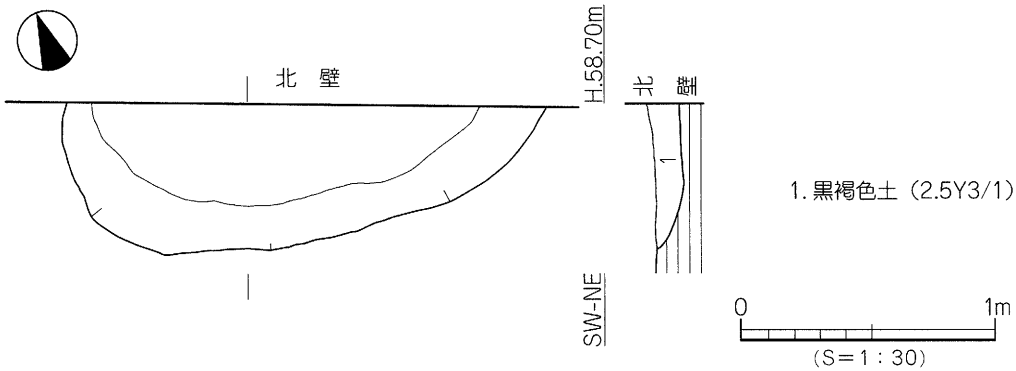
第50図　ＳＤ６測量図

３）土坑

ＳＫ１（第40・51図）

調査区北側のＣ・５区に位置し、北端は調査区外に延びる。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、北西部の基底面が円形状にやや凹む。規模は長軸1.91ｍ、短軸0.58ｍ以上、深さ８cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＫ４と同一なことから６世紀後半とする。

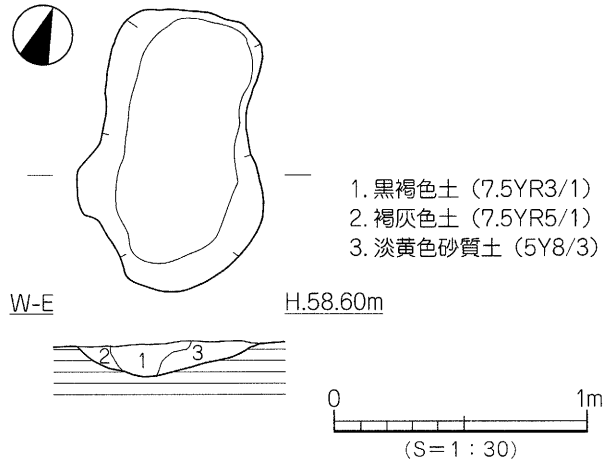


第51図　ＳＫ1測量図

ＳＫ３（第40・52図）

調査区中央部のＣ・４区に位置し、ＳＸ２を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈し、基底面は平らな面をなし、北西部に浅い円形状の凹みをもつ。規模は長軸1.11 m、短軸0.72 m、深さ11 cmを測る。埋土は上層から黒褐色土に褐灰色土と淡黄色砂質土に分層され、遺物は上層から中層にかけ土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、現段階では古墳時代としか判らない。



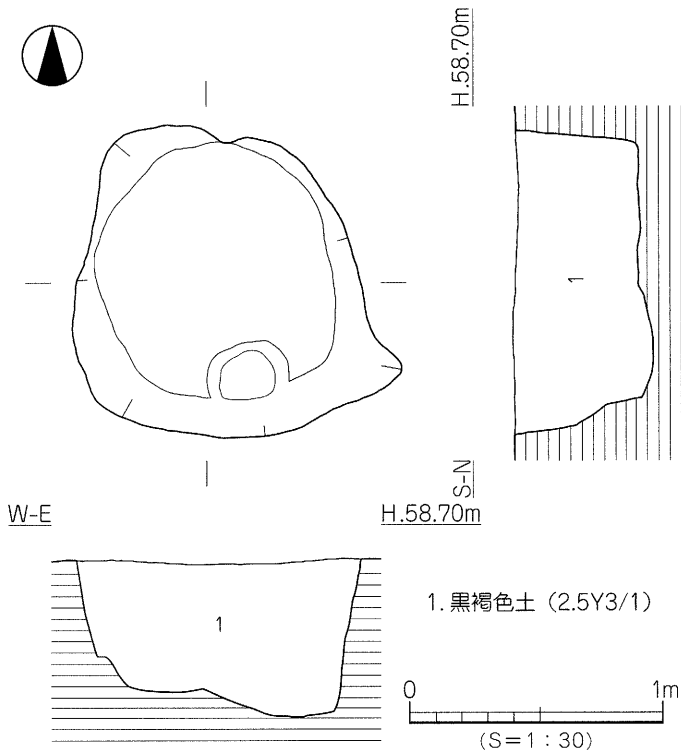
第52図　ＳＫ3測量図

ＳＫ４（第40・53図）

調査区南端のＢ～Ｃ・２区に位置し、平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.21 m、短軸1.13 m、深さ62 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第54図、図版16）

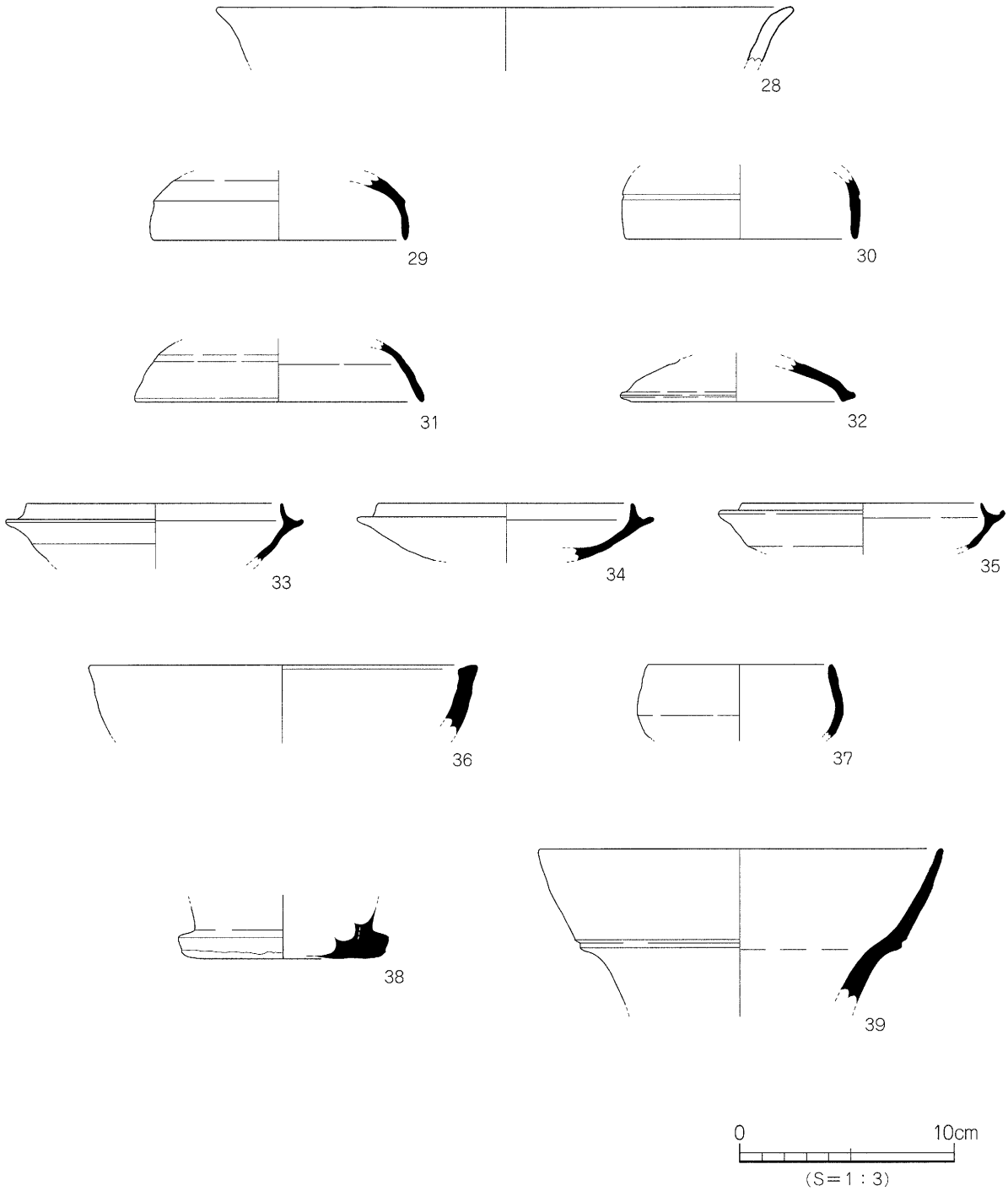
28は土師器の甕の口縁部で、外反する口縁部に端部はさらに外反し、丸く納まる。29～39は須恵器である。29～32は坏蓋で、天井部境の稜は29は明瞭な稜をもち、30は凹み、31は稜がなくなり、32は口縁端部の内端面が接地する。いずれも内外面は回転ナデ調整、29は口縁部境から上は回転ヘラケズリ調整が施され



第53図　ＳＫ4測量図

る。33 ～ 35 は坏身で、受部端が凹む。36 は鉢の口縁部で、口縁端部は内傾する面をなす。37 は埦で、口縁部が内傾し端部は丸く納まる。38 は鉢の底部で、平底の底部は外方向に肥厚される。39 は甕の口縁部で、外反する頸部と口縁部との境に１条の凹線をもち、口縁部はやや内湾し、端部は丸く納まり、内外面とも回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第54図　ＳＫ4出土遺物実測図

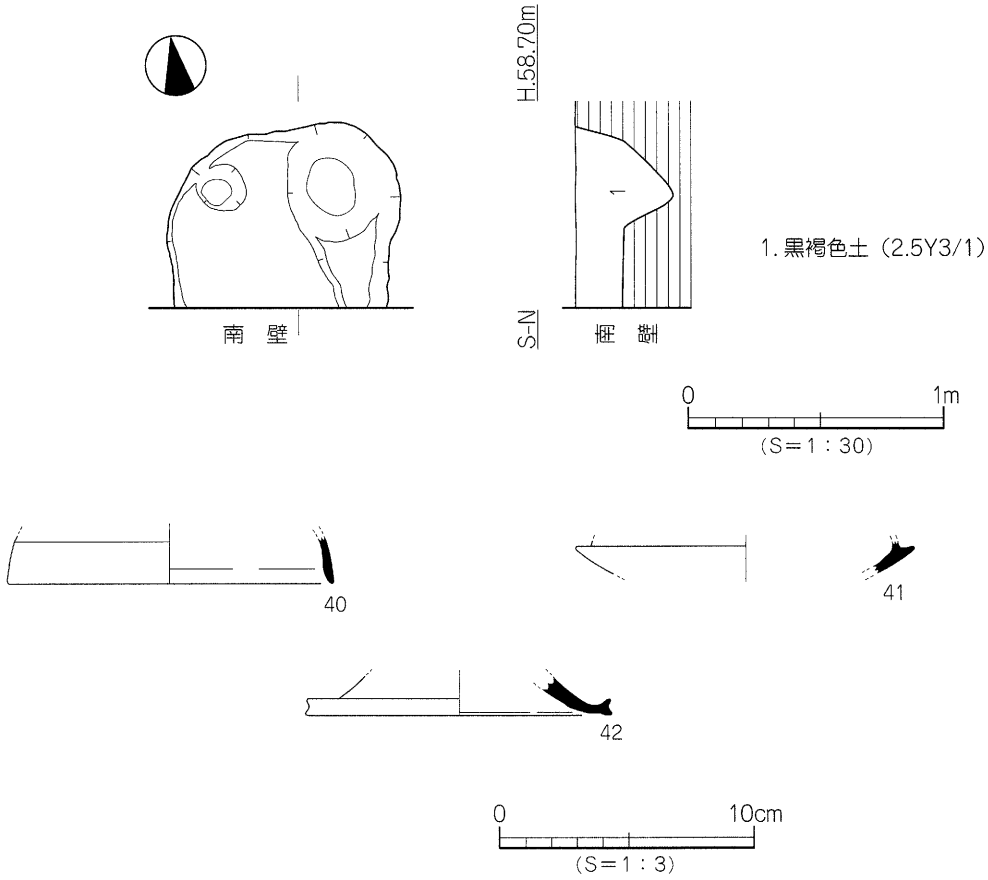
ＳＫ５（第40・55図）

調査区南端のＣ・２区に位置し、南端は調査区外に延びる。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、東側は凹み基底面は平らな面をなす。規模は長軸0.73ｍ以上、短軸0.86ｍ、深さ63㎝を謝る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は上位から中位にかけ土師器片や須恵器の坏蓋・坏身・高坏片が少量出土する。

出土遺物（第55図）

40～42は須恵器である。40は坏蓋で、口縁端部が丸く納まる。41は坏身で、受部は外方に延びる。42は高坏の脚裾部で端面は凹み上下方に肥厚される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



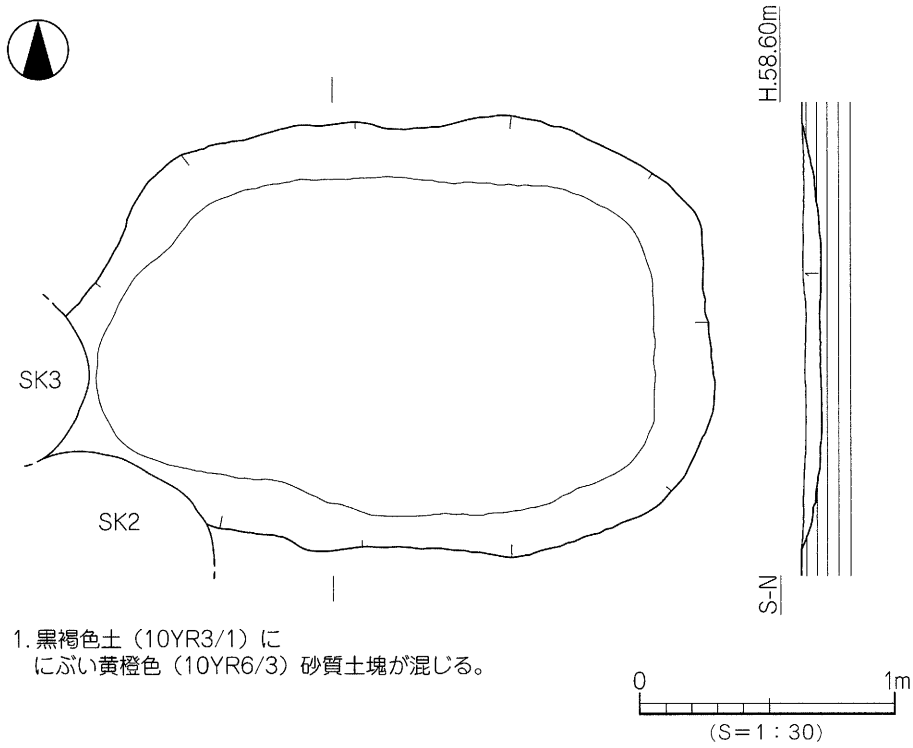
第55図　ＳＫ5測量図・出土遺物実測図

4）性格不明遺構

ＳＸ２（第40・56図）

調査区中央部のＣ～Ｄ・４区に位置し、ＳＫ２・３に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は緩やかに凹む。規模は長軸2.53ｍ、短軸1.7ｍ、深さ９㎝を測る。埋土は黒褐色土ににぶい黄橙色砂質土塊が混じる。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、現段階では古墳時代としか判らない。



1. 黒褐色土（10YR3/1）に
にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土塊が混じる。

第 56 図　ＳＸ2 測量図

（2）中世以降

中世以降の遺構は、溝２条、土坑１基、柱穴、性格不明遺構１基を検出した。

１）溝

ＳＤ１（第 57 図）

調査区北東端のＦ・５～６区に位置し、南北端は調査区外に延びる。主軸はＮ -3°　-Ｗとほぼ真北を指向する。規模は検出長 2.25 m、上場幅 1.05 ～ 1.21 m、深さ 10 ～ 11 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、南から北へ約 10 cmの比高差をもつ。埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器に混じり、陶器の小片が僅かに出土する。

時期：中世としか判らない。

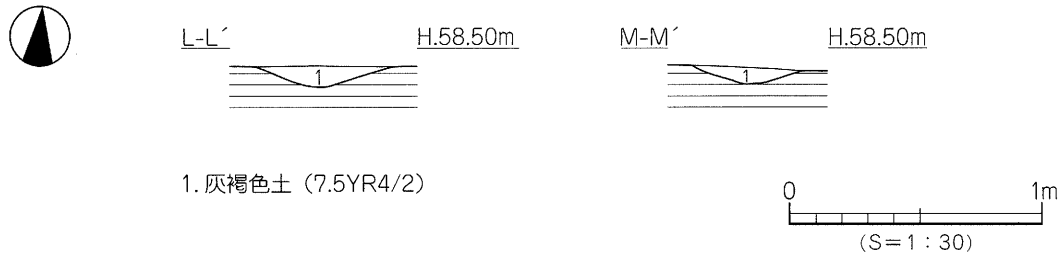
1. 灰黄褐色土（10YR6/2）

第 57 図　ＳＤ1 測量図

ＳＤ７（第 58 図）

調査区西側のＢ・３～４区に位置し、北端は調査区外に延びる。主軸はＮ -7°　-Ｗで南北方向を指向する。規模は検出長 4.4 m、上場幅 0.27 ～ 0.55 m、深さ１～７cmを測り、東から西へ約６cmの比高差をもつ。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ１と同一なことから中世とする。



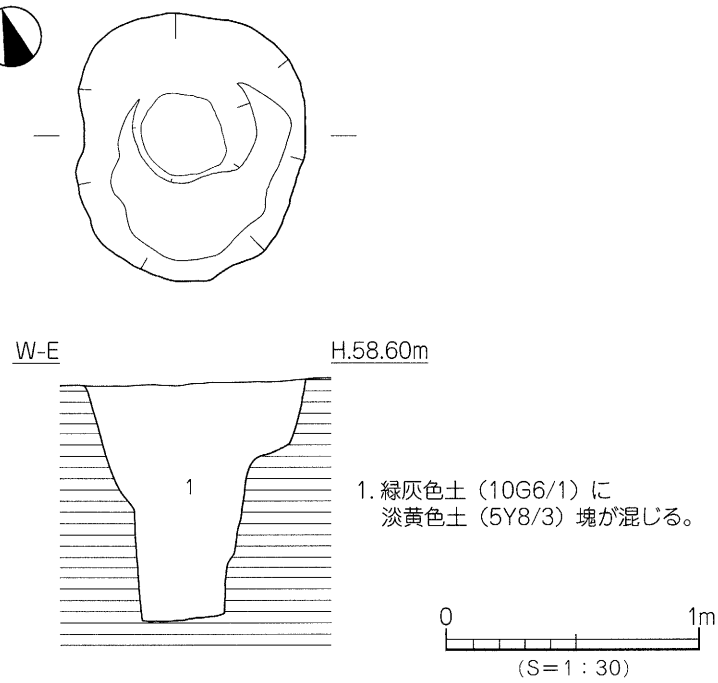
第58図　ＳＤ7測量図

2）土坑

ＳＫ２（第40・59図、図版13）

調査区中央部のＣ・４区に位置し、ＳＸ２を切る。平面形態は楕円形、断面形態は舟底状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.07 m、短軸0.87 m、深さ96 cmを測る。埋土は緑灰色土に淡黄色土塊が混じる。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、現段階では埋土から中世以降としか判らない。



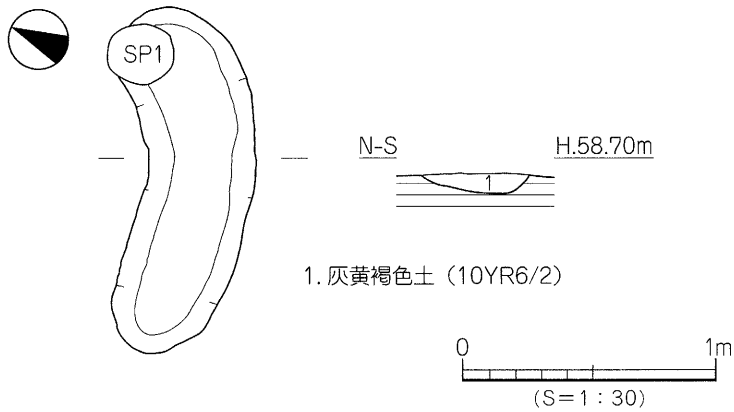
第59図　ＳＫ2測量図

3）性格不明遺構

ＳＸ１（第40・60図）

調査区北東部のＥ・５区に位置し、ＳＰ１に切られる。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸1.43 m、短軸0.45 m、深さ8 cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ１と同一なことから中世とする。



第60図　ＳＸ1測量図

4）その他の遺構

柱穴

調査区南東部を中心に14基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径19～56 cm、深さ11～37 cmを測る。埋土は黒褐色土～灰黄褐色砂質土である。出土遺物は土師器・須恵器の小片が出土する。

時期：出土遺物から、古墳時代から中世までの間とする。

４．小　結

層　位

本調査地は、小野川の現流路の北約１km付近の小野川扇状地上、北方扇側部付近にあり、調査地北隣の下苅屋遺跡２・３次調査や古市遺跡で検出した弥生時代から中世にかけての大規模な自然流路の南岸にあたる。流路南岸には古墳時代後期頃の集落の中心が存在しており、本調査地は同じ等高線上にあり、砂礫層（第Ⅵ層）の凹みに第Ⅴ層地山土が堆積し、上面にて遺構を検出した。この第Ⅴ層は西側に向け緩やかに傾斜を示しており、試掘調査により、調査区外の南側において南に向けての傾斜を確認している。地形の高い調査区中央部から北側にかけては、近現代の農耕により旧地形の削平を受け、遺構の密度は低い。

古墳時代

掘立柱建物や溝・土坑などの遺構を検出した。北隣の下苅屋遺跡１～４次調査では古墳時代後期の集落が検出されており、これら調査地との位置関係や、下苅屋遺跡の集落内で出土した焼成不良の須恵器などが本調査からも出土しており、遺構の密度や南に傾斜する旧地形なども含め、集落の南端付近とも考えられる。また、ＳＤ２～６は埋土が単一層で砂層が含まれていないことから水利に伴う施設とは考えられない。

中　世

ＳＤ１・７は南北に延びる人為的な小溝で、埋土から水利に伴う施設ではないことが判った。ＳＫ２は砂質土層まで深く掘られ、基底面が窄む形状から井戸の可能性をもち、埋土の堆積状況から短期間に埋め戻されている。北隣の下苅屋遺跡３次調査では自然流路が埋没した後、流路上に農耕に伴う生産域が展開されており、今回検出した溝や土坑はその生産域に伴う可能性をもつ。

今回の調査では、古墳時代後期から中世にかけての集落を形成する遺構や遺物などの資料が得られた。特に北隣の古墳時代後期の集落は自然流路の南岸において、窯業生産と流通にかかわる集落として位置づけられることが考えられ、集落の広がりを探るうえで貴重な資料を得ることができた。

【参考文献】

豊田達雄編　1982　『一般国道11号線松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1996　「小野川流域の遺跡」松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松佳久　1996　「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知編　2000　『古市遺跡』『下苅屋遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

水本完児　2004　「平井遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本健一・山之内志郎　2005　『古市遺跡２次調査』『五楽遺跡１次・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物　－凡例－

（1）以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）　：復元推定値

形態・施文欄　：土器の各部位名称を略記。

例）天→天井部、口→口縁部、

胎土・焼成欄　：胎土欄では混和剤を略記した。

例）長→長石、石→石英、砂→砂粒、密→精製土、細→細粒（0.9 mm以下）

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：mm）

焼成の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表 29　掘立柱建物一覧

掘立	規模（間）	方向	桁行		梁行		方位	床面積（㎡）	時期	備考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）				
1	2×1 以上	東西	3.67	1.64 ～ 2.03	1.48 以上	1.48	N-4°　-W	5.43 以上	古墳	東側は調査区外に延びる。
2	1 以上×1 以上	東西	2.15 以上	2.15	2.05 以上	2.05	N-36°　-E	4.41 以上	古墳	南東側は調査区外に延びる。

表 30　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	F・5～6	逆台形状	2.25 × 1.05 ～ 1.21 × 0.1 ～ 0.11	真北	灰黄褐色土	土師器 須恵器・陶器	中世	南北端は調査区外に延びる。
2	B～F・6	皿状	17.7 × 1.18 ～ 1.81 × 0.05 ～ 0.21	東西	黒褐色土	須恵器・鉄器 石器・ガラス	古墳	東西端は調査区外に延びる。
3	B～C・5～6	レンズ状	4.53 × 0.6 ～ 0.87 × 0.05 ～ 0.19	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	東西端は調査区外に延びる。
4	B～C・5	皿状	4.43 × 0.38 ～ 1.68 × 0.06 ～ 0.19	東西	黒褐色土 灰オリーブ砂質土	土師器 須恵器・石器	古墳	東西端は調査区外に延びる。
5	B～C・4～5	レンズ状	6.95 × 0.35 ～ 0.65 × 0.06 ～ 0.17	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	東西端は調査区外に延びる。
6	C・6	レンズ状	1.05 × 0.25 ～ 0.38 × 0.03 ～ 0.23	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	東端は調査区外に延びる。
7	B・3～4	レンズ状	4.4 × 0.27 ～ 0.55 × 0.01 ～ 0.07	南北	灰褐色土	土師器 須恵器	中世	北端は調査区外に延びる。

表 31　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C・5	楕円形	皿状	1.91 × 0.58 以上× 0.08	0.87 以上	黒褐色土	土師器	古墳	北端は調査区外に延びる。
2	C・4	楕円形	舟底状	1.07 × 0.87 以上× 0.96	0.78	緑灰色土 淡黄色土塊		中世以降	SX2 を切る。
3	C・4	不整楕円形	レンズ状	1.11 × 0.72 × 0.11	0.63	黒褐色土 褐灰色土 淡黄色砂質土	土師器 須恵器	古墳	SX2 を切る。
4	B～C・2	円形	逆台形状	1.21 × 1.13 × 0.62	1.19	黒褐色土	土師器	古墳	
5	C・2	楕円形	逆台形状	0.73 以上× 0.86 × 0.63	0.57	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	南端は調査区外に延びる。

表 32　性格不明遺構一覧

(SX)	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E・5	不整楕円形	皿状	1.43 × 0.45 × 0.08	0.57	灰黄褐色土		中世	SP1 に切られる。
2	C～D・4	楕円形	皿状	2.53 × 1.7 × 0.09	3.65	黒褐色土 にぶい黄橙色 砂質土塊	土師器	古墳	SK2・3 に切られる。

表 33　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径 (13.2) 残高 3.45	口縁部境がやや凹み、端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 1.5) ◎		

表 34　掘立２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
2	坏身	口径 (10.7) 残高 3.4	受部端が凹み、立ち上がりは丸く納まる。	回転ナデ ケズリ ナデ	回転ナデ ナデ	黄灰色 灰黄色	細 ○		

表 35　SD2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
3	坏身	口径 (10.8) 残高 2.1	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長 (1) 砂 ○		15
4	坏身	残高 2.0	受部端がやや凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉	15
5	坏身	口径 11.7 残高 4.0	受部端は外方向に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・暗青 灰色 灰色	細 ◎		15
6	高坏	残高 3.3	外反する脚部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	石・長 (1) ○		15
7	高坏	残高 4.2	外反する脚部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（細～ 1) ○		15
8	高坏	底径 (15.0) 残高 0.7	脚裾部は平らな面をなし下方に肥厚される	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		15
9	壺	口径 (8.0) 残高 4.1	口縁端部は内向する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) ○		15
10	埦	口径 (9.9) 残高 8.65	胴部中位に２条の凹線文が施される。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 灰色	細 ○		15

表 36　SD2 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ (g)	備考	図版
11	砥石	約 1/2	石英粗面岩	4.45	3.4	1.95	50.85		15

表 37　SD2 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ (g)	備考	図版
12	鉄鏃（長茎）	全体の約 2/3	8.1	1.4	0.4	5.5		15
13	鉄鏃（平根）	鏃身部約 1/2	5.8	2.1	0.28	6.4		15

表 38　SD2 出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 直径（cm）	法量 孔径（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ (g)	色調	備考	図版
14	小玉	完形	ガラス	0.4 ～ 0.42	0.1 ～ 0.15	0.22	0.05	青緑色		15
15	小玉	完形	ガラス	0.35 ～ 0.38	0.15	0.17	0.03	藍色		15

表 39　SD3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
16	坏	口径 (15.3) 残高 3.3	坏部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1) ○		
17	坏蓋	口径 (12.8) 残高 4.8	天井部境の稜はなく、口縁端部は丸く納まる。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
18	坏身	口径 (12.8) 残高 3.5	受部は外方向に延び、立ち上がりは内傾する。	回転ヘラケズリ マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石(1)・長(1～2) ○		16
19	坏身	残高 2.4	受部は外方向に延び、立ち上がりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(1) ○		
20	甕	口径 (20.0) 残高 5.1	端部は肥厚される。	カキメ ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ハケ	暗青灰色 青灰色	長(1) 細 ◎		16
21	壺	口径 (12.2) 残高 4.1	外反する口縁部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄色 淡黄色	長(細) △		16

表 40　SD3 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
22	石鏃	完形	サヌカイト	1.12	1.15	0.26	0.54		16

表 41　SD4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	坏蓋	つまみ径 3.1 残高 1.76	天井部に扁平なつまみがつく。	ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	灰色 灰白色	細 ◎		16
24	坏身	口径 (11.4) 残高 2.15	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 △		16
25	高坏	残高 6.5	脚部に2方向の透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	明赤灰色 赤灰色	長(1) ○		16

表 42　SD4 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
26	砥石	約 2/5	石英粗面岩	8.5	5.68	8.8	509.14		

表 43　SD5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	坏身	口径 (12.0) 残高 2.1	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		

表 44　SK4 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
28	甕	口径 (26.8) 残高 2.6	外反する口縁部に端部はさらに外反し、丸く納まる。	マメツ	マメツ	灰褐色・明赤褐色 黒褐色・灰褐色	長(1.5) 砂 ○		
29	坏蓋	口径 (11.8) 残高 3.05	天井部境に明瞭な稜をもつ。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1) ◎		
30	坏蓋	口径 (10.7) 残高 3.0	天井部境が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		

SK4 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
31	坏蓋	口径 (13.6) 残高 2.8	天井部境の稜がない。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
32	坏蓋	口径 (10.0) 残高 2.0	口縁端部の内端面が接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○	黒斑	
33	坏身	口径 (11.9) 残高 2.75	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
34	坏身	口径 (12.0) 残高 2.8	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) 砂 △		
35	坏身	口径 (11.2) 残高 2.25	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ○		
36	鉢	口径 (18.0) 残高 3.3	口縁端部は内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
37	埦	口径 (8.6) 残高 3.45	口縁部が内傾し端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ○		16
38	鉢	底径 (9.0) 残高 2.45	平底の底部は外方向に肥厚される。	ヨコナデ ナデ	ハクリ	灰白色 灰色	細 ○		16
39	甕	口径 (18.8) 残高 7.3	頸部と口縁部との境に１条の凹線をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(1) 細 ◎		16

表 45　SK5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
40	坏蓋	口径 (12.8) 残高 1.9	口縁端部が丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(細) ◎		
41	坏身	残高 1.3	受部は外方に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
42	高坏	底径 (12.2) 残高 1.5	脚裾部の端面は凹み上下方に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) △		

第５章

平井遺跡５次調査

第５章　平井遺跡５次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年１月、松山市平井町甲3120、3122、3126の各一部において、松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。調査は松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが委託契約を結び、平成18年６月13日から同年６月14日までの間に実施した。調査では、竪穴住居や溝・土坑・柱穴などの遺構や、土師器・須恵器などの遺物を検出した。この結果を受け、道路建設課と埋文センターは協議を重ね、道路改良によって消失する遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、古墳時代から中世の集落構造解明を主目的として、松山市教育委員会文化財課の指導のもと2006（平成18）年10月２日より開始した。

（２）調査の経緯

発掘調査は平成18年10月２日から同年12月27日まで屋外調査、平成18年12月28日から平成19年２月28日までは室内調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

屋外調査：平成18年10月２日、現場保全のため杭打ち・ロープ張り・下草刈り・土嚢作り・南側調査区を設定する。10月３日、重機による表土掘削を開始すると同時に壁面・床面の精査を行う。10月10日、重機による表土掘削を終了する。10月12日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を開始する。10月13日、水準点やグリット杭の設置を行う。11月１日、遺構の完掘状況の写真撮影を行う。11月２日、遺構の掘り下げ・測量を終了する。11月６日、重機にて埋め戻しを開始する。11月７日、重機での埋め戻しを終了。11月８日、重機にて北側調査区の掘削を開始すると同時に壁面・床面の精査を行う。11月15日、重機による表土掘削を終了する。11月17日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を開始する。11月20日、水準点やグリット杭の設置を行う。12月15日、遺構の完掘状況の写真撮影を行う。12月16日、一般市民を対象とした、発掘調査現地説明会を行い約60名の市民の方が見学される。12月18日、西壁に深掘りトレンチ調査を行う。また、竈の掘り下げ・測量を終了する。12月19日、重機にて埋め戻しを開始する。12月20日、調査事務所を撤去する。12月21日、重機での埋め戻しを終了し、発掘機材や出土品を撤去する。12月27日、発掘機材や出土品の片付けが終了し、本日にて屋外調査を完了する。

室内調査：平成18年12月28日から平成19年２月28日の間で記録写真の整理、遺物の洗浄・注記・復元・一部実測、現場で作成した原図の整理や、一部の２次原図作成・トレースを行い、調査概要報告書を作成する。

（３）調査組織

遺 跡 名：平井遺跡５次調査

調査場所：松山市平井町甲3120、3122、3126の各一部

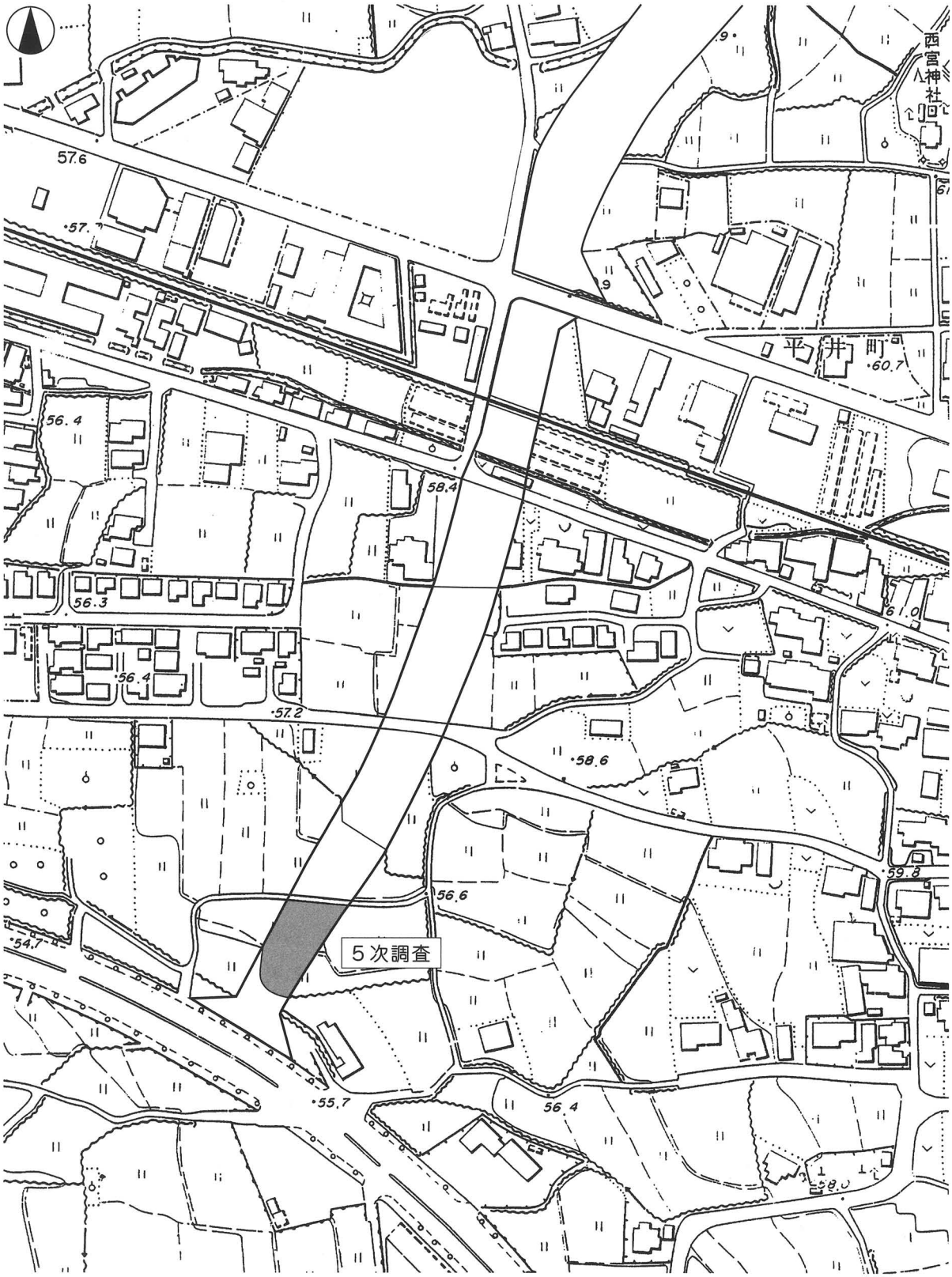
調査期間：2006（平成18）10月２日～2007（平成19）年２月28日

調査面積：806.02㎡

調査委託：松山市都市整備部道路建設課

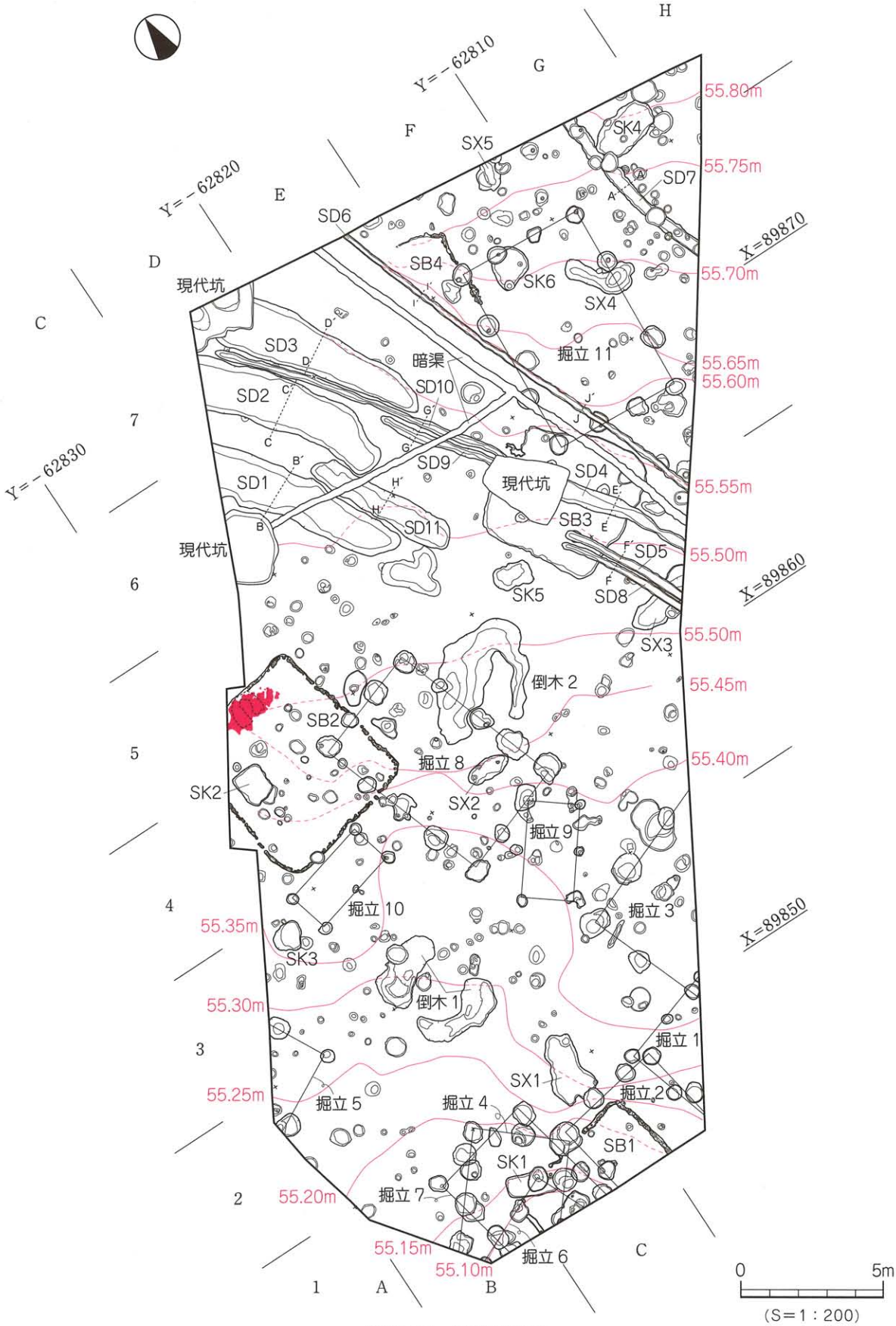
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：河野史知・橋本雄一



(S=1:2,500)

第 61 図　調査地位置図


H
G
F
E
D
C
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
Y=-62810
Y=-62820
Y=-62830
X=89870
X=89860
X=89850
55.80m
55.75m
55.70m
55.65m
55.60m
55.55m
55.50m
55.50m
55.45m
55.40m
55.35m
55.30m
55.25m
55.20m
55.15m
55.10m
SK4
SX5
SD7
SD6
SB4
SK6
SX4
現代坑
SD3
暗渠
掘立 11
SD10
SD2
SD9
SD4
現代坑
SD1
SB3
SD11
SD5
現代坑
SK5
SD8
SX3
倒木 2
SB2
掘立 8
SK2
SX2
掘立 9
掘立 10
掘立 3
SK3
倒木 1
掘立 1
SX1
掘立 5
掘立 4
掘立 2
SB1
SK1
掘立 7
掘立 6
0
5m
(S=1：200)

第 62 図　遺構配置図

２．層　位

（１）基本層位（第63図）

調査地は、松山平野東部の小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地上の扇央付近、標高約55ｍを測り、調査以前は畑地であった。

基本層位は、以下の６層である。

第Ⅰ層－①：褐色砂質土（10YR4/4）、②：暗褐色砂質土（10YR3/4）で、農耕に伴う真砂土で、調査区北西部に層厚８～36cmの堆積を測る。

－③：オリーブ灰色土（2.5GY6/1）で、耕作土が調査区全域に層厚10～28cmの堆積を測る。

－④：灰白色土（7.5Y7/2）、⑤：明黄褐色土（10YR7/6）で、耕作に伴う床土が調査区全域に層厚３～９cmの堆積を測る。

第Ⅱ層－①：灰オリーブ色砂質土（5Y6/2）、②：灰黄褐色砂質土（10YR6/2）で、北西部を除いた全域に層厚６～19cmの堆積を測る。

第Ⅲ層　：明褐灰色砂質土（7.5YR7/2）で、調査区南側半分において層厚３～20cmの堆積を測る。

第Ⅳ層　：黒褐色土（10YR3/2）で、調査区南東部を除いた全域にが層厚６～20cmの堆積を測る。弥生土器・土師器・須恵器が出土する。

第Ⅴ層－①：黄色土（2.5Y8/6）～③：淡黄色粘土（2.5Y8/4）で、最終遺構検出面の地山土で、調査区全域に堆積し、北東部から南西部にかけて緩やかに傾斜（比高差80cm）をもつ。

※以下の土層は北西部の深堀トレンチにて検出した。

－④：灰白色粘土（2.5Y8/1）～⑥：褐灰色粘土（10YR6/1）は　層厚62～85cmの堆積を測る。

第Ⅵ層－①：にぶい黄褐色中粒砂（10YR7/4）～②：褐灰色中粒砂（10YR6/1）が混じり、層厚47cm以上の堆積を測り下部からは湧水がある。

遺構の検出状況や出土遺物から、第Ⅳ層は弥生時代から古墳時代までに堆積ものと考えられる。

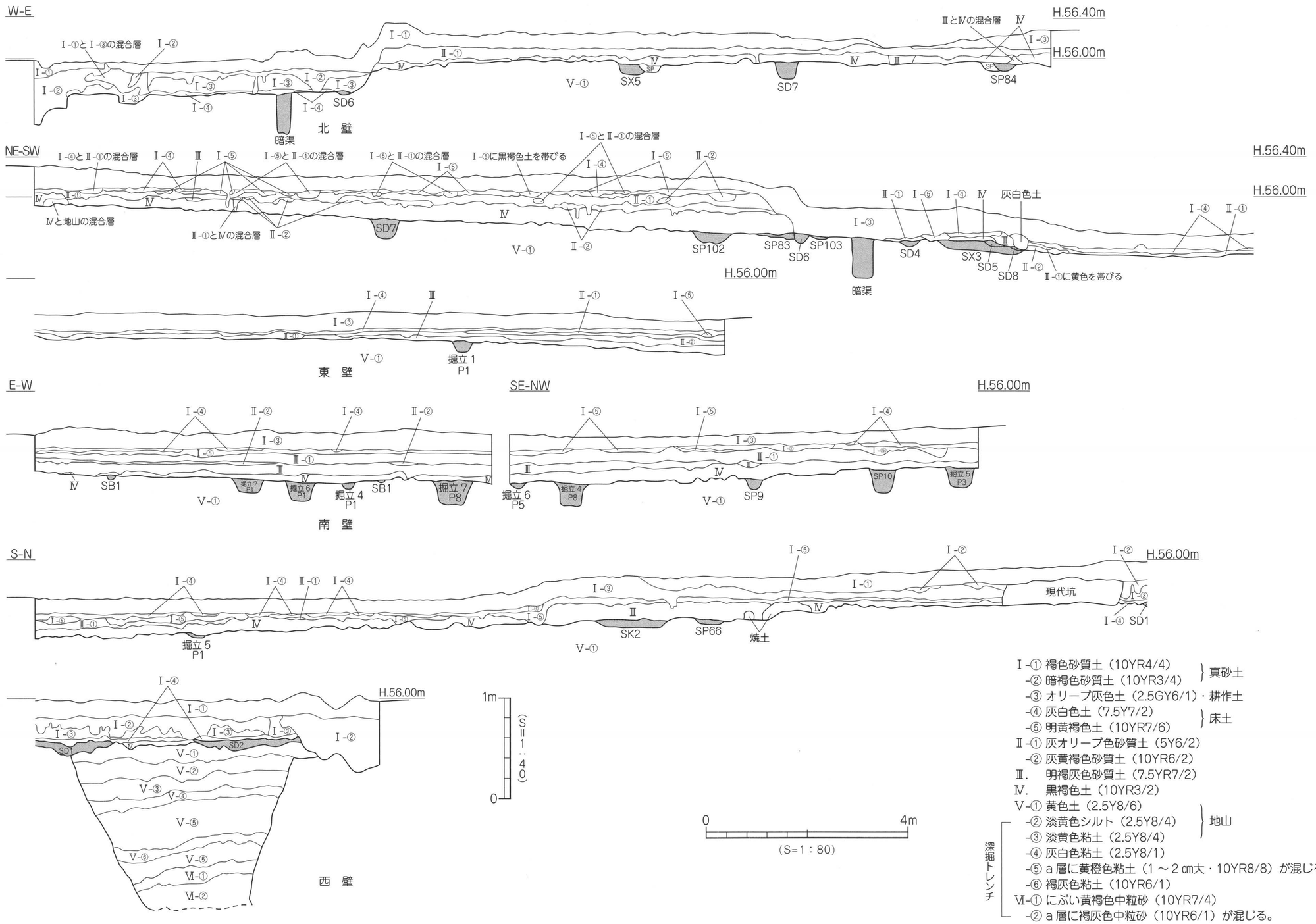
調査にあたり、調査区地内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは南から北に向けて１・２・３、西から東に向けてＡ・Ｂ・Ｃとし、Ａ１・Ａ２・・・としたグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

（２）検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、竪穴住居４棟（古墳時代）、掘立柱建物11棟（古墳時代）、溝11条（古墳時代：１条、中世：９条、近世：１条）、土坑６基（弥生時代：２基、古墳時代：３基、中世：１基）、性格不明遺構５基（弥生時代：２基、古墳時代：３基）、柱穴109基、倒木痕２基である。今回の調査では掘立柱建物や土坑等は、遺構ごとに通し番号（ＳＫ１・２・・・）を付けた。遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（前期）、土師器（古墳時代・中世）、須恵器（古墳時代・古代）、磁器（中世）、石器が出土した。

表46　検出遺構一覧

時　代	検　出　遺　構
弥生時代	土坑２基（SK4・5）、性格不明遺構２基（SX1・4）
古墳時代	竪穴住居４棟（SB1～4）掘立11棟（掘立１～11）、溝１条（SD7）、土坑３基（SK1·3·6）、性格不明遺構３基（SX2・3・5）
中　　世	土坑１基（SK2）、溝９条（SD1～5、8～11）
近世以降	溝１条（SD6）



Ⅰ-① 褐色砂質土（10YR4/4）
-② 暗褐色砂質土（10YR3/4）　} 真砂土
-③ オリーブ灰色土（2.5GY6/1）・耕作土
-④ 灰白色土（7.5Y7/2）
-⑤ 明黄褐色土（10YR7/6）　} 床土
Ⅱ-① 灰オリーブ色砂質土（5Y6/2）
-② 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）
Ⅲ.　明褐灰色砂質土（7.5YR7/2）
Ⅳ.　黒褐色土（10YR3/2）
Ⅴ-① 黄色土（2.5Y8/6）
-② 淡黄色シルト（2.5Y8/4）　} 地山
-③ 淡黄色粘土（2.5Y8/4）
-④ 灰白色粘土（2.5Y8/1）
-⑤ a 層に黄橙色粘土（1 ～ 2 ㎝大・10YR8/8）が混じる。
-⑥ 褐灰色粘土（10YR6/1）
Ⅵ-① にぶい黄褐色中粒砂（10YR7/4）
-② a 層に褐灰色中粒砂（10YR6/1）が混じる。
深掘トレンチ

第 63 図　土層図

3．遺構と遺物

（1）弥生時代

弥生時代の遺構は、土坑２基、性格不明遺構２基を検出した。

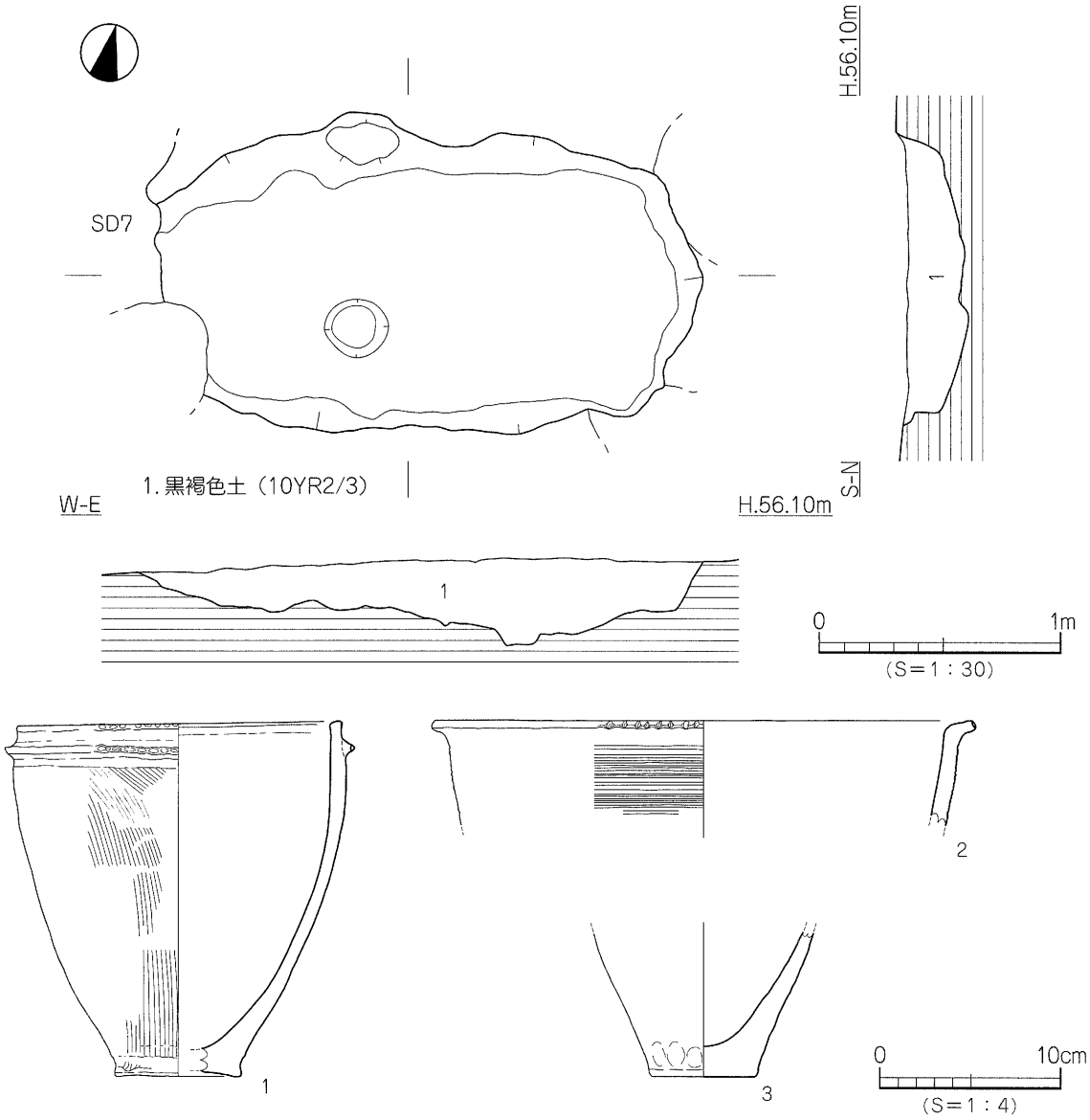
1）土坑

ＳＫ４（第62・64図、図版22）

調査区北東隅部のＧ～Ｈ・７区に位置し、ＳＤ７、柱穴に切られる。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面には凹凸をもち東側がやや低くなる。規模は長軸2.37 m、短軸1.22 m、深さ32 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は埋土上位から中位にかけ弥生土器の甕・壺が出土する。

出土遺物（第64図、図版24）

１～３は弥生土器の甕で、１はやや上げ底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部下に貼付凸帯と端部に刻目が巡る。外面は刷毛目調整、ナデ調整がみられ、内面はナデ調整が施される。２は口縁



第64図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図

部付近に12条の櫛描直線文と端部に刻目が巡り、内外面にナデ調整が施される。３は平底の底部で内湾気味に立ち上がる。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代前期後半とする。

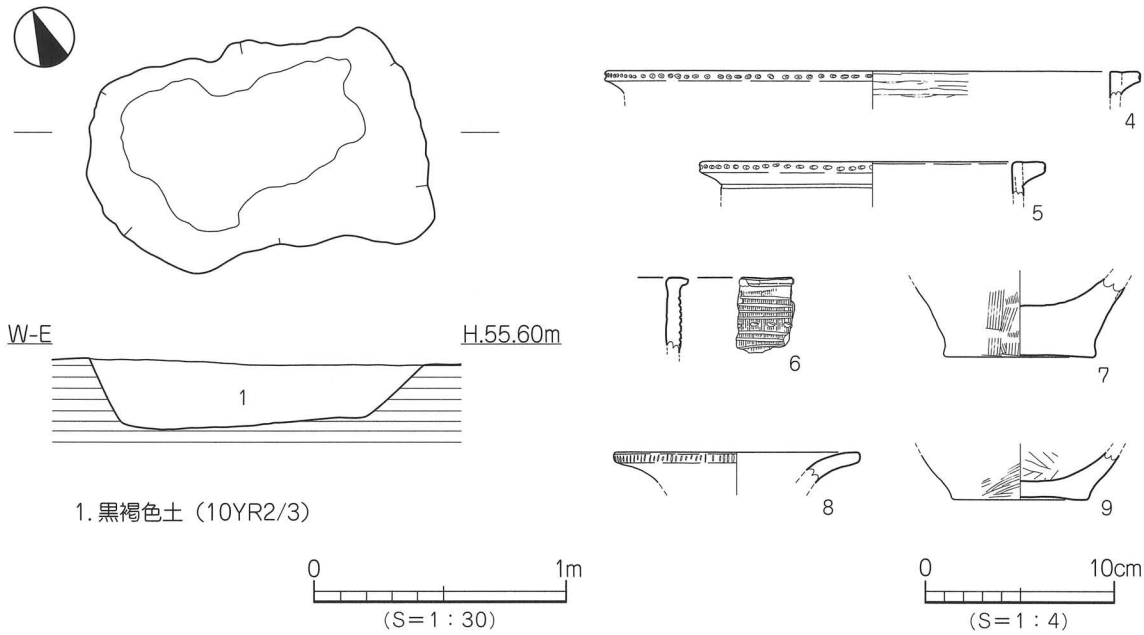
ＳＫ５（第62・65図）

調査区中央部のＥ・４～５区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈し、基底面に凹みをもつ。規模は長軸1.32ｍ、短軸0.84ｍ、深さ24㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は埋土中位から基底面にかけ弥生土器片の甕・壺が出土する。

出土遺物（第65図、図版24）

４～９は弥生土器である。４～７は甕で、４・５は口縁端部の貼付凸帯に刺突文が巡る。６は口縁部に櫛描直線文、その中間に刺突文が巡る。７は平底の底部外面に刷毛目調整が施される。８・９は壺で、８は外反する口縁部の端部に刻目が巡る。９は平底の底部で内外面にミガキ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代前期後半とする。



第65図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図

２）性格不明遺構

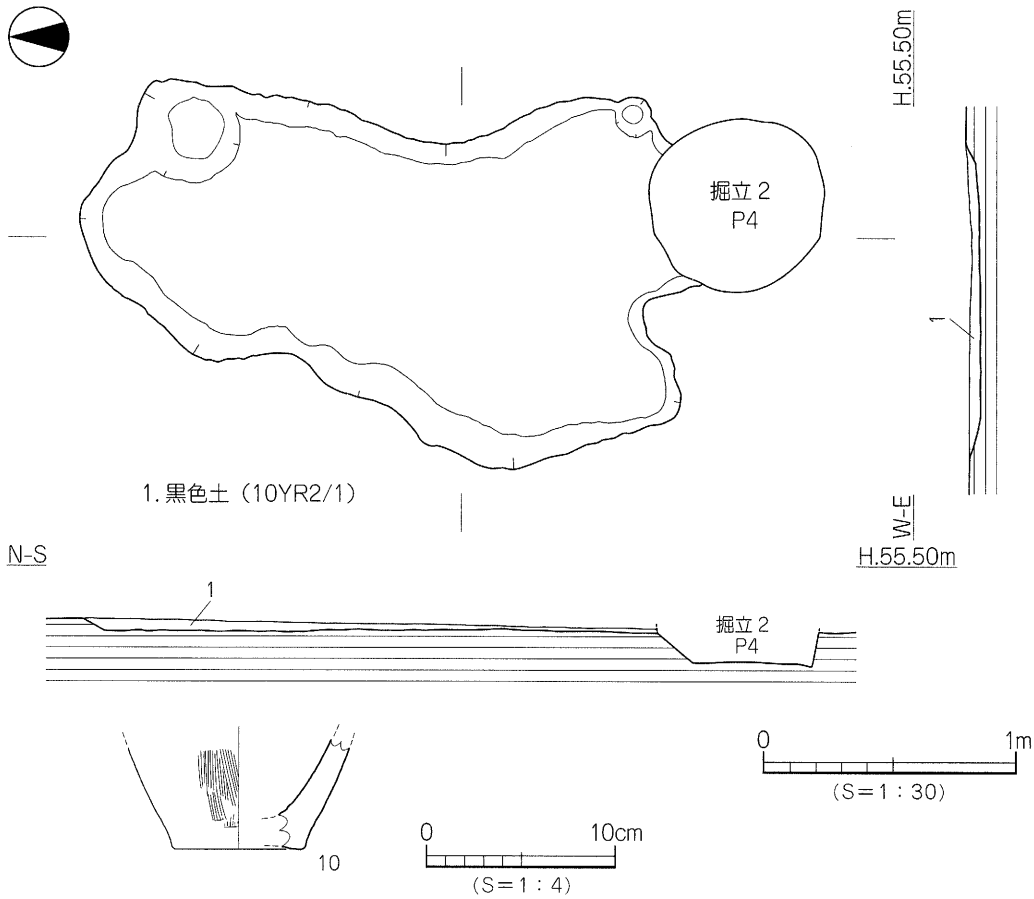
ＳＸ１（第62・66図）

調査区南東部のＣ・１～２区に位置し、掘立２に切られる。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸2.3ｍ、短軸1.11ｍ、深さ６㎝を測る。埋土は黒色土の単一層である。遺物は基底面から弥生土器の甕・壺片が出土する。

出土遺物（第66図）

10は甕の底部で、外面にハケ目調整、内面にナデ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後半とする。

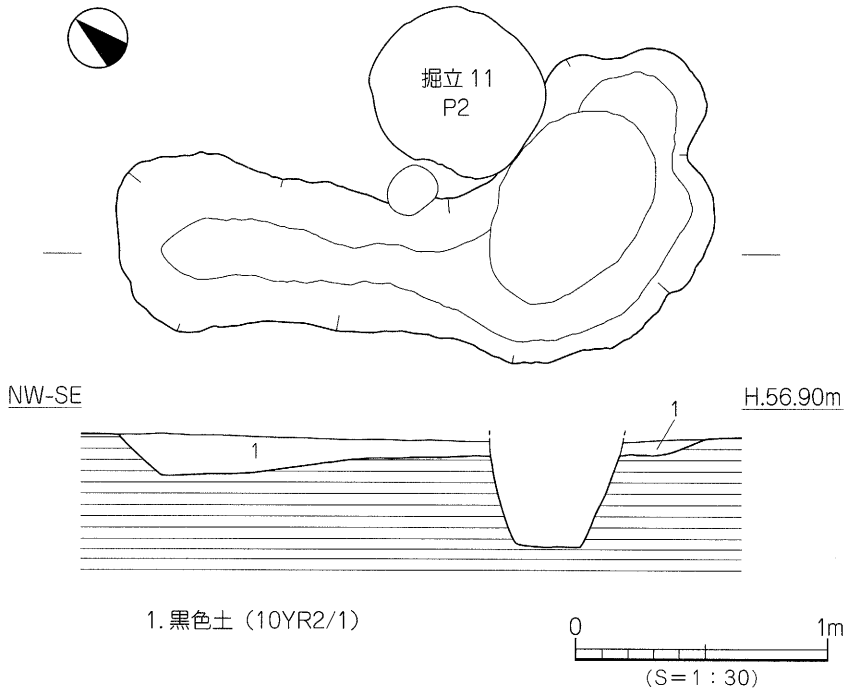


第 66 図　ＳＸ1 測量図・出土遺物実測図

ＳＸ４（第 62・67 図）

調査区北東部のＦ～Ｇ・６区に位置し、掘立 11 に切られる。平面形態は不整Ｌ字形、断面形態はレンズ 状を呈する。規模は長軸 2.33 m、短軸 0.52 m、深さ５cmを測る。埋土は黒色土の単一層である。遺物は上位から弥生土器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＸ１と同一なことから弥生時代後期後半とする。



第 67 図　ＳＸ4 測量図

（２）古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居４棟、掘立柱建物 11 棟、溝１条、土坑３基、柱穴、性格不明遺構３基を検出した。

１）竪穴住居

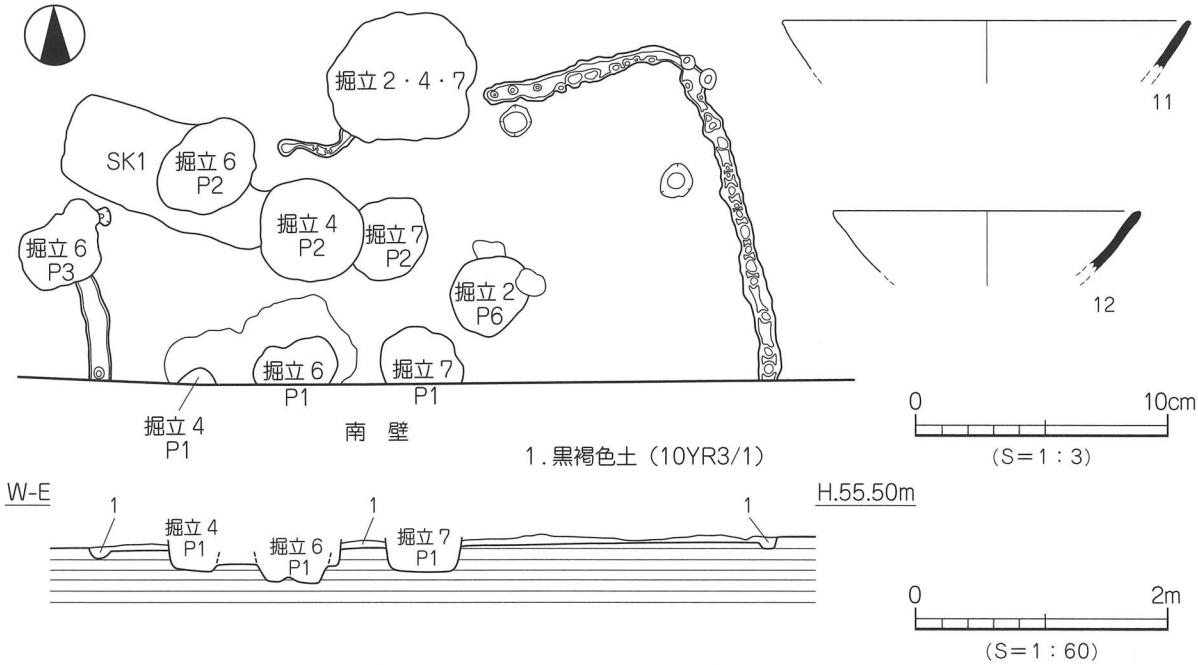
ＳＢ１（第 62・68 図）

調査区南端のＢ～Ｄ・１区に位置し、南側は調査区外に延び、掘立２・４・６・７、ＳＫ１に切られる。平面形態は方形を呈する。規模は東西 5.35 m、南北 2.4 m以上、深さ９cmを測る。床面での検出であり、内部施設は周壁溝だけを検出した。周壁溝は壁体に沿ってほぼ全周しており、幅４～ 28 cm、深さ４～ 15.5 cmを測り、周壁溝内から直径５～ 15 cmで断面形が窄まる杭状の小穴が多く検出した。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は床面直上から土師器や須恵器片が少量出土する。

出土遺物（第 68 図）

11・12 は須恵器の坏で、外反し、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、７世紀中葉とする。



第 68 図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図

ＳＢ２（第 62・69 図、図版 19）

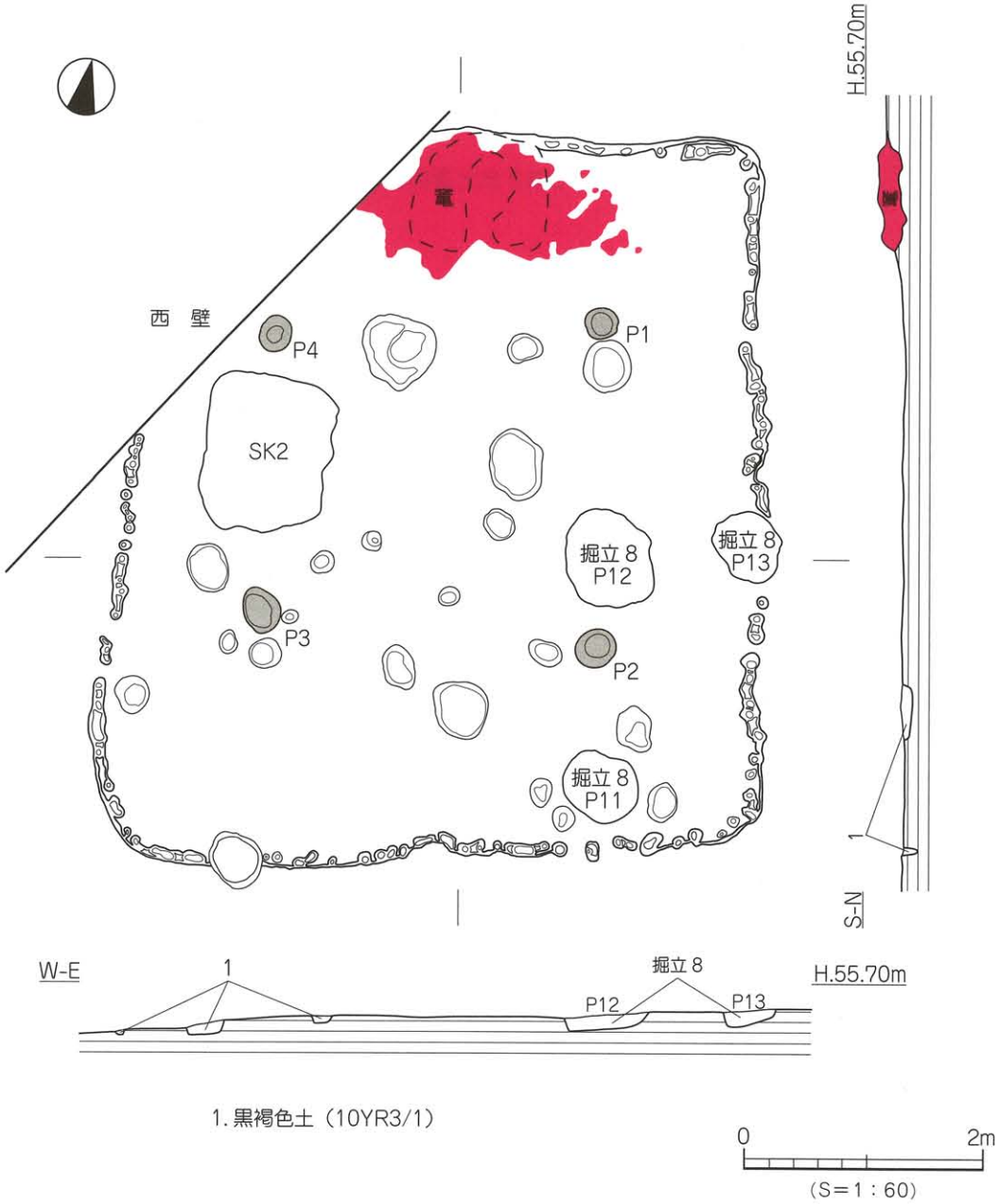
調査区中央部西端のＢ～Ｃ・４～５区に位置し、西側は調査区外に延び、掘立８・ＳＫ２に切られる。平面形態は方形を呈する。規模は東西 5.45 m、南北 5.4 m、深さ 5.0 cmを測る。北壁を除いた殆どが床面での検出であり、内部施設は主柱穴、周壁溝、貼り床、竈を検出した。主柱穴は４本柱で、直径 25 ～ 38 cm、深さ 24 ～ 41 cmを測る。周壁溝は壁体に沿ってほぼ全周しており、幅４～ 16 cm、深さ２～ 15 cmを測り、周壁溝内から直径６～ 15 cmで断面形が窄まる杭状の小穴も検出した。貼り床は凹凸をもつ全域で検出し、黒褐色土に黄色土を多含する土が凹みに貼られている。竈は住居内の北壁中央部付近に位置しており、平面形態は馬蹄形、断面形態は台形状を呈し、周囲には焼土や粘土層が散乱する。規模は幅 1.1 m、短奥行き 0.98 m、高さ 21 cmを測り、竈の下には平面形態が不整楕円形で断面形態がレンズ状の浅い凹みをもつ。竈内の基底面付近には黒褐色土に僅かに炭を含んでいる。

遺構埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は埋土の残存する北壁付近から土師器や須恵器片が出土しており、竈の上部から土師器の甕・甑・椀、須恵器の坏身が出土した。

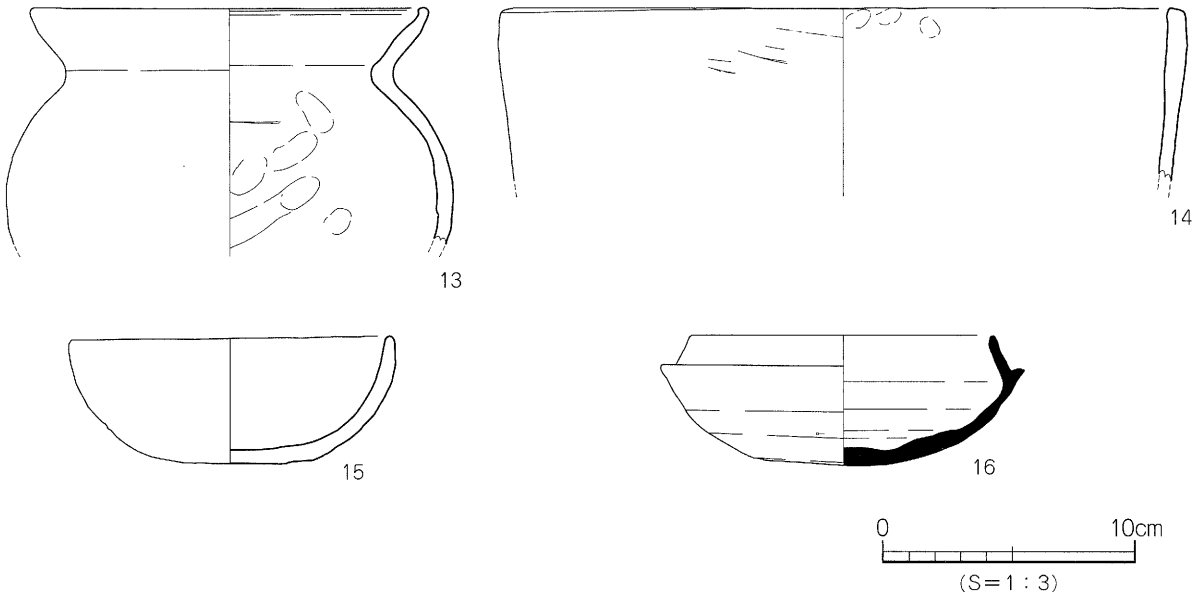
出土遺物（第70図、図版24）

13～15は土師器である。13は壺で、内湾する胴部に口縁部は「く」字状を呈し、口縁端部は丸く納まる。口縁部は横ナデ調整、胴部内面はナデ調整が施される。14は甑の口縁部で内外面にナデ調整が施される。15は椀で、平底の底部から内湾して立ち上がり口縁端部は丸く納まる。16は須恵器の坏身で、受部端は凹み、立ち上がりは内傾し、口縁端部は内傾する段を有する。

時期：出土した須恵器の特徴から、6世紀初頭とする。



第69図　ＳＢ2測量図



第70図　ＳＢ2出土遺物実測図

ＳＢ３（第62・71図）

調査区北東部のＥ～Ｆ・４～５区に位置し、現代坑・暗渠・掘立11・ＳＤ４・５・８に切られる。平面形態は方形を呈する。規模は東西4.25ｍ、南北4.5ｍ、深さ９cmを測る。床面での検出であり、内部施設は主柱穴、周壁溝、貼り床を検出し、北壁中央部に壁体より外方に浅い突出部をもち焼土・炭を検出した。主柱穴は４本柱を検出した。直径33～41cm、深さ28～31cmを測り、すべての柱穴に柱痕が残る。周壁溝は壁体に沿ってほぼ全周しており、幅２～20cm、深さ４～15cmを測る。貼り床は凹凸をもつ全域で検出し、黒褐色土に黄色土を多含する土が凹みに貼られている。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は床面付近から土師器や須恵器の破片が少量出土した。

出土遺物（第71図、図版25）

17は須恵器の坏蓋で、天井部境に稜を有し、口縁端部は内傾する段をもつ。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。

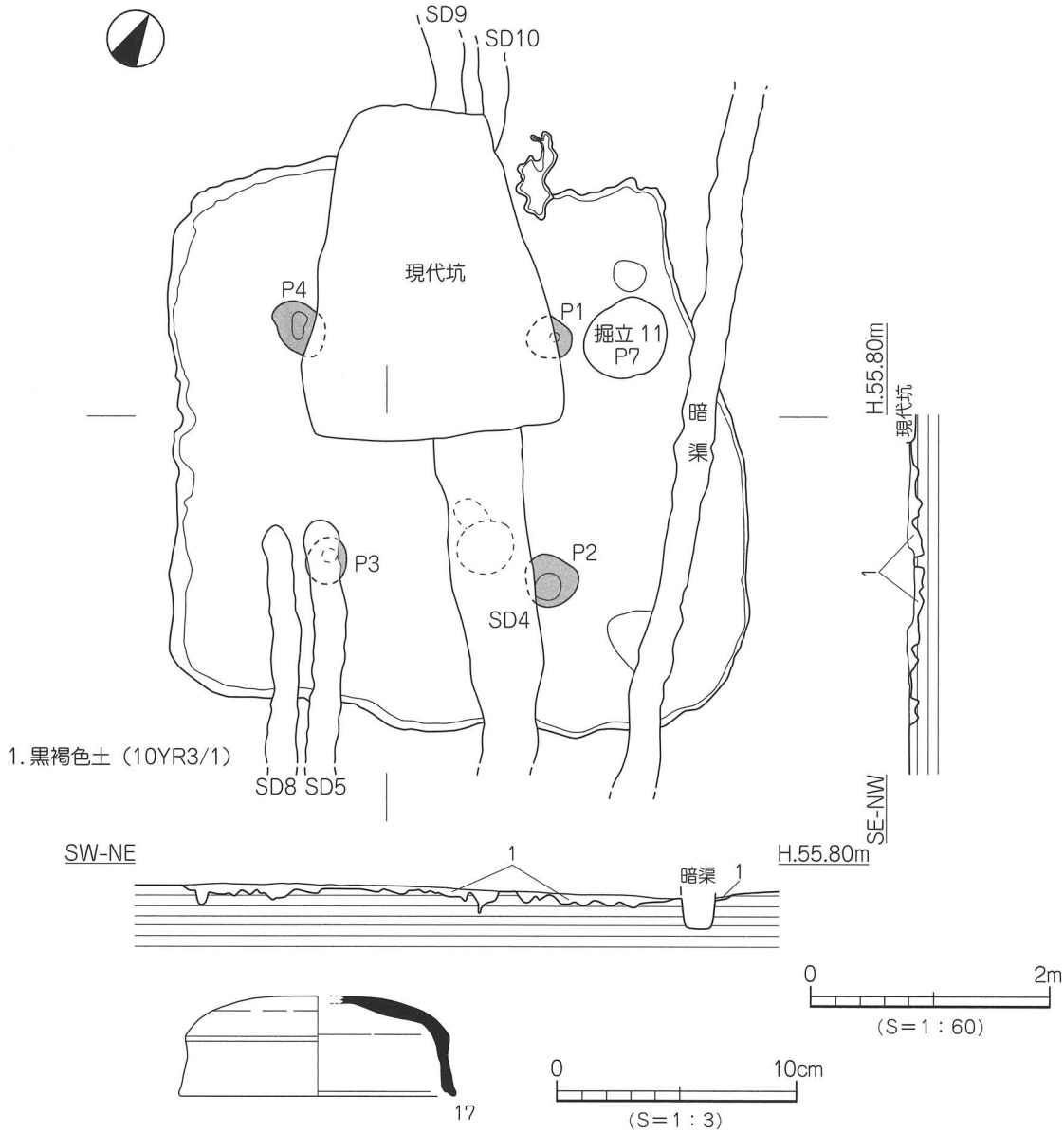
ＳＢ４（第62・72図、図版23）

調査区北部のＥ～Ｆ・６～７区に位置し、北東角部だけの検出である。平面形態は方形を呈し、規模は東西1.4ｍ以上、南北3.1ｍ以上、深さ９cmを測る。床面での検出であり、内部施設は、周壁溝、貼り床を検出した。周壁溝は壁体に沿って、幅４～29cm、深さ５～８cmを測る。貼り床は、住居内の浅い凹みに黒褐色土に黄色土を多含する土が貼られている。遺構埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は貼り床上面から土師器の壺が据えられた状態で出土した。

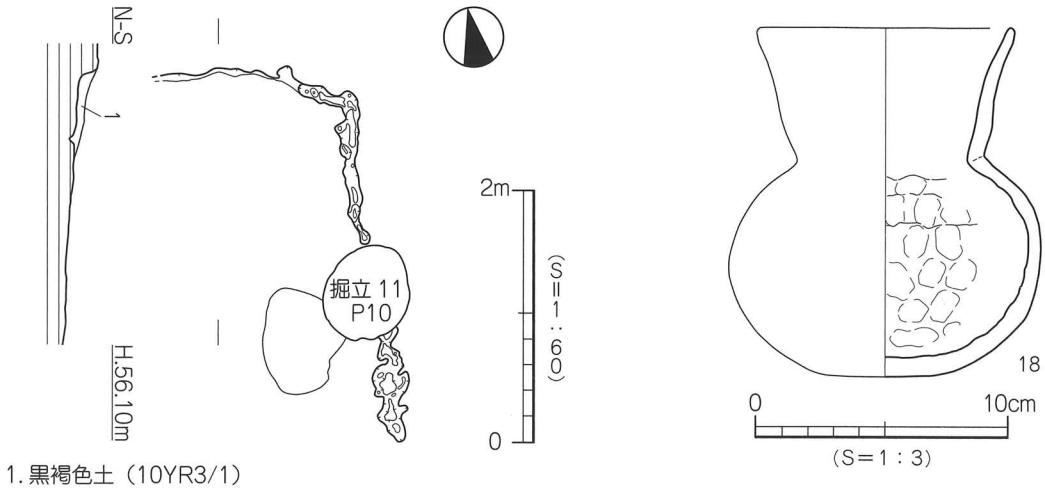
出土遺物（第72図、図版25）

18は小型丸底壺の完存品で、球状の胴部に外反する口縁部をもつ。胴部の内外面にナデ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、古墳時代後期前半とする。



第 71 図　ＳＢ3 測量図・出土遺物実測図



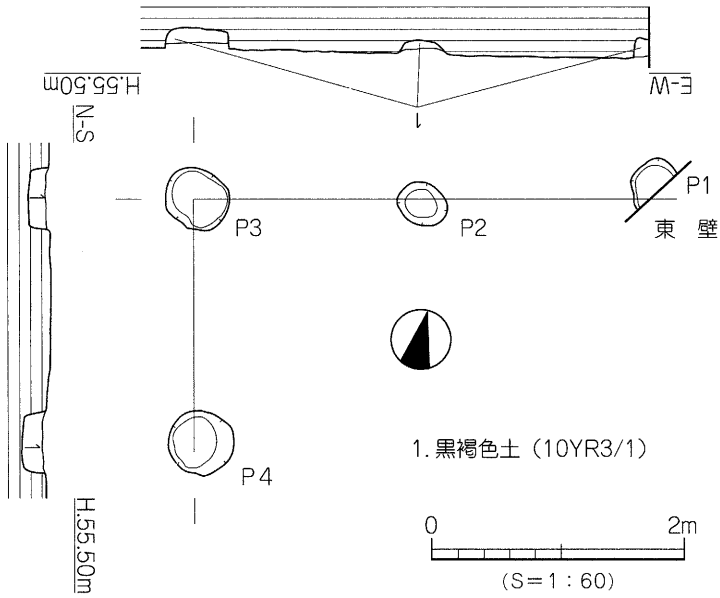
第 72 図　ＳＢ4 測量図・出土遺物実測図

２）掘立柱建物

掘立１（第62・73図）

調査区南東隅部のＤ・１区に位置し、東側は調査区外に延びる。東西２間以上×南北１間以上で、主軸はＮ-73°-Ｅを指向する。規模は東西3.7ｍ以上、柱間1.8～1.9ｍ、南北２ｍ以上、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径34～53㎝、深さ10～21㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

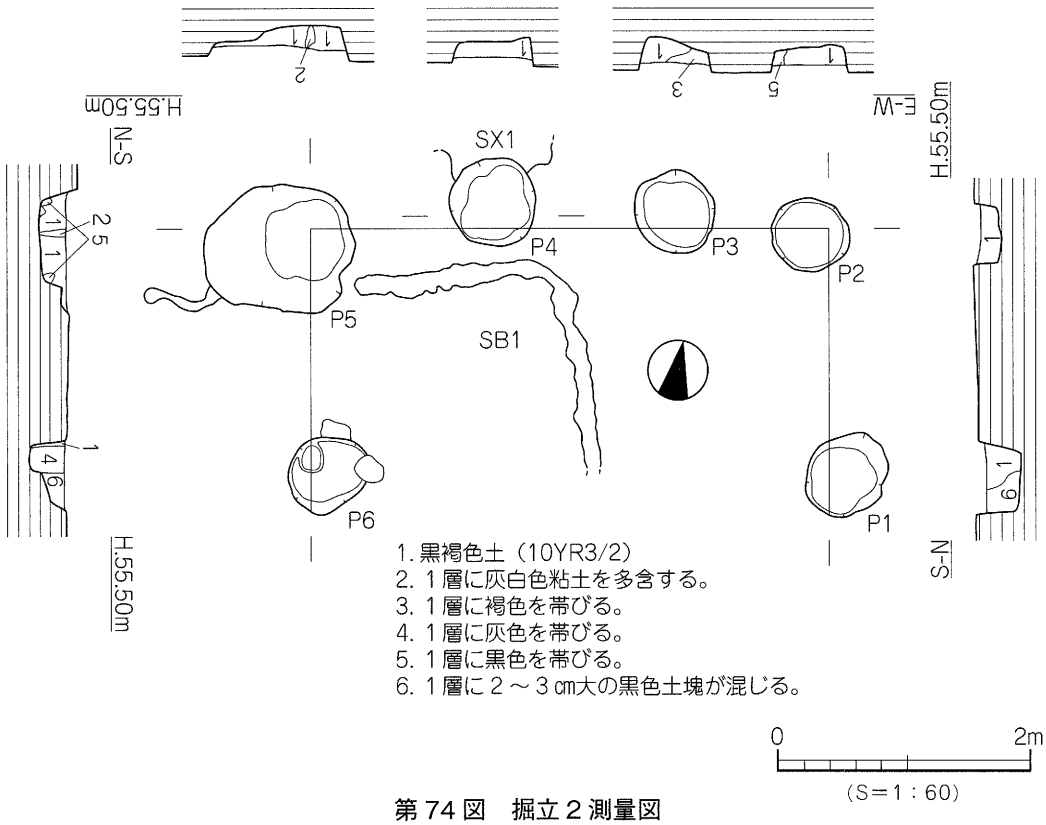
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が掘立８と同一なことから７世紀後半とする。



第73図　掘立１測量図

掘立２（第62・74図）

調査区南東部のＣ～Ｄ・１区に位置し、ＳＢ１・ＳＸ１を切り、南側は調査区外に延びる。東西３間×南北１間以上の東西棟で、主軸はＮ-80°-Ｅを指向する。規模は桁行4.1ｍ、柱間１～1.5ｍ、梁行2.0ｍ以上、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径56～78㎝、深さ21～40㎝を測る。



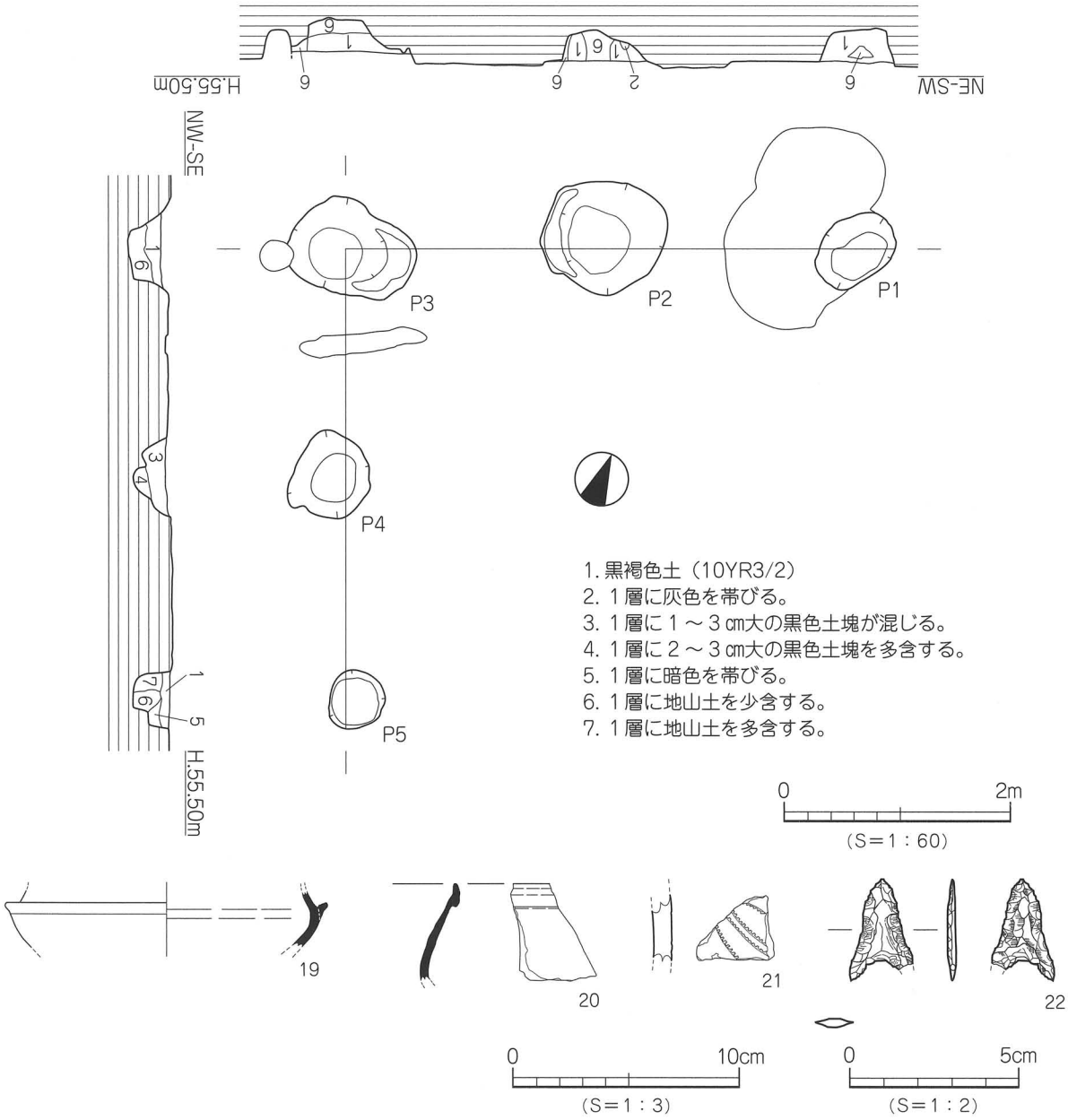
第74図　掘立２測量図

埋土は黒褐色土であり、Ｐ４・６には直径20㎝の柱痕を検出し、Ｐ４からは基底面に扁平な石を据えその上に柱を建てていた。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が掘立３と同一なことから６世紀初頭とする。

掘立３（第62・75図）

調査区南東部のＤ～Ｅ・１～３区に位置し、東側は調査区外に延びる。東西２間以上×南北２間以上で、主軸はＮ-69°-Ｅを指向する。規模は東西4.6ｍ以上、柱間2.2～2.4ｍ、南北4.0ｍ以上、柱間2.0ｍ、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径48～115㎝、深さ30～34㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が少量と混入品の弥生土器片と石鏃１点が出土する。



第75図　掘立３測量図・出土遺物実測図

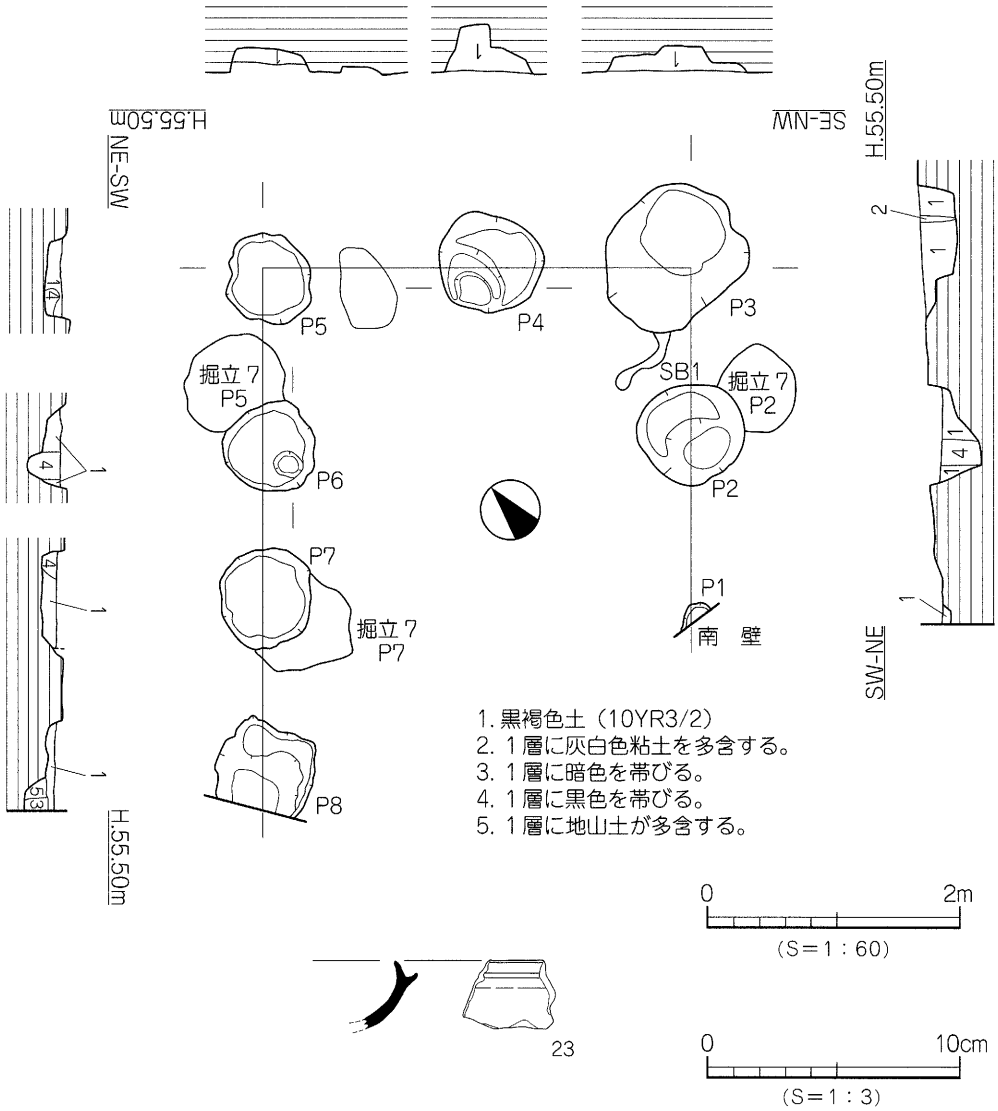
出土遺物（第75図、図版25）

19・20は須恵器で、19は受部端が凹み立ち上がりは内傾する。20は甕の口縁部で端部が下方に肥厚される。焼成不良で軟質である。21は混入品。弥生土器の壺の上胴部片で、貝殻による木葉文が施される。22は混入品で凹基式の打製石鏃で、長さ3.0㎝、幅1.85㎝、厚み0.27㎝、重さ1.104ｇを測り、サヌカイト製である。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。

掘立４（第62・76図）

調査区南端中央部のＢ～Ｃ・１～２区に位置し、ＳＢ１・掘立７を切り、南側は調査区外に延びる。東西２間×南北３間以上の南北棟で、主軸はＮ-77°-Ｅを指向する。規模は桁行4.2ｍ以上、柱間１～1.6ｍ、梁行3.4ｍ、柱間1.7ｍ柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径62～83㎝、深さ７～40㎝を測る。埋土は黒褐色土であり、Ｐ２・６・８には直径18～20㎝の柱痕を検出した。遺物は土師器片・須恵器片が出土する。



第76図　掘立４測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第76図）

23は須恵器の坏身で、受部は凹み口縁部は内傾し、端部は丸く納まる。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀中頃とする。

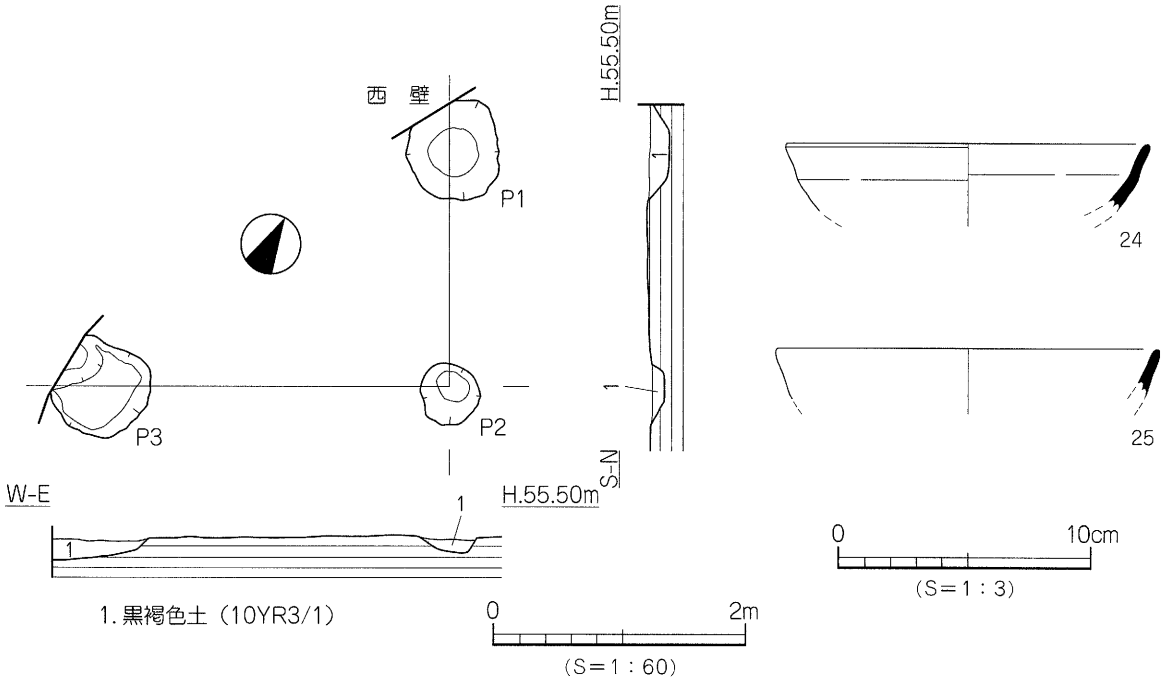
掘立５（第62・77図）

調査区南西部のＡ～Ｂ・２～３区に位置し、西側は調査区外に延びる。東西１間以上×南北１間以上で、主軸はＮ-62°-Ｅを指向する。規模は東西2.8ｍ以上、南北1.9ｍ以上、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径48～82cm、深さ10～16cmを測り、３基とも基底面から根石を検出した。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第77図）

24・25は須恵器の無蓋高坏で、外反する口縁部に端部は丸く納まる。内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、７世紀中葉とする。



第77図　掘立５測量図・出土遺物実測図

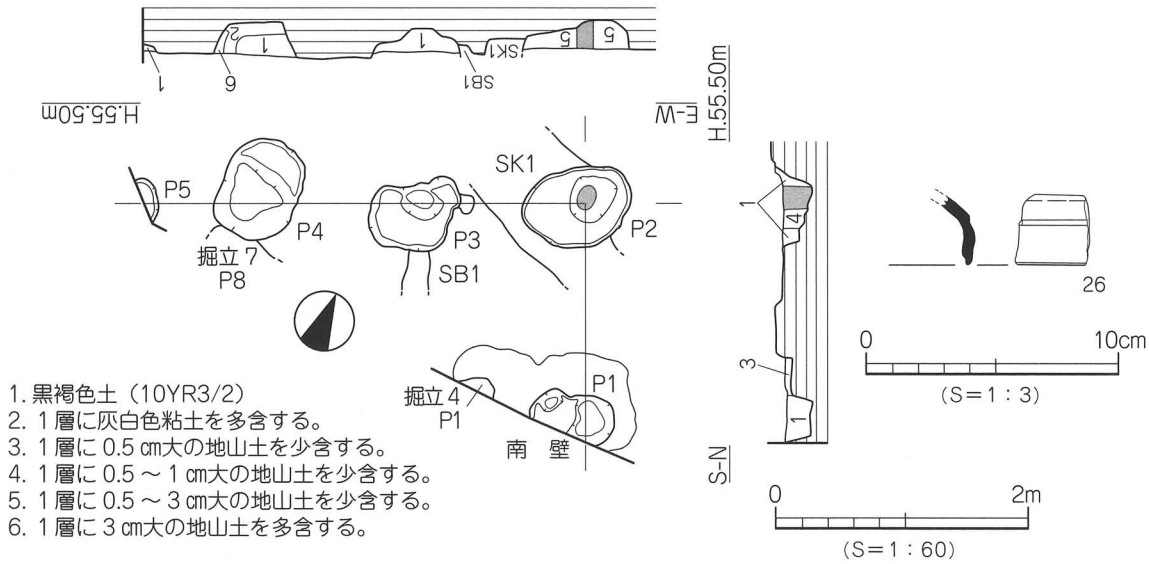
掘立６（第62・78図）

調査区南端中央部のＢ～Ｃ・１区に位置し、ＳＢ１・ＳＫ１を切り、南側は調査区外に延びる。東西３間以上×東西１間以上の東西棟で、主軸はＮ-67°-Ｅを指向する。規模は桁行3.5ｍ以上、柱間１～1.3ｍ、梁行1.7ｍ以上、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径38～87cm、深さ20～27cmを測る。埋土は黒褐色土であり、Ｐ２から直径18cmの柱痕を検出した。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第78図）

26は須恵器の坏蓋で、天井部境に明瞭な稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。

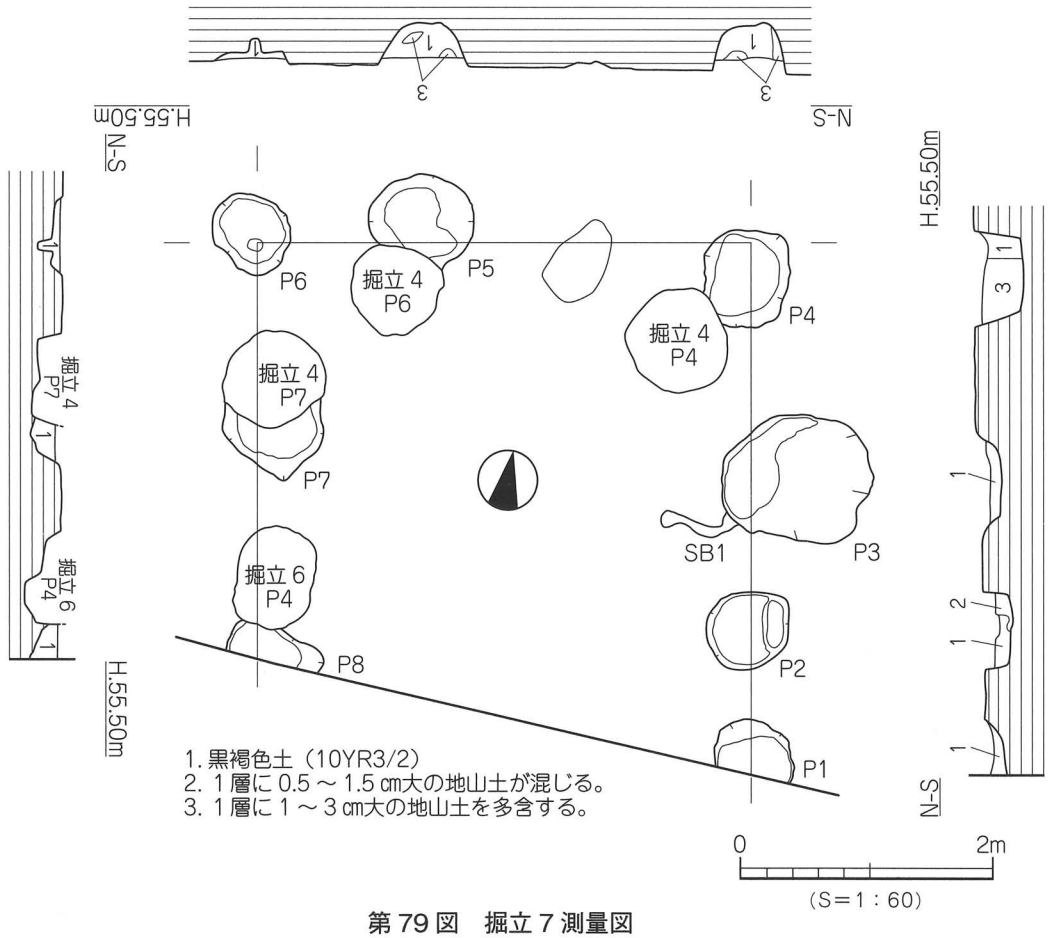
時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。



第 78 図　掘立６測量図・出土遺物実測図

掘立７（第 62・79 図）

調査区南端中央部のＢ～Ｃ・１区に位置し、ＳＢ１を切り、掘立４・６に切られ、南側は調査区外に延びる。東西３間×南北３間以上の南北棟で、主軸はＮ -41°- Ｅを指向する。規模は桁行 4.2 m 以上、柱間 1.1 ～ 1.8 m、梁行 3.9 m、柱間 1.2 ～ 1.5 m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 41 ～ 78 ㎝、深さ 18 ～ 43 ㎝を測る。埋土は黒褐色土で、Ｐ４・６から直径 16 ～ 20 ㎝の柱痕を



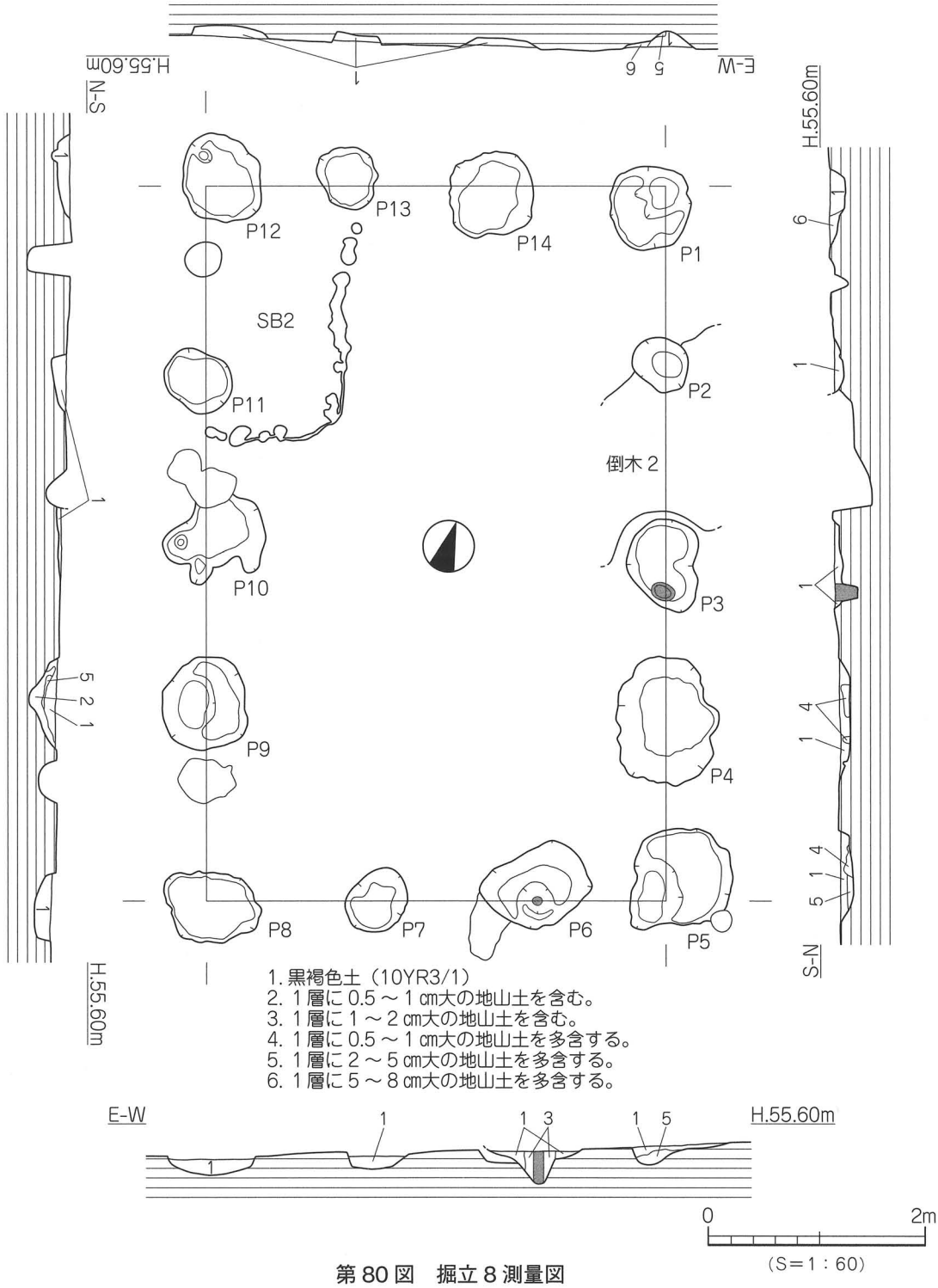
第 79 図　掘立７測量図

検出した。遺物は土師器・須恵器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、遺構の切り合いから掘立６より古い６世紀初頭以前とする。

掘立８（第62・80図）

調査区中央部のＣ～Ｄ・３～５区に位置し、ＳＢ２・倒木２を切る。東西３間×南北４間の南北棟で、主軸はＮ-71°-Ｅを指向する。規模は桁行6.6 m、柱間1.4～1.8 m、梁行4.3 m、柱間1.2～1.6 m、



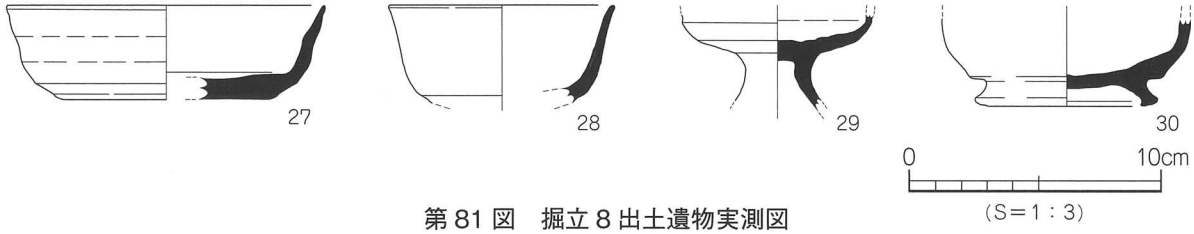
第80図　掘立８測量図

柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 46 ～ 119 cm、深さ８～ 31 cmを測る。埋土は黒褐色土で、Ｐ３・６から直径 10 ～ 13 cmの柱痕を検出した。遺物は土師器・須恵器片やサヌカイトや緑色片岩の剥片が出土する。

出土遺物（第 81 図）

27 ～ 30 は須恵器である。27・28 は坏身で、外反して立ち上がる。29 は無蓋高坏で坏底部内面に螺旋状に粘土紐の巻き上げ痕が見られる。30 は埦で、断面台形状の高台の内底面が接地する。

時期：出土した須恵器の特徴から、７世紀後半とする。



第 81 図　掘立８出土遺物実測図

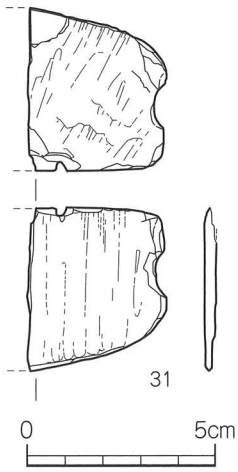
掘立９（第 62・82 図）

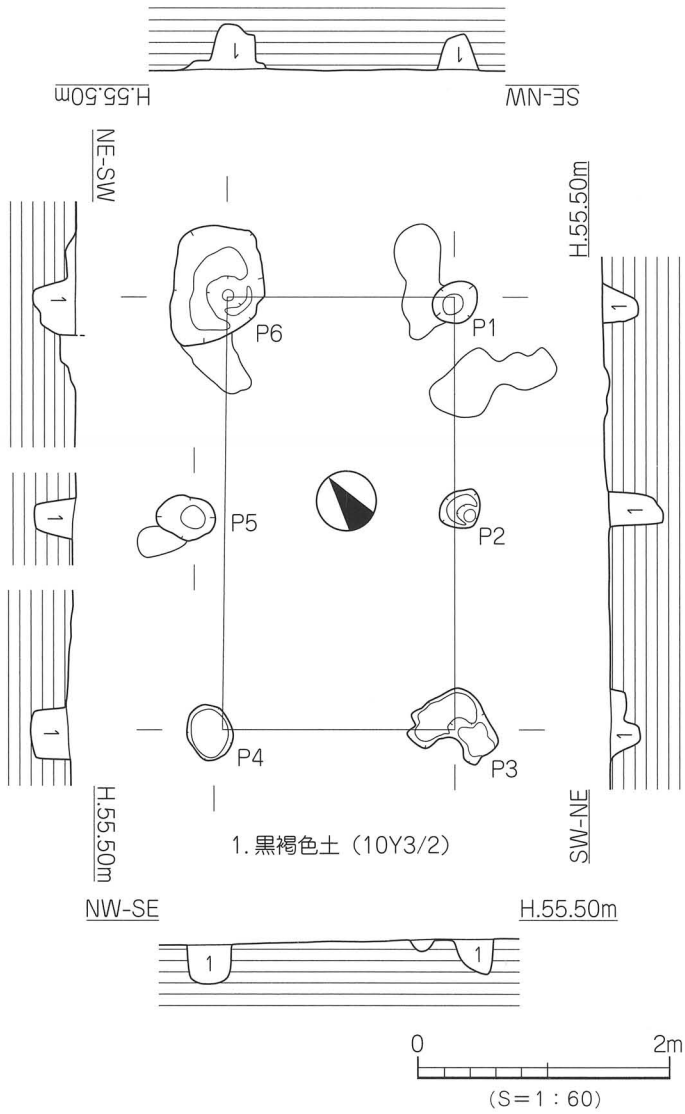
調査区南東部のＤ・２～３区に位置する。南北２間×東西１間以上の南北棟で、主軸はＮ -39°- Ｅを指向する。規模は桁行 3.67 m、柱間 1.64 ～ 2.03 m、梁行 1.48 m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 42 ～ 52 cm、深さ 17 ～ 38 cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器片に混じり、石庖丁が出土する。

出土遺物（第 82 図、図版 25）

31 は石庖丁で、約 2/3 が欠失している。残存する端部には抉れがみられ、刃部も一部見られる。残存長 3.7 cm、幅 4.3 cm、厚さ 0.31 cm、重さ 9.773 g を測り、緑色片岩製である。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、遺構の切り合いから掘立８より古い７世紀後半以前とする。



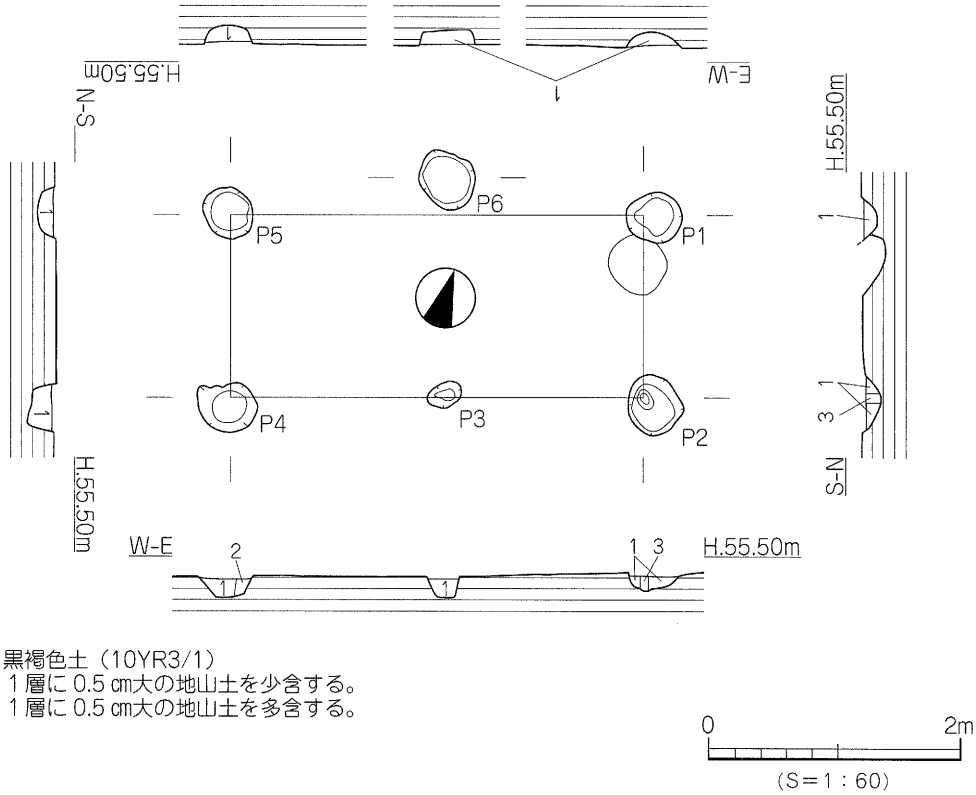


第 82 図　掘立９測量図・出土遺物実測図

掘立 10（第 62・83 図）

調査区南東部のＢ～Ｃ・３～４区に位置する。南北２間×東西１間の東西棟で、主軸はＮ -76°- Ｅを指向する。規模は桁行 3.27 m、柱間 1.7 ～ 1.57 m、梁行 1.45 m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 42 ～ 52 cm、深さ 17 ～ 38 cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が掘立３と同一なことから６世紀初頭とする。



第 83 図　掘立 10 測量図

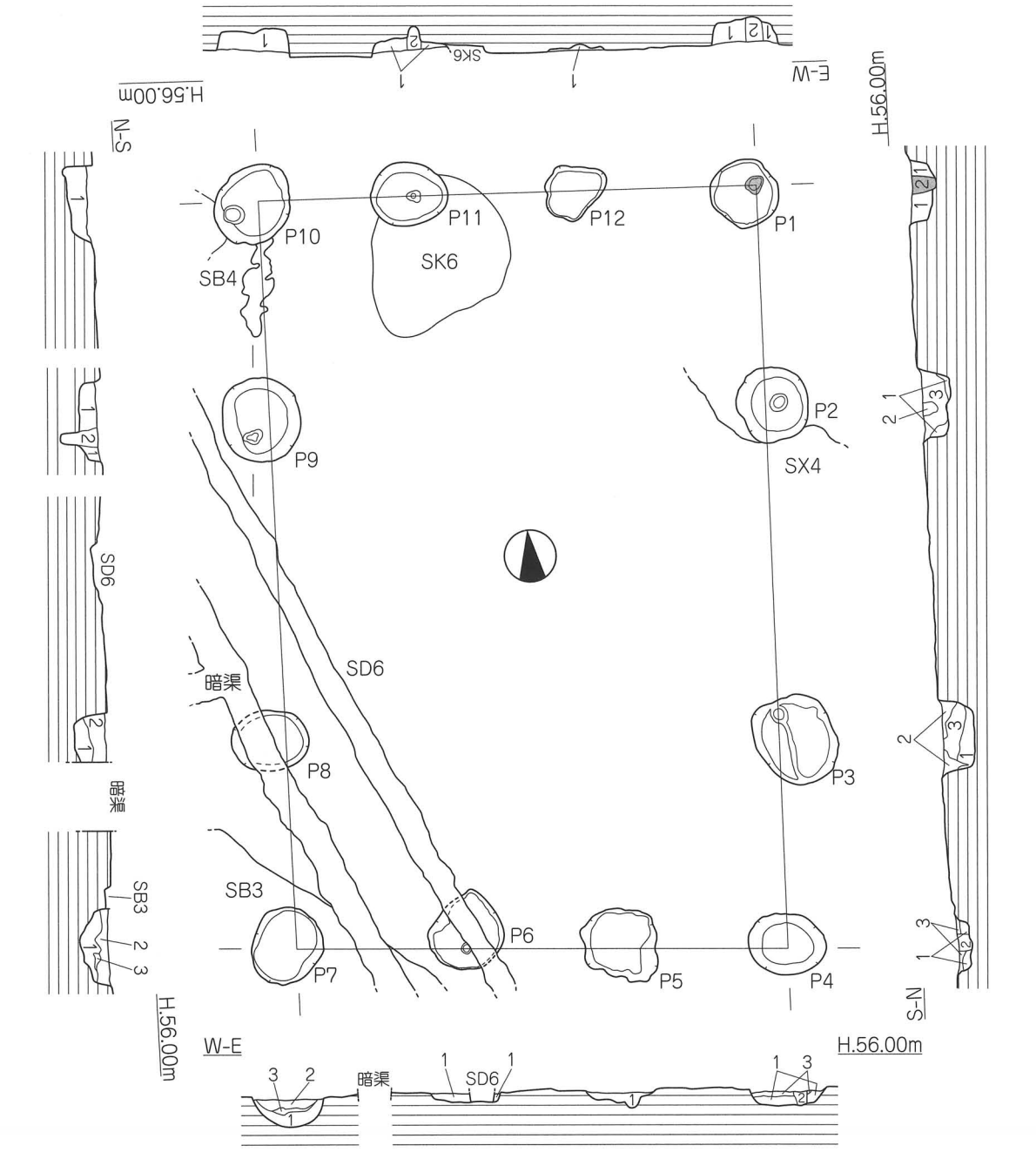
掘立 11（第 62・84 図）

調査区北東部のＦ～Ｇ・５～７区に位置し、ＳＢ３・４、ＳＫ６、ＳＸ４を切り、ＳＤ６、暗渠に切られる。東西３間×南北３間の南北棟で、主軸はＮ -94°- Ｅを指向する。規模は桁行 6.65 m、柱間 1.8 ～ 2.8 m、梁行 4.7 m、柱間 1.5 ～ 1.6 m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 42 ～ 75 cm、深さ 5 ～ 37 cmを測る。Ｐ９・11 から直径８～ 10 cmの柱痕を検出した。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器片や緑色片岩の剥片が出土する。

出土遺物（第 84 図）

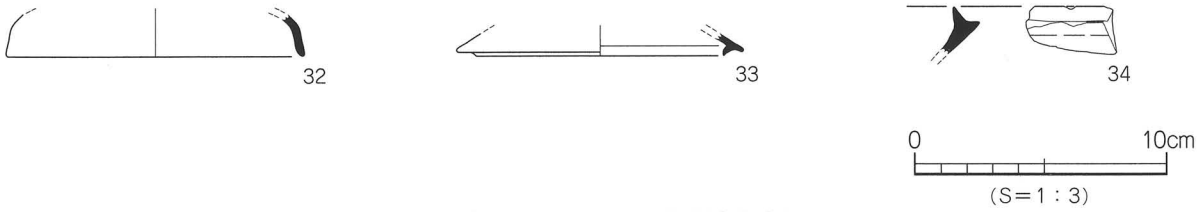
32 ～ 34 は須恵器である。32・33 は坏蓋で、32 は口縁端部が丸く納まり、33 はかえりが接地する。34 は坏身で、立ち上がりは内傾し口縁端部は尖り気味である。

時期：出土した須恵器の特徴から、７世紀前葉とする。



1. 黒褐色土（10YR3/1）
2. １層に褐灰色土が混じる。
3. １層に明褐灰色砂質土が混じる。

0　2m
（S＝1：60）



0　10cm
（S＝1：3）

第 84 図　掘立 11 測量図・出土遺物実測図

3）溝

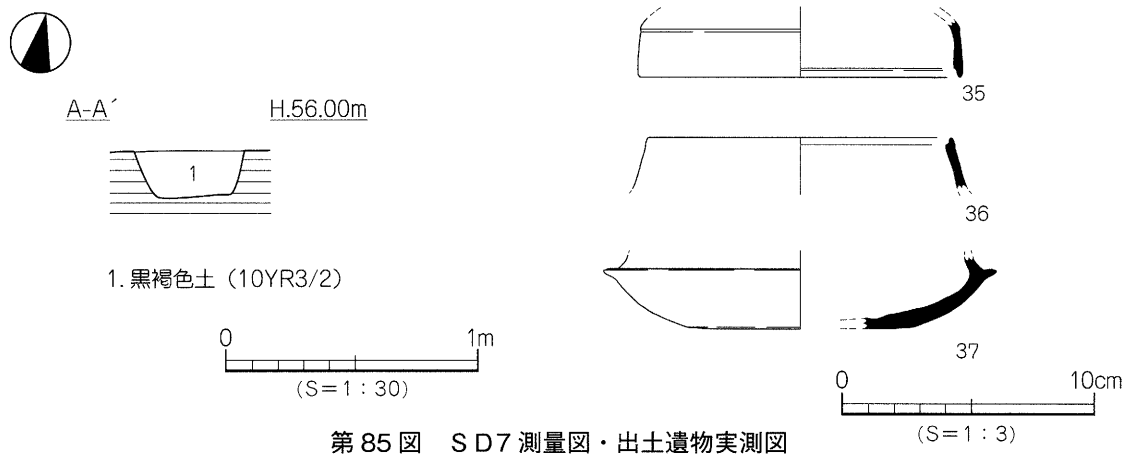
ＳＤ７（第85図）

調査区北東隅のＧ・６～７区に位置し、両端は調査区外に延びる。主軸はＮ-12°-Ｗで、やや湾曲しながら南北方向を指向する。規模は検出長6.75 m、上場幅0.43～0.57 m、深さ９～21 cmを測り、北から東へ約７cmの比高差をもつ。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器の小片が出土する。

出土遺物（第85図）

35～37は須恵器である。35は坏蓋で、天井部境に緩やかな稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。36・37は坏身で、36は口縁端部に内傾する段を有する。37は受部端がやや凹む。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。

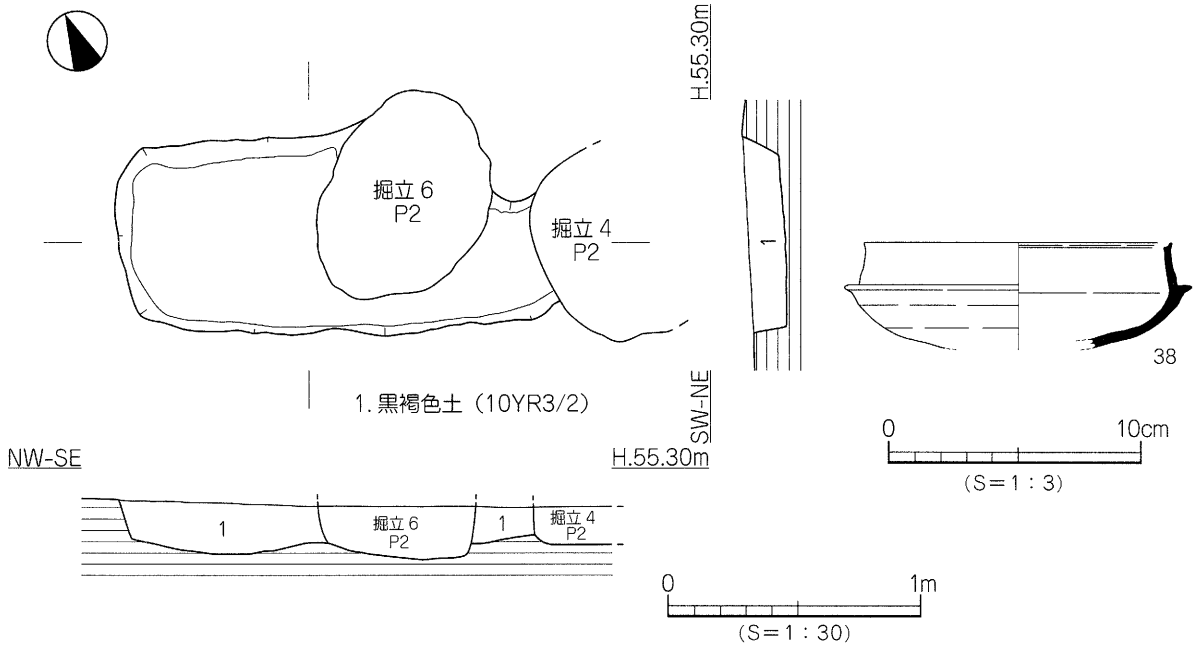


第85図　ＳＤ７測量図・出土遺物実測図

4）土坑

ＳＫ１（第62・86図）

調査区南側のＢ～Ｃ・１区に位置し、ＳＢ１を切り、掘立４・６に切られる。平面形態は長方形状、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.64 m、短軸0.78 m、深さ22 cmを測る。



第86図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器・須恵器片が出土する。

出土遺物（第86図）

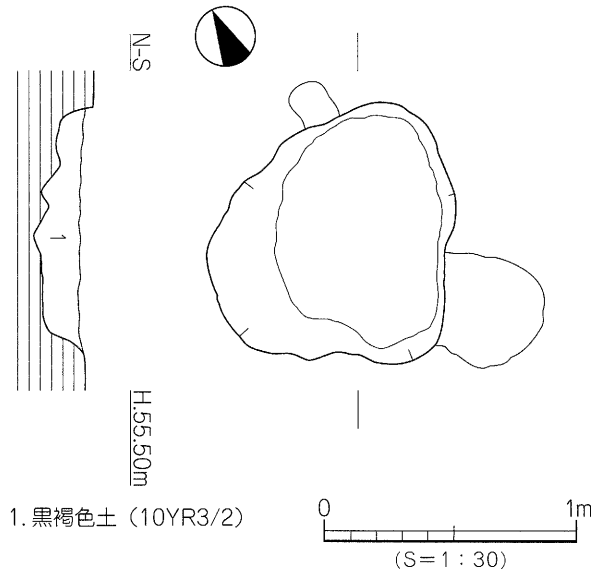
38は須恵器の坏身で、受部端が凹み口縁端部に内傾する段を有する。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。

ＳＫ３（第62・87図）

調査区南側のＢ・３区に位置し、柱穴を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸0.99 m、短軸0.93 m、深さ22 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＫ１と同一なことから６世紀初頭とする。

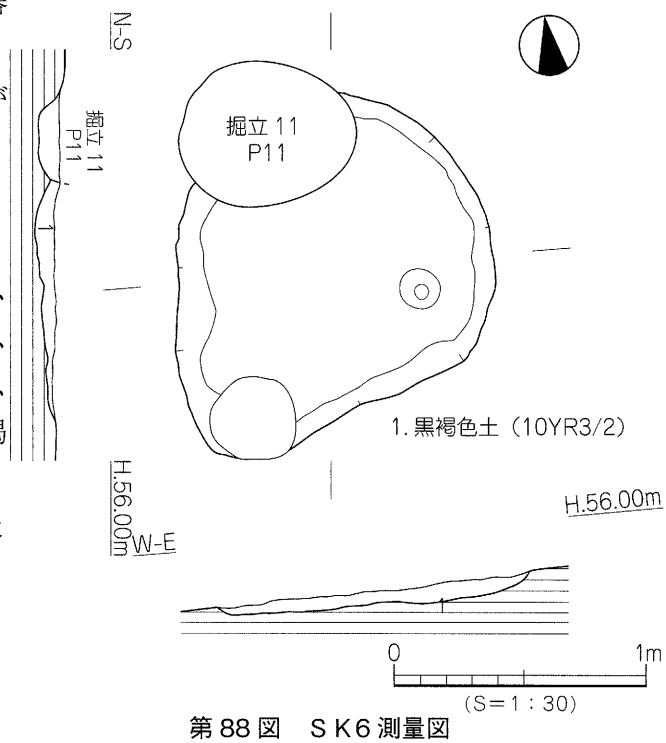


第87図　ＳＫ３測量図

ＳＫ６（第62・88図）

調査区北東部のＦ・６～７区に位置し、掘立11に切られる。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈す。規模は長軸1.32 m、短軸1.24 m、深さ９cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土からＳＫ１と同一なことから６世紀初頭とする。



第88図　ＳＫ６測量図

５）性格不明遺構

ＳＸ２（第62・89図）

調査区中央部のＤ・３～４区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈し、規模は長軸1.6 m、短軸0.7 m、深さ６cmを測る。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土から古墳時代としか判らない。

ＳＸ３（第62・90図）

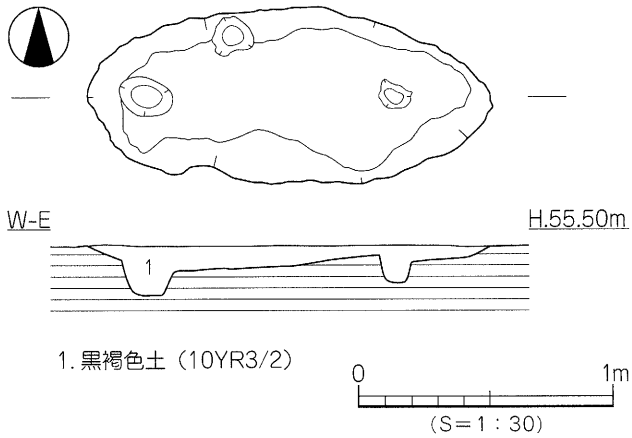
調査央部東端のＥ～Ｆ・４区に位置し、ＳＤ５・８に切られる。平面形態は不整形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸2.1 m以上、短軸1.0 m、深さ10 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器・土師器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、古墳時代としか判らない。

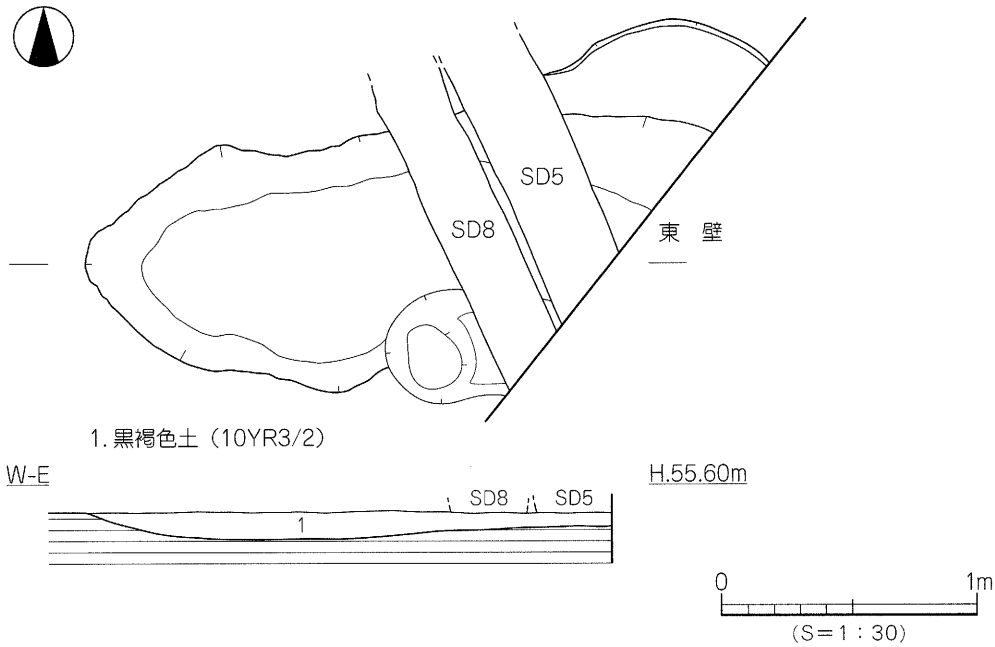
ＳＸ５（第62・91図）

調査区北東部のＦ・７区に位置し、柱穴に切られ、北側は調査区外に延びる。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸1.1ｍ以上、短軸0.85ｍ、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

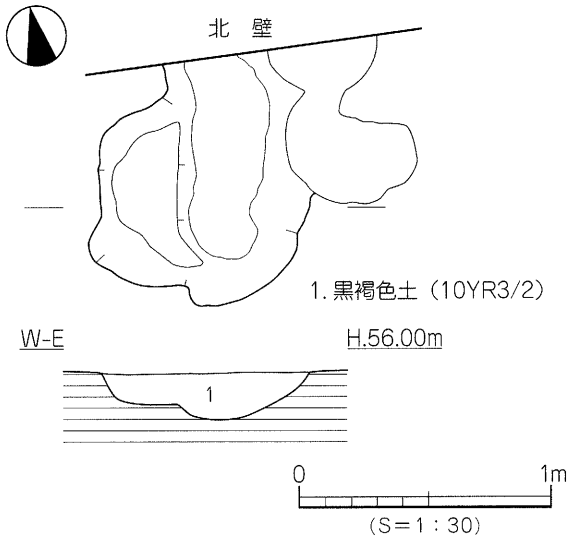
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から古墳時代としか判らない。



第89図　ＳＸ2測量図



第90図　ＳＸ3測量図



第91図　ＳＸ5測量図

（３）中世

中世の遺構は、土坑１基、溝９条を検出した。

１）溝

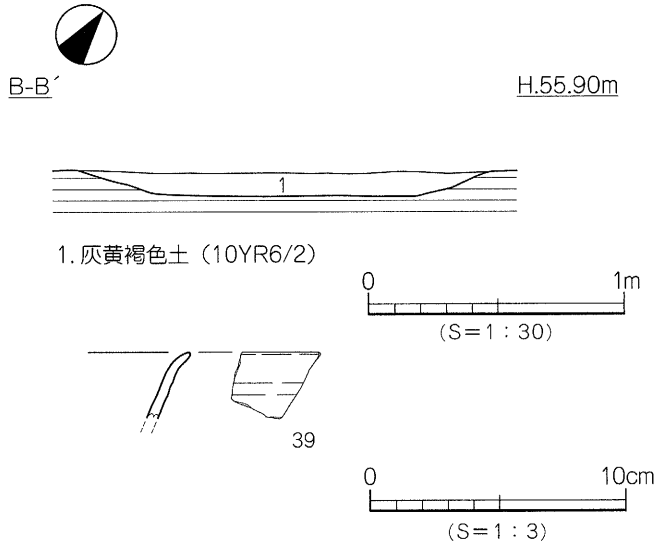
ＳＤ１（第92図）

調査区北西部のＤ・５～７区に位置し、暗渠に切られ、西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-33°-Ｗで南東から北西方向を指向する。規模は検出長7.33ｍ、上場幅1.3～1.81ｍ、深さ３～４cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器・須恵器の小片に混じり青磁碗が１点出土する。

出土遺物（第92図）

39は青磁の碗の口縁部で、内外面に施釉が施される。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。

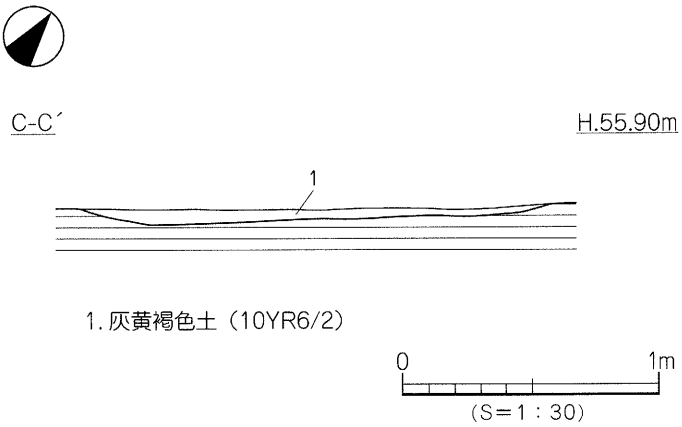


第92図　ＳＤ1 測量図・出土遺物実測図

ＳＤ２（第93図）

調査区北西部のＤ～Ｅ・６～７区に位置し、西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-40°-Ｗで南東から北西方向を指向する。規模は検出長7.22ｍ、上場幅1.6～1.84ｍ、深さ３～６cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。

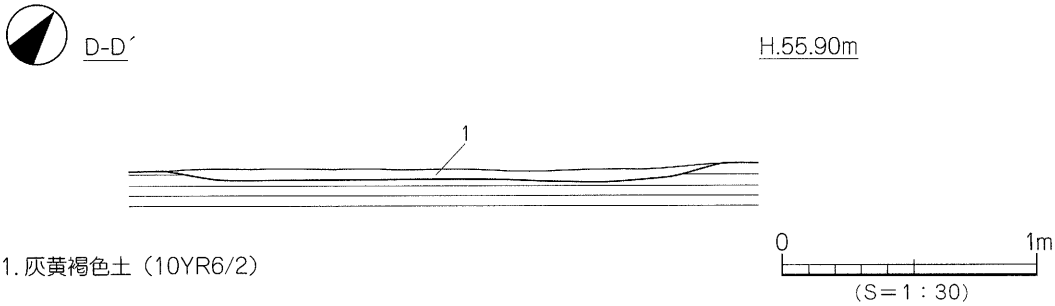


第93図　ＳＤ2 測量図

ＳＤ３（第94図）

調査区北西部のＤ～Ｅ・６～７区に位置し、西端は現代坑に切られる。主軸はＮ-30°-Ｅで南東から北西方向を指向する。規模は検出長7.4ｍ、上場幅1.12～1.94ｍ、深さ４～６cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器片に混じり、擂鉢が１点出土する。

時期：出土した擂鉢の特徴から、14世紀以降とする。

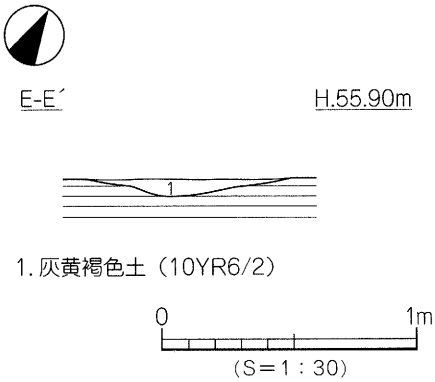


第94図　ＳＤ3測量図

ＳＤ４（第95図）

調査区北側のＥ～Ｆ・４～５区に位置し、現代坑に切られ、ＳＢ３を切る。主軸はＮ-32°-Ｅで南東から北西方向を指向する。規模は検出長4.64ｍ、上場幅0.3～0.74ｍ、深さ２～７cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。

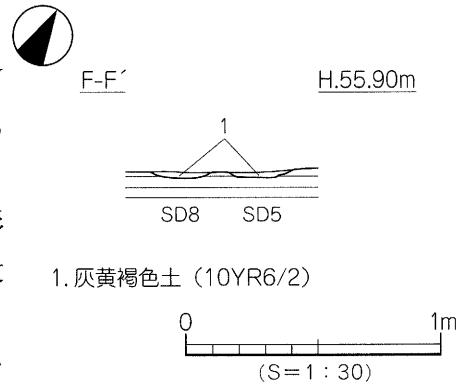


第95図　ＳＤ4測量図

ＳＤ５（第96図）

調査区中央部東側のＥ～Ｆ・４～５区に位置し、ＳＢ３・ＳＸ３を切り、東端は調査区外に延びる。主軸はＮ-28°-Ｗで、南東から北西方向を指向し、南隣りのＳＤ８と平行である。規模は検出長3.8ｍ、上場幅0.24～0.34ｍ、深さ２～６cmを測り、溝床は東から西へ約５cmの比高差をもつ。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は須恵器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。



第96図　ＳＤ5・8測量図

ＳＤ８（第96図）

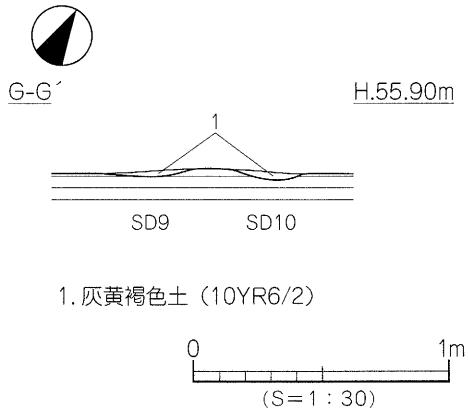
調査区中央部東側のＥ～Ｆ・４～５区に位置し、ＳＢ３・ＳＸ３を切り、東端は調査区外に延びる。主軸はＮ-28°-Ｗで南東から北西方向を指向し、北隣りのＳＤ５と平行である。規模は検出長3.7ｍ、上場幅0.2～0.28ｍ、深さ１～３cmを測り、溝床は東から西へ約２cmの比高差をもつ。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層となる。遺物は須恵器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。

ＳＤ９（第97図）

調査区北側のＥ・５～６区に位置し、暗渠・現代坑に切られる。主軸はＮ-35°-Ｗで南東から北西方向を指向し、北隣りのＳＤ10と平行である。規模は検出長4.1ｍ、上場0.2～0.4ｍ、深さ３～６cmを測り、溝床は西から東へ約２cmの比高差をもつ。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層となる。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。



第97図　ＳＤ9・10測量図

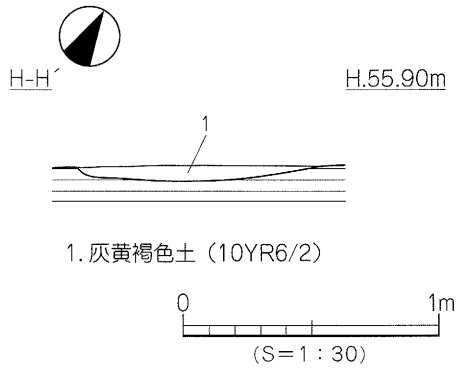
ＳＤ10（第97図）

調査区北西部のＤ～Ｅ・５～７区に位置し、暗渠・現代坑に切られる。主軸はＮ-37°-Ｗで南東から北西方向を指向し、北隣りのＳＤ９と平行である。規模は検出長10.66ｍ、上場幅0.16～0.36ｍ、深さ３～４cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層となる。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。

ＳＤ11（第98図）

調査区北西部のＤ～Ｅ・５～６区に位置し、暗渠に切られる。主軸はＮ-28°-Ｗで南東から北西方向を指向する。規模は検出長5.42ｍ、上場幅0.9～1.1ｍ、深さ６～８cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単一層である。出土遺物はない。



第98図　ＳＤ11測量図

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから14世紀以降とする。

２）土坑

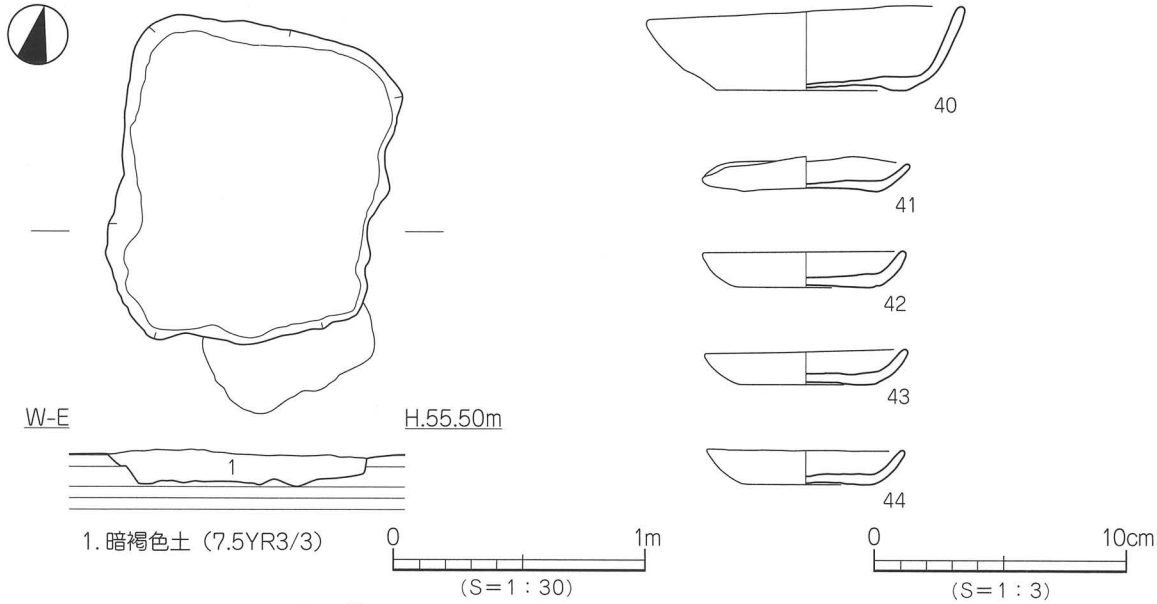
ＳＫ２（第62・99図、図版20）

調査区中央部西端のＢ～Ｃ・４区に位置し、ＳＢ２を切る。平面形態は長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.3ｍ、短軸1.03ｍ、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色土の単一層で、遺物は中央部よりやや北西側の基底面付近から土師器の坏１枚と皿４枚が並べられた状態で出土した。

出土遺物（第99図、図版25）

40～44は土師器である。40は坏で、底部に回転糸切り痕が見られる。41～44は皿で、41は全体に歪みがあり、44は焼成前の亀裂があり、41～44は内外面に回転ナデ調整が施され、底部に回転糸切り痕が残る。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀代とする。



第 99 図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

（4）近世以降

近世以降の遺構は、溝１条、暗渠を検出した。

1）溝

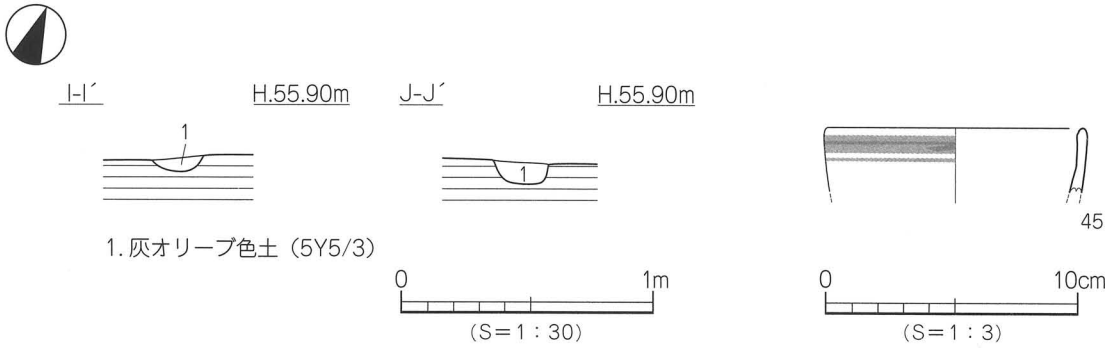
ＳＤ６（第 100 図）

調査区北側のＥ～Ｆ・４～７区に位置し、掘立 11 を切り、両端は調査区外に延びる。主軸はＮ-21°-Ｗで、南東から北西方向を指向し、暗渠と間隔 0.6 ～ 0.8 ｍで並行する。規模は検出長 14.6 ｍ、上場幅 0.18 ～ 0.3 ｍ、深さ６～ 11 ㎝を測り、溝床はほぼ水平である。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器の小片に混じり、青磁碗の口縁部片が１点出土する。

出土遺物（第 100 図、図版 25）

45 は白磁の染付碗で、内外面が施釉され口縁部外面に２条の条線が巡る。

時期：出土した磁器から、近世としか判らない。



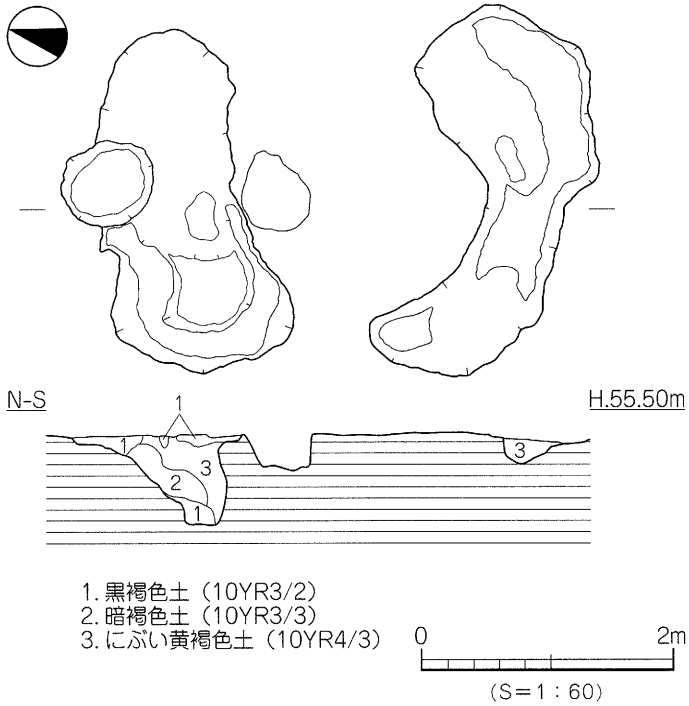
第 100 図　ＳＤ６測量図・出土遺物実測図

2）暗渠

調査区北側のＤ～Ｆ・４～７区に位置し、南北方向と東西方向に分岐して直線的に端部は調査区外に延び、西端は現代坑に切られる。主軸は南北方向がN-20°-Ｗで東西方向がN-85°-Ｗを指向し、

断面形態が方形状に掘られ、全域に拳大の砂岩質の円礫が溝の上面から床面にかけ密集した状態で詰められており、礫と礫の隙間を水が通る構造である。埋土は上面に灰オリーブ色土が堆積していただけで、それ以下は礫となる。規模は上場幅20～32cm、深さ38～40cmで、検出長は東西方向が15.0m、南北方向は9.52mを測る。溝床はほぼ水平である。遺物は上面の内から土師器・須恵器に混じり、白磁(染付け)の小片が１点出土している。

時期：出土した白磁の特徴から、近世以降としか判らない。



第101図　倒木１測量図

（５）その他の遺構

１）柱穴

調査区全域から109基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径15～90cm、深さ５～47cmを測る。埋土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土である。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土する。

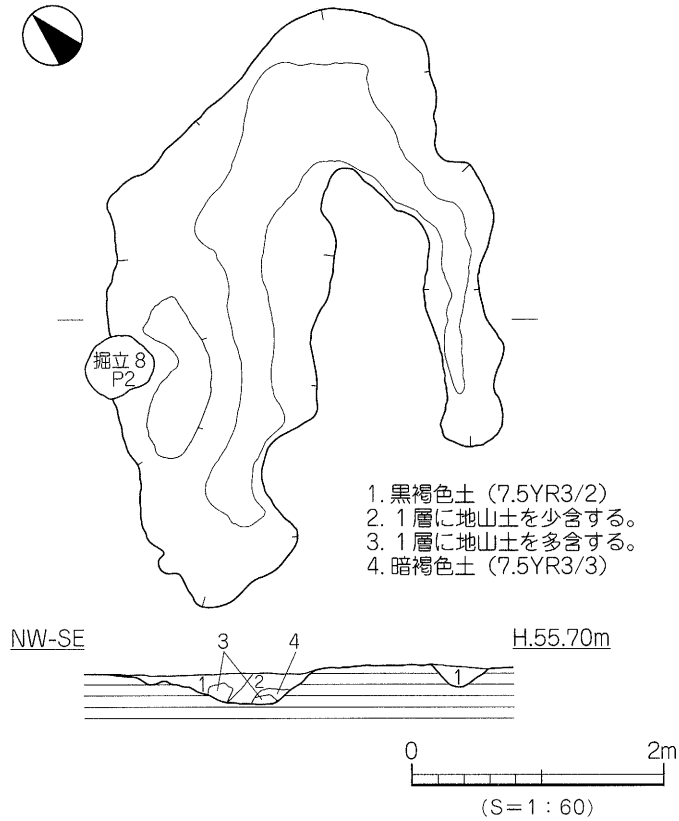
時期：出土遺物から、弥生時代から中世までの間とする。

２）倒木痕

倒木１（第62・101図）

調査区南西部のＢ～Ｃ・２～３区に位置し、柱穴に切られる。真中の盛り上がりを挟み南と北側に平面形態が三日月状に抉れており、特に北側の内側は抉れが強い。埋土は黒褐色土～鈍い黄褐色土で土質は軟らかい。遺物は上面から弥生土器・土師器・須恵器の小片が少量出土するだけである。

時期：遺物は埋土上位だけで、後世に混入したと考えられ、埋土から弥生時代以前の可能性をもつ。



第102図　倒木２測量図

倒木２（第62・102図）

調査区中央部のＤ～Ｅ・４区に位置し、掘立８に切られる。平面形態は盛り上がりを挟み馬蹄形を

呈しているが、西側が規模が大きく深く抉れている。埋土は黒褐色土～暗褐色土で土質は軟らかい。遺物は上面から弥生土器・土師器・須恵器の小片が少量出土する。
時期:遺物は埋土上位だけで後世に混入したと考えられ、埋土から弥生時代前期以前の可能性をもつ。

4．小　結

今回の調査では、弥生時代・古墳時代・中世以降の遺構や遺物を検出した。検出した遺構は、主に古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物などである。

層　位

本調査地は、微高地が南側に傾斜する緩傾斜地上であり、３枚の段をもつ畑地である。調査区中央部から北側にかけては、近現代の農耕により深く削平を受けており、第Ⅴ層上面での遺構の密度は薄い。深掘りトレンチにより第Ⅶ層以下は良質の粘土層が約１m堆積しており、その下から水分を多く含んだ砂層の堆積を確認した。

弥生時代

ＳＫ４とＳＫ５からは前期の土器が出土した。ＳＫ４は遺物が散乱した状態で比較的多く出土しており、廃棄されたものと考えられる。土坑の他に柱穴や性格不明遺構なども検出したことから、周辺には前期頃の集落が展開することを窺わせる。

古墳時代

竪穴住居や掘立柱建物・溝・土坑を検出した。ＳＢ２は北壁に竈を伴う構造で竈上部に残存する甕や甑の破片の上に須恵器の坏身が出土した。この坏身は、建物の廃絶に伴う祭祀的な目的で置かれたことも考えられる。ＳＢ３も北壁に突出する掘り込みと、その部分から焼土・炭を検出しており、竈の残存の可能性が強い。掘立柱建物は南端において６棟が切り合っており、これらのことより後期頃に継続的に集落が形成されていたことが窺える。また、周辺の調査では遺構の密度が低く、本調査地周囲に集落の中心が存在していたことを示唆するものである。また、焼成不良の須恵器が出土しており、下苅屋遺跡で展開している同時期の集落との共通性をもつ。

中　世

溝や土壙を検出した。ＳＫ２は南北方向に若干長い長方形に掘られた土坑で、基底面の北側に土師器の坏や皿を並べられた状態で置いていることから、遺構の規模や土師器の出土状況から土壙墓と考えられる。骨や木棺の痕跡は確認は出来なかったが、残存する遺物の配置状況から頭部が北枕で西向きの屈葬を想定する。後世の農耕で大きく削平を受けた部分で溝を検出した。溝は形状や埋土から農耕に伴うものと考えられ、現在の地割りより軸が13～20°程東や西方向に振っているがＳＤ１～５・８～11はほぼ平行する位置関係であり、その当時の地割りが現在の地割に影響を及ぼしたものと考える。

近世以降

暗渠は直線的に南北方向に延びており、途中で西方向の３方向を指向する。検出面から基底面にかけて礫が詰められた状態で隙間を水が流れる構造であり、耕作時に下層の粘土層により、水の浸透が妨げられるのを改善するために設けられた施設であることが窺える。

今回の調査では、弥生時代前期から近世にかけての遺構や遺物などを検出したが、特に古墳時代後期頃を中心とした集落が周辺に展開する資料を得ることができた。

【参考文献】

豊田達雄編　1982　『一般国道 11 号線松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1996　「小野川流域の遺跡」松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松佳久　1996　「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知編　2000　『古市遺跡』『下苅屋遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

水本完児　2004　「平井遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本健一・山之内志郎　2005　『古市遺跡２次調査』『五楽遺跡１次・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物　－凡例－

（1）以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）　：復元推定値

形態・施文欄　：土器の各部位名称を略記。

例）胴→胴部、底→底部

胎土・焼成欄　：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母、チャ→チャート、細→細粒（0.9 ㎜以下）

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：㎜）

焼成の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表 47　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋土	床面積（㎡）	主柱穴（本）	内部施設 高床	内部施設 土坑	内部施設 炉	内部施設 カマド	周壁溝	備考
1	古墳	方形	4.56 × 2.4 × 0.09	黒褐色土	11.42 以上						○	掘立 2・4・6・7、SK1 に切られる。
2	古墳	方形	5.45 × 5.4 × 0.05	黒褐色土	29.36 以上	4				○	○	西側は調査区外に延び、掘立 8・SK2 に切られる。
3	古墳	方形	4.5 × 4.25 × 0.09	黒褐色土	20.6	4					○	現代坑、暗渠、掘立 11、SD4・5・8 に切られる。
4	古墳	方形	3.1 × 1.4 × 0.09	黒褐色土	2.37 以上						○	掘立 11 に切られる。

表 48　竪穴住居の炉・カマド一覧

竪穴(SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規模（m）幅 × 短奥行き×高さ	面積（㎡）	備考
1	古墳		○	北壁中央部	馬蹄形	1.1 × 0.98 × 0.21	0.65	焼土・粘土が散乱。炭を少量検出。

表 49　掘立柱建物一覧　（1）

掘立	規模（間）	方向	桁行 実長（m）	桁行 柱間寸法（m）	梁行 実長（m）	梁行 柱間寸法（m）	方位	床面積（㎡）	時期	備考
1	2 以上×1 以上	－	3.7	1.8 ～ 1.9	2.0	2.0	N-73°　-E	3.7 以上	古墳	東側は調査区外に延びる。
2	3 × 1 以上	東西	4.1	1 ～ 1.5	2.0	2.0	N-80°　-E	8.2 以上	古墳	SB1・SX1 を切り、東側は調査区外に延びる。
3	2 以上×2 以上	－	4.6	2.2 ～ 2.4	4.0	2.0	N-69°　-E	9.2 以上	古墳	東側は調査区外に延びる。
4	2 × 3 以上	南北	4.2	1 ～ 1.6	3.4	1.7	N-77°　-E	11.57 以上	古墳	SB1・掘立 7 を切り、南側は調査区外に延びる。
5	1 以上×1 以上	－	2.8	2.8	1.9	1.9	N-62°　-E	2.66 以上	古墳	西側は調査区外に延びる。
6	3 以上×1 以上	東西	3.5	1 ～ 1.3	1.7	1.7	N-67°　-E	2.98 以上	古墳	SB1・SK1 を切り、南側は調査区外に延びる。
7	3 × 3 以上	南北	4.2	1.1 ～ 1.8	3.9	1.2 ～ 1.5	N-41°　-E	14.82 以上	古墳	SB1 を切り、掘立 4 に切られ、南側は調査区外に延びる。
8	3 × 4	南北	6.6	1.4 ～ 1.8	4.3	1.2 ～ 1.6	N-71°　-E	28.38	古墳	SB2・倒木 2 を切る。

掘立柱建物一覧　（2）

掘立	規模（間）	方向	桁行 実長（m）	桁行 柱間寸法（m）	梁行 実長（m）	梁行 柱間寸法（m）	方位	床面積（㎡）	時期	備考
9	2×1	南北	3.67	1.64～2.03	1.48	1.48	N-39°-E	6.69	古墳	
10	1×2	東西	3.27	1.7～1.57	1.45	1.45	N-76°-E	4.78	古墳	SB2を切る。
11	3×3	南北	6.65	1.8～2.8	4.7	1.5～1.6	N-94°-E	31.26	古墳	SB3･4、SK6、SX4を切り、SD6、暗渠に切られる。。

表50　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D・5～6	皿状	7.33×1.3～1.81×0.03～0.04	南東～北西	灰黄褐色土	土師器 須恵器・磁器	中世以降	暗渠に切られ、西端は調査区外に延びる。
2	D～E・6～7	レンズ状	7.22×1.6～1.84×0.03～0.06	南東～北西	灰黄褐色土		中世以降	西端は調査区外に延びる。
3	D～E・6～7	皿状	7.4×1.12～1.94×0.04～0.06	南東～北西	灰黄褐色土	土師器 須恵器・磁器	中世以降	西端は現代坑に切られる。
4	E～F・4～5	レンズ状	4.64×0.3～0.74×0.02～0.07	南東～北西	灰黄褐色土	土師器 須恵器	中世以降	現代坑に切られ、SB3を切る。
5	E～F・4～5	レンズ状	3.8×0.24～0.34×0.02～0.06	南東～北西	灰黄褐色土	須恵器	中世以降	SB3・SX3を切り、東端は調査区外に延びる。
6	E～F・4～7	逆台形状	14.6×0.18～0.3×0.06～0.11	南東～北西	灰オリーブ色土	土師器 須恵器・磁器	中世以降	掘立11を切り、両端は調査区外に延びる。
7	G・6～7	逆台形状	6.75×0.43～0.57×0.09～0.21	南北	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	両端は調査区外に延びる。
8	E～F・4～5	レンズ状	3.7×0.2～0.28×0.01～0.03	南東～北西	灰黄褐色土	須恵器	中世以降	SB3・SX3を切り、東端は調査区外に延びる。
9	E・5～6	レンズ状	4.1×0.2～0.4×0.03～0.06	南東～北西	灰黄褐色土		中世以降	暗渠・現代坑に切られる。
10	D～E・5～7	レンズ状	10.66×0.16～0.36×0.03～0.04	南東～北西	灰黄褐色土		中世以降	暗渠・現代坑に切られる。
11	D～E・5～6	皿状	5.42×0.9～1.1×0.06～0.08	南東～北西	灰黄褐色土		中世以降	暗渠に切られる。

表51　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B～C・1	長方形	皿状	1.64×0.78×0.22	1.27	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SB1を切り、掘立4・6に切られる。
2	B～C・4	長方形	皿状	1.3×1.03×0.12	1.23	黒褐色土	土師器	中世	SB2を切る。
3	B・3	不整楕円形	皿状	0.99×0.93×0.22	0.78	黒褐色土		古墳	SPを切る。
4	G～H・7	不整楕円形	逆台形状	2.37×1.22×0.32	2.48	黒褐色土	弥生	弥生	SD7・SPに切られる。
5	E・4～5	楕円形	レンズ状	1.32×0.84×0.24	0.99	黒褐色土	弥生	弥生	
6	F・6～7	不整楕円形	皿状	1.32×1.24×0.09	1.38	黒褐色土		古墳	掘立11に切られる。

表52　性格不明遺構一覧

(SX)	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C・1～2	不整形	皿状	2.3×1.11×0.6	2.68	黒色土	弥生	弥生	掘立2に切られる。
2	D・3～4	不整楕円形	皿状	1.6×0.7×0.06	0.85	黒褐色土		古墳	
3	E～F・4	不整形	レンズ状	2.1×1.0×0.1	2.17	黒褐色土	弥生 土師器	古墳	SD5・8に切られる。
4	F～G・6	不整L字形	レンズ状	2.33×0.52×0.05	1.71	黒色土	弥生	弥生	掘立11に切られる。
5	F・7	不整楕円形	レンズ状	1.1×0.85×0.25	0.73	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SPに切られ、北側は調査区外に延びる。

表53　SK4出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 17.7 器高 19.7 底径 (6.8)	やや上げ底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部下に貼付凸帯と端部に刻目が巡る。	ナデ ヨコナデ ハケ(4～5本/cm)	ナデ マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石(1～4)･長(1～2.5) ○		24
2	甕	口径 (29.6) 残高 5.8	口縁部付近に12条の櫛描直線文と端部に刻目が巡る。	ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1～2)･長(1) 金 ○		24
3	甕	底径 6.0 残高 8.0	平底の底部で内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	橙色・浅黄橙色 黒褐色	石・長(1) ○		

表 54　SK5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
4	甕	口径 (28.4) 残高 1.4	口縁端部の貼付凸帯に刺突文が巡る。	ナデ	ミガキ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石 (1～3)・長 (1～2) ○		24
5	甕	口径 (18.2) 残高 1.8	口縁端部の貼付凸帯に刺突文が巡る。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石 (1～3)・長 (1) ○		24
6	甕	残高 4.0	口縁部に櫛描直線文、その中間に刺突文が巡る。	ナデ ハケ	ナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石 (1～3)・長 (1～2) ○		24
7	甕	底径 8.0 残高 4.2	平底の底部。	ハケ マメツ	マメツ	橙色 灰白色	石 (1～4)・長 (1～5) 砂 ○		24
8	壺	口径 (13.0) 残高 1.6	外反する口縁部の端部に刻目が巡る。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石 (1～2)・長 (1) 砂 ○		24
9	壺	底径 7.2 残高 2.5	平底の底部。	ミガキ マメツ	ミガキ マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1～2) ○		

表 55　SX1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	甕	底径 (6.6) 残高 5.8	底部。	胴ハケ (7～8本/cm) 底ヨコナデ	ナデ	灰褐色・にぶい赤橙色 黒色	石・長 (1～3) ◎		

表 56　SB1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	坏	口径 (16.0) 残高 1.95	外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
12	坏	口径 (12.1) 残高 2.45	外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		

表 57　SB2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
13	壺	口径 (15.4) 残高 9.4	内湾する胴部に口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は丸く納まる。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ ナデ (指頭痕)	赤褐色 にぶい橙色・にぶい黄橙色	石・長 (1～4) ○		24
14	甑	口径 (26.0) 残高 6.9	口縁部。	ナデ (工具) マメツ	ナデ	明赤褐色 橙褐色	石・長 (細) ◎		
15	椀	口径 12.6 器高 5.05 底径 5.5	平底の底部から内湾して立ち上がり口縁端部は丸く納まる。	マメツ	マメツ	にぶい赤褐色・橙色 橙色	石・長 (細) ◎	赤茶砂	24
16	坏身	口径 11.9 器高 5.22	受部端は凹み、立ち上がりは内傾し、口縁端部は内傾する段を有する。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰黄色 灰色	石・長 (1) ◎		24

表 58　SB3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
17	坏蓋	口径 (11.6) 残高 4.2	天井部境に稜を有し、口縁端部は内傾する　段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) 砂 ○		25

表 59　SB4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
18	壺	口径 (9.9) 器高 13.9	球状の胴部に外反する口縁部をもつ。	ナデ マメツ	ナデ 指押さえ マメツ	橙色・にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	細 ◎		25

表 60　掘立 3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
19	坏身	残高 2.5	受部端が凹み立ち上がりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○		
20	甕	残高 4.3	口縁端部が下方に肥厚される。	ナデ	ナデ	オリーブ黒色 灰白色	細 △		
21	壺	残高 2.9	胴上部に貝殻による木葉文が施される。	ナデ	ナデ ハケ	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1 ～ 4) ◎		25

表 61　掘立 3 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
22	石鏃	逆刺 (片方) 欠損	サヌカイト	3.0	1.85	0.27	1.104		25

表 62　掘立 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	坏身	残高 2.7	受部は凹み口縁部は内傾し、端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石 (1) △		

表 63　掘立 5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
24	高坏	口径 (14.3) 残高 2.7	外反する口縁部に端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
25	高坏	口径 (15.1) 残高 2.0	外反する口縁部に端部は丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) △		

表 64　掘立 6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	坏蓋	残高 2.8	天井部境に明瞭な稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1) ○		

表 65　掘立 8 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	坏身	口径 (12.6) 残高 3.7	外反して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 赤灰色	石・長 (1) 細 ○		
28	坏身	口径 (9.0) 残高 3.9	外反して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗オリーブ灰色	長 (1) ○	自然釉	
29	高坏	残高 3.8	坏底部内面に螺旋状に粘土紐の巻き上げ痕が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 灰白色	長 (1 ～ 2) ○	自然釉	
30	埦	底径 (6.0) 残高 3.5	断面台形状の高台の内底面が接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		

表 66　掘立 9 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
31	石庖丁	約 1/3	緑色片岩	3.7	4.3	0.31	9.773		25

表 67　掘立 11 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
32	坏蓋	口径 (11.7) 残高 1.65	口縁端部が丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
33	坏蓋	口径 (9.8) 残高 0.9	口縁端部は丸く納まり、かえりが接地する。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1) △		
34	坏身	残高 1.9	立ち上がりは内傾し口縁端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○		

表 68　SD7 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
35	坏蓋	口径 (12.7) 残高 2.35	天井部境に緩やかな稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
36	坏身	口径 (12.0) 残高 2.1	口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
37	坏身	残高 2.85	受部端がやや凹む。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 にぶい橙色	密 ○	赤砂	

表 69　SK1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
38	坏身	口径 (12.2) 残高 4.2	受部端が凹み口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		

表 70　SD1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
39	碗	残高 2.6	内外面に施釉される。	施釉	施釉	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ○		

表 71　SK2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
40	坏	口径 12.4 器高 3.4 底径 7.1	底部に回転糸切り痕が見られる。	マメツ (底)回転糸切り	回転ナデ マメツ	灰白色・淡黄色 灰白色	石(細～2)・長(1) チャ ○		25
41	Ⅲ	口径 8.1 器高 1.45 底径 5.25	底部に回転糸切り痕が残る。	マメツ	回転ナデ マメツ	灰白色 灰白色	石(1～2)・長(1) ○		25
42	Ⅲ	口径 7.9 器高 1.45 底径 5.5	底部に回転糸切り痕が見られる。	回転ナデ マメツ (底)回転糸切り・マメツ	回転ナデ ナデ マメツ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1～2) ◎		25
43	Ⅲ	口径 7.9 器高 1.4 底径 5.6	底部に回転糸切り痕が見られる。	回転ナデ マメツ (底)回転糸切り	回転ナデ マメツ	灰白色 灰白色	石(1～2)・長(1) ○		25
44	Ⅲ	口径 7.7 器高 1.4 底径 5.1	底部に回転糸切り痕が残る。	回転ナデ マメツ (底)回転糸切り→板圧	回転ナデ マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		25

表 72　SD6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
45	碗	口径 (10.0) 残高 2.6	内外面に施釉され口縁部外面に２条の条線が巡る。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ○		25

第6章

平井遺跡6次調査

第６章　平井遺跡６次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年１月24日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市平井町甲2349－１外における松山市道小野160号線道路改良工事にあたり、当地における埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地のうち、今回発掘調査を実施した松山市平井町甲3074－１外は、平成17年度までに用地買収が終了したことから、当該地における埋蔵文化財の有無を確認するため、事前の試掘調査を実施することになった。試掘調査は、道路建設課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター）とが委託契約を結び、2006（平成18）年６月13日に実施した。調査の結果、土坑や柱穴のほか、土師器や須恵器を含む遺物包含層を検出した。

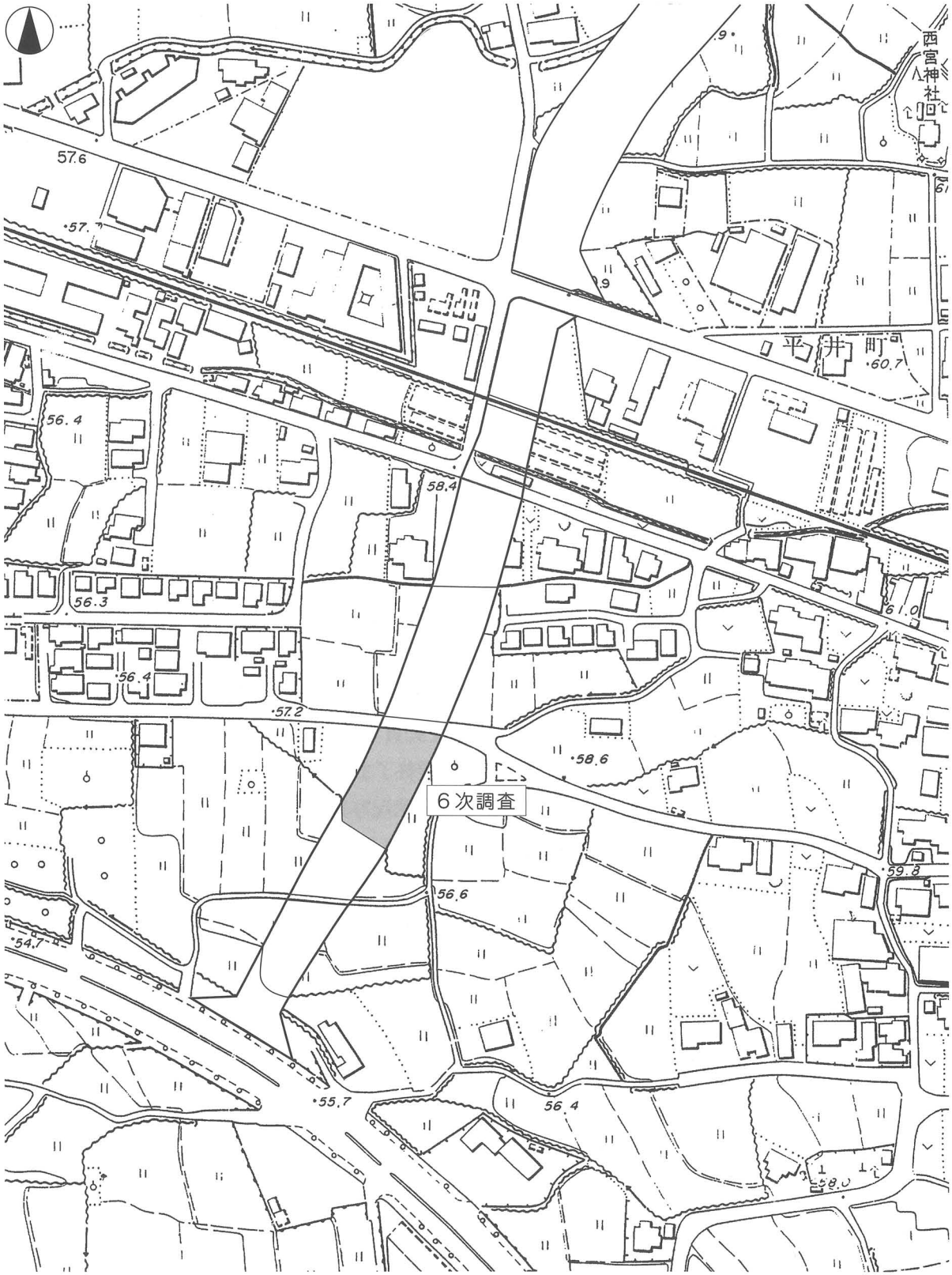
この結果を受け、道路建設課と文化財課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することになった。発掘調査は、道路建設課と埋文センターとが委託契約を結び、当該地における古墳時代の集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2007（平成19）年６月１日より開始した。

（２）調査の経緯

2007（平成19）年６月１日、調査地内の草刈や発掘用具の搬入を行い、６月４日より重機を搬入し、表土層の掘削作業を開始した。６月13日より作業員を動員し、包含層の掘り下げ及び遺構検出作業を行った。なお、作業中は天候不良のため、遺構検出作業終了までに約３週間を費やした。７月19日、遺構検出作業が終了し、高所作業車を使用して遺構検出状況写真を撮影する。７月23日には株式会社ＧＩＳ四国に国家座標軸測量業務を委託し、調査地内に４級基準点と４級水準点を設置した。調査は、検出数の多い土坑から順に半截や測量をし、順次、掘立柱建物や溝の調査を進めた。なお、期間中は梅雨の時期と重なり、調査地近隣にある水田からの流水が激しく、調査地がたびたび水浸しになることが多く、調査の進行を妨げられることが何度もあった。８月17日、遺構の掘り下げが終了し、同日、高所作業車を使用し、遺構の完掘状況写真を撮影した。その後、遺構図測量や土層図作成等を行い、８月22日には愛媛航空株式会社に、セスナ機による上空からの航空写真撮影業務を委託した。８月27日より、重機の使用による埋戻し作業をし、併行して発掘用具の撤去作業や調査事務所の撤去等を行った。８月31日、埋戻し作業が終了し、発掘作業を終了した。

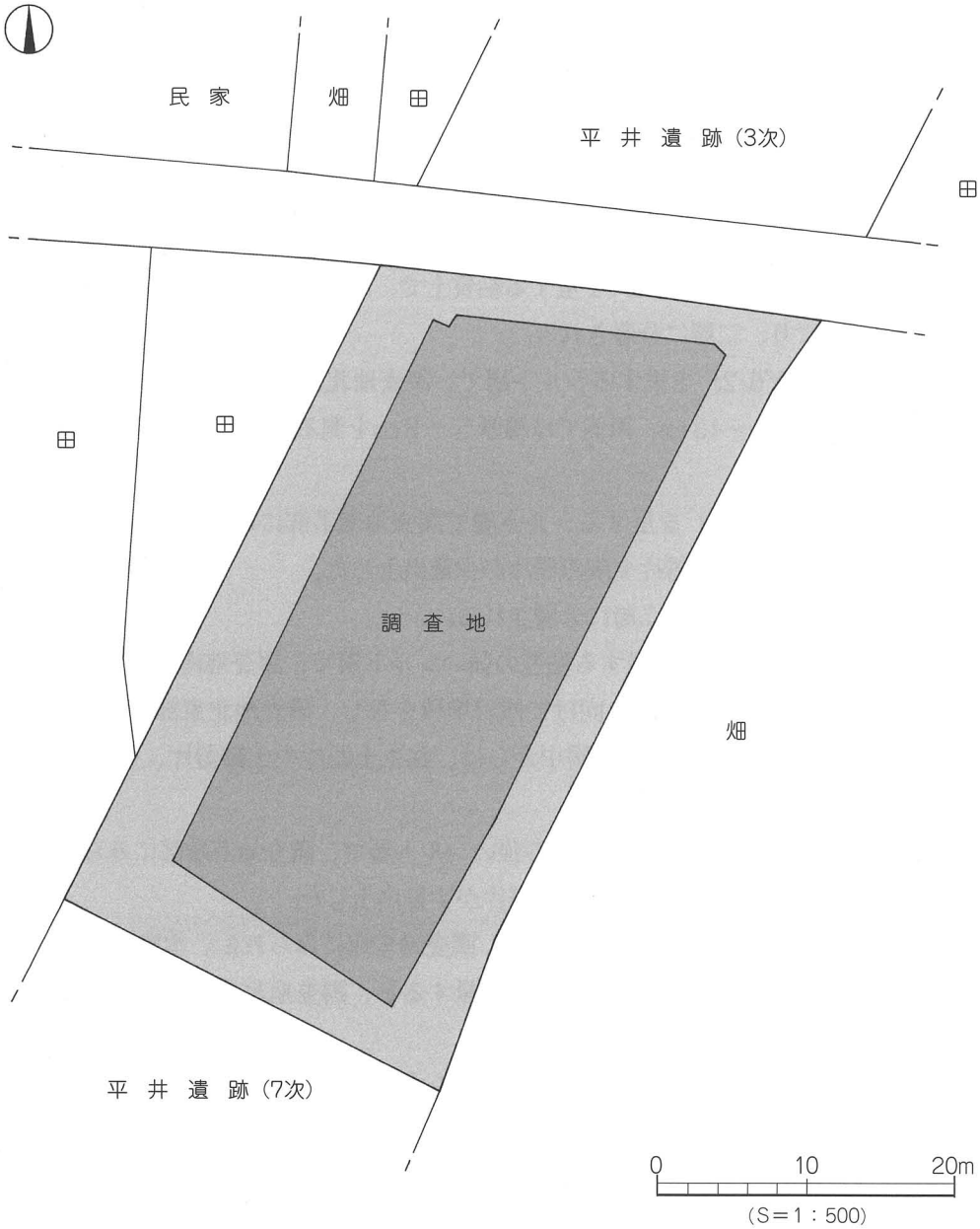
（３）調査組織

所 在 地：松山市平井町甲3074－１
調査面積：1,283.6㎡
調査期間：2007（平成19）年６月１日～同年８月31日
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：宮内　慎一



(S=1:2,500)

第103図　調査地位置図



第104図　調査地測量図

２.層　位

（１）基本層位（第105・106図）

調査地は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川とによって形成された扇状地上、標高57.3ｍ前後に立地する。調査以前は、畑地として利用されていた。なお、調査地内には畑が３枚作られており、その影響で調査地中央部付近には南北方向に30㎝程度の段差が生じている。

調査地の基本層位は、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層であり、第Ⅲ層は未検出である。

第Ⅰ層：近現代の農耕に伴う耕土で、土色・土質の違いにより四種類に分層される。

第Ⅰ①層－灰色（10YR6/1）を呈する粘質土で､畑作に伴う耕作土である。層厚10～20㎝を測る。

第Ⅰ②層－明黄褐色（2.5Y6/6）を呈する粘質土で、床土である。層厚５～10㎝を測る。

第Ⅰ③層－灰黄色（2.5Y7/2）を呈する粘質土で、旧耕作土である。層厚７～10㎝を測る。

第Ⅰ④層－にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する粘質土で、旧床土である。層厚６～８㎝を測る。

第Ⅱ層：土色の違いにより、二層に分層される。

第Ⅱ①層－灰黄色（2.5Y6/2）を呈するシルト層で、調査地北西部を除く地域にみられ、調査地東側では層厚10～13㎝、西側では層厚５～８㎝を測る。本層中からは、遺物は出土していない。

第Ⅱ②層－褐灰色（10YR5/1）を呈するシルト層で調査地南半部にみられ、層厚３～５㎝を測る。本層中からは、土師器片や陶磁器片が少量出土した。

第Ⅳ層：土色・土質の違いにより、二層に分層される。

第Ⅳ①層－黒褐色（7.5YR3/1）を呈する粘性の強いシルト層で、調査地南半部にみられる。なお、調査地北東部から南西部に向けて傾斜堆積をなし、調査地北東部では層厚10㎝、南西部では層厚20㎝を測る。本層中からは、弥生土器片や土師器片、須恵器片のほかに石器が出土した。

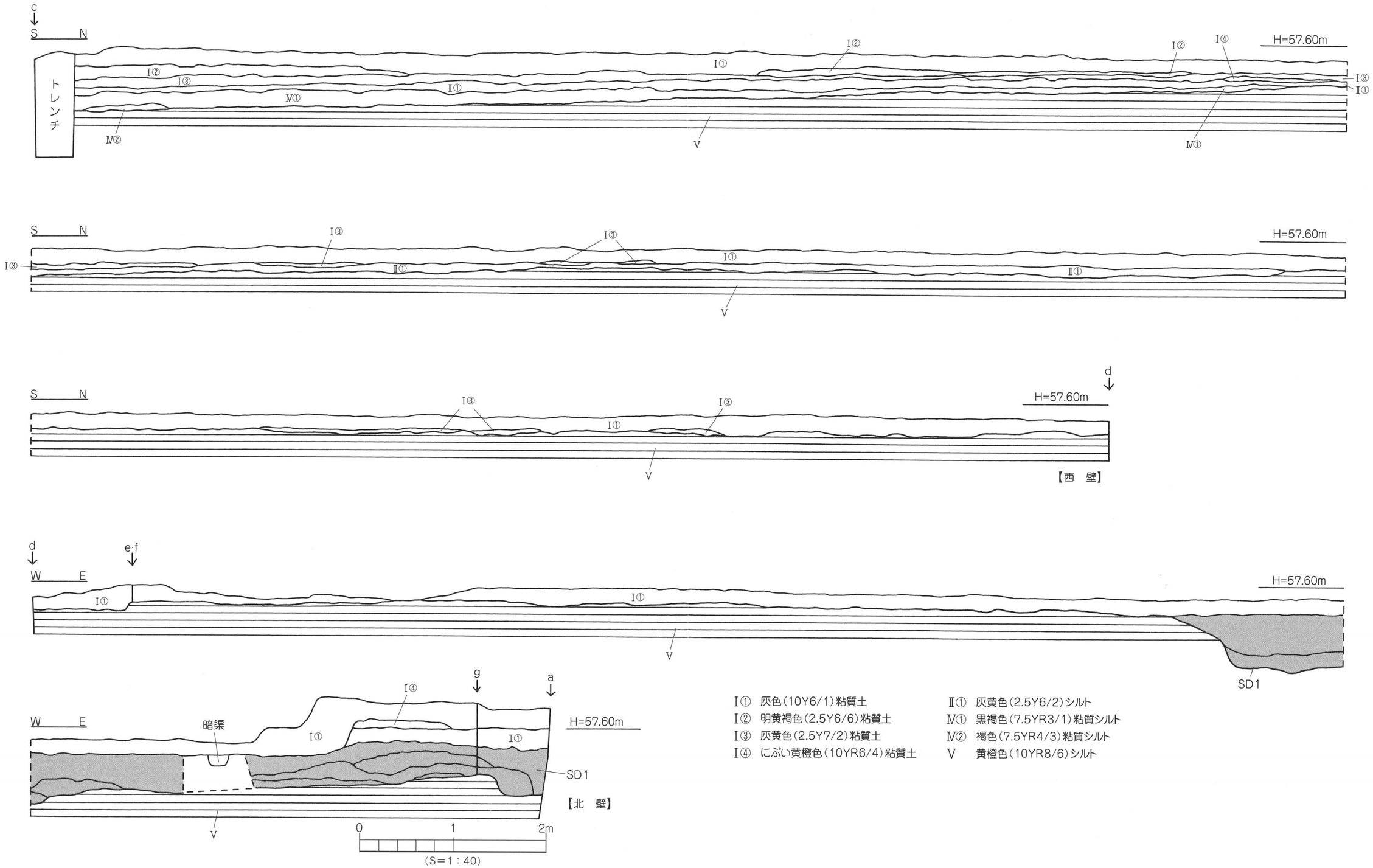
第Ⅳ②層－褐色（7.5YR4/3）を呈する粘性の強いシルト層で、調査地南端部にみられ層厚10～15㎝を測る。本層中からは、弥生土器片が少量出土した。

第Ⅴ層：黄橙色（10YR8/6）を呈するシルト層で、調査地全域にみられる。本層上面が、調査における遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、漸次、南西部に向けて傾斜をなす（比高差30㎝）。

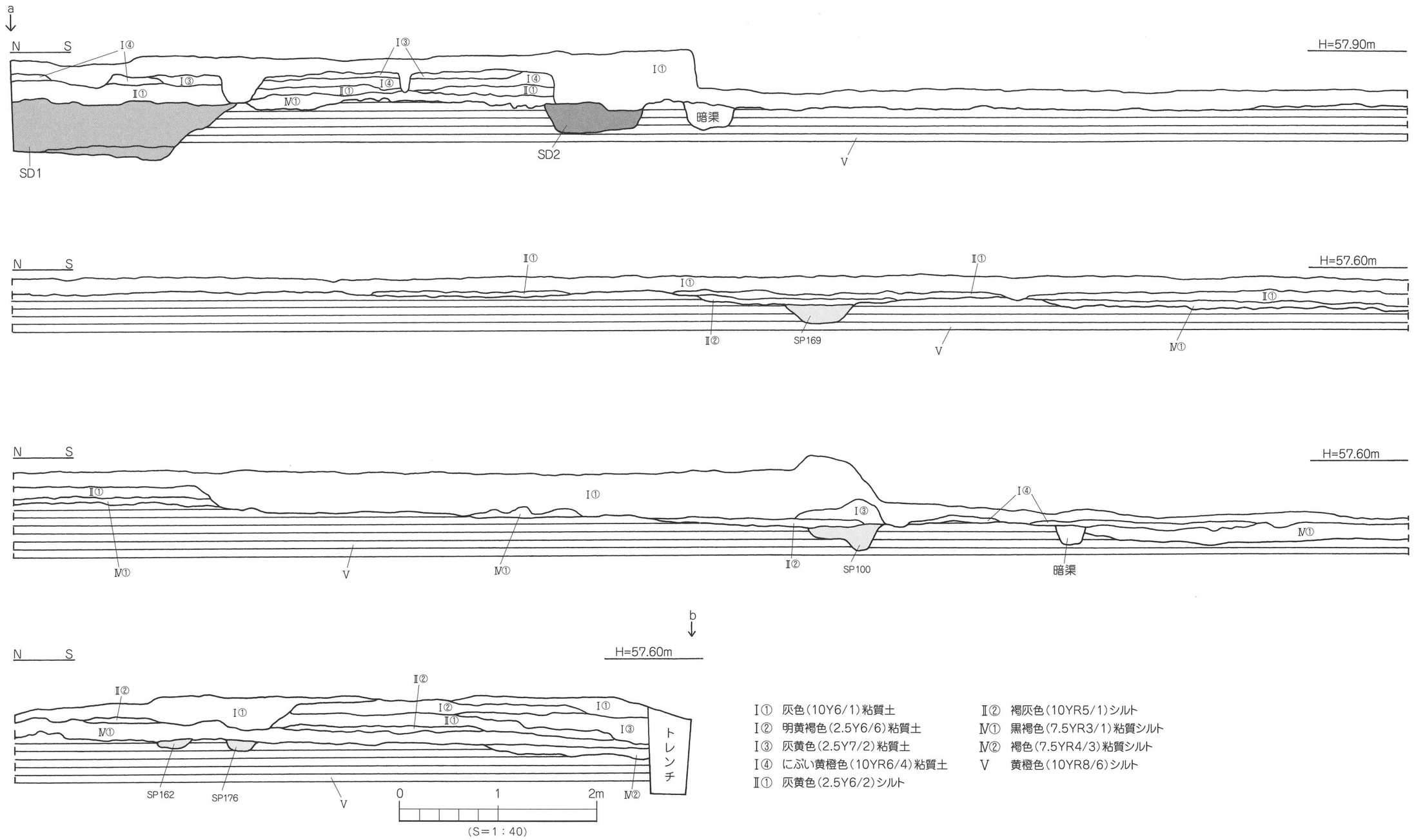
検出した遺構や出土遺物より、第Ⅳ層は弥生時代から古墳時代、第Ⅱ層は中世までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは調査地北側から南側に向けてＡ・Ｂ・・・・Ｆ、調査地西側から東側へ１・２・３・・・５とし、Ａ１・Ａ２・・・・Ｆ５といったグリット名を付した。グリットは包含層掘り下げ時の遺物取り上げや、遺構の位置表示等に利用した。

（２）検出遺構・遺物（第107図）

調査で検出した遺構は掘立柱建物８棟、溝３条、土坑19基、柱穴180基(掘立柱建物柱穴50基を含む)、倒木址６基である。出土遺物より、検出した遺構は弥生時代前期から古代までのものである。遺物は遺構及び包含層中より、弥生土器（前期～後期)、土師器（古墳～中世)、須恵器（古墳～古代)、陶磁器(中近世)､石器が出土した。なお､遺物の出土量は遺物収納箱(44×60×12㎝)12箱分である。

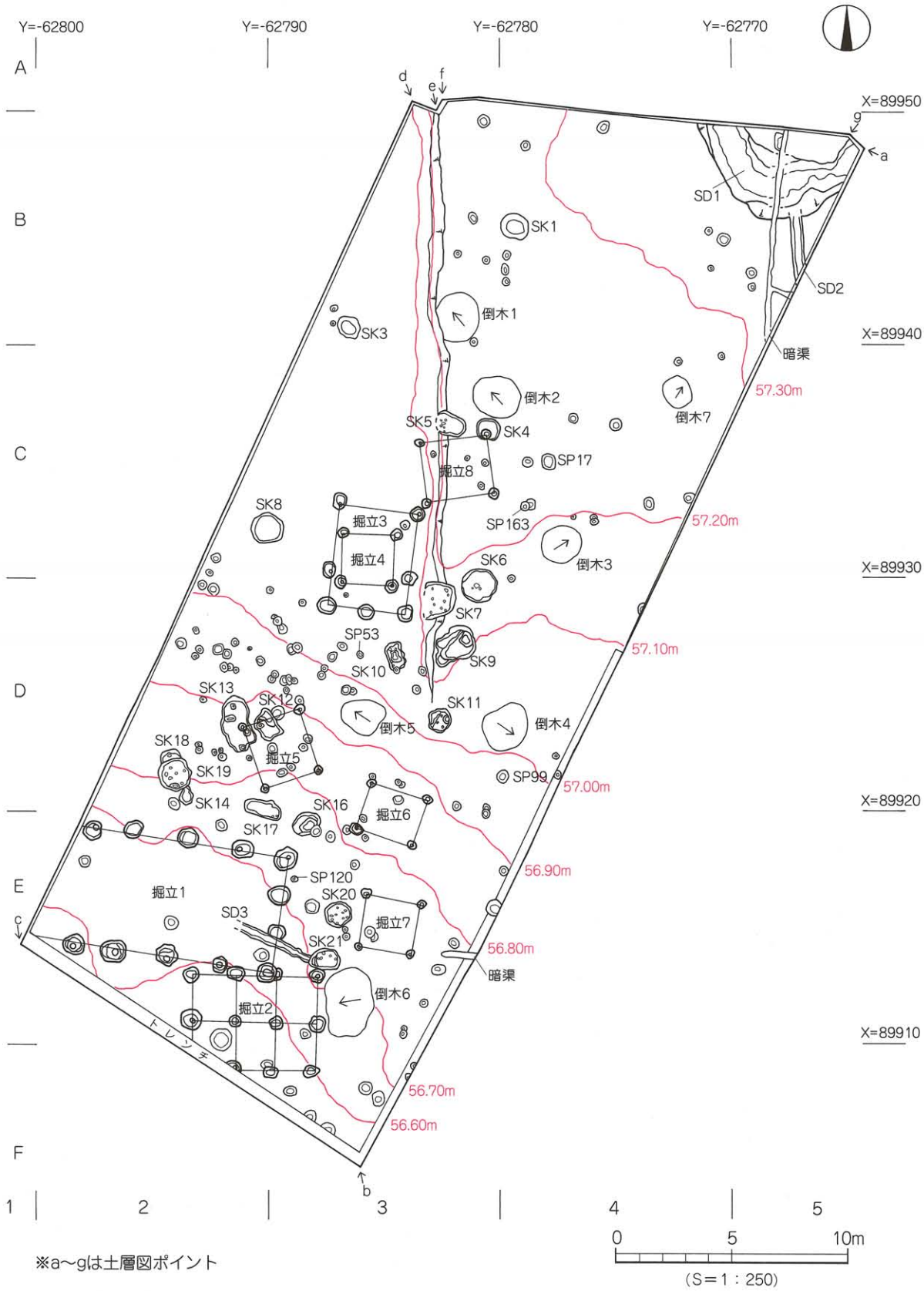


第105図　調査地西壁・北壁土層図



Ⅰ① 灰色(10Y6/1)粘質土
Ⅰ② 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土
Ⅰ③ 灰黄色(2.5Y7/2)粘質土
Ⅰ④ にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
Ⅱ① 灰黄色(2.5Y6/2)シルト
Ⅱ② 褐灰色(10YR5/1)シルト
Ⅳ① 黒褐色(7.5YR3/1)粘質シルト
Ⅳ② 褐色(7.5YR4/3)粘質シルト
Ⅴ 黄橙色(10YR8/6)シルト

第106図　調査地東壁土層図



※a～gは土層図ポイント

第107図　遺構配置図

３．遺構と遺物

調査で検出した遺構は、掘立柱建物８棟、溝３条、土坑19基、柱穴180基、倒木址６基である。ここでは、時代別に検出した遺構や遺物の説明を行う。

（１）弥生時代

調査では、12基の土坑を検出した。すべて、第Ⅴ層黄橙色シルト上面での検出である。出土遺物や埋土等より、弥生時代前期前半から中期後半までに時期比定される。内訳は、以下のとおりである。

１）前期前半　　：１基（ＳＫ14）
２）前期後半　　：７基（ＳＫ７・９・10・12・13・18・20）
３）前期末　　：３基（ＳＫ16・17・21）
４）中期後半　　：１基（ＳＫ19）

１）前期前半

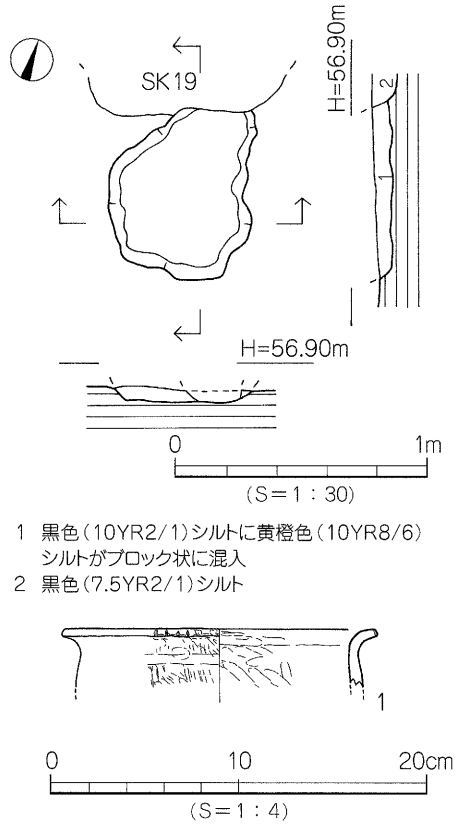
ＳＫ14（第107・108図）

調査地南西部Ｄ２区に位置し、土坑北側はＳＫ19に切られている。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は南北検出長0.71ｍ、東西長0.54ｍ、深さは検出面下７cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）の単一層である。土坑基底面には、わずかに凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。土坑壁体及び基底面は、第Ⅴ層である。土坑内からは、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第108図）

１は甕形土器。折曲口縁で、推定口径16.4cmを測る。口縁端部に刻目を施し、色調は茶褐色を呈する。胴部外面にはハケメ調整後、丁寧なヨコナデを施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代前期前半とする。



第108図　SK14測量図・出土遺物実測図

２）前期後半

ＳＫ10（第107・109図）

調査地中央部Ｄ３区に位置し、土坑南側はＳＰ54（埋土：灰褐色土）に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.12ｍ、短径0.70ｍ、深さは検出面下17cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は１層黒色シルト、２層黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。土坑基底面にて東西長0.46ｍ、南北長0.48ｍ、深さ６cmを測る不整形状の凹みを検出した。埋土は２層である。このほか、基底面にて径10cm、深さ４～８cm大の小ピット５基を検出した。ピット埋土は、土坑埋土１層と２層である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。

遺物は埋土１層中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第109図）

２は壺形土器の肩胴部片で、胴部最大径は18.8cmを測る。肩部及び胴部には、それぞれヘラ描き沈線文３条を施す。色調は橙褐色を呈し、内面にはナデ調整を施す（外面は摩滅の為、調整不明）。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代前期後半とする。

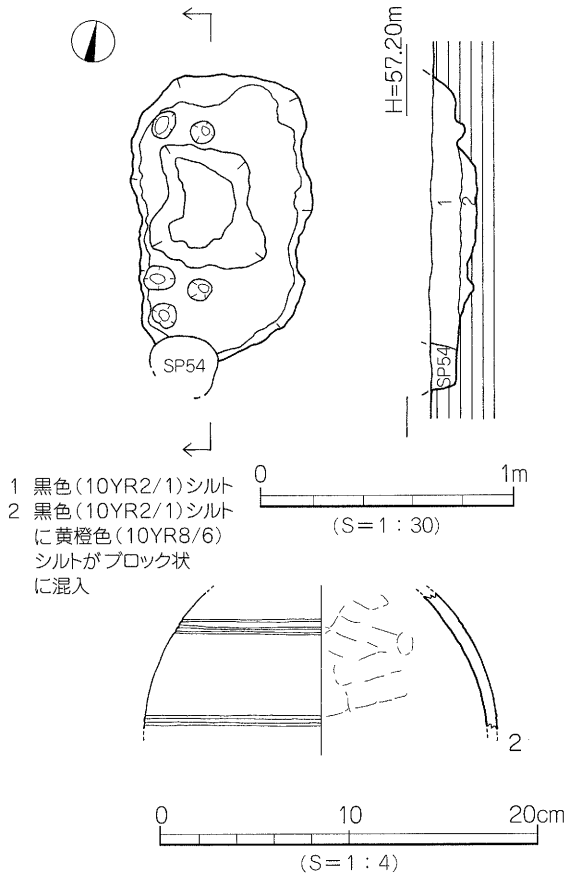
ＳＫ７（第107・110図）

調査地中央部Ｄ３区に位置し、土坑中央部から西側は畑耕作に伴う造成等により一部削平されている。平面形態は長方形状を呈し、規模は長さ1.61ｍ、幅1.26ｍ、深さは検出面下20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）の単一層である。土坑基底面は、東側から西側へ向けて緩傾斜をなす（比高差３cm）。基底面にて径６～13cm、深さ２～４cmを測る小ピットを９基検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

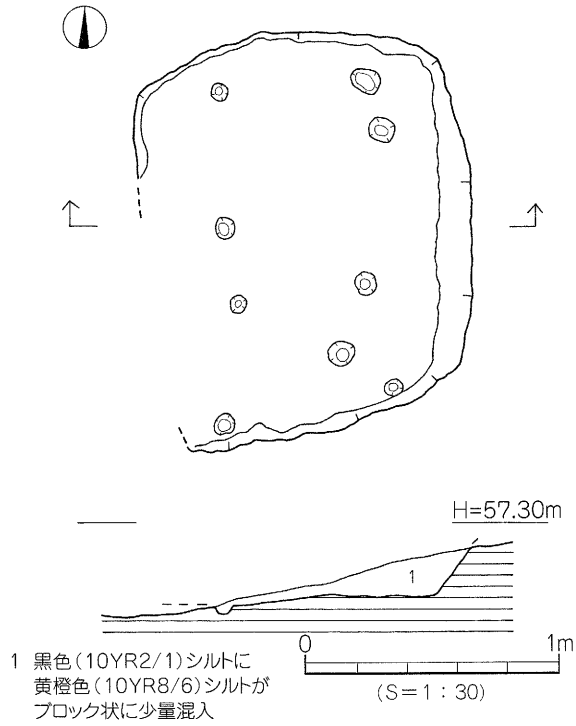
時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、土坑埋土がＳＫ10に酷似することから、概ね弥生時代前期後半頃とする。

ＳＫ９（第107・111図）

調査地中央部Ｄ３区に位置する。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.04ｍ、短径1.30ｍ、深さは検出面下25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑壁面の傾斜は比較的緩やかである。埋土は二層あり、埋土上位は１層黒色シルト、埋土下位は２層黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。土坑基底面には凹みが二箇所あり、他の土坑と重複している可能性がある。また、基底面中央部にて、径10～25cm、深さ２～５cm大の小ピット３基を検出した。ピット埋土は、すべて土



第109図　SK10測量図・出土遺物実測図



第110図　SK7測量図

坑埋土２層と同様の黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＫ７やＳＫ10と酷似することから概ね、弥生時代前期後半頃とする。

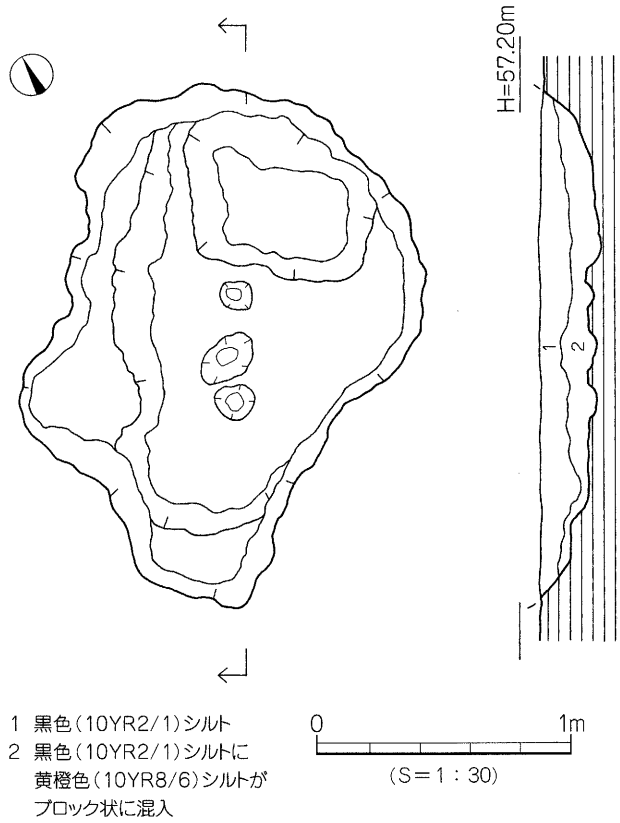
ＳＫ12（第107・111図）

調査地南西部Ｄ２・３区に位置する。平面形態は不整の長方形を呈し、規模は長さ1.35ｍ、幅0.86ｍ、深さは検出面下10cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）の単一層である。土坑基底面北側には径55×70cm、深さ６cm程度の凹みがあり、埋土は土坑埋土と同様である。また、基底面西側では径20×30cm、深さ10cmを測るピットと、径８cm、深さ３cm程度の小ピットを検出した。両者共に、埋土は土坑埋土と同様の黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。土坑基底面には凹凸があまりみられず、ほぼ平坦である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

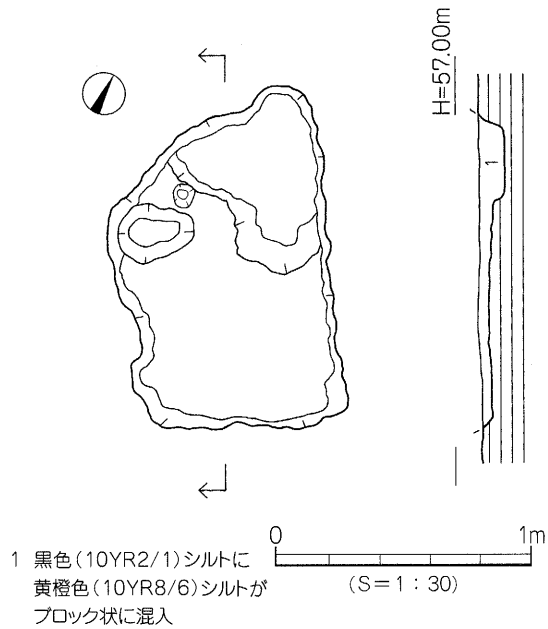
時期：出土遺物がなく時期特定はしかねるが、埋土がＳＫ７やＳＫ10と酷似することから概ね、弥生時代前期後半頃とする。

ＳＫ13（第107・112図）

調査地南西部Ｄ２区に位置し、土坑中央部は掘立５柱穴（ＳＰ184）に切られている。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.36ｍ、短径1.24ｍ、深さは検出面下９cmを測る。ＳＫ13は今回の調査で検出した土坑の中では、最大規模の土坑である。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）の単一層である。土坑北西部、南東部及び南側基底面にて３基のピッ



〔SK9〕



〔SK12〕

第111図　SK9・12測量図

トと、土坑北側基底面からは小ピット１基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様の黒色シルトである。土坑基底面には凹凸がみられ、土坑北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす（比高差３cm）。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。遺物は土坑及びピット内より弥生土器の細片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、埋土がＳＫ７やＳＫ10に酷似することから概ね、弥生時代前期後半頃とする。

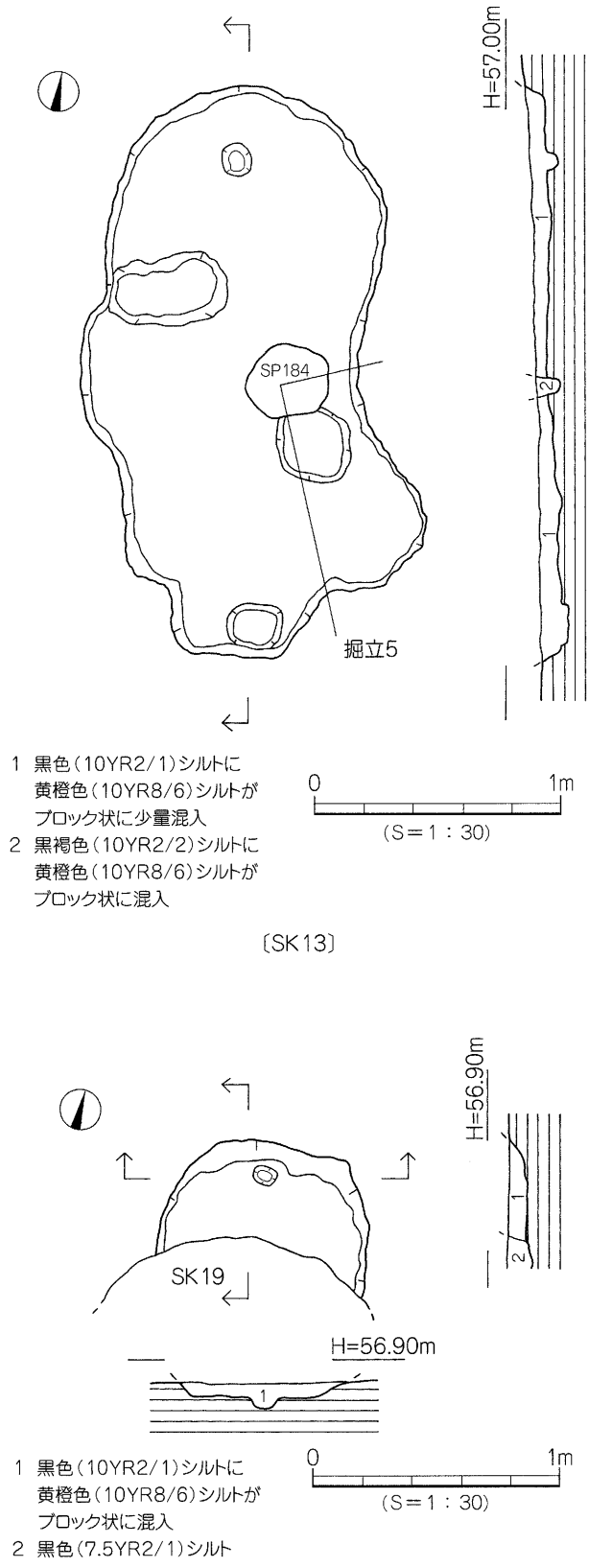
ＳＫ18（第107・112図）

調査地南西部Ｄ２区に位置し、土坑南側はＳＫ19に切られている。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長0.38ｍ、東西長0.86ｍ、深さは検出面下７cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）の単一層である。土坑基底面は、中央部に向けて傾斜をなす。基底面北側にて径８～10cm、深さ３cmを測る小ピット１基を検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＫ７やＳＫ10などと酷似することから概ね、弥生時代前期後半頃とする。

ＳＫ20（第107・113図）

調査地南東部Ｅ３区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径1.04～1.10ｍ、深さは検出面下４cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）の単一層である。土坑基底面には凹凸がみられないが、東側から西側に向けて緩やかな傾斜をなす。基底面にて、径６～12cm、深さ２～４cmを測る小ピット９基を



第112図　SK13・18測量図

検出した。ピット埋土は、いずれも土坑埋土と同様の黒色シルトである。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土がＳＫ７などと酷似することから概ね、弥生時代前期後半頃とする。

３）前期末

ＳＫ 16（第 107・114 図）

調査地南側Ｅ３区に位置し、土坑東側はＳＰ 108（埋土：黒褐色土）に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 1.12 m、短径 0.96 m、深さは検出面下３cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単一層である。土坑基底面には、長さ 0.90 m、幅 0.60 m、深さ 10 cmを測る長方形状の凹みがある。埋土は土坑埋土と同じであることから、土坑に伴う可能性がある。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを１点掲載した。

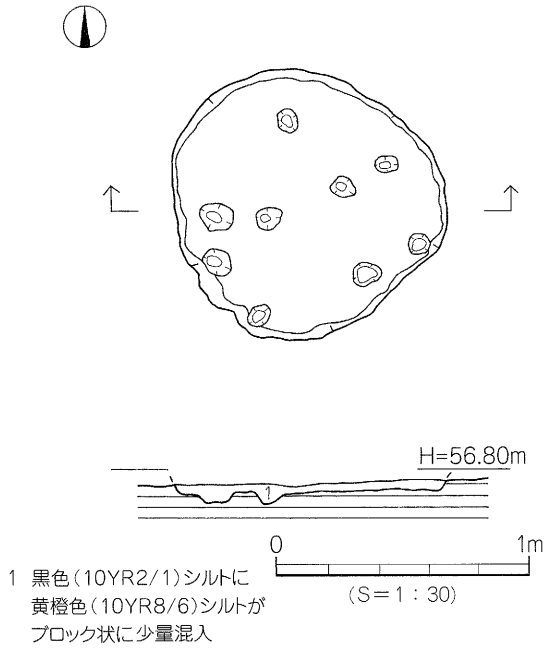
出土遺物（第 114 図）

３は壺形土器の口縁部片である。広口壺で、推定口径 12.8 cmを測る。口縁端面には、ヘラ描きによる細沈線文１条が巡る。色調は暗褐色を呈し、内外面共にハケメ調整後、ヘラミガキ調整を施す。

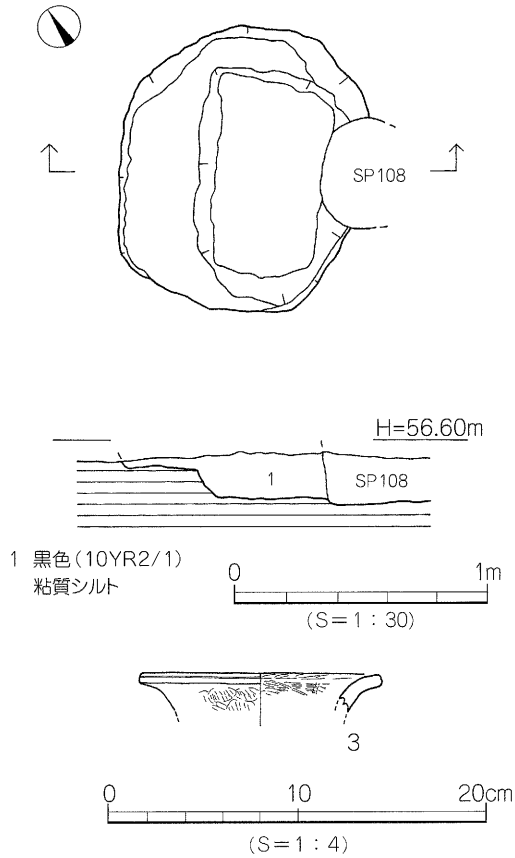
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土した弥生土器の特徴より弥生時代前期末とする。

ＳＫ 17（第 107・115 図）

調査地南側Ｄ２～Ｅ３区に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径 1.58 m、短径 0.70 m、深さは検出面下 11 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、黒



第113図　SK20測量図



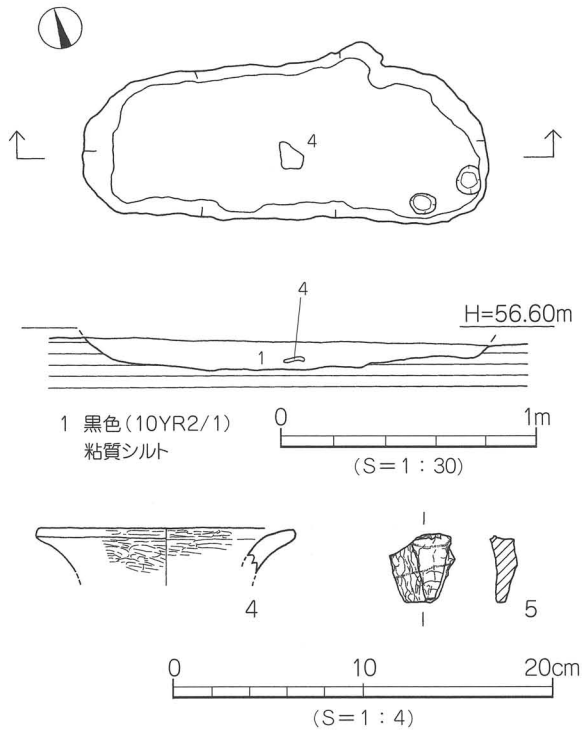
第114図　SK16測量図・出土遺物実測図

色粘質シルトの単一層である。土坑基底面は南側が深く、北東部から南西部に向けて傾斜をなす。基底面東側にて、径８～10 cm、深さ４～８cmを測る小ピット２基を検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様の黒色粘質シルトである。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量と石器が出土した。

出土遺物（第 115 図）

４は壺形土器の口縁部片である。広口壺で、推定口径 13.7 cmを測る。色調は灰褐色を呈し、内外面共にヨコ方向の丁寧なヘラミガキ調整を施す。５は石核で、石材は緑色片岩である。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代前期末とする。



第115図　SK17測量図・出土遺物実測図

ＳＫ 21（第 107・116 図）

調査地南側Ｅ３区に位置し、土坑西側は溝ＳＤ３に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 1.27 m、短径 1.10 m、深さは検出面下 14 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単一層である。なお、埋土中には少量の炭化物が混入する。土坑南西部にはテラス状の高まりがあり、基底面との高低差６cmを測る。土坑基底面には凹凸がみられ、土坑北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす。また、土坑及びテラス部分の基底面にて、径６～ 10 cm、深さ３～６cmを測る小ピットを６基検出した。ピット埋土は、いずれも土坑埋土と同様の黒色粘質シルトである。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。遺物は土坑南側の埋土中位付近に集中しており、壺形土器の口縁部（６）や胴部（７）などの比較的大型破片が出土した。

出土遺物（第 116 図、図版 30）

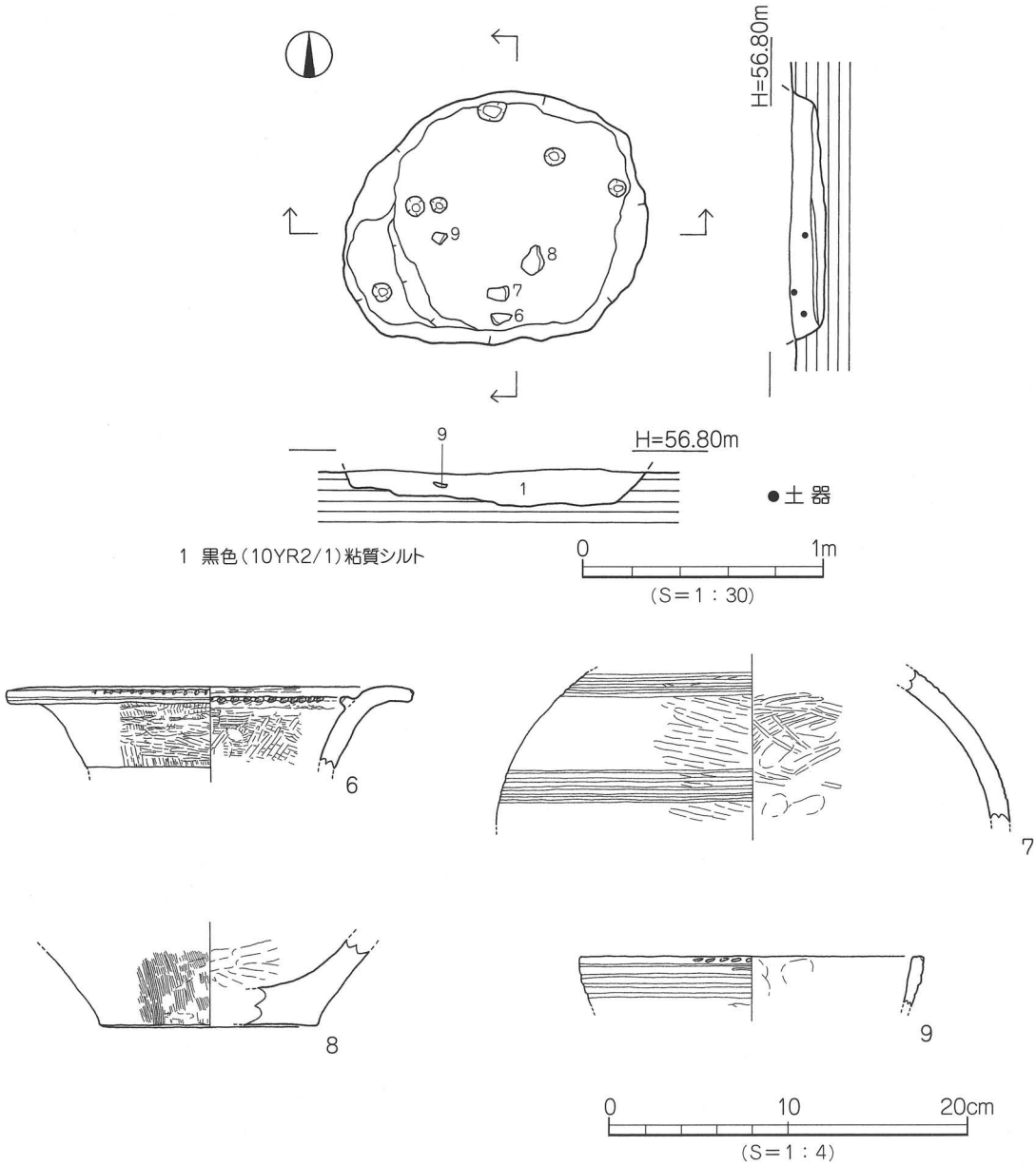
６～８は壺形土器。６は長頸壺の口頸部片で、推定口径 22.5 cmを測る。口縁上端面には刻目、下端面にはヘラ描きによる沈線文１条を施す。頸部内面には断面三角形状の凸帯を貼付けし、凸帯上に押圧文を施す。頸部外面には、ヘラ描きによる沈線文１条を施す。色調は褐色を呈し、頸部内外面共にハケメ調整後、ヘラミガキを加える。７は肩胴部片で、肩部と胴部には、それぞれヘラ描きによる５条の沈線文を施す。色調は暗灰褐色を呈し、内外面共にヨコないしナナメ方向のヘラミガキ調整を施す。８は底部で、わずかに上げ底となる。色調は橙褐色を呈する。９は鉢形土器の口縁部片で、推定口径 19.2 cmを測る。口縁端面に刻目、口縁部にはヘラ描き沈線文４条以上を施す。色調は褐色を呈し、外面にはヘラミガキ調整を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代前期末とする。

４）中期後半

ＳＫ 19（第 107・117 図）

調査地南西部Ｄ２区に位置し、土坑北側はＳＫ 18、南側はＳＫ 14 を切っている。平面形態は円形を呈し、規模は径 1.27 ～ 1.33 m、深さは検出面下 13 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色シルトの単一層である。土坑南側基底面にて、径 25 ～ 40 cm、深さ６cmを測るピット１基を検出したほか、径６～ 12 cm、深さ３～６cmを測る小ピット６基を検出した。ピット埋土は、いずれも土坑埋土と同様の黒色シルトである。土坑基底面は、壁体から中央部に向けて傾斜をなす。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。遺物は、土坑埋土中より弥生土器片が少量出土した。図化しうるものを２点掲載した。

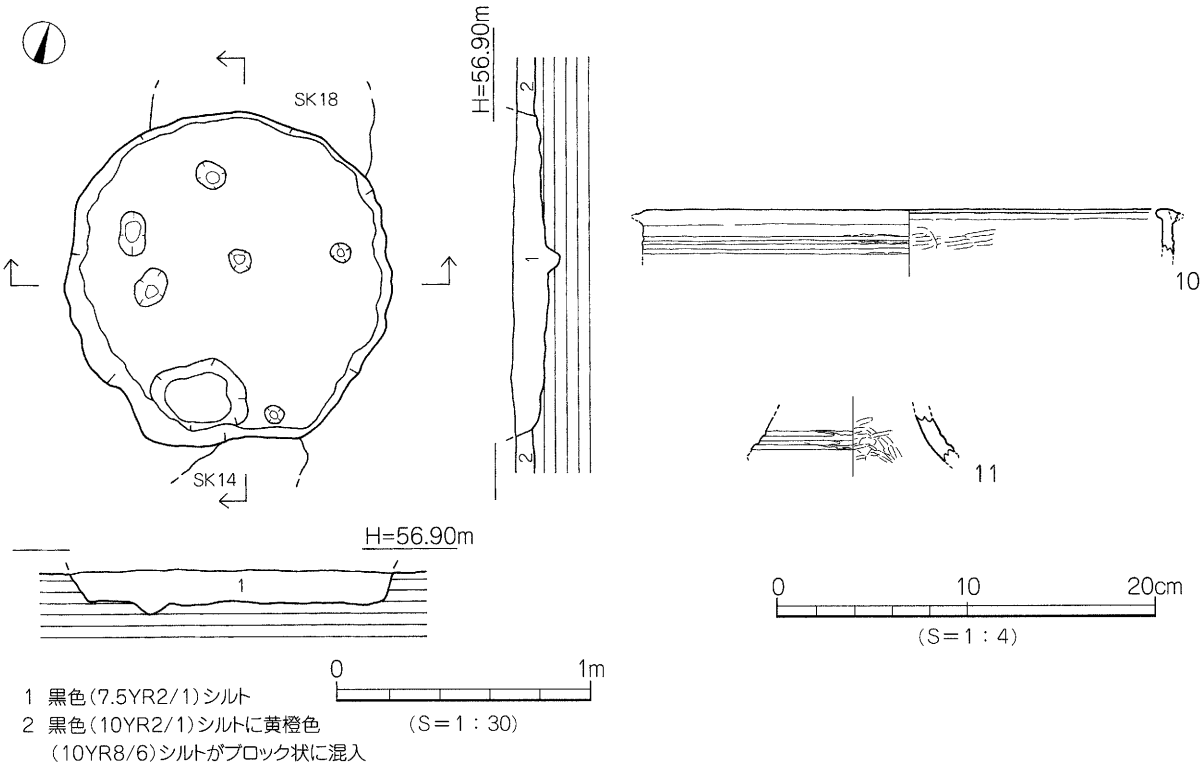


第116図　SK21測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第117図）

10は甕形土器。貼付口縁で、推定口径27.7cmを測る大型品である。胴部にヘラ描き沈線文２条以上を施す。色調は茶褐色を呈し、胴部内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。11は高坏形土器。脚柱部片で、凹線文３条以上を施す。色調は乳茶色を呈し、内面にはヘラミガキ調整を施す。

時期：出土した高坏形土器の特徴より、弥生時代中期後半とする。



第117図　SK19測量図・出土遺物実測図

（2）古墳時代

調査で検出した古墳時代の遺構は、掘立柱建物８棟、溝３条、土坑４基である。

1）掘立柱建物

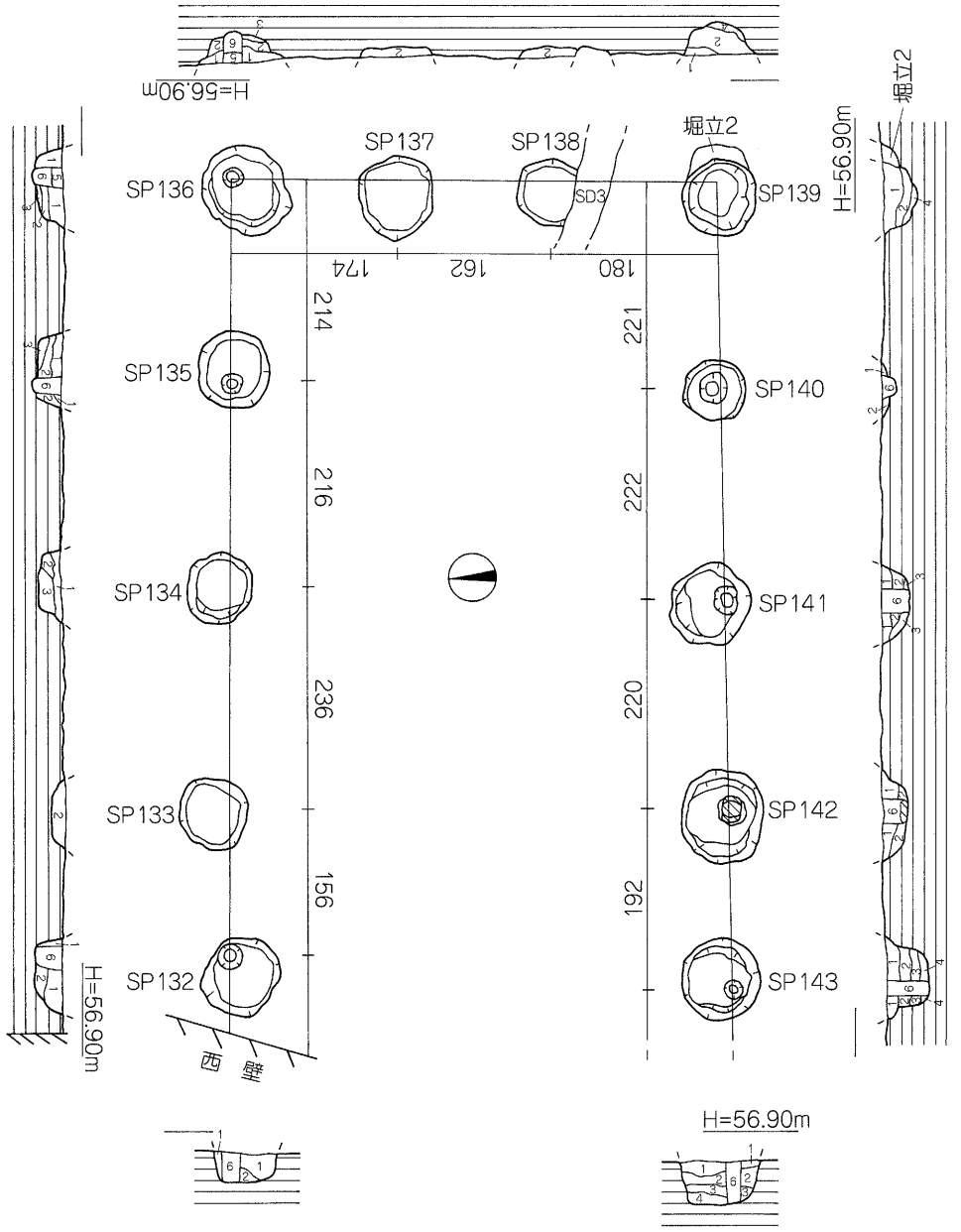
掘立１（第107・118図、図版28）

調査地南西隅Ｅ１～３区に位置する。12基の柱穴を検出し、そのうち建物南東部にあるＳＰ138は溝ＳＤ３に切られ、ＳＰ139は掘立２柱穴（ＳＰ183）を切っている。３間×４間以上の東西棟で、建物方位をN-5°-Wにとる。建物規模は桁行検出長8.60ｍ、梁行長5.16ｍを測り、柱穴間隔は桁間1.56～2.36ｍ、梁間1.62～1.80ｍを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.72～1.02ｍ、深さは検出面下12～44cmを測る。柱穴掘り方埋土は四種類あり、埋土上位から下位にかけて、１層黒褐色シルト（黄橙色シルトが斑点状に少量混入）、２層黒褐色シルト（黄橙色シルトと褐色シルトがブロック状に混入）、３層黒褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）、４層黒褐色シルトとなる。６基の柱穴（ＳＰ134・136・139・141～143）には、柱穴壁体上位は段掘り状となる部分がみられる。柱痕は７基の柱穴で検出した。柱痕径は12～20cmを測り、

埋土は黒色粘質シルト（６層）である。なお、ＳＰ 136 からは柱痕上位にて灰白色粘土（５層）を検出した。また、ＳＰ 142 の基底面からは径 15 × 20 cm、厚さ６cm大の扁平な石が検出され、おそらく柱を支えるための敷石として利用されたものと推測される。遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか、石庖丁が出土した。

出土遺物（第 119 図、図版 30）

12・16 はＳＰ 141、13・14 はＳＰ 132、15 はＳＰ 133、17 はＳＰ 134 出土品である。12・13 は土師器の甕である。12 は推定口径 28.6 cmを測る大型品で、口縁端部は上内方に肥厚する。13 は口



1 黒褐色（10YR2/2）シルトに黄橙色（10YR8/6）シルトが斑点状に少量混入
2 黒褐色（10YR2/2）シルトに黄橙色（10YR8/6）シルトと褐色（7.5YR4/3）シルトがブロック状に混入
3 黒褐色（10YR2/2）シルトに黄橙色（10YR8/6）シルトがブロック状に少量混入
4 黒褐色（7.5YR2/1）シルト
5 灰白色（10Y7/1）粘土
6 黒色（7.5Y2/1）粘質シルト

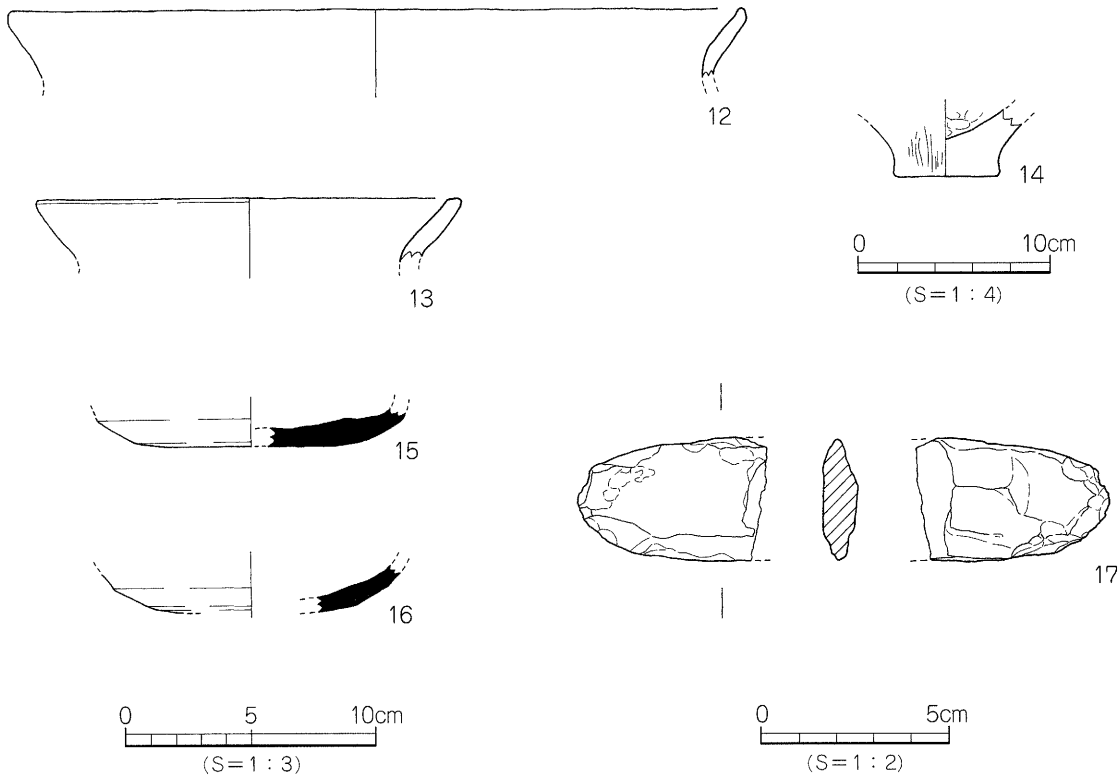
第118図　掘立１測量図

縁端部が内傾する面をもつ。14は弥生土器。甕形土器の底部で、突出する平底である（弥生後期）。15・16は須恵器の坏身である。平底風の底部で、外面全面に回転ヘラケズリ調整を施す。17は石庖丁で、敲打段階の未成品である。緑色片岩製。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、掘立１は古墳時代後期、６世紀代の建物とする。

掘立２（第107・120図、図版28）

調査地南側Ｅ２～Ｆ３区に位置する。建物北東隅の柱穴（ＳＰ128）は土坑ＳＫ21を切り、ＳＰ183は掘立１柱穴（ＳＰ139）に切られている。また、建物南西隅は調査区外に続く。２間×３間規模の総柱建物と考えられ、建物方位を、N-8°-Wにとる。建物規模は桁行長5.40 m、梁行長4.17 mを測り、柱穴間隔は桁間1.80～1.84 m、梁間2.08 mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.36～0.84 m、深さは検出面下６～36 cmを測る。柱穴掘り方埋土は二種類あり、１層黒色シルト、２層黒色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）である。柱穴のうち、ＳＰ152は壁体上位が段掘り状となっている。柱痕は、５基の柱穴で検出した。柱痕径は16～20 cmを測り、柱痕埋土は黒色粘質シルト（４層）である。なお、ＳＰ128・152からは柱痕上位にて灰白色粘土（３層）を検出した。遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器片や土師器片が少量出土した。図化しうるものを２点掲載した。

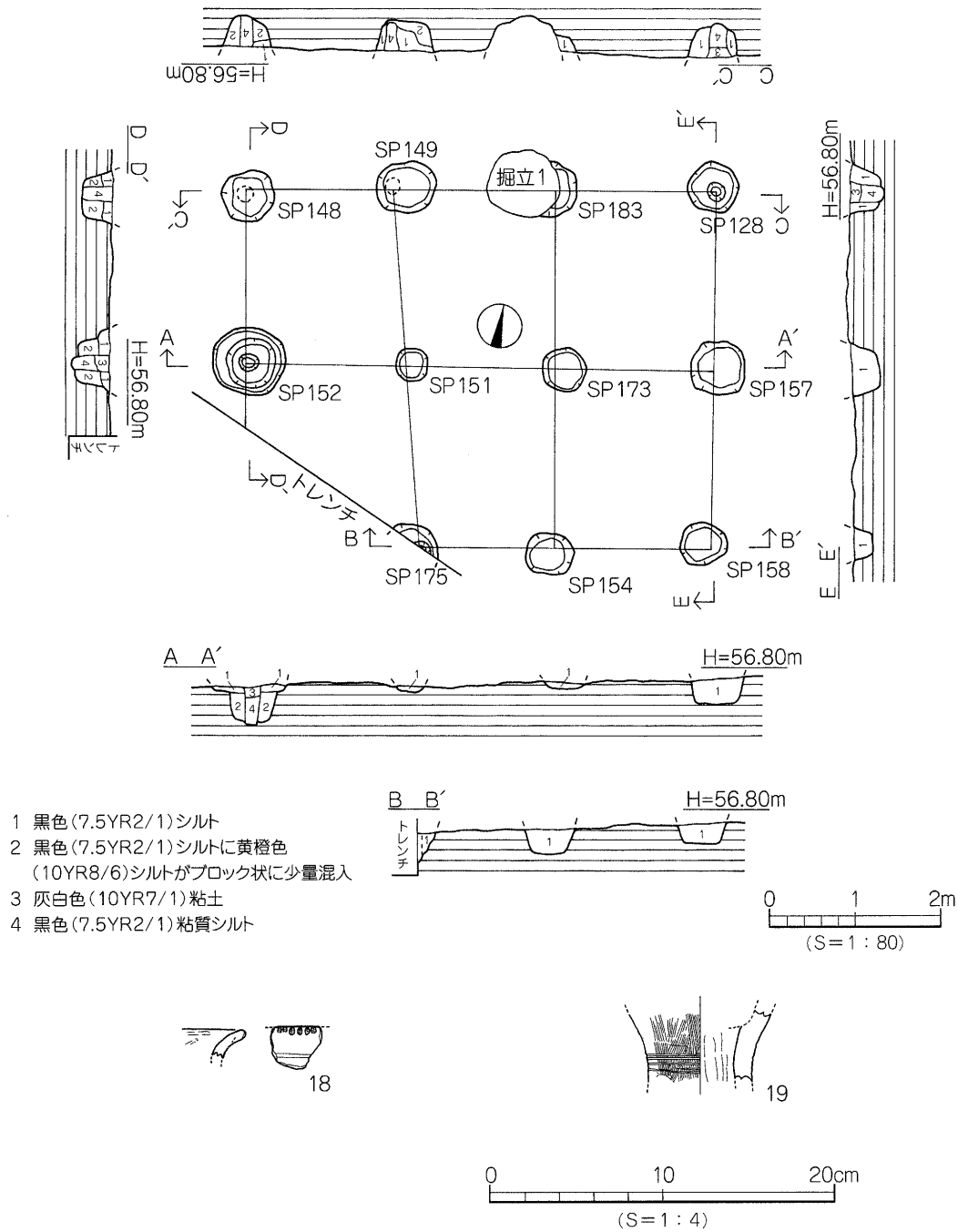


第119図　掘立１出土遺物実測図

出土遺物（第 120 図、図版 30）

18・19 は SP154 出土の弥生土器。18 は甕形土器の口縁部小片で、口縁端部に刻目、頸部にヘラ描きによる沈線文１条を施す。色調は橙色を呈し、内面にはヨコ方向のミガキ痕が残る。弥生前期後半。19 は高坏形土器の脚柱部。柱部中位に、ヘラ描きによる沈線文４条が巡る。色調は茶褐色を呈し、外面にはタテ方向の細かなハケメ調整を施す。弥生中期後半。

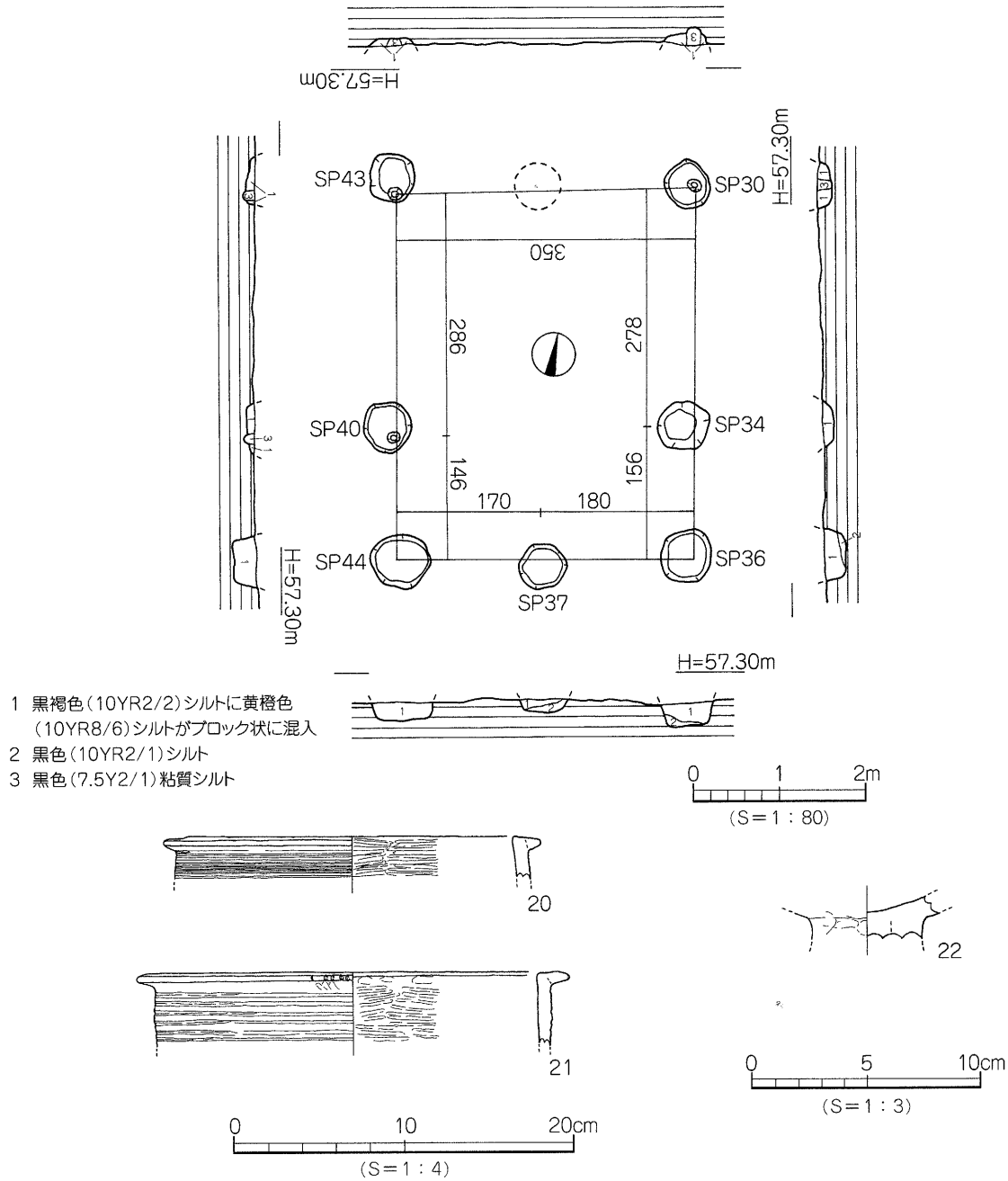
時期：出土遺物が少なく時期特定は難しいが、掘立１に先行することから、古墳時代後期以前の建物とする。



第120図　掘立２測量図・出土遺物実測図

掘立３（第107・121図）

調査地中央部Ｃ・Ｄ３区に位置する。２間×２間規模の建物で、建物方位をN-4°-Wにとる。建物規模は桁行長4.34 m、梁行長3.50 mを測り、柱穴間隔は建物北側が南側にくらべて広く、北側では2.78～2.86 m、南側では1.46～1.56 mとなる。建物を構成する柱穴は円形を呈し、規模は径0.44～0.72 m、深さは検出面下10～24 cmを測る。柱穴掘り方埋土は二種類あり、１層黒褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）、２層黒色シルトである。柱痕は３基の柱穴で検出され、柱痕径は12～20 cmを測る。柱痕埋土は、黒色粘質シルト（３層）である。遺物は柱穴掘り方埋土内より、弥生土器片や土師器片が少量出土した。図化しうるものを３点掲載した。



第121図　掘立３測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第 121 図）

20・21 はＳＰ 36、22 はＳＰ 44 出土品である。20 ～ 22 は弥生土器。20・21 は甕形土器の口縁部片である。貼付口縁で、20 は推定口径 18.8 cmを測る。胴部には、櫛描きによる沈線文８条以上を施す。21 は推定口径 23.6 cmを測り、胴部に櫛描き沈線文５条、口縁端部に刻目を施す。色調は 20 が乳褐色、21 は淡黄色を呈する。なお、20・21 共に内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。弥生前期末。22 は高坏形土器の坏柱部片。坏脚部の接合は組み合わせ技法により、色調は赤褐色を呈する。弥生後期。

時期：遺物は掘り方埋土からの出土であり時期特定は難しいが、柱穴埋土が掘立１と酷似することから、古墳時代後期以降の建物とする。

掘立４（第 107・122 図）

調査地中央部Ｃ・Ｄ３区に位置する。１間×１間規模の建物で、建物方位をほぼ真北にとる。建物規模は東西長 2.21 m、南北長 2.10 ～ 2.20 mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径 0.40 ～ 0.50 m、深さは検出面下 22 ～ 36 cmを測る。柱穴掘り方埋土は二種類あり、１層黒褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）、２層黒色シルトである。柱痕は２基の柱穴で検出され、柱痕径は 12 cmを測る。柱痕埋土は黒色粘質シルト（３層）である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、弥生土器片や土師器細片が数点出土したが、図化しうるものはない。

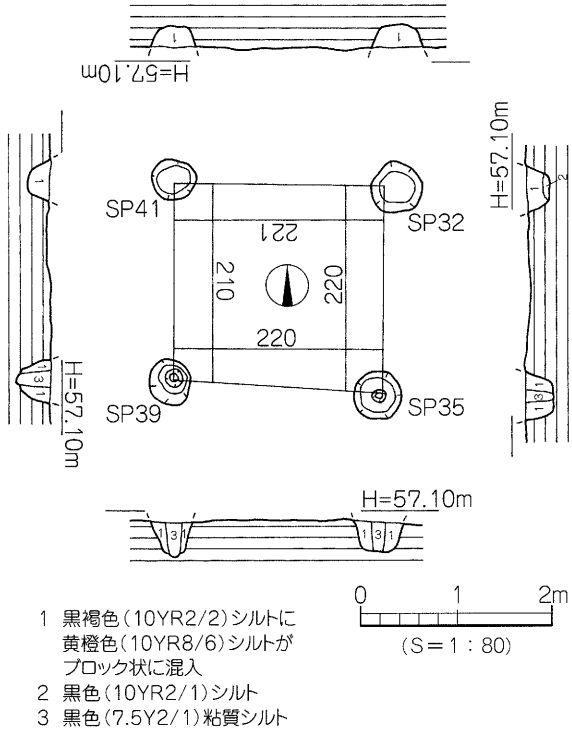
時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立３と酷似することから、古墳時代後期以降の建物とする。

掘立５（第 107・123 図）

調査地中央部南西寄りＤ２・３区に位置し、建物北西隅の柱穴（ＳＰ 184）は土坑ＳＫ 13 を切っている。１間×１間規模の建物で、建物方位を N-6°- W にとる。建物規模は、南北長 2.80 m、東西長 2.48 ～ 2.53 mを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径 0.22 ～ 0.36 m、深さは検出面下 24 ～ 40 cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は検出されなかった。遺物は柱穴内より、弥生土器片や玉が出土した。図化しうるものを２点掲載した。

出土遺物（第 123 図、図版 30）

23・24 はＳＰ 82 出土品。23 は弥生土器。壺形土器の底部で、平底となる。色調は橙色を呈し、外面の調整は、摩滅の為に不明である。弥生後期。24 は翡翠である。



第122図　掘立４測量図

時期：柱穴埋土が掘立１に酷似することから、概ね古墳時代後期以降の建物とする。

掘立６（第107・124図）

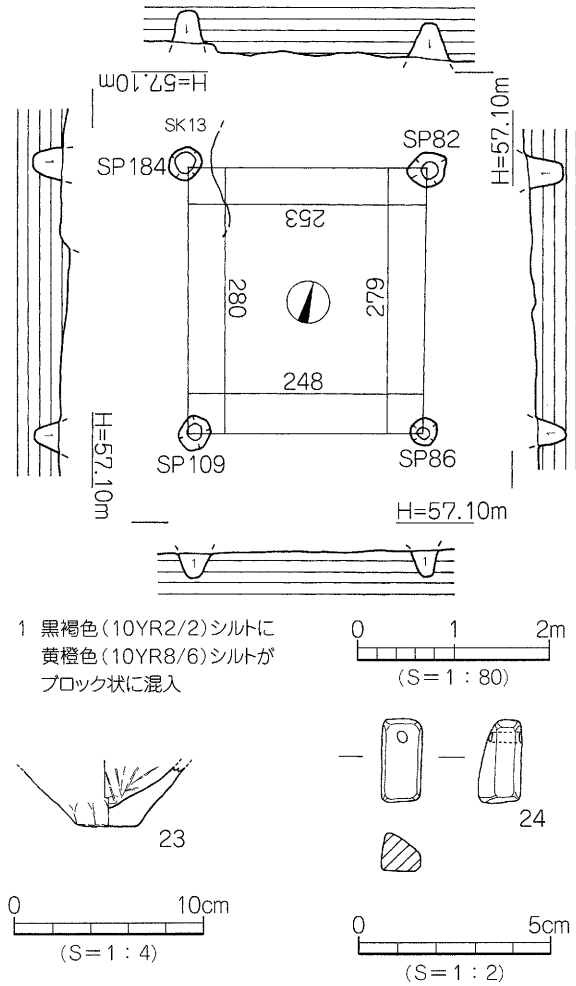
調査地南側Ｄ・Ｅ３区に位置する。１間×１間規模の建物で、建物方位をN-8°-Eにとる。建物規模は東西長2.60ｍ、南北長2.10ｍを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.22～0.60ｍ、深さは検出面下12～24 cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。柱痕はＳＰ105にて検出され、柱痕径は17 cmを測る。柱痕埋土は、黒色粘質シルト（２層）である。遺物は柱穴掘り方埋土中より、土師器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立１などと酷似することから、古墳時代後期以降の建物とする。

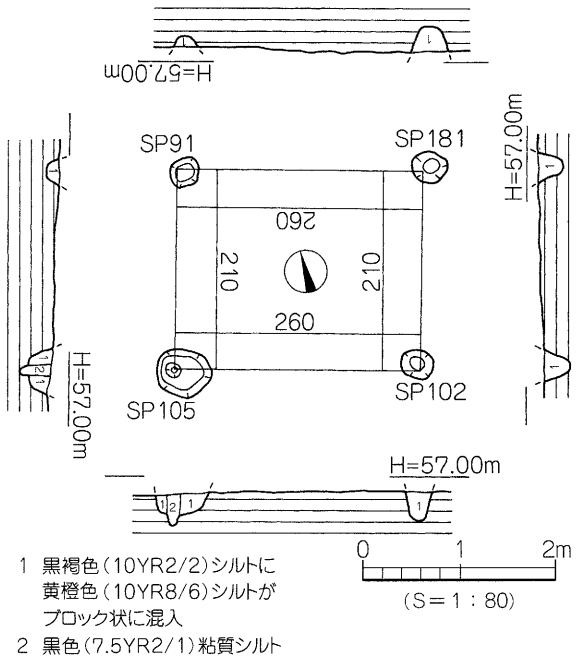
掘立７（第107・125図）

調査地南東部Ｅ３区に位置する。１間×１間規模の建物で、建物方位をN-7°-Eにとる。建物規模は東西長2.22～2.26ｍ、南北長2.32ｍを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.24～0.36ｍ、深さは検出面下20～32 cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色粘質シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）である。柱痕は検出されなかった。柱穴内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、柱穴埋土が掘立１と類似することから、概ね古墳時代後期以降の建物とする。



第123図　掘立５測量図・出土遺物実測図

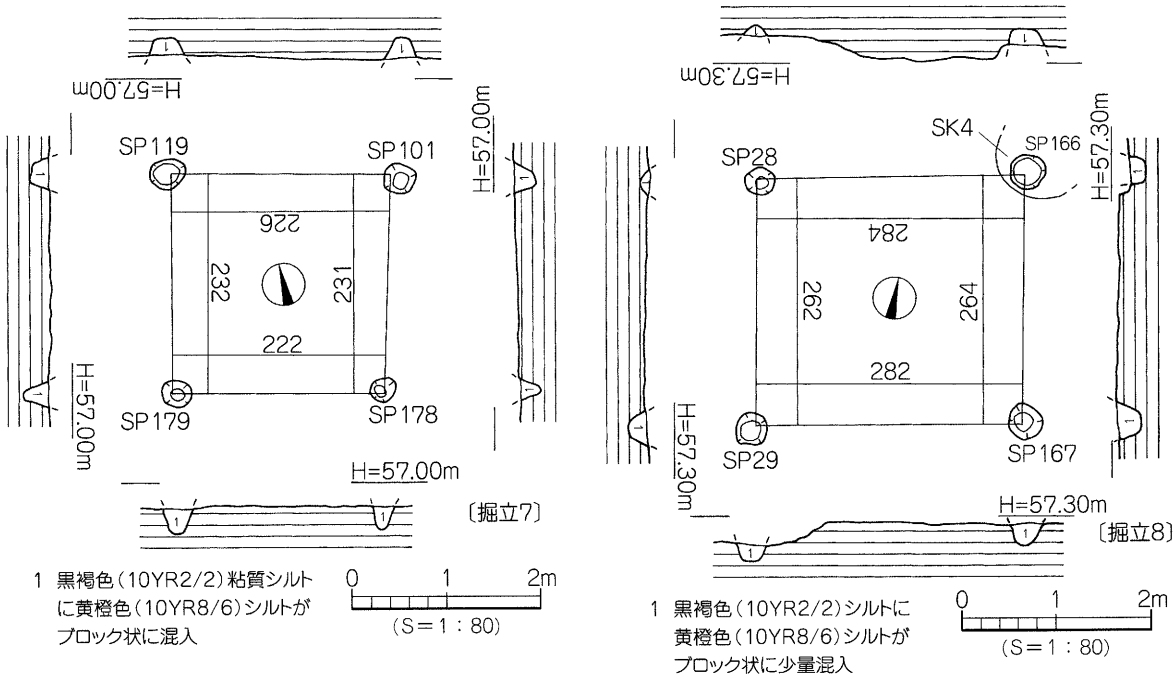


第124図　掘立６測量図

掘立８（第107・125図）

調査地中央部やや北寄りＣ３区に位置する。建物北東隅の柱穴（ＳＰ166）は土坑ＳＫ４に切られている。１間×１間規模の建物で、建物方位をN-2°-Wにとる。建物規模は東西長2.82～2.84ｍ、南北長2.62ｍを測る。建物を構成する柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.22～0.32ｍ、深さは検出面下12～30㎝を測る。柱穴埋土は、黒褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）である。柱痕は検出されなかった。遺物は柱穴内より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立１と酷似することから、概ね古墳時代後期以降の建物とする。



第125図　掘立７・８測量図

２）溝

ＳＤ１（第107・126図、図版29）

調査地北東隅Ｂ４・５区で検出した弧状の溝で、溝中央部は暗渠と溝ＳＤ２とに切られ、溝北側は調査区外に続く。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅱ①層が溝を覆う。規模は東西検出長7.20ｍ、南北検出長3.85ｍ、深さは最大で検出面下58㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、溝南側壁体は緩やかに立ち上がり、部分的に段掘り状となっている。溝の埋土は四種類あり、溝上位から１層黒褐色シルト、２層黄灰色砂質シルト、３層灰色シルト（黄橙色シルトがブロック状に混入）、４層暗灰黄色シルト（径２～５㎝大の円礫が少量混入）である。なお、溝壁体及び基底面は第Ⅴ層である。溝基底面には凹凸がみられ、溝東側から西側へ向けて傾斜をなす（比高差20㎝）。溝中央部北側の基底面では、径56㎝、深さ６㎝を測る凹みを検出し、溝埋土の４層で埋没している。遺物は１層中

より完形品を含む須恵器や土師器が出土し、基底面付近に堆積する２・３・４層中からは弥生土器（前期～後期）が混在して出土したほか、石器が出土した。遺物の出土状況から、複数の溝の重複、もしくは掘り直しが施された溝と推測される。溝の性格は定かではないが、溝基底部に堆積する４層中に礫が混入することから流水があったことがわかり、水路的な役割をもつ溝の可能性がある。

出土遺物（第 127 ～ 130 図、図版 30・31）

25 ～ 47 は１層、48 ～ 83 は２～４層出土品である。

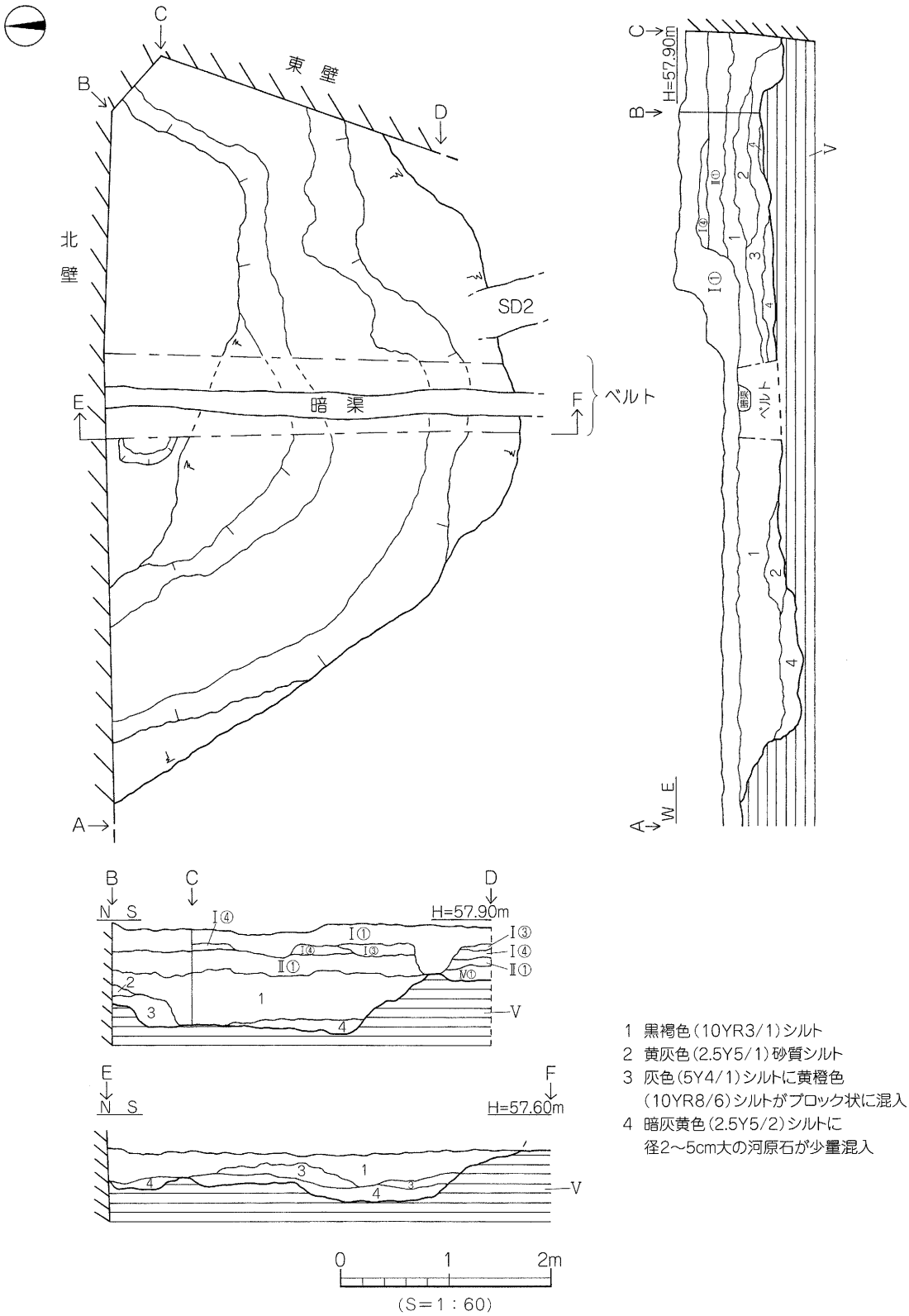
土師器（25 ～ 31）：25 ～ 29 は甕の口縁部片で、25 は外反、26 ～ 29 は内湾口縁を呈する。口縁端部は 25 が先細りし 26 は内傾する。27 は口縁端部が内傾し、さらに内方に肥厚する。28 の口縁端部は丸く仕上げる。30・31 は甑で把手部は上外方にのび、断面楕円形を呈する。

須恵器（32 ～ 47）：32 ～ 39 は坏Ｈ蓋である。32 ～ 38 は丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する。38 は口径 15.4 cm、器高 5.3 cmを測る復元完形品で色調は灰白色を呈し、天井部 1/2 の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。39 は天井部と口縁部を分ける稜は消失し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。40 ～ 43 は坏Ｈ身である。たちあがり端部は内傾し、受部は上外方に短くのびる。たちあがり径は、推定で 10.7 ～ 11.4 cmを測る。44 ～ 46 は高坏である。44 は有蓋高坏の蓋で、つまみ中央部は凹み、口縁端部は内傾する。45・46 は坏脚部片で、45 は長方形状の透かし、46 は台形状の透かしが三方向に穿たれている。46 の脚裾部には、沈線状の凹みが巡る。45・46 共に柱部外面に回転カキメ調整を施す。47 は甕の胴部片である。胴部最大径 44.2 cmを測る大型品で、色調は灰色を呈する。外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。

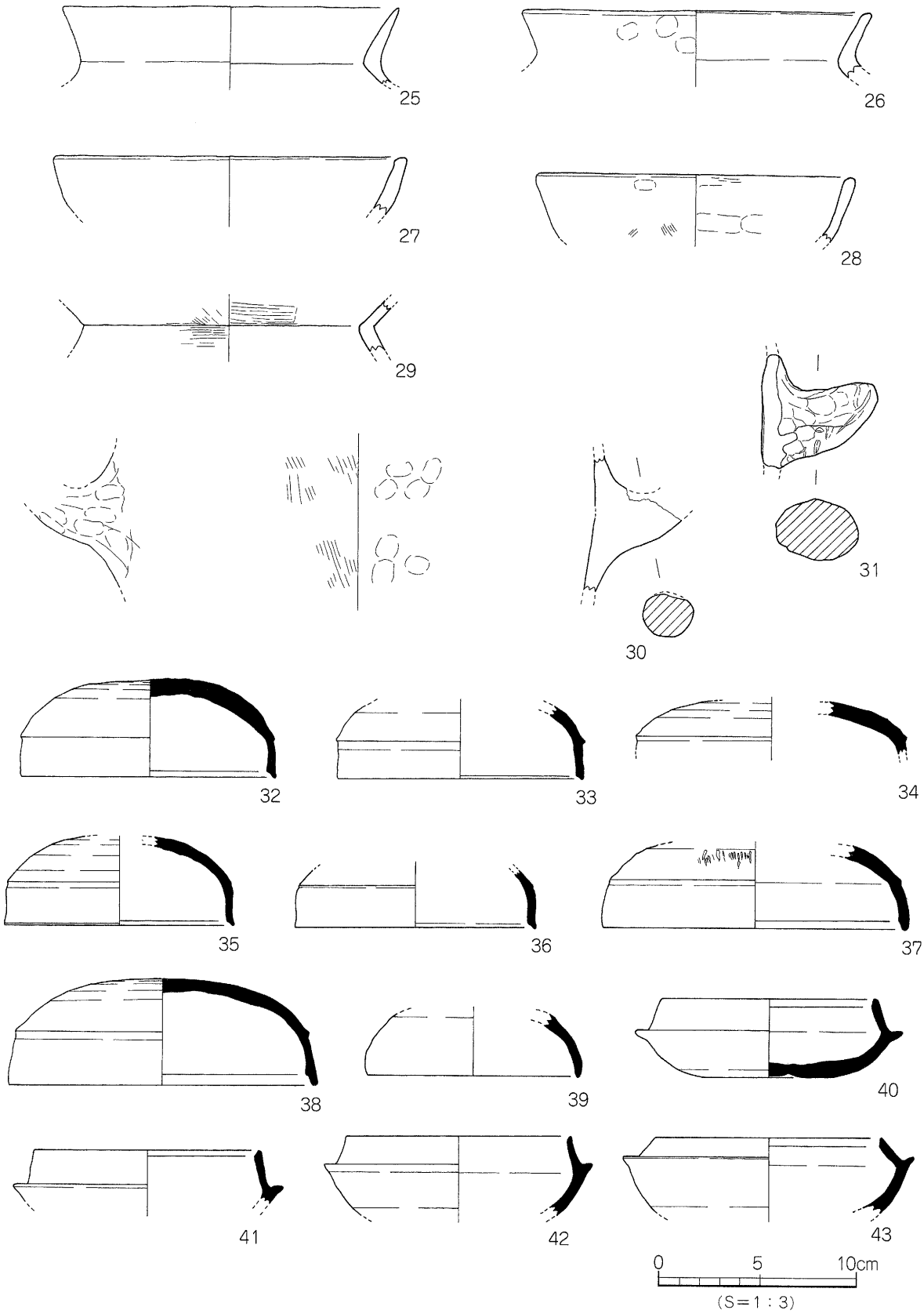
弥生土器（48 ～ 82）：48 ～ 58 は甕形土器。48 ～ 51 は「く」の字状を呈する口縁部片で、51 は口縁端部を上方に拡張している。52 は逆「Ｌ」字状を呈する折曲口縁、53 は貼付口縁で、53 は胴部外面にヘラ状工具による沈線文８条と刺突文、口縁端部に刻目を施す。54・55 は胴部片で、54 はヘラ描き沈線文３条以上、55 はヘラ状工具による線刻を施す（記号か）。56 ～ 58 は底部で、56 はくびれ部をもつ上げ底、57・58 は平底である。59 ～ 78 は壺形土器。59 ～ 63 は口縁部片で、59 ～ 61 は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文２～３条を施す。62 は推定口径 29.6 cmを測る大型品で、凹線文６条を施す。63 は、口縁端部が先細りする。64 ～ 68 は頸肩部片で、65 ～ 67 は頸部に断面方形状の凸帯を貼付け、凸帯上に斜格子目文を施す。69 は胴部最大径 70 cmを測る大型品で、断面方形状の凸体を貼付ける。色調は灰褐色を呈し、内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。70 ～ 78 は底部で、70 ～ 77 は平底、78 は上げ底である。なお、77・78 は鉢形土器の可能性がある。79・80 は鉢形土器。79 は口縁部が外反し、口縁端部は尖る。80 は推定口径 38.2 cmを測る大型品で、口縁端部は丸く仕上げる。81・82 は高坏形土器。81 は坏部の復元完形品で、色調は褐色を呈し、口径 25.5 cmを測る。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。口縁部外面に凹線文４条を施す。坏部上位外面はヨコ方向、内面はナナメ方向、さらに坏部下位外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。82 は脚柱部片で、色調は乳褐色を呈する。外面にはハケメ調整を施す。

石器（83）：83 は石庖丁で、粗割段階の未成品である。材質は緑色片岩で、重量 60.9 ｇを測る。

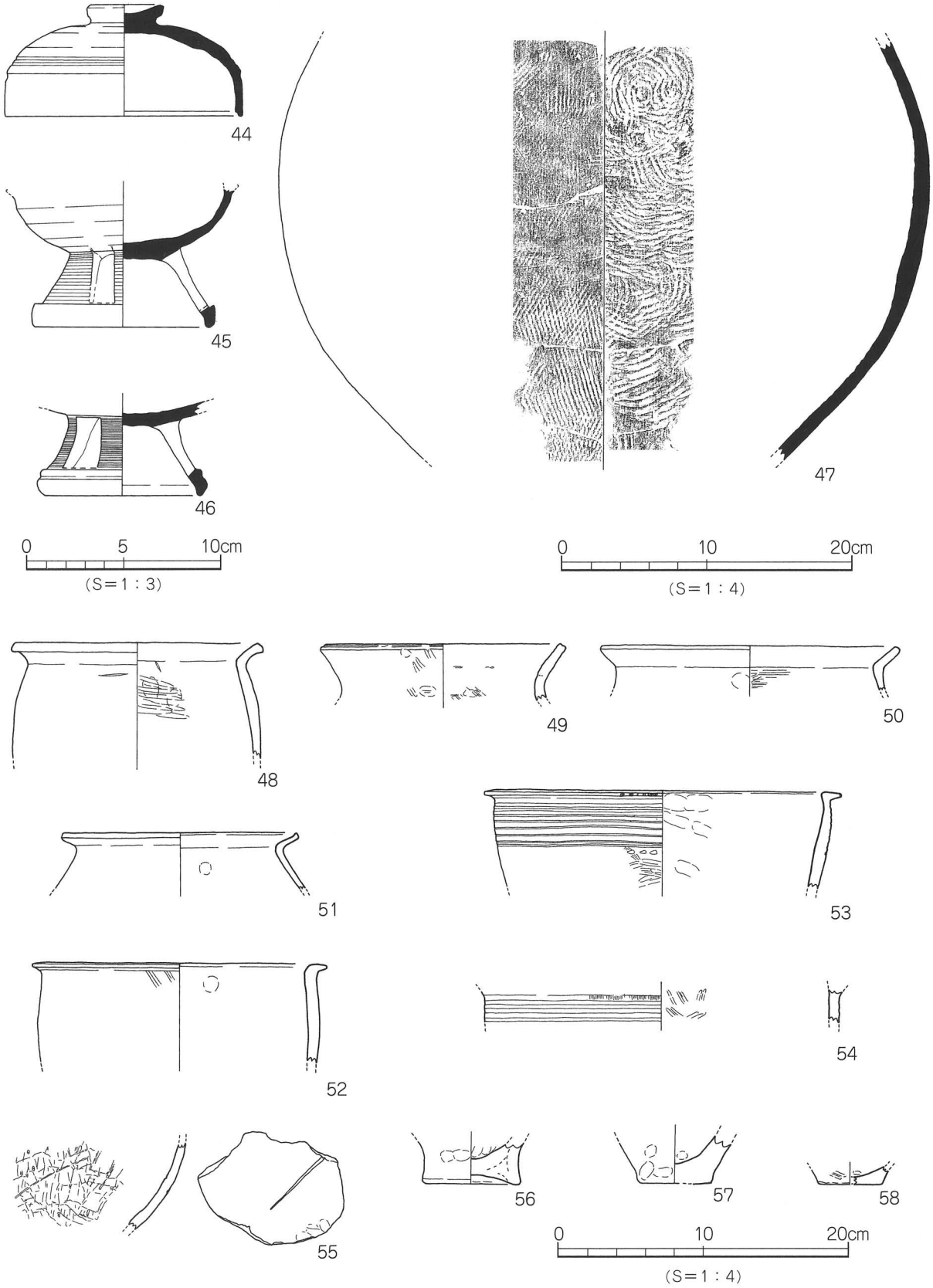
時期：出土遺物の特徴より、古墳時代後期前半の溝とする。



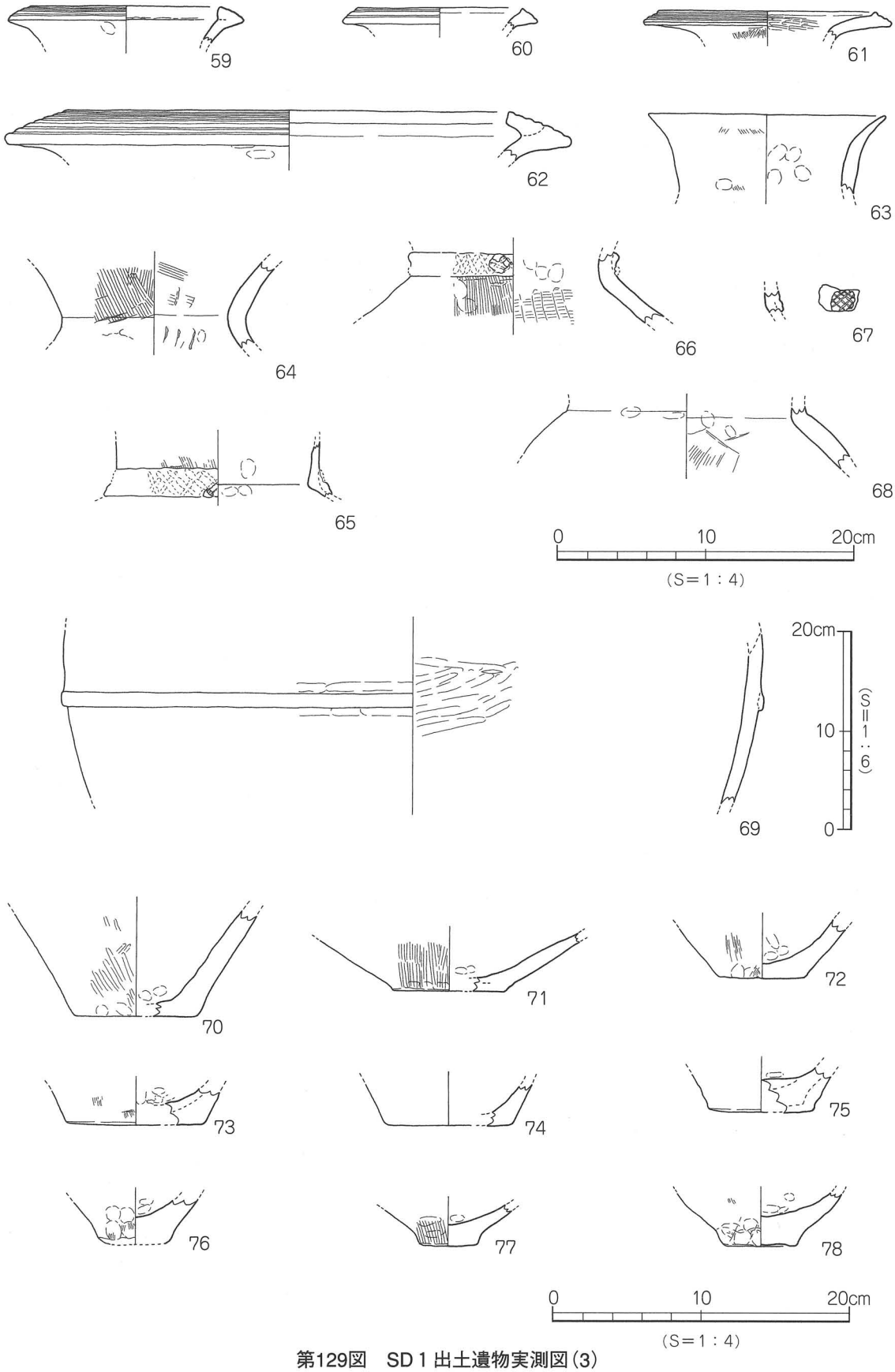
第126図　SD１測量図



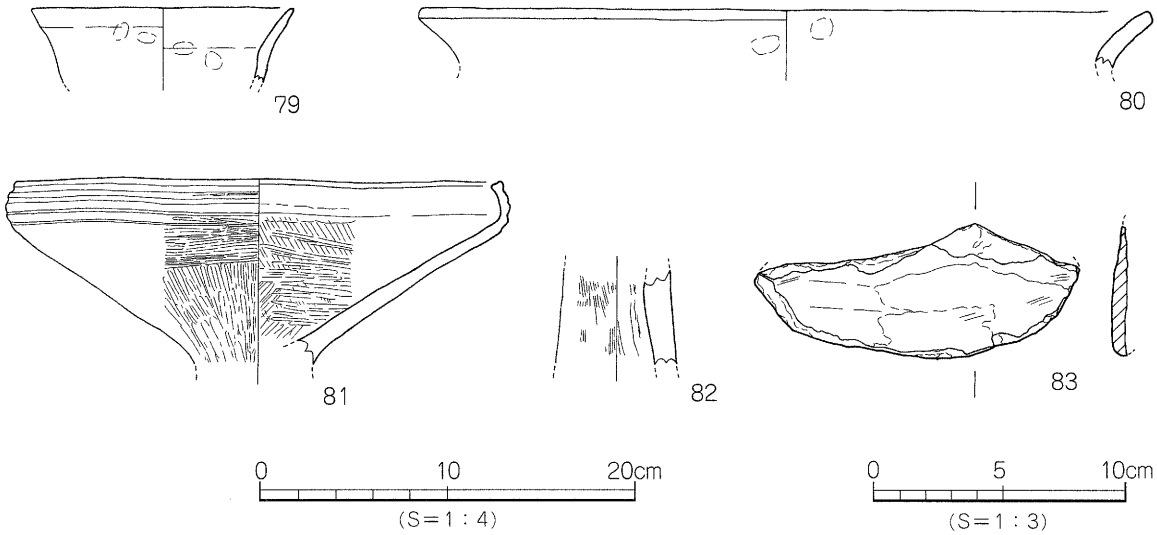
第127図　SD１出土遺物実測図(1)



第128図　SD１出土遺物実測図(2)



第129図　SD１出土遺物実測図(3)



第130図　SD１出土遺物実測図(4)

ＳＤ２（第107・131図）

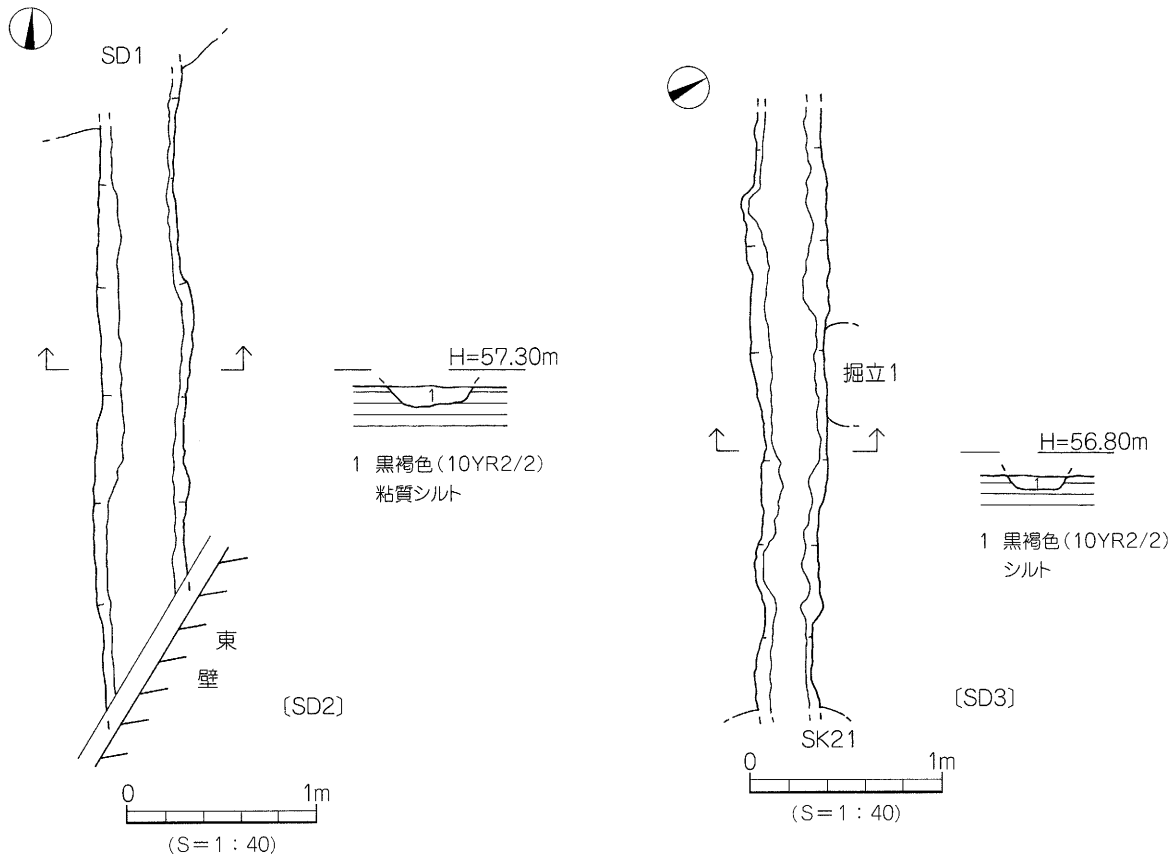
調査地北東部Ｂ５区で検出した南北方向の溝で、溝北側はＳＤ１と重複し、南側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、溝上面は第Ⅳ①層が覆う。規模は検出長2.98ｍ、幅0.42～0.50ｍ、深さは検出面下10㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトの単一層である。溝基底面には凹凸がみられ、溝南側から北側へ向けて緩やかな傾斜をなす（比高差６㎝）。溝壁体及び基底面は、第Ⅴ層である。ＳＤ１との切り合いが明確に検出されなかったことや、溝基底の傾斜がＳＤ１へ向かっていることから、ＳＤ２はＳＤ１へ取水するための水路として利用された可能性が考えられる。なお、溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、ＳＤ１に関連する溝の可能性があることから、ＳＤ２は古墳時代後期以降の溝とする。

ＳＤ３（第107・131図）

調査地南側Ｅ２・３区で検出した東西方向の溝で、溝東側は土坑ＳＫ21、溝中央部は掘立１柱穴（ＳＰ138）を切り、溝両端は消失している。規模は検出長3.20ｍ、幅0.28～0.42ｍ、深さは検出面下６㎝を測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトの単一層である。溝基底面には凹凸がみられず、わずかに西側から東側に向けて緩傾斜をなす（比高差２㎝）。溝壁体及び基底面は、第Ⅴ層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、掘立１との切り合い等から、ＳＤ３は概ね古墳時代後期以降の溝とする。



第131図　SD２・３測量図

3）土　坑

ＳＫ４（第107・132図）

調査地中央部北寄りＣ３区に位置し、掘立８柱穴（ＳＰ166）を切っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.06ｍ、短径0.85ｍ、深さは検出面下12㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は比較的垂直気味に立ち上がる。埋土は、黒褐色シルトの単一層である。土坑基底面にて径８㎝、深さ３㎝を測る小ピット１基を検出した。ピット埋土は、黒褐色シルトである。土坑壁体及び基底面は、第Ⅴ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが掘立８に後出することから、概ね古墳時代後期以降とする。

ＳＫ５（第107・132図）

調査地中央部北寄りＣ３区に位置する。土坑西側は近現代の畑耕作により、一部削平されている。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径1.25ｍ、短径0.95ｍ、深さは検出面下15㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルトの単一層である。土坑基底面には凹凸がみられ、土坑中央部から北側及び南側に向けて傾斜をなす。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑西側基底面にて、径６～12㎝、深さ２～８㎝を測る小ピット６基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様の黒褐色シルトである。土坑や小ピット内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＫ４と酷似することから、概ね古墳時代後期以降とする。

ＳＫ８（第107・133図）

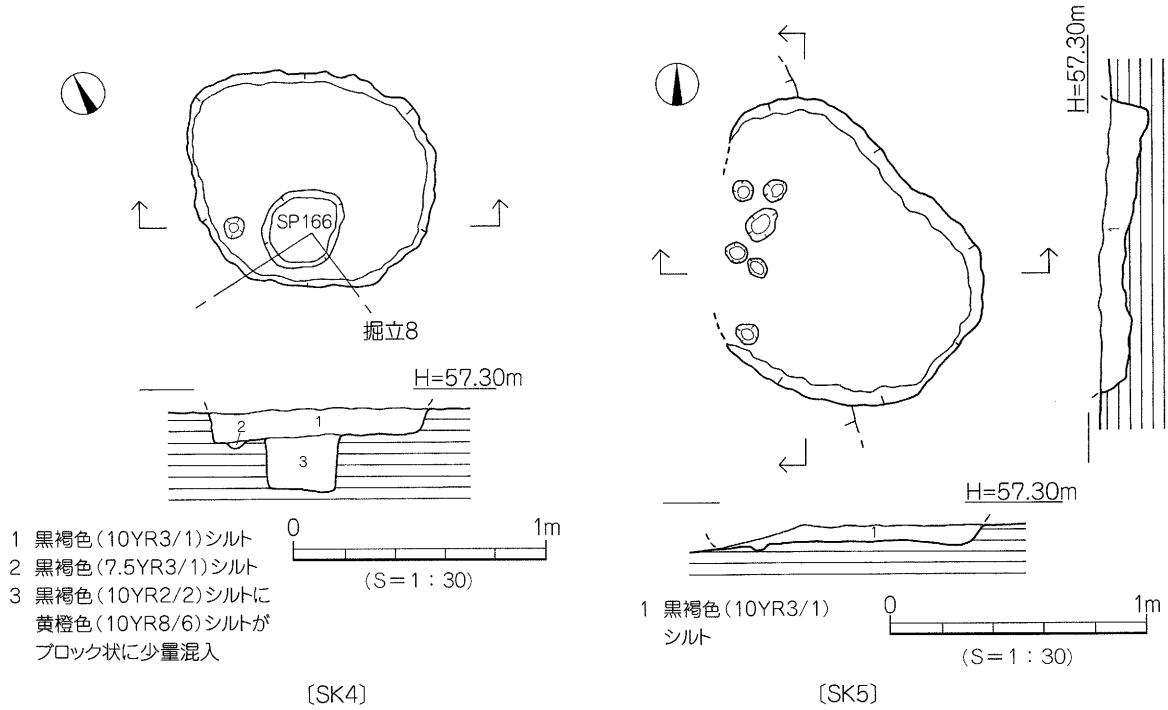
調査地中央部西寄りＣ２・３区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径1.28ｍ、深さは検出面下13㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルトの単一層である。埋土中には、少量の炭化物が混入する。土坑基底面には、わずかに凹凸がみられるが、基底面の高低差は認められない。なお、土坑壁体及び基底面は第Ｖ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＫ５と酷似することから、概ね古墳時代後期以降とする。

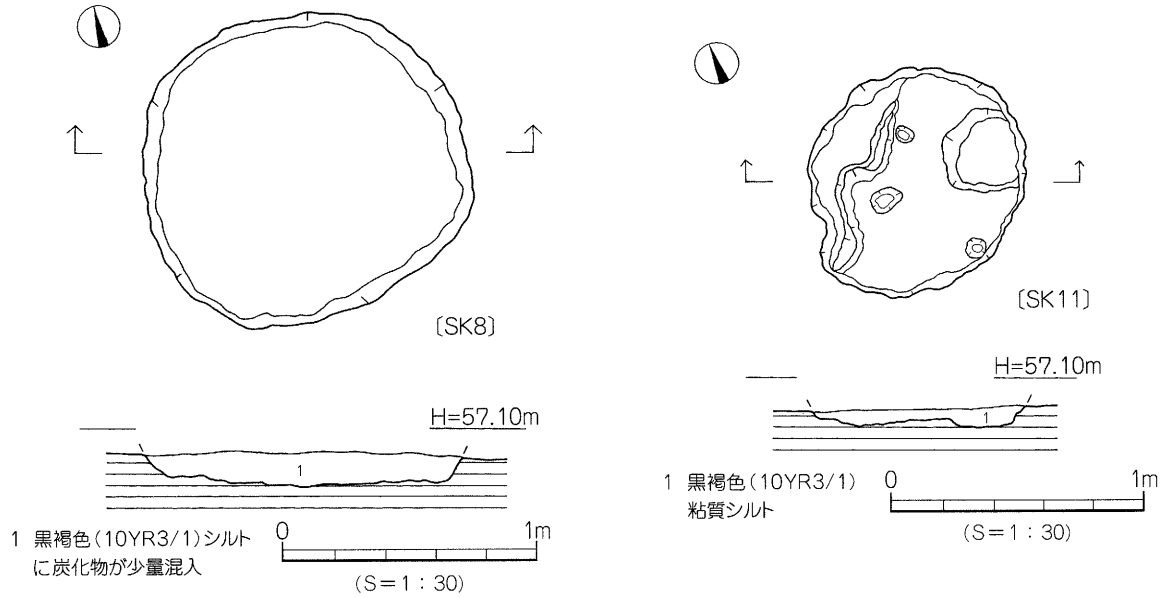
ＳＫ11（第107・133図）

調査地中央部南東寄りＤ３区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.95ｍ、短径0.84ｍ、深さは検出面下８㎝を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトの単一層である。土坑西側基底部には段差があり、高さ２㎝を測るテラス状の高まりをもつ。また、土坑基底面にて径30㎝、深さ４㎝を測るピット１基と、径８～12㎝、深さ３㎝を測る小ピット３基を検出した。ピット埋土は、いずれも土坑埋土と同様の黒褐色粘質シルトである。土坑壁体及び基底面は、第Ｖ層である。土坑及びピット内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＫ５やＳＫ８と酷似することから、概ね古墳時代後期以降とする。



第132図　SK４・５測量図



第133図　SK８・11測量図

(3) 古　代

調査で検出した古代の遺構は、土坑３基である。すべて、第Ⅴ層上面での検出である。

ＳＫ６（第107・134図）

調査地中央部Ｃ・Ｄ３区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径1.36ｍ、深さは検出面下18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は垂直気味に立ち上がる。埋土は、褐色シルトの単一層である。土坑基底面は北東部から南西部に向けて傾斜をなし、比高差４cmを測る。土坑壁体及び基底面は、第Ⅴ層である。土坑中央部南寄りの基底面にて径12cm、深さ４cmを測るピット１基と、径８cm、深さ２cmを測る小ピット２基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と同様の褐色シルトである。遺物は、埋土中より土師器片が少量出土した。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第134図）

84は土師器坏の口縁部片である。推定口径16.2cmを測り、体部中位に不明瞭な稜をもつ。色調は乳灰褐色を呈し、内外面共にヨコナデを施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土遺物の特徴より概ね古代、平安時代後期、11～12世紀頃とする。

ＳＫ１（第107・135図）

調査地北側Ｂ４区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径1.11～1.18ｍ、深さは検出面下36cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑南側壁体は垂直気味に立ち上がる。埋土は二種類あり、上位は１層褐色シルト、下位は２層暗褐色シルトが堆積する。土坑基底面は凹凸がなく、ほぼ平坦である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑内からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、土坑埋土がＳＫ６と類似することから、概ね古代、平安時代頃の遺構とする。

ＳＫ３（第107・135図）

調査地北西部Ｂ３区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.04ｍ、短径0.82ｍ、深さは検出面下43㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は内湾気味に立ち上がる。埋土は四種類に分かれ、埋土上位から１層褐色シルト、２層明褐色シルト、３層明褐色シルト（黄橙色シルトがブロック状に少量混入）、４層褐色粘質シルトである。２層の堆積状況からは、再掘削された可能性がある土坑である。土坑基底面には凹凸がみられず、ほぼ平坦である。なお、土坑壁体及び基底面は第Ⅴ層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＫ１やＳＫ６と類似することから、概ね古代、平安時代頃とする。

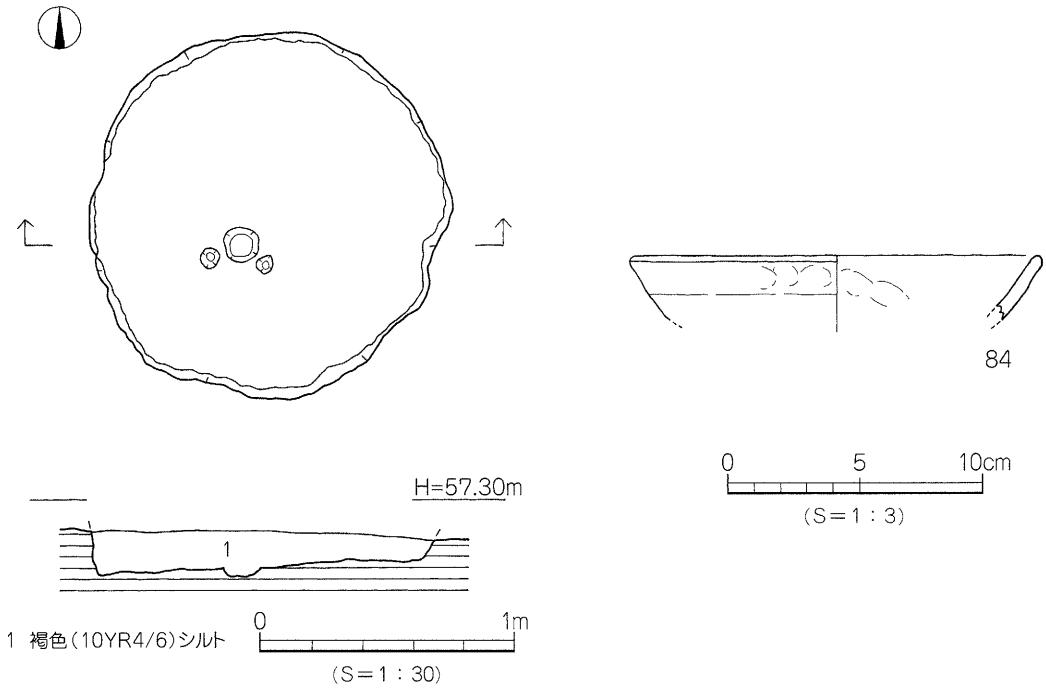
（４）その他の遺構と遺物

調査では、柱穴180基（掘立柱建物柱穴50基を含む）と倒木址６基を検出した。すべて、第Ⅴ層上面での検出である。

１）柱　穴

検出した柱穴は、埋土で分類すると以下の三種類である。

Ａ類：灰褐色土〔ＳＰ１～3・8～11・15・18～20・24～27・31・33・46・54・84・85・89・94・98・100・104・107・110・111・116～118・121・122・127・129～131・144・145・164・165・168・169・174・176・177・180・182〕：49基



第134図　SK６測量図・出土遺物実測図

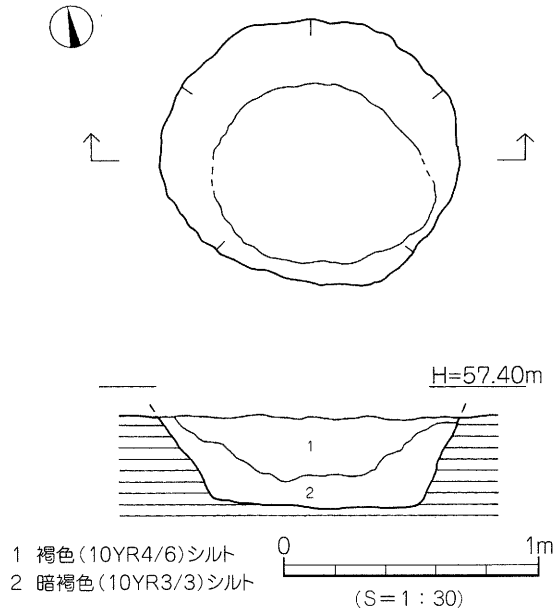
B類：褐色土〔ＳＰ14・16・17・22・23・42・48・50・52・58・59・61・62・65・66・69～72・74・76・77・87・90・93・112～115・123・124・153・159～162〕：36基

C類：黒褐色土〔ＳＰ４～７・12・21・38・45・47・49・51・53・55～57・60・63・64・67・68・73・75・78～81・83・88・92・99・103・106・108・120・125・126・146・147・150・155・156・163・170～172〕：45基

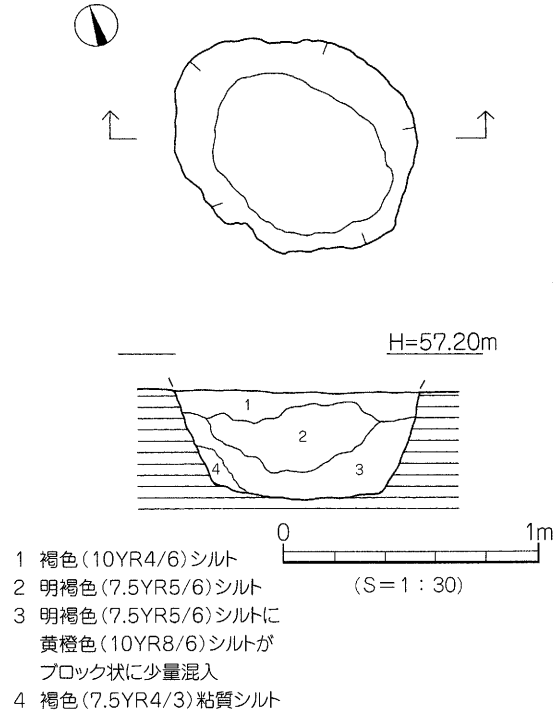
A類の柱穴は49基あり、調査地北側Ａ３～Ｃ４区と、南側Ｄ２～Ｅ３区に比較的多く分布する。柱穴内からは、土師器片が出土している。B類の柱穴は36基あり、調査地中央部Ｄ２・３区に集中しており、柱穴内からは弥生土器片や土師器片、須恵器片が出土している。C類の柱穴は45基あり、調査地ほぼ全域に点在する。柱穴内からは、弥生土器片や土師器片が出土している。なお、柱穴から出土した遺物のうち、図化しうるものを５点掲載した。

出土遺物（第136図）

85はＳＰ99（C類）、86はＳＰ163（C類）、87はＳＰ120（C類）、88はＳＰ17（B類）、89はＳＰ53（C類）出土品である。85は須恵器坏H蓋で、天井部外面にはヘラ状工具による線刻を施す（ヘラ記号か）。86は須恵器坏H身で、たちあがりは欠損する。推定受部径14.6cmを測る。87は須恵器短頸壺の口縁部片で口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。88は土師器坏で、色調は黄灰色を呈し、推定口径12cmを測る。89は弥生土器の壺形土器で、口縁端面に刻目、口縁部内面にはヘラ描き沈線文１条を施す。外面はタテないしナナメ方向、内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

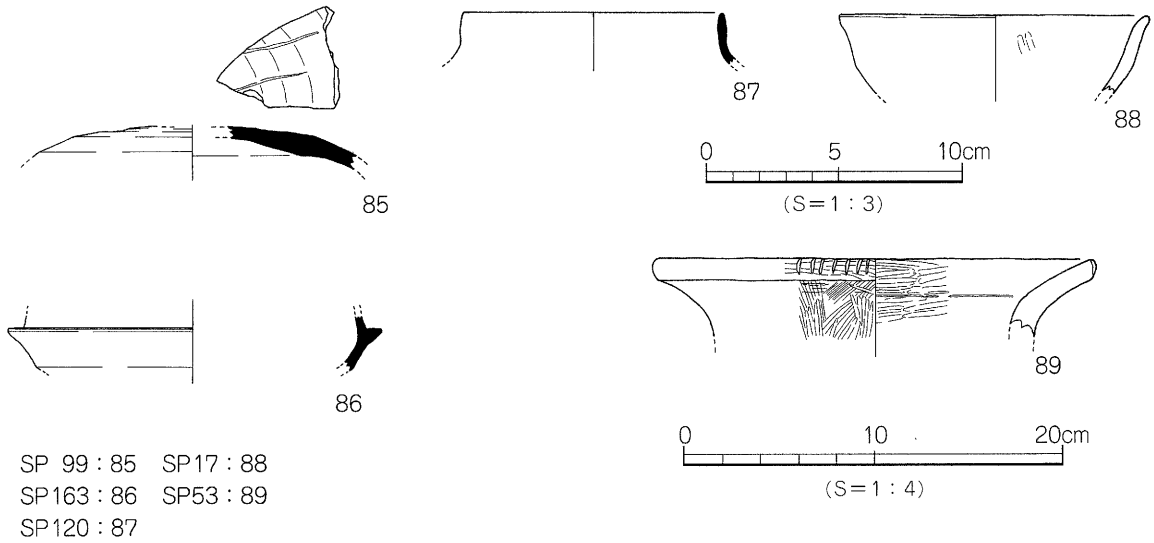


〔SK1〕



〔SK3〕

第135図　SK１・３測量図



第136図　柱穴出土遺物実測図

２）倒木址

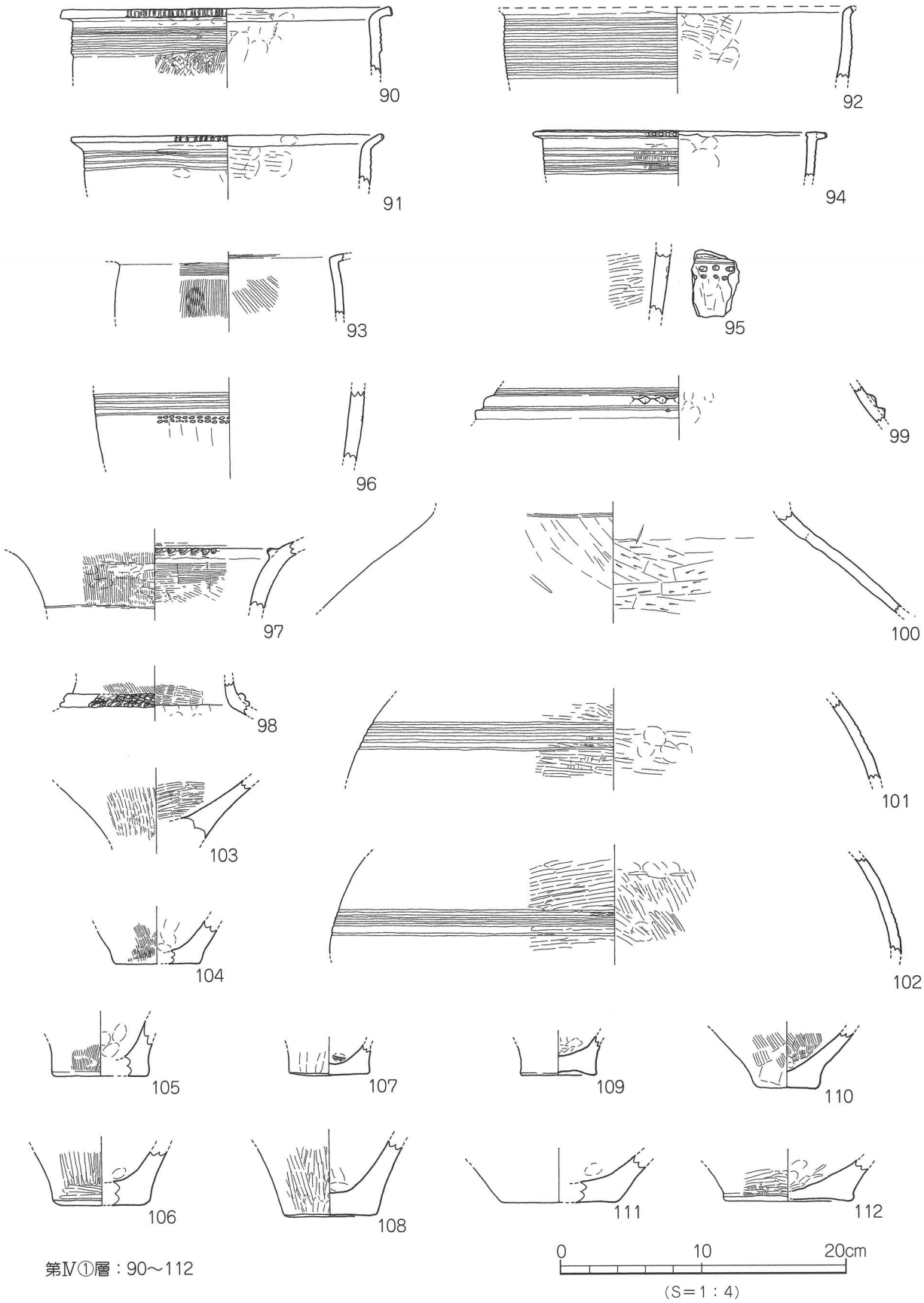
調査で検出した倒木址は６基である。調査地全域に点在しており、規模は径 1.2 ～ 3.0 m、深さは検出面下 60 ～ 120 cmを測る。埋土は褐色を呈する粘性の極めて強い粘質土を基調とし、第Ⅳ①層や第Ⅳ②層が互層堆積をなす。第 107 図に倒木番号、及び倒れた方向（矢印で示す）を表示している。

３）包含層出土遺物（第 137・138 図、図版 32）

調査では、包含層掘り下げ時に遺物が出土した。実測図を掲載した遺物は、第Ⅱ②層と第Ⅳ①層から出土したものである。

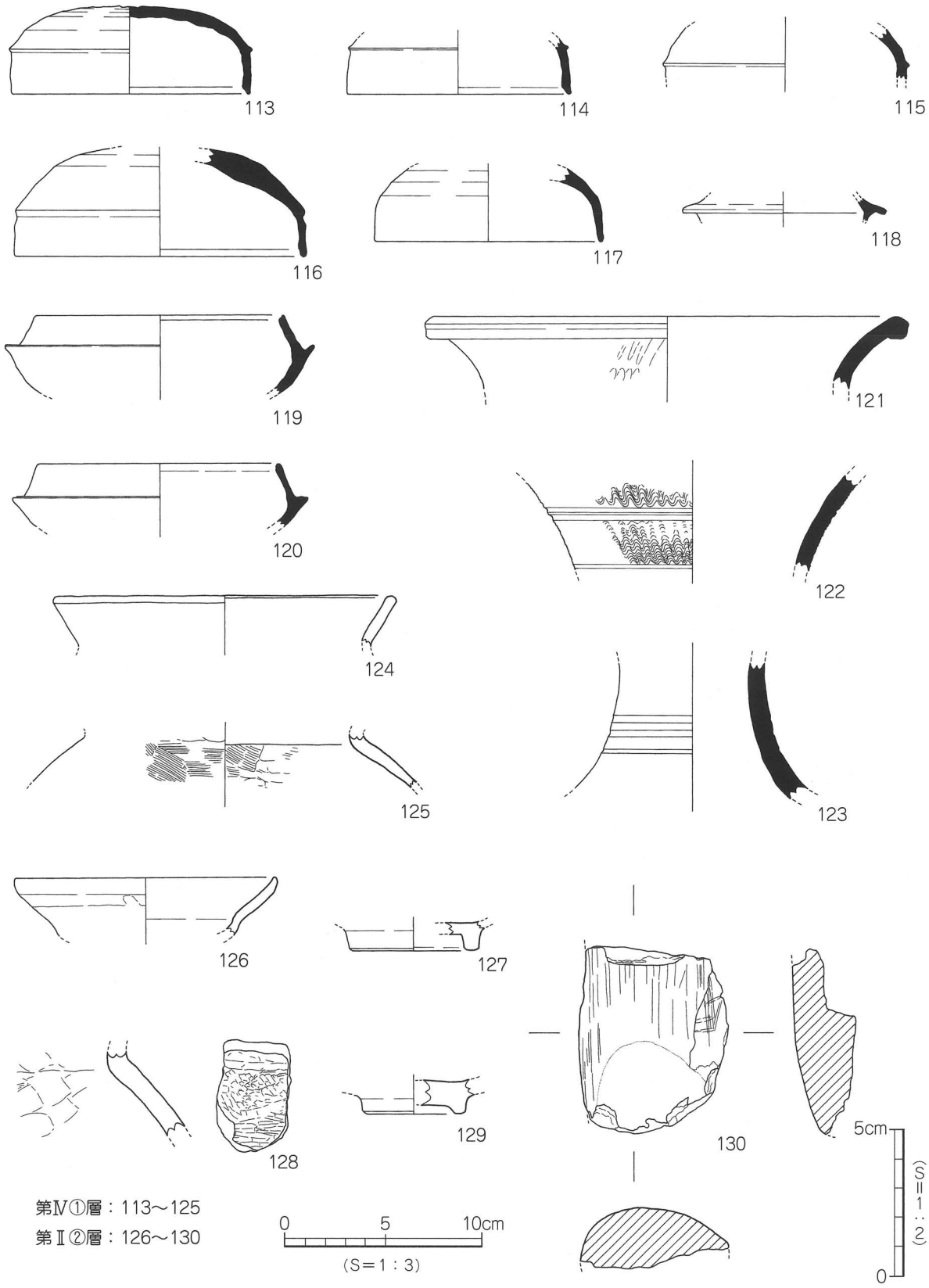
90 ～ 125 は第Ⅳ①層、126 ～ 130 は第Ⅱ②層出土品である。

弥生土器（90 ～ 112）：90 ～ 96 は甕形土器の口縁部片や胴部片である。90 ～ 93 は折曲口縁を呈し、90・91 は口縁端部に刻目、胴部にヘラ描き沈線文を施す。92 は胴部にヘラ描き沈線文 11 条以上を施す。弥生前期末。93 は逆「Ｌ」字状を呈する口縁部片で、内外面共にハケメ調整を施す。弥生中期中葉。94 は貼付口縁で、口縁端面に刻目、胴部にヘラ描き沈線文５条を施す。95・96 は甕形土器の胴部片。97 ～ 102 は壺形土器の頸部や肩～胴部片である。97 は頸部内面に断面三角形状の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。外面にはヘラ描き沈線文１条を施す。弥生前期末。98 は断面方形状の凸帯を貼付け、凸帯上に斜格子目文を施す。弥生後期。99・100 は肩部片で、99 は２条の凸帯を貼付け、凸帯上に押圧文を施し、凸帯上方には櫛描き沈線文２条を施す。弥生前期末。100 は大型品で、外面にミガキ調整、内面にはヨコ方向のヘラケズリ調整を施す。弥生前期。101・102 は胴部片で、ヘラ描き沈線文５条を施す。外面にはヨコ方向のヘラミガキ、102 の内面にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。色調や形態が類似することから、101 と 102 は同一個体の可能性がある。弥生前期末。103 は高坏形土器で、色調は黒色を呈する。外面はタテ方向、内面にはヨコ方向の丁寧なヘラミガキ調整を施す。弥生前期。104 ～ 109 は甕形土器の底部である。104 ～ 107 は平底、108 はわずかに上げ底、109 はくびれをもつ上げ底で、106 ～ 108 の外面にはタテないしヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。110 ～ 112 は壺形土器の底部である。110 は突出する平底、111 と 112 はわずかに上げ底となる。なお、



第Ⅳ①層：90～112

第137図　包含層出土遺物実測図(1)



第138図　包含層出土遺物実測図(2)

112の外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。104･112は弥生前期、106～109は弥生中期後半、105・110は弥生後期後半。

須恵器（113～123）：113～118は須恵器坏H蓋である。113～116は丸みのある断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する。117の稜は消失し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。118は坏G蓋で、推定口径８cmを測る。113～115は５世紀後半、116は６世紀前半、117は６世紀後半、118は７世紀中葉。119・120は坏H身である。たちあがり端部は内傾する。５世紀後半。121は甕の口縁部片で、口縁端部は珠玉状に仕上げる。６世紀前半。122は壺の頸部片で、沈線文と波状文を施す。６世紀前半。123は長頸壺の頸部で、沈線文３条を施す。７世紀。

土師器（124・125）：124は甕の口縁部片で、口縁端部は内傾する。125は甕の肩部片で、外面にハケメ調整を施す。６世紀。

陶磁器（126～129）：126は肥前系の陶器碗で胎土は灰茶色を呈し、釉調は灰緑色である。18世紀。127は陶器碗の底部で、高台畳付及び底部外面には施釉されていない。18世紀。128は亀山焼の甕で、肩部外面に格子叩きを施す。色調は黒褐色を呈する。15～16世紀。129は龍泉窯系青磁碗で、底部外面及び高台畳付には施釉されていない。胎土は灰白色を呈し、釉調は灰緑色である。13世紀。

石器（130）：130は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。

４．まとめ

調査では、弥生時代から中近世までの遺構や遺物を確認した。弥生時代では、前期前半と後半から末の土坑を11基検出した。平面形態で分類すると円形、楕円形、長方形の三種類があり、規模をみると最小規模の土坑は径0.38～0.86ｍ、最大規模の土坑は径1.24～2.36ｍを測る。遺構の性格は定かではないが、壁体が垂直気味に立ち上がる土坑や、埋土中に炭化物が混入する土坑などがあり、貯蔵用あるいは土器の廃棄用として利用されたものと推測される。調査地周辺では、調査地北東部にある古市遺跡から弥生時代前期末の土器が出土した自然流路が検出されており、さらには古市遺跡の北東にある五楽遺跡２次調査からは前期後半から末の土坑群のほか、遺物包含層が検出されている。今回の調査をふまえると、小野地区から西方にある平井地区にかけては弥生時代前期集落が広く展開していたものと考えられる。ただし、集落様相は不明な点が多く今後、集落構造や範囲など詳細な調査・研究が必要となる。

次に古墳時代では掘立柱建物をはじめ、溝や土坑を検出した。掘立柱建物は、出土品より古墳時代後期以降の建物と考えられる。このうち、５棟の建物（掘立４～８）は、建物規模から倉庫的な性格をもつ遺構と推測される。そのほかＳＤ１は弧状を呈する溝であるが、全体像は不明であり形状や用途については断定できないが、溝内からは弥生時代から古墳時代にかけての土器が比較的まとまって出土しており、長期間存在していた溝と考えられる。調査地近隣にある平井遺跡４次調査や５次調査からも同時期の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されており、調査地や周辺地域には古墳時代集落が脈々と営まれていたものといえる。

古代では、平安期とされる土坑３基を検出した。周辺では前述の古市遺跡や下苅屋遺跡において飛鳥時代から平安時代までの土器が出土した溝や自然流路が報告されており、今回検出した土坑は古墳時代と同様、調査地周辺には古代集落が継続して営まれていたことを物語る貴重な資料といえる。

中近世の遺構は未検出であるが、柱穴や包含層中から出土した鎌倉時代から江戸時代までの土師器や陶磁器は、近隣に広がる中近世集落の存在を示唆する資料といえよう。

今回の調査により、弥生時代前期及び古墳時代後期から古代にかけて、調査地や周辺地域に集落の存在が確定的となった。今後、時代ごとの集落構造や範囲、さらには変遷を詳細に解明することが、小野・平井地区の遺跡を考えるうえで急務となる。なお、調査における遺構検出面である黄橙色シルトは厚さ30㎝以上の堆積を測る安定した土壌を形成しており、周辺の調査状況などから、このシルト層は調査地を含めた東西方向のエリアに長く堆積し、微高地を形成しているものと考えられる。このことから、古墳時代を中心とする集落が、この微高地上に展開している可能性が高く、調査地周辺は遺跡が広く存在する重要な地域といえよう。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、
体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 73　掘立柱建物一覧

掘立	地　区	規模（間）	方位	桁行長（m）	梁行長（m）	柱穴埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	E１～３	３×(４)	東西	(8.60)	5.16	黒褐色シルト（黄橙色シルト混入）他	土師・須恵石	古墳後期以降	
2	E２～F３	２× ３	東西	5.40	4.17	黒色シルト 他	弥生・土師	古墳後期以前	
3	C・D３	２× ２	南北	4.34	3.50	黒褐色シルト（黄橙色シルト混入）他	弥生・土師	古墳後期以降	
4	C・D３	１× １	東西	2.21	2.20	黒褐色シルト（黄橙色シルト混入）他	弥生・土師	古墳後期以降	
5	D２・３	１× １	南北	2.80	2.53	黒褐色シルト（黄橙色シルト混入）	弥生	古墳後期以降	
6	D・E３	１× １	東西	2.60	2.10	黒褐色シルト（黄橙色シルト混入）	土師	古墳後期以降	
7	E３	１× １	南北	2.32	2.26	黒褐色粘質シルト（黄橙色シルト混入）	—	古墳後期以降	
8	C３	１× １	東西	2.84	2.62	黒褐色シルト（黄橙色シルト混入）	土師	古墳後期以降	

表 74　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B４・５	逆台形状	7.20 × 3.85 × 0.58	東西	黒褐色シルト 他	弥生・土師須恵・石	古墳後期前半	
2	B５	皿状	2.98 × 0.50 × 0.10	南北	黒褐色粘質シルト	—	古墳後期以降	
3	E２・３	皿状	3.20 × 0.42 × 0.06	東西	黒褐色シルト	—	古墳後期以降	

表 75　土坑一覧　（1）

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B４	円形	逆台形状	1.18 × 1.11 × 0.36	褐色シルト 他	土師	古代	
2	欠　番							
3	B３	楕円形	逆台形状	1.04 × 0.82 × 0.43	褐色シルト 他	—	古代	
4	C３	楕円形	逆台形状	1.06 × 0.85 × 0.12	黒褐色シルト	—	古墳後期以降	
5	C３	楕円形	逆台形状	1.25 × 0.95 × 0.15	黒褐色シルト	—	古墳後期以降	
6	C・D３	円形	逆台形状	1.36 × 1.36 × 0.18	褐色シルト	土師	平安	
7	D３	長方形	逆台形状	1.61 × 1.26 × 0.20	黒色シルト（黄橙色シルト混入）他	弥生	弥生前期後半～末	
8	C２・３	円形	逆台形状	1.28 × 1.28 × 0.13	黒褐色シルト	—	古墳後期以降	
9	D３	不整楕円形	逆台形状	2.04 × 1.30 × 0.25	黒色シルト 他	—	弥生前期後半～末	
10	D３	楕円形	逆台形状	1.12 × 0.70 × 0.17	黒色シルト 他	弥生	弥生前期後半	
11	D３	楕円形	逆台形状	0.95 × 0.84 × 0.08	黒褐色粘質シルト	—	古墳後期以降	
12	D２・３	不整長方形	逆台形状	1.35 × 0.86 × 0.10	黒色シルト（黄橙色シルト混入）	—	弥生前期後半～末	
13	D２	不整楕円形	逆台形状	2.36 × 1.24 × 0.09	黒色シルト（黄橙色シルト混入）他	弥生	弥生前期後半～末	
14	D２	不整楕円形	逆台形状	(0.71) × 0.54 × 0.07	黒色シルト（黄橙色シルト混入）	弥生	弥生前期前半	
15	欠　番							
16	E３	楕円形	逆台形状	1.12 × 0.96 × 0.03	黒色粘質シルト	弥生	弥生前期末	
17	D２～E３	長楕円形	逆台形状	1.58 × 0.70 × 0.11	黒色粘質シルト	弥生・石	弥生前期末	

土坑一覧　（2）

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
18	D２	円形	逆台形状	0.86 × 0.38 × 0.07	黒色シルト（黄橙色シルト混入）	—	弥生前期後半～末	
19	D２	円形	逆台形状	1.33 × 1.27 × 0.13	黒色シルト	弥生	弥生中期後半	
20	E３	不整楕円形	逆台形状	1.10 × 1.04 × 0.04	黒色シルト（黄橙色シルト混入）	—	弥生前期後半～末	
21	E３	楕円形	逆台形状	1.27 × 1.10 × 0.14	黒色粘質シルト	弥生	弥生前期末	

表 76　SK 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 (16.4) 残高 3.1	折曲口縁。口縁端部に刻目。小片。	ハケ→ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	SK14	
2	壺	残高 7.2	ヘラ描き沈線文３条＋ヘラ描き沈線文２条以上。	マメツ	ナデ	橙褐色 乳白色	石・長(1～2) ◎	SK10	
3	壺	口径 (12.8) 残高 2.0	広口壺。口縁端面に沈線文１条。小片。	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	暗褐色 褐色	石・長(1～2) ◎	SK16	
4	壺	口径 (13.7) 残高 2.4	広口壺。小片。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 茶褐色	石・長(1) ◎	SK17	
6	壺	口径 (22.5) 残高 4.5	長頸壺。凸帯上に押圧文。口縁端面に沈線文１条と刻目、頸部に沈線文１条。	ハケ(5本／cm)→ミガキ	ハケ(5本／cm)→ミガキ	褐色 乳褐色	石・長(1～3) 金 ◎	SK21	30
7	壺	残高 8.5	ヘラ描き沈線文５条２段。	ミガキ	ナデ→ミガキ	暗灰褐色 褐色	石・長(1～3) ◎	SK21 黒斑	30
8	壺	底径 (12.1) 残高 4.8	わずかに上げ底。	ハケ(8本／cm)	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎	SK21 黒斑	
9	鉢	口径 (19.2) 残高 2.7	口縁端部に刻目、口縁部にヘラ描き沈線文４条以上。小片。	ミガキ	ヨコナデ	褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	SK21	30
10	甕	口径 (27.7) 残高 2.4	貼付口縁。ヘラ描き沈線文２条以上。小片。	ヨコナデ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	SK19	
11	高坏	残高 2.5	凹線文３条以上。	ナデ	ナデ・ミガキ	乳茶色 淡黄色	石・長(1～2) ◎	SK19	

表 77　SK 出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ（cm）	法　量 幅（cm）	法　量 厚さ（cm）	法　量 重さ(g)	備　考	図版
5	石核	—	緑色片岩	3.5	3.4	1.3	19.7	SK17	

表 78　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
12	甕	口径 (28.6) 残高 2.8	内湾口縁。口縁端部は上内方に肥厚。	マメツ	マメツ	橙褐色 橙褐色	石(1) ◎	SP141	
13	甕	口径 (16.5) 残高 2.5	内湾口縁。口縁端部は内傾。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1～7) ◎	SP132	
14	甕	底径 (5.4) 残高 3.5	突出する平底。	ハケ(4本／cm)	ナデ	明褐色 褐色	石(1) ◎	SP132 黒斑	
15	坏身	残高 1.4	平底。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	SP133	30
16	坏身	残高 1.7	平底。	回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP141	30

表 79　掘立１出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ（cm）	法　量 幅（cm）	法　量 厚さ（cm）	法　量 重さ(g)	備　考	図版
17	石庖丁	1／2	緑色片岩	5.0	3.3	0.9	20.3	未成品・SP134	30

表 80　掘立２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
18	甕	残高 1.7	折曲口縁。口縁端部に刻目、頸部に沈線文１条。小片。	ヨコナデ	ミガキ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎	SP154	30
19	高坏	残高 4.3	ヘラ描き沈線文４条。	ハケ(10本／cm)	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎	SP154	30

表 81　掘立３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
20	甕	口径 (18.8) 残高 2.4	貼付口縁。櫛描沈線文８条以上。小片。	ヨコナデ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎	SP36	
21	甕	口径 (23.6) 残高 4.3	貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部に櫛描沈線文５条。	ナデ	ミガキ	淡黄色 淡黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎	SP36	
22	高坏	残高 1.9	小片。	ヨコナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1) ◎	SP44	

表 82　掘立５出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
23	壺	底径 3.3 残高 3.2	平底。	マメツ	ナデ	橙色 橙色	長 (1) ◎	SP82 黒斑	

表 83　掘立５出土遺物観察表　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径（cm）	法量 高さ（cm）	法量 重さ (g)	備考	図版
24	玉	完形	翡翠	灰黄	2.2	1.0	4.16	SP82	30

表 84　SD1 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
25	甕	口径 (16.8) 残高 3.8	外反口縁。口縁端部は先細り。頸部内面に稜。	マメツ	マメツ	乳褐色 橙褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
26	甕	口径 (17.4) 残高 3.3	口縁端部は内傾。小片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石 (1) ◎		30
27	甕	口径 (17.5) 残高 2.8	内湾口縁。口縁端部は内傾し、内方に肥厚。小片。	マメツ	マメツ	橙色 暗橙色	石・長 (1) ◎		30
28	甕	口径 (15.5) 残高 3.2	内湾口縁。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 ◎		30
29	甕	残高 2.5	頸部内面に稜。小片。	ハケ (5 ～ 6 本 / cm)	ハケ (5 ～ 6 本 / cm)	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
30	甑	残高 6.7	把手先端部は欠損。	ハケ	マメツ	橙褐色 橙褐色	石・長 (1) ◎		30
31	甑	残高 5.7	把手部。断面楕円形。	ナデ	ナデ	橙褐色 灰白色	石・長 (1) 金 ◎		30
32	坏蓋	口径 (12.7) 器高 4.9	扁平な天井部。断面三角形状の鋭い稜。１/２の残存。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		31
33	坏蓋	口径 (12.2) 残高 3.6	断面三角形状の鋭い稜。小片。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
34	坏蓋	残高 2.6	断面三角形状の稜。小片。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
35	坏蓋	口径 (11.5) 残高 4.4	天井部と口縁部の境界は、凹線が巡る。１/４の残存。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
36	坏蓋	口径 (12.0) 残高 2.8	天井部と口縁部の境界は、凹線が巡る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
37	坏蓋	口径 (15.1) 残高 4.2	天井部と口縁部の境界は、凹線状の凹みが巡る。小片。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
38	坏蓋	口径 15.4 器高 5.3	扁平な天井部。丸味のある断面三角形状の稜。ほぼ完形。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	長 (2) ◎		31
39	坏蓋	口径 (10.6) 残高 3.1	丸味のある天井部。口縁端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
40	坏身	口径 (10.7) 器高 3.9	たちあがり端部は内傾。扁平な底部。１/３の残存。	底回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
41	坏身	口径 (11.3) 残高 2.6	たちあがり端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
42	坏身	口径 (11.3) 残高 3.9	たちあがり端部は内傾。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰黄色	長 (1 ～ 3) ◎		
43	坏身	口径 (11.4) 残高 3.7	たちあがり端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
44	蓋	口径 (12.0) 器高 5.6	有蓋高坏の蓋。丸味のある断面三角形状の稜。口縁端部は内傾。１/４の残存。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		31
45	高坏	底径 8.8 残高 7.0	長方形透かし３ヶ所。	坏回転ヘラケズリ 脚回転カキメ・回転ナデ	回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		31

SD1 出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
46	高坏	底径 8.0 残高 4.8	台形透かし３ヶ所。脚裾部に沈線状の凹みが巡る。	杯回転ナデ 脚回転カキメ・回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
47	甕	残高 28.7	胴部片。	平行叩き	円弧叩き →ナデ	灰色 灰黄褐色	密 ◎		
48	甕	口径 (16.4) 残高 7.9	「く」の字状口縁。	ナデ	口ナデ 胴ミガキ	乳褐色 赤橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
49	甕	口径 (16.0) 残高 3.8	「く」の字状口縁。口縁端面はナデ凹む。	ヨコナデ	マメツ	橙色 乳灰色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
50	甕	口径 (19.8) 残高 2.9	「く」の字状口縁。口縁端部は上方にわずかに肥厚。小片。	ヨコナデ	口ヨコナデ 胴ハケ(8本/cm)	褐色 暗褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
51	甕	口径 (15.8) 残高 3.8	口縁部は上方に肥厚。小片。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		31
52	甕	口径 (20.2) 残高 6.7	逆「L」字状口縁。口縁端部は尖り気味に丸い。	口ヨコナデ 胴ハケ	口ヨコナデ 胴ナデ	乳褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
53	甕	口径 (24.4) 残高 6.6	貼付口縁。口縁端部に刻目、胴部にヘラ沈線文８条＋刺突文。	ミガキ	ナデ	暗褐色 灰褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	31
54	甕	残高 2.3	ヘラ沈線文３条以上。小片。	マメツ	ミガキ	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		
55	甕	残高 5.8	ヘラ状工具による線刻。	ナデ	ケズリ	灰褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		31
56	甕	底径 5.9 残高 2.8	くびれをもつ上げ底。	ナデ	ナデ	褐色 乳褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
57	甕	底径 (5.2) 残高 3.3	平底。	ナデ	ナデ	橙褐色 暗褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
58	甕	底径 (4.4) 残高 1.2	小さな平底。	ミガキ	マメツ	黄橙色 黄白色	長(1～2) ◎		
59	壺	口径 (12.7) 残高 2.4	広口壺。口縁端部は上方に拡張し、凹線文３条を施す。小片。	ナデ	ナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1～3) ◎		31
60	壺	口径 (11.0) 残高 1.4	広口壺。凹線文２条。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎		
61	壺	口径 (14.6) 残高 1.9	広口壺。凹線文３条。	口ヨコナデ 頸ミガキ	ヨコナデ ミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎		31
62	壺	口径 (29.6) 残高 3.2	広口壺。口縁部は上方に拡張、凹線文６条。大型品。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	31
63	壺	口径 (15.8) 残高 5.2	直口壺。口縁端部は先細り。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
64	壺	残高 5.8	広口壺の頸部片。	ハケ(5本/cm)	ハケ・ナデ	乳白色 乳褐色	石・長(1～2) ◎		
65	壺	残高 3.6	貼付凸帯上に斜格子目文。	ハケ→ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		
66	壺	残高 4.7	貼付凸帯上に斜格子目文。小片。	ハケ(4本/cm)	ハケ(4本/cm) →ナデ	褐色 褐色	石・長(1) ◎		
67	壺	残高 1.8	貼付凸帯上に斜格子目文。小片。	ナデ	ナデ	暗灰色 褐色	石・長(1) ◎		
68	壺	残高 4.1	肩部片。	ナデ	ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
69	壺	残高 17.2	貼付凸帯１条。大型品。	マメツ	ミガキ	灰褐色 黄褐色	石・長(1～3) ◎		
70	壺	底径 (8.0) 残高 7.1	平底。１/４の残存。	ナデ→ミガキ	ナデ	灰白色 橙褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
71	壺	底径 (7.4) 残高 3.9	平底。	ハケ (5～6本/cm)	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1～3) ◎		
72	壺	底径 5.9 残高 4.0	平底。	ハケ	ナデ	褐色 黒色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
73	壺	底径 (8.8) 残高 2.4	平底。１/４の残存。	ハケ→ナデ	ナデ	暗灰褐色 褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
74	壺	底径 (7.8) 残高 2.8	平底。	マメツ	マメツ	褐色 乳褐色	石・長(1) ◎		
75	壺	底径 (7.0) 残高 3.0	厚みのある平底。	マメツ	ナデ	乳褐色 褐色	石・長(1～4) ◎		
76	壺	底径 3.7 残高 3.0	厚みのある平底。	ハケ・ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		
77	壺	底径 (4.0) 残高 2.7	突出する平底。１/２の残存。	ハケ(5本/cm) →ナデ	ナデ	乳橙色 乳黄色	石・長(1～2) ◎		

SD1 出土遺物観察表　土製品　（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
78	壺	底径 5.0 残高 3.6	突出する上げ底。	ハケ・ナデ	ナデ	乳灰色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
79	鉢	口径 (13.6) 残高 3.9	外反口縁。口縁端部は先細り。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	長(3) ◎		
80	鉢	口径 (38.2) 残高 2.9	外反口縁。大型品。小片。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1～4) ◎		
81	高坏	口径 25.5 残高 9.8	口縁部に凹線文4条。坏部完形。	㊐ヨコナデ ㊥ミガキ	㊐ヨコナデ ㊥ハケ→ミガキ	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	31
82	高坏	残高 5.0	柱部片。	ハケ(9本/cm) →ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石(1) ◎		

表85　SD1 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
83	石庖丁	2／3	緑色片岩	12.7	5.3	0.6	60.9	未成品	

表86　SK6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
84	坏	口径 (16.2) 残高 2.5	体部中位に不明瞭な稜。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 乳白色	密 ◎	黒斑	

表87　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
85	坏蓋	残高 1.7	天井部外面に線刻(ヘラ記号)。	回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	SP99	
86	坏身	残高 2.1	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP163	
87	壺	口径 (10.0) 残高 2.0	短頸壺。口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP120	
88	坏	口径 (12.0) 残高 3.0	口縁部は外反、口縁端部は尖る。小片。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	密 ◎	SP17	
89	壺	口径 (22.8) 残高 4.1	広口壺。口縁端面に刻目。口縁部内面に沈線文1条。	ハケ→ミガキ	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2) 金 ◎	SP53	

表88　包含層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
90	甕	口径 (22.8) 残高 4.7	折曲口縁。口縁端部に刻目。胴部にヘラ沈線文7条。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊤ハケ→ヨコナデ	暗褐色 褐色	石・長(1～2) 金 ◎	第Ⅳ ①層	32
91	甕	口径 (21.6) 残高 3.6	折曲口縁。口縁端部に刻目。胴部にヘラ沈線文4～5条。	ヨコナデ	マメツ	黒色 乳褐色	石・長(1～2) ◎	第Ⅳ ①層	32
92	甕	残高 5.0	折曲口縁。口縁部一部欠損。胴部にヘラ沈線文11条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	第Ⅳ ①層	
93	甕	残高 4.3	逆「L」字状口縁。小片。	ハケ(7本/cm)	ハケ(6本/cm)	橙褐色 橙褐色	石・長(1)金 ◎	第Ⅳ ①層	
94	甕	口径 (20.4) 残高 3.2	貼付口縁。口縁端部に刻目。胴部にヘラ沈線文5条。小片。	ハケ	ヨコナデ	灰褐色 乳褐色	石・長(1) ◎	第Ⅳ①層 煤付着	32
95	甕	残高 4.3	ヘラ沈線文2条＋刺突文2列。	ナデ	ミガキ	乳褐色 灰褐色	石・長(1～2) ◎	第Ⅳ ①層	32
96	甕	残高 4.9	ヘラ沈線文4条＋刺突文2列。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎	第Ⅳ①層 黒斑	32
97	壺	残高 4.7	内面凸帯上に刻目。頸部に沈線文1条。	ハケ (5～6本/cm)	ハケ(6本/cm) →ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～2) 金 ◎	第Ⅳ ①層	32
98	壺	残高 2.4	凸帯上に斜格子目文。小片。	ハケ(7本/cm)	ハケ(6本/cm)	乳褐色 褐色	石・長(1～3) ◎	第Ⅳ ①層	
99	壺	残高 2.6	貼付凸帯文2条＋沈線文2条。凸帯上に押圧文。	ヨコナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎	第Ⅳ ①層	
100	壺	残高 7.2	肩部片。大型品。	ハケ(ミガキ)	ケズリ	暗褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎	第Ⅳ①層 黒斑	
101	壺	残高 5.5	ヘラ沈線文5条。	ミガキ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎	第Ⅳ ①層	32

包含層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
102	壺	残高 6.5	ヘラ沈線文５条。	ミガキ	ミガキ→ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎	第Ⅳ ①層	
103	高坏	残高 4.1	坏部片。	ハケ→ミガキ	ミガキ	黒色 褐色	石・長(1～2) 金 ◎	第Ⅳ①層 黒斑	
104	甕	底径 (5.8) 残高 3.0	平底。	ハケ(8本／cm)	ナデ	黒色 乳白色	石・長(1～2) ◎	第Ⅳ①層 黒斑	
105	甕	底径 (6.4) 残高 3.8	平底。１／３の残存。	ハケ(9本／cm)	ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長(1～5) ◎	第Ⅳ ①層	
106	甕	底径 (6.8) 残高 3.7	平底。１／３の残存。	ミガキ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～4) 金 ◎	第Ⅳ ①層	
107	甕	底径 (5.6) 残高 2.1	平底。１／２の残存。	ミガキ	ナデ	乳橙色 灰褐色	石・長(1～2) 金 ◎	第Ⅳ①層 黒斑	32
108	甕	底径 (6.6) 残高 5.3	わずかに上げ底。１／３の残存。	ミガキ	ナデ	茶褐色 黒褐色	石・長(1～3) ◎	第Ⅳ ①層	
109	甕	底径 (5.1) 残高 2.7	くびれをもつ上げ底。	マメツ	ナデ	黒褐色 黒褐色	長(1～2) ◎	第Ⅳ ①層	
110	壺	底径 4.0 残高 3.9	突出する平底。	ハケ	ハケ (6～7本／cm)	橙色 橙黄色	長(1) ◎	第Ⅳ①層 黒斑	32
111	壺	底径 (7.7) 残高 3.3	わずかに上げ底。小片。	ナデ	ナデ	乳褐色 黄褐色	石・長(1～4) ◎	第Ⅳ①層 黒斑	
112	壺	底径 (8.8) 残高 2.9	上げ底。１／３の残存。	ハケ→ミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～3) 金 ◎	第Ⅳ ①層	32
113	坏蓋	口径 (11.9) 器高 4.4	扁平な天井部。断面三角形状の丸味のある稜。小片。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	㊦ナデ ㊥回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
114	坏蓋	口径 (11.1) 残高 2.8	断面三角形状の鋭い稜。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
115	坏蓋	残高 2.5	断面三角形状の鋭い稜。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
116	坏蓋	口径 (14.3) 残高 5.4	丸味のある断面三角形状の稜。扁平な天井部。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	㊦ナデ ㊥回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
117	坏蓋	口径 (11.2) 残高 3.6	口縁端部は尖り気味。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
118	坏蓋	残高 1.2	かえりは一部欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
119	坏身	口径 (12.3) 残高 4.0	たちあがり端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
120	坏身	口径 (12.0) 残高 3.2	受部端に沈線状の凹み。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	
121	甕	口径 (23.2) 残高 3.7	口縁部は珠玉状。小片。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎	第Ⅳ①層 自然釉	
122	壺	残高 4.8	波状文８条＋沈線２条＋波状文14条＋沈線１条以上。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	32
123	壺	残高 6.8	長頸壺の頸部。沈線３条。１／４の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密 ◎	第Ⅳ ①層	32
124	甕	口径 (17.0) 残高 2.5	内湾口縁。口縁端部はわずかに内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 橙褐色	石・長(1) ◎	第Ⅳ ①層	
125	甕	残高 2.7	肩部片。	ハケ(8本／cm)	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1) ◎	第Ⅳ ①層	
126	碗	口径 (12.9) 残高 2.9	体部中位に稜。全面施釉。	ナデ	ナデ	灰色 灰緑色	密 ◎	第Ⅱ②層 胎土： 灰茶色	32
127	碗	底径 (6.5) 残高 1.4	底部片。底部外面に施釉なし。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第Ⅱ②層 胎土： 灰白色	32
128	甕	残高 4.3	亀山焼。小片。	格子タタキ	ナデ	黒褐色 灰褐色	石・長(1) ◎	第Ⅱ ②層	
129	碗	底径 (5.2) 残高 1.7	青磁。底部外面に施釉なし。１／３の残存。	ナデ	ナデ	灰緑色 灰緑色	密 ◎	第Ⅱ②層 胎土： 灰白色	32

表89　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
130	柱状片刃石斧	１／２	緑色片岩	(6.3)	5.0	2.0	76.1	第Ⅱ②層	32

第7章

平井遺跡7次調査

第７章　平井遺跡７次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2007（平成19）年１月、松山市平井町甲3115外において、松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。調査は松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが委託契約を結び、平成18年２月19日から２月22日までの間に実施した。調査では、溝・土坑・柱穴などの遺構や、土師器・須恵器などの遺物を検出した。この結果を受け、道路建設課と埋文センターは協議を重ね、道路改良によって消失する遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、古墳時代の集落構造解明を主目的として、松山市教育委員会文化財課の指導のもと平成19年９月18日より開始した。

（２）調査の経緯

平成19年９月18日、発掘調査機材の搬入や、現場保全のため杭打ち・ロープ張り・下草刈り・調査区の設定を行う。重機により、調査地西側に水の浸入防止の土手を設置。９月19日、重機による表土掘削を開始すると同時に壁面・床面の精査を行う。９月28日、重機による表土掘削を終了する。10月２日、水準点やグリット杭の設置を行うと同時に測量を開始する。10月15日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げを開始する。11月12日、久米中学校２年生３名による職場体験。11月14日、雄新中学校２年生５名による職場体験。11月21日、遺構の完掘状況の写真撮影を行う。11月22日、西壁に深掘りトレンチを掘り、堆積土層の確認を行う。本日にて測量を終了する。また、重機にて埋め戻しを開始する。11月29日、調査事務所を撤去する。11月30日、重機での埋め戻しを終了し、本日にて屋外調査を完了する。

室内調査：平成19年12月１日～平成20年１月31日の間で記録写真の整理、遺物の洗浄・注記・復元・一部実測、現場で作成した原図の整理や、一部の２次原図作成・トレースを行い、調査概要報告書を作成する。

（３）調査組織

遺 跡 名：平井遺跡７次調査

調査場所：松山市平井町甲3115の一部、甲3117の一部

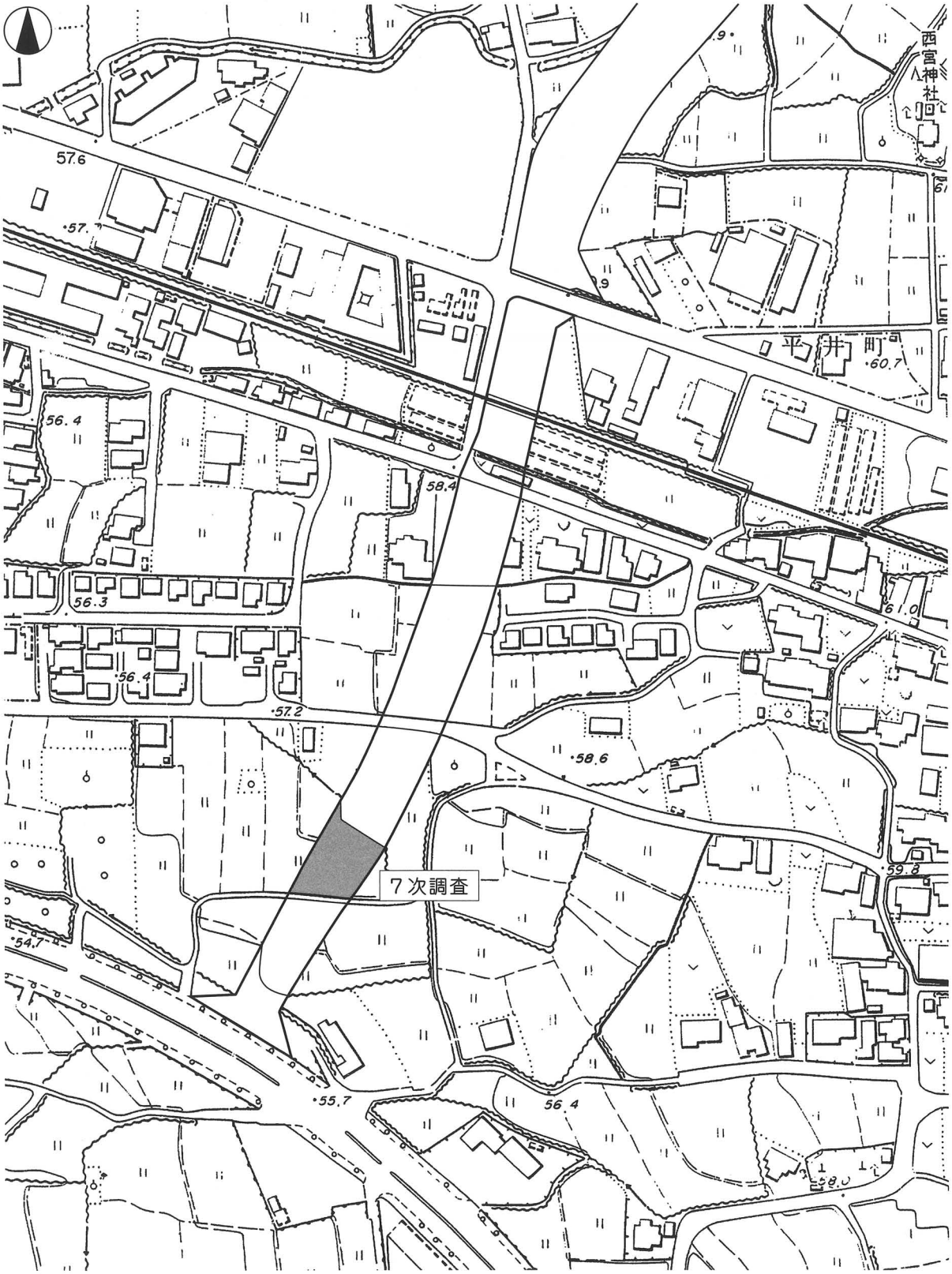
調査期間：2007（平成19）年９月18日～2008（平成20）年１月31日

調査面積：744.78㎡（7,274㎡）

調査委託：松山市都市整備部道路建設課

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：河野史知



(S=1:2,500)

第139図　調査地位置図

7
6
5
4
3
2
1
F
E
D
C
B
A
X=89912
X=89892
Y=−62795
Y=−62815
56.50m
56.40m
56.30m
56.20m
56.10m
56.00m
掘立1
鋤址
SX1
ビニールパイプ
撹乱
SX2
SD1
掘立3
掘立4
SK2
SK3
SK4
SD2
掘立2
SX3
SK1
SD3
SB1
SD4
SD5
SD6
SK5
SK6
SK7
0
5m
(S=1:200)

第140図　遺構配置図

２．層　位

（１）基本層位（第141図）

調査地は，松山平野東部の小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地上の扇央付近、標高約55ｍを測り、調査以前は畑地であった。

基本層位は、以下の５層である。

第Ⅰ層－①：暗緑灰色土（7.5GY4/1）で、水田耕作土が調査区全域に層厚８～30cmの堆積を測る。

－②：暗黄褐色土（2.5Y6/6）で、水田耕作土に伴う床土が調査区南側に層厚４～14cmの堆積を測る。

－③：暗緑灰色土（7.5GY3/1）で、旧耕作土が調査区北側に層厚８～20cmの堆積を測る。

第Ⅱ層　：暗灰黄色土（2.5Y5/2）で、調査区南東部に層厚２～13cmの堆積を測る。

第Ⅲ層　：褐灰色土（10YR6/1）で、調査区南東部に層厚６～15cmの堆積を測り、土師器片が出土する。

第Ⅳ層　：黒褐色土（10YR2/1）で、調査区北端を除いた全域に層厚４～30cmの堆積を測る。弥生土器・土師器・須恵器が出土する。

第Ⅴ層－①：浅黄色土（2.5Y7/4）地山土で、最終遺構検出面となり、調査区全域に堆積し、北西部では38cmの堆積を測り、調査区北東部から南西部にかけて緩傾斜（比高差50cm）をもつ。

※以下の土層は北西部の深堀トレンチにて検出した。

－②：黄色（2.5Y8/6）～⑪層：灰白色（5Y6/1）に細分できる粘質土で、層厚67cmの堆積を測る。

－⑫：灰色土（5Y6/1）で層厚33cmの堆積を測る。

－⑬：にぶい橙色粘質土（10YR7/2）で層厚18cmの堆積を測る。

－⑭：灰白色砂質土（10YR8/2）で層厚30cm以上の堆積を測り、下部からは湧水がある。

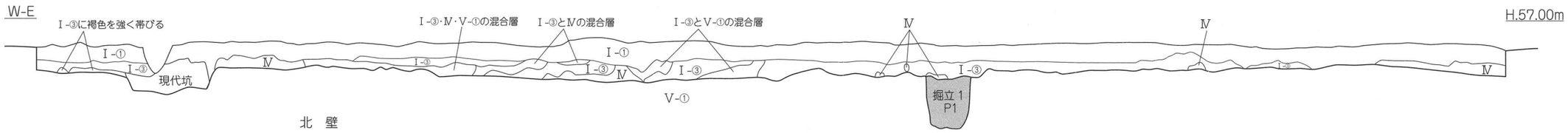
遺構の検出状況や出土遺物から、第Ⅲ層は古代、第Ⅳ層は弥生時代から古墳時代までの堆積と考えられる。調査にあたり、調査区地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは南から北に向けて１・２・３、西から東に向けてＡ・Ｂ・Ｃとし、Ａ１・Ａ２・・・としたグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

（２）検出遺構・遺物

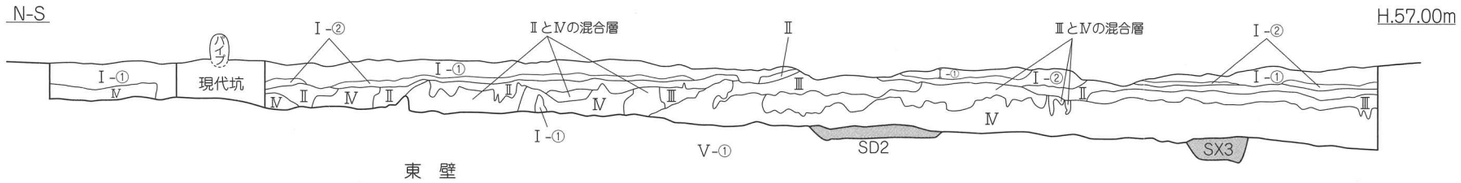
調査で検出した遺構は、竪穴住居１棟（古墳時代）、掘立柱建物４棟（古墳時代）、溝６条（弥生時代：１条、古墳時代：４条、古代：１条）、土坑７基（弥生時代：３基、古墳時代：３基、古代：１基）、性格不明遺構３基（弥生時代：１基、古墳時代：２基）、柱穴127基である。今回の調査では掘立柱建物や土坑等は、遺構ごとに通し番号（ＳＫ１・２・・・）を付けた。遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳時代・中世）、須恵器（古墳時代）、磁器（古代以降）、石器が出土した。

表90　検出遺構一覧

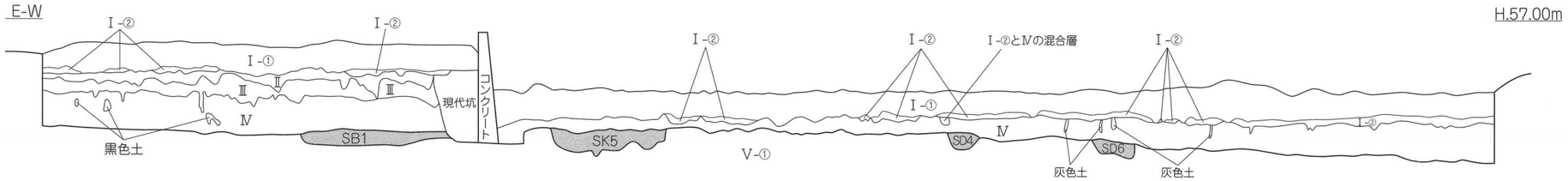
時　代	検　出　遺　構
弥生時代	溝１条（SD2）、土坑３基（SK3・4・6）、性格不明遺構１基（SX3）
古墳時代	竪穴住居１棟（SB1）、掘立４棟（掘立１～4）、溝４条（SD1・３～5）、土坑３基（SK1・2・5）、性格不明遺構２基（SX1・2）
古　代	溝１条（SD6）、土坑１基（SK7）
近世以降	鋤址



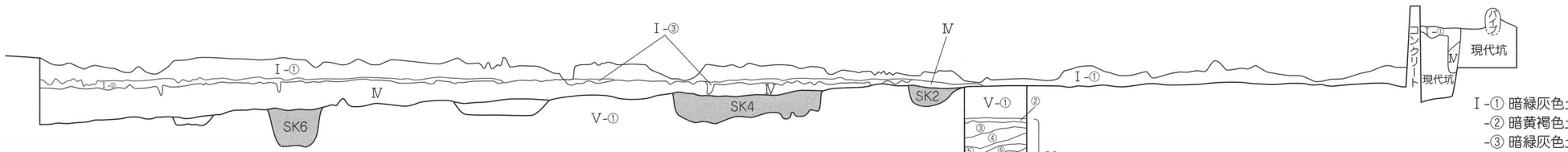
北　壁

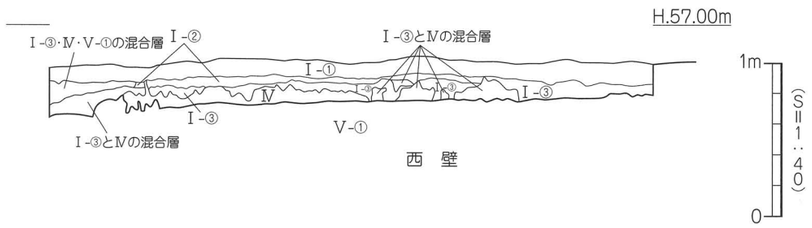


東　壁



南　壁





西　壁

0　4m
(S=1：80)

Ⅰ-① 暗緑灰色土（7.5GY 4/1）・耕作土
-② 暗黄褐色土（2.5Y 6/6）・床土
-③ 暗緑灰色土（7.5GY 3/1）・旧耕作土
Ⅱ. 暗灰黄色土（2.5Y 5/2）・整地土
Ⅲ. 褐灰色土（10YR 6/1）・中世の遺物包含層
Ⅳ. 黒褐色土（10YR 2/2）・古墳時代の遺物包含層
Ⅴ-① 浅黄色土（2.5Y 7/4）・地山
深掘トレンチ
-② 黄色（2.5Y 8/6）
-③ 灰白色（2.5Y 8/1）
-④ 浅黄色（2.5Y 7/4）
-⑤ 灰白色（10YR 7/1）
-⑥ 灰白色（2.5Y 7/1）
-⑦ 黄橙色（7.5YR 7/8）
-⑧ 灰白色（N 8/ ）
-⑨ 暗灰色（N 3/ ）
-⑩ 灰黄色（2.5Y 7/2）
-⑪ 灰白色（5Y 7/1）
粘質土
-⑫ 灰色土（5Y 6/1）
-⑬ にぶい橙色粘質土（10YR 7/2）
-⑭ 灰白色砂質土（10YR 8/2）

第141図　土層図

3．遺構と遺物

（1）弥生時代

弥生時代の遺構は、溝１条、土坑３基、性格不明遺構１基を検出した。

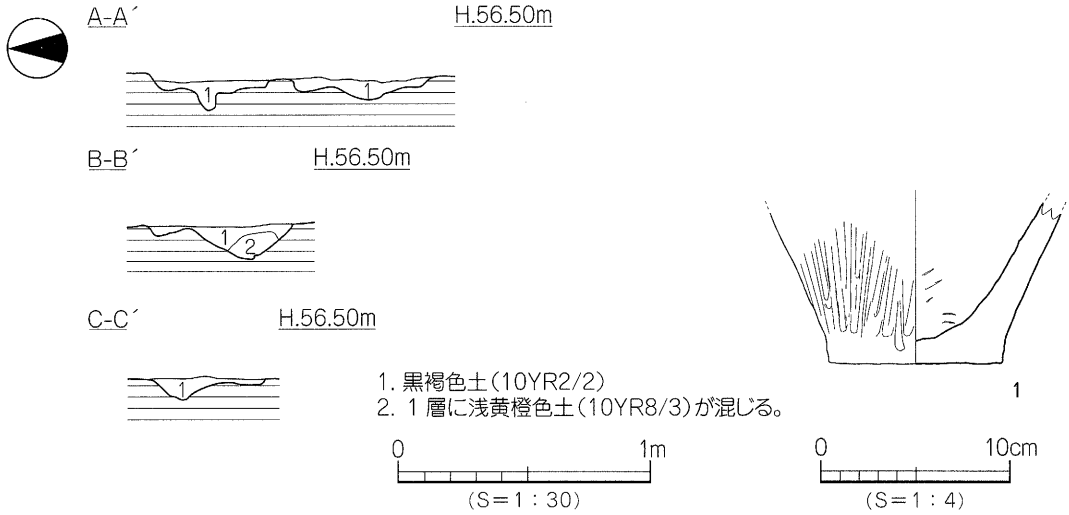
1）溝

ＳＤ２（第142図）

調査区南東部のＤ～Ｆ・２区に位置し、掘立２・西端は現代坑に切られ、東端は調査区外に延びる。主軸はＥ-13°-Ｓで東西方向を指向し、溝床はほぼ水平である。規模は検出長9.9ｍ、上場幅26～114cm、深さ３～13cmを測り、断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は弥生土器片が僅かに出土する。

出土遺物（第142図、図版40）

１は弥生土器の甕の底部で、平底の底部付近は内面にナデ調整、外面にミガキ調整が施される。



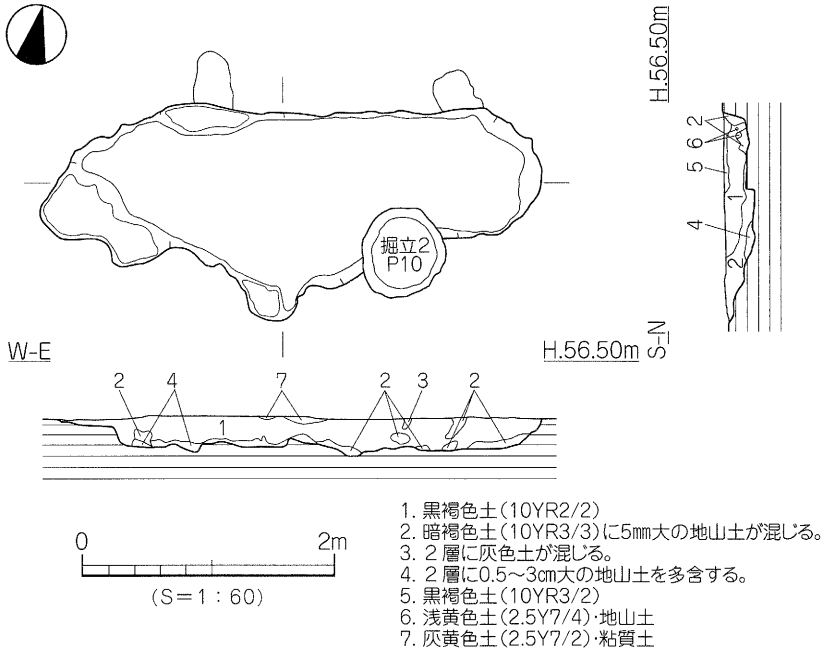
第142図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後半とする。

2）土坑

ＳＫ３（第140・143図、図版37）

調査区中央部のＣ～Ｄ・３区に位置し、掘立２に切られる。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は凹凸をもつ。規模は長軸3.96ｍ、短軸1.68ｍ、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は弥生土器片が僅かに出土する。

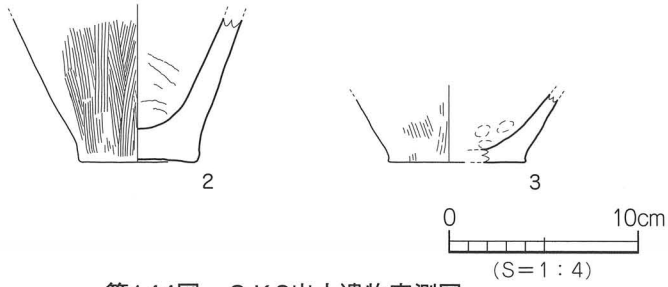


第143図　ＳＫ３測量図

出土遺物（第 144 図）

２・３は弥生土器の甕の底部で、平底の底部付近は内面にナデ調整、外面に刷毛目調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期中頃とする。



第144図　ＳＫ3出土遺物実測図

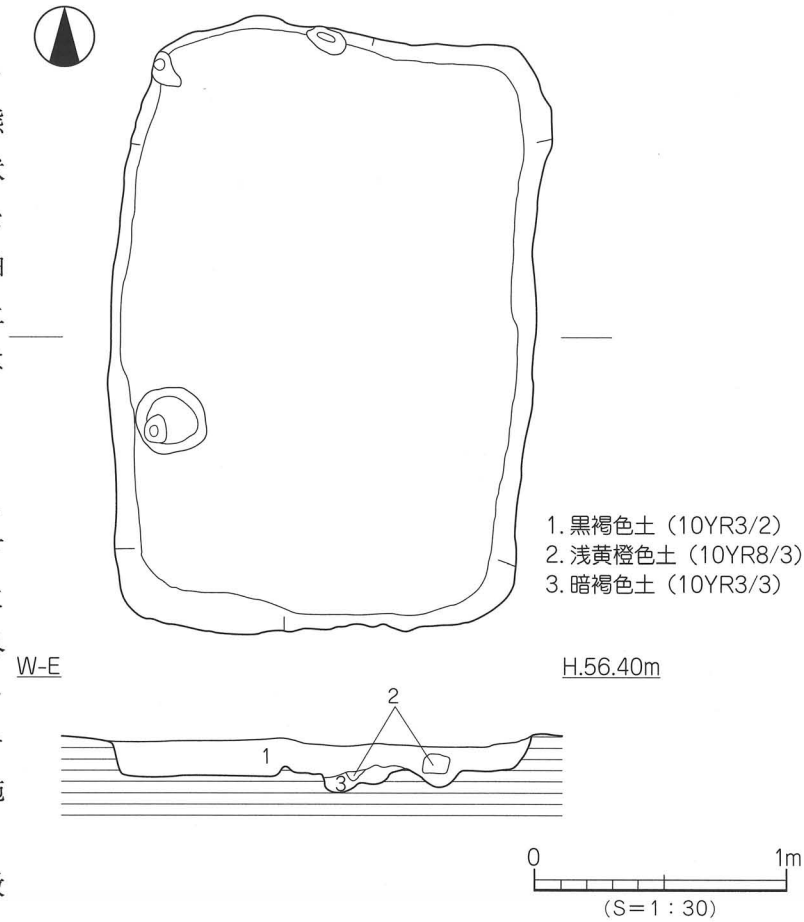
ＳＫ４（第 140・145、図版 38）

調査区中央部西端のＡ～Ｂ・３～４区に位置する。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 2.40m m、短軸 1.68 m、深さ 18cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は弥生土器片が出土する。

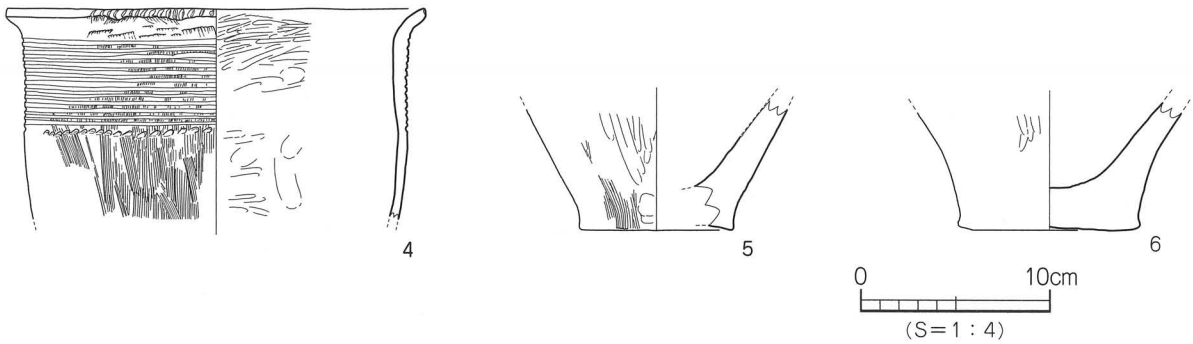
出土遺物（第 146 図、図版 40））

４～６は弥生土器の甕で、４は緩やかに外反する口縁部直下に櫛描直線文と刺突文、端部には刻目、内面にミガキ調整、外面に刷毛目調整が施される。５・６は底部付近で、外面にミガキ調整、内面に６はナデ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代前期末とする。



第 145 図　ＳＫ４測量図

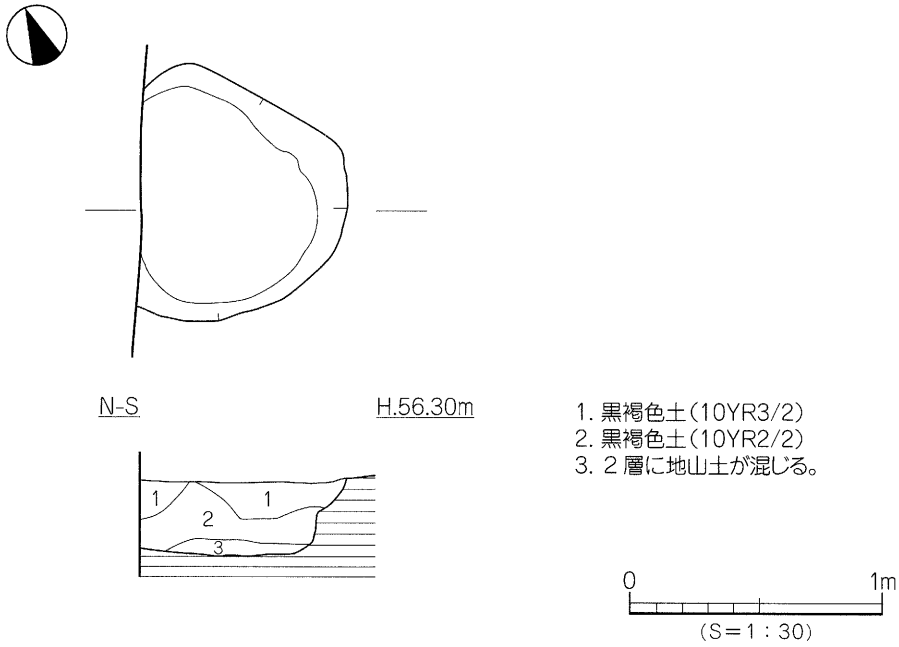


第 146 図　ＳＫ４出土遺物実測図

ＳＫ６（第140・147図）

調査区南西部のＡ・２区に位置し、西端は調査区外に延びる。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈す。規模は長軸1.03ｍ以上、短軸0.83ｍ、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は弥生土器片が出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＫ３と同一なことから弥生時代後期中頃とする。



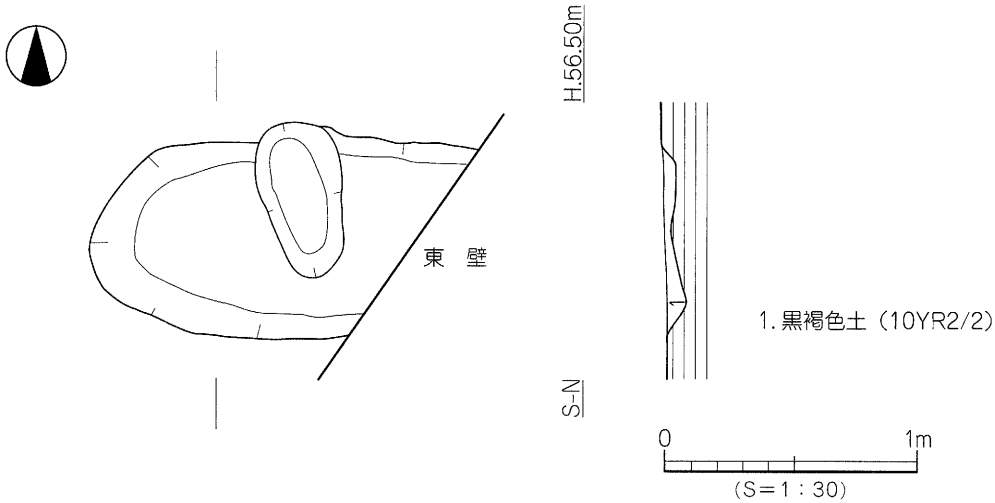
第147図　ＳＫ６測量図

３）性格不明遺構

ＳＸ３（第140・148図）

調査南東部のＥ・１区に位置し、東端は調査区外に延びる。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸1.27ｍ以上、短軸0.76ｍ、深さ８cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は弥生土器片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＫ３と同一なことから弥生時代後期中頃とする。



第148図　ＳＸ３測量図

（２）古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居１棟、掘立柱建物４棟、溝４条、土坑３基、柱穴、性格不明遺構２基を検出した。

１）竪穴住居

ＳＢ１（第 140・149 図）

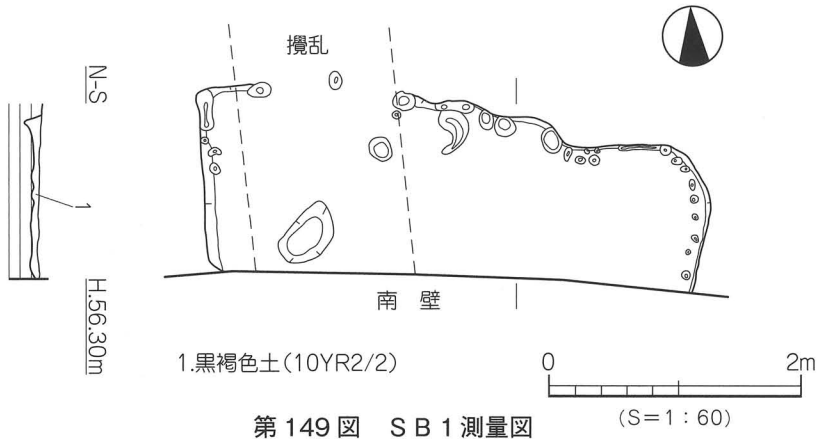
調査区南端のＤ・１区に位置し、ＳＫ５に切られ、南側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈する。規模は東西 4.0 m、南北 1.5 m以上、深さ 14cmを測る。床面での検出であり、内部施設は周壁溝だけを検出した。周壁溝は壁体に沿ってほぼ全周しており、周壁溝内から直径４～ 20cm、深さ 6.4 ～ 11.4cmで断面形が窄まる杭状の小穴が多く検出した。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は床面直上から土師器・須恵器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から掘立４と同一なことから６世紀初頭とする。

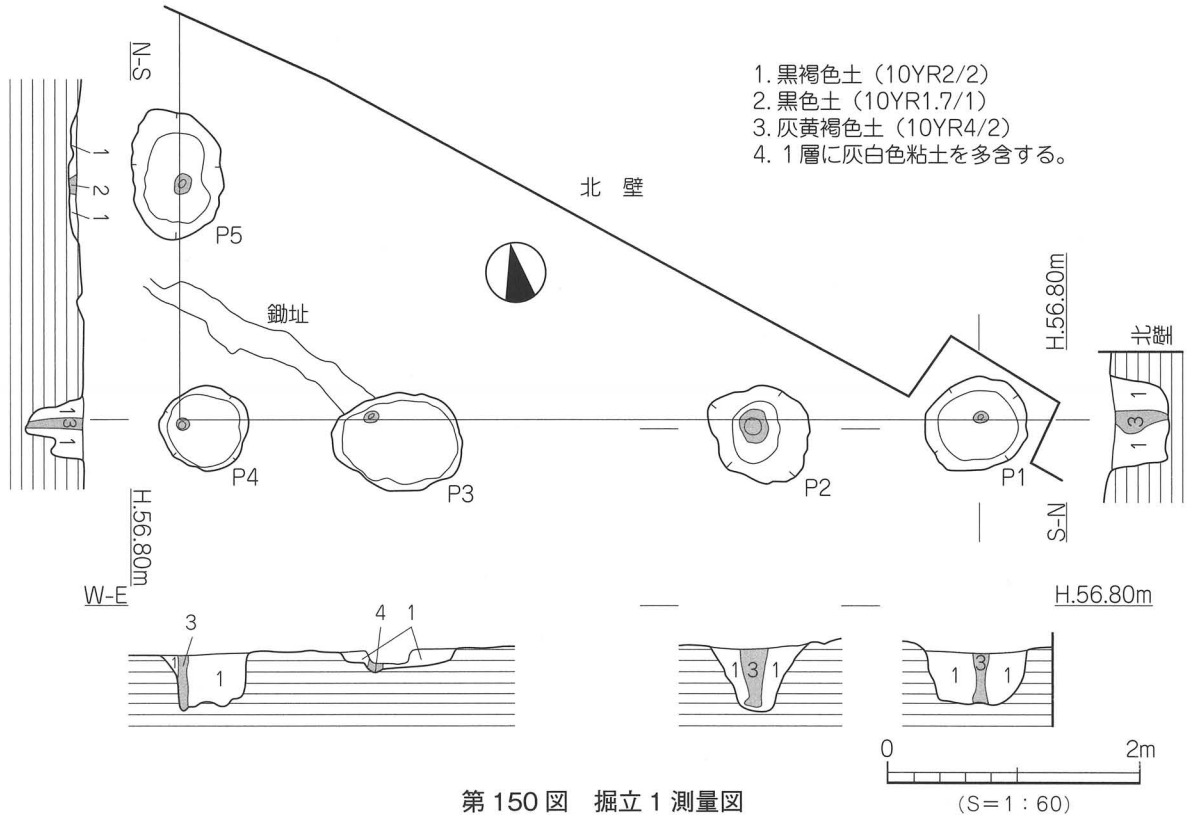
２）掘立柱建物

掘立１（第 140・150 図）

調査区南東隅部のＥ～Ｆ・５～６、区に位置し、北側は調査区外に延びる。東西３間×南北１間以上で、主軸はＮ -79° - Ｅを指向する。規模は東西 6.4 m、柱間 1.5 ～ 3.05 m、南北 1.8 m以上、柱穴の



第 149 図　ＳＢ１測量図



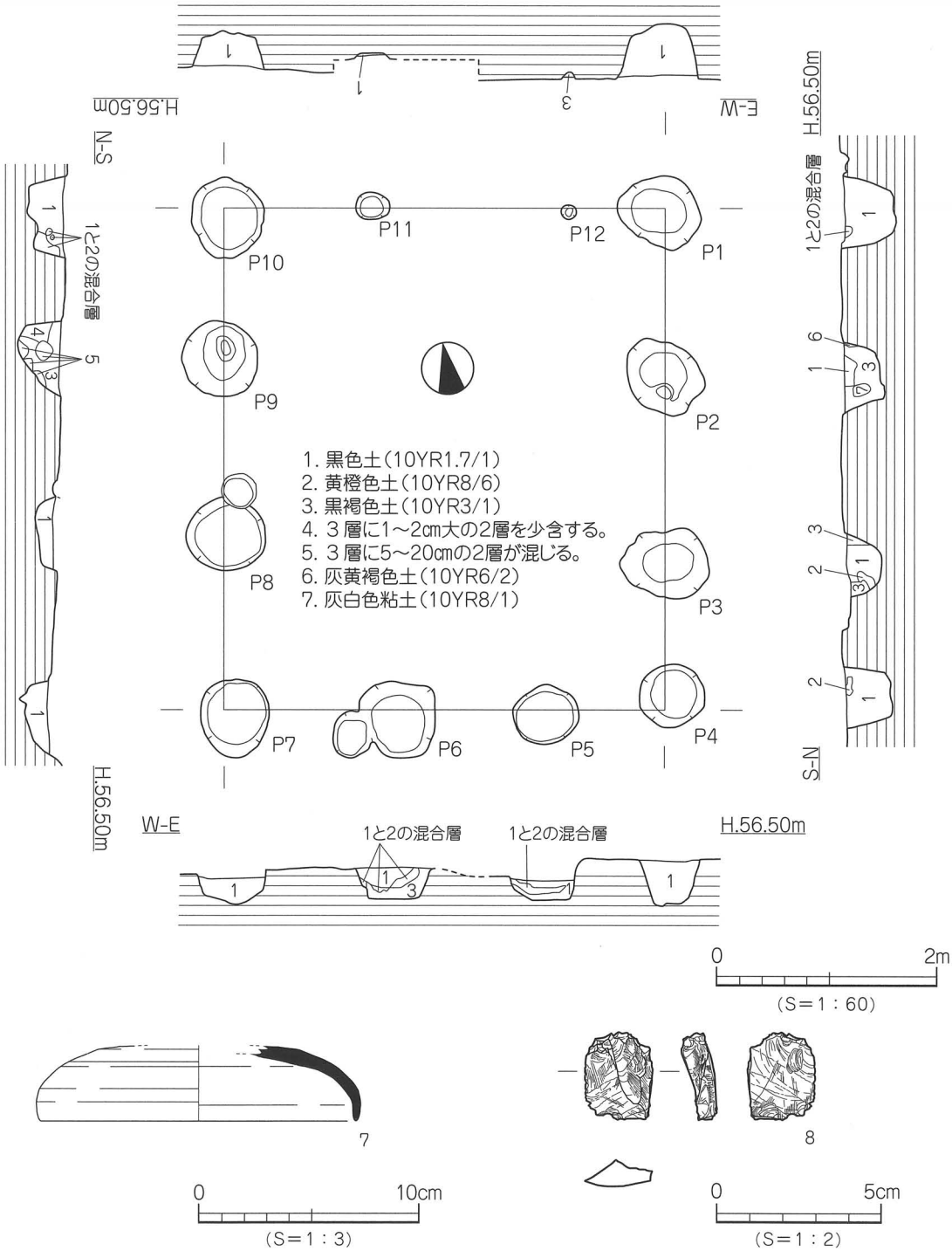
第 150 図　掘立１測量図

平面形態は円形～楕円形を呈し、直径57～103cm、深さ５～50cmを測り、桁方向の内側の柱間は外側の２倍の間隔をもつ。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が掘立４と同一なことから６世紀初頭とする。

掘立２（第140・151図）

調査区中央部のＣ～Ｄ・２～３区に位置し、ＳＤ２・ＳＫ３を切る。南北３間×東西３間の南北棟で、



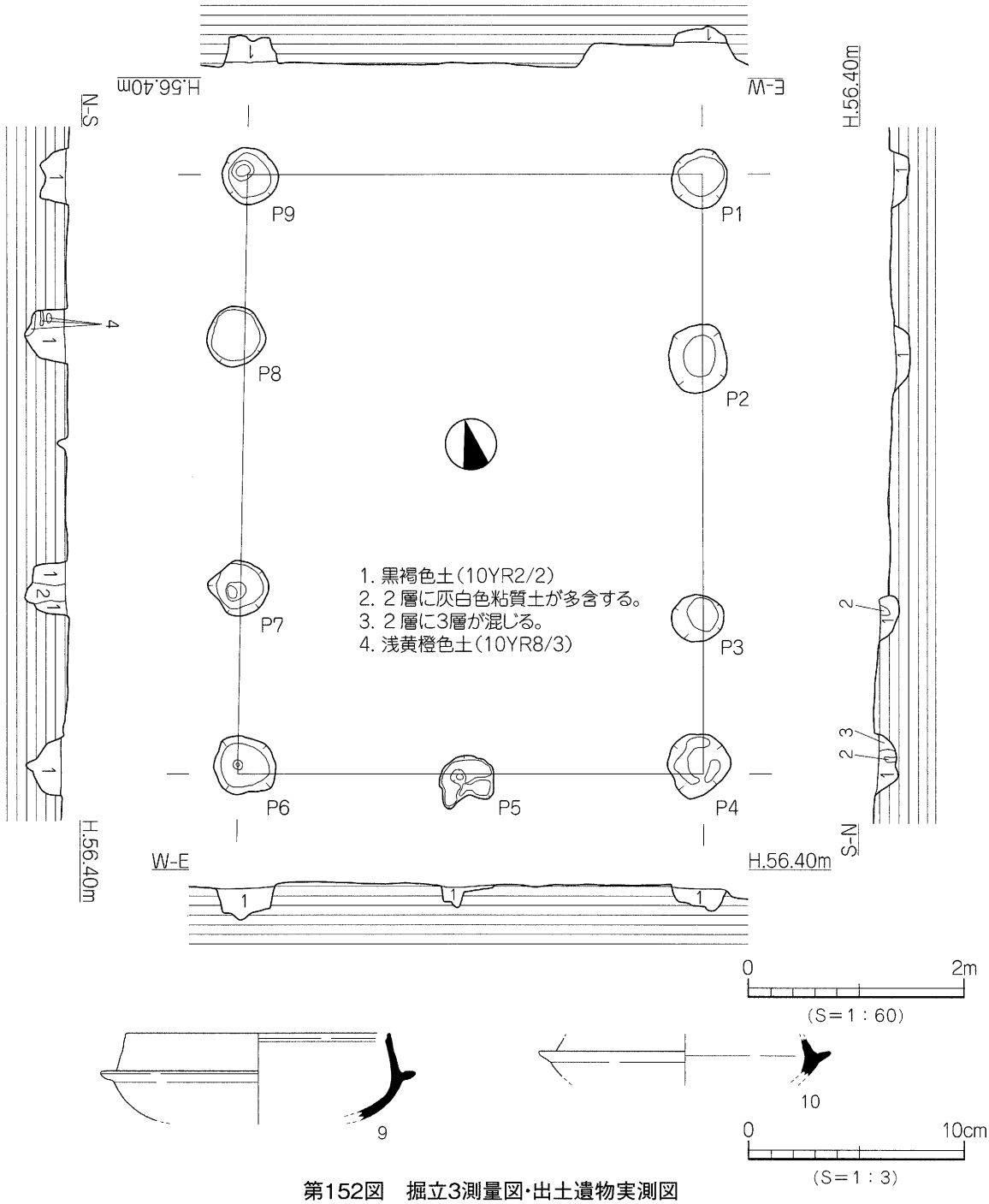
第151図　掘立２測量図・出土遺物実測図

主軸はＮ-12°-Ｅを指向する。規模は桁行 4.58 m、柱間 1.2 ～ 1.72 m、梁行 3.96 m、柱間 0.83 ～ 1.79 m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径 14 ～ 80cm、深さ５～ 46cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かと混入品の石器素材が１点出土する。

出土遺物（第 151 図、図版 40））

７は須恵器の坏蓋で、天井部境は無く口縁端部は丸く納まる。天井部に回転ヘラ削り調整が施される。８は石器の未成品で、片面の一部に小さく打ち欠きが見られる。長さ 2.65cm、幅 2.05cm、厚さ 0.8 cm、重さ 4.41 ｇを測る。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第152図　掘立3測量図・出土遺物実測図

掘立３（第 140・152 図）

調査区北西部のＣ～Ｄ・４～５区に位置する。南北３間×東西２間の南北棟で、主軸はＮ -13°- Ｅを指向する。規模は桁行 5.49 m、柱間 1.38 ～ 2.42 m、梁行 4.2 m、柱間 2.04 ～ 2.16 m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径 54 ～ 74cm、深さ 18 ～ 57cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第 152 図）

９・10 は須恵器の坏身で、９は受部端が凹み口縁端部は内傾する段をなす。10 は外方に延びる受部に口縁部は内傾する。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。

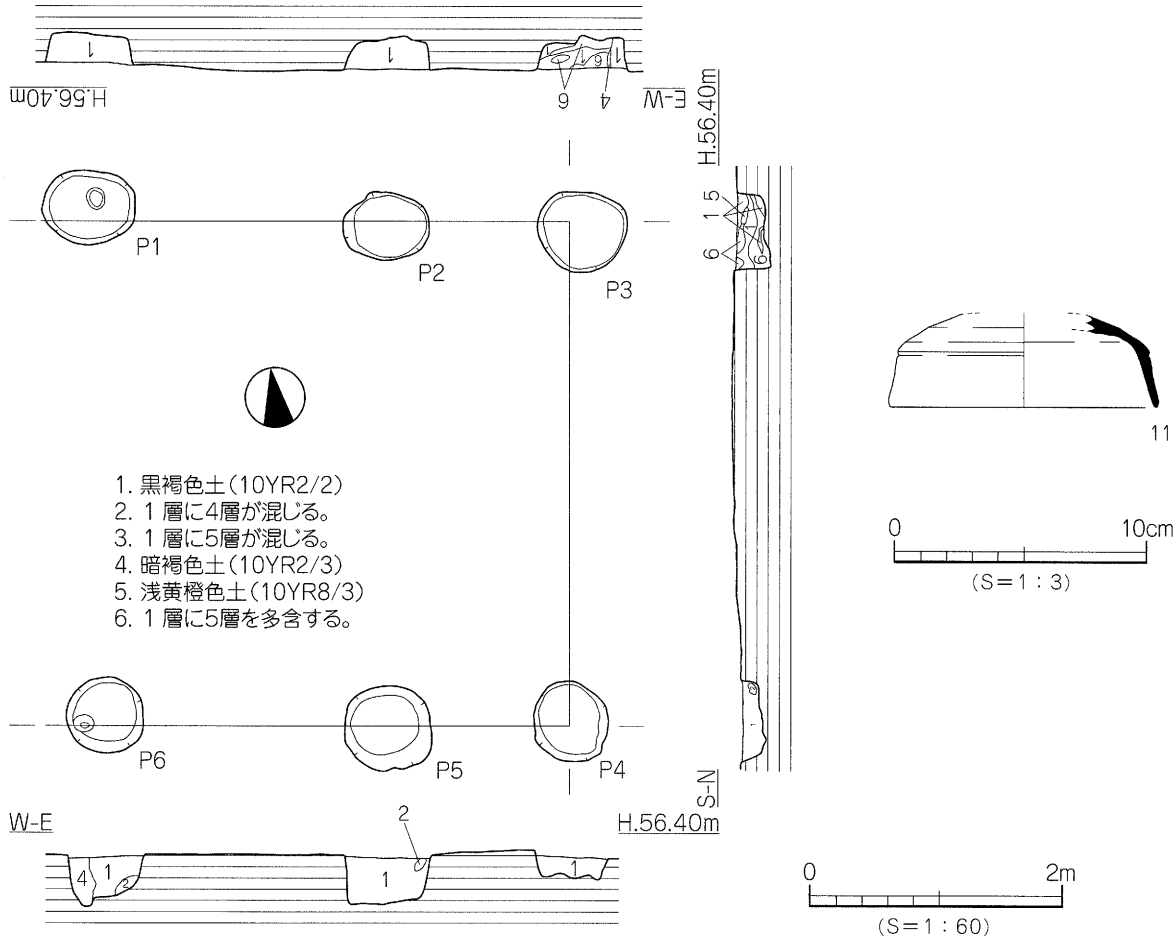
掘立４（第 140・153 図）

調査区北西部のＢ～Ｃ・４～５区に位置し、西側は調査区外に延びる。東西２間以上×南北１間の東西棟で、主軸はＮ -98°- Ｅを指向する。規模は桁行 3.93 m以上、柱間 1.58 ～ 2.35 m、梁行 3.76 m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径60～74cm、深さ18～57cmを測る。埋土は黒褐色土であり、遺物は土師器・須恵器片が出土する。

出土遺物（第 153 図）

11 は須恵器の坏蓋で、天井部境に稜をもつ。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀初頭とする。



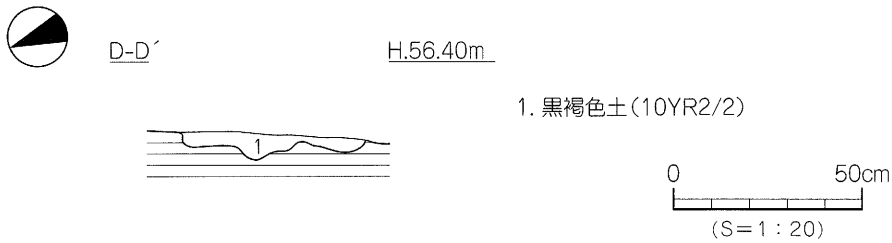
第 153 図　掘立４測量図・出土遺物実測図

３）溝

ＳＤ１（第154図）

調査区北西部のＤ・５区に位置し、現代坑に切られる。主軸はＮ-110°-Ｅで東西方向を指向し、西から東へ比高差３cmをもつ。規模は検出長2.0ｍ、上場幅0.35～0.62ｍ、深さ４～８cmを測り、断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土が掘立４と同一なことから６世紀初頭とする。



第154図　ＳＤ１測量図

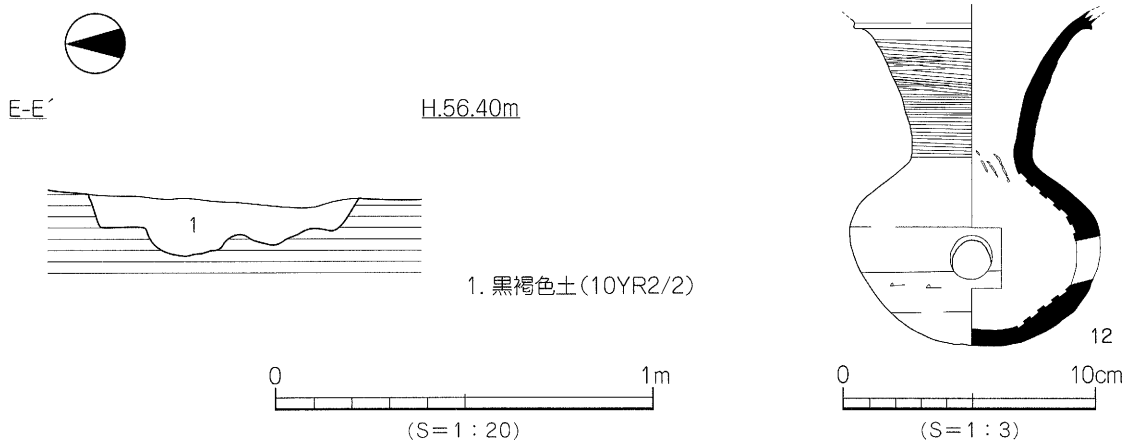
ＳＤ３（第155図、図版36）

調査区北西部のＤ・１～２区に位置し、西端は現代坑に切られる。主軸はＮ-105°-Ｅで東西方向を指向し、比高差はない。規模は検出長2.76ｍ、上場幅0.58～0.68ｍ、深さ８～16cmを測り、溝床はほぼ水平で、断面形態は皿状を呈し、溝床から口縁端部だけ欠失したほぼ完形の須恵器の甕が横になった状態で出土した。埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器･須恵器片が少量出土する。

出土遺物（第155図、図版40）

12は須恵器の甕で、やや扁平な球状の胴部中位に円孔があり、頸部から口縁部にかけてカキ目調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀前半とする。



第155図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図

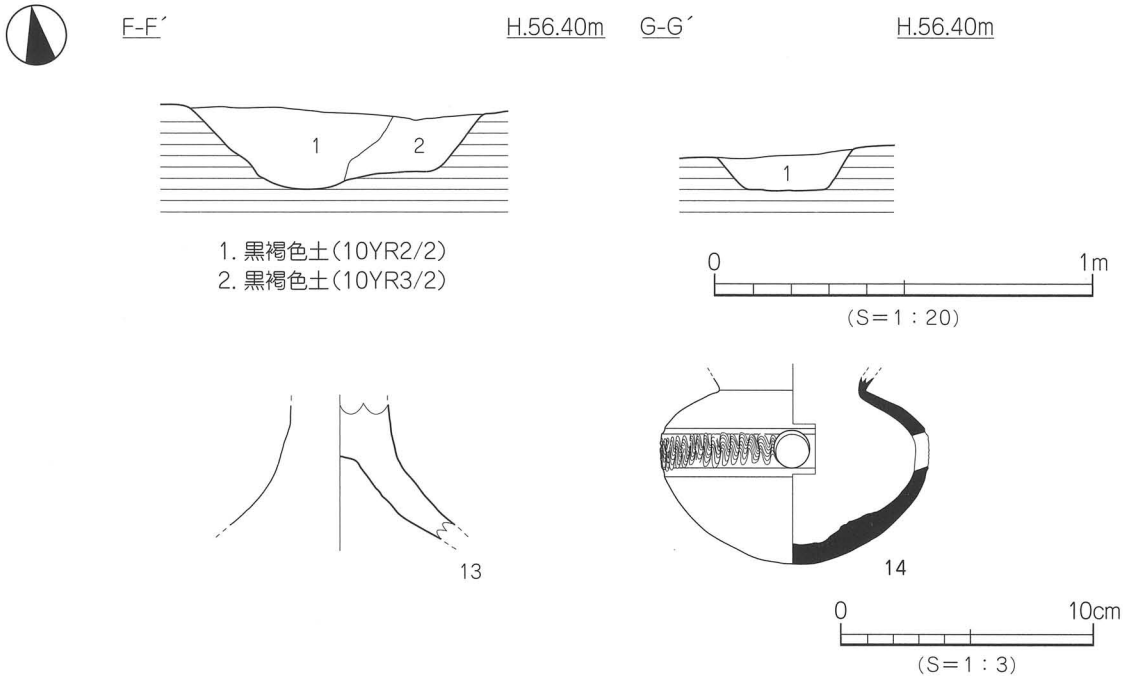
ＳＤ４（第156、図版37）

調査区南西部のＢ・１～４区に位置し、ＳＤ６・ＳＫ７に切られ、南端は調査区外に延びる。主軸はＮ-3°-Ｅで西側に湾曲しながら南北方向を指向し、北から南へ13cmの比高差を測る。規模は検出長11.26ｍ、上場幅0.26～0.82ｍ、深さ２～21cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態は逆台形状を呈し、埋土上位に口縁部を欠失した甕がうつ伏せの状態で出土した。埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器片が少量出土する。

出土遺物（第156図、図版41））

13は土師器の高坏の脚部で、外反する脚基部の外面はナデ調整、内面は削り調整が施される。14は須恵器の瓿で、上胴部に最大胴径をもち円孔を有し、上下２本の沈線に囲まれ７条の櫛描波状文が施される。

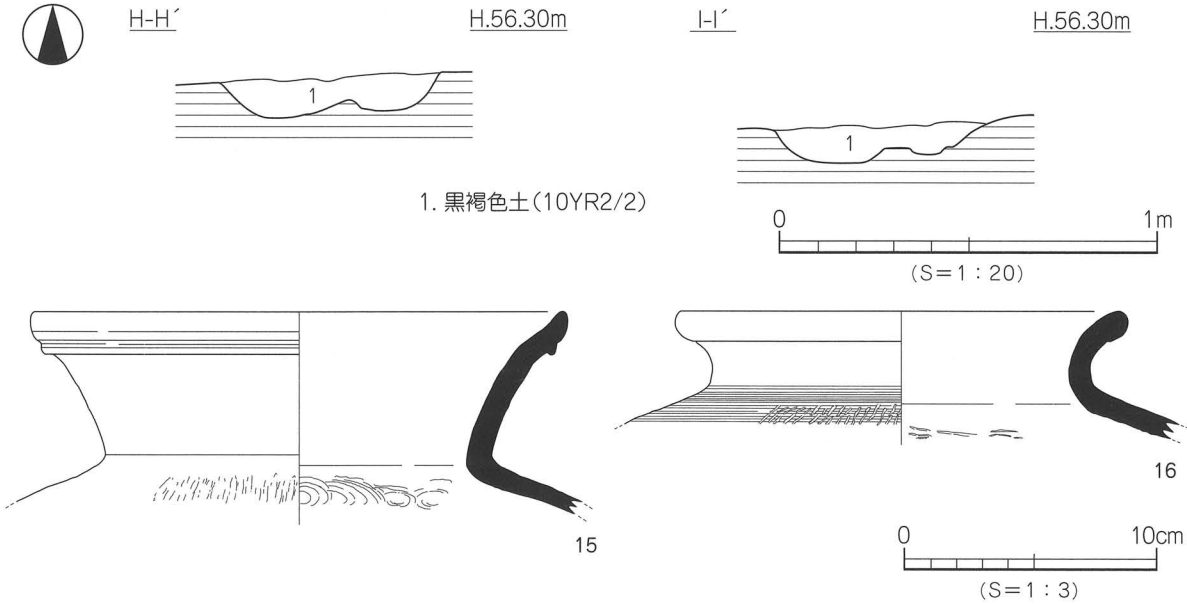
時期：出土した須恵器の特徴から、５世紀後半とする。



第156図　ＳＤ４測量図・出土遺物実測図

ＳＤ５（第157）

調査区南西部のＢ・１～３区に位置し、ＳＫ４・ＳＤ６に切られる。主軸はN -167°- Eで南北方向を指向し、北から南へ8cmの比高差をもつ。規模は検出長9.62 m、上場幅0.36～0.8 m、深さ２



第157図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図

～６cmを測り、溝床は東から西へ約５cmの比高差をもつ。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土の単一層となる。遺物は土師器・須恵器片が少量出土する。

出土遺物（第157図、図版41）

15・16は須恵器の甕の口縁部で、15は「く」字状の口縁部に端部は緩やかに屈曲し、内面に同心円のタタキ調整、外面にタタキ調整が施される。16は口縁端部が玉縁状に丸く納まり、内面にタタキ調整、外面にタタキ調整後のカキ目調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀前半とする。

４）土坑

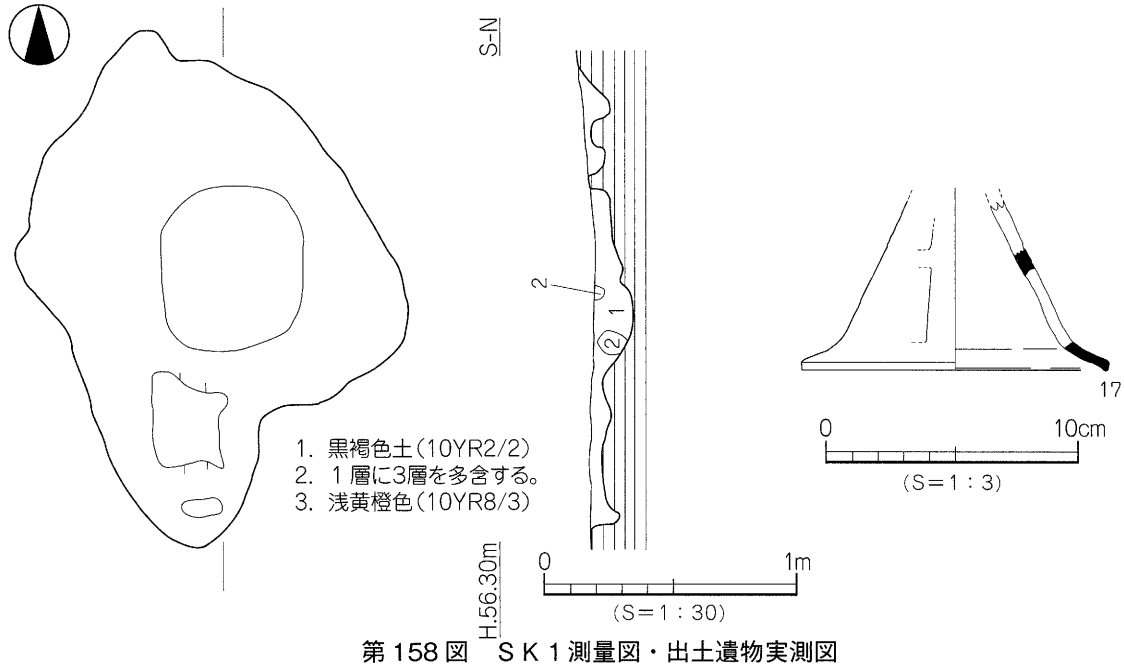
ＳＫ１（第140・158図）

調査区南東部のＥ・１区に位置する。平面形態は不整楕円形状、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸2.06 m、短軸1.3 m、深さ16cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は須恵器片が僅かに出土する。

出土遺物（第158図）

17は須恵器の高坏の脚部で、脚部の３方向に長方形の２段透かしが施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀中頃とする。



第158図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

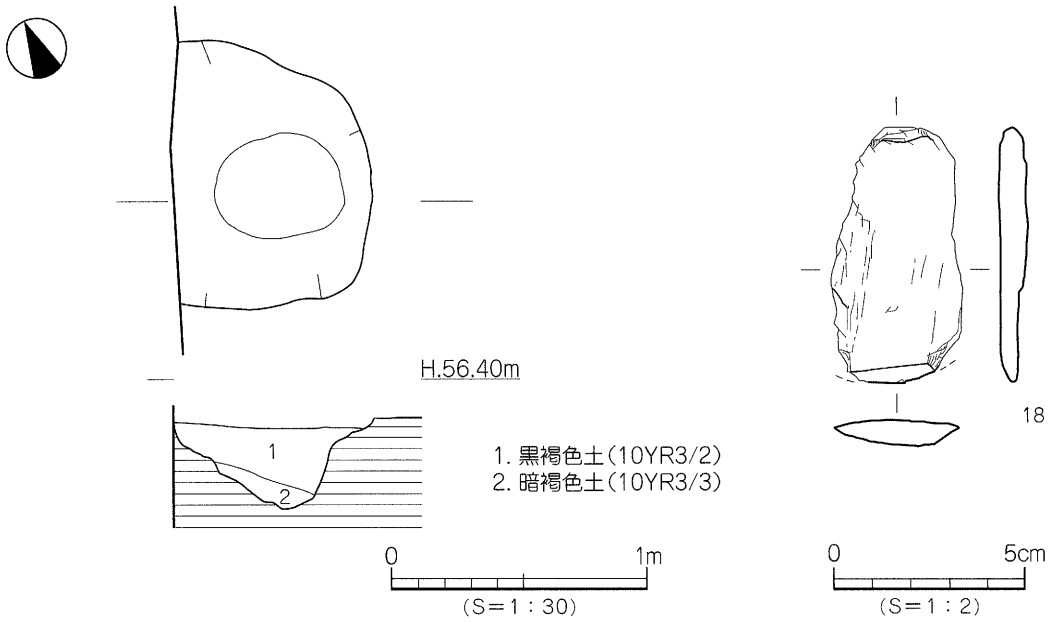
ＳＫ２（第140・159図）

調査区中央部西端のＢ・４区に位置し、西端は調査区外に延びる。平面形態は残存する状況から楕円形を呈するものと思われ、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.05 m、短軸0.78 m以上、深さ33 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は石斧が１点出土する。

出土遺物（第159図、図版41）

18は扁平片刃石斧で、刃部は片面のみ加工されており、長さ6.8cm、幅3.4cm、厚み0.75cm、重さ25.46 gを測り、緑色片岩製である。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から古墳時代と考える。

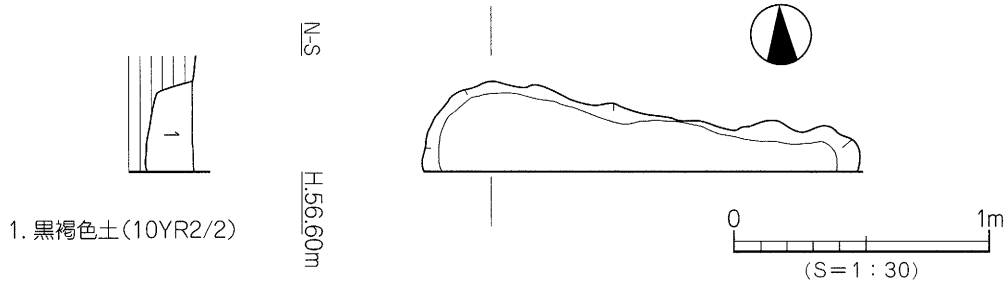


第159図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

ＳＫ５（第140・160図）

調査区中央部南端のＣ～Ｄ・１区に位置し、ＳＢ１を切り南端は調査区外に延びる。平面形態は残存状況から方形を呈するものと思われ、断面形態は逆台形状を呈し、規模は東西1.7ｍ、南北0.35ｍ以上、深さ19cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器・須恵器片が出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が掘立４と同一なことから６世紀初頭とする。

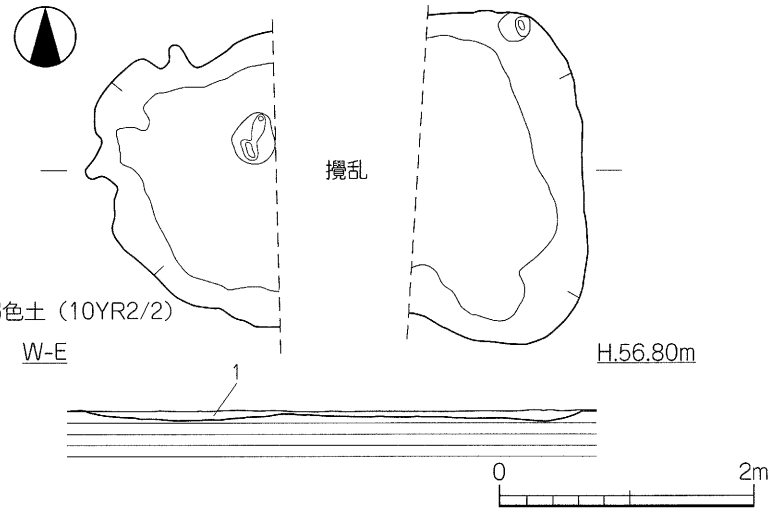


第160図　ＳＫ５測量図

５）性格不明遺構

ＳＸ１（第140・161図）

調査区北西部のＣ～Ｄ・６区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸3.93ｍ、短軸2.33ｍ、深さ９cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は須恵器片が僅かに出土する。

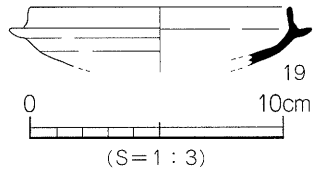


第161図　ＳＸ１測量図

出土遺物（第 162 図）

19 は須恵器の坏身で、受部端がやや凹む。

時期:出土した須恵器の特徴から、６世紀中葉とする。

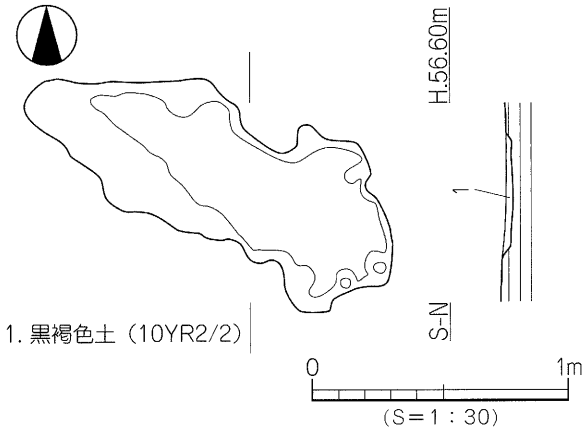


第 162 図　ＳＸ１出土遺物実測図

ＳＸ２（第 140・163 図）

調査区中央部北側のＥ・４区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈し、規模は長軸 1.6 m、短軸 0.63 m、深さ 3cmを測る。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。

時期：時期決定しうる遺物がなく、埋土から古墳時代と考える。



第 163 図　ＳＸ２測量図

（3）古代

古代の遺構は、溝１条、土坑１基を検出した。

1）溝

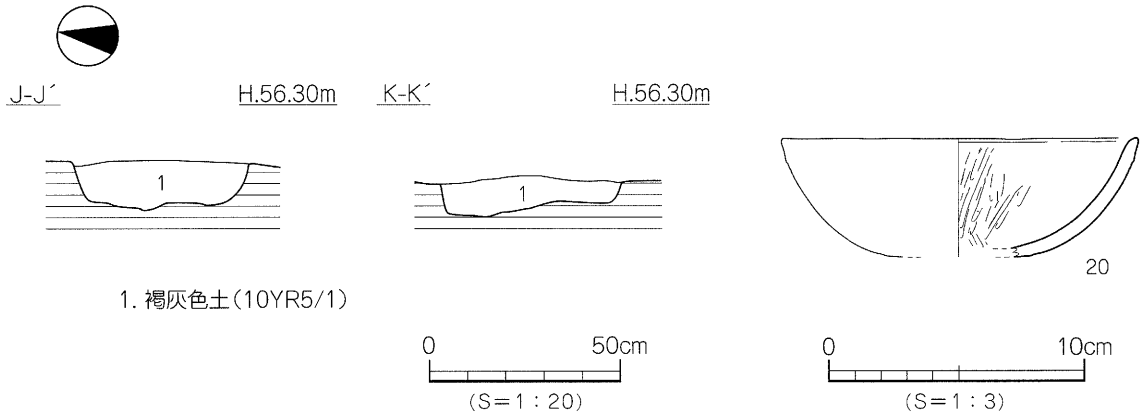
ＳＤ６（第 164 図）

調査区南西部のＢ～Ｃ・１区に位置し、ＳＤ４・５を切り、西端は調査区外に延びる。 主軸はＮ-75°-Ｅで、東西方向を指向しやや湾曲する。規模は検出長 5.53 m、上場幅 0.34 ～ 0.57 m、深さ６～ 13cmを測り、溝床はほぼ水平である。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐灰色土の単一層となる。遺物は土師器片が少量出土する。

出土遺物（第 164 図、図版 41）

20 は土師器の椀で、内面にミガキ調整、外面にナデ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、11 世紀代とする。



第 164 図　ＳＤ６測量図・出土遺物実測図

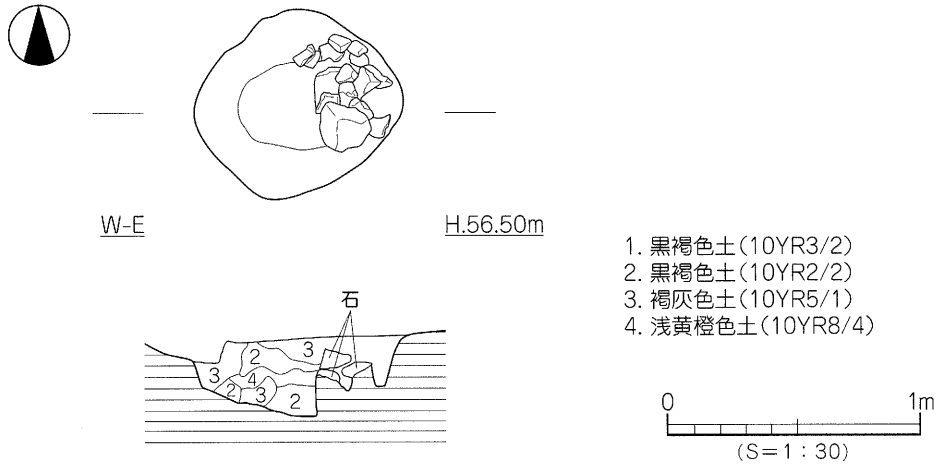
2）土坑

ＳＫ７（第 140・165 図、図版 38）

調査区南西部のＢ・１区に位置し、ＳＤ４を切る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈す。規模は長軸 0.84 m、短軸 0.74 m、深さ 30cmを測る。埋土は褐灰色土の単一層で、東側の上位から中

位にかけて拳大の角礫や円礫が密集した状態で検出した。遺物は土師器片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ６と同一なことから 11 世紀代とする。



第 165 図　ＳＫ７測量図

（4）近世以降

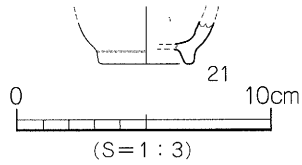
1）鋤址

調査区北側で、南北方向のＮ - 7° - Ｅ～Ｎ - 4° - Ｗを指向し、東西方向でＮ -58 ～ 66° - Ｗの直交するものも検出した。検出長 0.35 ～ 5.12 m、上場幅 0.06 ～ 0.62 m、深さ２～ 17cmで、北東部では西側から抉られるように掘られており、北側は調査区外に延びる。埋土は灰色土で、遺物は陶器の小片が出土する。

出土遺物（第 166 図）

21 は白磁の染付碗で、外面のみ施釉が施される。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から近世以降と考える。



第 166 図　鋤址出土遺物実測図

（5）その他の遺構

調査区全域から柱穴 127 基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径 15 ～ 90cm、深さ３～ 54cmを測る。埋土は黒褐色～褐灰色土で、出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器片が出土する。

時期：出土遺物や埋土から、弥生時代から中世までの間とする。

４．小　結

今回の調査では、弥生時代・古墳時代・中世・近世以降の遺構や遺物を検出した。検出した遺構は、主に古墳時代の掘立柱建物や溝などである。

層　位

本調査地は、微高地が南側に下がる緩傾斜地上であり、段をもつ３枚の畑地である。第Ⅴ層上面での遺構の密度は薄い。深掘りトレンチでは第Ⅴ層以下は、良質の粘土層が堆積しており、その下から水分を多く含んだ砂層の堆積を確認した。

弥生時代

調査区南側の緩斜面上にて溝・土坑・性格不明遺構を検出し、前期の土器が出土した。ＳＫ４は平面形が方形のしっかりした掘り方であり、南北隣の５・７次調査でも土坑や性格不明遺構を検出しており、周辺には前期頃の集落が展開していたことが窺える。

古墳時代

竪穴住居や掘立柱建物・溝・土坑・性格不明遺構を検出した。掘立柱建物は西側において４棟が真北を意識した東西棟と南北棟で構成されており、掘立１・３・４は内側の桁柱の間隔が外側に比べ約２倍長い特徴をもつ。ＳＤ３とＳＤ４からは壺が出土しており、ＳＤ４から出土した壺の頸部から上は欠失しており、人為的に打ち欠かれたものをうつ伏せに据えた祭祀的なことも考えられる。遺構の密度から集落の中心は南隣の５次調査付近が想定できる。

古　代

ＳＤ６は人為的に掘られた溝で、すぐ近くにＳＫ７も検出されていることより、周辺には古代の集落の存在が窺える。

近世以降

北東部において鋤址を密集した状態で検出しており、近世以降の生産域が調査地から北東部に広がる資料が得られた。

今回の調査では、弥生時代前期から近世以降の遺構や遺物を検出したが、古墳時代の集落関連遺構は隣接する５次調査や６次調査に広がるものであり、南北幅約 110 m規模で東西方向も調査区外に広がる集落の存在が想定できる。

【参考文献】

豊田達雄編　1982　『一般国道 11 号線松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1996　「小野川流域の遺跡」松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松佳久　1996　「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知編　2000　『古市遺跡』『下苅屋遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

水本完児　2004　「平井遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本健一・山之内志郎　2005　『古市遺跡２次調査』『五楽遺跡１次・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物　－凡例－

（1）以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）　：復元推定値

形態・施文欄　：土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、坏→坏部、坏上→坏部上位、坏下→坏部下位、胴→胴部

胎土・焼成欄　：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母、チャ→チャート

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：mm）

焼成の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表91　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋土	床面積(㎡)	主柱穴（本）	内部施設				周壁溝	備考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	古墳	方形	4.0 × 1.5 以上× 0.14	黒褐色土	5.93 以上						○	SK5 に切られ、南側は調査区外に延びる。

表92　掘立柱建物一覧

掘立	規模（間）	方向	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	時期	備考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）				
1	3×1以上	東西	6.4	1.5 ～ 3.05	1.8	1.8	N-79° -E	5.76 以上	古墳	北側は調査区外に延びる。
2	3 × 3	南北	4.58	1.2 ～ 1.72	3.96	0.83 ～ 1.79	N-12° -E	18.14	古墳	SD2・SK3 を切る。
3	3 × 2	南北	5.49	1.38 ～ 2.42	4.2	2.04 ～ 2.16	N-13° -E	23.06	古墳	
4	2以上×1	東西	3.93	1.58 ～ 2.35	3.76	3.76	N-98° -E	14.78 以上	古墳	西側は調査区外に延びる。

表93　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D・5	レンズ状	2.0 × 0.35 ～ 0.62 × 0.04 ～ 0.08	東西	黒褐色土		古墳	現代坑に切られる。
2	D～F・2	レンズ状	9.9 × 0.26 ～ 1.14 × 0.03 ～ 0.13	東西	黒褐色土	弥生	弥生	西端は現代坑に切られ、東端は調査区外に延びる。
3	D・1～2	皿状	2.76 × 0.58 ～ 0.68 × 0.08 ～ 0.16	東西	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	西端は現代坑に切られる。
4	B・1～4	逆台形状	11.26 × 0.26 ～ 0.82 × 0.02 ～ 0.21	南北	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SD6・SK7 に切られ、南端は調査区外に延びる。
5	B・1～3	逆台形状	9.62 × 0.36 ～ 0.8 × 0.02 ～ 0.06	南北	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SD6 に切られる。
6	B～C・1	逆台形状	5.53 × 0.34 ～ 0.57 × 0.06 ～ 0.13	東西	褐灰色土	土師器	古代	SD4・5 を切り、西端は調査区外に延びる。

表94　土坑一覧　（1）

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E・1	不整楕円形	逆台形状	2.06 × 1.3 × 0.16	1.9	黒褐色土	須恵器	古墳	
2	B・4	楕円形	逆台形状	1.05 × 0.78 以上× 0.33	0.72 以上	黒褐色土	石器	古墳	西端は調査区外に延びる。
3	C～D・3	不整楕円形	逆台形状	3.96 × 1.68 × 0.3	4.36	黒褐色土	弥生	弥生	掘立 2 に切られる。
4	A～B・3～4	長方形	逆台形状	2.4 × 1.68 × 0.18	3.81	黒褐色土	弥生	弥生	

土坑一覧　（2）

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時期	備　考
5	C～D・1	方形	逆台形状	1.7 × 0.35 以上× 0.19	0.42 以上	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SB1 を切り、南端は調査区外に延びる。
6	A・2	楕円形	逆台形状	1.03 以上× 0.83 × 0.28	0.66 以上	黒褐色土	弥生	弥生	西端は調査区外に延びる。
7	B・1	楕円形	逆台形状	0.84 × 0.74 × 0.3	0.44	褐灰色土	土師器	古代	SD4 を切る。

表 95　性格不明遺構一覧

(SX)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時期	備　考
1	C～D・6	楕円形	レンズ状	3.93 × 2.33 × 0.06	0.7	黒褐色土	須恵器	古墳	
2	E・4	不整 楕円形	レンズ状	1.6 × 0.63 × 0.03	1.15 以上	黒褐色土		古墳	
3	E・1	楕円形	レンズ状	1.27 × 0.76 × 0.08	8.33	黒褐色土	弥生	弥生	東端は調査区外に延びる。

表 96　SD2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	底径 (9.1) 残高 8.6	平底の底部。	ミガキ ナデ ヨコナデ	ナデ（工具）	明赤褐色 赤褐色	石・長 (1 ～ 3.5) ○		40

表 97　SK3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
2	甕	底径 6.25 残高 7.65	平底の底部。	ハケ (7 ～ 8 本 /1cm) ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長 (1 ～ 4) ○		
3	甕	底径 (7.2) 残高 3.6	平底の底部。	ハケ (6 本 /cm)	ナデ 指頭痕	浅黄橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ○		

表 98　SK4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
4	甕	口径 (21.9) 残高 11.25	緩やかに外反する口縁部直下に櫛描直線文と端部には刻目を施す。	ナデ ハケ (8 ～ 10 本 /cm)	㊐ヨコナデ ㊥ミガキ ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ○	黒斑	40
5	甕	底径 (8.2) 残高 6.75	平底の底部。	ナデ ミガキ ハケ (8 ～ 9 本 /cm)	マメツ	にぶい橙色 灰白色	石・長 (1 ～ 3) 金 ○		
6	甕	底径 9.6 残高 6.75	平底の底部。	ミガキ ナデ ヨコナデ	ナデ	灰白色・浅黄橙色 灰褐色	石・長 (1 ～ 4) ○		

表 99　掘立２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	坏蓋	口径 (14.4) 残高 3.4	天井部境は無く口縁端部は丸く納まる。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長 (1) ○		40

表 100　掘立２出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
8	不明	－	黒曜石	2.65	2.05	0.8	4.41	未成品	40

表 101　掘立 3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
9	坏身	口径 (12.2) 残高 4.1	受部端が凹み口縁端部は内傾する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1 ～ 2) ◎	自然釉	
10	坏身	残高 1.75	外方に延びる受部に口縁部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

表 102　掘立 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	蓋坏	口径 (10.6) 残高 3.7	天井部境に綾を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1 ～ 2) ○	自然釉	

表 103　SD3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
12	甕	残高 13.3	やや扁平な球状の胴部中位に円孔がある。	回転ナデ カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1 ～ 3) ○		40

表 104　SD4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
13	高坏	残高 5.35	外反する脚部。	ナデ	ナデ ケズリ マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) チャ ○		
14	甕	残高 7.4	上胴部に最大胴径をもち円孔を有し、上下 2 本の沈潜に囲まれ 7 条の櫛描波状文が施される。	ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 2.5) ○	自然釉	41

表 105　SD5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
15	甕	口径 (20.8) 残高 8.05	「く」字状の口縁部に端部は緩やかに掘曲する。	回転ナデ	回転ナデ 円弧タタキ	暗灰色 灰色	石・長 (1 ～ 2) ○	自然釉	41
16	甕	口径 (17.4) 残高 5.05	口縁端部が玉縁状に丸く納まる。	回転ナデ カキメ タタキ→カキメ	回転ナデ タタキ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 2) ○		41

表 106　SK1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
17	高坏	底径 (12.1) 残高 6.75	脚部の 3 方向に長方形の 2 段透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 暗灰色・灰白色	石・長 (1 ～ 1.5) ○		

表 107　SK2 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
18	片刃石斧	約 3/4	緑色片岩	6.8	3.4	0.75	25.46		41

表 108　SX1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
19	坏身	口径 (10.2) 残高 2.35	受部がやや凹む。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 青灰色	長 (1) ○		

表 109　SD6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
20	椀	口径 (13.9) 残高 4.7	胴部は内湾して立ち上がる。	口 ヨコナデ 底上 ハケリ・マメツ 底下 ナデ	口 ヨコナデ 底 ミガキ・マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長 (1) ○		41

表 110　鋤址出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	碗	底径 (3.8) 残高 1.7	白磁の染付。	施釉	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

第8章

平井遺跡8次調査

第８章　平井遺跡８次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年１月24日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。小野160号線に関連する発掘調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）により、平成18年度から19年度までに５度実施され、（平井遺跡３次～７次調査）、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。今回、発掘調査を実施した調査地（松山市平井町甲2348番１の一部）は申請地の北側に位置する。調査地内の試掘調査は2007（平成19）年11月26日に実施した。その結果、遺構は溝２条、柱穴12基を検出し、遺物では土師器片と須恵器片が出土した。

試掘調査の結果を受け、文化財課と申請者及び埋文センターの三者は、遺跡の取り扱いについての協議を重ね、道路工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、文化財課の指導のもと、調査地内における古墳時代の集落構造解明を主目的とし、2008（平成20）年４月16日より本格調査を実施した。

（２）調査の経緯

調査は、2008（平成20）年４月16日から2008（平成20）年５月30日まで屋外調査を実施した。その後、６月２日より埋文センターにて、出土遺物の整理や概要報告書の作成を実施した。以下、作業工程を略記する。

2008（平成20）年３月25日、現場の安全対策等を行い、４月16日より、屋外調査を開始する。４月21日、重機の使用により、第Ⅴ層上面までを掘削する（４月23日終了）。４月24日、第Ⅴ層上面にて、溝や土坑、柱穴を検出し、遺構検出状況写真を撮影する。４月26日より、遺構の掘り下げや測量をする（５月26日終了）。４月28日、株式会社ＧＩＳ四国によって、調査区に基準点測量を実施し、この日に終了する。５月17日、一般市民対象の現地説明会を開催し、30名の参加者を得た。５月27日、遺構完掘状況写真を撮影し、５月28日、重機で埋め戻しをする（５月30日終了）。５月30日、道具を撤去して屋外調査を終了する。

６月２日より、屋内整理作業を開始する。出土遺物の洗浄や注記、及び図面や写真の整理を行い、調査成果をまとめた調査概要報告書を作成する。なお、出土遺物の実測やトレース作業等、報告書作成に伴う整理作業は、平成20年度より実施した。

（３）調査組織

所 在 地：松山市平井町甲2348番１の一部

調査期間：2008（平成20）年４月16日～2008（平成20）年５月30日

調査面積：244.53㎡

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：水本完児

２．層　位

（１）基本層位　（第169・170図、図版42）

調査地は、松山平野南東部、小野川と堀越川によって形成された扇状地上、標高58.90～58.95ｍに立地する。調査地の基本層位は、以下の６層である。

第Ⅰ層：近現代の造成にかかる客土や水田耕作に伴う耕土で、４層に分層される。

第Ⅰ①層－真砂土で調査地全域にみられ、層厚２～40㎝を測る。

第Ⅰ②層－灰色（7.5Y6/1）粘質土で調査地全域でみられ、層厚２～23㎝を測る。

第Ⅰ③層－にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質土で調査地ほぼ全体でみられ、層厚２～９㎝を測る。

第Ⅰ④層－黄褐色（2.5Y6/4）シルトで調査地ほぼ全体でみられ、層厚２～27㎝を測る。

第Ⅱ層：灰黄色（2.5Y6/2）を呈するシルトで、調査地北東部を除く地域で検出した。層厚２～20㎝を測る。遺物は古代から中世までの土師器片や、中世の陶磁器が出土した。

第Ⅲ層：微弱な土質の違いにより、２層に分層される。

第Ⅲ①層－黒褐色（10YR3/1）シルトで、調査地北東部と南西部で検出した。層厚２～20㎝を測る。遺物は、古墳時代から古代までの土師器片や須恵器片が出土した。

第Ⅲ②層－黒褐色（10YR3/1）シルトに灰黄色（2.5YR6/2）シルトがブロック状に混じるもので、調査地北東部と南東部で検出した。層厚２～12㎝を測る。

第Ⅳ層：灰オリーブ色（5Y5/2）シルトで、調査地南東部で検出した。層厚２～28㎝を測る。本層中からは、弥生土器や石器が出土した。

第Ⅴ層：土色・土質の違いにより、５層に分層される。なお、本層上面は調査における最終遺構検出面である。

第Ⅴ①層－浅黄色（5Y7/4）シルトで、調査地南西部を除く全域で検出した。層厚２～60㎝を測る。本層上面にて、溝と柱穴を検出した。

第Ⅴ②層－浅黄色（2.5Y8/4）砂質シルトで、調査地北西部で検出した。層厚15～35㎝を測る。

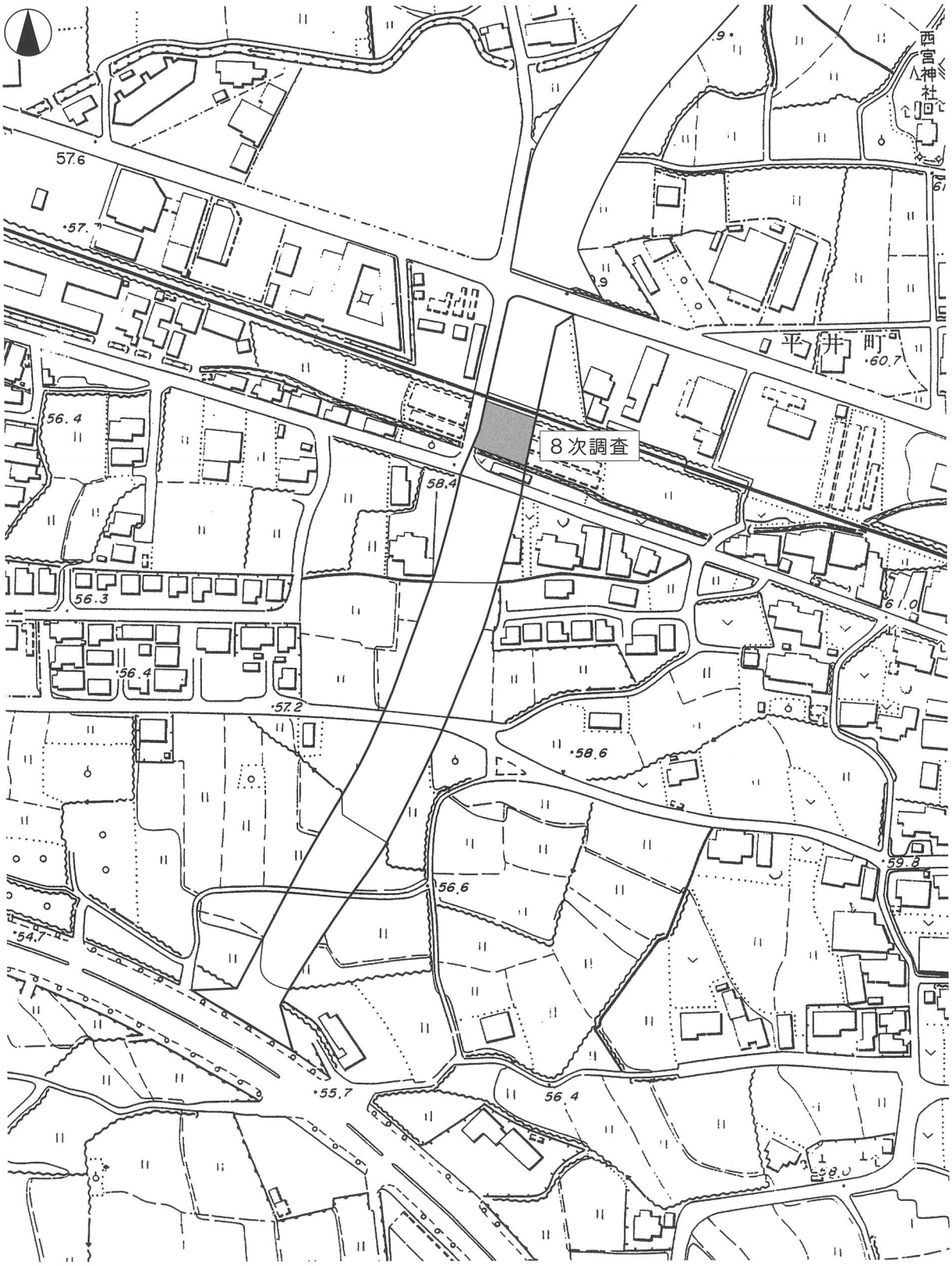
第Ⅴ③層－明黄褐色（2.5Y7/6）シルトで、調査地北西部を除く地域で検出した。層厚２～40㎝を測る。本層上面にて溝と柱穴を確認した。

第Ⅴ④層－黄色（5Y8/8）シルトで、調査地南東部で検出した。層厚25～55㎝を測る。

第Ⅴ⑤層－灰白色（7.5Y8/1）粘土で、調査地北西部で検出した。層厚２～30㎝を測る。

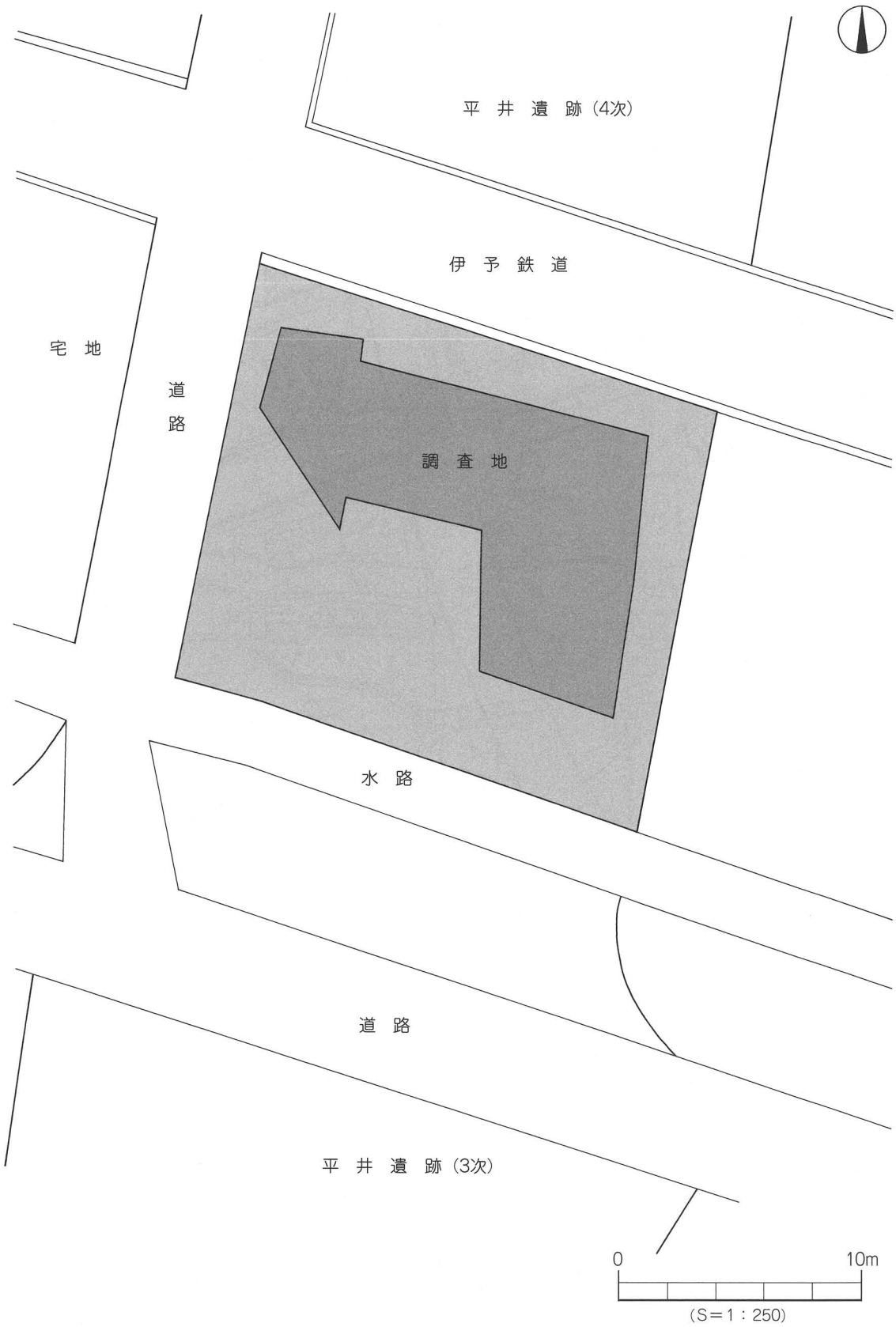
第Ⅵ層：灰色（10Y6/1）砂に径１～10㎝大の円礫が混じるもので、調査地北半部で検出した。層厚２～55㎝を測る。

なお、出土遺物や検出遺構などから、第Ⅱ層は中世、第Ⅲ層は古代、第Ⅳ層は弥生時代から古墳時代までに堆積したものと考えられる。

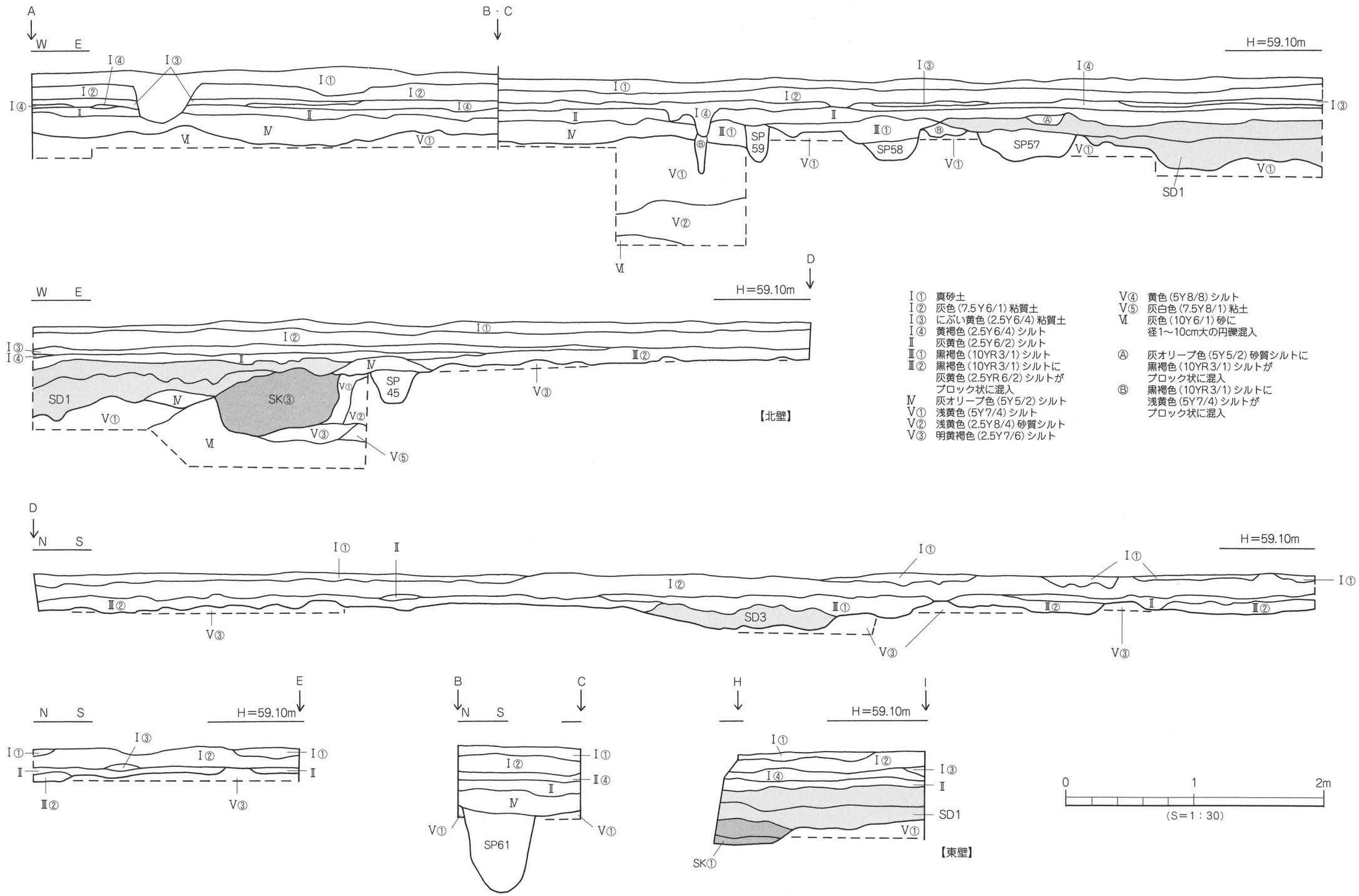


(S=1:2,500)

第167図　調査地位置図

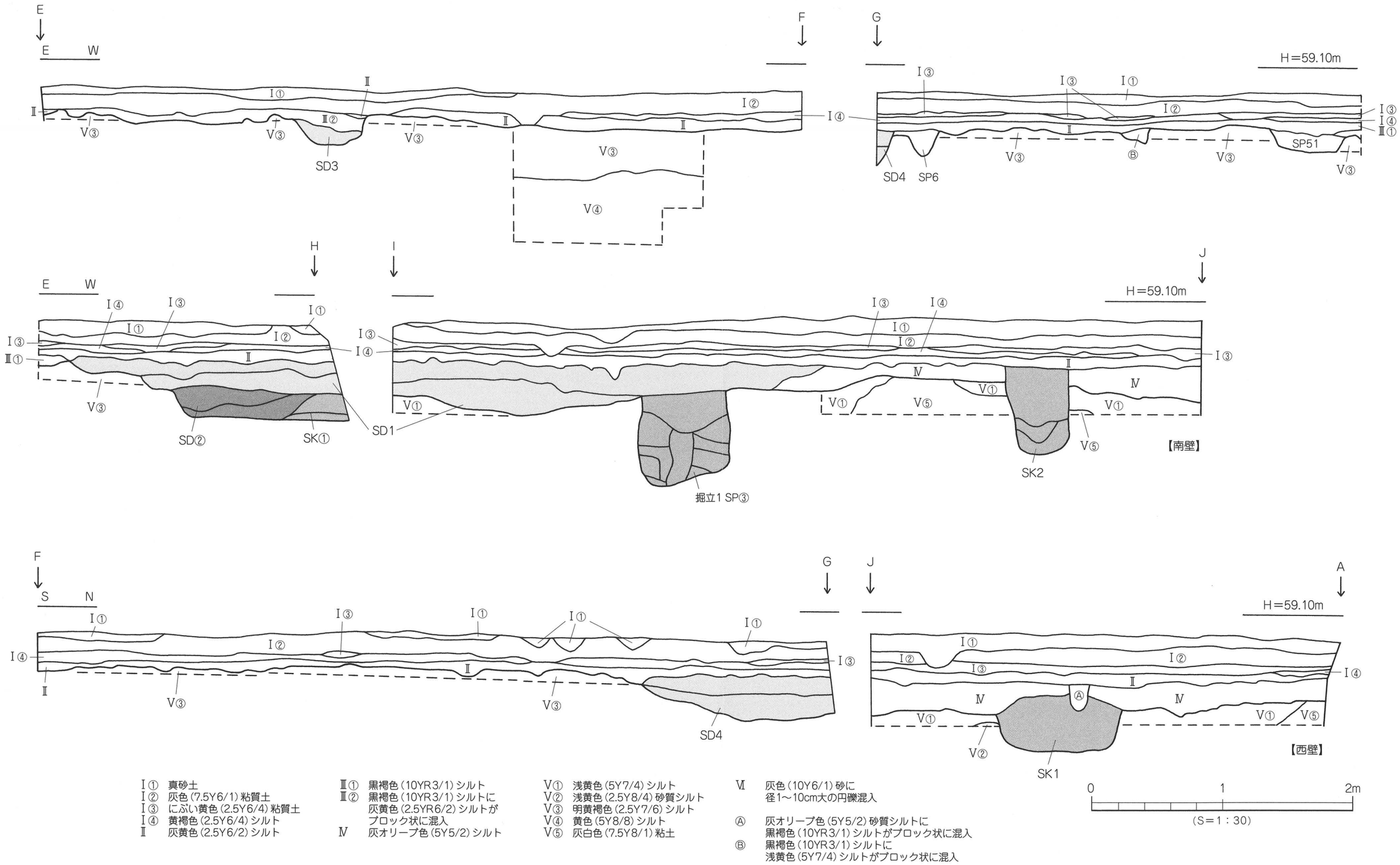


第168図　調査地測量図



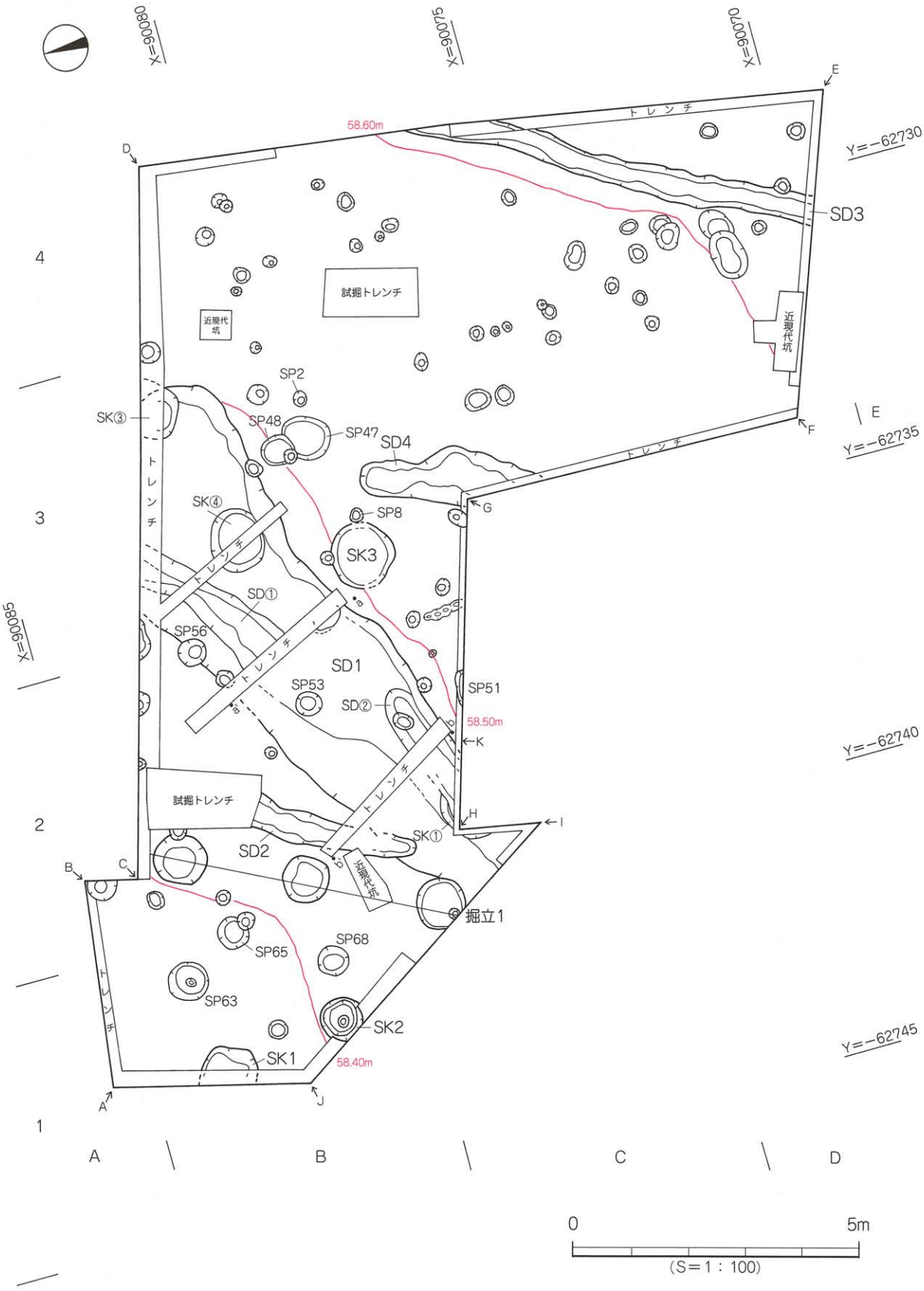
Ⅰ① 真砂土
Ⅰ② 灰色（7.5Y6/1）粘質土
Ⅰ③ にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質土
Ⅰ④ 黄褐色（2.5Y6/4）シルト
Ⅱ 灰黄色（2.5Y6/2）シルト
Ⅲ① 黒褐色（10YR3/1）シルト
Ⅲ② 黒褐色（10YR3/1）シルトに灰黄色（2.5YR6/2）シルトがブロック状に混入
Ⅳ 灰オリーブ色（5Y5/2）シルト
Ⅴ① 浅黄色（5Y7/4）シルト
Ⅴ② 浅黄色（2.5Y8/4）砂質シルト
Ⅴ③ 明黄褐色（2.5Y7/6）シルト
Ⅴ④ 黄色（5Y8/8）シルト
Ⅴ⑤ 灰白色（7.5Y8/1）粘土
Ⅵ 灰色（10Y6/1）砂に径1～10cm大の円礫混入
Ⓐ 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルトに黒褐色（10YR3/1）シルトがブロック状に混入
Ⓑ 黒褐色（10YR3/1）シルトに浅黄色（5Y7/4）シルトがブロック状に混入

第169図　調査地北壁・東壁土層図



Ⅰ① 真砂土
Ⅰ② 灰色（7.5Y6/1）粘質土
Ⅰ③ にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質土
Ⅰ④ 黄褐色（2.5Y6/4）シルト
Ⅱ 灰黄色（2.5Y6/2）シルト
Ⅲ① 黒褐色（10YR3/1）シルト
Ⅲ② 黒褐色（10YR3/1）シルトに灰黄色（2.5YR6/2）シルトがブロック状に混入
Ⅳ 灰オリーブ色（5Y5/2）シルト
Ⅴ① 浅黄色（5Y7/4）シルト
Ⅴ② 浅黄色（2.5Y8/4）砂質シルト
Ⅴ③ 明黄褐色（2.5Y7/6）シルト
Ⅴ④ 黄色（5Y8/8）シルト
Ⅴ⑤ 灰白色（7.5Y8/1）粘土
Ⅵ 灰色（10Y6/1）砂に径1～10cm大の円礫混入
Ⓐ 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルトに黒褐色（10YR3/1）シルトがブロック状に混入
Ⓑ 黒褐色（10YR3/1）シルトに浅黄色（5Y7/4）シルトがブロック状に混入

第170図　調査地南壁・西壁土層図


X=90080
X=90075
X=90070
X=90085
Y=-62730
Y=-62735
Y=-62740
Y=-62745
58.60m
58.50m
58.40m
トレンチ
試掘トレンチ
近現代坑
SD3
SD4
SD1
SD2
SD①
SD②
SK①
SK②
SK③
SK④
SP2
SP8
SP47
SP48
SP51
SP53
SP56
SP63
SP65
SP68
掘立1
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
1
2
3
4
0
5m
(S＝1：100)

第171図　遺構配置図

（２）検出遺構・遺物（第171図）

調査では、掘立柱建物１棟、溝４条、土坑３基、柱穴68基を検出した。遺物は、遺構及び包含層中より、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～古代）、陶磁器（中世）が出土した。

なお、遺物の出土量は、収納箱（44 × 60 × 12㎝）５箱分である。調査にあたり、調査地内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ、西～東へ１・２・３とし、Ａ１・Ａ２‥‥Ｃ３といったグリット名を付けた。グリットは、遺物の取り上げや遺構の位置表示に利用した。

３．遺構と遺物

調査では掘立柱建物１棟、溝４条、土坑３基、柱穴68基を検出した。ここでは、遺構別に規模や構造、時期等について説明する。

（１）掘立柱建物

掘立１（第171・172図、図版45）

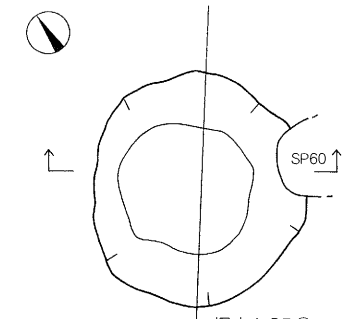
調査地西側Ｂ２区～Ｃ１区に位置する。３基の柱穴で構成され、柱穴埋土や出土遺物、柱穴配置から建物柱穴と判断した。２間以上の建物で、検出長5.4ｍを測る。建物北側の柱穴（ＳＰ①）は柱穴ＳＰ60に切られており、南側柱穴（ＳＰ③）は一部、調査区外へ続く。調査壁の土層観察により第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。各柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径0.82～0.92ｍ、深さは検出面下54～68㎝を測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色シルトを基調とし、ＳＰ①・②は埋土上位には褐灰色シルトが堆積する。柱痕はＳＰ③で検出され、柱痕径15㎝、深さ60㎝を測る。柱痕埋土は、黒褐色粘質土である。

遺物は柱穴掘り方埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

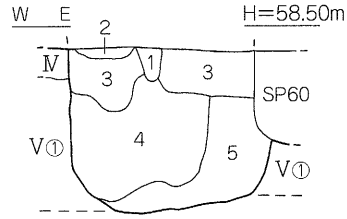
出土遺物（第173図、図版50）

１・３・４・６はＳＰ①、５はＳＰ②、２・７・８はＳＰ③出土品。１～３は須恵器。１は短頸壺の蓋で、口縁端部は外反する。２は無蓋高坏の坏部で、体部に凸線２条を施す。内外面共に回転ナデ調整を施す。古墳時代後期。３は高坏の脚部小片で、端部は上方に肥厚する。４・５は土師器の甕で、４は口縁端部が内傾する平坦面をなす。胴部外面に斜線文３条を施す。内外面共にハケメ調整を施す。６～８は弥生土器。６は甕形土器、７・８は壺形土器である。６は胴部外面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。７は頸部に貼付凸帯文２条を施す。内外面共にナデ調整を施す。８は平底の底部である。弥生中期後半。

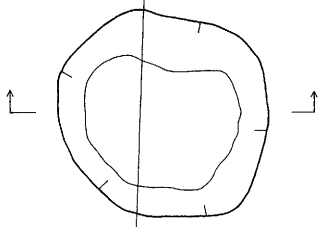
時期：出土した土師器や須恵器の特徴より、掘立１は古墳時代後期、６世紀後半の建物とする。



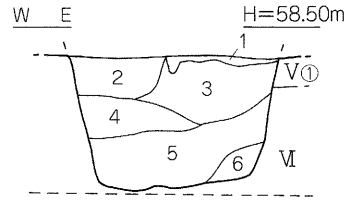
掘立1 SP①



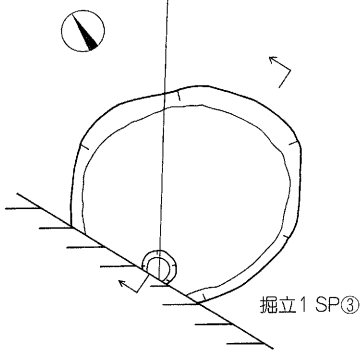
1 灰褐色(7.5YR5/2)シルト
2 褐灰色(10YR5/1)シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトがブロック状に混入
3 褐灰色(10YR4/1)シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトがブロック状に混入
4 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト
5 褐色(7.5YR4/3)粘質シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトがブロック状に混入



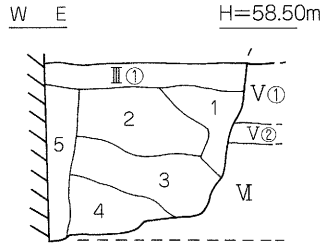
掘立1 SP②



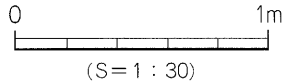
1 褐灰色(10YR4/1)シルト
2 褐灰色(10YR4/1)シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトと
径1～2cm大の小礫が少量混入
3 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト
4 黒褐色(10YR3/2)シルトに径1～2cm大の小礫が少量混入
5 黒褐色(10YR3/1)粘質土に焼土が少量混入
6 暗灰色(10YR3/4)粘質シルトに径1～2cm大の小礫が混入



掘立1 SP③

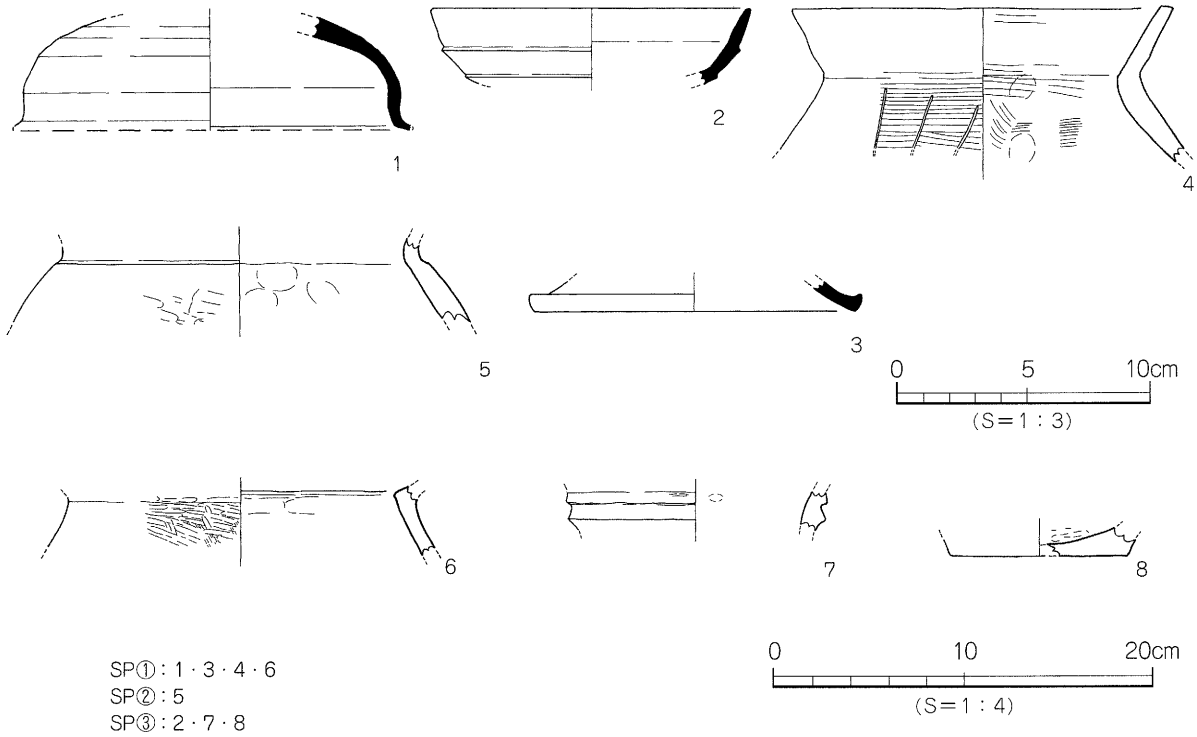


1 黒褐色(10YR3/1)シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトがブロック状に混入
2 黒褐色(10YR2/2)シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトがブロック状に混入
3 黒褐色(10YR2/2)粘質土に浅黄色(5Y7/4)シルトが斑点状に混入
4 黒褐色(10YR3/1)粘質土に浅黄色(5Y7/4)シルトがブロック状に混入
5 黒褐色(10YR3/1)粘質土



(S＝1：30)

第172図　掘立1 測量図



第173図　掘立１ 出土遺物実測図

（２）溝

ＳＤ１（第171・174図、図版46・47）

調査地中央部、Ｂ３区～Ｃ１区で検出した北東－南西方向の溝で、溝西壁は２基の柱穴（ＳＰ55・56）、溝東壁は２基の柱穴（ＳＰ49・70）に切られている。なお、溝西壁側は第Ⅴ①層、溝東壁側は第Ⅴ③層上面での検出となる。溝上面は、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長10.0ｍ、幅2.14～2.80ｍ、深さは最深部で検出下34㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色シルト（１層）を基調とし、溝東壁体沿いには３層灰オリーブ色粘質シルト（浅黄色シルトが斑点状に混入）が堆積する。溝基底面は、北側から南側にかけて緩やかな傾斜をなす（比高差10㎝）。溝基底面北側にて、幅0.40～0.94ｍ、深さ６～10㎝を測る溝ＳＤ①を検出した。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は４層黒褐色シルト（黄色シルトがブロック状に少量混入）である。ＳＤ①基底面は北側から南側に向けて、わずかに傾斜をなす（比高差10㎝）。また、基底面南側では幅0.55～0.60ｍ、深さ20㎝を測る溝ＳＤ②と、南北検出長1.00ｍ、東西検出長0.30ｍ、深さ20㎝を測る土坑ＳＫ①を検出した。なお、ＳＤ②はＳＫ①を切っている。ＳＤ②は断面形態がレンズ状を呈し、埋土は二種類あり、溝上位は５層黒褐色シルト（径１～２㎝大の小礫混入）、溝下位は６層灰色砂である。ＳＤ②上面にて、径0.30～0.35ｍ、深さ６㎝を測る柱穴（ＳＰ69）を検出した。柱穴埋土は黒褐色シルトである。ＳＤ②基底面は溝北側から南側に向けて緩やかに傾斜をなす（比高差８㎝）。ＳＫ①は断面形態が逆台形状を

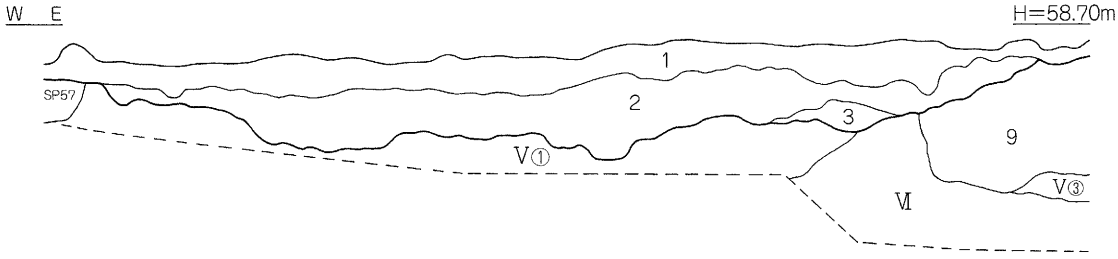
呈するが、壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は二種類あり、上位は７層褐灰色シルト、下位は８層灰褐色砂である。ＳＤ②及びＳＫ①内からは、遺物の出土はない。

このほか、溝基底面中央部にて径52㎝、深さ50㎝を測る土坑ＳＫ②を検出したが、トレンチにより遺構の大半は削平されている。断面形態は袋状を呈し、埋土は黒褐色粘質土の単一層である。ＳＫ②内からは、遺物の出土はない。また、基底部中央部南寄りにて、径0.35ｍ、深さ６㎝を測る柱穴（ＳＰ53）を検出した。柱穴埋土は黒褐色シルトである。さらに、溝北側基底面にて、２基の土坑（ＳＫ③･④）を検出した。ＳＫ③は楕円形を呈する土坑で、東西検出長0.90ｍ、南北検出長0.20ｍ、深さ50㎝を測る。断面形態は袋状を呈し、埋土は９層黒褐色シルト（灰オリーブ色シルトがブロック状に少量混入）である。ＳＫ④は長径1.08ｍ、短径0.92ｍ、深さ40㎝を測る楕円形土坑で、断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は垂直気味に立ち上がる。埋土はオリーブ黒色シルトを基調とし、黒色シルトや黄色シルトがブロック状に混入する。ＳＫ③・④からは、遺物の出土はない。埋土の状況から、ＳＫ①～④はＳＤ１構築以前の遺構と考えられる。溝内からは主に１層中より、弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか石器が混在して出土した。

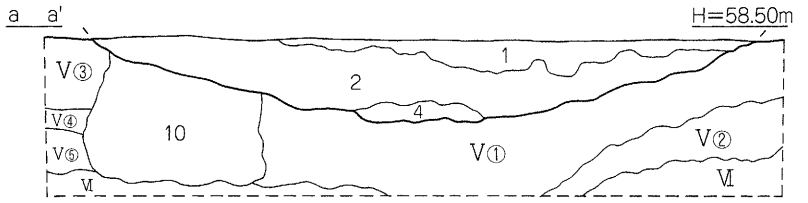
出土遺物（第175図、図版50）

９～15は土師器の坏。９～11は口縁部がやや外反し、12は直立する。10の底部切り離しは、回転糸切り技法による。13世紀。13～15は底部。13・14はわずかに上底で、15は平底である。すべて底部切り離しは回転糸切り技法による。内外面共にヨコナデ調整を施す。16～18は土師器の椀。16は口縁部が外反し、口縁端部は丸く仕上げる。体部に沈線状の凹みをもつ（工具痕）。内外面共にヨコナデ調整を施す。17・18は底部片で、断面三角形状の高台を貼付る。19は土師器の皿で、底部切り離しは回転糸切り技法により、スノコ痕が残る。内外面共にヨコナデ調整を施す。13世紀。20～29は弥生土器。20～22は折曲口縁の甕で、20は胴部外面にヘラ描き沈線文３条以上、21は口縁端面に刻目を施す。23・24は胴部片で、23はヘラ描き沈線文３条、24はヘラ描き沈線文と刺突文を施す。弥生前期。25・26・29は甕形土器、27・28は壺形土器の底部で、25～28は平底、29はわずかに上底となる。25は胴部外面にヘラミガキ調整を施す。弥生中期後半。30はサヌカイト製の打製石鏃。完形品。31～33は剥片で、材質は31がサヌカイト、32は緑色片岩、33は結晶片岩である。

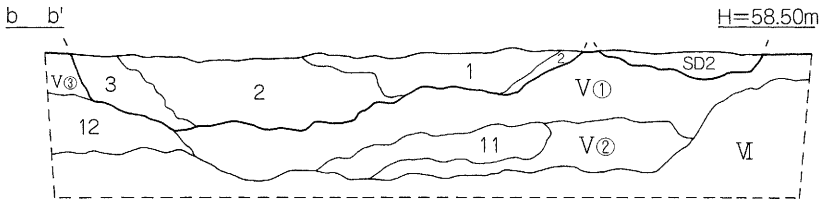
時期：溝内からは弥生時代から中世までの遺物が出土しているが、第Ⅱ層が覆うことや土師器の特徴より、溝の最終埋没時期は13世紀頃と考えられる。



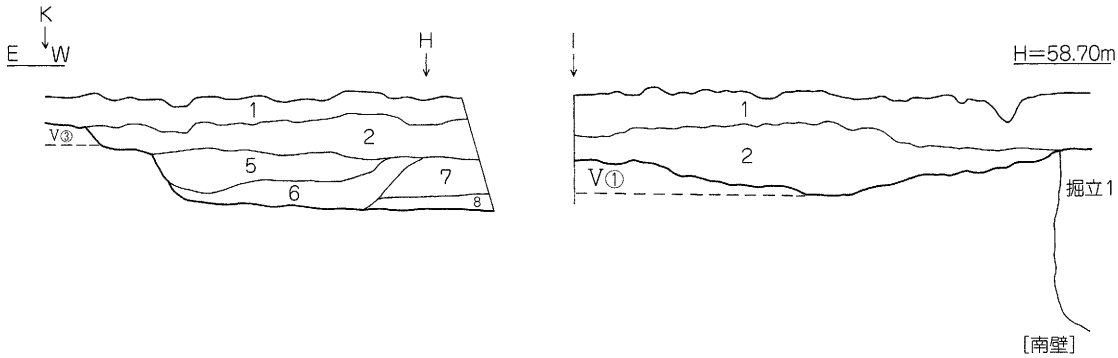
[北壁]



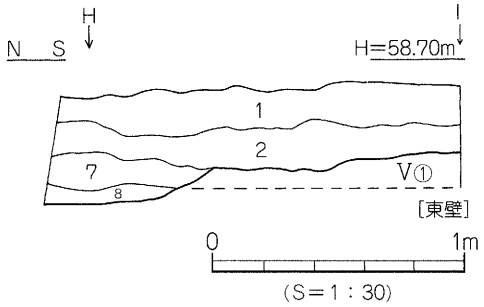
[ベルト①]



[ベルト②]



[南壁]

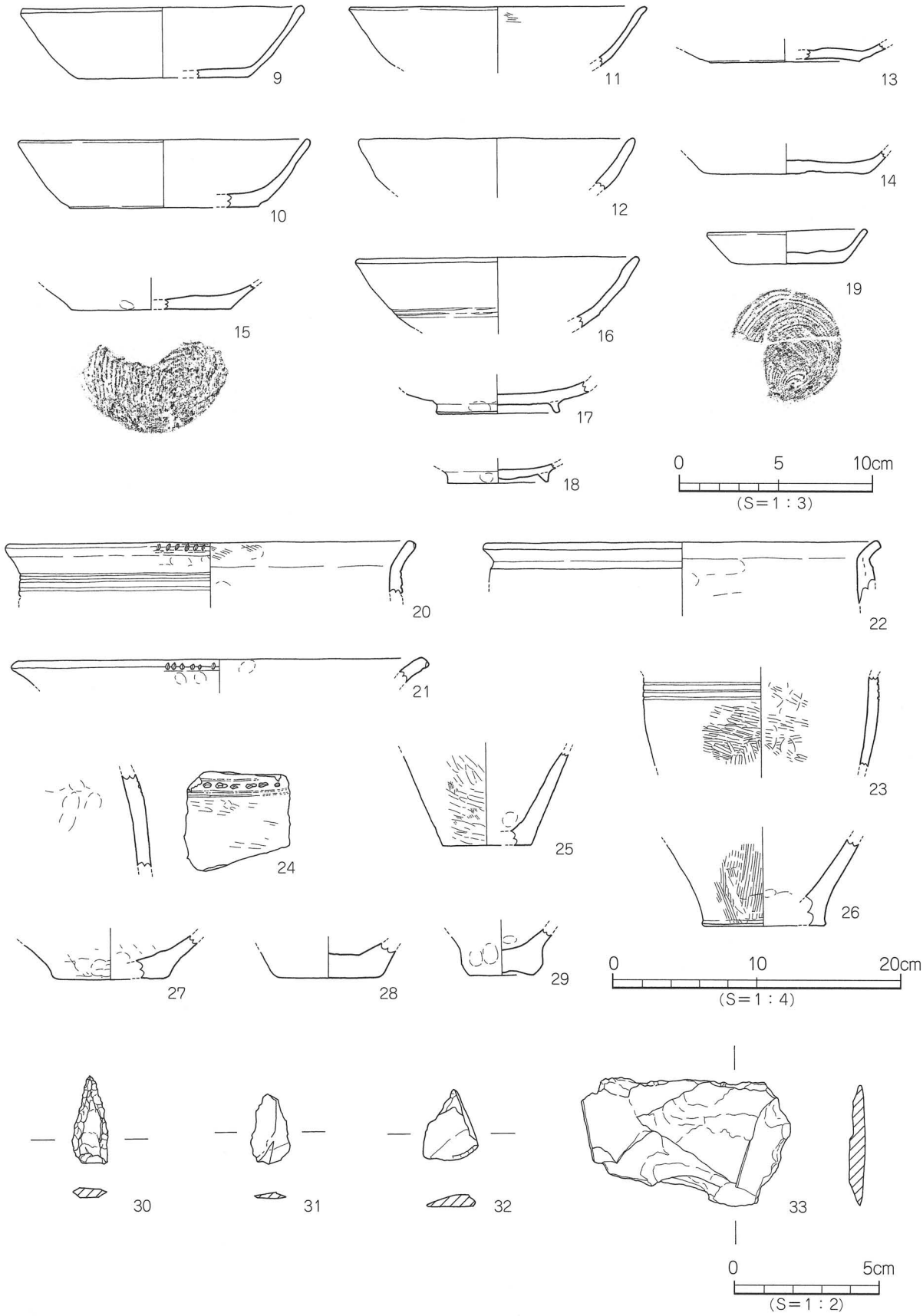


[東壁]

(S＝1：30)

1 黒褐色(10YR3/1)シルト
2 黒褐色(5YR3/1)シルト
3 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質シルトに浅黄色(5Y7/4)シルトが斑点状に混入
4 黒褐色(5YR3/1)シルトに黄色(5Y8/8)シルトがブロック状に少量混入［SD①埋土］
5 黒褐色(5YR3/1)シルトに径1～2cm大の小礫混入 ｝［SD②埋土］
6 灰色(10Y5/1)砂
7 褐灰色(5YR4/1)シルト ｝［SK①埋土］
8 灰褐色(5YR4/2)砂
9 黒褐色(10YR3/1)シルトに灰オリーブ色(5Y5/2)シルトがブロック状に少量混入［SK③埋土］
10 黒褐色(10YR3/1)粘質土［SK②埋土］
11 灰色(10Y5/1)砂に径1～5cm大の円礫含む
12 暗緑灰色(10BG4/1)砂に径1～3cm大の小礫多く含む

第174図　SDI断面図



第175図　SD1出土遺物実測図

ＳＤ２（第171・176図）

調査地西側Ｂ・Ｃ２区で検出した北東－南西方向の溝で、溝北側は試掘調査用トレンチに切られ、溝南側はＳＤ１を切っている。第Ⅴ③層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長2.80ｍ、幅0.45～0.50ｍ、深さは検出面下10㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色を呈する砂質シルト単一層である。溝基底面には凹凸がみられ、北側から南側へ向けて緩やかな傾斜をなす（比高差４㎝）。遺物は埋土中より、土師器片が少量出土した。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第176図）

34は土師器坏の口縁部片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期:時期特定しうる遺物の出土はないが、ＳＤ１に後出することから概ね13世紀以降の溝とする。

ＳＤ４（第171・177図）

調査地中央部Ｃ３区で検出した南北方向の溝で溝北側は消失し、南側は調査区外へ続く。第Ⅴ③層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長3.20ｍ、幅0.50～1.00ｍ、深さは検出面下30㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は四種類に分けられ、上位から１層灰褐色シルト、２層灰褐色シルト（浅黄色シルトがブロック状に混入）、３層オリーブ黒色シルト、４層オリーブ黒色シルト（灰褐色シルトが斑点状に混入）である。溝基底面中央部には径75㎝、深さ14㎝を測る円形状の凹みがあり、さらに溝南側には緩やかな段差が認められる。遺物は１層中より、土師器片や弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第177図）

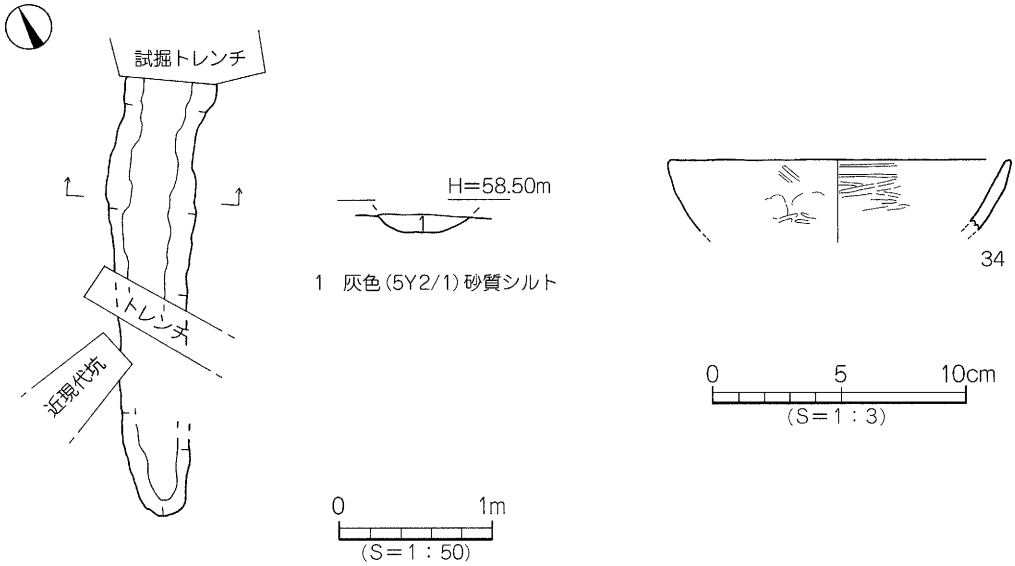
35は土師器坏の底部片で、底部外面に回転糸切り痕が残る。36は弥生土器の壺形土器で、平底を呈し、内外面共にハケメ調整を施す。

時期：時期決定しうる遺物の出土はないが、出土した土師器の特徴より概ね中世、12世紀以降の溝とする。

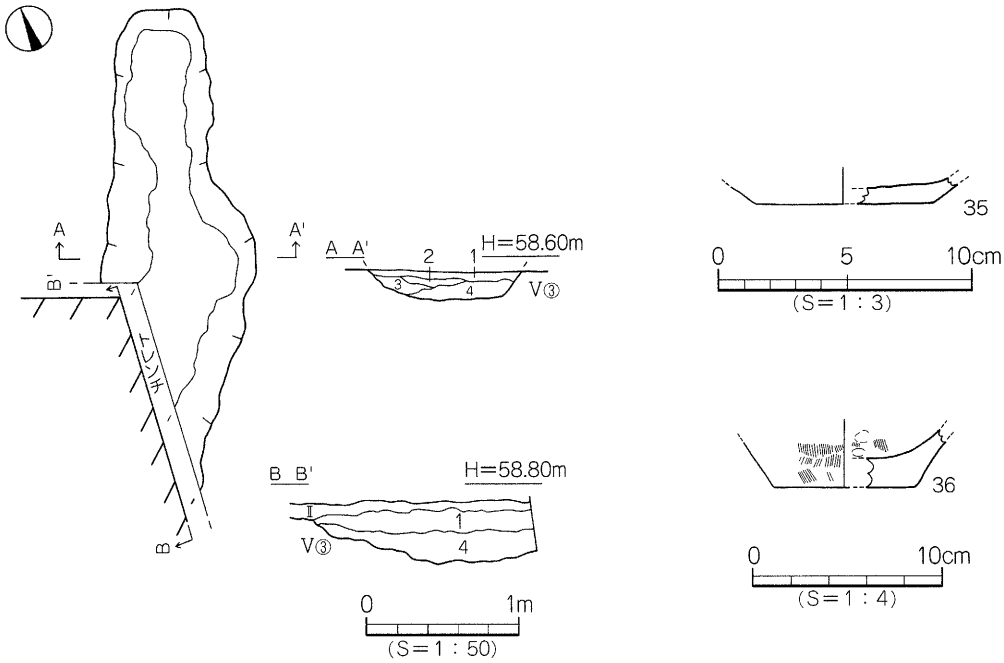
ＳＤ３（第171・178図）

調査地南東部Ｃ４～Ｄ３区で検出した北東－南西方向の溝で、溝南側は柱穴ＳＰ11（埋土：灰黄色土）に切られ、溝両端は調査区外へ続く。第Ⅴ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長7.30ｍ、幅0.40～0.50ｍ、深さは検出面下18㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は二種類あり、上位は淡黄色砂、下位はオリーブ黒色土（黄色シルトがブロック状に少量混入）である。溝基底面には凹凸がみられず、北側から南側へ向けて傾斜をなす（比高差６㎝）。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物はなく時期決定は困難であるが、第Ⅲ②層が溝を覆うことから概ね、古代以前の溝とする。



第176図　SD2測量図・出土遺物実測図



1　灰褐色(5YR4/2)シルト
2　灰褐色(5YR4/2)シルトに浅黄色(5Y7/4)
　シルトがブロック状に混入
3　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト
4　オリーブ黒色(5Y3/1)シルトに灰褐色(5YR4/2)
　シルトが斑点状に混入

第177図　SD4測量図・出土遺物実測図

（3）土　坑

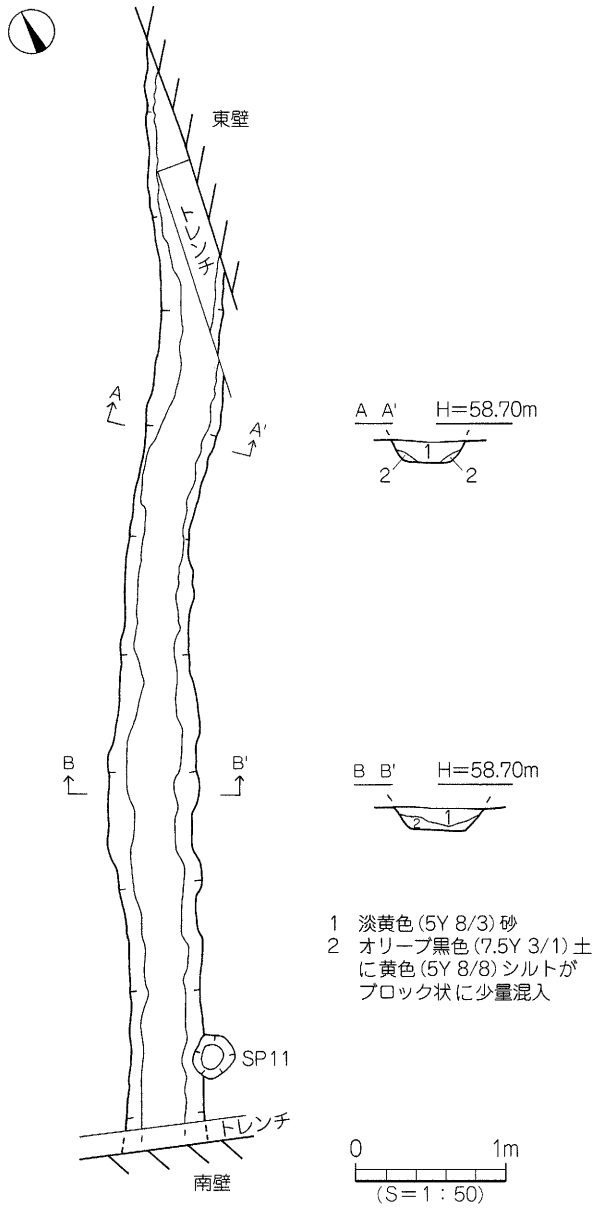
ＳＫ１（第171・179図、図版48）

調査地西側Ｂ１区に位置し、土坑西側は調査区外へ続く。第Ⅴ①層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.40ｍ、南北検出長1.00ｍ、深さは検出面下28㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、南側及び北側壁体は袋状となる。埋土はオリーブ黒色シルトの単一層である。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は弥生土器の甕形土器や壺形土器などの破片が、土坑北側の埋土中位付近に比較的集中して出土した。

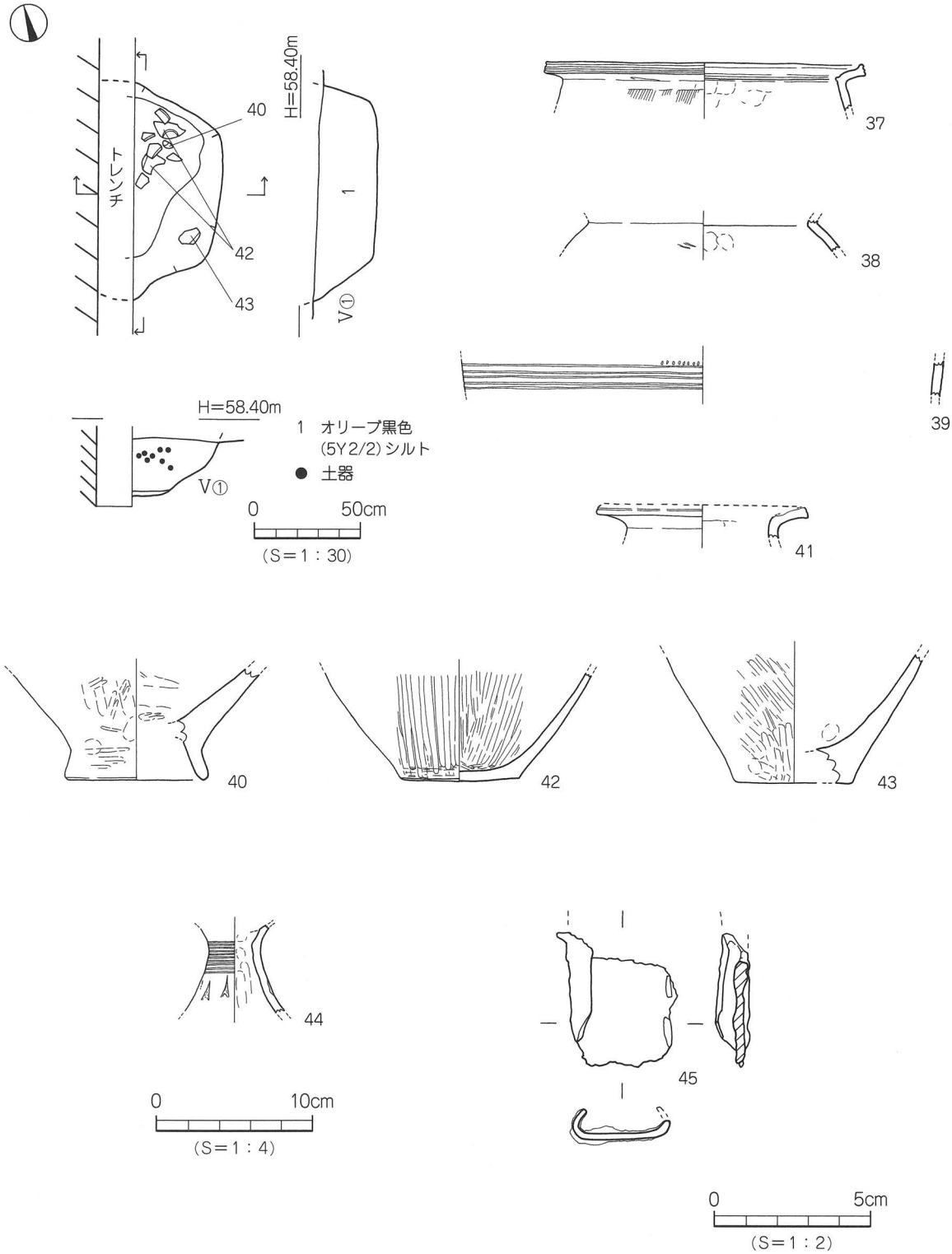
出土遺物（第179図、図版51）

37～44は弥生土器である。37～40は甕形土器である。37は口縁部片で、口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。外面にはハケメ調整を施す。38は胴部片で、内外面共にヨコナデとナデ調整を施す。39は胴部に沈線文５条と刺突文１列を施す。40はくびれをもつ上げ底の底部片で、内外面共にミガキ調整を施す。41～43は壺形土器である。41は口縁部片で、口縁部は大きく外反し、口縁端面には沈線文１条を施す。42は平底の底部。胴下端部外面は布目痕、胴部内外面共に板状工具によるミガキ（板の木目が明瞭にみえる）調整が施される。43は平底で、外面はミガキ調整、内面はナデ調整を施す。44は高坏の脚部片で、外面には５ヶ所以上の矢羽根透かし（未貫通）とヘラ描き沈線文10条を施す。45は鉄斧である。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代中期後半とする。



第178図　SD3測量図



第179図　SK1測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２（第171・180図）

調査地西側Ｂ１区に位置し、土坑南西部は調査区外に続く。第Ⅴ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長0.69 m、南北検出長0.60 m、深さは検出面下66 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は袋状となる。埋土は、黒褐色シルト（黄色シルトがブロック状に混入）である。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片や土師器片が数点出土した。図化しうるものを１点掲載した。

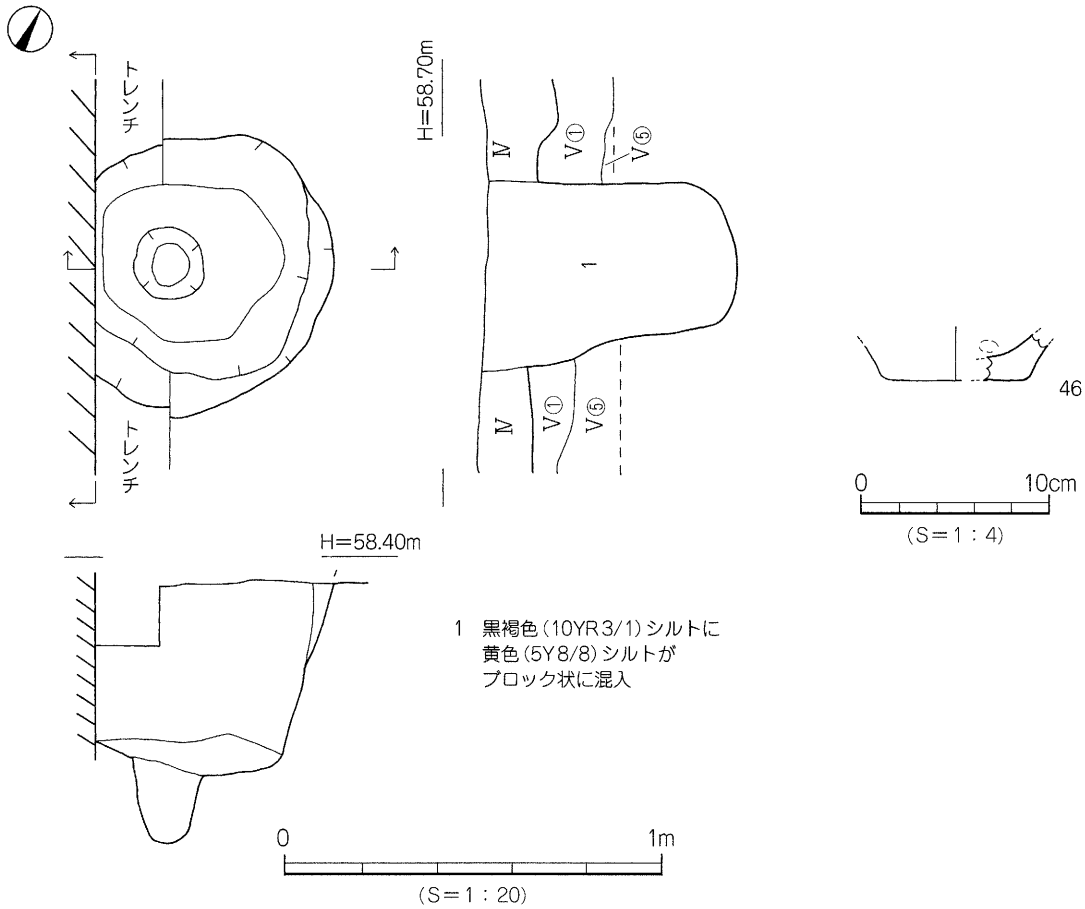
出土遺物（第180図）

46は弥生土器の壺形土器の底部で、平底となる。内外面共にナデ調整を施す。

時期：時期決定しうる遺物の出土はないが、後出する土坑ＳＫ３と埋土が酷似することから、概ね古墳時代後期の遺構とする。

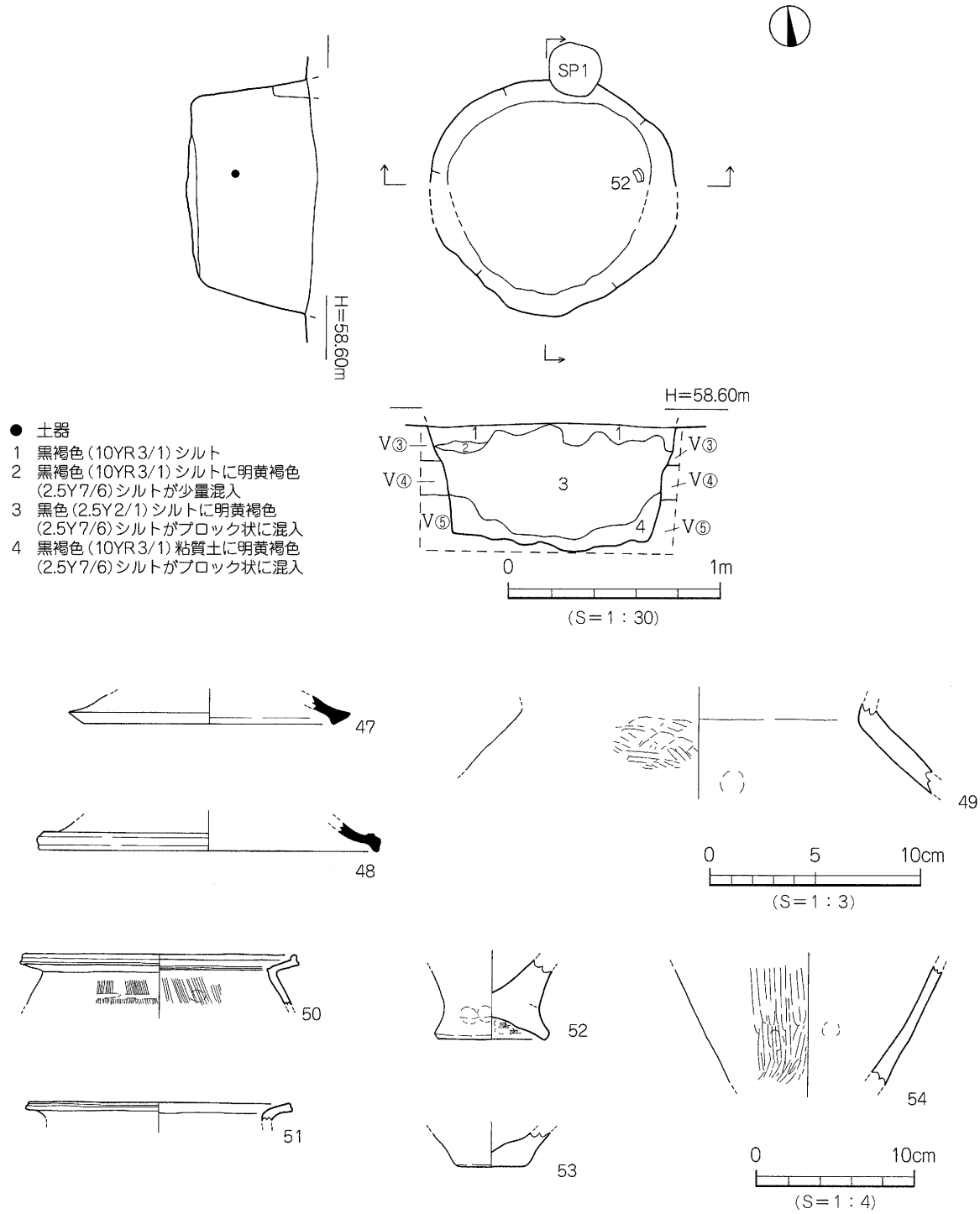
ＳＫ３（第171・181図、図版48）

調査地中央部Ｃ３区に位置し、土坑北部は柱穴ＳＰ１（埋土：灰黄色土）、東側は柱穴ＳＰ８（埋土:灰黄色土）に切られている。第Ⅴ③層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。平面形態は円形を呈し、規模は径1.10～1.17 m、深さは検出面下60 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側



第180図　SK2測量図・出土遺物実測図

及び西側壁体は垂直気味に立ち上がる。埋土は四種類あり、上位から１層黒褐色シルト、２層黒褐色シルト（明黄褐色シルトが少量混入）、３層黒色シルト（明黄褐色シルトがブロック状に混入）、４層黒褐色粘質土（明黄褐色シルトがブロック状に混入）である。土坑基底面には凹凸がみられず、遺物は１層中より、弥生土器や土師器、須恵器の小片が出土した。



第181図　SK3測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第181図、図版51）

47・48は須恵器高坏。47の脚端部は下方に拡張し、外端面で接地する。全体に自然釉が付着する。48の脚端部は下方にわずかに屈曲する。内外面共に回転ナデ調整を施す。49は土師器の甕、50～53は弥生土器の甕形土器。49は胴部小片で、外面にヘラミガキ調整を施す。50は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文１条を施す。内外面共にハケメ調整を施す。弥生時代中期後半。51は口縁端面に凹線文１条を施す。弥生時代中期後半。52・53は底部片で、52はくびれをもつ上げ底、53は平底である。54は壺形土器の底胴部片。弥生時代中期後半。

時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代後期、６世紀後半とする。

（4）柱　穴

調査では、68基の柱穴を検出した。平面形態は円形と楕円形の二種類があり、規模は径0.10～0.90m、深さ３～63cmを測る。柱穴掘り方埋土は三種類あり、埋土別の検出数は以下のとおりである。

埋土①：灰黄色土〔ＳＰ１～９・11・14・16～18・21・23～25・27・29～38・40～42・44・48・49・56・59〕：37基

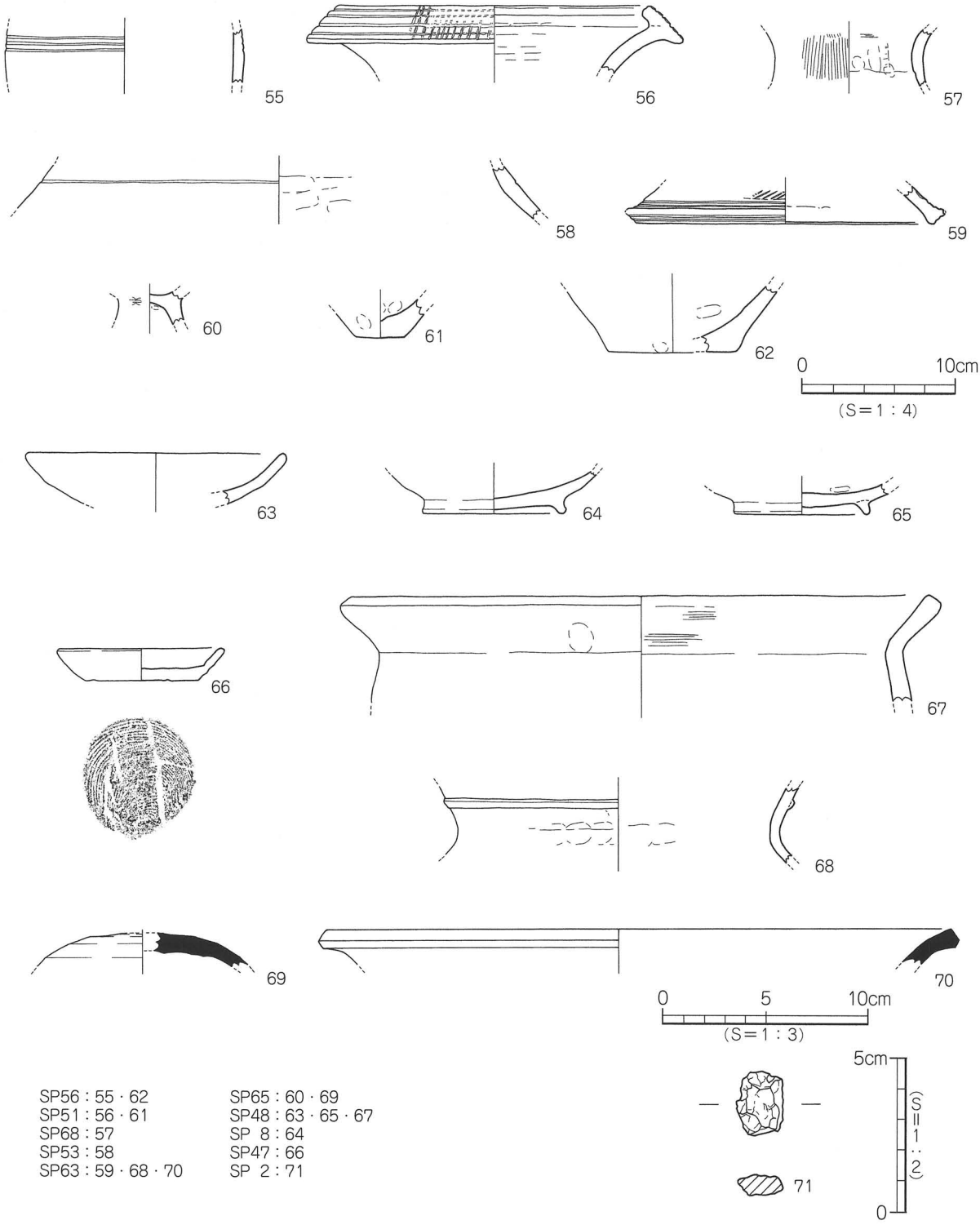
埋土②：褐灰色土〔ＳＰ19・26・39・47・55・60・66・70〕：８基

埋土③：黒褐色土〔ＳＰ10・12・13・15・22・28・43・45・50～54・57・58・61～65・67～69〕：23基

遺物は埋土③柱穴内より、弥生土器片、埋土①・②柱穴内からは土師器片や須恵器片が出土した。

出土遺物（第182図、図版51）

55～62は弥生土器。55は甕形土器の胴部片で、ヘラ描き沈線文３条以上を施す。弥生前期。56～58は壺形土器。56は口縁部片で、凹線文４条とタテ方向の沈線文を施す。口縁端部はヨコナデによる凹み、口縁部内面にはヨコナデ調整を施す。弥生中期後半。57は広口壺の頸部片で、外面はハケメ調整、内面はナデまたはハケメ調整を施す。弥生後期。58は胴部小片で、ヘラ描き沈線文１条を施す。内面はナデ調整を施す。弥生前期。59・60は高坏形土器。59は脚部片で、ヘラ描き沈線文３条と凹線文２条及び刻目を施す。弥生中期後半。60は脚部小片で、内外面共にナデ調整を施す。弥生後期。61は甕形土器の底部片で、内外面共にナデ調整を施す。弥生後期。62は壺形土器の底部片で、内外面共にナデ調整を施す。弥生前期。63～68は土師器。63は坏の口縁部片で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。外面にヨコナデ調整を施す。64・65は椀の底部片で、64の底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。外面にヨコナデ調整を施す。11～12世紀。66は皿で、口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は丸い。底部は平底で、底部切り離しは回転糸切り技法による。内外面共にヨコナデ調整を施す。13～14世紀。67は鍋の口縁部片で口縁部は外反し、煤が付着する。口縁部外面はナデ、口縁部内面にはハケメ調整を施す。13世紀。68は甕の頸部小片で、外面にヨコナデ調整を施す。６世紀。69・70は須恵器。69は坏蓋片で、内外面共に回転ナデ調整を施す。６世紀。70は甕の口縁部小片で、口縁部は方形状に肥厚する。内外面共に回転ナデ調整を施す。７世紀。71は鉄滓である。



SP56：55・62
SP51：56・61
SP68：57
SP53：58
SP63：59・68・70
SP65：60・69
SP48：63・65・67
SP 8：64
SP47：66
SP 2：71

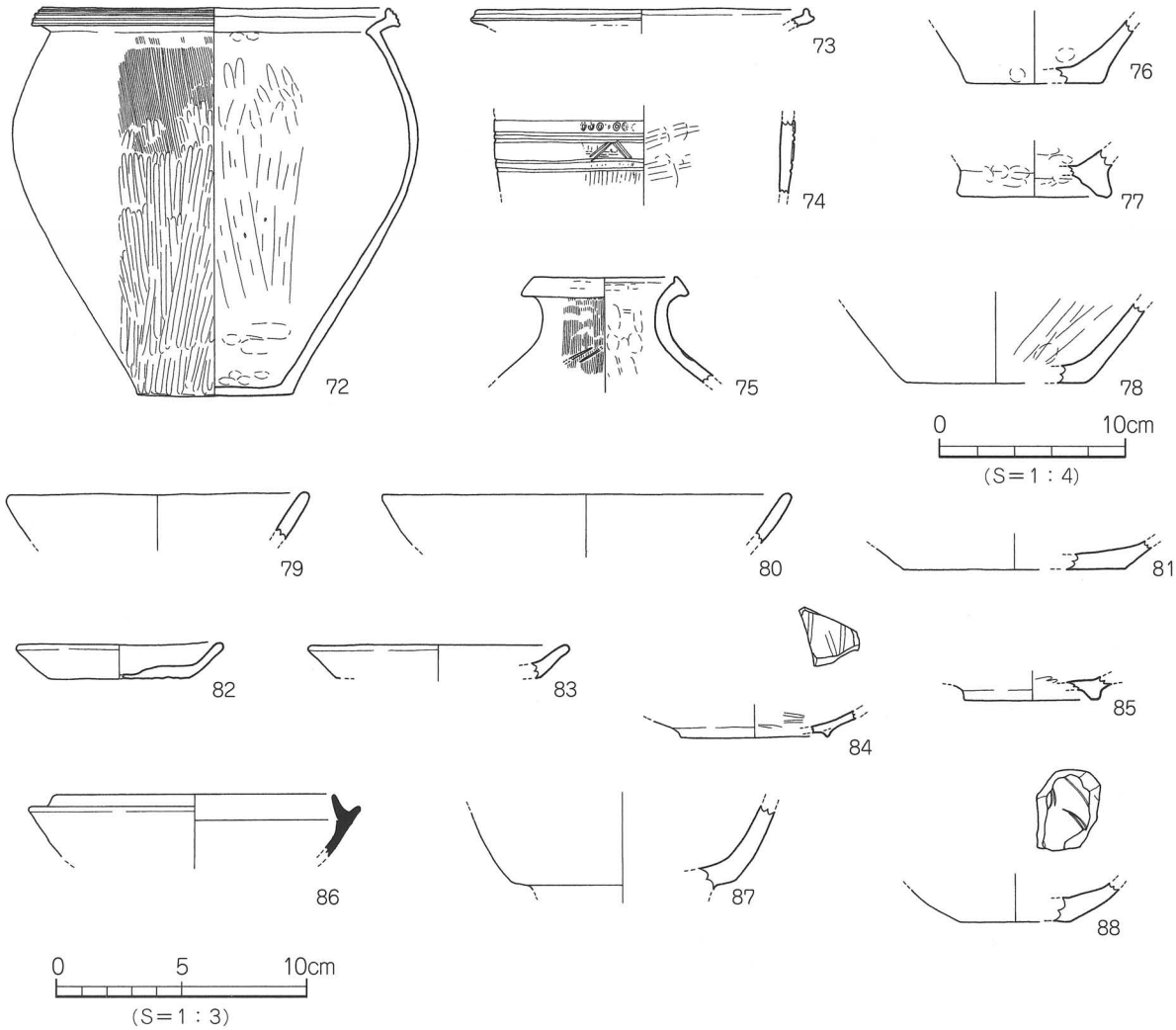
第182図　柱穴出土遺物実測図

（5）その他の遺構と遺物

調査では、包含層掘り下げ時に遺物が出土した。主に第Ⅲ層や第Ⅳ層からの出土であるが、明確な出土地が確定できなかったため、ここでは一括して、包含層出土遺物として実測図を掲載する。

包含層出土遺物（第183図、図版51）

72～78は弥生土器。72～74は甕形土器。72は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に４条の凹線文を施す。底部は平底で、外面は胴部上位にハケメ調整、胴部下位にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。弥生中期後半。73は口縁部小片で、口縁端面に１条の凹線文を施す。内外面共にヨコナデ調整を施す。弥生中期後半。74は胴部片で、ヘラ描き沈線文１～２条、竹管文１列及び、２条の山形文を施す。弥生前期。75は壺形土器の口頸部片で、頸部に刻目列点文を施す。76・77は甕形土器の底部片で76は平底、77は上げ底である。78は壺形土器の底部片で、内外面共にナデ調整を施す。弥生中期後半。79～83は土師器。79・80は坏の口縁部片で、口縁端部は丸い。内外面共にヨコナ



第183図　包含層出土遺物実測図

デ調整を施す。81は坏の底部片。平底で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。また、スノコ痕が顕著にみられる。内外面共にヨコナデ調整を施す。82・83は皿で、82は口縁部がやや外反し、口縁端部は丸い。底部は平底で、底部切り離しは回転糸切り技法による。13世紀。83は口縁部片。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。内外面共にヨコナデ調整を施す。84・85は瓦器椀で、底部内面に暗文を施す。12～13世紀。86は須恵器坏身で、たちあがりは低く内傾し、端部は丸く仕上げる。内外面共に回転ナデ調整を施す。６世紀末～７世紀前半。87・88は青磁碗の底部小片で、胎土は灰色を呈し、釉調は淡緑色となる。13～14世紀。

４．まとめ

調査は、古墳時代の集落範囲や構造解明を主目的として実施した。調査の結果、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認した。以下、時代別に内容を説明する。

弥生時代：遺構は、土坑ＳＫ１を検出した。径１ｍ前後を測る楕円形土坑で、土坑内からは弥生時代中期後半に時期比定される甕形土器や壺形土器、高坏形土器の破片がまとまって出土した。出土状況から、土坑内に土器を廃棄したものと推測される。周辺では、調査地北方にある平井遺跡３次調査において該期の土坑が検出されており、ＳＫ１の検出は、弥生時代中期集落が調査地南方まで広がっていることを示唆する資料といえよう。このほか、中世の溝や柱穴及び包含層中より、弥生時代前期や後期の土器片が数点ではあるが出土している。

古墳時代：遺構は、掘立柱建物１棟と土坑２基を検出した。掘立１は３基の柱穴を検出した建物で、３基の柱穴は柱穴埋土や出土遺物が類似することや、柱穴の配置などから建物柱穴と判断した。柱穴埋土は黒褐色シルトを基調とし、径15㎝大の柱痕を確認した。また、２基の土坑（ＳＫ２・３）からは弥生土器や須恵器、土師器が出土した。掘立１や土坑は出土遺物より古墳時代後期後半、６世紀後半頃の遺構と考えられる。周辺の遺跡では、平井遺跡４次調査や５次調査において同時期の竪穴住居や掘立柱建物などが検出されていることから、調査地周辺には広範囲にわたり古墳時代後期集落が営まれていたことがわかる。

古代～中世：古代では溝１条（ＳＤ３）、中世では溝３条（ＳＤ１・２・４）を検出した。ＳＤ３は時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位より概ね古代の溝と考えられる。一方、ＳＤ１・２・４は出土遺物より12～13世紀代の溝と考えられ、このうちＳＤ１は幅2.8ｍを測る大型溝で、溝内からは弥生時代前期から中世までの遺物が混在して出土した。溝の性格は定かではないが、集落を区画するためのものではなく、水田や畑耕作に伴う水路的な役割をもつ溝と考えられる。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 111　掘立柱建物一覧

掘立	地　区	規 模	方位	桁行長（m）	梁行長（m）	柱穴埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	B２～C１	２間以上	南北	5.4	—	黒褐色シルト 他	弥生・土師 須恵	６世紀後半	

表 112　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模（m） 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B３～C１	レンズ状	10.00 × 2.80 × 0.34	北東－南西	黒褐色シルト 他	弥生・土師 ・須恵・石	13 世紀	
2	B・C２	皿状	2.80 × 0.50 × 0.10	北東－南西	灰色砂質シルト	土師	中世	
3	C４～D３	皿状	7.30 × 0.50 × 0.18	北東－南西	淡黄色砂 他	—	古代以前	
4	C３	レンズ状	3.20 × 1.00 × 0.30	南北	灰褐色シルト 他	弥生 土師	中世	

表 113　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B１	楕円形	逆台形状	(1.00) × (0.40) × 0.28	オリーブ黒色シルト	弥生	弥生中期後半	
2	B１	円形	逆台形状 （一部袋状）	0.69 × (0.60) × 0.66	黒褐色シルト （黄色シルト混入）	弥生・土師	６世紀後半	
3	C３	円形	逆台形状	1.17 × 1.10 × 0.60	黒褐色シルト 他	弥生・土師 須恵	６世紀後半	

表 114　柱穴一覧　（1）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	出土遺物	備　考
1	C３	円形	0.24 × 0.22 × 0.08	灰黄色土	土師・須恵	SK5 を切る
2	C３	円形	0.26 × 0.24 × 0.12	灰黄色土	土師・須恵	
3	C４	円形	0.26 × 0.24 × 0.10	灰黄色土	土師・須恵	
4	C４	円形	0.28 × 0.26 × 0.03	灰黄色土	土師・須恵	
5	C３	楕円形	0.32 × 0.24 × 0.21	灰黄色土	土師・須恵	

柱穴一覧 (2)

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模　(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	備　考
6	C 3	楕円形	(0.40) × 0.20 × 0.16	灰黄色土	土師・須恵	
7	C 2	円形	0.28 × 0.26 × 0.10	灰黄色土	土師・須恵	
8	C 3	円形	0.23 × 0.22 × 0.08	灰黄色土	土師・須恵	
9	C 4	円形	0.30 × 0.30 × 0.24	灰黄色土	土師・須恵	
10	E 4	円形	0.32 × 0.32 × 0.08	黒褐色土	弥生	
11	D 3	円形	0.28 × 0.26 × 0.07	灰黄色土	土師・須恵	SD3を切る
12	D 3	円形	0.24 × 0.23 × 0.04	黒褐色土	弥生	
13	D 3	楕円形	(0.53) × 0.46 × 0.13	黒褐色土	弥生	
14	D 3	楕円形	0.90 × 0.56 × 0.13	灰黄色土	土師・須恵	
15	D 3	楕円形	0.40 × (0.22) × 0.05	黒褐色土	弥生	
16	D 3	楕円形	0.50 × 0.40 × 0.07	灰黄色土	土師・須恵	
17	D 3	円形	0.38 × 0.38 × 0.06	灰黄色土	土師・須恵	
18	D 3	楕円形	0.32 × 0.27 × 0.06	灰黄色土	土師・須恵	
19	D 4	円形	0.32 × 0.30 × 0.13	褐灰色土	土師・須恵	
20	欠　番					
21	D 3	円形	0.28 × 0.28 × 0.13	灰黄色土	土師・須恵	
22	D 3	円形	0.26 × 0.26 × 0.05	黒褐色土	弥生	
23	D 3	円形	0.27 × 0.24 × 0.17	灰黄色土	土師・須恵	
24	D 3	楕円形	0.50 × 0.34 × 0.13	灰黄色土	土師・須恵	
25	D 3	円形	0.26 × 0.26 × 0.31	灰黄色土	土師・須恵	
26	D 3	円形	(0.22) × 0.24 × 0.10	褐灰色土	土師・須恵	
27	D 3	円形	0.18 × 0.18 × 0.16	灰黄色土	土師・須恵	
28	D 4	楕円形	0.28 × 0.23 × 0.10	黒褐色土	弥生	
29	C 3	円形	0.16 × 0.16 × 0.11	灰黄色土	土師・須恵	
30	C 3	円形	0.33 × 0.32 × 0.04	灰黄色土	土師・須恵	
31	C 3	楕円形	0.48 × 0.38 × 0.04	灰黄色土	土師・須恵	
32	C 3	円形	0.26 × 0.26 × 0.07	灰黄色土	土師・須恵	
33	C 3	円形	0.17 × 0.16 × 0.10	灰黄色土	土師・須恵	
34	C 4	円形	0.16 × 0.16 × 0.04	灰黄色土	土師・須恵	
35	C 4	円形	0.30 × 0.28 × 0.21	灰黄色土	土師・須恵	
36	C 4	円形	0.22 × 0.20 × 0.24	灰黄色土	土師・須恵	

柱穴一覧　　（3）

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模　（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	出土遺物	備　考
37	C４	円形	0.21 × 0.21 × 0.06	灰黄色土	土師・須恵	
38	C４	円形	0.24 × 0.23 × 0.12	灰黄色土	土師・須恵	
39	C４	円形	0.26 × (0.24) × 0.19	褐灰色土	土師・須恵	
40	B４	円形	0.32 × 0.32 × 0.27	灰黄色土	土師・須恵	
41	C４	円形	0.19 × 0.18 × 0.11	灰黄色土	土師・須恵	
42	C３	円形	0.18 × 0.18 × 0.15	灰黄色土	土師・須恵	
43	B・C３	円形	0.40 × 0.38 × 0.15	黒褐色土	弥生	
44	C３	円形	0.25 × 0.24 × 0.04	灰黄色土	土師・須恵	
45	B３・４	円形	0.36 × (0.33) × 0.23	黒褐色土	弥生	
46	欠　番					
47	C３	楕円形	0.80 × 0.70 × 0.22	褐灰色土	土師・須恵	
48	B・C３	円形	0.58 × 0.53 × 0.13	灰黄色土	土師・須恵	
49	B３	円形	0.32 × 0.29 × 0.12	灰黄色土	土師・須恵	SD1 を切る
50	C２	円形	0.30 × 0.26 × 0.26	黒褐色土	弥生	
51	C２	楕円形	0.60 × (0.12) × 0.12	黒褐色土	弥生	
52	C２	円形	0.12 × 0.11 × 0.09	黒褐色土	弥生	
53	B２	円形	0.46 × 0.46 × 0.40	黒褐色土	弥生	SD1 埋土中位にて検出
54	B２	円形	0.20 × 0.20 × 0.23	黒褐色土	弥生	
55	B２	円形	0.28 × (0.20) × 0.10	褐灰色土	土師・須恵	
56	B２	円形	0.48 × 0.46 × 0.36	灰黄色土	土師・須恵	
57	B２・３	楕円形	0.70 × (0.18) × 0.22	黒褐色土	弥生	
58	B２	円形	0.40 × (0.20) × 0.12	黒褐色土	弥生	
59	B２	円形	0.16 × (0.10) × 0.08	灰黄色土	土師・須恵	
60	B２	円形	0.32 × (0.12) × 0.11	褐灰色土	土師・須恵	掘立１柱穴を切る
61	A・B２	円形	0.50 × (0.32) × 0.60	黒褐色土	弥生	
62	B２	楕円形	0.36 × 0.28 × 0.20	黒褐色土	弥生	
63	B１	円形	0.70 × 0.66 × 0.63	黒褐色土	弥生	
64	B２	円形	0.26 × 0.26 × 0.15	黒褐色土	弥生	
65	B１	円形	0.58 × 0.55 × 0.52	黒褐色土	弥生	
66	B１	円形	0.32 × 0.32 × 0.24	褐灰色土	土師・須恵	
67	B１	円形	0.32 × 0.32 × 0.30	黒褐色土	弥生	

柱穴一覧 (4)

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模　(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	備　考
68	B 1	円形	0.52 × 0.50 × 0.29	黒褐色土	弥生	
69	C 2	楕円形	0.38 × 0.26 × 0.08	黒褐色土	弥生	SD1 底面にて検出
70	C 2	円形	0.24 × 0.24 × 0.15	褐灰色土	土師・須恵	

表 115　掘立 1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	蓋	残高　4.4	短頸壺の蓋。内湾して下がる口縁部。端部は外反する。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP ①	50
2	高坏	口径 (12.4) 残高　3.0	無蓋高坏の坏部。体部に凸線２条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP ③	
3	高坏	底径 (12.6) 残高　1.1	脚端部は上方に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎	SP ①	
4	甕	口径 (14.0) 残高　6.1	内湾する口縁部。口縁端部は内傾する平坦面をもつ。胴部外面に斜線文３条を施す。	㊥ナデ ㊤ハケ (6 本 / cm)	㊥ナデ ㊤ハケ・ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1 ～ 4) 金 ◎	SP ①	50
5	甕	残高　3.3	胴部片。	㊤ヨコナデ ㊤ナデ	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎	SP ②	
6	甕	残高　3.6	胴部小片。	㊤ハケ ㊤ミガキ	ヨコナデ	暗茶褐色 茶色	石・長 (1 ～ 2) ◎	SP ①	
7	壺	残高　2.0	頸部に貼付凸帯文２条を施す。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	密 ◎	SP ③	
8	壺	底径 (9.2) 残高　1.5	平底の小片。	ナデ マメツ	ヨコナデ マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎	SP ③	

表 116　SD1 出土遺物観察表　土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
9	坏	口径 (14.3) 器高　3.7	口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。平底。	マメツ	ヨコナデ (マメツ)	乳茶色 乳茶色	密 ◎		50
10	坏	口径 (14.7) 器高　3.4	口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く仕上げる。底部切り離しは回転糸切り技法による。平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密 ◎		
11	坏	口径 (15.2) 残高　3.0	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ・ハケ？ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎	黒斑	
12	坏	口径 (14.0) 残高　2.7	直立する口縁部。口縁端部は尖り気味となる。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
13	坏	底径　(7.8) 残高　0.9	上げ底の底部。底部切り離しは回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	乳橙褐色 乳橙褐色	密 ◎		
14	坏	底径　(8.4) 残高　1.2	上げ底の底部。底部切り離しは回転糸切り技法による。	ヨコナデ	マメツ (ナデ)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1) ◎		
15	坏	底径　(8.2) 残高　1.2	平底。底部切り離しは回転糸切り技法による。	マメツ	マメツ	乳黄白色 乳黄白色	密 ○		50
16	椀	口径 (14.6) 残高　3.6	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。体部に沈線文(工具痕)あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	密 ◎		
17	椀	底径　(6.4) 残高　1.6	断面三角形状の高台を貼付。	ヨコナデ	ナデ	乳茶色 灰褐色	密 ◎		
18	椀	口径　(5.2) 残高　0.9	断面三角形状の高台を貼付。	ナデ	ナデ ヨコナデ	淡乳橙褐色 淡乳橙褐色	密 ◎		50
19	皿	口径　8.2 器高　1.7	体部は直立し、口縁端部は丸く仕上げる。底部に回転糸切り痕とスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡橙褐色	密 ◎		50
20	甕	口径 (28.4) 残高　3.7	折曲口縁。口縁端面に刻目文、胴部にヘラ描き沈線文３条以上を施す。	ヨコナデ	ハケ→ナデ ナデ (マメツ)	茶褐色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		50
21	甕	口径 (27.8) 残高　1.7	折曲口縁。口縁端面に刻目文を施す。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
22	甕	口径 (27.0) 残高　4.3	折曲口縁。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 淡黄褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎	黒斑	
23	甕	残高　6.1	胴部にヘラ描き沈線文３条を施す。	ミガキ	ミガキ→ナデ	乳茶色 乳白茶色	石・長 (1 ～ 2) ◎	煤付着	
24	壺	残高　6.2	胴部にヘラ描き沈線文３条と刺突文を施す。	マメツ (ミガキ・ナデ)	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		50
25	甕	底径 (6.1) 残高　6.3	平底。	ミガキ (マメツ) ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		

SD1 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	甕	底径 (8.5) 残高 5.8	平底。	マメツ(ナデ) ヨコナデ	ナデ	灰黄褐色 灰褐色	石・長(1～2) ◎		
27	壺	底径 (8.0) 残高 3.0	平底。	マメツ (ヨコナデ)	ナデ	桃茶色 桃茶色	石・長(1～2) ◎	46と同一個体	
28	壺	底径 (7.0) 残高 2.4	平底。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
29	甕	底径 4.4 残高 3.1	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	橙褐色 灰褐色	石・長(1～3) 金 ◎		

表 117　SD1 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
30	打製石鏃	完形	サヌカイト	3.0	1.2	0.3	1.3		50
31	剥片	—	サヌカイト	2.4	1.3	0.2	0.6		50
32	剥片	—	緑色片岩	2.4	1.7	0.4	1.5		50
33	剥片	—	結晶片岩	4.3	7.0	5.0	16.5	未成品(荒割り段階)	50

表 118　SD2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
34	坏	口径 (13.2) 残高 2.8	体部は内湾し、口縁端部は尖る。	ナデ・ミガキ (マメツ)	ミガキ	褐色 黒褐色	密 ◎		

表 119　SD4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
35	坏	底径 (7.0) 残高 1.0	平底。底部切り離しは回転糸切り技法による。	ヨコナデ (マメツ)	ナデ	乳白色 暗茶褐色	密 ◎		
36	壺	底径 (7.3) 残高 3.1	平底。小片。	ハケ (10～11本/cm)	ナデ・ハケ	褐色 黒色	石・長(1) ◎	黒斑	

表 120　SK1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
37	甕	口径 (20.3) 残高 3.0	口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。	ヨコナデ ハケ(6本/cm)	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1) ◎		51
38	甕	残高 2.1	胴部片。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	橙褐色 淡黄褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	
39	甕	残高 2.1	ヘラ描き沈線文５条と刺突文１列を施す。	ナデ	ナデ	茶色 暗褐色	石・長(1～2) ◎		
40	甕	底径 (8.6) 残高 7.0	くびれをもつ上げ底。小片。	ナデ・ミガキ (マメツ)	ナデ・ミガキ (マメツ)	橙褐色 橙褐色	石・長(1) ◎		
41	壺	残高 2.0	口縁部は大きく外反し、口縁端面に沈線文１条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰褐色 灰褐色	石・長(1～2) ◎		
42	壺	底径 7.7 残高 6.9	平底。胎土中に赤色酸化土粒を含む。	ナデ ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	51
43	壺	底径 (7.7) 残高 8.2	平底。胎土中に赤色酸化土粒を含む。	ミガキ ナデ	ナデ	橙褐色 灰褐色	石・長(1～5) 金 ◎		
44	高坏	残高 5.5	５ヶ所以上の矢羽根透かし(未貫通)と、ヘラ描き沈線文10条を施す。	マメツ	ナデ	褐橙色 褐橙色	長(1) ◎		51

表 121　SK1 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
45	鉄斧	1／3	鉄	4.3	3.8	0.6	13.1		51

表 122　SK2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
46	壺	底径 (7.7) 残高 2.4	平底。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～2) 金 ◎	27と同一個体	

表 123　SK3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
47	高坏	底径 (11.7) 残高 1.8	脚端部は下方に拡張し、外端面が接地する。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰褐色 黒灰褐色	密 ◎	自然釉	51
48	高坏	底径 (15.8) 残高 1.3	脚端部は下方にわずかに屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○		51
49	甕	残高 4.2	胴部小片。	ナデ・ミガキ	ナデ	明橙色 灰褐色	石・長(1～3) ◎		
50	甕	口径 (17.0) 残高 3.1	口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。小片。	ヨコナデ ハケ(9～10本/cm)	ナデ ハケ(5～6本/cm)	黒褐色 褐色	長(1) ◎	黒斑	51
51	甕	口径 (16.4) 残高 1.1	口縁端面に凹線文を施す。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	長(1) ◎		
52	甕	底径 (6.6) 残高 5.0	くびれの上げ底。	マメツ ナデ	ナデ ハクリ	橙黄色 淡黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	51
53	甕	底径 (4.4) 残高 2.1	平底。小片。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡灰褐色	長(1) ◎	黒斑	
54	壺	残高 7.5	底胴部片。	ミガキ	ナデ	灰色 橙褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	

表 124　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
55	甕	残高 3.4	ヘラ描き沈線文3条以上あり。	マメツ (ミガキ)	ナデ	乳茶色 淡褐色	石・長(1～2) 金 ◎	SP56	
56	壺	口径 (20.0) 残高 4.4	凹線文4条とタテ方向の沈線文を施す。口縁端部はヨコナデによる凹みがある。	ヨコナデ・ヨコハケ (ハクリ・マメツ)	ヨコナデ	淡乳茶色 淡乳茶色	石・長(1～5) 金 ◎	SP51	
57	壺	残高 3.6	広口壺の頸部小片。	ハケ (5～6本/cm)	ナデ・ハケ？	褐色 褐色	石・長(1～2) 金 ◎	SP68	
58	壺	残高 3.4	胴部小片。ヘラ描き沈線文1条あり。	マメツ	マメツ(ナデ)	黄褐色 黒色	石・長(1～3) ◎	SP53 黒斑	
59	高坏	底径 (19.2) 残高 2.4	ヘラ描き沈線文3条と凹線文2条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色 黄茶色	石・長(1～2) ◎	SP63 黒斑	
60	高坏	残高 2.1	脚部小片。	ヨコナデ ナデ(マメツ)	ナデ	淡橙色 淡黒色	石・長(1) ◎	SP65 黒斑？	
61	甕	底径 (3.2) 残高 2.5	平底。	ナデ	ナデ	暗茶色 淡茶色	石・長(1～2) 金 ◎	SP51	
62	壺	底径 (8.4) 残高 4.3	平底。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～4) ◎	SP56	
63	坏	口径 (12.4) 残高 2.4	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳白橙色	密 ◎	SP48	
64	椀	底径 (6.8) 残高 2.0	底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法による。	ヨコナデ	マメツ	淡黄乳色 淡黄乳色	密 ◎	SP8	
65	椀	底径 (6.4) 残高 1.5	断面三角形状の貼付高台。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	密 ○	SP48	
66	皿	底径 5.4 残高 1.5	口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は丸い。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎	SP47	
67	鍋	口径 (28.0) 残高 5.1	口縁部はやや膨らみをもつ。小片。	ヨコナデ ナデ	ハケ(マメツ)	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1～6) ◎	SP48 煤付着	51
68	甕	残高 3.6	頸部に貼付凸帯文1条あり。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ	乳褐色 乳灰褐色	石(1～3) ◎	SP63	
69	坏蓋	残高 1.6	扁平な天井部。小片。	㊦回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 灰褐色	密 ◎	SP65	
70	甕	口径 (32.2) 残高 1.5	口縁端部は、方形状に肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密 ○	SP63	

表 125　柱穴出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
71	鉄滓	—	鉄	2.1	1.5	0.7	3.6	SP2	

表126　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
72	甕	口径 (18.5) 器高 25.5	口縁端部は上下に拡張し、口縁端面に凹線文４条を施す。平底。	ヨコナデ・ハケ ミガキ	ナデ ケズリ	橙色 淡褐色	長(1) ◎	黒斑	51
73	甕	口径 (17.6) 残高 0.9	口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文１条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
74	甕	残高 3.8	ヘラ描き沈線文１～２条、竹管文１列、山形文２条を施す。	ミガキ	ナデ→ミガキ	黒褐色 暗黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	
75	壺	口径 (7.5) 残高 5.7	口縁端部は上下方に拡張し、頸部に刻目列点文を施す。	マメツ ハケ	ヨコナデ ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～4) 金 ◎		
76	甕	底径 (7.2) 残高 3.4	平底。	ナデ	ナデ	明橙色 灰褐色	石・長(1) ◎		
77	甕	底径 (8.2) 残高 2.6	上げ底。	ヨコナデ (マメツ)	ナデ	乳黄茶色 黒色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
78	壺	底径 (9.5) 残高 4.3	平底。	マメツ ナデ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
79	坏	口径 (12.0) 残高 1.8	体部は直立し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
80	坏	口径 (16.2) 残高 2.0	体部は内湾し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
81	坏	底径 (8.9) 残高 1.1	平底。底部の切り離しは回転糸切り技法による。スノコ痕が顕著。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳褐色	密 ◎		
82	皿	口径 (8.0) 器高 1.4	口縁部は外反し、端部は丸い。底部は平底で、底部切り離しは、回転糸切り技法による。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	淡乳茶色 淡乳茶色	密 ◎		
83	皿	口径 (10.1) 残高 1.3	口縁部は外反し、端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白黄色 乳白黄色	密 ◎		
84	椀	底径 (5.8) 残高 1.0	瓦器椀の底部で、内面に暗文を施す。	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	灰色 灰色	密 ◎		
85	椀	底径 (5.6) 残高 0.9	瓦器椀の底部で、底部内面に暗文を施す。	マメツ ナデ	ミガキ？ (マメツ)	灰白色 灰白色	密 ◎		
86	坏身	口径 (11.1) 残高 2.5	たちあがりは低く内傾し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
87	碗	残高 3.3	底胴部片。	施釉	施釉	淡緑色 淡緑色	密 ◎	胎土：灰色	
88	碗	底径 (4.4) 残高 1.6	底部内面に文様あり。	施釉	施釉	淡緑色 淡緑色	密 ◎	胎土：灰色	

第９章

平井遺跡９次調査

第９章　平井遺跡９次調査

１．調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年１月24日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道小野160号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）により、小野160号線に関連する発掘調査は、平成18年度から平成20年５月までに６度実施され（平井遺跡３次～８次調査）、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。今回、発掘調査を実施した調査地（松山市平井町甲3131番１の一部）は申請地の南端にあり、国道11号線バイパス線に隣接する。調査地内の試掘調査は、2007（平成19）年11月27日に実施した。その結果、地形の落ち込みを検出し、遺物は古代から中世の土師器片と須恵器片が出土した。試掘調査の結果を受け、文化財課と道路建設課の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、道路工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、文化財課の指導のもと、調査地内における古墳時代の集落構造解明を主目的とし、2008（平成20）年６月２日より本格調査を実施した。

（２）調査の経緯

調査は、2008（平成20）年６月２日から2008（平成20）年６月30日まで屋外調査を実施した。その後、７月１日から埋文センター内にて、出土遺物の整理や概要報告書の作成を実施した。以下、作業工程を略記する。

2008（平成20）年６月２日、調査を開始し、現場の安全対策をする。６月５日、重機で第Ⅲ層上面までを掘削する。６月６日、株式会社ＧＩＳ四国に４級基準点測量の設置業務を委託する。６月７日、第Ⅲ層上面の精査を行い、遺構検出状況写真を撮る。６月９日より遺構の掘り下げ、及び遺構や遺物の測量をする。６月26日、遺構完掘状況写真を撮影し、測量･記録作業を終了する。６月29日、一般市民対象の現地説明会を開催し、40名の参加者を得た。６月30日、道具を撤去して屋外調査を終了する。

７月１日より、屋内整理作業を開始する。出土遺物の洗浄や注記、記録写真の整理作業をし、調査成果をまとめた調査概要報告書を作成後、申請者に提出する。なお、出土遺物の実測やトレース作業等、報告書作成に伴う整理作業は、平成20年度より実施した。

（３）調査組織

所 在 地：松山市平井町甲3131番１の一部

調査期間：2008（平成20）年６月２日～2008（平成20）年６月30日

調査面積：83.97㎡

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：水本完児

２．層　位

（１）基本層位（第 186 図、図版 53）

調査地は、松山平野南東部、標高 54.2 ～ 54.6m に立地する。基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅴ層である。

第Ⅰ層：土色・土質の違いにより、二層に分層される。

第Ⅰ①層－褐灰色（10YR6/1）を呈する粘質土で、水田耕作土である。厚さ４～ 95cmを測る。

第Ⅰ②層－にぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する粘質土で、水田床土である。厚さ４～ 40cmを測る。

第Ⅱ層：土色・土質の違いにより、二層に分層される。

第Ⅱ①層－橙色（7.5YR6/6）シルトで、厚さ４～ 30cmを測る。調査地北側を除く地域で検出した。本層上面にて土坑を確認し、遺物は中世の土師器片が少量出土した。

第Ⅱ②層－明褐色（7.5YR5/6）シルトで、厚さ４～ 23cmを測る。調査地東半部で検出した。

第Ⅲ層：土色の違いにより、三層に分層される。

第Ⅲ①層－灰褐色（7.5YR5/2）シルトで、厚さ４～ 23cmを測る。調査地南半分で検出した。調査壁の土層観察により、本層上面から土坑（ＳＫ４）が掘削されていることを確認した。本層中からは、７～８世紀代の土師器片や須恵器片が出土した。

第Ⅲ②層－黒褐色（7.5YR3/1）を呈する粘質シルトで、厚さ２～ 20cmを測る。調査地北側を除く地域で検出した。本層中からは、主に古代の土師器片や須恵器片が出土した。

第Ⅲ③層－褐灰色（7.5YR4/1）シルトで、厚さ 10 ～ 30cmを測る。調査地南東部で検出した。本層中からは、古代の土師器片や須恵器片が出土した。

第Ⅳ層：土色・土質の違いにより、二層に分層される。

第Ⅳ①層－黒色（10YR2/1）を呈する粘質シルトで、厚さ２～ 18cmを測る。調査地南半分で検出した。本層中からは、遺物の出土はない。

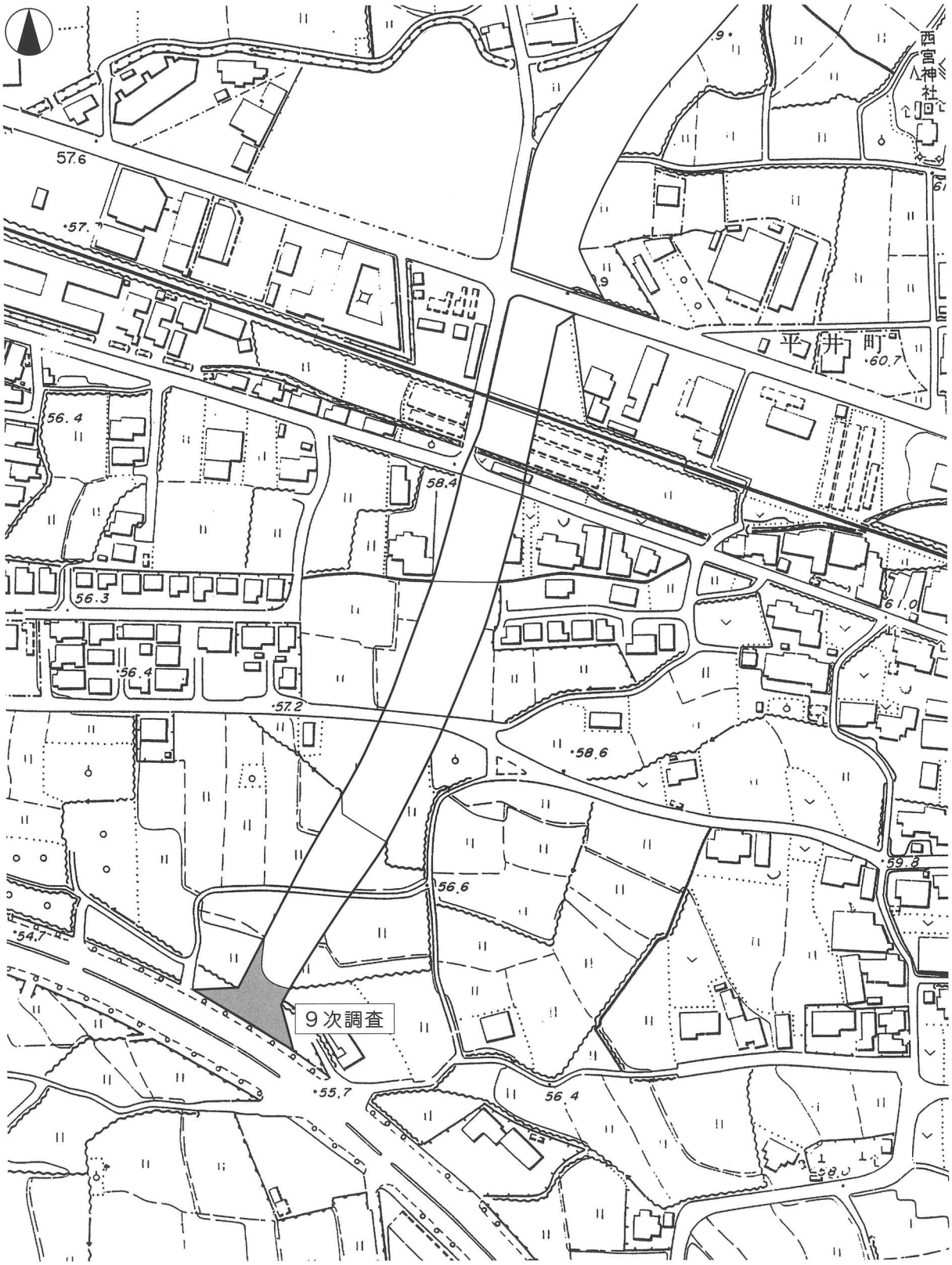
第Ⅳ②層－明褐灰色（7.5YR7/1）シルトに、黄色（5Y8/8）シルトがブロック状に混じるものである。厚さ２～ 10cmを測る。調査地東壁中央部付近で検出した。

第Ⅴ層：浅黄色（2.5Y8/3）を呈する粘土層で、厚さ２～ 10cmを測る。調査地ほぼ全域で検出した。本層上面は、調査における最終の遺構検出面である。

なお、出土遺物や検出遺構などから、第Ⅱ層は中世、第Ⅲ層は古代までに堆積したものと思われる。

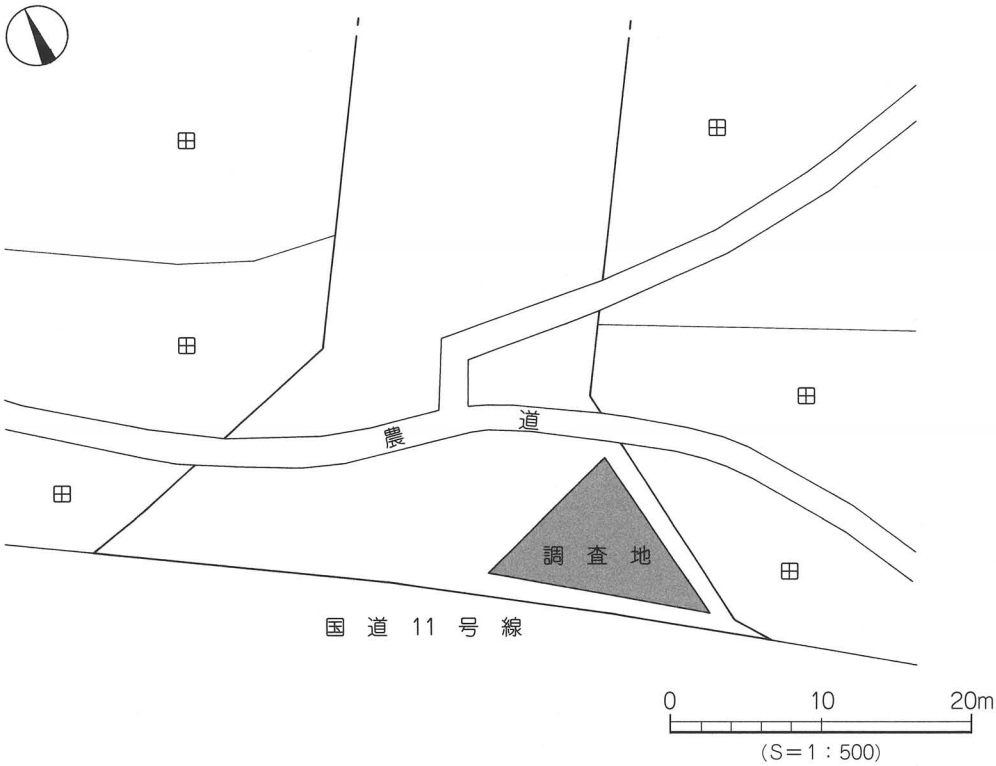
（２）検出遺構・遺物（第 187 図）

調査では溝１条、土坑４基、柱穴 22 基を検出した。遺物は、遺構及び包含層中より、弥生土器（前期･後期）や土師器、須恵器（古墳～古代）が出土した。なお、遺物の出土量は収納箱（44 × 60 × 12cm）９箱分である。調査にあたり、調査地内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ、西から東へ１・２・３とし、Ａ１・Ａ２‥‥Ｃ３といったグリット名を付けた。グリットは、遺物の取り上げや遺構の位置表示に利用した。

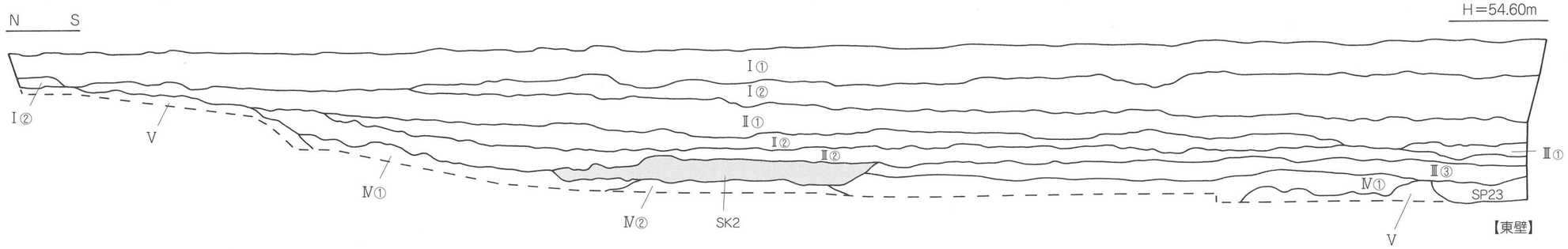


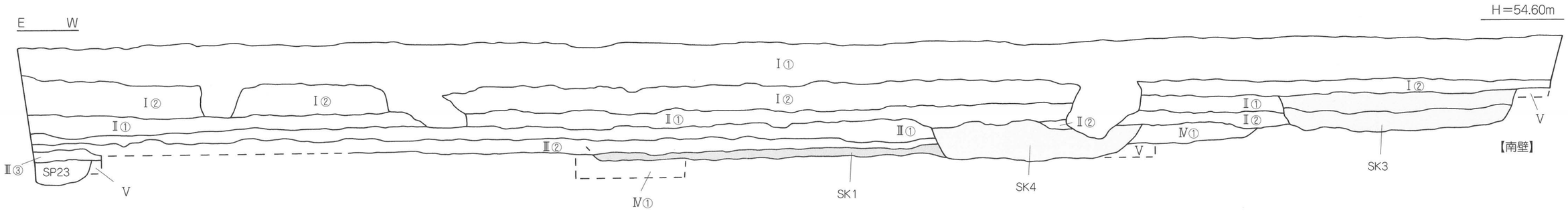
(S=1:2,500)

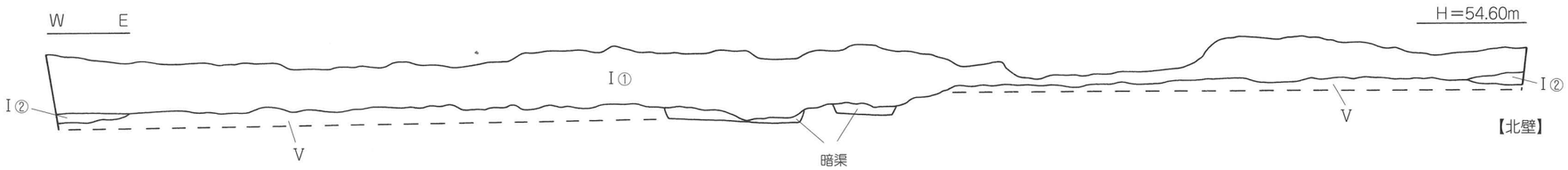
第184図　調査地位置図



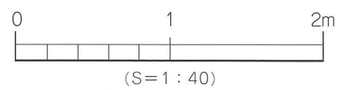
第185図　調査地位置図



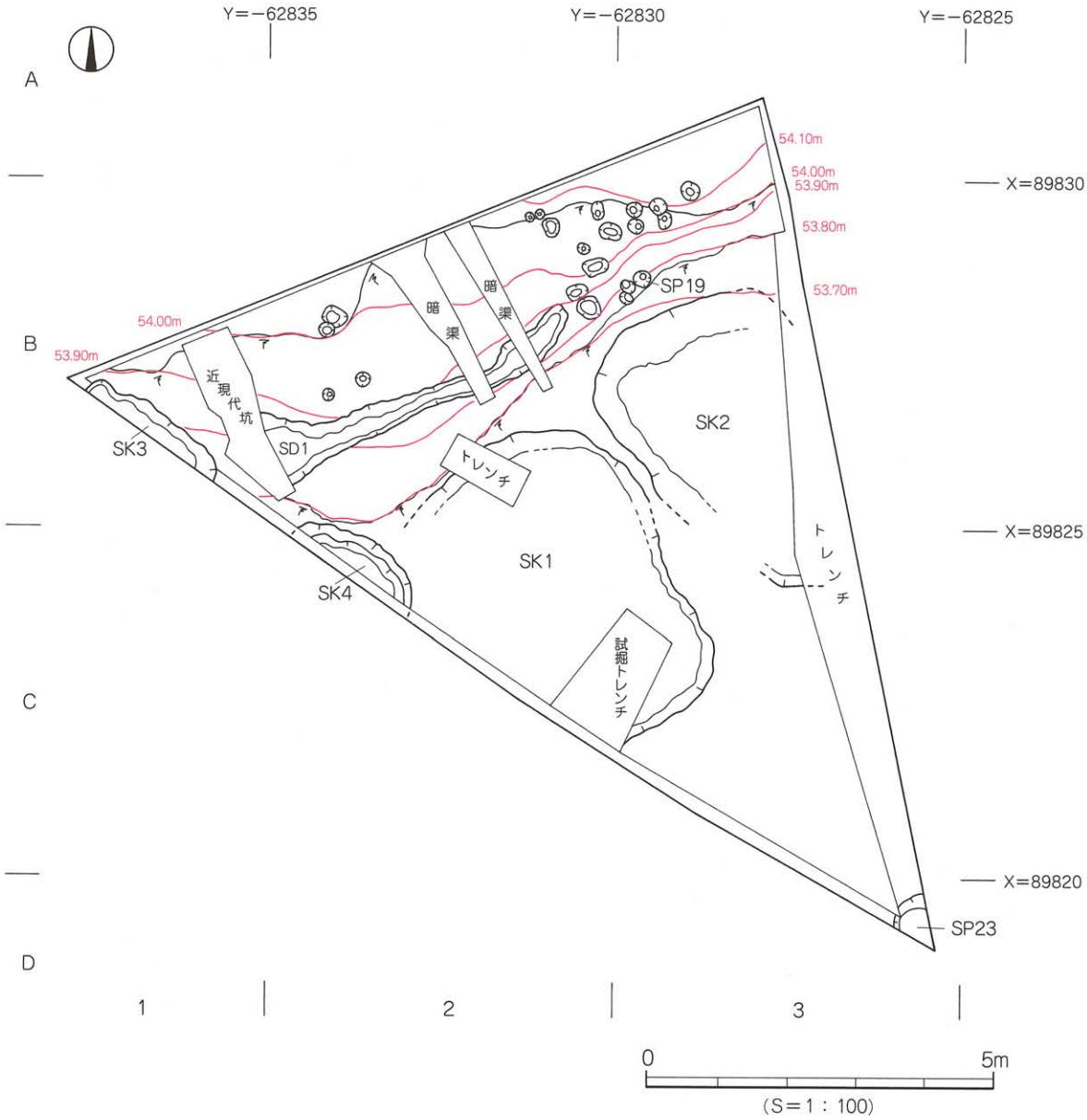




Ⅰ① 褐灰色（10YR6/1）粘質土
Ⅰ② にぶい黄橙色（10YR7/4）粘質土
Ⅱ① 橙色（7.5YR6/6）シルト
Ⅱ② 明褐色（7.5YR5/6）シルト
Ⅲ① 灰褐色（7.5YR5/2）シルト
Ⅲ② 黒褐色（7.5YR3/1）粘質シルト
Ⅲ③ 褐灰色（7.5YR4/1）シルト
Ⅳ① 黒色（10YR2/1）粘質シルト
Ⅳ② 明褐灰色（7.5YR7/1）シルトに
黄色（5Y8/8）シルトがブロック状に混入
Ⅴ 浅黄色（2.5Y8/3）粘土



第186図　調査壁土層図


Y=−62835
Y=−62830
Y=−62825
A
B
C
D
X=89830
X=89825
X=89820
1
2
3
54.10m
54.00m
53.90m
53.80m
53.70m
54.00m
53.90m
SP19
SP23
暗渠
暗渠
近現代坑
SD1
SK1
SK2
SK3
SK4
トレンチ
トレンチ
試掘トレンチ
0
5m
(S=1：100)

第187図　遺構配置図

３．遺構と遺物

調査では第Ⅱ層上面で中世の遺構と遺物を確認し、第Ⅲ層、第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面で主に古代の遺構と遺物を確認した。検出した遺構は溝１条、土坑４基、柱穴22基である。

（１）溝

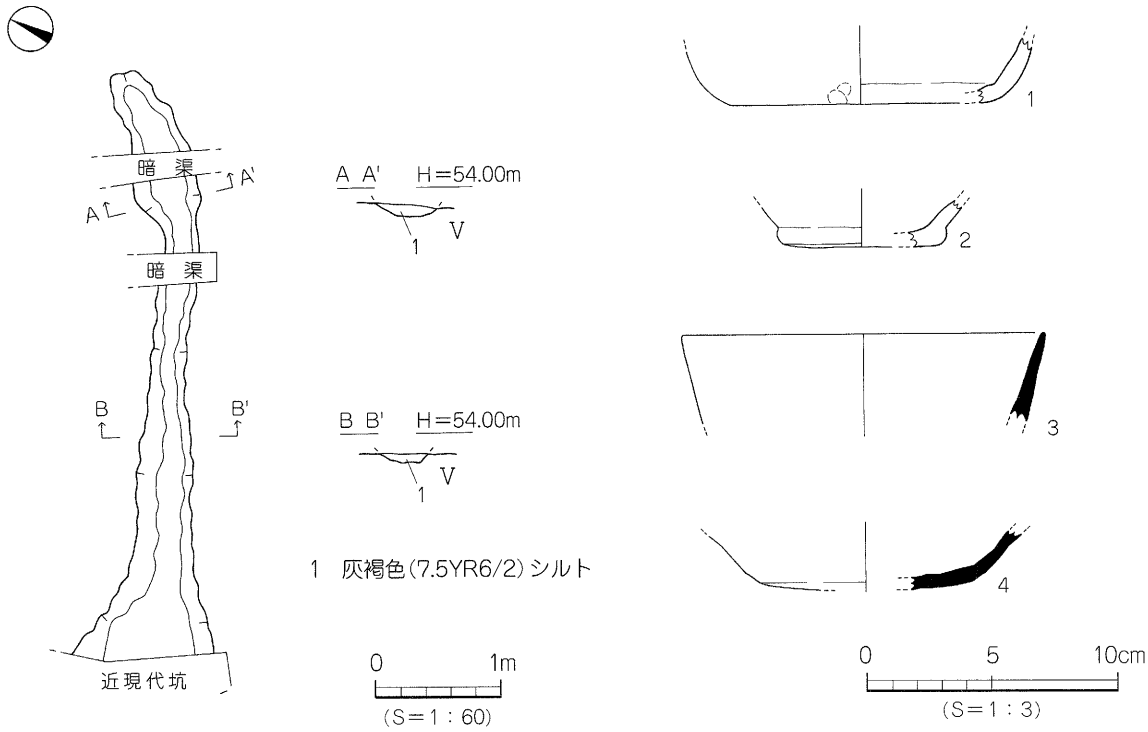
ＳＤ１（第187・188図）

調査地北部Ｂ１・２区で検出した東西方向の溝で、溝東側は暗渠に切られ、溝西側は近現代坑に切られている。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅰ②層が覆う。規模は検出長4.64ｍ、幅1.10m、深さは検出面下９cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色（7.5YR6/2）シルト単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、土師器片と須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第188図）

１・２は土師器の坏で１は平底、２は円盤高台状の底部である。３・４は須恵器の坏である。３は口縁部小片で口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味となる。４は平底で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。

時期：出土遺物と検出層位から、概ね古代、平安時代後期とする。



第188図　SDI測量図・出土遺物実測図

（2）土　坑

ＳＫ１（第187・189図）

調査地中央部Ｂ２～Ｃ３区に位置し、土坑北側と南側は試掘トレンチに、北西部はＳＫ４に切られ、南西部は調査区外へ続く。第Ⅳ①層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.66 m、南北長4.68 m、深さは検出面下20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。土坑北側壁体は第Ⅴ層、基底面は第Ⅳ①層である。埋土は二層に分層され、１層黒褐色（7.5YR3/1）シルト、２層褐灰色（7.5YR5/1）シルトである。土坑基底面はほぼ平坦である。遺物は土坑北半部の埋土中位から下位にかけて土師器や須恵器が多数出土したほか、石器や鉄器、鉄滓などが出土した。

出土遺物（第189・190図、図版56）

５～10は土師器。５・６は坏で５の口縁端部は内傾し、体部内面に放射状の暗文を施す。６は口縁部が内湾し、口縁端部は尖り気味となる。７は高坏の脚部で柱部外面は面取りされ、胎土中に赤色酸化土粒を含む。８～10は甕の口縁部小片である。８は口縁部が内湾し、口縁端部は丸い。９・10の口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状に丸く仕上げる。11～19は須恵器。11・12は坏蓋である。11は天井部がほぼ平坦で口縁部は直立気味に下がり、口縁端部は尖り気味となる。12は小片で口縁部は直立気味に下がり、口縁端部は尖り気味となる。13は坏身で、たちあがりは短く内傾する。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。14は坏の口縁部である。口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味となる。15～17は甕の口縁部である。15は口縁部が短く外反し、口縁端部は「コ」字状に丸く仕上げる。16・17は口縁部が外反し、口縁端部は肥厚する。両者共に、口縁下端部に２条の沈線を施す。18は甕の胴部である。中位外面に回転カキメ調整、下位には手持ちヘラケズリを施す。19は高坏の脚部で、脚端部は下外方へ屈曲する。20は緑色片岩の扁平片刃石斧、もしくはノミ形石斧である。21は器種不明の鉄器、22は鉄滓である。

時期：出土遺物の特徴より、７世紀後半とする。

ＳＫ２（第187・191図、図版55）

調査地東部Ｂ２～Ｃ３区に位置し、東側はトレンチに切られている。第Ⅳ①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅲ③層上面から掘り込まれていることを確認した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.42 m、南北検出長2.50 m、深さは検出面下38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は二層に分層され、１層黒褐色（7.5YR3/1）シルト、２層褐灰色（7.5YR5/1）シルトである。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は土坑西半部の埋土上位から下位にかけて、土師器や須恵器のほか鉄器などが点在して出土した。なお、出土遺物の中には歪んだ須恵器や火ぶくれを受けた須恵器が多数含まれている。

出土遺物（第192・193図、図版56・57）

23～34は土師器。23は坏である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。体部内面に放射状の暗文を施す。24はほぼ完形品の椀で、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。底部は平底である。25～27は高坏。25は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は「コ」字状に仕上げる。胎土中に赤色酸化土粒を含む。26・27は脚部片で脚部は「ハ」の字状に開き、26は柱部外面が面取りされる。27は

小片で、脚端部は「コ」字状に丸い。28 ～ 33 は甕である。28・29・32 は口縁部が外反し、口縁端部は丸い。30 は口縁部が外傾し、口縁端部は丸い。31 は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。33 は小片で、口縁端部は内方へ肥厚する。34 は甑か鍋の把手部である。胎土中に赤色酸化土粒を含む。35 ～ 37 は弥生土器。35 は甕形土器で口縁部は短く外反し、口縁端部は丸い。口縁部内面に粘土接合痕を残す。36・37 は壺形土器。36 は上げ底で、底部外面と体部内外面に粘土接合痕を残す。37 は底部中央部がやや凹む。38 ～ 53 は須恵器。38 ～ 41 は坏蓋である。38 は天井部に丸味をもち、口縁端部は尖り気味に丸い。天井部外面に回転ヘラ切り痕を残す。39 は口縁部が下外方に下がり、端部は尖り気味に丸い。40・41 のかえりは短く内傾し、端部は尖る。42・43 は坏身である。42 は扁平な底部で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。43 は小片で受部が短く上方に伸び、たちあがりは短く内傾する。赤焼け土器。44 ～ 46 は坏である。44 は口縁部が直立し口縁端部は丸く、体部外面に沈線１条を施す。45 は平底の底部で口縁部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。46 は口縁部が外反し、底部は平底である。47・48 は壺である。47 は長頸壺の口頸部で口縁部は外反し、口縁端部は丸い。48 は口縁部が外反し、口縁端部は「コ」字状となる。49 は高坏である。脚裾部は下外方へ屈曲し、端部に沈線１条を施す。50 は平瓶である。口縁部の完形品で、口縁端部は内方に肥厚する。口縁部内外面には接合痕を残す。51 は提瓶である。口縁部は直立し、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部中位外面に沈線１条を施す。52 は大甕の小片である。口縁部外面に 14 本～ 28 本の波状文と凹線３条を施す。53 は蓋である。口縁端部は内傾し、天井部外面に沈線２条と回転カキメ調整を施す。54 は鉄滓である。重量 38.3g を測る。

時期：出土遺物の特徴より、７世紀後半とする。

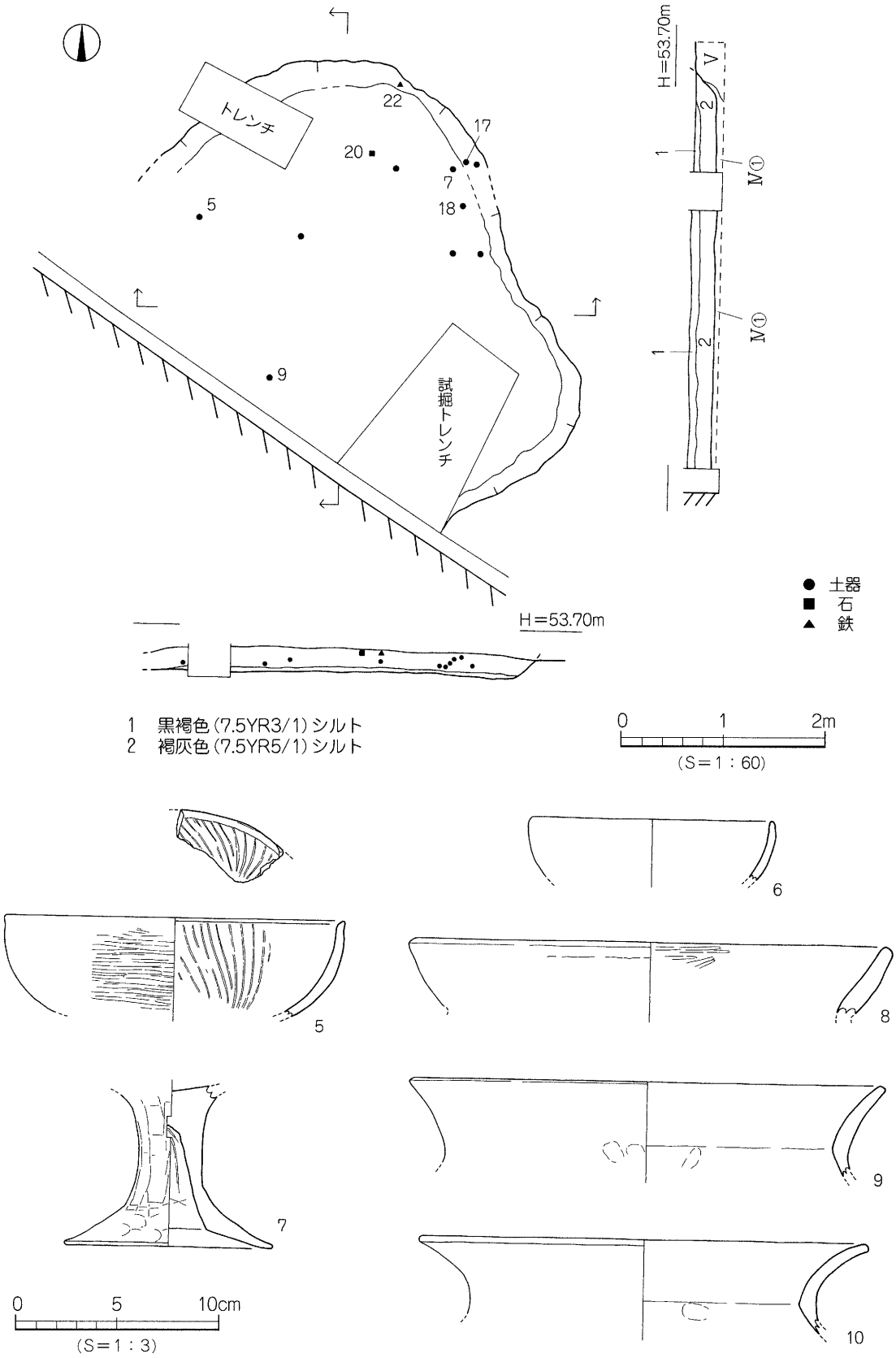
ＳＫ３（第 187・194 図）

調査地西部Ｂ１区に位置し、土坑南側は調査区外に続く。第Ⅱ①層上面での検出であり、第Ⅰ②層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長 2.26m、南北検出長 0.37m、深さは検出面下 38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東西壁体は垂直気味に立ち上がる。埋土は二層に分層され、１層にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト、２層褐色（7.5YR4/3）シルトである。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は、土師器片と須恵器片が少量出土した。図化しうる遺物を１点掲載した。

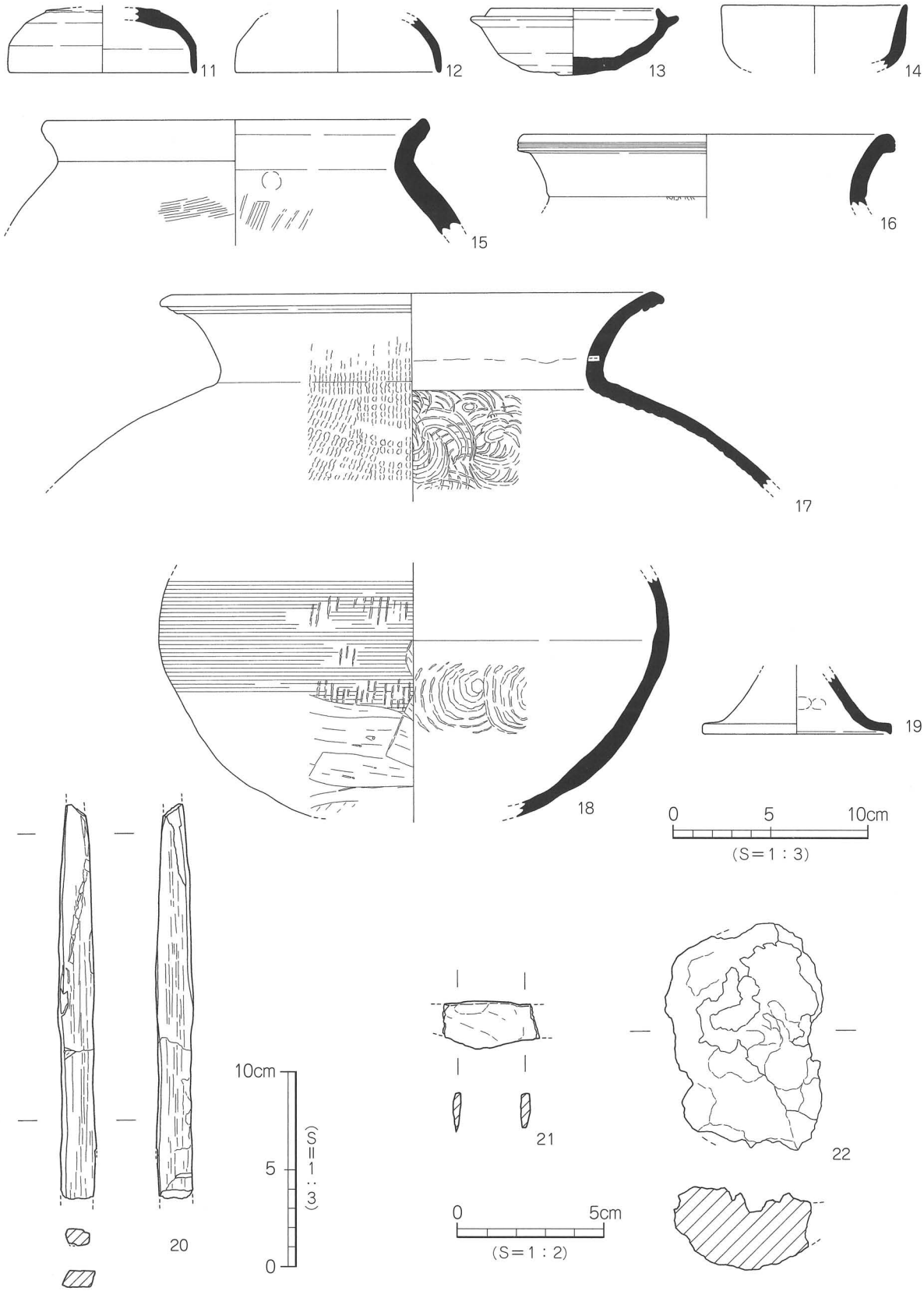
出土遺物（第 194 図）

55 は須恵器高坏である。脚部は外反し、脚端部は下方に屈曲する。柱部中位外面に沈線２条を施す。

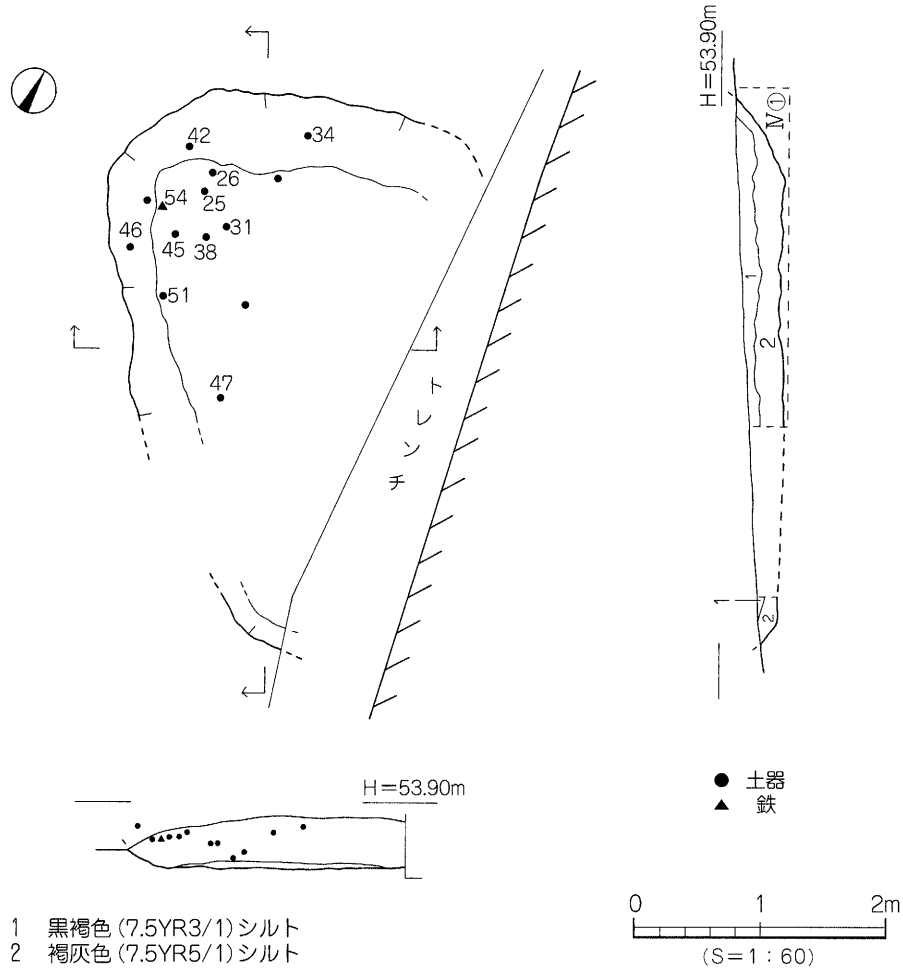
時期：検出層位より、概ね中世とする。



第189図 SKI測量図・出土遺物実測図(1)

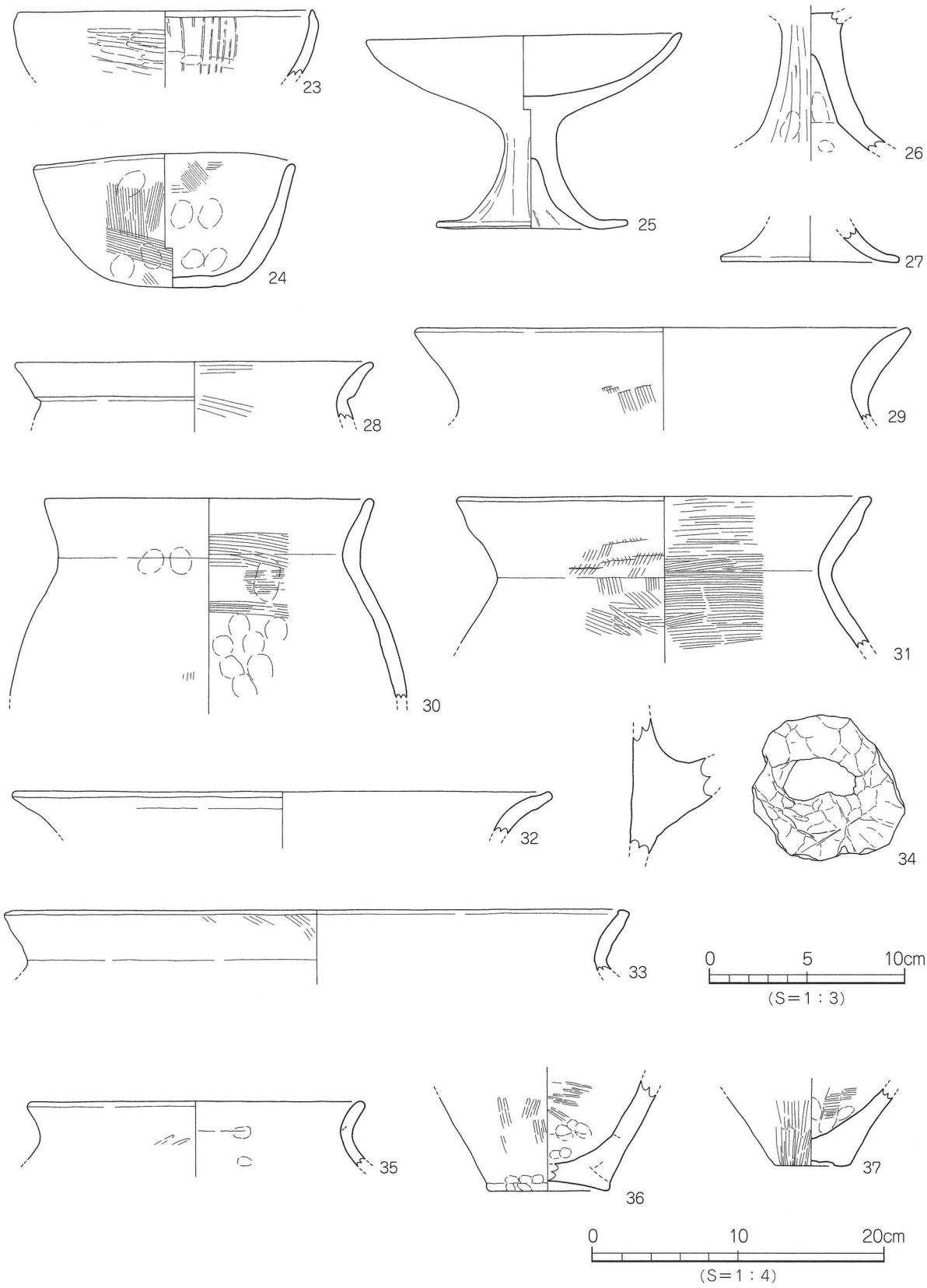


第190図　SKI出土遺物実測図（2）

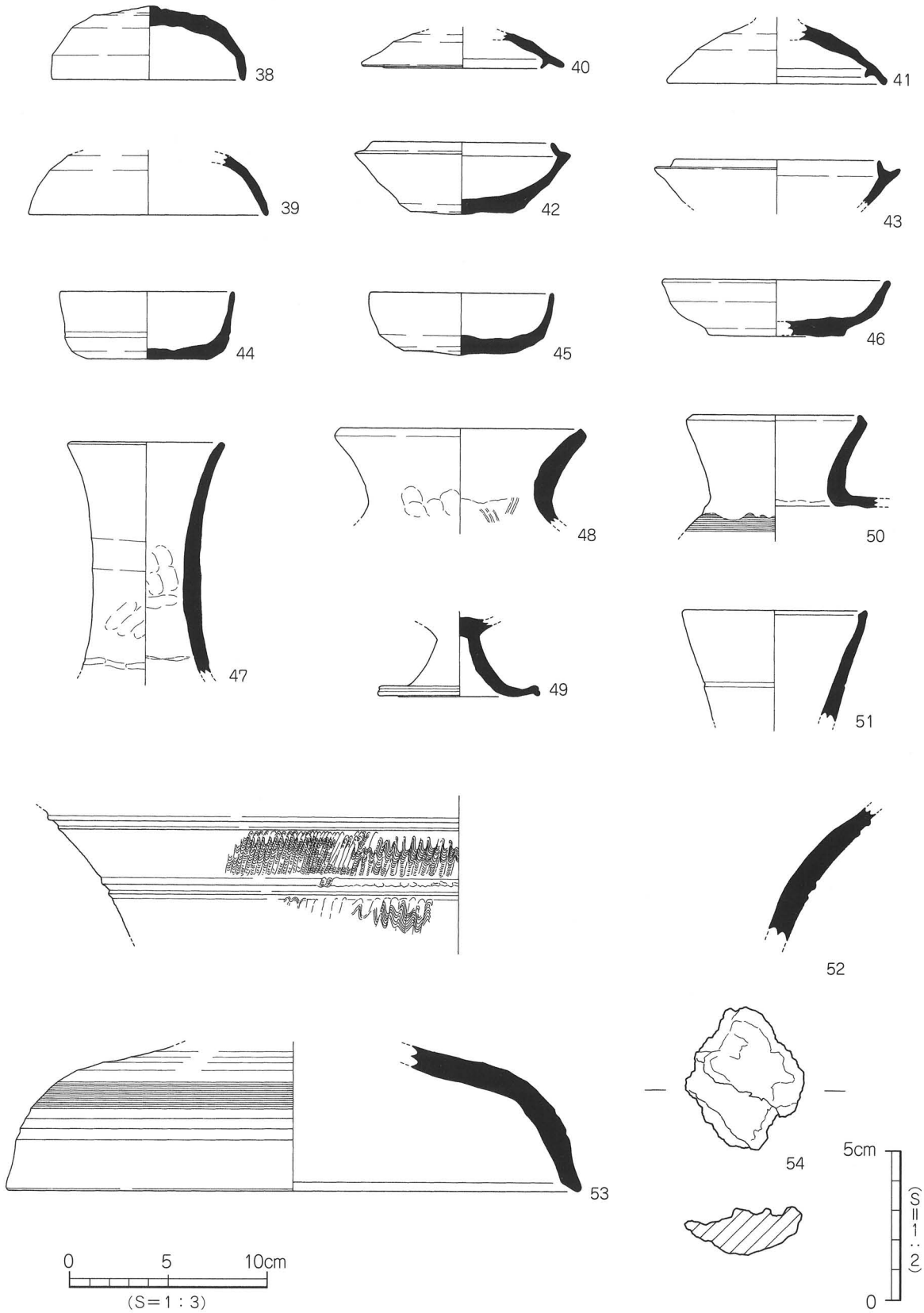


1　黒褐色(7.5YR3/1)シルト
2　褐灰色(7.5YR5/1)シルト

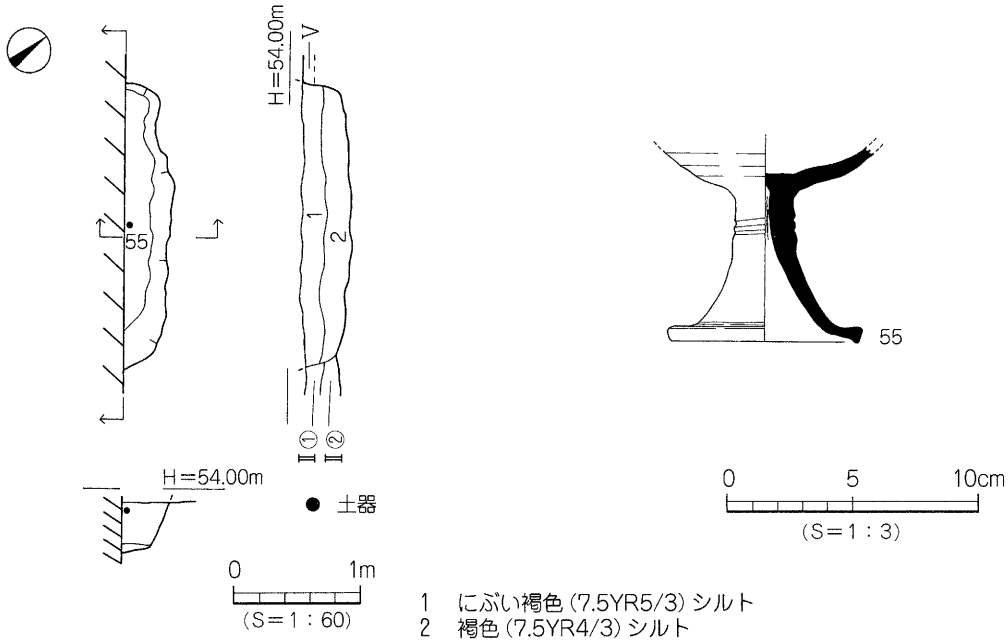
第191図　SK2測量図



第192図　SK2出土遺物実測図（1）



第193図　SK2出土遺物実測図（2）

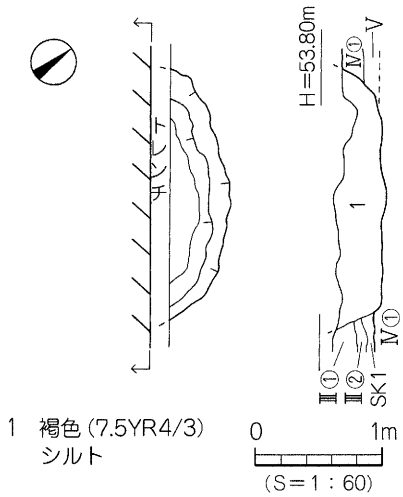


第194図　SK3測量図・出土遺物実測図

ＳＫ４（第 187・195 図）

調査地南西部Ｃ２区に位置し、土坑南側は調査区外に続く。第Ⅲ②層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅲ①層上面から掘り込まれていることを確認した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長 1.96m、南北検出長 0.48m、深さは検出面下 38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色（7.5YR4/3）シルト単層である。土坑内には緩やかな段差があり、土坑基底面には径 70cm、深さ 11cmの凹みがある。土坑内から、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅲ①層上面から掘り込まれていることや、埋土がＳＫ３と類似することから、概ね中世とする。



第195図　SK4測量図

（3）柱　穴

柱穴は22基を検出した。調査地北部と南東部Ｂ２～Ｄ３区で検出した。平面形態は円形、楕円形、不整円形の３種類があり、規模は径10～80cm、深さ５～27cmを測る。柱穴埋土は２種類あり、埋土①：黒褐色シルト、埋土②：明褐色シルトである。遺物は、埋土①柱穴より、弥生時代から古墳時代にかけての弥生土器片や土師器片が数点出土した。各柱穴の詳細は、表129に記す。

出土遺物（第196図）

56はＳＰ23出土の広口壺である。内外面共に細かなハケメ調整を施す。57はＳＰ23、58はＳＰ19出土の甕形土器である。57は平底の底部、58は胴部の小片である。弥生後期。

（4）包含層・地点不明出土遺物

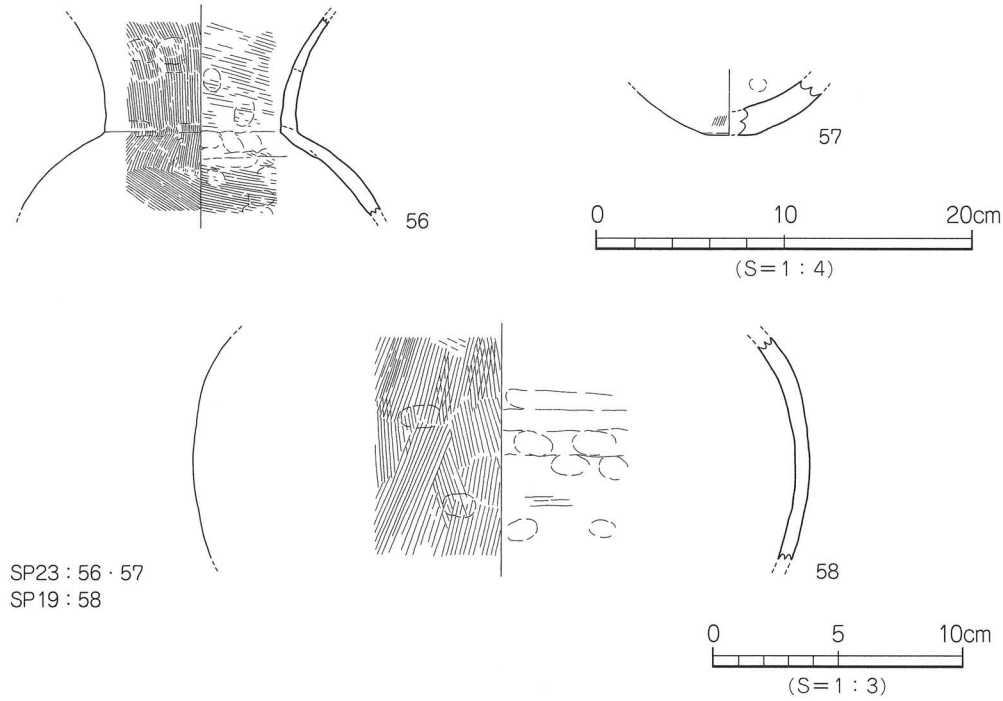
1）第Ⅱ①層出土遺物（第197図）

59・60は土師器坏である。59は口縁部が外傾し、口縁端部は尖り気味である。60は口縁部が内湾し、口縁端部は丸い。61・62は内黒椀である。61は口縁部がやや外反し、口縁端部は尖り気味である。体部内面にヘラミガキを施す。62は断面三角形の低い高台がつく。

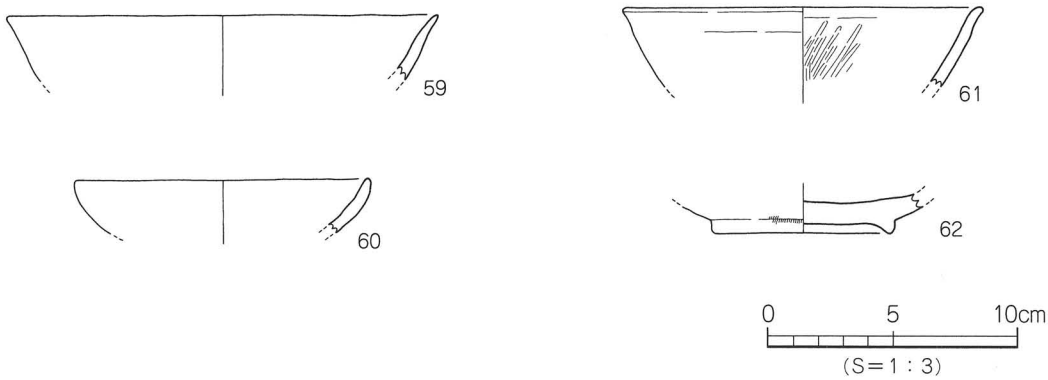
2）第Ⅲ①層出土遺物（第198～200図、図版57）

63～71は土師器。63・64は坏蓋で、つまみ部分はほぼ完形である。水平な天井部に中央部が凹むつまみが付き、赤色酸化土粒を含む。65は高台の付く坏である。高台は「ハ」の字状に開き、内端面で接地する。66～68は皿である。66は体部内面に放射状暗文を施す。67は口縁部が上外方にひねりだされ、底部は平底である。66・67は、内外面に赤色塗彩を施す。68は平底で口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。底部外面にスノコ痕が残る。69は高坏の小片で、柱部外面は面取りされる。70・71は甕である。70は小片で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。器壁は厚く、粗いハケメ調整を施す。71は胴部小片で、内面に板状工具によるナデ調整を施す。72・73は瓦質土器である。72は坏で口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。73は甕の底部で、平底である。74は平瓦の小片で、凹面に布目痕が残る。75～110は須恵器。75～80は坏蓋である。75～77はつまみが欠損し、75のかえりは口縁部より下方に下がる。78のつまみ部分は完形で、水平な天井部に中央部が凹むつまみが付く。79は口縁部が下方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に丸い。80は小片で口縁部は下外方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に丸い。口縁端面に沈線１条が巡る。81～88は坏である。81は丸底で口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。82は小片で口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。83・84は平底、85は円盤高台状の底部である。86・87は「ハ」の字状に開く高台の付く坏で、86は口縁部が直立気味に立ち上がり、87は口縁部がやや外反する。89～91は高坏の脚部である。89は柱部に２条の沈線を施す。90・91は低脚で裾部が「ハ」の字状に開き、90は脚端部が「コ」字状に丸くおさめる。92～99は壺である。92・93は広口壺で口縁部は外反し、93の口縁端部は内傾する面をもつ。94～96は長頸壺である。94は口縁部が外反し、口縁端部は丸い。95は肩部に刻目文と沈線１条を施す。96は肩胴部の境界に沈線１条を施す。97は赤焼け土器で、肩部外面に刻目列点文と沈線を施す。98は脚付長頸壺の脚部である。裾部は内湾気味に開き、脚端部は面をもつ。99は肩部に径0.8cm大の孔を穿つ。100は瓶である。胴部外面に沈線１条を施す。101～108は甕である。101～103は小片で口縁部が外反し、102・103の口縁端部は内方へ肥厚する。104

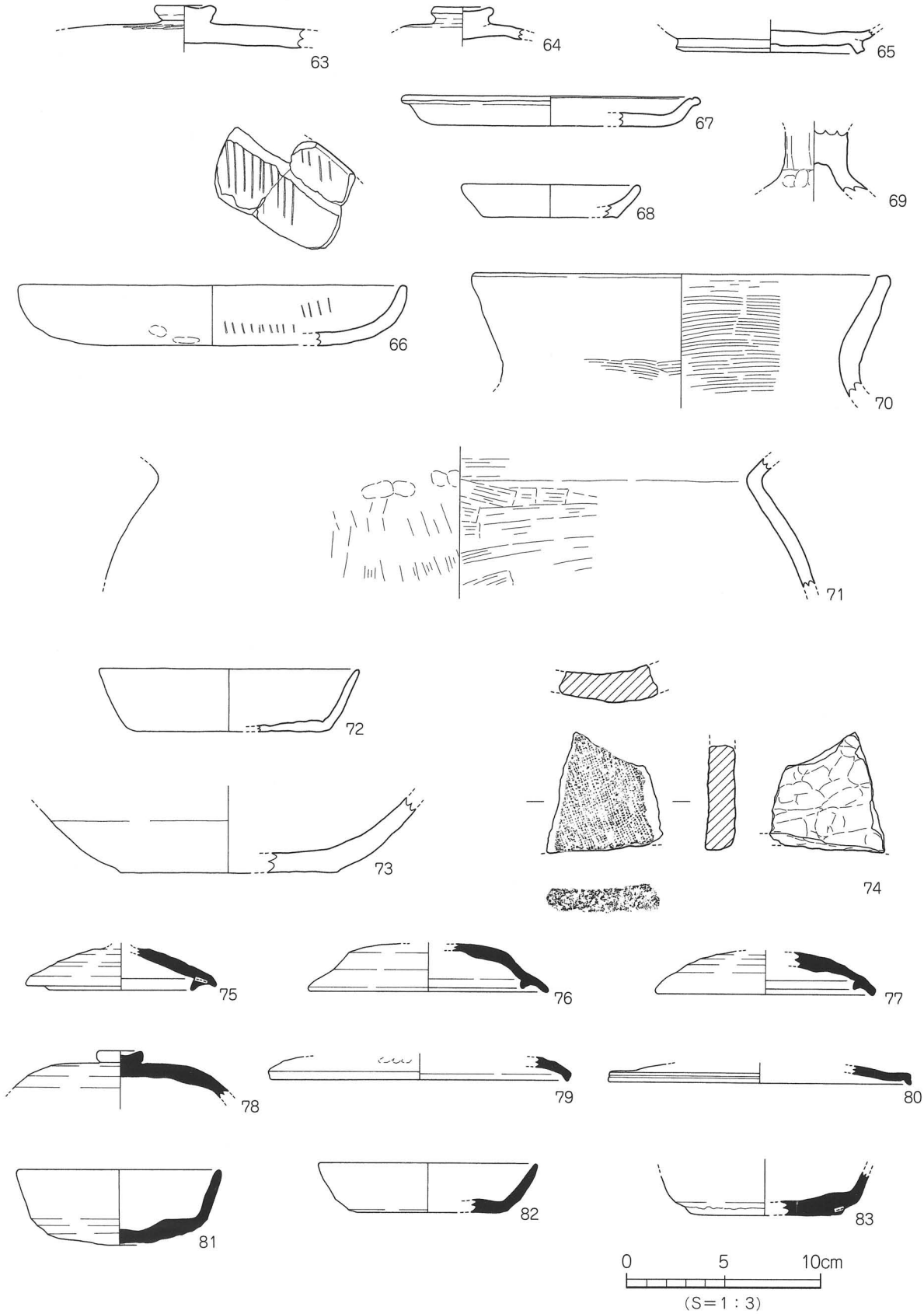
は口縁部が水平に短くのび、口縁端部は「コ」字状となる。105は口縁部中位に沈線１条と肩部に円形浮文１ヶを看取する。106は頸胴部片で、頸部外面に沈線２条を施す。107・108は小片で、107の肩部には火ぶくれ痕を残す。109の口縁部は短く外反し、口縁端部は「コ」字状となる。110は円面硯の小片である。



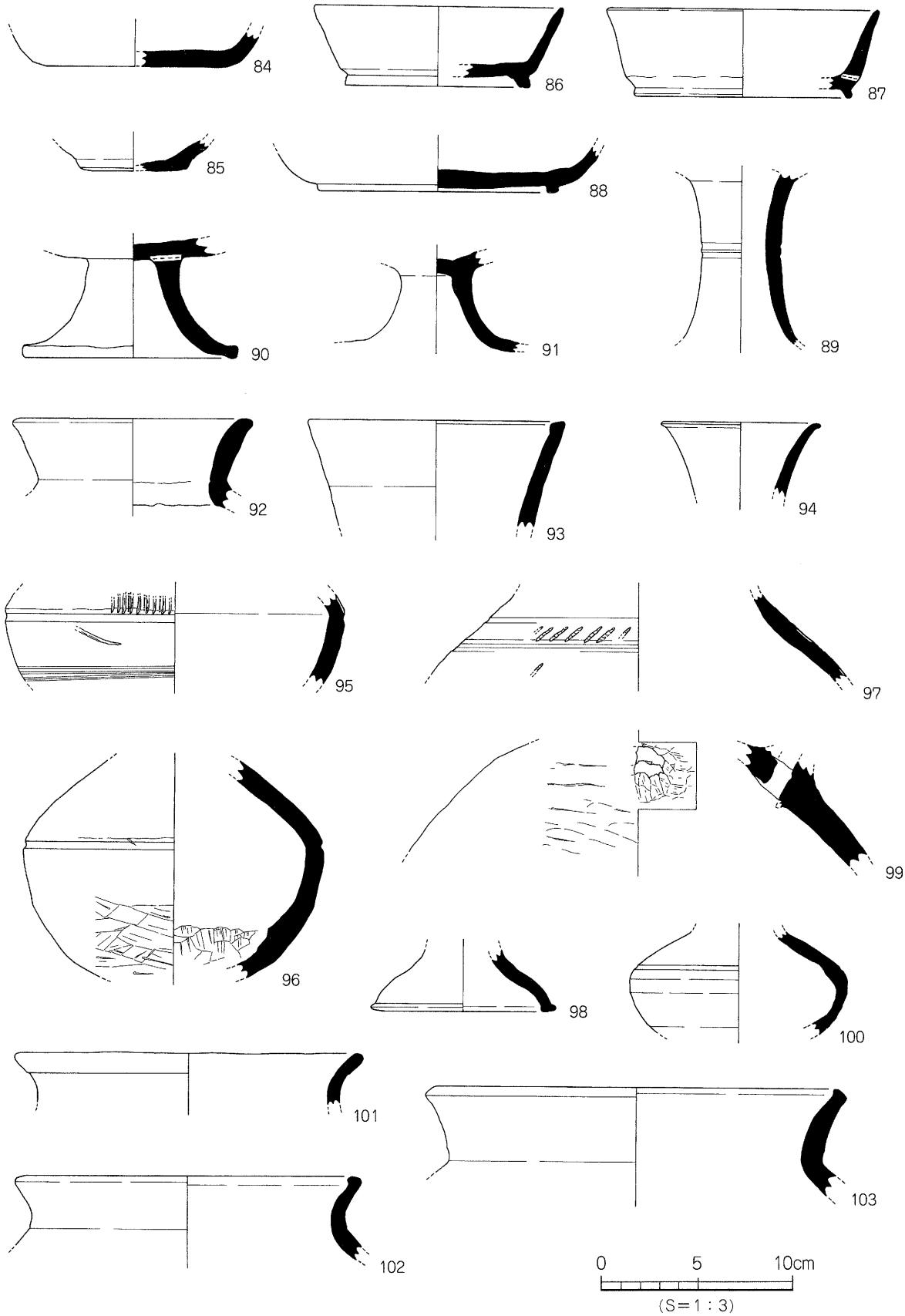
第196図　柱穴出土遺物実測図



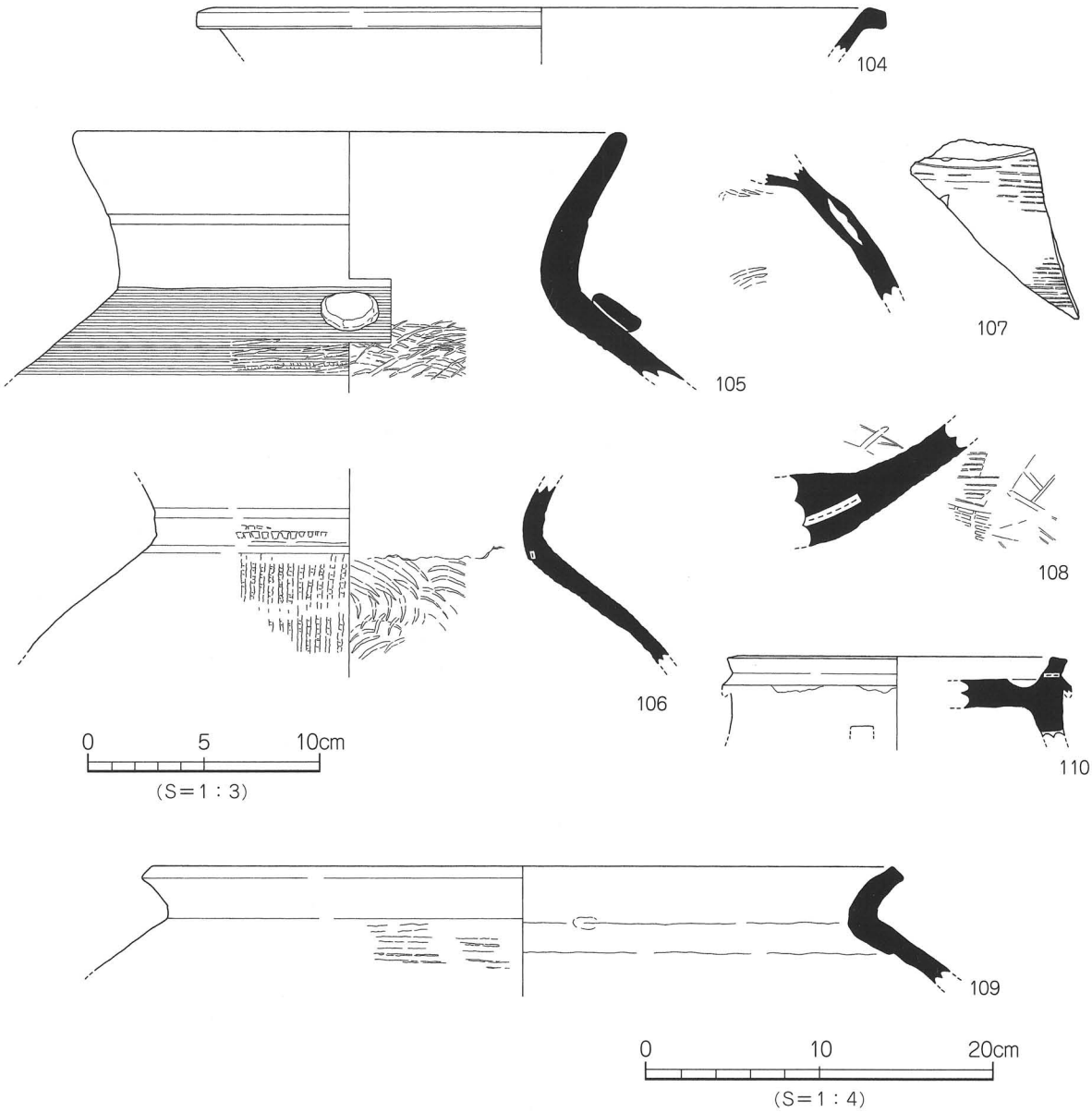
第197図　第Ⅱ①層出土遺物実測図



第198図　第Ⅲ①層出土遺物実測図（1）



第199図　第Ⅲ①層出土遺物実測図（2）



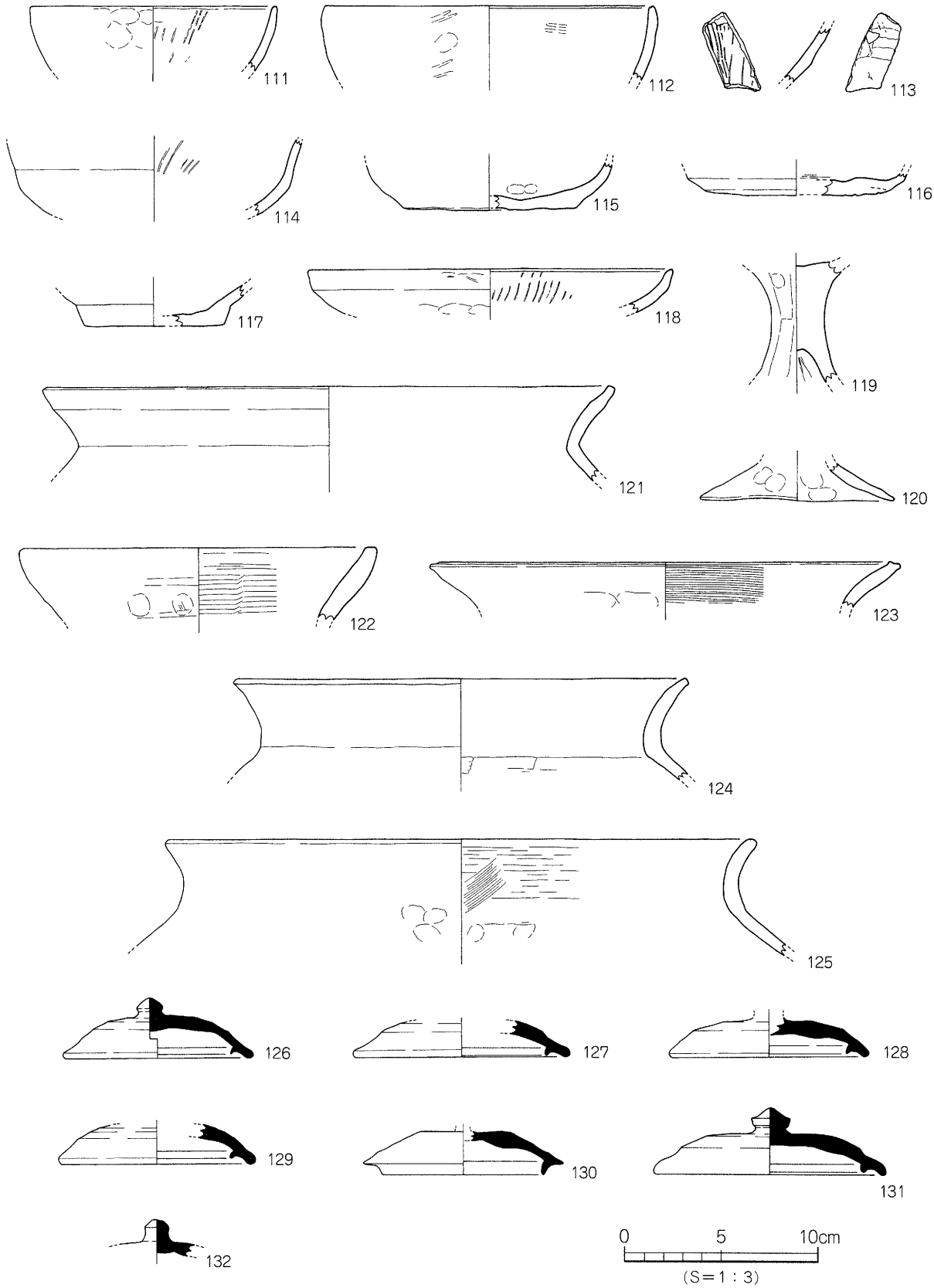
第200図　第Ⅲ①層出土遺物実測図（3）

３）第Ⅲ②層出土遺物（第 201 ～ 203 図、図版 58）

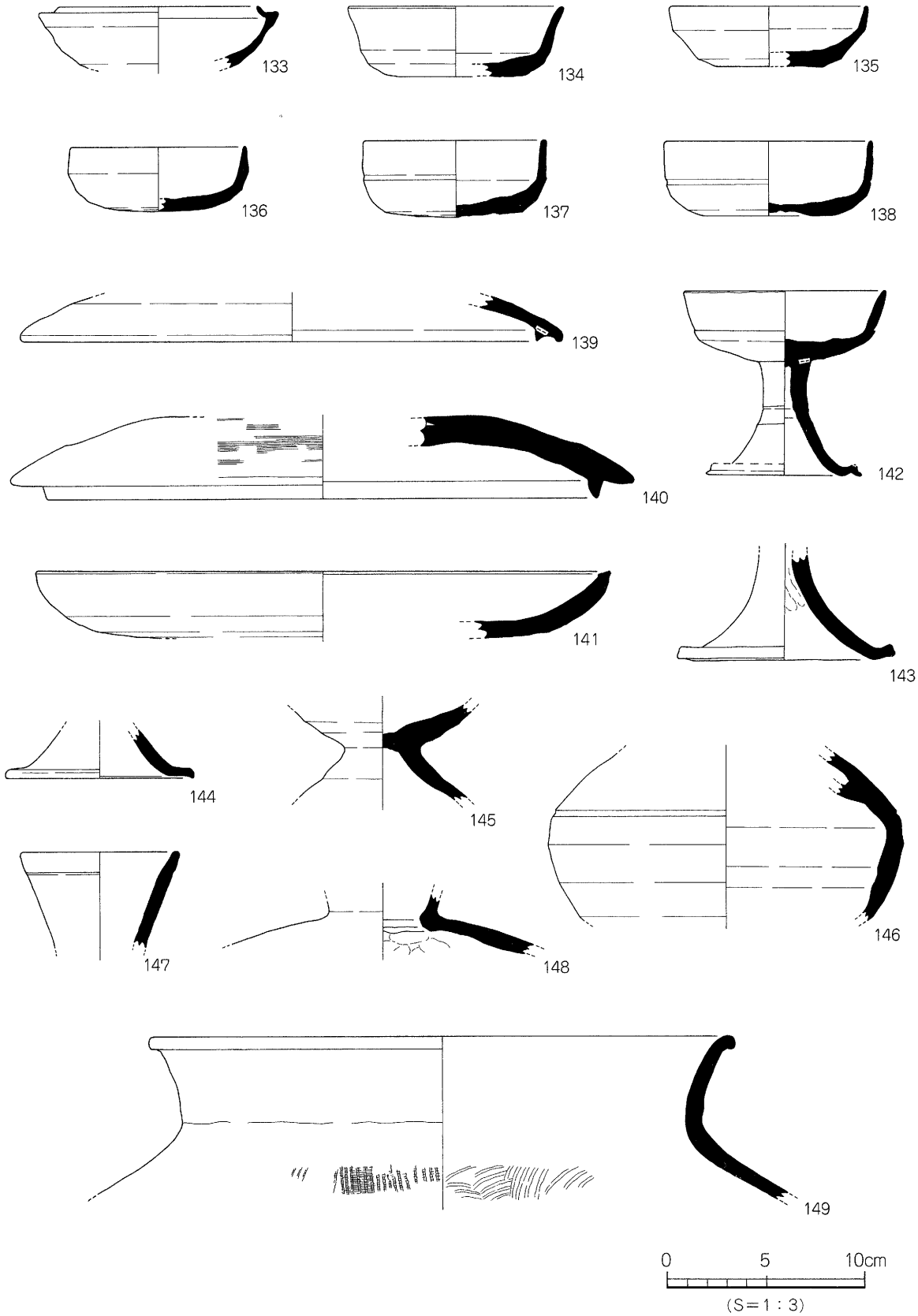
111 ～ 125 は土師器。111 ～ 117 は坏である。111・112 は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。111 は体部内面に暗文を施す。113・114 は体部の小片で、暗文が残る。115 ～ 117 は底部で、116・117 の底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。118 は皿である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する。体部内面に放射状の暗文を施す。119・120 は高坏である。119 は脚柱部で、胎土中に赤色酸化土粒を少量含む。120 は脚部が「ハ」の字状に開き、脚端部は尖り気味である。121 ～ 125 は甕である。121 は小片で口縁部が外反し、口縁端部は上内方に肥厚する。122 は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。123 は口縁部が内湾し、口縁端部は内方へ肥厚する。124・125 は口縁部が外反し、口縁端部は丸く仕上げる。125 は口縁部内面に布目痕と粘土接合痕が残る。126 ～ 152 は須恵器。126 ～ 132 は坏蓋である。126 はほぼ完形品で、笠形の天井部に乳頭状のつまみが付く。127 ～ 130 のつまみは欠損し、130 のかえりは受部端より下方に下がる。131 は笠形の天井部に中央部が突出するつまみが付く。132 は乳頭状のつまみの完形品である。133 は坏身である。受部は短く上方に伸び、たちあがりは短く内傾する。134 ～ 138 は坏である。134 は平底で口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸い。135 は平底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。136 ～ 138 は口縁部が直立し、口縁端部は尖り気味に丸い。137・138 は体部中位に沈線状の凹みが巡る。139・140 は皿蓋である。139 はかえりが短く、端部は丸い。140 は天井部が一部欠損し、やや歪んでいる。かえりは口縁部より下方に垂下し、端部は丸い。口縁部外面に火ぶくれ痕がみられ、胎土中に黒色酸化土粒を含む。141 は皿である。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。142 ～ 145 は高坏である。142 は赤焼け土器で坏部下位に沈線状の凹みが巡り、脚端部は下外方へ屈曲する。143・144 は脚部が「ハ」の字状に開き、脚端部は下外方へ屈曲する。145 は坏脚部片で、低脚である。146 は長頸壺で肩部外面に沈線１条を施し、胴部内面には火ぶくれ痕がみられる。胎土中に黒色酸化土粒を含む。147 は平瓶である。口縁部は直立し、口縁端部は丸い。148 は提瓶の頸肩部片である。149 ～ 152 は甕である。149 は口縁部が短く外反し、口縁端部は珠玉状となる。150 は直口口縁で、頸部に沈線１条と火ぶくれ痕がみられる。肩部外面に回転カキメ調整を施す。151 は小片で口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。152 は胴部片で、別個体の破片が付着する。153 ～ 156 は弥生土器。153 ～ 155 は壺形土器である。153 は口縁部が外反し、口縁端部は丸い。口縁部外面に段をもつ。弥生前期。154 は小片で口縁部は外反し、口縁端部は丸い。弥生後期。155 は平底の底部で、外面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。弥生前期。156 は器種不明の土製品であるが、その形状より鳥袋状土製品の可能性がある。

４）地点不明出土遺物（第 204・205 図）

157 ～ 162 は土師器。157 ～ 160 は坏である。157・158 は小片で口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。157 の体部内面には放射状の暗文を施す。159 は体部片で、内面にミガキ状の暗文を施す。160 は底部中央部がわずかに突出する。161・162 は甕である。161 は口縁部が外傾し、口縁端面はナデにより凹む。162 は小片で口縁部は外反し、口縁端部は丸い。163 ～ 182 は須恵器。163 ～ 168 は坏蓋である。163 の天井部と口縁部の境界は、凹線により表現される。164・165 は口縁端部を丸く仕上げる。166・167 はかえりをもつ坏蓋で、つまみは欠損している。166 の天井部外面にヘラ描きの沈線を施す（ヘラ記号か）。168 は口縁部が下方に屈曲し、口縁端部は丸い。

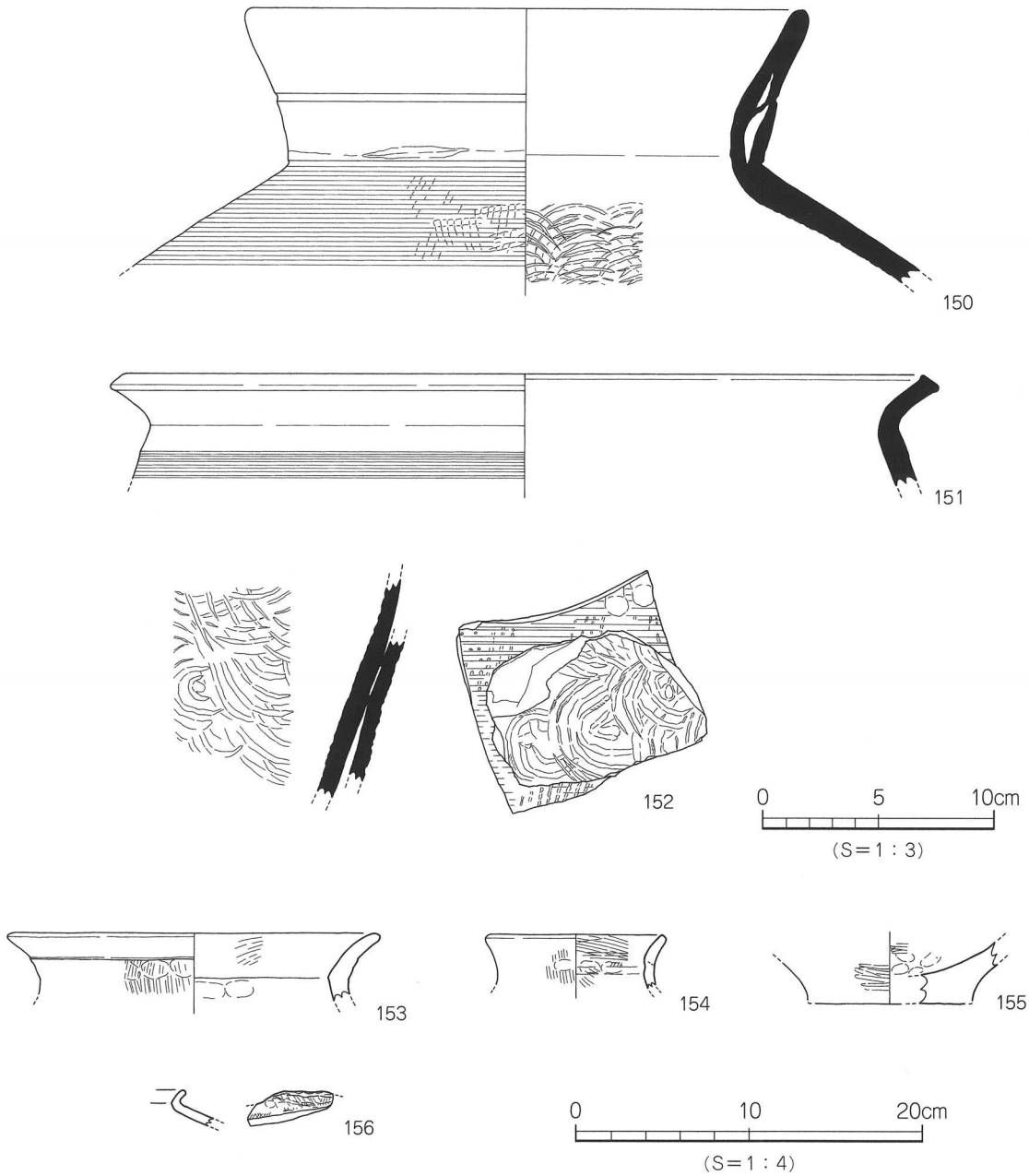


第201図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（1）

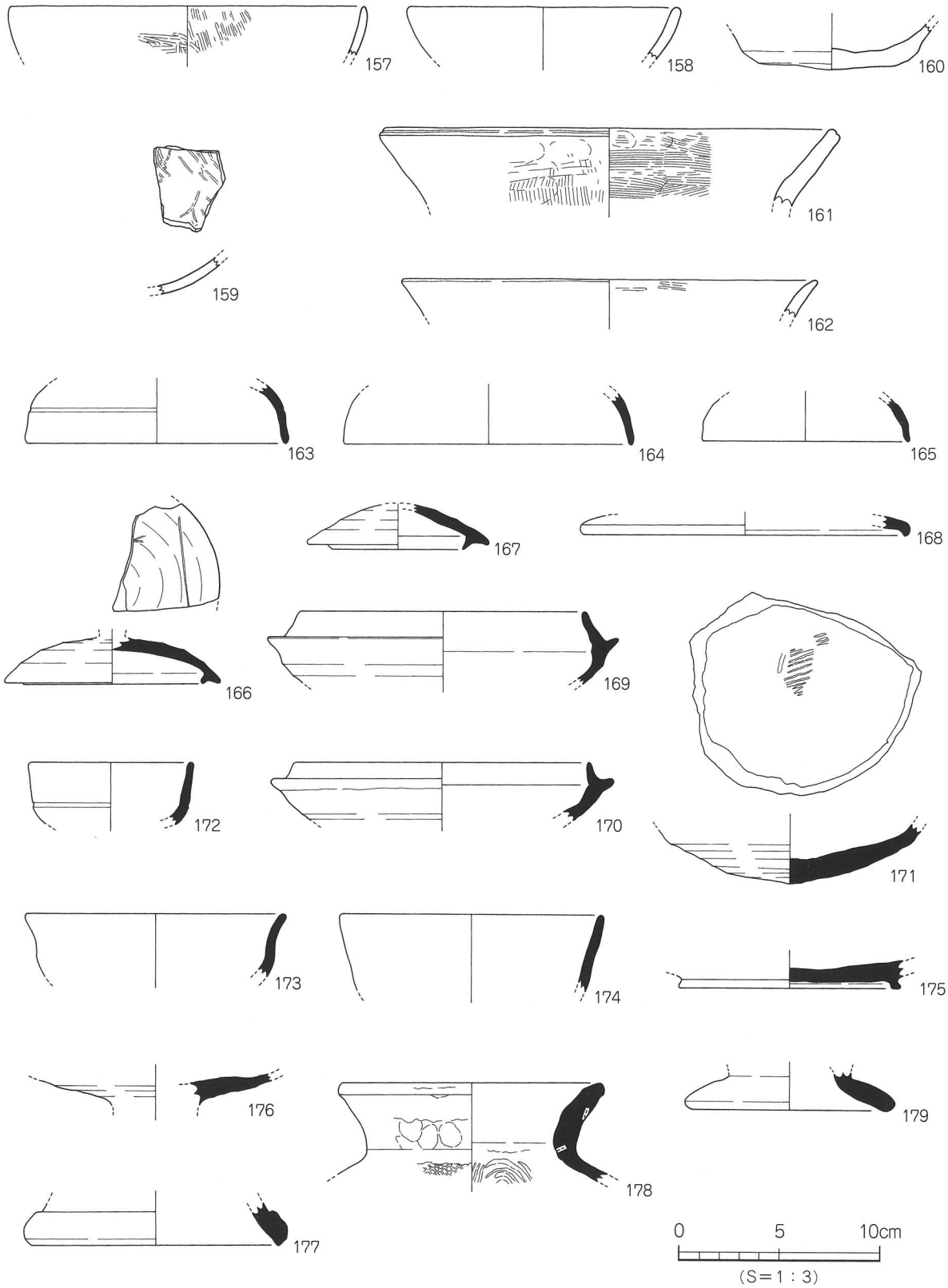


第202図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（2）

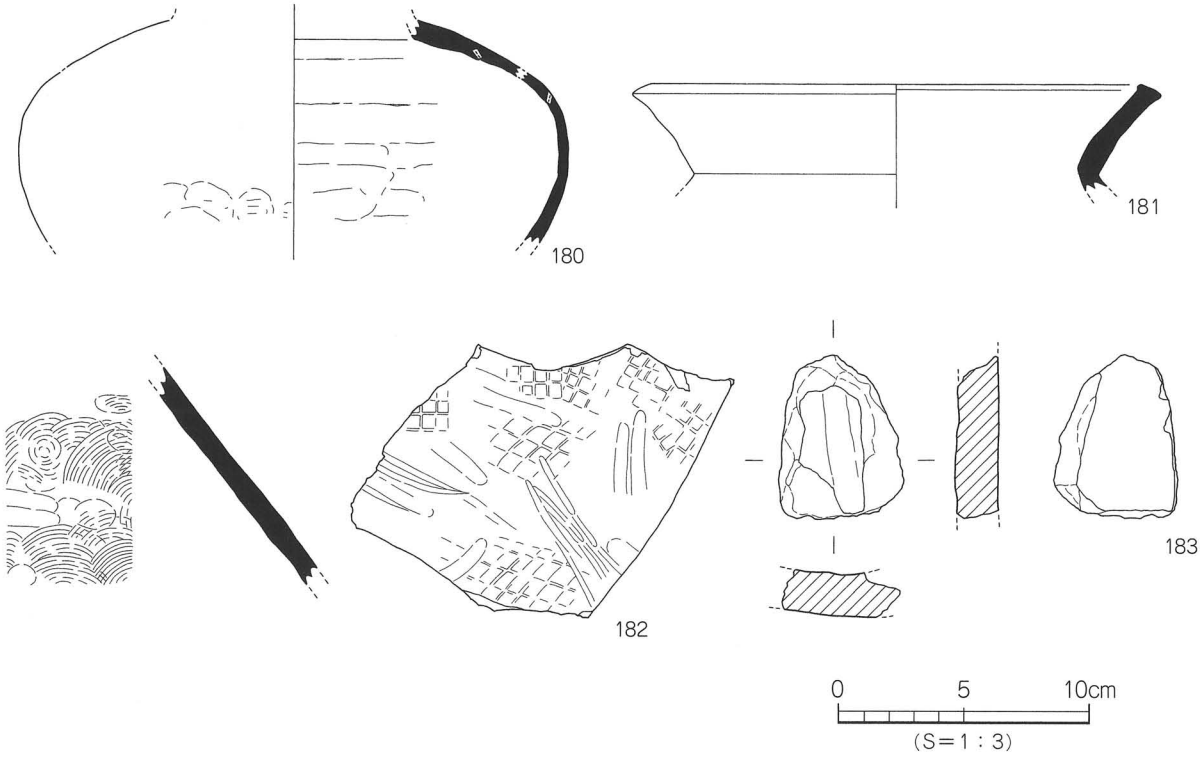
169 ～ 171 は坏身である。169 のたちあがりは長く内傾し、端部は丸い。受部は外方向に伸びる。170 のたちあがりは低く内傾し、端部は丸い。171 は底部完形品で、底部内面中央部に平行叩き痕が残る。172～175 は坏である。172 は体部下位に沈線状の凹みが巡る。173 は口縁部が外反し、口縁端部は丸い。174 は小片で口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味である。175 は高台の付く坏で、高台は直立する。176・177 は高坏である。176 は坏部小片、177 は脚部片で端部は丸い。178 ～ 180 は壺である。178 は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸い。179 は台付長頸壺の底部、180 は長頸壺の胴部である。181・182 は甕で、181 は口縁部が外反し、口縁端部は内方に肥厚する。182 は胴部片で、焼け歪みがみられる。183 は平瓦の小片である。



第203図　第Ⅲ②層出土遺物実測図（3）



第204図　地点不明出土遺物実測図（1）



第205図　地点不明出土遺物実測図（2）

４．まとめ

平井遺跡９次調査は、古代集落の範囲確認や構造解明を主目的として行った。調査の結果、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認することができた。

（１）弥生時代～古墳時代

弥生時代や古墳時代に時期比定される遺構は検出されなかったが、柱穴や包含層等から弥生前期や後期、古墳時代中・後期の土器片が出土した。これは、調査地周辺に該期の集落が存在することを示唆するものである。

（２）古　代

古代の遺構は、土坑２基と溝１条を検出した。ＳＫ１・２は径４ｍ前後を測る楕円形土坑で、土坑内からは主に飛鳥時代後半、７世紀後半の土師器や須恵器が出土した。完形品はほとんどなく、土器の大半は一部が欠損したものや破片である。出土品の中には焼け歪みのある須恵器や、火ぶくれのある須恵器、別個体が付着している須恵器などがあり、土坑内に土器を投棄した様子が伺える。なお、両土坑内から鉄斧や鉄滓の出土もみられた。このほか、溝ＳＤ１からは平安時代後期に時期比定される土師器や須恵器が出土した。

（３）中　世

中世の遺構は、土坑２基を検出した。ＳＫ３･４は検出層位より、中世段階の土坑と考えられる。また、第Ⅱ層中からも中世の遺物が出土していることから、少なくとも調査地近隣地域に中世集落が存在するものと推測される。

今回の調査では、７世紀後半に時期比定される２基の土坑が注目される遺構である。調査地を含む小野地区は近年の発掘調査の成果などから、須恵器の集積地あるいは流通における中継地ではないかとの指摘がある。２基の土坑からは破損品や焼成不良品が数多く出土していることから、調査地や近隣地域が製品価値のない土器を投棄するための廃棄場として土地利用されていた可能性がある。今後、調査地近隣の調査を含め、詳細を解明する必要がある。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

調整欄　　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、つ→つまみ部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、坏底→坏底部、体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 127　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模　(m) 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B１・２	レンズ状	4.64 × 1.10 × 0.09	東西	灰褐色シルト	土師・須恵	平安後期	

表 128　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模　(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B２～C３	楕円形	逆台形状	4.68 × (2.66) × 0.20	黒褐色シルト 褐灰色シルト	土師・須恵 鉄・石	７世紀後半	
2	B２～C３	楕円形	逆台形状	(4.42) × (2.50) × 0.38	黒褐色シルト 褐灰色シルト	土師・須恵 鉄	７世紀後半	
3	B１	楕円形	逆台形状	2.26 × (0.37) × 0.38	にぶい褐色シルト 褐色シルト	土師・須恵	中世	
4	C２	楕円形	逆台形状	1.96 × (0.48) × 0.38	褐色シルト	—	中世	

表 129　柱穴一覧

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模　(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	備　考
1	B２	円形	0.15 × 0.15 × 0.12	明褐色シルト	—	
2	B２	円形	0.20 × 0.20 × 0.11	明褐色シルト	—	
3	B２	円形	0.10 × 0.10 × 0.09	明褐色シルト	—	
4	B２	円形	0.10 × 0.10 × 0.14	明褐色シルト	—	
5	B２	不整円形	0.28 × 0.22 × 0.18	明褐色シルト	—	
6	B２	楕円形	0.22 × 0.16 × 0.18	明褐色シルト	—	
7	B３	円形	0.21 × 0.21 × 0.19	明褐色シルト	—	
8	B３	円形	0.21 × 0.21 × 0.20	明褐色シルト	—	
9	B３	円形	0.26 × 0.24 × 0.27	明褐色シルト	—	
10	B２・３	楕円形	0.32 × 0.21 × 0.17	明褐色シルト	—	
11	B３	円形	0.22 × 0.19 × 0.15	明褐色シルト	—	
12	B３	円形	0.20 × 0.18 × 0.20	明褐色シルト	—	
13	欠　番					
14	B２	楕円形	0.34 × 0.24 × 0.14	明褐色シルト	—	
15	B２	円形	0.18 × 0.17 × 0.14	明褐色シルト	—	
16	B２	楕円形	0.29 × 0.18 × 0.12	明褐色シルト	—	
17	B２	円形	0.34 × 0.28 × 0.08	明褐色シルト	—	
18	B３	円形	0.20 × 0.20 × 0.20	黒褐色シルト	土師	
19	B３	円形	0.26 × 0.26 × 0.08	黒褐色シルト	弥生	
20	B２	不整円形	0.38 × 0.36 × 0.08	明褐色シルト	—	
21	B２	円形	0.20 × 0.20 × 0.12	明褐色シルト	—	
22	B３	円形	0.20 × 0.18 × 0.05	黒褐色シルト	土師	
23	D３	円形	0.80 × 0.50 × 0.22	黒褐色シルト	弥生	

表 130　SD1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏	底径 (10.2) 残高 2.5	平底。破片。	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
2	坏	底径 (6.2) 残高 1.8	円盤高台。小片。	ナデ	ナデ	乳白褐色 灰褐色	密 ◎		
3	坏	口径 (14.2) 残高 3.5	口縁部はわずかに外反し、口縁端部は尖り気味となる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
4	坏	残高 2.3	平底。底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。	(体)回転ナデ (底)ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 131　SK1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
5	坏	口径 (16.4) 残高 4.7	口縁端部は内傾。体部内面に放射状の暗文を施す。	ヨコナデ ミガキ (マメツ)	ヨコナデ	明茶褐色 明茶褐色	石・長 (1) ◎		56
6	坏	口径 (11.6) 残高 2.9	口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味となる。	マメツ	マメツ	橙褐色 乳褐色	密 ◎		
7	高坏	底径 (10.1) 残高 7.8	脚部のほぼ完形品。柱部外面は面取りされる。胎土中に赤色酸化土粒を含む。	ナデ・ヨコナデ (マメツ)	ナデ (マメツ) ヨコナデ (マメツ)	橙茶色 乳茶褐色	密 ◎		56
8	甕	口径 (22.8) 残高 3.2	口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	マメツ	ミガキ マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
9	甕	口径 (22.6) 残高 4.4	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	淡橙褐色 淡橙褐色	石・長 (1) ◎		
10	甕	口径 (21.5) 残高 4.4	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ ナデ (マメツ)	乳黄橙色 乳黄橙色	長 (1) ◎		
11	坏蓋	口径 (9.4) 残高 3.3	天井部はほぼ平坦である。口縁部は直立気味に下がり、口縁端部は尖り気味となる。	回転ナデ	(天)ナデ (口)回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		56
12	坏蓋	口径 (10.3) 残高 2.8	口縁部は直立気味に下がり、口縁端部は尖り気味となる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
13	坏身	口径 8.5 器高 3.4	たちあがりは短く内傾する。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	(口)回転ナデ (底)ナデ	灰色 灰色	密 ◎		56
14	坏	口径 (9.3) 残高 3.2	口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味となる。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
15	甕	口径 (19.0) 残高 5.8	口縁部は短く外反し、口縁端部は丸い。	ハケ マメツ	ヨコナデ(マメツ) ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
16	甕	口径 (18.4) 残高 3.6	口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状となる。口縁下端部に２条の沈線文を施す。	回転ナデ 叩き	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
17	甕	口径 (24.3) 残高 9.9	口縁部は外反し、口縁端部は長方形状に肥厚する。口縁下端部に２条の沈線文を施す。	(口)回転ナデ (胴)平行叩き	(口)回転ナデ (胴)円弧叩き	暗灰色 灰色	密 ◎		56
18	甕	残高 12.1	胴部。	(胴)平行叩き→カキメ (底)静止ヘラケズリ	(胴)同心円叩き →回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
19	高坏	底径 (9.5) 残高 3.0	脚裾部は下外方へ屈曲する。	回転ナデ (マメツ)	ヨコナデ マメツ	灰色 灰色	密 ◎		

表 132　SK1 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
20	石斧	ほぼ完形	緑色片岩	20.0	1.8	0.8	63.2		

表 133　SK1 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
21	不明	—	鉄	1.6	3.3	0.3	2.5		56
22	鉄滓	—	鉄	7.7	5.4	2.9	123.2		56

表 134　SK2 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	坏	口径 (15.1) 残高 3.3	口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部内面に放射状暗文を施す。	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ナデ	乳白褐色 乳白色	密・金 ◎	黒斑	
24	椀	口径 13.0 器高 6.8	ほぼ完形品。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。平底。	ヨコナデ・ナデ ハケ (8 本 /cm)	ハケ・ナデ	赤橙褐色 橙褐色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎	黒斑	56
25	高坏	口径 (15.8) 器高 (9.9)	口縁部は内湾気味に立ち上がる。脚柱部外面に面取りされる。胎土に赤色酸化土粒を含む。	マメツ	マメツ ヨコナデ	淡橙色 淡褐色	密・金 ◎		56

SK2 出土遺物観察表　　土製品　　（2）

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	高坏	残高 6.9	脚部は「ハ」の字状に開き、柱部外面は面取りされる。	ケズリ・ナデ	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
27	高坏	底径 (9.0) 残高 1.7	脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は「コ」字状に丸い。小片。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡黄色	密 ◎	黒斑	
28	甕	口径 (18.0) 残高 2.9	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	ナデ	ハケ (5 本 /cm)	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
29	甕	口径 (24.8) 残高 4.7	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	ハケ マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1) ◎		
30	甕	口径 (16.4) 残高 10.0	口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。体部は内湾する。	ハケ ナデ (マメツ)	ハケ ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～4) 金 ◎		
31	甕	口径 (20.8) 残高 7.6	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ ハケ (5 本 /cm) タタキ	ハケ (7 本 /cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～5) 金 ◎		
32	甕	口径 (27.0) 残高 2.1	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	ハケ ヨコナデ	ヨコナデ マメツ	橙褐色 橙褐色	石・長(1) 金 ◎		
33	甕	口径 (31.0) 残高 3.1	口縁部は内湾し、口縁端部は内方へ肥厚する。小片。	ハケ・ヨコナデ (マメツ)	マメツ	橙黄色 橙黄色	石・長(1) ◎		
34	甑か鍋	残高 6.9	把手部。胎土中に赤色酸化土粒を含む。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳褐色	石・長(1～3) ◎		
35	甕	口径 (22.5) 残高 4.4	口縁部は短く外反し、口縁端部は丸い。口縁部内面に粘土痕あり。小片。	ミガキ	マメツ	乳黄色 乳褐色	石・長(1～3) ◎		
36	壺	底径 (8.2) 残高 7.5	上げ底。底部外面と体部内外面に粘土接合痕がみられる。	ミガキ (マメツ) ナデ	ミガキ (マメツ)	乳褐色 黒褐色	石・長(1) ◎	黒斑	
37	壺	底径 5.2 残高 5.3	底部は中央部がやや凹む。	ミガキ ナデ	ハケ ナデ	淡乳橙色 乳白色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
38	坏蓋	口径 (9.5) 器高 3.6	天井部外面に回転ヘラ切り痕あり。	回転ナデ	㊦ナデ ㊥回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		56
39	坏蓋	口径 (11.8) 残高 3.0	口縁部は外反し、端部は尖り気味に丸い。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
40	坏蓋	口径 (10.1) 残高 1.7	かえりは短く内傾し、端部は尖る。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	㊦ナデ ㊥回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
41	坏蓋	口径 (10.8) 残高 2.9	かえりは短く、端部は尖る。1／3の残存。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	㊦ナデ ㊥回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
42	坏身	口径 (9.0) 器高 3.5	扁平な底部。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	㊥回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	㊥回転ナデ ㊧ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		56
43	坏身	口径 (10.1) 残高 2.3	受部は短く上方に伸び、たちあがりは内傾し短い。赤焼け。小片。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 褐色	密 ◎		
44	坏	口径 (8.6) 器高 3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸い。体部外面に沈線 1 条を施す。	㊥回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	㊥回転ナデ ㊧ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		57
45	坏	口径 (9.0) 器高 3.1	平底。口縁部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。	㊥回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	㊥回転ナデ ㊧ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎		57
46	坏	口径 (11.2) 器高 2.8	平底。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	㊥回転ナデ ㊧ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
47	壺	口径 (7.8) 残高 11.5	長頸壺。口縁部は直線的に開き、口縁端部は丸い。	回転ナデ ナデ→回転ナデ	回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
48	壺	口径 (12.0) 残高 4.7	口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状。	㊥回転ナデ ナデ	㊥回転ナデ 円弧叩き	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
49	高坏	底径 (8.0) 残高 3.9	脚裾部は下外方へ屈曲し、端部外面に沈線 1 条を施す。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
50	平瓶	口径 8.3 残高 5.8	口縁端部は内方に肥厚する。	㊥回転ナデ カキメ	㊥回転ナデ ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
51	提瓶	口径 (9.1) 残高 5.5	口縁部は直立し、口縁端部は面をもつ。口縁部外面に沈線 1 条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
52	甕	残高 6.7	大型品。口縁部外面に 14 ～ 28 本の波状文と凹線 3 条を施す。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
53	蓋	口径 (28.4) 残高 7.2	天井部外面に沈線 2 条あり。	回転ヘラケズリ・カキメ ㊥回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		57

表 135　SK2 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
54	鉄滓	—	鉄	4.7	4.0	2.1	38.3		

表 136　SK3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
55	高坏	底径 (7.3) 残高 7.4	脚部は外反し、脚端部は下方に屈曲する。柱部中位外面に沈線２条を施す。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 137　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
56	壺	残高 10.5	広口壺。	ハケ (5～6本/cm)	ハケ (6本/cm) ナデ	乳黄褐色 黒色	石・長 (1～3) ◎	SP23	
57	甕	底径 (3.0) 残高 2.9	平底。小片。	ナデ・ハケ ナデ	ナデ	灰褐色 黒灰色	石・長 (1～3) ◎	SP23	
58	甕	残高 8.7	胴部小片。	ナデ ハケ (6～7本/cm)	ナデ→ ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	石・長 (1～2) ◎	SP19	

表 138　第Ⅱ①層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
59	坏	口径 (17.0) 残高 2.5	口縁部は外傾し、口縁端部は尖り気味である。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡白色 乳白褐色	密 ◎		
60	坏	口径 (11.5) 残高 2.1	口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	密 ◎		
61	椀	口径 (14.0) 残高 3.1	口縁部はやや外反し、口縁端部は尖り気味である。内黒椀。	ヨコナデ	ミガキ	乳白黄色 黒褐色	密 ◎		
62	椀	底径 (7.0) 残高 1.5	垂直に伸びる短い高台がつく。端部は尖り気味である。内黒椀。	マメツ (ハケ) (底)ヨコナデ	ナデ	淡乳褐色 黒色	石 (1～2) ◎		

表 139　第Ⅲ①層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
63	坏蓋	つまみ径 (2.8) 残高 1.9	つまみ部分の完形品。つまみ中央部は凹む。赤色酸化土粒を含む。	ヨコナデ ミガキ	ナデ	橙褐色 橙褐色	密・金 ◎	黒斑	
64	坏蓋	つまみ径 3.1 残高 1.6	つまみ部分の完形品。つまみ中央部は凹む。	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
65	坏	底径 (8.8) 残高 1.2	高台坏。底部は「ハ」の字状に開き、内端面で接地する。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	密 ◎		
66	皿	口径 (19.3) 残高 3.1	体部内面に放射状暗文を施す。赤色塗彩土器。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	橙褐色 乳白色	密 ◎		57
67	皿	口径 (14.8) 器高 1.5	口縁部は上外方にひねりだされ、底部は平底である。赤色塗彩土器。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	淡乳褐色 乳橙色	密 ◎		57
68	皿	口径 (8.8) 残高 1.6	口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。底部にスノコ痕あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎	黒斑	
69	高坏	残高 2.9	柱部外面は面取りされる。小片。	ナデ (マメツ)	ヨコナデ	淡橙黄色 淡黄褐色	密 ◎		
70	甕	口径 (20.8) 残高 6.1	内湾口縁。口縁端部は内傾する。器壁は厚い。小片。	ヨコナデ ハケ	ハケ (5～6本/cm)	褐色 褐色	石・長 (1～3) 金 ◎		
71	甕	残高 6.6	胴部小片。	ナデ ハケ (マメツ)	ハケ 板ナデ	淡橙色 橙色	石・長 (1～3) ◎		
72	坏	口径 (13.2) 器高 3.1	瓦質土器。口縁部は外傾し、口縁端部は丸い。底部は平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳白色	密 ◎		
73	甕	底径 (11.0) 残高 3.8	瓦質土器。平底。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳褐色	密 ◎		
74	瓦	残長 6.1 厚さ 1.7	平瓦。凹面に布目痕が残る。小片。	布目痕 (マメツ)	マメツ	黄褐色 淡灰褐色	石・長 (1～2) ◎		57
75	坏蓋	口径 (7.3) 残高 2.1	かえりは内傾し、口縁端部は丸い。小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
76	坏蓋	口径 (12.2) 残高 2.4	天井部は丸みをもち、かえりは内傾し、口縁端部は丸い。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天)ナデ (口)回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
77	坏蓋	口径 (11.0) 残高 2.2	天井部は丸みをもち、かえりは内傾し、口縁端部は丸い。小片。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
78	坏蓋	つまみ径 2.1 残高 2.3	つまみ部分の完形品。水平な天井部に中央部が凹むつまみが付く。	(つ)回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
79	坏蓋	口径 (15.0) 残高 1.1	口縁部は下方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
80	坏蓋	口径 (15.4) 残高 0.9	口縁部は下外方に屈曲し、口縁端部は丸い。口縁部外面に沈線１条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

第Ⅲ①層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
81	坏	口径 (10.3) 器高 3.8	口縁部は直立気味に立ち上がる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊐回転ナデ ㊡ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
82	坏	口径 (11.0) 器高 2.5	底部は平底。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。小片。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
83	坏	底径 (7.6) 残高 2.2	平底。	回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ ㊡ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
84	坏	底径 (9.4) 残高 1.8	平底。	回転ナデ	回転ナデ	白灰黄色 淡灰色	密 ◎		
85	坏	底径 (5.5) 残高 1.5	円盤高台。	ナデ	回転ナデ ㊡ナデ	黄白色 白灰色	密 ◎		
86	坏	口径 (12.7) 器高 4.0	「ハ」の字状の高台。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊐回転ナデ ㊡ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	自然釉	
87	坏	口径 (13.7) 器高 4.4	「ハ」の字状に開く高台。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
88	坏	底径 (12.3) 残高 2.3	短く直立する高台。	回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
89	高坏	残高 8.6	脚部。柱部に２条の沈線を施す。	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
90	高坏	底径 10.8 残高 6.0	脚部。裾部は「ハ」の字状に開き、脚端部は「コ」字状に丸い。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
91	高坏	残高 5.0	脚部。裾部は「ハ」の字状に開く。	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
92	壺	口径 (11.6) 残高 4.5	広口壺。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	㊐回転ナデ ㊢ナデ	淡灰褐色 淡灰色	密 ◎		
93	壺	口径 (11.8) 残高 5.4	広口壺。口縁部は外傾し、端部は内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密 ◎		
94	壺	口径 (8.0) 残高 3.7	長頸壺。口縁部は外反し、丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
95	壺	残高 4.5	長頸壺。肩部に刻目文と沈線１条を施す。	回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
96	壺	残高 10.9	長頸壺。肩胴部の境界に沈線１条を施す。	回転ナデ 静止ヘラケズリ	回転ナデ ケズリ	灰色 灰色	密 ◎		
97	壺	残高 4.4	肩部外面に刻目文と沈線を施す。赤焼け土器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 茶色	密 ◎		
98	壺	底径 (9.3) 残高 3.1	脚付長頸壺の脚部。裾部は「ハ」の字状を呈し、脚端部は丸くおさまり接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
99	壺	残高 5.6	肩部に 0.8cm大の円孔あり。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		57
100	甕	残高 5.2	胴部外面に沈線１条を施す。	㊥上回転ナデ ㊥下回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
101	甕	口径 (17.3) 残高 2.6	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
102	甕	口径 (16.8) 残高 4.2	口縁部は外反し、口縁端部は内方へ肥厚する。小片。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ◎		
103	甕	口径 (20.4) 残高 5.4	口縁部は外反し、口縁端部は上内方へ肥厚する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密 ◎	自然釉	
104	甕	口径 (28.0) 残高 1.9	口縁部は水平に短く伸び、口縁端部は「コ」字状となる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
105	甕	口径 (23.2) 残高 10.5	口縁部外面に沈線１条と円形浮文１ヶを看取。	㊥回転ナデ ㊥カキメ	㊥回転ナデ ㊥円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	57
106	甕	残高 7.5	頸部～胴部。頸部外面に沈線２条あり。	㊥回転ナデ ㊥平行叩き	㊥回転ナデ ㊥円弧叩き	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
107	甕	残高 6.5	肩部に火ぶくれ痕あり。小片。	平行叩き →ナデ	円弧叩き →回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	57
108	甕	残高 5.3	器壁は厚い。小片。	格子叩き (マメツ)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
109	甕	口径 (42.6) 残高 6.7	口縁部は短く外反し、口縁端部は「コ」字状となる。	㊥回転ナデ ㊥平行叩き	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
110	硯	口径 (14.4) 残高 3.3	円面硯。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		57

表 140　第Ⅲ②層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量 (cm)	形　態・施　文	調　整 外面	調　整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
111	坏	口径 (12.5) 残高 3.3	口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部内面に暗文を施す。	ナデ・ヨコナデ	マメツ	淡黄茶色 明黄茶色	密 ◎		
112	坏	口径 (16.7) 残高 3.8	口縁部は内湾気味に立ち上がる。	マメツ (ミガキ)	マメツ (ミガキ)	淡橙黄色 淡橙黄色	密 ◎		
113	坏	残高 2.7	体部内面に暗文あり。小片。	ナデ	ミガキ	淡赤褐色 淡赤褐色	密 ◎		
114	坏	残高 3.4	体部内面に暗文あり。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ	暗灰茶色 淡茶色	密 ◎		
115	坏	底径 (8.8) 残高 2.4	平底。小片。	マメツ	ナデ (マメツ)	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
116	坏	底径 (9.4) 残高 1.1	平底。底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。底部内面に工具痕あり。	ヨコナデ	マメツ	乳茶色 乳茶色	密 ◎		
117	坏	底径 (7.1) 残高 2.1	円盤高台の底部。平底。	ヨコナデ ナデ	マメツ	橙褐色 橙褐色	密 ◎		
118	皿	口径 (18.6) 残高 2.3	口縁部は内湾気味に立ち上がり、体部内面に暗文を施す。	ヨコナデ・ナデ 工具ナデ	ヨコナデ ミガキ	淡黄茶色 黄茶色	密 ◎		
119	高坏	残高 6.1	脚柱部。胎土中に赤色酸化土粒を少量含む。	ナデ	ナデ シボリ痕	乳橙色 乳橙色	密 ◎		
120	高坏	底径 (9.9) 残高 1.9	脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は尖り気味。	マメツ (ナデ)	マメツ (ナデ)	橙茶色 橙茶色	密 ◎	黒斑	
121	甕	口径 (28.6) 残高 4.8	口縁部は外反し、口縁端部は上内方に肥厚する。小片。	マメツ	ヨコナデ マメツ	橙色 橙色	長 (1 ～ 2) ◎		58
122	甕	口径 (17.0) 残高 3.7	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	ナデ・ハケ	ハケ (5 本 /cm)	淡茶褐色 茶褐色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		58
123	甕	口径 (24.0) 残高 2.3	口縁部は内湾し、口縁端部は内方へ肥厚する。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ) ハケ (7 本 /cm)	明茶色 明茶色	密 ◎		
124	甕	口径 (22.8) 残高 5.2	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ ㊞工具ナデ	明黄茶色 明黄茶色	石・長 (1) ◎		
125	甕	口径 (29.8) 残高 5.9	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。口縁部内面に布目痕と接合痕がみられる。	ヨコナデ・ナデ	ナデ	乳黄色 乳褐色	長 (1 ～ 3) ◎	黒斑	
126	坏蓋	口径 9.6 器高 3.1	完形品。笠状の天井部に乳頭状のつまみが付く。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊤ナデ ㊐回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		58
127	坏蓋	口径 (10.6) 残高 1.8	かえりはわずかに内傾し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
128	坏蓋	口径 (10.0) 残高 2.0	かえりはわずかに内傾し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊤ナデ ㊐回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
129	坏蓋	口径 (9.8) 残高 2.0	丸味をもつ天井部。かえりは内傾し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
130	坏蓋	口径 (8.2) 残高 2.2	かえりはわずかに外反し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊤ナデ ㊐回転ナデ	黒灰褐色 灰色	密 ◎	自然釉	
131	坏蓋	口径 (11.7) 器高 3.4	笠状の天井部に中央が突出するつまみが付く。かえりは内傾し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊤ナデ ㊐回転ナデ	灰茶色 灰色	密 ◎	自然釉	58
132	坏蓋	つまみ径 1.2 残高 1.7	乳頭状のつまみ。	ナデ 回転ナデ	ナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密 ◎		
133	坏身	口径 (9.9) 残高 3.1	受部は短く上方に伸び、たちあがりは短く内傾する。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
134	坏	口径 (10.8) 器高 3.5	口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
135	坏	口径 (10.0) 器高 3.0	口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
136	坏	口径 (8.6) 器高 3.2	口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	㊐回転ナデ ㊡ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎	自然釉	
137	坏	口径 (8.9) 器高 3.8	口縁部は直立し、口縁端部は丸い。底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。	回転ナデ	㊐回転ナデ ㊡ナデ	灰色 灰色	密 ◎		58
138	坏	口径 (10.2) 器高 3.7	口縁部は直立し、口縁端部は丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
139	皿蓋	口径 (28.1) 残高 2.3	かえりは短く、下方に垂下し、端部は丸い。	マメツ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ○		
140	皿蓋	口径 (27.4) 残高 4.1	かえりは下方に垂下し、口縁部外面に火ぶくれ痕あり。胎土中に黒色酸化土粒を含む。	ハケ 回転ナデ	㊤ナデ 回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		58
141	皿	口径 (28.6) 残高 3.3	口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊐回転ナデ ㊡ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		

第Ⅲ②層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
142	高坏	口径 (10.1) 器高 9.3	脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は下外方へ屈曲する。赤焼け土器。	回転ナデ	回転ナデ	茶色 茶色	密 ◎	自然釉	58
143	高坏	底径 (10.9) 残高 5.4	脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は下外方へ屈曲する。	マメツ	マメツ (回転ナデ)	白灰色 白灰色	密 △		
144	高坏	底径 (9.3) 残高 2.4	脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は下方へ屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白褐色 灰白褐色	密 ◎		
145	高坏	残高 4.8	低脚。	(坏底)回転ヘラケズリ (脚) 回転ナデ	(坏底)ナデ (脚) 回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
146	壺	残高 8.4	長頸壺。肩部外面に沈線1条を施す。胴部に火ぶくれ痕。胎土中に黒色酸化土粒を含む。	(胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
147	平瓶	口径 (7.8) 残高 4.8	口縁部は直立し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎		
148	提瓶	残高 2.9	肩部片。	(頸)回転ナデ マメツ	(頸)回転ナデ ナデ	灰色 淡青灰色	密 ◎	自然釉	
149	甕	口径 (29.2) 残高 8.0	口縁部は短く外反し、口縁端部は珠玉状となる。	(口)回転ナデ・ナデ (胴)平行叩き	(口)回転ナデ (胴)円弧叩き	青灰色 青灰色	密 ◎		58
150	甕	口径 (23.5) 残高 11.7	直口口縁。頸部に沈線1条と、火ぶくれの痕跡あり。	(口)回転ナデ (胴)平行叩き→カキメ	(口)回転ナデ (胴)円弧叩き	淡灰色 淡灰色	密 ◎	自然釉	58
151	甕	口径 (34.2) 残高 4.7	口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。小片。	(口)回転ナデ (胴)カキメ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
152	甕	残高 9.3	胴部片。別個体の破片が付着。	平行叩き →カキメ	円弧叩き	淡灰色 淡灰色	密 ◎	自然釉	58
153	壺	口径 (20.6) 残高 3.9	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。口縁部外面に段をもつ。	ヨコナデ ハケ→ナデ	ハケ→ヨコナデ ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1) 金 ◎		
154	壺	口径 (10.0) 残高 3.1	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	ハケ(5～6本/cm) (マメツ)	ハケ(5～6本/cm) (マメツ)	淡褐色 黄褐色	密 ◎	黒斑	
155	壺	底径 (9.4) 残高 3.6	平底。	ミガキ・ナデ マメツ	ミガキ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～4) ◎		
156	土製品	残高 2.0	鳥袋状土製品の口縁部小片。	ハケ→ナデ	ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶色	密 ◎		58

表141　地点不明出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
157	坏	口径 (17.4) 残高 2.4	口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。口縁部内面に暗文を施す。	ヨコナデ・ナデ ミガキ	マメツ	淡黄茶色 淡茶色	密 ◎		
158	坏	口径 (13.2) 残高 2.6	口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。小片。	ナデ	ナデ	乳白褐色 乳白褐色	密 ◎		
159	坏	残高 1.8	内面にミガキ状の暗文あり。小片。	ミガキ・ナデ	マメツ	淡黄褐色 明茶色	密 ◎		
160	坏	底径 6.9 残高 2.3	底部はわずかに上げ底。小片。	ヨコナデ (底)回転ヘラケズリ	ヨコナデ (底)ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
161	甕	口径 (22.0) 残高 3.7	口縁部は外傾し、口縁端面はナデにより凹む。	ヨコナデ ハケ(6本/cm)	ハケ(7本/cm) ヨコナデ	淡茶褐色 茶色	石・長(1～3) ◎		
162	甕	口径 (20.3) 残高 1.8	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ(ミガキ)	橙色 橙色	密 ◎		
163	坏蓋	口径 (12.8) 残高 2.9	天井部と口縁部の境界に凹線あり。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 灰色	密 ◎		
164	坏蓋	口径 (14.2) 残高 2.5	口縁部は内湾し、端部は尖り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
165	坏蓋	口径 (10.1) 残高 2.1	口縁部は内湾気味に外方向に伸び、端部は尖り気味に丸い。小片。	(天)ナデ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
166	坏蓋	口径 (8.8) 残高 2.5	かえりは短く内傾する。天井部に線刻あり。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天)ナデ (口)回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
167	坏蓋	口径 (9.0) 残高 2.2	受部は水平に伸び、かえりは短い。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
168	坏蓋	口径 (15.9) 残高 1.0	口縁部は下方に屈曲し、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
169	坏身	口径 (14.0) 残高 3.5	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は外方向に伸びる。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
170	坏身	口径 (14.4) 残高 2.8	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は水平に伸びる。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
171	坏身	底径 4.0 残高 3.0	底部内面中央部に平行叩き痕あり。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ (底)平行叩き	青灰色 青灰色	密 ◎		

地点不明出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
172	坏	口径 (7.9) 残高 3.0	口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
173	坏	口径 (12.8) 残高 3.1	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 淡灰色	密 ◎		
174	坏	口径 (12.8) 残高 3.8	口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味である。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
175	坏	底径 (10.9) 残高 1.4	高台の付く坏。高台は直立する。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
176	高坏	残高 1.6	坏部小片。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
177	高坏	底径 (12.2) 残高 2.1	脚端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ (マメツ)	灰褐色 淡褐色	密 ◎		
178	壺	口径 (12.8) 残高 4.9	口縁部は短く外反し、口縁端部は丸い。	(口)ナデ (胴)格子叩き	(口)回転ナデ (胴)円弧叩き	黒灰色 暗灰色	密 ◎		
179	壺	底径 (9.6) 残高 1.8	台付長頸壺の底部片。	回転ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
180	壺	残高 (8.3)	長頸壺の胴部片。	マメツ ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
181	甕	口径 (19.2) 残高 4.2	口縁部は外反し、口縁端部は内方に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		
182	甕	残高 7.9	胴部片の、焼き歪みあり。	格子叩き →ナデ	円弧叩き →ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
183	瓦	残長 6.4 厚さ 1.8	平瓦。小片。	ケズリ	マメツ	灰色 淡黒色	石・長(1～2) ◎		

第10章　調査の成果と課題

今回報告する平井遺跡（３次～７次調査）では、弥生時代前期から中近世までの遺構や遺物を確認することができた。ここでは、時代別に概要を説明する。

弥生時代

調査地内における集落の出現は、弥生時代前期である。竪穴住居は未検出であるが、弥生時代前期に時期比定される土坑が平井遺跡５・６・７次調査で検出された。特に、６次調査からは前期前半から末の土坑11基が確認されている。調査地北東域にある五楽遺跡や古市遺跡でも、当該期の土坑のほか自然流路内から遺物が出土しており、小野・平井地区には弥生時代前期集落が広範囲にわたり存在していたものと考えられる。また、中期から後期にかけては３次調査で溝（中期後半）や土坑（後期）、８次調査では土坑（中期後半）が検出されており、弥生時代を通して集落が継続して営まれていたものと推測される。

古墳時代

調査では、古墳時代後期の遺構や遺物が数多く検出された。竪穴住居は５次調査にて４棟、７次調査では１棟が確認された。いずれも平面形態は方形プランを呈し、一部、カマドが検出されている。特に、５次調査検出のＳＢ２ではカマド上部に遺存する甕や甑の上に須恵器坏身が置かれており、住居廃絶に伴うカマド祭祀が行われたものと考えられる。このほか、掘立柱建物は全調査にて28棟が検出されている。５次調査では建物の重複が認められることなどから、古墳時代後期には継続的に集落が営まれていたことが伺われる。なお、検出した建物は比較的小規模のものが多く見られることから、居住というよりはむしろ倉庫的様相が強いと考えられる。これらの建物以外には、溝や土坑が検出されている。３次調査検出の溝ＳＤ２とＳＤ５は平行な位置関係にあり、集落に伴う何らかの施設の可能性がある。また、７次調査で検出した溝ＳＤ４出土の瓹には頸部を打ち欠いた痕跡があり、さらにうつ伏せの状態で出土したことから、溝に伴う祭祀的儀礼が取り行われたものと推測される。

調査地周辺においては、古市遺跡や下苅谷遺跡で当該期の竪穴住居や掘立柱建物、土坑などが数多く確認されており、今回の調査結果をふまえると、古墳時代後期には小野・平井地区一帯に大規模な集落が継続的に営まれていたものと考えられる。

古　　代

古代では、９次調査において検出された７世紀後半に時期比定される土師器・須恵器が出土した土坑が注目される遺構である。ＳＫ１・２は径４ｍを測る楕円形土坑で、土坑内からは焼け歪みや火ぶくれのある須恵器を含む大量の須恵器が投棄された状態で出土した。既往の調査成果より、小野・平井地区は地区北東部に所在する須恵器窯で製作された須恵器の集積地あるいは流通における中継地ではないかとの指摘があり、今回検出した２基の土坑は、流通等における土器の廃棄場として利用された可能性が高いと考えられる。また、平安期には６次調査において土坑が、９次調査では溝が検出されたほか包含層中からも該期の土器が出土している。

中　世

すべての調査において、中世の遺構や遺物が確認されている。検出した遺構は溝と土坑であり、５次調査と８次調査検出の溝は農耕に伴う水路として機能したものと推測される。畦畔や鋤址など、直接的な水田耕作に伴う遺構は未検出ではあるが、調査地近隣地域には中世段階に水田や畑などの生産域が広がっているものと推測される。なお、調査地南方にあり水泥地区では中近世の水田址や畑址が数多く確認されている。このほか、４次調査検出の土坑ＳＫ２は径 0.87 ～ 1.07 m、深さ 96cmを測る楕円形土坑であるが、埋土の堆積状況から井戸の可能性をもつ遺構である。また、５次調査検出の土坑ＳＫ２は長さ 1.3 m、幅 1.03 m、深さ 12cmを測る長方形土坑で、土坑基底面からは土師器坏や皿が並べられた状態で出土しており土坑墓と考えられる遺構である。なお、ＳＫ２は出土品の特徴より、13 世紀代の遺構である。

近　世

近世の遺構は、３次調査と５次調査にて溝が検出されたほか、５次調査と６次調査からは暗渠、７次調査からは鋤址が検出されている。なお、第Ⅱ層中からも江戸時代後期に陶磁器片や瓦片などが少量ではあるが出土している。

調査全体をみると、調査地を含む小野・平井地区には古墳時代後期を中心とした集落が広範囲にわたり存在し、古代まで継続的に集落が営まれていたものと考えられる。その後、中近世では小規模な建物や水田址などが検出されていることから、農村的集落が営まれたものと思われる。

また、地区内における集落の出現期を知る手がかりや、古代においては同地区と松山平野東部古窯跡群との関係が知れる遺物が数多く発見され、生産地と消費地とをつなぐ集落のあり方を解明する貴重な資料を得ることができた。

今後、資料の収集や整理を重ね、小野・平井地区における集落の変遷や動態を解明する必要がある。

写 真 図 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100 F		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240㎜F 5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4. 製版　写真図版175線

印刷　オフセット印刷

用紙　マットコート76.5kg

製本　アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

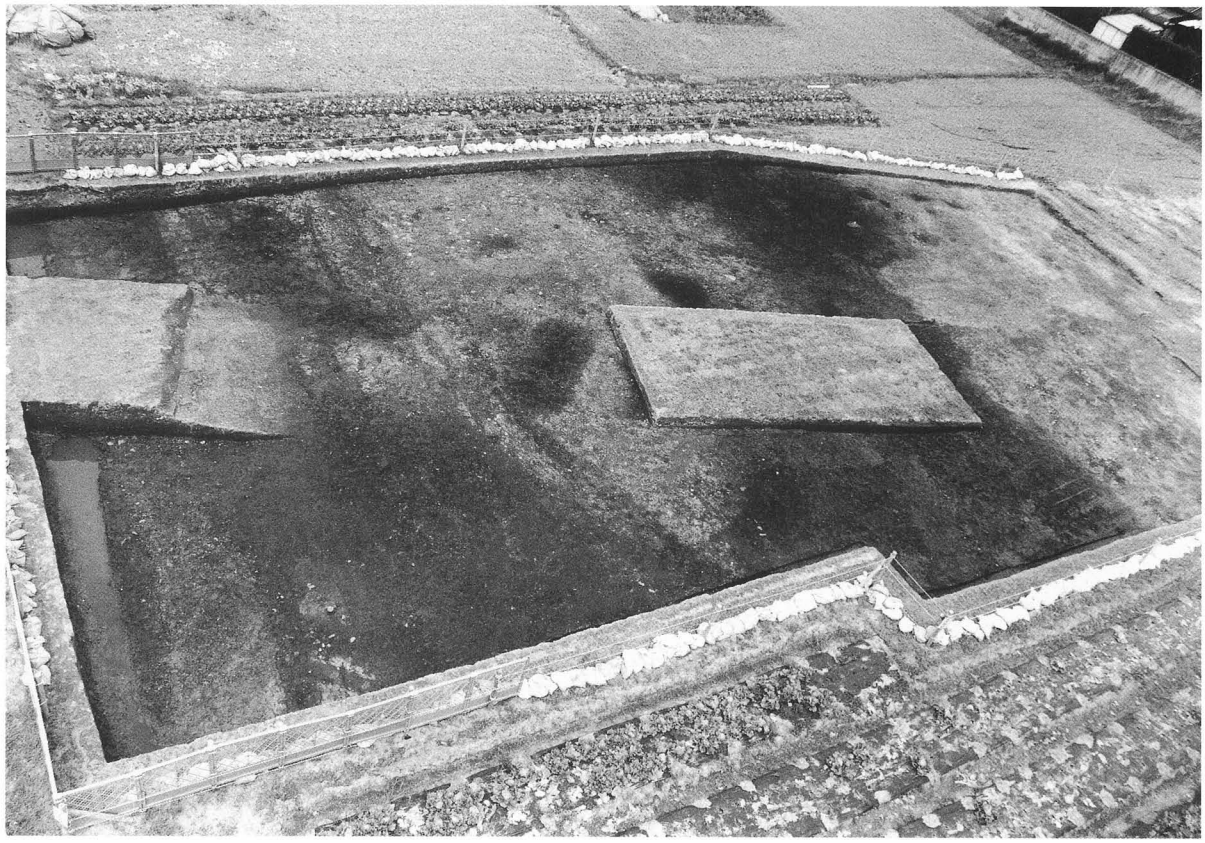
１．調査前全景（南西より）

２．重機による表土掘削（東より）

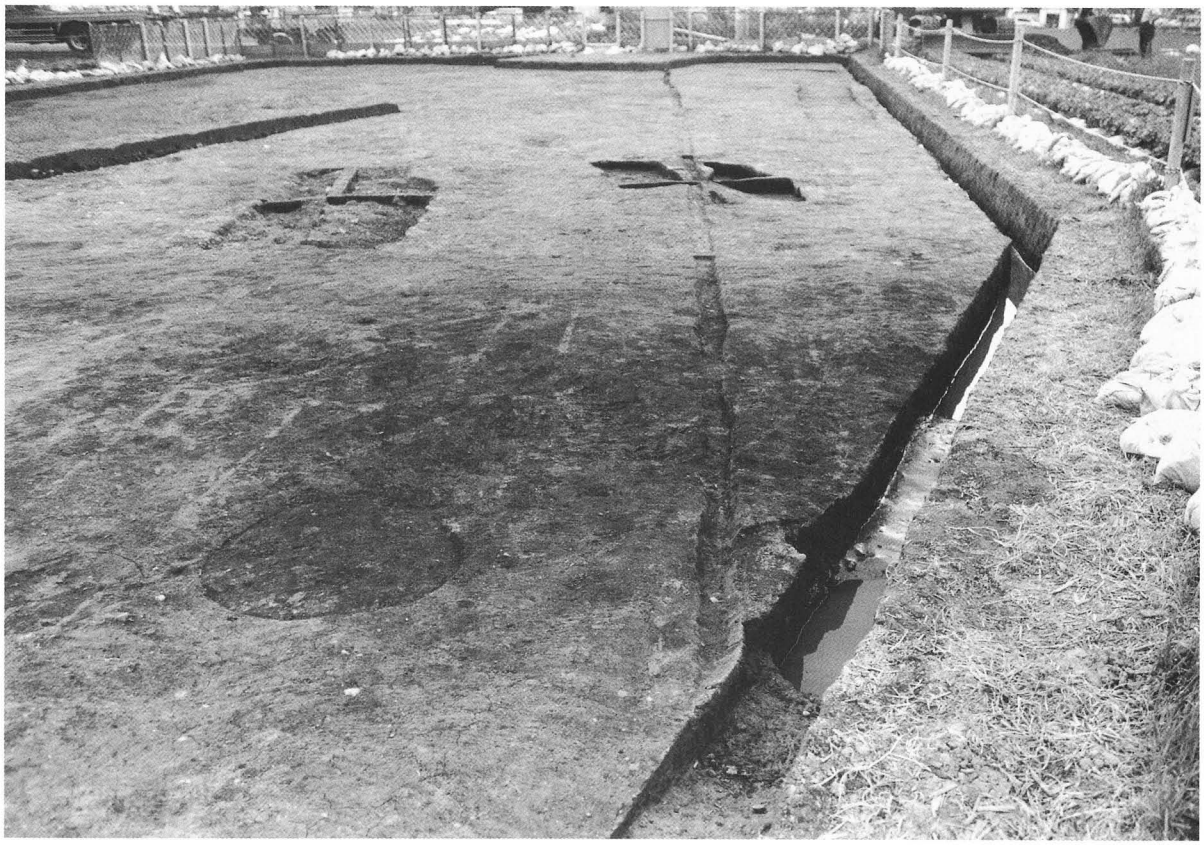
図版二

１．調査風景（南西より）

２．西壁土層（東より）



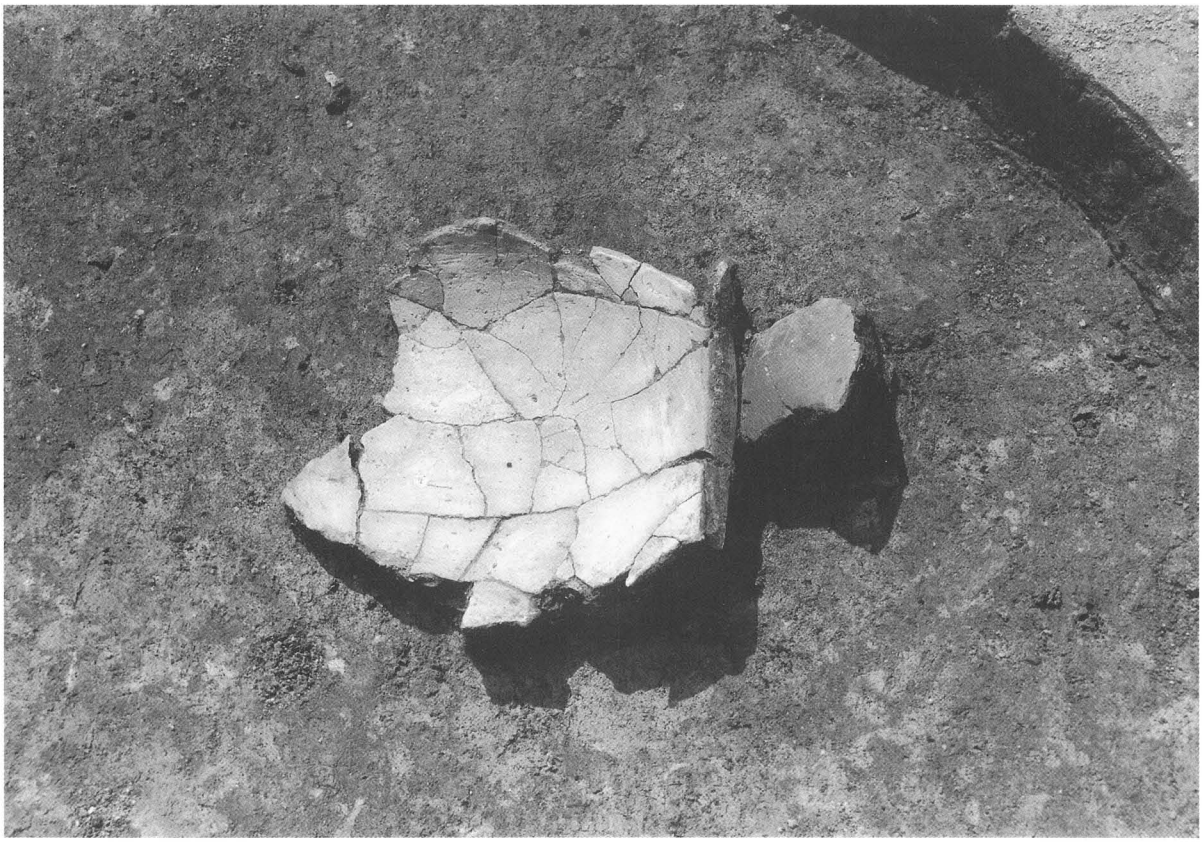
１．第Ⅱ層上面遺構検出状況（南東より）



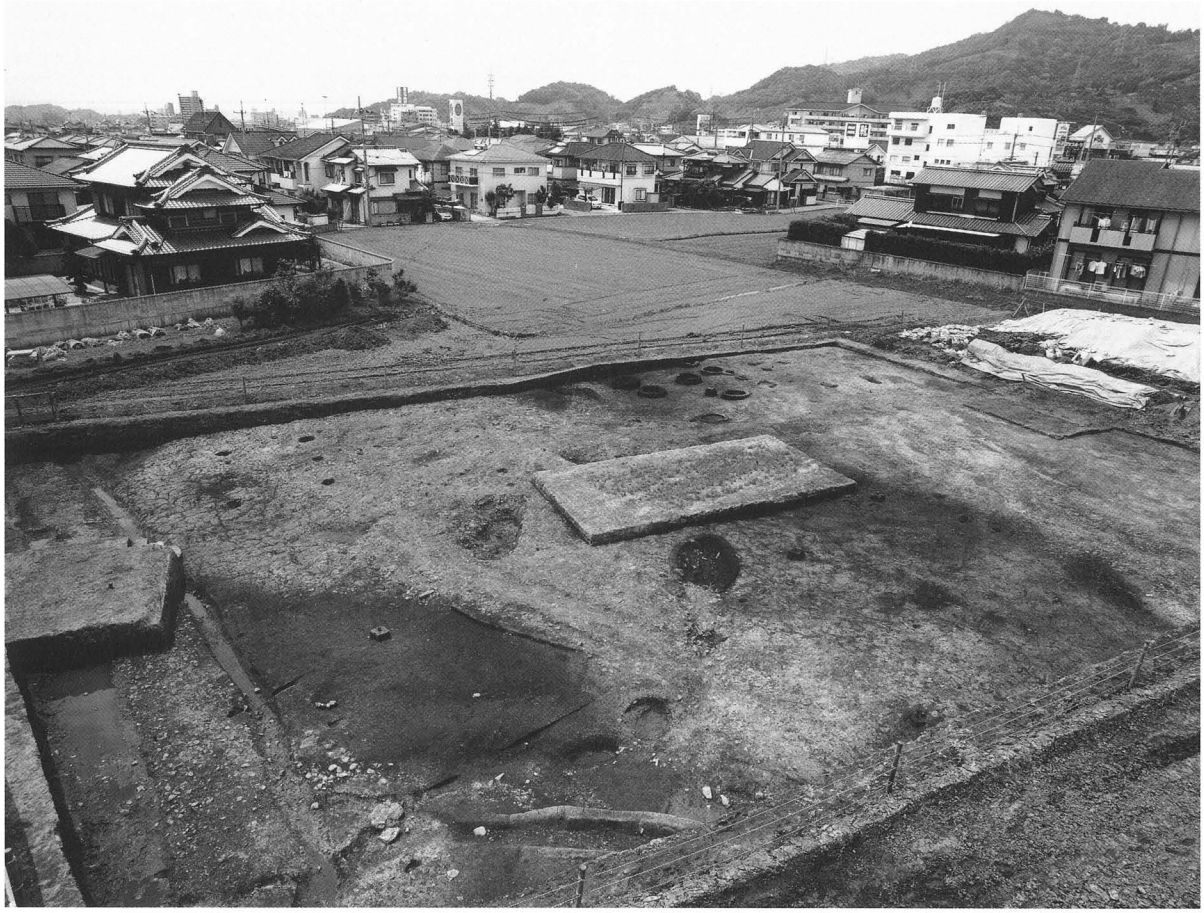
２．第Ⅱ層上面遺構完掘状況（北より）

図版四

１．ＳＸ３遺物出土状況（西より）



２．ＳＫ６遺物出土状況（東より）

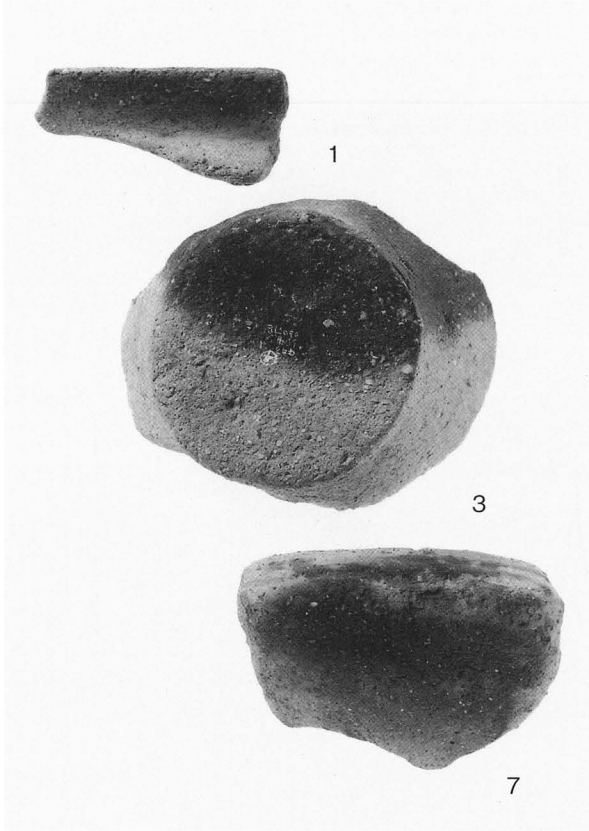


１．遺構完掘状況（南東より）

２．掘立２完掘状況（東より）

図版六

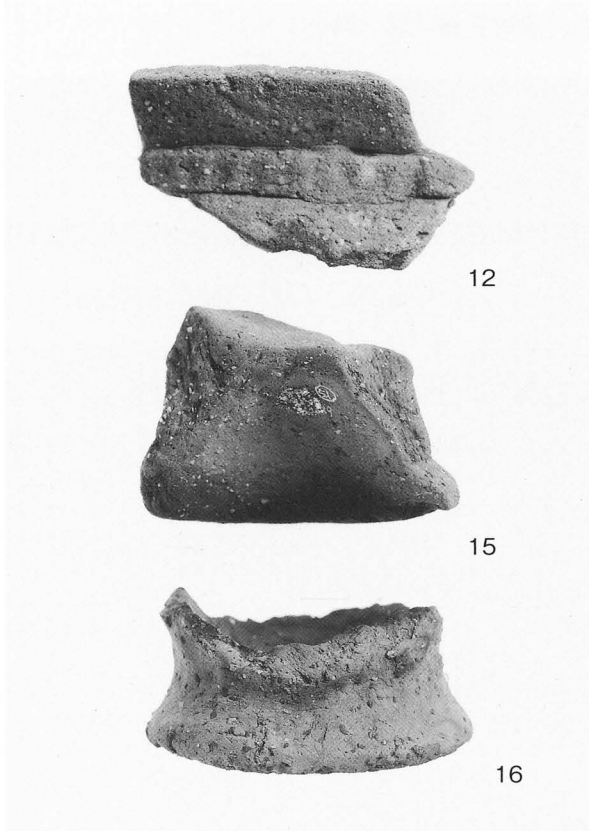
１．ＳＤ４出土遺物



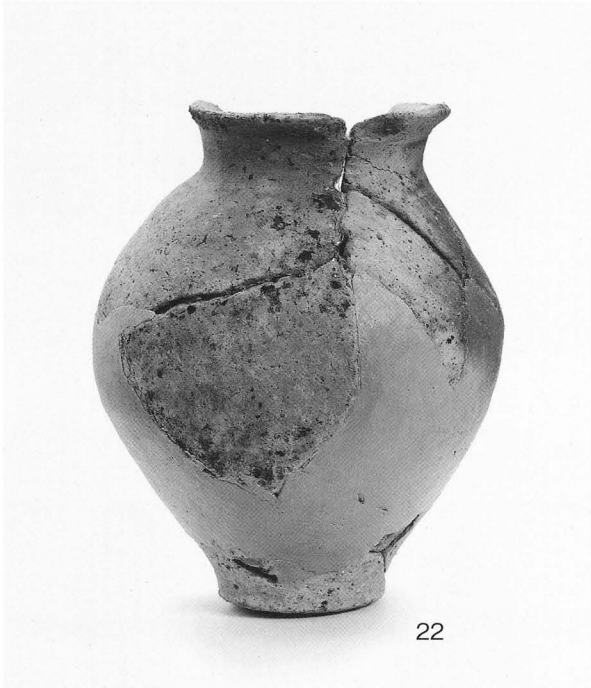
２．ＳＤ４出土遺物

３．ＳＫ６出土遺物

４．ＳＫ７出土遺物

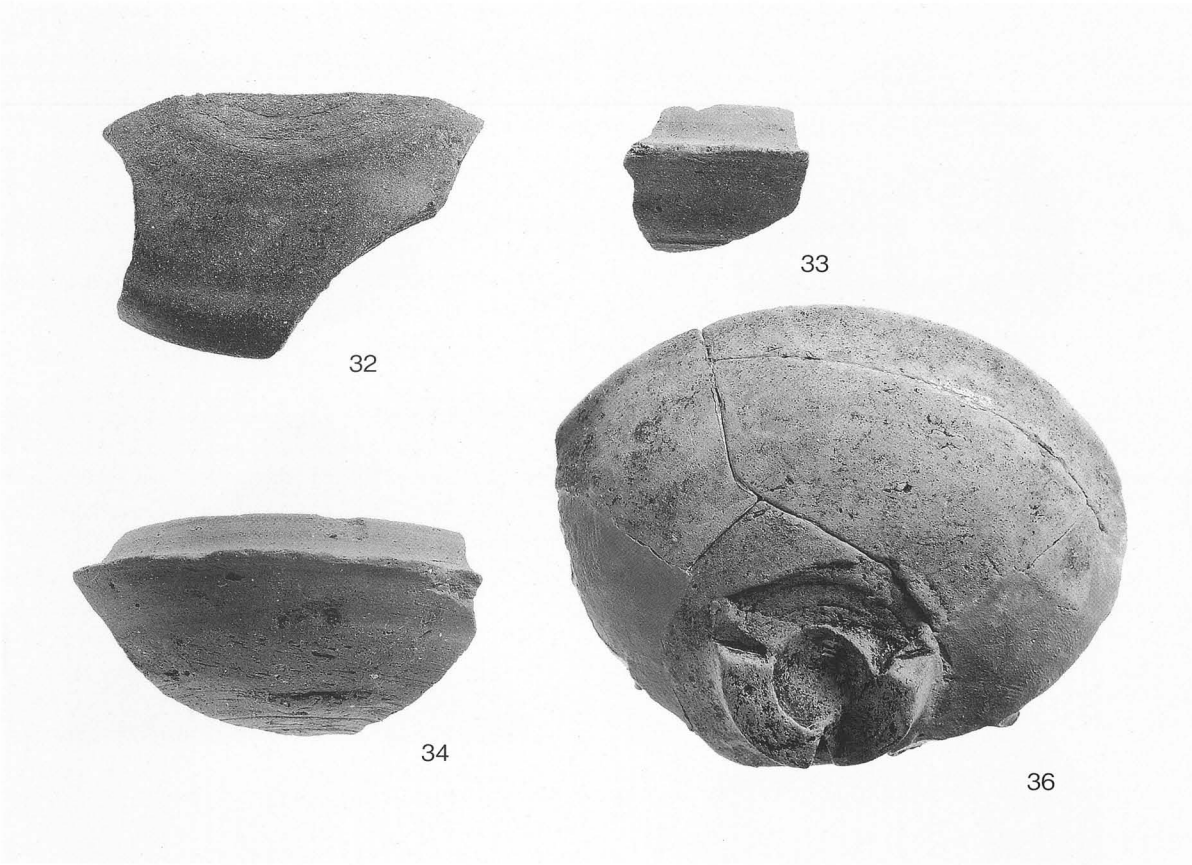


５．ＳＸ３出土遺物

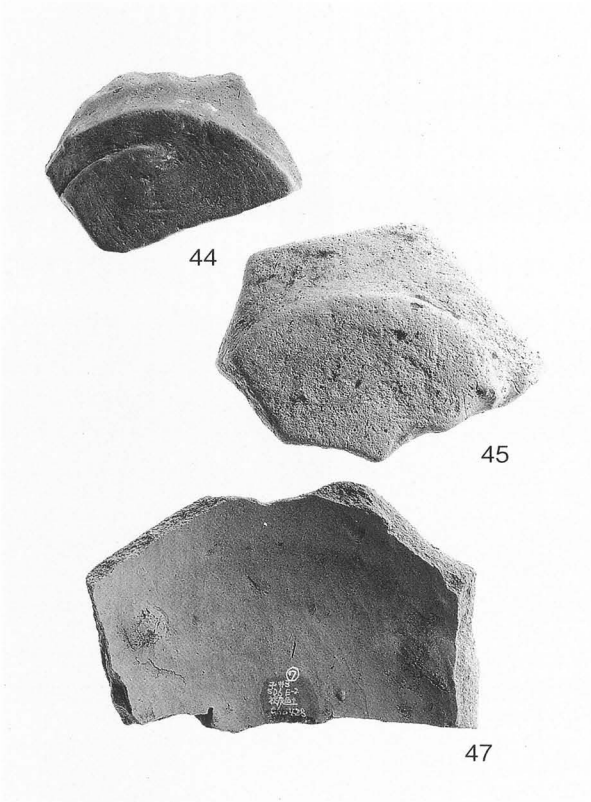


１．ＳＸ３出土遺物

図版八



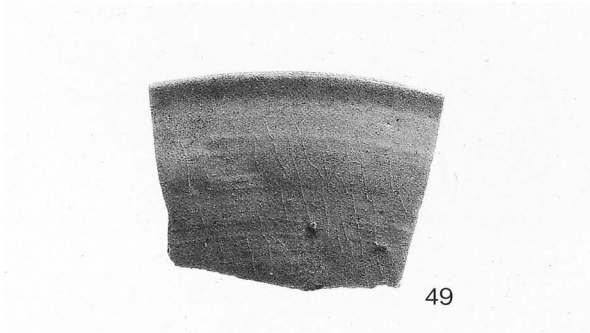
１．ＳＤ２出土遺物



２．ＳＤ６出土遺物

３．ＳＤ６出土遺物

４．ＳＤ９出土遺物

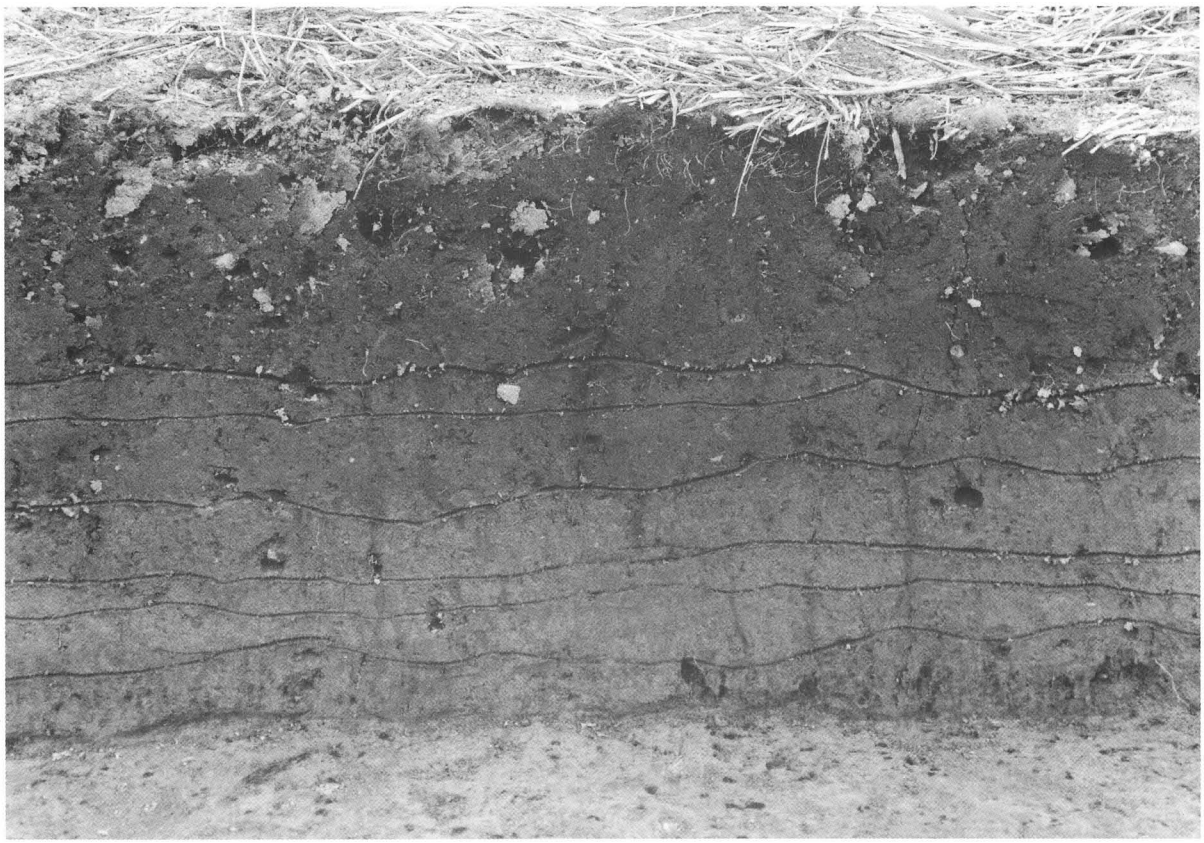


５．ＳＤ１出土遺物

１．調査前全景（北より）

２．重機による表土掘削（北より）

１．調査風景（北より）



２．東壁土層（西より）

１．遺構検出状況（南より）

２．ＳＤ２遺物・礫出土状況（南東より）